

太田遺跡・太田廃寺跡 太田遺跡・太田城跡 1

令和2年3月

 茨木市教育委員会
公益財団法人 大阪府文化財センター



調査地と太田茶白山古墳（南から：平成 29 年 8 月 10 日撮影）



01014 溝 [9号墳] 出土埴輪

序 文

私たちの住む茨木市では、北部は北摂山系が、南部には大阪平野の一部をなす三島平野が広がり、温暖な気候と豊かな自然に恵まれた過ごしやすい環境のもと、古来数多くの歴史が育まれてきました。

文化施設の充実をはじめ、安心・安全なまちづくりをめざして発展をとげた本市は、交通の利便性や京都・大阪間という立地の良さも手伝い大規模な開発も少なくありません。昨今の時勢のなか、開発に伴う埋蔵文化財の調査件数は全国的に減少しているのに対し、本市では緩やかながら増加の傾向をみせています。

本書は、平成 29 年度に太田東芝町、城の前町で実施した発掘調査の成果報告書です。旧摂津国で最大級の前方後円墳、太田茶臼山古墳と指呼の間に位置する今回の調査地では、弥生時代から古墳時代にいたる、この地に根ざした人びとの歴史が克明に残っていました。市街地化が進む周辺では数少ない大規模調査の実例として、広く活用されることを願ってやみません。

調査の実施にあたりましては、土地所有者、施工関係者、調査関係者、近隣住民の皆様にはご理解と多大なご協力を賜りました。また、文化庁、大阪府教育庁ならびに公益財団法人大阪府文化財センターの諸機関には、ご指導と格別のご協力をいただき、茨木市の文化財保護行政が推進できましたことを感謝いたしますとともに、今後ともより一層のご理解とお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

令和 2 年 3 月

茨 木 市 教 育 委 員 会
教 育 長 岡 田 祐 一

は し が き

大阪府北東部に位置し、かつては摂津国に属した茨木市は京の都と西国諸国を結ぶ西国街道を擁し、多くの人や文物が往来する交通の要衝です。近世には本陣が置かれ、また西国第二十二番札所である総持寺から第二十三番札所である勝尾寺に至る巡礼の道としても栄えた街道沿いには、古墳時代中期の巨大前方後円墳である太田茶白山古墳や古代寺院である太田廃寺跡、中世の城跡と伝えられる太田城跡など各時代において重要な遺跡が確認されており、当地における繁栄を物語ります。

本書において報告いたします太田遺跡の発掘調査は、その地名が示すとおり、東芝家電製造株式会社大阪工場の跡地を対象としております。広大な面積を有する同地において住宅、商業、文教、医療福祉を集約した新たな土地利用計画が策定されたことを受け、当センターが茨木市教育委員会と共同で発掘調査を実施することとなりました。

太田遺跡は茨木市教育委員会や大阪府教育庁により数次にわたる調査が実施されており、弥生時代の集落や古墳時代中期の古墳群などが発見されております。今回の調査においても新たな古墳の存在が明らかになるとともに、従来は知られていなかった弥生時代の水田跡を確認し、当地における開発の歴史に新たな所見を加えることができました。本書が多くの方の皆さまに活用され、当地に生きた先人たちの知恵や工夫、遺された貴重な文化財を現代に、そして未来へ伝える一助となれば幸いです。

最後となりましたが、今回の調査において地元関係各位をはじめ学校法人追手門学院、大阪府教育庁ならびに茨木市教育委員会より多大なるご指導とご協力を賜りました。深く感謝いたしますとともに、今後とも当センターの事業に変わらぬご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

令和2年3月

公益財団法人 大阪府文化財センター

理事長 田邊 征夫

例 言

1. 本書は（仮称）茨木市東芝町計画に伴い実施した大阪府茨木市太田東芝町・城の前町地内所在の太田遺跡・太田廃寺跡・太田城跡の発掘調査報告書である。調査名称は「太田遺跡・太田廃寺跡 2017－1」および「太田遺跡・太田城跡 2017－1」とした。

2. 発掘調査は株式会社島田組の委託を受けた公益財団法人大阪府文化財センターが、茨木市教育委員会と共同で実施した。遺物整理および本書の編集は公益財団法人大阪府文化財センターが行い、平成31年2月20日までにすべての資料を茨木市に引き渡した。本書編集後の印刷・製本は茨木市が行い、令和2年3月31日に本書の刊行をもって完了した。契約名称・契約期間は以下のとおりである。

【契約名称】（仮称）茨木市東芝町計画に伴う太田遺跡・太田廃寺跡・太田城跡発掘調査

【契約期間】平成29年6月16日～平成31年2月20日

3. 現地調査および整理事業は以下の体制で実施した。

【茨木市教育委員会】

〔平成29年度〕

社会教育振興課長 辻田新一、文化財係長 前田聡志、発掘調査員 坂田典彦

〔平成30年度〕

歴史文化財課長 乾 友範、課長代理兼調査管理係長 前田聡志、調査管理係発掘調査員 坂田典彦

【公益財団法人 大阪府文化財センター】

〔平成29年度〕

事務局次長（平成29年12月31日まで）江浦 洋

調整課長（平成30年1月1日から事務局次長兼務）岡本茂史

調査課長 岡戸哲紀、課長補佐 三好孝一、主査 佐伯博光

副主査 鹿野 塁（平成29年7月1日から9月30日まで）、副主査 永野 仁

技師 新海正博（平成29年10月1日から11月30日まで）

〔平成30年度〕

事務局次長兼調整課長 岡本茂史、調査課長 三好孝一、課長補佐 亀井 聡

主査 佐伯博光（平成30年4月1日から同月30日まで）、副主査 永野 仁

4. 遺構の写真撮影は佐伯・鹿野・永野・新海が、遺物の写真撮影は中部調査事務所写真室が行った。

5. 発掘調査および報告書の作成にあたっては、以下の諸機関よりご指導・ご協力を賜った。記して感謝の意を表したい。（敬称略）

大阪府教育庁文化財保護課、学校法人追手門学院、高槻市教育委員会、高槻市立今城塚古代歴史館

6. 遺物整理にあたっては、以下の委託分析を実施した。分析結果については第6章に掲載した。

平成30年度 花粉・珪藻・植物珪酸体分析 株式会社古環境研究所

7. 本書の執筆は、第1章第1・2項および第2章を坂田が、第6章第2節を株式会社古環境研究所が、それ以外を永野が担当した。編集は永野が行った。

8. 本調査に関わる遺物および写真・実測図等の記録類は、すべて茨木市教育委員会が保管している。広く利用されることを希望する。

凡 例

1. 標高については、すべて東京湾平均海面（T.P.）＋値を使用し、m単位で表している。なお、本書ではすべての図において便宜的に T.P.＋の記載を省略している。
2. 本書に掲載したすべての図の座標は、世界測地系（測地成果 2000）によって測量し、国土座標法による平面直角座標第Ⅵ系で示している。表記はすべてm単位である。
3. 本書で用いた北は、いずれも平面直角座標系第Ⅵ系の座標北を示す。なお、太田遺跡・太田廃寺跡・太田城跡では座標北は真北より西へ約 $0^{\circ} 14'$ 、磁北は西へ約 $7^{\circ} 18'$ 偏移する。
4. 現地調査および遺物整理は、平成 22 年度に改訂された財団法人大阪府文化財センター 2010『遺跡調査基本マニュアル』に準拠することを基本とし、適宜、茨木市教育委員会と調整を図りながら進めた。
5. 土層断面図で使用した土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2007 年版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
6. 遺構番号は、各調査区において遺構の種類に関わらず調査において検出した順に 1 から始まる通し番号を付し、番号の後に遺構種類を表記した。一方、竪穴建物のように、すでに番号が付与された複数の遺構から構成される遺構については「竪穴建物 1」のように遺構種類の後に番号を付すものとし、調査時における各遺構の番号については遺構図中に個別に表示した。また、古墳については茨木市教育委員会が平成 20 年度に実施した発掘調査において確認された古墳と同一と判断されるものについては既に付与された古墳名を、新規に確認されたものについては上記発掘調査における最終番号となる古墳に連続する番号を付した古墳名を併記した。なお、本書においては図面が煩雑となることから、遺構分布図では遺構番号のみを記入し、種類は省略している。
7. 遺構図のうち個別遺構の平・断面図の縮尺は 40 分の 1 としたが、それ以外については各図に即した縮尺を用い、各図のスケールに明記した。また、遺構図における断面位置は、図面上に「↑ ↑」形によってその位置を示した。
8. 遺物実測図の縮尺は、土器・土製品・埴輪は 4 分の 1、石製品は 3 分の 1、鉄製品は 2 分の 1、木製品は 6 分の 1 を基本とし、異なる縮尺を用いる場合には各図のスケールに明記した。
9. 遺構の規模は m 単位で記し、小数点第 2 位を最小値とした。また、遺物の記載にあたっては cm 単位とし、小数点第 1 位までの表記とした。
10. 遺物の実測図では、縄文土器・須恵器は断面を黒塗りとし、それら以外はすべて白抜きとした。また、施釉陶器については釉薬がかかる範囲を一点鎖線で表している。
11. 土器および円筒・朝顔形埴輪の実測図では、残存口径や底径、頸部径が 4 分の 1 以下の破片の場合、口縁ないし底部、中軸線のいずれかを二重線で切って表現している。
12. 遺物番号は、挿図・写真図版とも一致する通し番号を付した。なお、写真図版にのみ掲載した遺物については、挿図に掲載された最後の遺物番号に連続する番号を付与している。また、本書では参考資料として茨木市教育委員会が平成 20 年度に実施した発掘調査において出土した遺物のうち、茨木市教育委員会 2015『太田遺跡発掘調査概報』茨木市文化財資料集第 61 号に掲載されていない遺物の一部を、別途掲載順に「501」から始まる通し番号を付与し写真図版に掲載した。

13. 写真図版中の遺物番号は、挿図の遺物番号と対応する。
14. 本書における遺物についての記述は、掲載遺物に限らず、出土したすべての遺物を対象としたものである。
15. 写真図版の縮尺は統一していない。
16. 出土遺物の記述においては以下の文献を参考にした。

森田克行 1990 「摂津地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ 木耳社

森岡秀人・西村 歩編 2006 『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター

宮崎泰史・藤永正明編 2006 『年代のものさし—陶器の須恵器—』大阪府立近つ飛鳥博物館図録 40
大阪府立近つ飛鳥博物館

川西宏幸 1988 「円筒埴輪総論」『古墳時代政治史序説』塙書房

中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

宮崎亮一編 2000 『大宰府条坊跡 XV —陶磁器分類編—』太宰府市の文化財 第 49 集
太宰府市教育委員会

17. 本書における円筒埴輪および朝顔形埴輪、家形埴輪の各部位の呼称は、下記の文献を参考とした。

円筒埴輪

小浜 成 2003 「円筒埴輪の観察視点と編年方法—畿内円筒埴輪編年の提示に向けて—」

『埴輪論叢』第 4 号 埴輪検討会

朝顔形埴輪

木村 理 2018 「古墳時代中期における朝顔形埴輪の基礎的研究」『埴輪論叢』第 8 号 埴輪検討会

家形埴輪

青柳泰介 2007 「家形埴輪の製作技法について再論」『埴輪論考 I —円筒埴輪を読み解く—』

大阪大谷大学博物館報告書第 53 冊 大阪大谷大学博物館

前田真由子 2009 「製作技法からみた家形埴輪の変遷とその画期—近畿地方出土家形埴輪を中心に—」

『古文化談叢』第 61 集 九州古文化研究会

18. 上記以外の参考文献については、各章末に一括して掲載した。

目次

巻頭原色図版

序文・はしがき・例言・凡例

第1章	調査に至る経緯と経過	1
第1節	調査に至る経緯	(坂田) 1
第2節	既往の調査成果	(坂田) 2
第3節	調査の経過(日誌抄)	(永野) 5
第4節	調査成果の公開	(永野) 7
第2章	位置と環境	(坂田) 9
第1節	遺跡の位置と地理的環境	9
第2節	歴史的環境	9
第3章	調査の方法	(永野) 13
第1節	発掘調査の方法	13
第2節	整理作業の方法	14
第4章	太田遺跡・太田廃寺跡 2017 - 1 調査	(永野) 16
第1節	調査の概要	16
第2節	1区の調査成果	18
第3節	2区の調査成果	80
第4節	3区の調査成果	87
第5節	4区の調査成果	110
第6節	5区の調査成果	137
第7節	6区の調査成果	140
第8節	7区の調査成果	161
第9節	8区の調査成果	162
第10節	9区の調査成果	165
第5章	太田遺跡・太田城跡 2017 - 1 調査	(永野) 168
第1節	調査の概要	168
第2節	調査の成果	169
第6章	自然科学分析	195
第1節	分析の目的と概要	(永野) 195
第2節	珪藻・花粉・植物珪酸体分析	(株式会社古環境研究所) 195
第7章	総括	(永野) 214
第1節	遺構の変遷	214
第2節	太田古墳群の検討	221
	遺物観察表	235

抄録

奥付

巻頭原色図版目次

巻頭原色図版1 調査地と太田茶白山古墳(南から：平成29年8月10日撮影)
巻頭原色図版2 01014溝[9号墳]出土埴輪

挿 図 目 次

図1 遺跡の位置……………	1	図30 01014溝[9号墳] 出土遺物(10)……………	49
図2 既往の調査区と今回の調査区配置……………	3	図31 01001溝 平面……………	51
図3 OT08-2調査全体図……………	4	図32 01001溝 断面……………	52
図4 茨木市域の地質……………	10	図33 01001溝 出土遺物(1)……………	54
図5 太田遺跡周辺遺跡分布……………	12	図34 01001溝 出土遺物(2)……………	55
図6 地区割……………	15	図35 01001溝 出土遺物(3)……………	56
図7 太田遺跡・太田廃寺跡2017-1調査 調査区・調査原因・調査面積・調査期間一覧……………	16	図36 01001溝 出土遺物(4)……………	57
図8 1区地区割と既往の調査範囲……………	18	図37 01005・01009溝、周辺遺構 平面……………	59
図9 1区 平面……………	19	図38 01005・01009溝、周辺遺構 断面……………	60
図10 1区 土層断面……………	21	図39 01005溝 出土遺物……………	60
図11 1区北部 平面……………	22	図40 01031溝他 平面……………	62
図12 01013溝[13号墳] 平・断面……………	24	図41 01026・01038・01044・01046・ 01067溝、01045ピット 断面……………	63
図13 01013溝[13号墳] 出土遺物(1)……………	25	図42 01031溝 断面・出土遺物……………	63
図14 01013溝[13号墳] 出土遺物(2)……………	26	図43 1区南部 平面……………	65
図15 01014溝[9号墳] 平面……………	27	図44 01004・01019土坑 平・断面……………	66
図16 01014溝[9号墳] 平面……………	28	図45 01004土坑 出土遺物……………	67
図17 01014溝[9号墳] 埋土1～3層包含遺物 出土状況……………	30	図46 01006・01020土坑 平・断面……………	69
図18 01014溝[9号墳] 埋土5～7層包含遺物 出土状況……………	31	図47 01016～01018・01032・01037・01040・ 01041・01066土坑 断面……………	70
図19 01014溝[9号墳] 円筒埴輪(33) 出土状況……………	32	図48 01022～01025・01028～01030・01034 ～01036・01050・01055～01058ピット 断面……………	74
図20 01014溝[9号墳] 出土遺物分布……………	33	図49 01060・01062・01064・01070・01073・ 01074ピット、01015・01071落ち込み 断面……………	75
図21 01014溝[9号墳] 出土遺物(1)……………	34	図50 1区 遺構外 出土遺物(1)……………	78
図22 01014溝[9号墳] 出土遺物(2)……………	35	図51 1区 遺構外 出土遺物(2)……………	79
図23 01014溝[9号墳] 出土遺物(3)……………	36	図52 2・3区地区割と既往の調査範囲……………	80
図24 01014溝[9号墳] 出土遺物(4)……………	40	図53 2区 平面……………	81
図25 01014溝[9号墳] 出土遺物(5)……………	41	図54 2区 土層断面……………	82
図26 01014溝[9号墳] 出土遺物(6)……………	42	図55 2区北西部 平面……………	83
図27 01014溝[9号墳] 出土遺物(7)……………	43	図56 02005～02007溝、02008・02009ピット 断面……………	84
図28 01014溝[9号墳] 出土遺物(8)……………	47		
図29 01014溝[9号墳] 出土遺物(9)……………	48		

図 57	02004 柱穴 平・断面、出土遺物	85	図 92	04043 土坑、04044 溝 平・断面	126
図 58	3区 平面	86	図 93	04015・04022 土坑 遺物出土状況・断面	127
図 59	3区 断面	87	図 94	4区 ピット 断面	128
図 60	竪穴建物1、03003・03005・03006 溝他 平面	89	図 95	04006・04013・04022・04025 土坑、04004 ピット 出土遺物	130
図 61	竪穴建物1 平・断面	90	図 96	04037・04038 凹み、04039 落ち込み 平・断面	133
図 62	03014 炉、03013 柱穴、03011・03012 ピット 断面	91	図 97	04037・04038 凹み、04023・04039 落ち込み 断面	134
図 63	竪穴建物1、03014 炉 出土遺物	91	図 98	4区 遺構外出土遺物	134
図 64	03003 溝 [14号墳] 平・断面	93	図 99	5区 平面	136
図 65	03003 溝 [14号墳] 出土遺物	94	図 100	5区 土層断面	137
図 66	03005 溝 [3号墳] 平・断面	94	図 101	05004 溝、05006・05010～05014 ピット、05003 凹み 断面	139
図 67	03005 溝 [3号墳] 出土遺物 (1)	96	図 102	6区 地区割	141
図 68	03005 溝 [3号墳] 出土遺物 (2)	97	図 103	6区 平面	142
図 69	03005 溝 [3号墳] 出土遺物 (3)	98	図 104	6区 断面	143
図 70	03006 溝 [1号墳] 平・断面	99	図 105	6区 (X=-128,550～600) 平面	145
図 71	03006 溝 [1号墳] 出土遺物	100	図 106	6区 (X=-128,600～660) 平面	146
図 72	03001・03002・03004 溝 平・断面	102	図 107	6区 (X=-128,650～700) 平面	147
図 73	03001・03002 溝 出土遺物	103	図 108	6区 (X=-128,700～734) 平面	148
図 74	03008 土坑 03015 柱穴、03009・03010 ピット 断面	104	図 109	6区北半部 溝 断面	149
図 75	03007 凹み 断面・出土遺物	105	図 110	6区南半部 溝 断面	150
図 76	3区 遺構外出土遺物 (1)	106	図 111	6区北半部検出土坑 断面	151
図 77	3区 遺構外出土遺物 (2)	107	図 112	6区南半部検出土坑 平・断面	154
図 78	4・5・7・9区 地区割	109	図 113	南端部 (X=-128,723～734) 平面	156
図 79	4区 平面	111	図 114	6区南端部 (X=-128,723～734) 土坑 断面	157
図 80	4区 断面	112	図 115	6区 ピット、落ち込み 断面	159
図 81	調査区南西部 遺構配置	114	図 116	6区 第4層 出土遺物	159
図 82	04001 溝 [1号墳] 平・断面、遺物 出土状況	115	図 117	7区 平面	161
図 83	04001 溝 [1号墳] 出土遺物	116	図 118	7区 東壁 土層断面	161
図 84	04002 溝 [14号墳] 遺物出土状況、断面	118	図 119	8区 地区割	162
図 85	04002 溝 [14号墳] 出土遺物	119	図 120	8区 平面	162
図 86	調査区南東部 遺構配置	120	図 121	8区 西壁 断面	163
図 87	04007 溝 遺物出土状況、断面	121	図 122	08001・08002 溝、08003 ピット 断面	163
図 88	04007 溝 出土遺物	121	図 123	9区 平面	165
図 89	04016・04026・04027 溝、04015・04021・04022・04024・04025 土坑、04023 落ち込み 平面	122	図 124	9区 西壁 断面	166
図 90	04016・04026・04027・04033 溝 断面	123	図 125	09001・09002 凹み、09003 ピット 断面	166
図 91	04003・04006・04008・04013・04014・04021・04024・04025・04036・04041 土坑 断面	125	図 126	太田遺跡・太田城跡 2017-1 地区割	168
			図 127	北壁 土層注記	170

図 128	北壁 土層断面	171	図 145	分析試料採取地点	197
図 129	第4面 平面	174	図 146	太田遺跡・太田城跡の珪藻化石層位 分布(主な分類群を表示)	201
図 130	10005 擬似畦畔 平・断面	175	図 147	太田遺跡・太田城跡の花粉化石群集 層位分布	205
図 131	10002 凹み、10003 土坑、10001 落ち込み 平・断面	176	図 148	太田遺跡・太田城跡の植物珪酸体 分析結果	207
図 132	第3層、ブロック土 出土遺物	177	図 149	弥生時代後期から古墳時代前期の 遺構分布	215
図 133	第6面 平面、10006 たわみ断面	180	図 150	古墳時代中期の遺構分布	216
図 134	10006 たわみ 断面	181	図 151	古墳時代後期末から古代の遺構分布	217
図 135	10006 たわみ・第5層 出土遺物	182	図 152	古墳分布	220
図 136	10007 溝・10008 高まり 平面、 10007 溝 遺物出土状況、断面	183	図 153	1～3・6・14号墳 平面	223
図 137	10007 溝 出土遺物	183	図 154	5・9・13号墳 平面	225
図 138	第7面 平面	184	図 155	01014 溝[9号墳] 出土埴輪(1)	228
図 139	水田1 平面	186	図 156	01014 溝[9号墳] 出土埴輪(2)	229
図 140	10007・10009 溝、10008 高まり、10011 水口、10012 土坑、10017・10018 ピット、 10013・10014 凹み 断面	187	図 157	古墳分類	232
図 141	10009 溝 遺物出土状況	188			
図 142	10009 溝 出土遺物	188			
図 143	水田2 平面	189			
図 144	下層確認トレンチ 平・断面、出土遺物	193			

表 目 次

表 1	分析試料採の特徴	196	表 3	太田遺跡・太田城跡における花粉分析結果	204
表 2	太田遺跡・太田城跡における珪藻分析結果	200	表 4	太田遺跡・太田城跡における 植物珪酸体分析結果	207

写 真 目 次

写真 1	太田遺跡・太田廃寺跡 現地公開風景	7	写真 5	太田遺跡・太田城跡の珪藻化石	202
写真 2	太田遺跡・太田城跡 現地公開風景	7	写真 6	太田遺跡・太田城跡の花粉化石	206
写真 3	太田小学校 見学風景	8	写真 7	太田遺跡・太田城跡の植物珪酸体	208
写真 4	今宮高等学校考古学入門 作業風景	8			

写真図版目次

- 図版1 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 1区(1)
1. 調査区 全景(南から)
 2. 調査区 全景(西から)
- 図版2 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 1区(2)
1. 調査区北壁 断面(南西から)
 2. 調査区南東壁 断面(西から)
 3. 調査区南壁 断面(北東から)
- 図版3 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 1区(3)
1. 01013 溝[13号墳](南から)
 2. 01013 溝[13号墳] 遺物出土状況(西から)
 3. 01013 溝[13号墳] 遺物出土状況(西から)
 4. 01001・01013 溝[13号墳] 完掘状況(西から)
 5. 01001・01013 溝[13号墳] 断面(南西から)
- 図版4 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 1区(4)
1. 01014 溝[9号墳](西から)
 2. 01014 溝[9号墳] 断面a-a'(北から)
 3. 01014 溝[9号墳] 断面b-b'(東から)
 4. 01014 溝[9号墳] 円筒埴輪出土状況(東から)
 5. 01014 溝[9号墳] 石製品出土状況(南から)
- 図版5 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 1区(5)
1. 01014 溝[9号墳] 遺物出土状況(南東から)
 2. 01014 溝[9号墳] 遺物出土状況(南東から)
 3. 01014 溝[9号墳] 遺物出土状況(南から)
- 図版6 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 1区(6)
1. 01001 溝(北から)
 2. 01001 溝(西から)
 3. 01005・01009 溝(南東から)
- 図版7 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 1区(7)
1. 01004 土坑 遺物出土状況(西から)
 2. 01004 土坑 断面(北西から)
 3. 01006 土坑 断面(西から)
 4. 01019 土坑 断面(南西から)
 5. 01020 土坑 断面(北西から)
 6. 01031 溝 断面(西から)
 7. 01031 溝(西から)
- 図版8 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 2区
1. 調査区 全景(西から)
 2. 調査区西壁 断面(東から)
 3. 調査区北西部 近接(北から)
 4. 02004 柱穴 柱根検出状況(東から)
- 図版9 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 3区(1)
1. 調査区 全景(南から)
 2. 調査区南壁 断面(東から)
 3. 調査区 全景(西から)
- 図版10 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 3区(2)
1. 竪穴建物1、03005 溝[3号墳]・03006 溝[1号墳](西から)
 2. 竪穴建物1 断面(北東から)
 3. 竪穴建物1 東側高まり 断面(南から)
 4. 03014 炉[竪穴建物1] 断面(南から)
 5. 03013 柱穴[竪穴建物1] 断面(東から)
- 図版11 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 3区(3)
1. 03003 溝[14号墳] 遺物出土状況(南東から)
 2. 03005 溝[3号墳] 遺物出土状況(西から)
 3. 03003 溝[14号墳] 断面(東から)
 4. 03005 溝[3号墳] 断面(西から)
- 図版12 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 3区(4)
1. 03006 溝[1号墳] 遺物出土状況(北東から)
 2. 03006 溝[1号墳] 女子埴輪出土状況(北東から)
 3. 03006 溝[1号墳] 断面(南東から)
 4. 03001 溝 断面(北から)
 5. 03002 溝 断面(北から)
- 図版13 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 4区(1)
1. 調査地 遠景(南東から)
 2. 調査区 全景(写真上が西)
- 図版14 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 4区(2)
1. 調査区西壁(a-a') 断面(東から)
 2. 調査区西壁(b-b') 断面(南東から)
 3. 調査区東壁(c-c') 断面(南東から)
- 図版15 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 4区(3)
1. 調査区南部 全景(西から)
 2. 調査区南部 全景(東から)
 3. 調査区東部 全景(南から)
- 図版16 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 4区(4)
1. 04001 溝[1号墳] 遺物出土状況(北西から)
 2. 04001 溝[1号墳] 遺物出土状況(東から)
 3. 04001 溝[1号墳] 完掘状況(北西から)
- 図版17 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 4区(5)
1. 04002 溝[14号墳] 遺物出土状況(北東から)
 2. 04002 溝[14号墳] 断面(北東から)
 3. 04002 溝[14号墳] 完掘状況(北東から)
- 図版18 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 4区(6)
1. 04007 溝 近接(南から)
 2. 04007 溝 遺物出土状況(南から)
 3. 04007 溝 断面(南から)
 4. 04007 溝 遺物出土状況(南西から)

- 図版 19 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 4区(7)
1. 04009 土坑(04007 溝内) 断面(北から)
 2. 04022 土坑 遺物出土状況(北東から)
 3. 04024・25 土坑 断面(北東から)
 4. 04023 落込み 断面(南東から)
 5. 04027 溝 底面検出状況(東から)
 6. 04023 落込み周辺 近接(東から)
- 図版 20 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 5区
1. 調査区 全景(北から)
 2. 調査区南壁 断面(北から)
 3. 調査区西部 近接(北から)
- 図版 21 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 6区(1)
1. 調査区北半部 全景(南から)
 2. 調査区北半部 全景(北から)
- 図版 22 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 6区(2)
1. 調査区南半部 全景(北から)
 2. 調査区南半部 全景(南から)
- 図版 23 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 6区(3)
1. 調査区東壁 断面
- 図版 24 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 6区(4)
1. X=-128,633~654 近接(東から)
 2. X=-128,672~694 近接(北東から)
 3. 06028 溝(南西から)
- 図版 25 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 7区
1. 調査区 全景(南から)
 2. 調査区 全景(北から)
 3. 調査区東壁 断面(西から)
- 図版 26 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 8区
1. 調査区 全景(写真上が南)
 2. 調査区西壁 断面(東から)
 3. 08002 溝 断面(東から)
 4. 08001 溝 断面(南西から)
 5. 08003 ピット 断面(北から)
- 図版 27 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 9区
1. 調査区 全景(西から)
 2. 調査区西壁 断面(北から)
 3. 09001・09002 凹み 09003 ピット 近接(北から)
- 図版 28 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 遺物(1)
- 01013 溝
- 図版 29 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 遺物(2)
- 01013 溝
- 図版 30 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 遺物(3)
- 01014 溝
- 図版 31 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 遺物(4)
- 01014 溝
- 図版 32 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 遺物(5)
- 01014 溝
- 図版 33 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 遺物(6)
- 01014 溝
- 図版 34 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 遺物(7)
- 01014 溝
- 図版 35 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 遺物(8)
- 01014 溝
- 図版 36 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 遺物(9)
- 01014 溝
- 図版 37 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 遺物(10)
- 01014 溝
- 図版 38 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 遺物(11)
- 01014 溝
- 図版 39 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 遺物(12)
- 01014 溝
- 図版 40 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 遺物(13)
- 01014 溝
- 図版 41 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 遺物(14)
- 01014 溝
- 図版 42 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 遺物(15)
- 01014 溝
- 図版 43 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 遺物(16)
- 01001 溝
- 図版 44 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 遺物(17)
- 01001 溝
- 図版 45 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 遺物(18)
- 01004 土坑
- 01031 溝
- 図版 46 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 遺物(19)
- 1区第4層
- 01004 土坑
- 02004 柱穴
- 図版 47 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 遺物(20)
- 03003 溝
- 03014 炉
- 竪穴建物1
- 図版 48 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 遺物(21)
- 03005 溝
- 図版 49 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 遺物(22)
- 03005 溝
- 図版 50 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 遺物(23)
- 03006 溝
- 図版 51 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 遺物(24)
- 03002 溝
- 03007 凹み

- 図版 52 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 遺物 (25)
第4層
- 図版 53 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 遺物 (26)
04001 溝
- 図版 54 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 遺物 (27)
04001 溝
04002 溝
- 図版 55 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 遺物 (28)
04002 溝
04006 土坑
04007 溝
04013 土坑
- 図版 56 太田遺跡・太田廃寺跡 2017-1 遺物 (29)
4区第4層
6区第4層
04022 土坑
04025 土坑
06064 土坑・6区第4層
- 図版 57 太田遺跡・太田城跡 2017-1 遺構 (1)
1. 調査地 遠景 (南西から)
2. 調査地 遠景 (南から)
- 図版 58 太田遺跡・太田城跡 2017-1 遺構 (2)
1. 調査区北壁 断面 (南から)
- 図版 59 太田遺跡・太田城跡 2017-1 遺構 (3)
1. 第4面 ブロック土検出状況 (南東から)
2. 第4面 ブロック土完掘状況 (東から)
3. 調査区東半部 第4面 (東から)
- 図版 60 太田遺跡・太田城跡 2017-1 遺構 (4)
1. 調査区西半部 第4面 (写真上が南)
2. 第4b層 土器出土状況 (東から)
3. 第5層上面 土器出土状況 (東から)
4. 調査区東半部 第6面 (写真上が北)
- 図版 61 太田遺跡・太田城跡 2017-1 遺構 (5)
1. 調査区東端部 第6面 (北から)
2. 調査区東端部 第6面 10007 溝・10008 高まり
近接 (北から)
3. 10007 溝・10008 高まり 断面 (南から)
4. 10007 溝 土器出土状況 (南から)
- 図版 62 太田遺跡・太田城跡 2017-1 遺構 (6)
1. 調査区東半部 第7面 全景 (東から)
2. 調査区東半部 第7面 全景 (南西から)
- 図版 63 太田遺跡・太田城跡 2017-1 遺構 (7)
1. 擬似畦畔 (南東から)
2. 10009 溝 10010・10016 擬似畦畔 (南から)
- 図版 64 太田遺跡・太田城跡 2017-1 遺構 (8)
1. 10011 水口 (南東から)
2. 10009 溝 断面 (南東から)
3. 10009 溝 土器出土状況 (南東から)
4. 10009 溝 土器出土状況 (北から)
- 図版 65 太田遺跡・太田城跡 2017-1 遺構 (9)
1. 下層確認トレンチ (東西) 全景 (東から)
2. 下層確認トレンチ (南北) 全景 (南から)
3. 下層確認トレンチ (東西) 北壁 断面 (南東から)
4. 下層確認トレンチ (南北) 西壁 断面 (南東から)
5. 下層確認トレンチ (東西) 南壁 断面 (北東から)
- 図版 66 太田遺跡・太田城跡 2017-1 遺物 (1)
10007 溝
10009 溝
- 図版 67 太田遺跡・太田城跡 2017-1 遺物 (2)
ブロック土
第3・4層
第4b層
- 図版 68 太田遺跡・太田城跡 2017-1 遺物 (3)
ブロック土
下層確認8層
第4b層
第5層
- 図版 69 OT08-2 遺物 (1)
CSD-2
ESD-13
- 図版 70 OT08-2 遺物 (2)
CSD-2
DSD-12
ESD-13
FSD-2

付 図 目 次

付図1 太田遺跡・太田廃寺跡 全体平面

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

大阪府茨木市太田東芝町1番地6号他において、平成29年4月に埋蔵文化財発掘調査の届出が事業主である株式会社東芝より提出された（茨教社第15-12号、平成29年4月12日付け）。本市教育委員会は受理した届出を基に同敷地内の既往調査データを参照し、本発掘調査の計画および工程表の作成に着手した。

上記に続き一月後の5月には、市道東太田一丁目花園二丁目線を挟んで西側の工場跡地である城の前町600番11および12において、発掘調査の届出が同社より提出された（茨教社第15-32号、平成29年5月24日付け）。事前協議および調整会議を重ねる中、本件の調査規模はもとより本市における当時の調査体制では発掘調査の実施が困難と判断し、大阪府教育委員会教育長に調査の協力を依頼した（茨教社第466・746号、平成29年5月1日付け・5月26日付け）。結果、公益財団法人大阪府文化財センターが協力する旨、回答を得た（教文第1299・1473号、平成29年5月10日付け・6月1日付け）。そこで、当該調査の実施に関して、必要な事項を定め、適正かつ円滑な発掘調査を図ることを目的とした協定書の作成に着手した。協定書は、茨木市教育委員会、株式会社東芝、株式会社竹中土木大阪本店、株式会社島田組、公益財団法人大阪府文化財センターの五者で締結した（平成29年6月12日付け）。途中、届出者である株式会社東芝からNREG東芝不動産株式会社への不動産売買契約が成立した為、売買契約書（写し）を本市に提出することで、本案件に関する埋蔵文化財の手続きも継承することとなった。以上の経緯を経て、平成29年6月19日から平成30年3月23日の期間で調査を実施した。

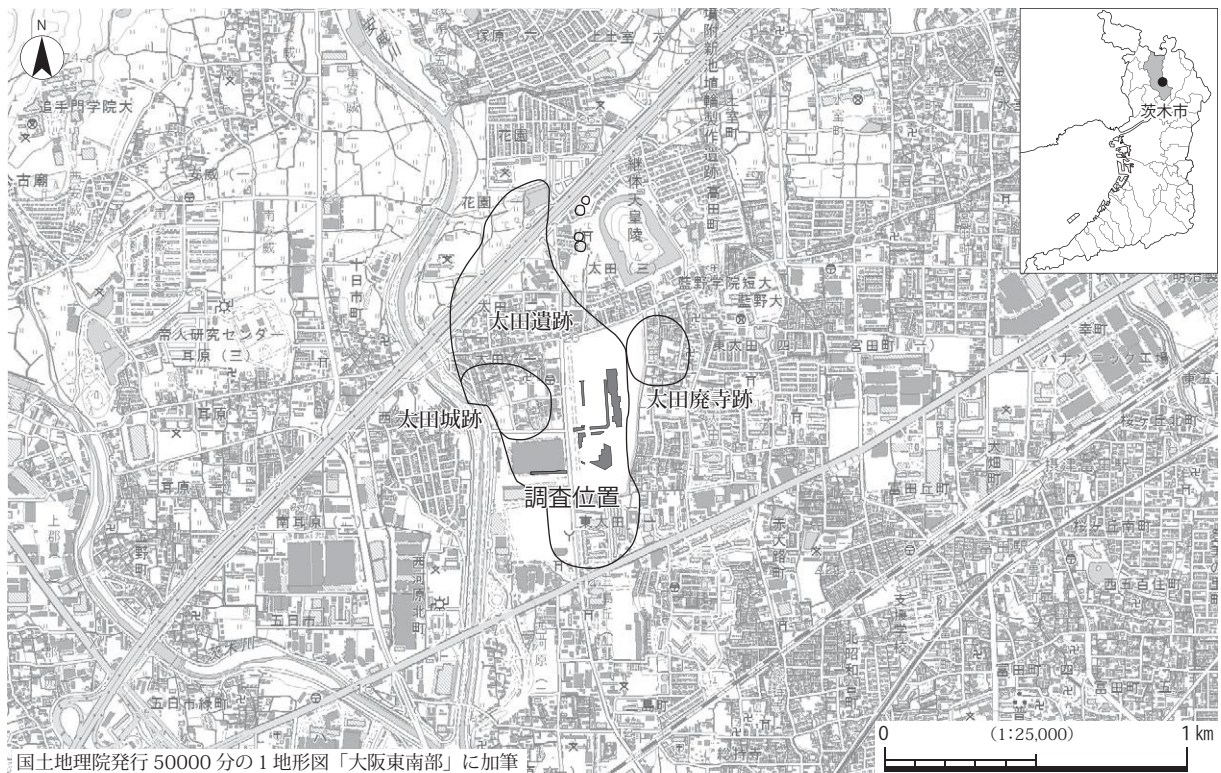


図1 遺跡の位置

第2節 既往の調査成果

今回の調査地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である太田遺跡、太田廃寺跡、太田城跡に位置し、指呼の間にある太田茶臼山古墳(継体天皇三島藍野陵)との間に太田北遺跡、そして西国街道が東西に走行する。本節では、今回の調査地である東芝家電製造株式会社大阪工場(以下、東芝大阪工場と略す)時代の確認調査(試掘・立会調査を含む)および本発掘調査と、周辺の既往調査に分けて記述する。

東芝大阪工場用地内ではこれまでにいくつかの調査(試掘・立会・確認・本発掘)が実施されており、年代順に列挙することで責を果たすものとしてほしい。なお、ここでは年度表記ではなく調査実施年で記述する。まず、昭和62年7月、西側用地南西隅(城の前町600番11および12)にて、倉庫(第3茨木倉庫)の建設に伴い試掘調査を行った。その結果、2mの盛土の下に、0.7m以上の黄色礫層が観察されており、埋蔵文化財は認められなかった。この結果は今次調査の共同住宅の確認調査と同様、すぐ西側を流下する安威川の影響、そして水田開発時、その後の工場用地造成の土地改変を多分に受けているものと判断してよい。次に昭和63年7月には、先の62年度調査地点から100mほど北で事務所の建設に際して基礎工事時に立会調査を行っており、確認深度は不詳であるが埋蔵文化財は確認されなかった。同年12月には、東側用地北東部で平屋建て倉庫の建設に伴って基礎工事時に立会調査を実施し、埋蔵文化財は認められていない。この結果は、後述する平成21年度の確認調査結果と合致する。

平成に入って、元年3月には東側用地北西部に3箇所、中央東端の1箇所で鉄骨造建物の申請があり、基礎工事時に立会調査を行い埋蔵文化財は認められていない。続いて、平成3年3月には東側用地の3箇所で資材倉庫建設に伴い立会調査を行った。結果、盛土(層厚50cm)の下に黄色粘土(層厚50cm以上)を確認したが、基礎が包含層まで至らないことを確認している。平成15年10月には西側用地北西部にて、既設倉庫の増設に伴い現地表面から1.5mまで確認し、基礎の到達深度まで攪乱であったことが分かっている。平成20年6月には、東側用地の第1工場の解体に際して1箇所、建築物のない構内通路や植栽部分など敷地内周縁部分で8箇所の確認調査を行っている。結果、南半部において埋蔵文化財が確認されている。また、同年10月には、土地改良地区に限って発掘調査を実施し、弥生時代後期の集落跡をはじめ、古墳時代中期から後期の古墳群、奈良時代の建物跡、古代の大溝や石敷遺構、平安時代から室町時代の耕作関連遺構などが確認されている(図3)。この調査では、円墳と方墳が検出されており、古墳群の形成過程を推測するうえで重要な成果であった¹⁾。平成21年8月には東側用地の建物解体に一定の目途がついたことから、全域を対象として70箇所以上の試掘坑と、総延長1.8kmにおよぶトレンチを設定し、埋蔵文化財の遺存範囲の確認を行った。平成25年10月には、東側用地外周道路の建設に伴い本発掘調査と立会調査を実施した。結果、平面的な調査を実施した南側調査区では、弥生時代後期と古墳時代中期に推定される竪穴建物が確認されている。

周辺の既往調査を紐解くと、昭和48年に行われた東太田一丁目での大阪府教育委員会による発掘調査に始まり、昭和60年2月～3月に実施した宿舍の建設に伴う調査まで遡ることができる(図2)。昭和60年の調査では、弥生時代の竪穴建物5棟をはじめ、古墳時代から奈良時代の掘立柱建物と推定される柱穴群、そして区画溝と推測される直角に曲がる溝が確認されている²⁾。補記として、この昭和60年の調査地の南側では「昭和42年の冬に島上高校地歴部の調査においても、石釧が出土している」とのことから、太田遺跡の包蔵地南端部にまで古墳時代以降の集落もしくは古墳が広がっていたことが推察できる。北域の既往調査を概観すれば、平成4～6年には、太田遺跡の北端を走行する名神高速道

路の拡幅工事に伴って、発掘調査が実施された³⁾。ここでは弥生時代の竪穴建物 12 棟、石室を伴う 4 基の古墳と飛鳥・奈良時代の掘立柱建物 20 棟余、平安時代の溝や倉庫跡が検出されている。続いて、左記の道路拡幅に伴う調査地に南接する太田二丁目において、共同住宅建設に伴い平成 11 年に調査を実施した。この調査地においても弥生時代後期後半の竪穴建物が検出されており、高速道路の拡幅工事に伴う調査データとも合わせて、当該期の竪穴建物群の広がりを把握することができた。さらに、6 世紀後半から末にかけての掘立柱建物を 5 基検出し、そのなかには総柱建物が少なくとも 1 棟含まれることが分かっている⁴⁾。平成 28・30 年には、今回の調査地から北西に約 100 m の太田二丁目 12 番 1 他の地点で、開発道路に伴って調査を行った。これらの調査では、奈良・平安時代以前に比定される落ち込みとピットを、平安時代末頃に推定される溝・土坑・ピットを検出している。

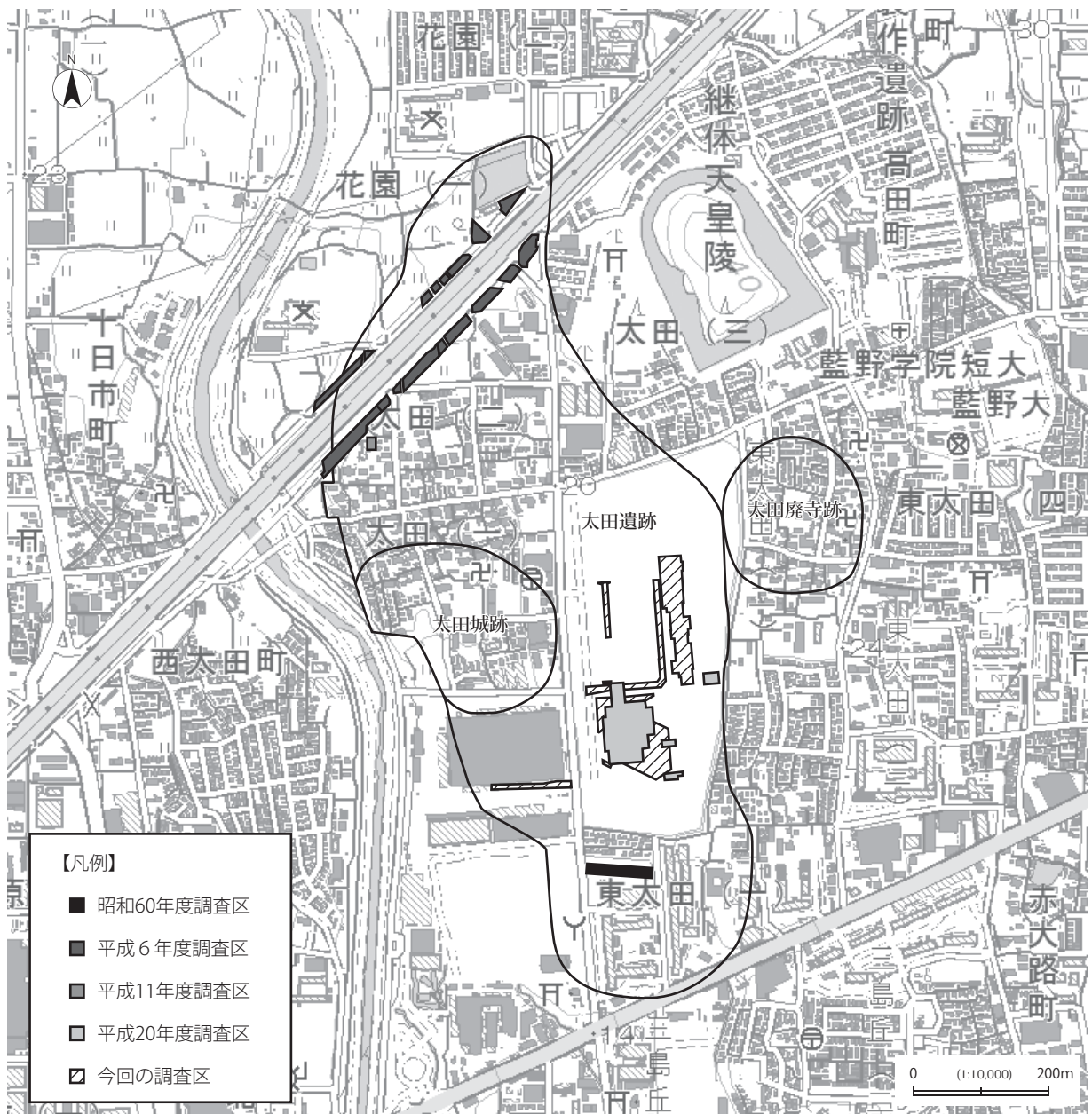


図2 既往の調査区と今回の調査区配置



図3 OT08-2調査全体図

第3節 調査の経過（日誌抄）

平成 29 年 6 月 19 日

太田遺跡・太田廃寺跡 1 区南西部から機械掘削開始。第 4 層より土器出土。採集しつつ慎重に掘り進める。

6 月 23 日

1 区：調査面である第 5 面（第 4 層下面）において遺構検出開始。溝（01001 溝）、落ち込みなどを確認。

6 月 26 日

1 区：遺構掘削開始。

7 月 5 日

1 区：南半部の機械掘削完了。引き続き北に向けて掘削を継続。

7 月 7 日

1 区：古墳周溝（01013 溝）検出、掘削開始。

7 月 10 日

1 区：古墳周溝（01014 溝）検出、掘削開始。

2 区：北西部より機械掘削開始。

7 月 11 日

2 区：攪乱著しく、北西部以外は遺構面が残存していないことが判明。

7 月 12 日

2 区：機械掘削完了。

7 月 13 日

2 区：調査面精査、遺構検出。溝、土坑などを検出。

3 区：西部より機械掘削開始。

7 月 14 日

3 区：機械掘削完了。

7 月 18 日

2 区：柱穴（02004 柱穴）検出。

3 区：調査面精査、遺構検出開始。

7 月 19 日

1 区：古墳周溝（01014 溝）遺物出土状況写真撮影、遺物出土地点記録取得、SfM 用写真撮影、取り上げ。

2 区：柱穴（02004 柱穴）掘削、柱根が残存していることが判明、写真撮影。

7 月 21 日

1 区：古墳周溝（01014 溝）より石製紡錘車出土、写真撮影、出土地点記録後取り上げ。

7 月 24 日

1 区：古墳周溝（01013 溝）より古墳時代中期後葉の須恵器高杯がまとまって出土。

4 区：南西部より機械掘削開始。

7 月 26 日

1 区：古墳周溝（01014 溝）遺物出土状況（2 回目）写真撮影、遺物出土地点記録取得、SfM 用写真撮影、取り上げ。

7 月 31 日

6 区：調査区北半部、北端部より機械掘削開始。

大阪府立今宮高等学校考古学入門受入（8 月 2 日まで）。

8 月 1 日

4 区：古墳周溝（04001・04002 溝）検出。攪乱により寸断されており、遺存状態不良。

8 月 2 日

3 区：竪穴建物 1 検出。

8 月 3 日

1 区：古墳周溝（01014 溝）南東角部より土師器長胴甕出土、写真撮影。

3 区：古墳周溝（03006 溝）掘削、人物埴輪の腕部出土。

8 月 4 日

1 区：古墳周溝（01014 溝）よりほぼ全形を残す円筒埴輪が出土。墳丘へ立てられた後、さほど時間を置かずして転落した模様。写真撮影、出土地点記録取得、SfM 用写真撮影、取り上げ。

6 区：北半部機械掘削完了。

台風 5 号接近に伴い現場内養生実施。

8 月 7 日

台風 5 号接近に伴い風雨強し。

8 月 9 日

2・3 区：全景写真撮影、航空写真測量実施。

8 月 10 日

1 区：全景写真撮影、航空写真測量実施。

8 月 21 日

1 区：第 5 層掘り下げ。

3 区：竪穴建物盛土部掘削。

6 区：調査区南半部、北端より機械掘削開始。

8 月 22 日

1 区：古墳周溝（01014 溝）攪乱直下遺存部掘削。

2・3 区：調査完了。

8 月 23 日

1 区：調査完了。

8 月 25 日

4 区：古墳周溝（04001 溝）遺物出土状況写真撮影。

9 月 6 日

4 区：古墳周溝（04001・04002 溝）遺物出土状況写真撮影。土坑（04022 土坑）より古墳時代中期の土師器長胴甕と鍋が出土、写真撮影、図面作成。

9 月 11 日

5 区：機械掘削開始。

6 区：調査区南半部機械掘削完了、遺構面精査。

8 区：確認調査実施、遺物包含層ならびに遺構面遺存を確認、引き続き本調査へ移行。

- 9月15日
台風18号接近に伴い現場内養生実施。
- 9月19日
8区：機械掘削完了，調査面精査。
- 9月27日
4区：全景写真撮影，航空写真測量実施。
- 10月2日
現地公開実施，天候不順なれど25名の参加者を得る。
- 10月4日
8区：全景写真撮影，航空写真測量実施。調査完了。
茨木市立太田小学校6学年の発掘調査現場見学受入。
- 10月19日
学校法人和光学園和光高等学校2学年25名の発掘調査
現場見学受入。天候不順のため出土遺物を中心に解説
を実施。
- 10月20日
台風21号接近に伴う現場内養生実施。
- 10月23日
台風21号による降雨のため各調査区冠水，全景写真撮
影，航空写真測量を控えた6区を重点的に排水。
- 10月27日
6区：調査区南半部全景写真撮影，航空写真測量実施。
- 11月1日
5区：全景写真撮影，航空写真測量実施。調査完了。
6区：調査区北半部全景写真撮影，航空写真測量実施。
調査完了。
- 12月18日
9区：機械掘削開始，同日完了，引き続き遺構検出に移行。
- 12月20日
9区：平面図作成。
- 12月25日
9区：調査完了。
- 平成30年1月9日
7区：機械掘削開始。
- 1月11日
太田遺跡・太田城跡：調査区東端部より機械掘削開始。
- 1月15日
7区：機械掘削完了。部分的に基盤層である第6層が遺
存するが，遺物包含層ならびに遺構面は破壊され残存
しないことが判明。平面・断面記録作成。
- 1月19日
7区：全景写真撮影，調査完了。
太田遺跡・太田城跡：調査区東端部より人力掘削開始，
機械掘削は継続中。
- 1月23日
太田遺跡・太田城跡：調査区東端部においてブロック土
の堆積を確認，古墳時代の土器を多く包含。
- 1月24日
太田遺跡・太田城跡：ブロック土検出状況写真撮影。
- 2月5日
太田遺跡・太田城跡：機械掘削完了。調査区西半部にお
いては機械掘削完了時に基盤層が露頭，引き続き遺構
検出へ移行。
- 2月8日
太田遺跡・太田城跡：調査区東端部ブロック土より奈良
時代の土器片および鉄鏃出土。調査区西端部において
は第3層下面において擬似畦畔(10005 擬似畦畔)検出。
- 2月14日
太田遺跡・太田城跡：第4b面写真撮影，三次元レーザ
ー測量実施。
- 2月17日
太田遺跡・太田城跡：現地公開実施，周辺の住民を中心
に80名の参加者を得る。
- 2月22日
太田遺跡・太田城跡：調査区西半部基盤層上面全景写真
撮影，航空写真測量実施。
- 3月2日
太田遺跡・太田城跡：調査区東半部第6面全景写真撮影，
航空写真測量実施。
- 3月7日
太田遺跡・太田城跡：第6層掘り下げ，調査区中央部付
近，第6層下面において擬似畦畔検出。
- 3月12日
太田遺跡・太田城跡：調査区東端部においても第6層下
面において擬似畦畔や溝を検出。
- 3月14日
太田遺跡・太田城跡：調査区東端部において検出された
溝(10009溝)より弥生時代後期の高杯と共に弥生時
代前期末の壺が出土。
- 3月15日
太田遺跡・太田城跡：調査区東半部第7面写真撮影，平
面測量実施。
- 3月16日
太田遺跡・太田城跡：10009溝出土土器SfM用写真撮影。
- 3月19日
太田遺跡・太田城跡：調査区東端部において下層確認ト
レンチ掘削開始。
- 3月20日
太田遺跡・太田城跡：下層確認トレンチより縄文時代晩
期の土器片出土。
- 3月22日
太田遺跡・太田城跡：下層確認トレンチ写真撮影，平・
断面測量。
- 3月23日
太田遺跡・太田城跡：下層確認トレンチ調査完了。本
事業におけるすべての現地調査を終了。

第4節 調査成果の公開

発掘調査の過程において、文化財調査の目的ならびに必要性、そして調査の成果を市民の方がたに理解いただくことを目的として、発掘調査現場の公開を2回にわたって実施した。

1回目は太田遺跡・太田廃寺跡 2017－1 調査地において平成29年10月2日に実施した。当日は降雨のため足元の悪い中ではあったが25名の参加者に来場いただいた。悪天候のため調査現場を直接見学していただくことはできなかったが、作成した資料をもとに調査の概要ならびに1・3区において検出された古墳を中心とした調査成果について解説を行った。あわせて、本調査ならびに茨木市教育委員会が平成20年度に実施した調査において出土した土器や埴輪などの遺物を展示し、解説を行った。秋の深まりを感じさせる冷たい雨が降る中での公開となったが、参加された皆さまは熱心に説明に耳を傾け、出土遺物を観察し、積極的に質問をされていた。

2回目は太田遺跡・太田城跡 2017－1 調査地において平成30年2月17日に実施し、80名の参加者を得ることができた。発掘調査現場は現代の開発に伴う盛土造成がおよそ3.5mにおよび、発掘調査現場と現地表面との高低差が大きいことから、多人数での昇降は危険を伴うと判断し、公開にあたっては安全対策を図ったうえで調査区上方から見学いただくこととした。あわせて、一時に見学者が集中すると混乱が生じ、転落等事故が発生する恐れがあったことから、当日は見学会場を屋外の調査現場と室内の出土遺物展示場とに分割し、適正な人数で見学ができるよう対策を図った。出土遺物の展示にあたっては見学だけでなく実際に遺物に触れていただき、重さや質感についても体感していただいた。参加された市民の皆さまからは、「普段あまり見学することができない発掘調査現場や考古学について現地において学ぶことができた」、「普段は展示ケースや柵などに覆われ接する機会のない出土遺物に触れることができ良い経験になった」、「自身が居住する地にこのような遺跡があることを知る良い機会になった」など、好評をいただくことができた。

また、調査期間中には教育機関と連携した普及活動も実施した。平成29年10月4日には調査地の北に所在する茨木市立太田小学校の依頼を受け、地域の歴史に対する理解を深める授業の一環として、6学年の児童約160名を対象とした遺跡見学会を実施した。見学会では調査現場を見学し、遺跡と発掘調査から明らかとなった当地における過去の人びとの生活や文化について解説するとともに、出土遺



写真1 太田遺跡・太田廃寺跡 現地公開風景



写真2 太田遺跡・太田城跡 現地公開風景

物に触れていただく機会を設けた。あわせて、当日実施したラジコンヘリコプターによる空中写真測量についても見学していただいた。児童たちは積極的に質問を投げかけ、往時の人びとの生活に思いを馳せるとともに、復元された円筒埴輪を持ち、その重さなどを感じたほか、出土した土器や埴輪の破片を手に取り、協力しながら復元を試みるなどして学んでいた。後日談となるが、この時に参加した複数の児童が遺跡に興味を持ち、上述した2回目の発掘調査現場公開にも足を運んでくれるという、開催したのものにとって何よりも嬉しい結果をいただくことができた。

平成29年7月31日から8月2日の3日間にかけては、大阪府立今宮高等学校の依頼を受け、同校総合学科の夏季集中講座である考古学入門の教員ならびに受講生徒計11名を受け入れた。初日に考古学と発掘調査について学んでいただいた後、実際に調査現場において発掘調査を体験していただいた。連日の酷暑にもかかわらず、生徒たちは土層の観察や平面・断面測量、遺物の検出や出土遺物の記録作成などの作業に真摯な態度で取り組んでいた。

平成29年10月19日には東京都町田市に所在する学校法人和光学園和光高等学校2学年の生徒25名の見学を受け入れた。当日は天候不順のため調査現場の見学は実施できなかったが、現場詰所において古墳時代を中心とした調査成果と出土した土器や埴輪の解説を行った。

文化財の保護にはその地に住まう市民の方がたのご理解、ご協力が重要である。文化財保護ならびに発掘調査の必要性についてご理解をいただき、文化財に親しみを感じていただけるよう、今後も可能な限りこうした活動を継続していきたいと考える。

参考文献

- 1) 茨木市教育委員会 2015 『太田遺跡発掘調査概報』 茨木市文化財資料集第61集
- 2) 茨木市教育委員会 1986 『太田遺跡発掘調査概要』
- 3) 名神高速道路内遺跡調査会 1998 『中央自動車道西宮線拡幅工事に伴う太田遺跡発掘調査報告書』 名神高速道路内遺跡調査会調査報告書第7輯
- 4) 茨木市教育委員会 2000 『大阪府茨木市 平成11年度発掘調査概報』



写真3 太田小学校 見学風景



写真4 今宮高等学校考古学入門 作業風景

第2章 位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

茨木市は大阪府北東部に位置し、東は高槻市、西は吹田市、箕面市、豊能町、南は摂津市、北は老の坂山地を挟んで京都府亀岡市と接する。市域は南北 17km、東西 10kmと南北に長く、南に向かって安威川・佐保川・茨木川・勝尾寺川が流下する。古くは慶長伏見地震（1596年）、近年では平成30年6月18日に発生した大阪北部地震の震源断層の一つとも目された有馬―高槻断層帯は、市域中央を北東―南西方向に走り、地質的にも南北を二つに区分する。その北半部は、標高 300 m前後の北摂山地と、そこから派生する丘陵部からなる。南半西部は、標高 50～100 m前後の洪積層の隆起地形の一つである千里丘陵の裾が延びており、南半部の東南域には先述の河川や淀川によって規制された沖積層からなる三島平野が広がる¹⁾。

今回報告する太田遺跡、太田廃寺跡、太田城跡は、市域中央東端に位置し、高槻市にまたがる標高 10～30 mの富田台地の西側に分布する。現行の町名では、花園一丁目、太田一・二丁目、太田東芝町、城の前町、東太田一丁目にかけて広がり、その範囲は、東西約 0.6km、南北約 1.3kmを測る。したがって、遺跡範囲の西限は安威川となり、北限付近には中央自動車道西宮線（名神高速道路）、南限には国道 171 号が走行する（図 1・2）。地形的には、北東部が丘陵および台地の裾部にあたり標高が高く、南西部が安威川の河岸段丘および後背湿地に相当し徐々に低くなる。今回の調査地においても、北東側は大規模な削平がなされており、崖状となった擁壁の高さは 3 mを超える箇所も存在する。

第2節 歴史的環境

茨木市内で最も古い人類の痕跡は、山麓部の初田遺跡や丘陵部裾の太田遺跡、安威遺跡などに残されている。平野部に立地する郡遺跡や東奈良遺跡、新庄遺跡などでは、表面採集や後世の包含層内で検出された旧石器時代後期のナイフ形石器や有舌尖頭器が認められる²⁾。

縄文時代は、東奈良遺跡から前期末頃の爪形文土器が、後期から晩期になると耳原遺跡において晩期の深鉢棺墓 16 基が発見され、総持寺遺跡においても甕棺墓と考えられる土器が出土している。牟礼遺跡では、縄文時代晩期から弥生時代前期の土器や、弥生時代前期の水田跡、井堰等が検出されている。

弥生時代に入ると、前期では東奈良遺跡、目垣遺跡、総持寺遺跡、溝咋遺跡、新庄遺跡に集落がみられる。前期末には、耳原遺跡や郡遺跡にも集落が形成され、中期から後期には遺跡数が増加し、今回報告する太田遺跡をはじめ、倍賀遺跡、中条小学校遺跡、中河原遺跡などが挙げられる。特に、近年の郡遺跡、倍賀遺跡の大規模調査では、160 基を超える方形周溝墓がみつかっており、集落域と墓域、生産域の様相を考えるうえで貴重なデータが得られている³⁾。さらには、中河原遺跡においても弥生時代中期初頭から後期にかけての方形周溝墓や土器棺墓がみついている。5 棟以上の高床建物が描かれた弥生時代中期後葉の土器がみつかったことは、絵画土器の類例を増やすのみならず、建物の構造上の理解や中河原遺跡の社会性や祭儀、交流・流通などを把握するうえで興味深い成果である。また、本市の弥生遺跡と言えば最初に挙げられるのが東奈良遺跡であり、幾重にも回らされた環濠と、国の重要文化

財に指定されている多数の石製銅鐸鑄型の出土遺物が特徴である。

古墳時代には、前期古墳として北部の丘陵上に紫金山古墳が、佐保川を挟んで左岸に將軍山古墳が築造される。紫金山古墳は山丘の頂部を利用した全長約 102 m、後円部径約 76 m、前方部幅約 40 m の前方後円墳で、竪穴式石室からは、銅鏡 12 面や鉄製の甲のほか、鉄製刀劍、鉄鏃、鉄斧、鉄鎌、鉄製三叉鍬、車輪石、鍬形石、筒形銅器など豊富な副葬品が出土した。將軍山古墳は全長約 110 m、後円部径約 80 m、前方部幅約 43 m の前方後円墳で、墳丘部は三段築成で、葺石で覆われた各段には円筒

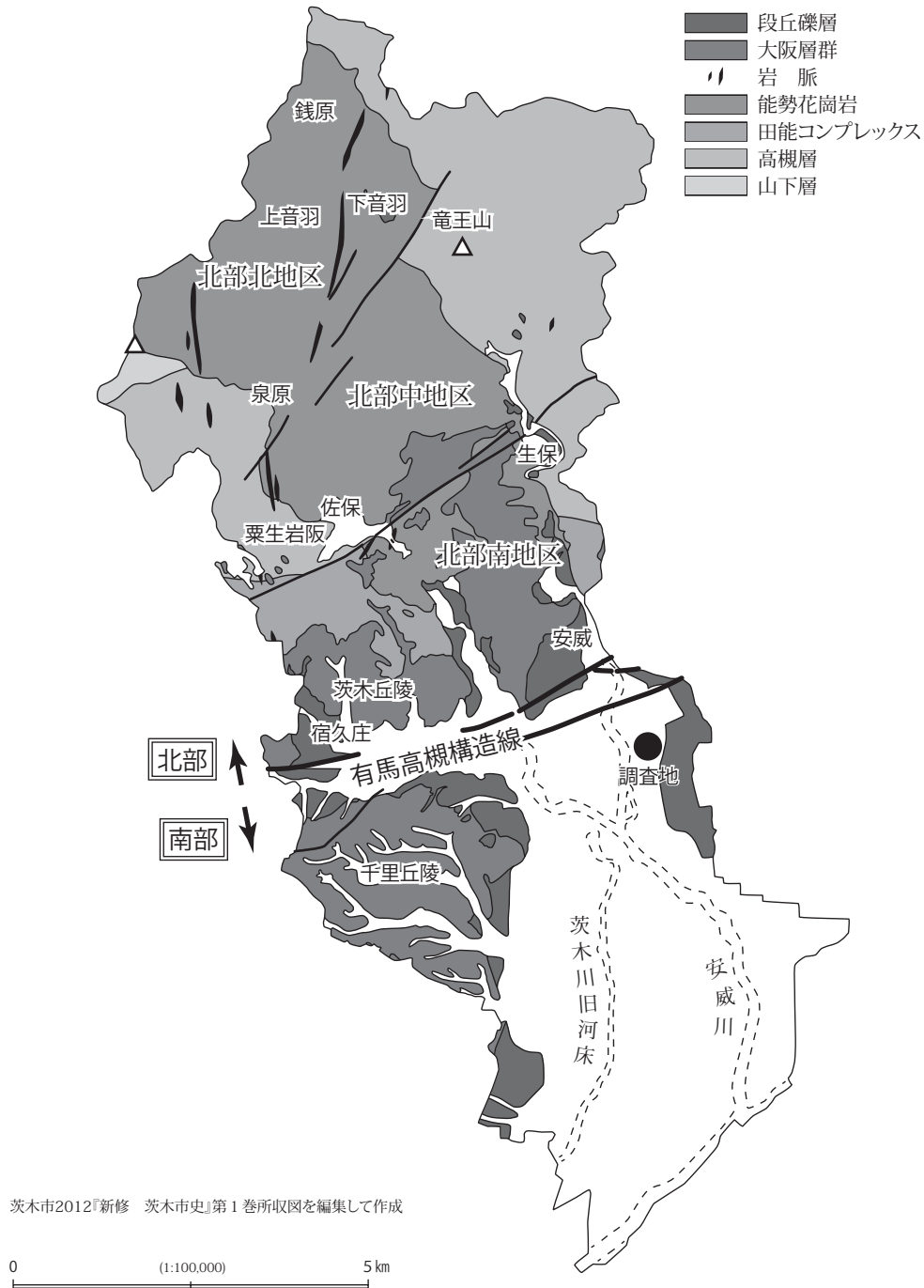


図4 茨木市域の地質

埴輪が据えられていた。粘土床や竪穴式石室からは、硬玉製勾玉、ガラス製小玉、鉄製刀剣、鉄鏃、銅鏃などの副葬品が出土した。中期には、三島地域最大の前方後円墳である全長約 226 m の太田茶臼山古墳が築かれる。総持寺遺跡においても、太田茶臼山古墳と同時期の小規模古墳 43 基が密集して築造されている。

後期には、市内の古墳築造が全盛を迎える。大阪府の史跡に指定されている海北塚古墳は、花崗岩を積んだ左片袖式石室が露出し、室内には緑泥片岩で作られた箱式石棺が置かれていた。副葬品および封土出土遺物には、人物獣帯鏡、刀身、金環、銀製鍍金勾玉、鉄地金銅製杏葉、雲珠などの馬具類がある。先述の紫金山古墳の南側には、青松塚古墳、南塚古墳が築造される。いずれも 6 世紀代の築造と考えられ、青松塚古墳では銅鏡 2 面、玉類、馬具類、鉄刀、鉄矛などの他、多数の須恵器と少量の土師器が出土している。一方の南塚古墳からは、馬具、武具、武器、玉類が出土し、長持型と家型という型式の異なる石棺が安置されていたことが特記される。このように複数の石棺を持つ古墳としては、耳原古墳が挙げられる。三島地域最大の巨石横穴式石室墳とされ、玄室には、6 個の縄掛突起を持つ蓋石と家形組合式石棺 1 組と、2 個の円形突起を持つ蓋石と家形刳拔式石棺 1 組が安置されている。後期から終末期には、丘陵部を中心に、新屋古墳群、安威古墳群、長ヶ淵古墳群、桑原古墳群など横穴式石室を主体とする群集墳が築造されている。さらに、台地裾や低位段丘、平地にかけては太田遺跡、総持寺遺跡、中条小学校遺跡、東奈良遺跡で横穴式石室をもたない直葬の埋没墳が発掘調査で明らかになってきている。終末期古墳としては、阿武山古墳や初田 1 号墳、上寺山古墳がある。阿武山古墳は、高槻との市境にまたがり、三島平野を見渡す位置に築造されている。石室内には麻布を漆で塗り重ねた夾紵棺が安置され、棺内には、玉枕、多量の金糸を用いた衣服を纏っていたと推測される人骨が確認された。

飛鳥時代には、太田廃寺、穂積廃寺、三宅廃寺など有力氏族に関係する寺院が建立された。太田廃寺は、飛鳥時代後期に比定される寺院で、明治 40 年に付近を開墾中に、舍利容器一具を納めた花崗岩製塔心礎が発見されている。奈良時代には、摂津は 12 の郡に分けられ、市域は島下郡に編成される。平安時代には造酒司領太田保という荘園が文献にみられ、周辺では酒や酢などの醸造用の米を産していたものと推測される。

中世以降の遺跡として、東奈良遺跡、中条小学校遺跡、舟木遺跡、新庄遺跡、玉櫛遺跡、総持寺遺跡、郡遺跡、倍賀遺跡など市内各所の遺跡が挙げられる。さらには、中世から近世初頭にかけて、茨木城、三宅城、福井城、安威城、太田城など数多くの城郭が築かれたようであるが、不明な点が多い。

参考文献

- 1) 木庭元晴 2012 『新修茨木市史』第 1 巻 通史
茨木市教育委員会 2015 『太田遺跡発掘調査概報』茨木市文化財資料集第 61 集
茨木市教育委員会 2015 『中条小学校遺跡発掘調査報告書（本文編）－立命館大学いばらきキャンパス建設に伴う発掘調査報告書－』茨木市文化財資料集第 62 集
- 2) 茨木市教育委員会 1998 『茨木の史跡』
茨木市教育委員会 2015 『太田遺跡発掘調査概報』茨木市文化財資料集第 61 集
- 3) 茨木市教育委員会・公益財団法人大阪府文化財センター 2019 『郡遺跡・倍賀遺跡』茨木市文化財資料集第 71 集・公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書第 295 集



図5 太田遺跡周辺遺跡分布

第3章 調査の方法

第1節 発掘調査の方法

第1章で記したとおり、今回の調査地は東芝大阪工場にあたり、茨木市道東太田一丁目花園二丁目線を挟んで東西に広がっている。このうち、市道より東を「太田遺跡・太田廃寺跡 2017 - 1」、市道より西を「太田遺跡・太田城跡 2017 - 1」として調査を実施した。

調査は公益財団法人大阪府文化財センターが平成22年12月に定めた『遺跡調査基本マニュアル』(以下、「マニュアル」とする)に準拠して実施した¹⁾。調査はおおまかに、調査区の設定、機械掘削、人力掘削の順で実施した。調査区は太田遺跡・太田廃寺跡 2017 - 1において9箇所、太田遺跡・太田城跡 2017 - 1において1箇所の計10箇所に設定した(図6)。機械掘削では0.8m³のバックホウを使用した。機械掘削の対象となる層準は太田遺跡・太田廃寺跡 2017 - 1と太田遺跡・太田城跡 2017 - 1において異なるため、各調査における成果報告の中で改めて記述する。人力掘削では、遺物包含層の掘削および遺構の検出ならびに掘削を行った。人力掘削の過程において適時、遺構面の測量、調査区・遺構断面等の実測、遺構面や遺構等の写真撮影を行った。遺構面の測量はラジコンヘリコプターを用いた航空測量を基本とし、必要に応じてトータルステーションや三次元レーザースキャナーを用いたデジタル測量を実施した。調査区の断面図は縮尺20分の1、遺構断面図・遺物出土状況図は同10分の1を基本として作成した。なお、遺物出土状況図の一部はSfM(Structure from Motion)を用いて作成した。本調査においては現地においてニコン社製デジタル一眼レフカメラD610を用いて撮影し、オープンソースソフトウェアであるVISUALSfMにより三次元画像を作成し、同じくオープンソースソフトウェアであるCloudCompareを用いて後述する平面直角座標系第VI系に基づいた座標値を付与したデータを福井コンピュータ株式会社製LandTraceEvolutoにより二次元データに変換し、版下とした。

写真媒体は記録用として上記ニコン社製D610を使用し、報告書への掲載を想定したものについては6×7黒白・リバーサルフィルムも使用した。デジタルカメラにおける写真データの保存型式はRAWとJPEGの二種類とした。撮影にあたっては、文化財センター所定の写しこみラベルに調査名・撮影内容(地区割)・撮影方向・撮影日時・撮影者を記載し、デジタルカメラによる写しこみを行った。出土遺物に対しては遺跡名・地区名・層名・遺構名・出土年月日・登録番号などを記した公益財団法人大阪府文化財センター所定のマイラーベースのラベルを添付し、遺構、包含層ごとに適宜取り上げた。

各調査区の主要遺構面調査完了時等、調査の過程において茨木市教育委員会生涯学習課歴史文化財係の立会を受け、調査進捗を報告し、指示を仰いだ。また、平成29年11月1日、平成30年2月26日には大阪府教育庁文化財保護課による調査状況の視察を受けた。

遺構面などの測量や遺物の取り上げの基本となる地区割は、世界測地系に準拠する平面直角座標系第VI系を基準とし、大阪府全域を共通の方式で区画できるように大小6段階の区画を設定した(図6)。第I区画は大阪府南西端 $X = -192,000$ m、 $Y = -88,000$ mを基準とし、縦6 km、横8 kmで区画し、縦軸をA～O、横軸を0～8で表示する。第II区画は、第I区画を縦1.5 km、横2.0 kmでそれぞれ4区分し、計16区画を設定している。そして、南西端を1、南東端を4とし、北東端を16とする、平行式の地区名表示を採る。第III区画は、第II区画を100 m単位で縦15、横20に区画したもので、北

東端を基点に縦軸が A～O、横軸が 1～20 となる。第Ⅳ区画は第Ⅲ区画を 10 m 単位で縦、横各 10 に区画したもので、縦軸が a～j、横軸が 1～10 となる。第Ⅴ区画は、第Ⅳ区画内を 5 m 単位で縦・横各 2 に区画するもので、北東側を基点に北西、南東、南西の順に I～Ⅳとする。第Ⅵ区画は、第Ⅳ区画内を任意に細分する場合に使用し、北東端を基点とする。なお、本調査においては第Ⅳ区画を最小区画とし、第Ⅴ・Ⅵ区画については使用していない。遺物の取り上げは、第Ⅳ区画を基準とした。

第 2 節 整理作業の方法

出土遺物は、調査現場において洗浄し、乾燥後に注記を行った。注記は調査ごとに調査名（カタカナ表記）－登録番号の順で記載した。太田遺跡・太田廃寺跡 2017－1 調査では「オオダ・オオダハイジ 2017－1－登録番号」、太田遺跡・太田城跡 2017－1 調査では「オオダ・オオダジョウ 2017－1－登録番号」となる。

洗浄および注記が終了した遺物は、実測対象ならびに写真図版への掲載対象を抽出し、それ以外については登録番号ごとに袋に詰め、コンテナへ収納した。今回、実測対象となった遺物は計 386 点である。実測・撮影対象遺物は必要に応じて接合・復元作業を行った。また、実測遺物については文化財センター所定の方眼紙に原寸で実測し、後述する遺物台帳へ掲載するためにデジタルカメラで撮影を行った。実測後、スキャナおよびアドビ社の Photoshop CS 6 を用いてデジタルデータ化したのち、アドビ社の Illustrator CS 6 を用いて実測図面の浄書を行い、報告書掲載図版用の版下を作成した。また、調査現場において作成した図面についても同様の方法によりデジタルデータ化と浄書作業を行い、あわせて報告書掲載用の遺構図版を作成した。作業終了後、各図面の内容を記載した一覧表を添付し、ファイルに収納した。

調査現場において撮影した写真のうち、6×7 黒白・リバーサルフィルムについては現像の後、報告書の写真図版に掲載するものを抽出し、スキャナを用いてデジタルデータ化した。また、実測のため抽出した遺物のうち報告書に写真を掲載するものについては新たに撮影を行った。写真のデジタルデータおよび遺物の撮影は文化財センター中部調査事務所写真室において行った。

これらの作業と並行して、アドビ社の InDesign CS 6 を用いて報告書の原稿を執筆するとともに作成した版下の編集作業を行った。

なお、出土遺物については登録台帳を、実測遺物については遺物台帳を作成した。台帳作成には、ファイルメーカー社の FileMaker Pro 8 を用いた。台帳には、デジタルカメラで撮影した写真データに加え、登録台帳では遺物の取り上げの際に添付したラベルの情報および遺物の内容・収納したコンテナの情報などを、遺物台帳では遺物の種別・器形・時期・残存率などの情報を入力した。

調査現場で撮影したフィルムは所定のアルバム類に収納した。写真の整理にあたっては上記の登録・遺物台帳と同様に写真台帳を作成した。写真台帳では調査現場においてデジタルカメラで撮影した画像に加え、撮影の際に記入した写しこみラベルの情報、前述した各フィルムの収納情報を記入した。

参考文献

- 1) 財団法人大阪府文化財センター 2010 『遺跡調査基本マニュアル』

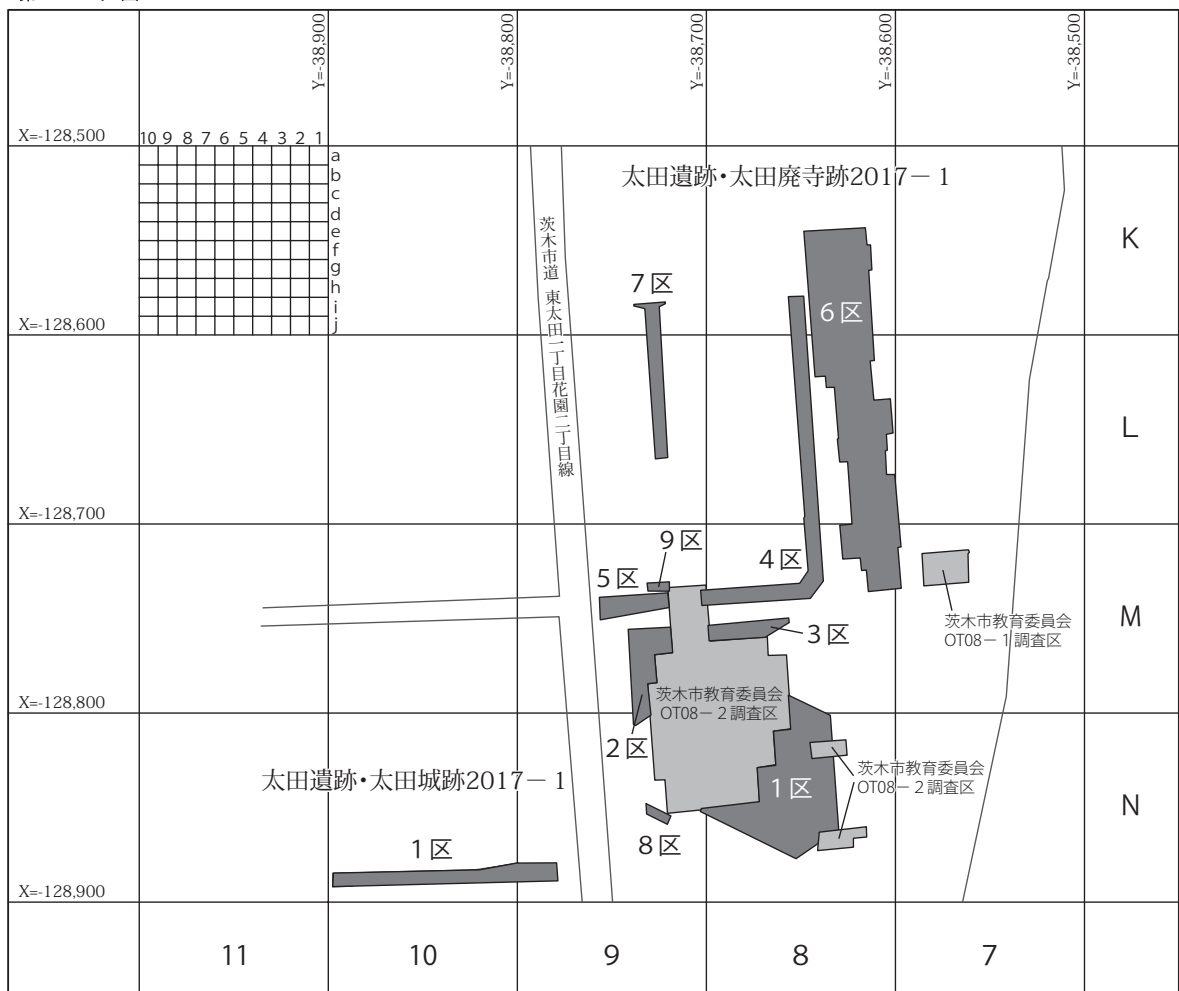
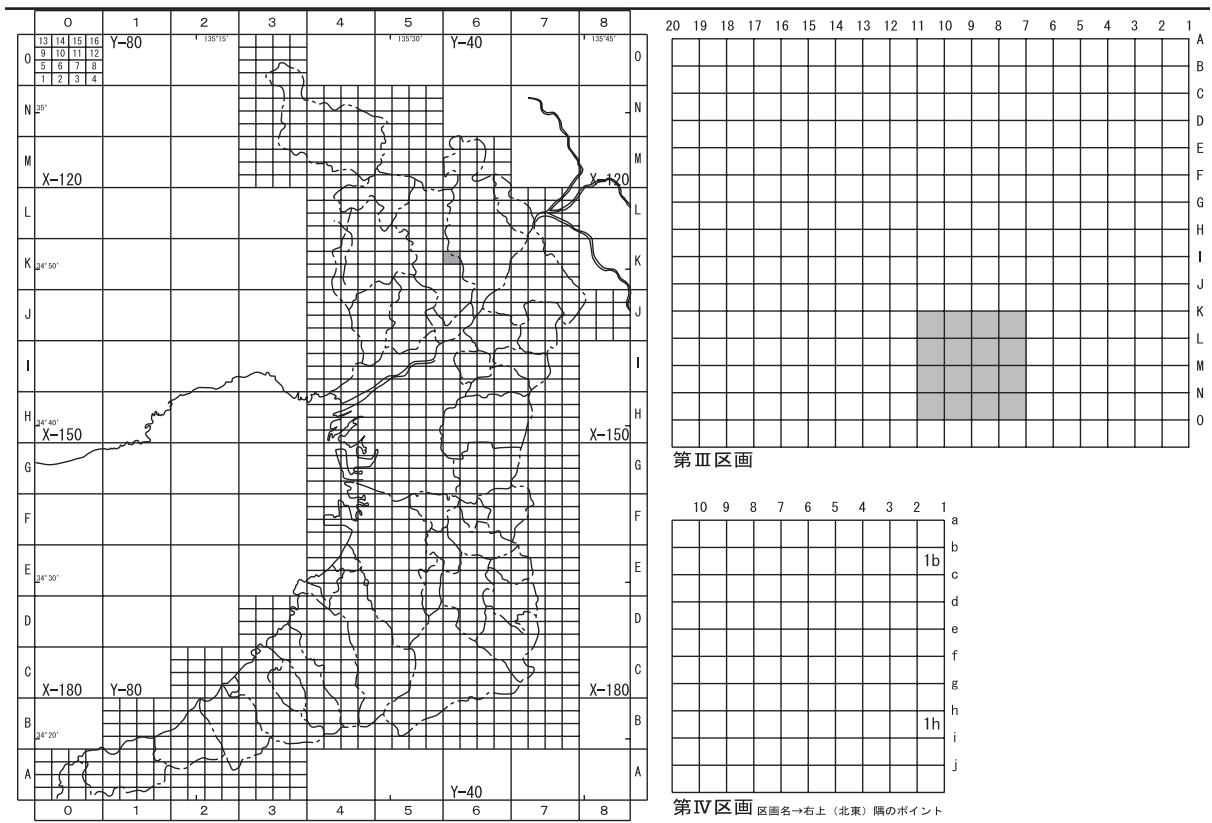


図6 地区割

第4章 太田遺跡・太田廃寺跡 2017－1 調査

第1節 調査の概要

第1項 調査区と遺構番号の設定

第1章において既述のとおり、本調査は東芝大阪工場跡地における再開発事業に伴い実施した。このうち茨木市道東太田一丁目花園二丁目線以東における太田遺跡・太田廃寺跡 2017－1 調査においては、学校法人追手門学院大学の新校舎ならびに食堂、追手門学院中・高等学校新校舎、地区幹線道路、防火水槽の建設予定地である9地点に調査区を設定し、茨木市教育委員会が平成20年度に実施した太田遺跡2次発掘調査（以下、「OT08－2 調査」とする）地点を除外した範囲において調査を実施した（図6）。調査は着手が可能な調査区より順次開始し、複数の調査区を並行して実施した。なお、OT08－2 調査の成果については茨木市教育委員会より『太田遺跡発掘調査概報』として平成27年に報告書が刊行されている¹⁾。以下において同報告書に所収される図版などを引用する場合には便宜的に『概報』と省略して表記することとする。

調査はOT08－2 調査の成果に基づき、後述する東芝大阪工場建設および取り壊しに伴う盛土・造成土層以下、近世・中世の作土層、弥生時代後期から古代にかけての土壌層を機械にて除去し、遺構の検出ならびに掘削および第5層の掘り下げを人力により行った。各調査区における調査原因ならびに最終の調査面積、機械掘削の開始から調査終了までに要した期間は図7のとおりである。なお、食堂建設地にあたる2区と3区および地区幹線道路建設地にあたる4区と5区は同一施設であるが、OT08－2 調査区により分断されることからそれぞれ個別の調査区として調査を実施した。

また、上述したように本調査においては複数の調査区において並行して調査を実施した。このため、調査全体において一貫した遺構番号を付与すると重複などの混乱をきたす恐れがあったことから、各調査区において1から順次遺構番号を付与した。こうした理由から、同一番号を有する遺構が各調査区に存在することとなるが、報告にあたっては混同を避けるため、遺構番号の前に各調査区を2桁表記で付与するとともに、遺構番号を3桁の数字で表記することとした。例示すると、1区の1溝は「01001 溝」、

調査区	調査原因	調査面積 (㎡)	調査期間
1区	追手門学院大学新校舎	2,961	平成29年6月19日～8月23日
2区	追手門学院大学食堂	722	平成29年7月10日～8月22日
3区	追手門学院大学食堂	331	平成29年7月13日～8月22日
4区	地区幹線道路	1,640	平成29年7月24日～10月4日
5区	地区幹線道路	343	平成29年9月11日～11月1日
6区	追手門学院中・高等学校新校舎	5,311	平成29年7月31日～11月1日
7区	地区幹線道路	586	平成30年1月9日～1月19日
8区	防火水槽	64	平成29年9月11日～10月4日
9区	防火水槽	50	平成29年12月18日～12月25日

図7 太田遺跡・太田廃寺跡 2017－1 調査 調査区・調査原因・調査面積・調査期間一覧

6区の15土坑は「06015土坑」となる。

なお、全体の統一を図るため、第5章において報告する太田遺跡・太田城跡2017-1調査における検出遺構についても、便宜的に10区として調査区番号を付与し、同様の方法で遺構番号を表記する。また、竪穴建物など複数の遺構の集合からなる遺構についてはこのような表記はとらず、マニュアルに準拠し、「竪穴建物1」のように遺構種類の後に遺構番号を付与した。また、古墳の周溝と判断したもののうち、OT08-2調査においてすでに遺構（古墳）番号が付与されているものについては同一の番号を、本調査において新たに検出されたものについては連続する番号を付与し、遺構番号と併記した。

第2項 基本層序

前章で記述したように、太田遺跡・太田廃寺跡2017-1調査区は富田台地の縁辺に位置し、北および東は段丘崖により画される。調査地の西には安威川が南流し、現在はほぼ平坦な地形を呈する。しかしながら、後述する太田遺跡・太田城跡2017-1調査により、現在の地形は東芝大阪工場建設に伴う造成の結果形成されたものであり、工場建設以前は茨木市道東太田一丁目花園二丁目線付近を境に西へ大きく落ち込む地形を呈していたことが判明した²⁾。このため、太田遺跡・太田廃寺跡2017-1調査区においては安威川の氾濫などの影響は受けにくい環境下にあった模様で、堆積作用は活発とは言い難く、巨視的には各調査区において共通した層序が確認された。その一方で、微地形としては細かい起伏が各所に存在し、部分的にはあるが氾濫堆積物などが残存する地点が認められるなどの変化も確認された。

こうしたことを踏まえ、調査にあたって各調査区において認識を共有するための基本層序を設定した。基本層序の設定にあたっては土壌化・作土化している層をa層、その母材となった堆積層をb層とし、各層の堆積状況および微地形の変化の把握に努めた。本調査では、近代から現代にかけての耕作土層を第1a層とし、以下、堆積単位ごとに順次層名を付すとともに、各層の上面を第○面とした。なお、本報告においては便宜上「a」の記載を省略している。例示すると、第6a層は第6層、第6a層上面は第6面、第6b層の上面は第6b面となる。

設定した基本層序は以下のとおりである。これより後、各調査区における層序の記述にあたっては、この基本層序に則って記述を進めることとする。

盛土層 東芝大阪工場建設および解体に伴うと考えられる盛土ならびに造成土層である。

第1層 東芝大阪工場建設直前まで営まれていた近代から現代にかけての耕作土層である。

第2層 近世の耕作土層である。

第3層 古代から中世にかけての耕作土層である。

第4層 弥生時代後期から古代にかけての土壌層である。

第5層 弥生時代後期以前に形成された土壌層である。低地部において確認された。無遺物層である。

第6層 自然堆積層である。すべての調査区において認められる。本層を基盤層とした。

なお、平面調査は第4層を除去した第5面において実施した。調査区によっては第5層が残存しておらず、第4層を除去した段階で第6層が露頭するが、表記は第5面に統一している。

第2節 1区の調査成果

1区は学校法人追手門学院大学新校舎建設に伴う調査区である。新校舎建設予定地は西半が長い六角形を呈するが、このうち北西部約3分の1ならびに東部の一部はOT08-2調査区にあたり（図8）、すでに調査は完了している。OT08-2調査では弥生時代後期から古墳時代前期の集落、古墳時代中期の古墳、および古代～中世の集落などが確認されていることから、当調査区においても同様の遺構の存在が予想された。

1区は概ね北から南へ、東から西へ向けて低くなる地形を呈する。しかしながら、調査区南東部においては東へ向かって低くなる地形を呈するなど、微視的には複雑な地形を呈する。1区では概ね第4層を除去した段階で第6層が露頭するが、第6層が部分的に低くなる地点においては、削平を免れた第5層の堆積を確認した。

第5面の標高は、調査区北端部にあたる7M-6jにおいて約18.7m、調査区中央にあたる7N-6dにおいて約18.3m、調査区南端部にあたる7N-6hにおいて約18.1m、調査区南西端部にあたる7N-10fにおいて約18.3mを測る。

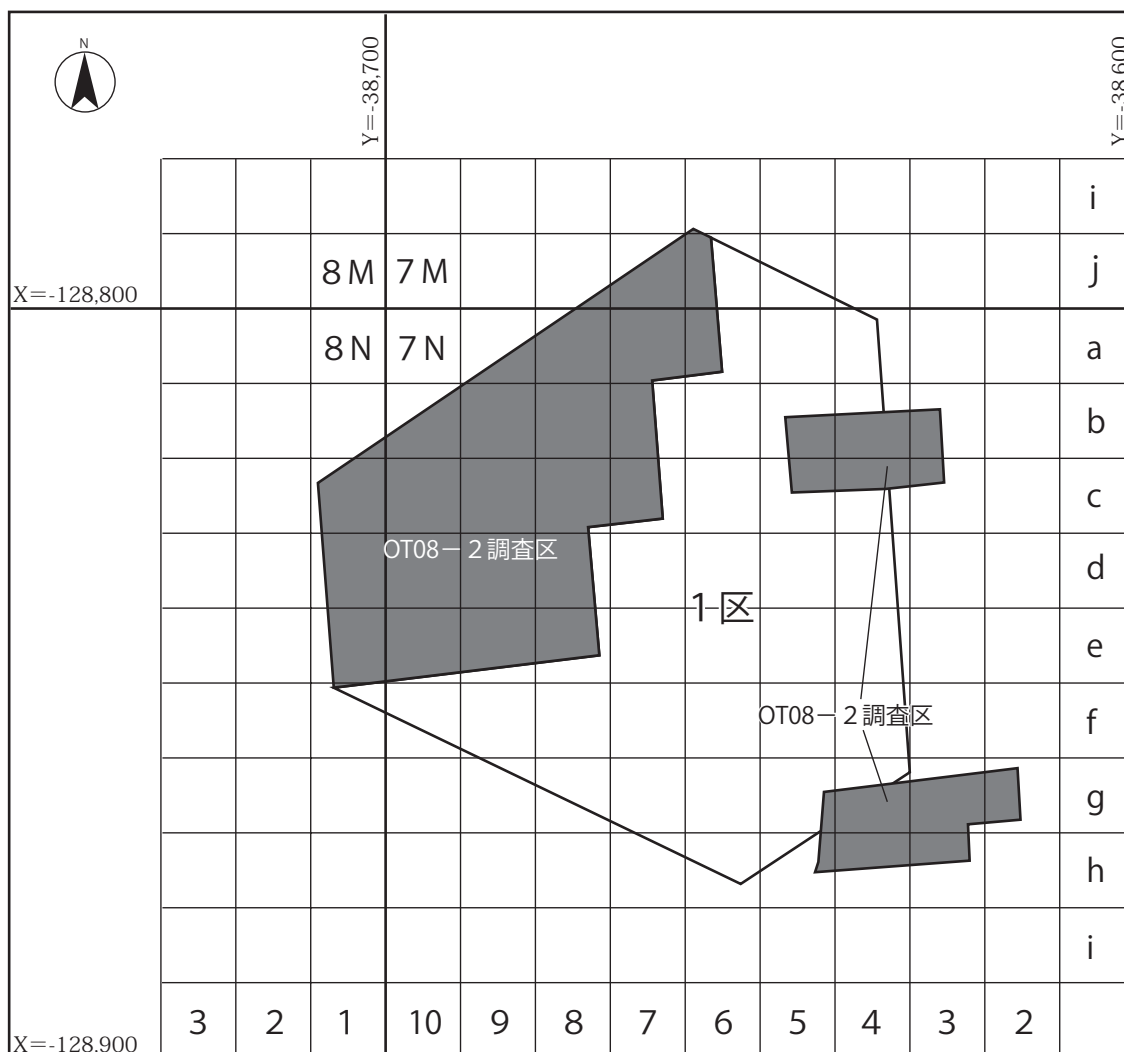


図8 1区地区割と既往の調査範囲

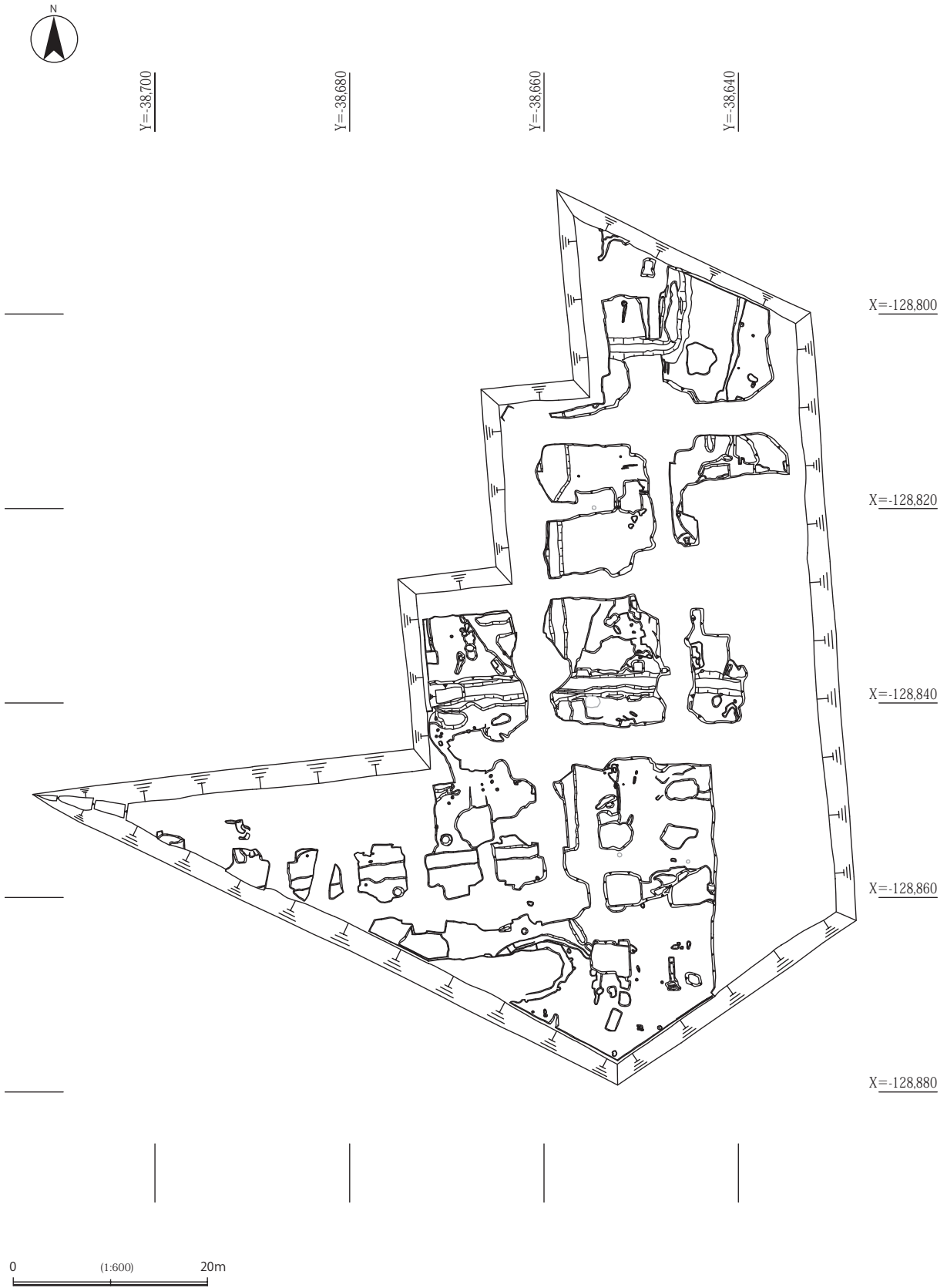


图9 1区 平面

第1項 層序 (図10、図版2)

1区は調査区端の多くが攪乱により破壊されており、連続した土層の観察を行うことは不可能であった。このような状況ではあったが、調査区北端部および南端部においては残存状態が比較的良好であり、現代耕作土層以下の堆積状況を確認することが可能であったことから、同地点において土層の記録を取得した(図10、図版2)。なお、以下に記述する層厚については記録を取得した各地点を総合したものであることを予めご承知おきいただきたい。

盛土・造成土層 シルトと砂を主体とする。層厚は0.80～1.50mを測る。

第1層 土質により2層に細分される。

第1-1層 5Y5/2 灰オリーブ 極粗砂混じり細砂質シルト。一部攪乱による削平や上層の盛土造成に伴う変形を受ける。層厚は概ね0.12～0.20mを測る。

第1-2層 5Y6/2 灰オリーブ 極粗砂混じり細砂質シルト。調査区南部において確認したが、第1-1層からの変化は漸移的であり、層界は不明瞭である。層厚は最も厚い地点において0.05mを測る。なお、調査区南部においては本層の直下において礫を多く含む造成土を部分的に確認した。第1層における耕地開発に伴う造成と思われる。

第2層 2.5Y6/2 灰黄 粗砂・細礫～中礫混じり細砂質シルト。層厚は0.10～0.20mを測り、調査区全域にわたりほぼ水平に堆積している。なお、調査区南東部では本層の直下において、部分的に2.5Y6/2 灰黄 粗砂・細礫～中礫混じり細砂質シルトを主体とし、第3層を母材とするブロック土を含む層を確認した。

第3層 7.5YR5/1 褐灰 中砂～細礫混じり粘質シルト。削平を受け一部残存していないが、層厚は最も厚い地点において0.27mを測る。本来は調査区全域においてほぼ水平に堆積していたものと思われる。調査区南西部においては本層を除去した段階で、基盤層とした第6層の上面が露頭した。

第4層 10YR2/1 黒 中砂～粗砂質粘土からなる土壌化層である。調査区東半部において確認した。層厚は最も厚い地点において0.20mを測る。

第5層 10YR2/1 黒 粘土を主体とし、層の上部に粗砂を若干含む。調査区東端の低地部において確認した。掘削を行ったが遺物は含まれておらず、第6層の表層が土壌化したものと思われる。

第6層 水成堆積物である第6b層と、擾乱を受けた第6層からなる。

第6層 2.5Y4/1 黄灰 粘質シルト。調査区北部において部分的に確認した。調査区北部において確認したが、第6b層との変化は漸移的である。層の下端は確認できず、層厚は不明である。

第6b層 5Y7/1 灰白 中砂～極粗砂だが、部分的に粗砂～細礫となる。層の下端は確認できず、層厚は不明である。

第2項 検出された遺構と遺物

1. 古墳

本調査区では調査区北部において方墳2基を確認した。いずれも墳丘および埋葬施設は削平を受け残存しておらず、周溝のみの検出であったが、OT08-2調査の成果ならびに溝の形状、出土遺物から古墳の周溝と判断した。

01013 溝 [13号墳] (図11～14、図版3・28・29)

7N-6bにおいて検出した方墳の東周溝と考えられる溝である。後述する01001溝と重複してお



図 10 1区 土層断面

- | | |
|--|---|
| <p>1. 5Y5/2 灰オリーブ 極粗砂混じり細砂質シルト [第1-1層]
 2. 5Y6/2 灰オリーブ 極粗砂混じり細砂質シルト [第1-2層]
 3. 5Y6/2 灰オリーブ 細砂質シルト [第1層下面 遺構埋土]
 4. 5Y5/2 灰オリーブ 細砂質シルトと7.5Y5/1 褐灰 中砂～細砂混じり粘質シルト、5Y7/1 灰白 極細砂～中砂のプロック [第1層下面 遺構埋土]
 5. 5Y5/2 灰オリーブ 細砂質シルトと2.5Y6/2 灰黄 粗砂・細砂～中砂混じり細砂質シルト [第1層下面 造成土]
 6. 5Y6/3 オリーブ黄 粗砂混じり細砂質シルト [1層下面 遺構埋土]
 7. 2.5Y6/2 灰黄 粗砂・細砂～中砂混じり細砂質シルト [第2層]</p> | <p>8. 2.5Y6/2 灰黄 粗砂・細砂～中砂混じり細砂質シルト、7.5YR5/1 褐灰 中砂～細砂混じり粘質シルトのプロック含む [第2層]
 9. 7.5YR5/1 褐灰 中砂～細砂混じり粘質シルト [第3層]
 10. 10YR5/2 灰黄褐 極粗砂質シルト [第3層下面 遺構埋土]
 11. 10YR2/1 黒 中砂～粗砂質粘土 [第4層]
 12. [01044 溝埋土] ※図 42 参照
 13. [01063 土坑埋土] ※図 38 参照
 14. 10YR2/1 黒 粘土、層上部に粗砂を若干含む [第5層]
 15. 2.5Y4/1 黄灰 粘質シルト [第6層]
 16. 5Y7/1 灰白 中砂～極粗砂 (部分的に粗砂～細砂となる) [第6b層]</p> |
|--|---|



Y = -38.660

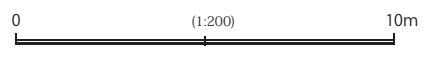
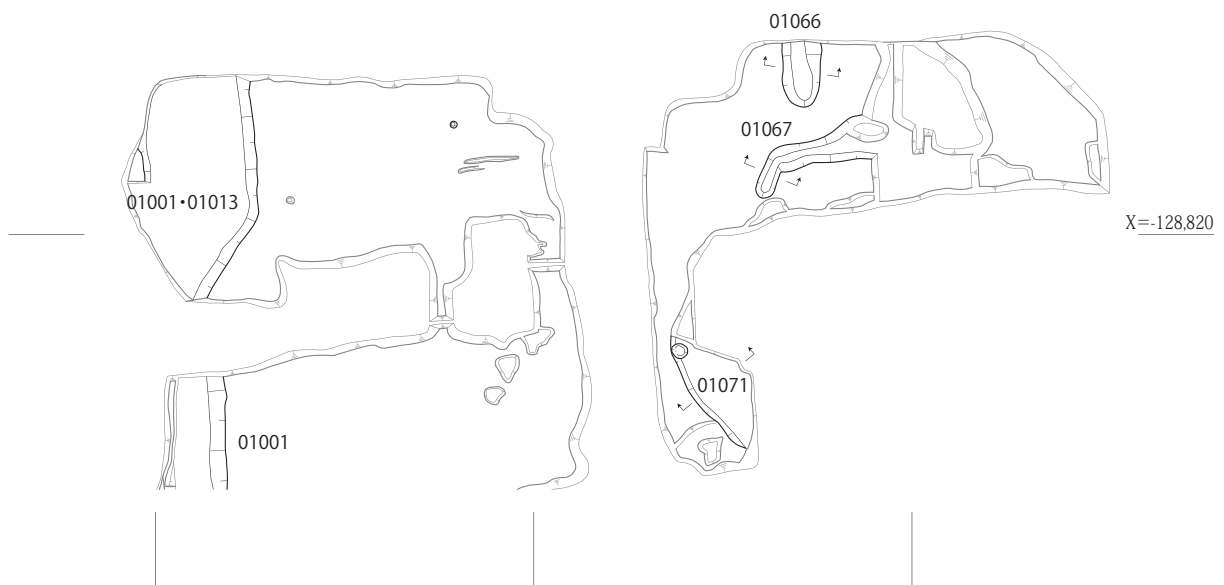
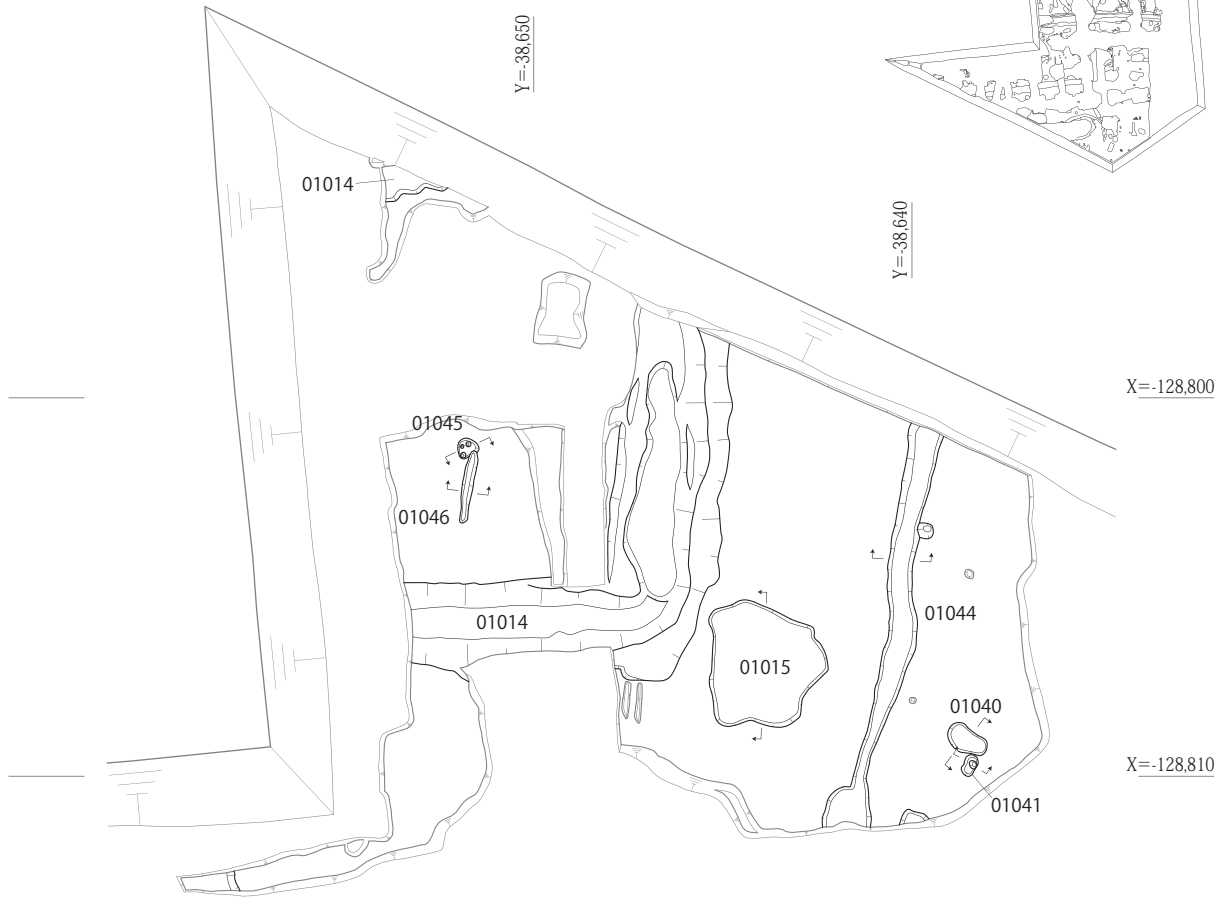
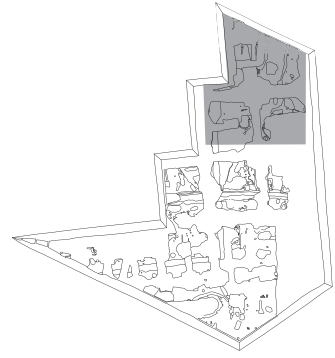


图11 1区北部 平面

り、本溝が 01001 溝を切る。検出時は本遺構が 01001 溝を完全に覆っていたが、埋土を若干掘り下げた段階で 01001 溝との重複関係を確認した。01013 溝は OT08 - 2 調査の G 区において検出された GSD - 1 に連続すると考えられるが、GSD - 1 周辺は攪乱が著しく、部分的な検出であったことから古墳の周溝と認識するには至らなかった。しかしながら今回の調査成果から古墳周溝と判断し、13 号墳とした。

本調査区においても OT08 - 2 調査と同様に検出地点周辺における攪乱は著しく、溝の西および南北は破壊され残存していない。平面形は、東側の掘方が多角形状のやや不整な形状を呈するが、墳丘側となる西側の掘方が直線であること、南側の攪乱以南においては本溝の延長部を確認できなかったことから、攪乱付近で屈曲し GSD - 1 へ連続すると考え、方墳と判断した。遺構の規模は、確認しえた限りにおいては幅 3.34 m、深さ 0.36 m を測る。なお、図 12 における平面図は 01001 溝との重複関係を確認しえた時点で作成したものであるため、溝の幅は検出当初に比べ若干狭くなっている。

埋土は 2 層に細分される。下層は砂質が強く、墳丘からの崩落土と思われる。遺物は本層中に多く含まれる。上層は第 4 層と類似することから、第 4 層が落ち込んだものと思われる。図では明示できていないが、上層と下層の間には粘質シルトの薄層が認められたことから、下層の堆積後、一定の時間が経過したのち上層の堆積が開始したものと思われる。

1～6 は土師器である。1 は二重口縁壺の口縁部である。内外面ともにナデで仕上げる。2 は甕の口縁部である。3・4 は有段口縁鉢である。3 は器面の摩滅が著しいが、外面にハケ、内面にはヘラミガキが辛うじて残る。4 は内外面とも横位のヘラミガキを施す。5 は小型器台である。受部の深さは 1.7 cm を測る。脚裾部は欠損する。6 は高杯脚部である。外面は面取りの痕跡が残る。内面には指頭圧痕が認められる。これらの土器は古墳時代初頭から前期に帰属すると考えられ、後述する須恵器より古相を呈することから、いずれも重複する 01001 溝からの混入品と思われる。

7～22 は須恵器である。X = -128,815 付近からまとまって出土した。7～12 は杯蓋である。天井部は丸みを帯び、いずれもつまみを有する。口径は 11 が最も小さく 11.3cm、9 が 11.8cm、10 が 12.1cm、それ以外は 12.2cm を測る。13～21 は有蓋高杯である。いずれも脚部に 3 方向の方形透孔を有するが、脚部裾の形状に差異を有する。13～16・21 は丸みを帯びながら収める脚部を呈する一群である。21 は杯部の一部を欠損するが、それ以外は口径 10.3～10.7cm、器高 9.5～10.1cm を測る。17～20 は脚部が外方へ屈曲して段を造り、内傾気味に端部に至る一群である。この一群の脚部には縦方向に刻まれた 1 条の縦線が認められる。線刻は一方の透孔に対面する位置付近に刻まれていることから、透孔の位置を設定する際の割り付け線の可能性が考えられるが詳細は不明である。20 のみ脚部中程に幅 1.3cm ほどのカキメを施す。口径 9.5～10.4cm、器高 8.7 もしくは 9.4cm を測る。22 は甕である。口縁部は欠損しており、頸部から肩部にかけては自然釉がかかる。体部上半には穿孔と、2 条の沈線による区画内に列点文を施す。穿孔部直下にはヘラにより 1 条の縦線が施される。有蓋高杯と同様に穿孔位置の割り付けを表すものであろうか。

埴輪は X = -128,818 周辺から集中して出土した。そのうち 3 点を図示した。23 は円筒埴輪の口縁部である。端部は強いナデにより、中央がやや窪む面をつくる。外面は摩滅が著しく不明瞭であるが、1 次調整と考えられるナメハケが認められる。内面は摩滅や剥離のため調整は不明である。外面の色調はにぶい黄橙色を呈し、焼成はやや軟質である。24・25 は朝顔形埴輪である。24 はわずかに内湾するが、ほぼ直線を呈する肩部から頸部を経て、内湾気味に延びる 1 次口縁からわずかに外反する 2 次

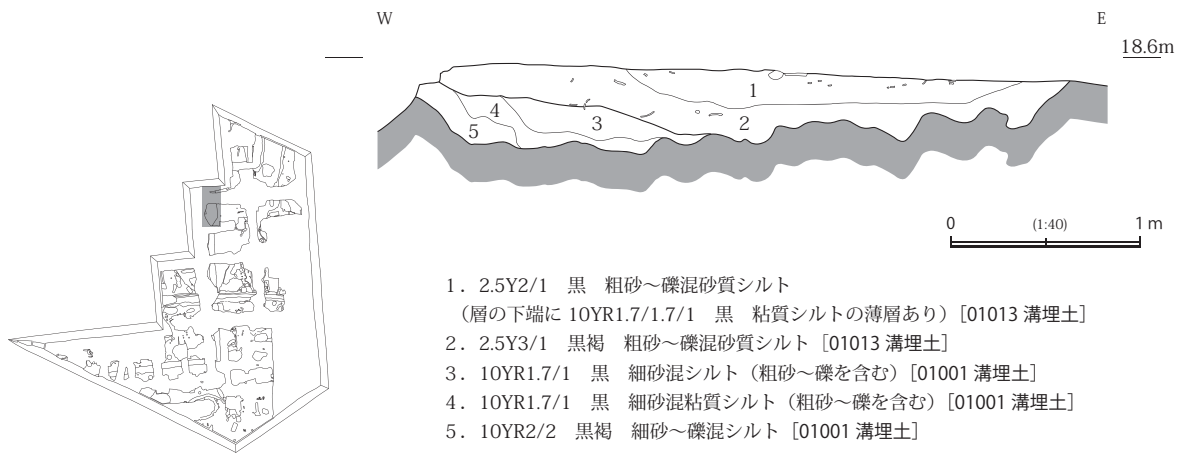


図12 01013 溝 [13号墳] 平・断面

口縁へと続く器形を呈する。頸部突帯は断面三角形、口縁部中位突帯および体部の突帯は三角形に近い台形を呈する。外面調整は、口縁部から体部のいずれも1次調整のタテハケの後2次調整のヨコハケを施す。内面は口縁部にはナナメハケ、肩から体部にかけてはユビナデを施す。各部位の法量は、2次口縁部径41.2cm、1次口縁部径27.7cm、頸部径17.2cmを測る。頸部外反角度は50°を示す。25も器形は24とほぼ同一であるが、口縁端部は24よりも若干強く外反する。突帯の形状は24と同一である。外面調整は、肩部のヨコハケが部分的であり、24に比してやや粗雑な印象を受ける。2次口縁部は摩滅のため調整は不明である。内面は口縁部にはナナメハケ、肩部にはユビナデを施す。体部は摩滅のため不明である。法量は2次口縁部径41.1cm、1次口縁部径25.7cm、頸部径14.7cmを測る。頸部外反角度

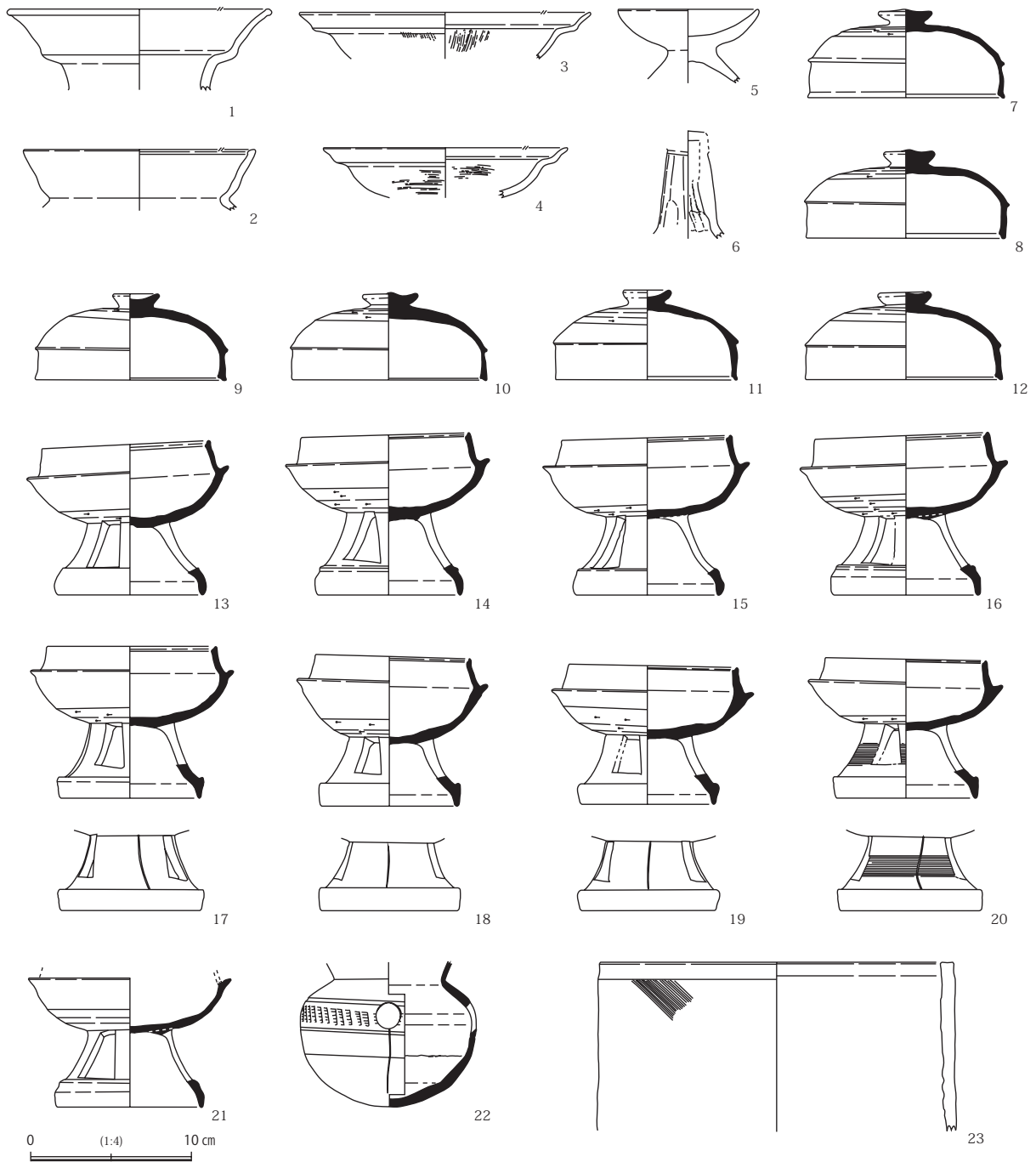
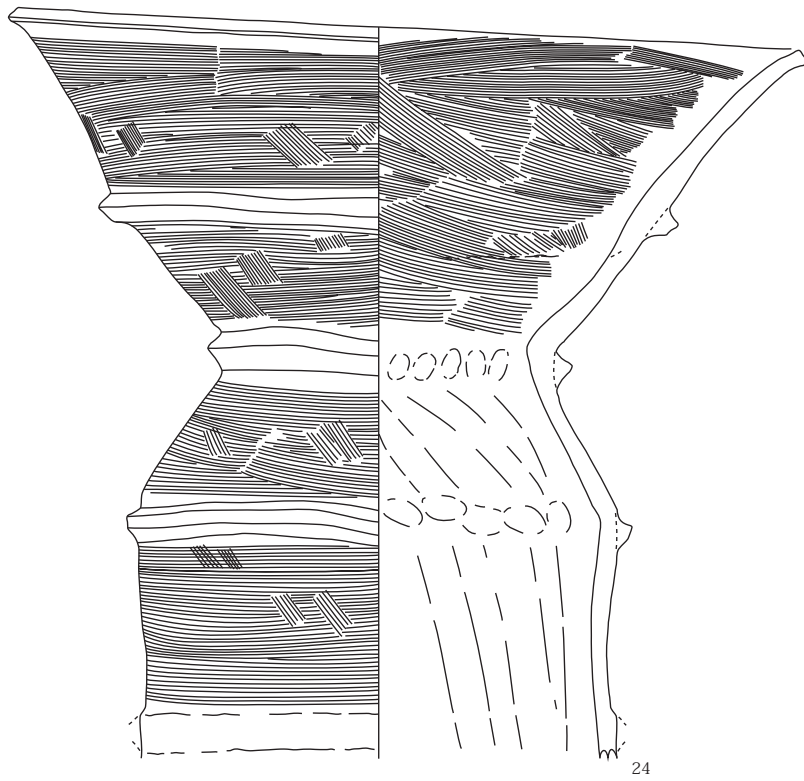
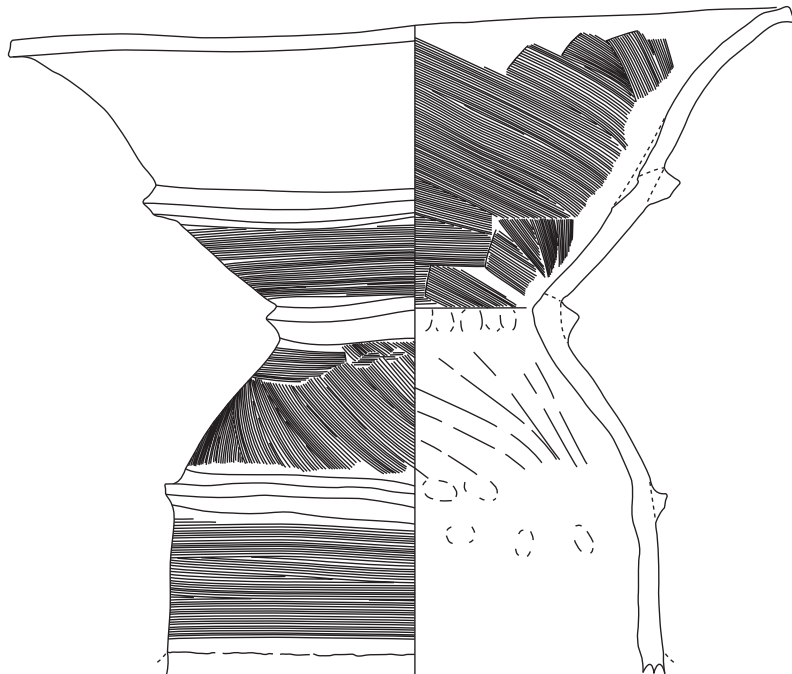


図13 01013 溝 [13号墳] 出土遺物 (1)



24



25

0 (1:4) 10 cm

图 14 01013 沟 [13 号填] 出土遗物 (2)

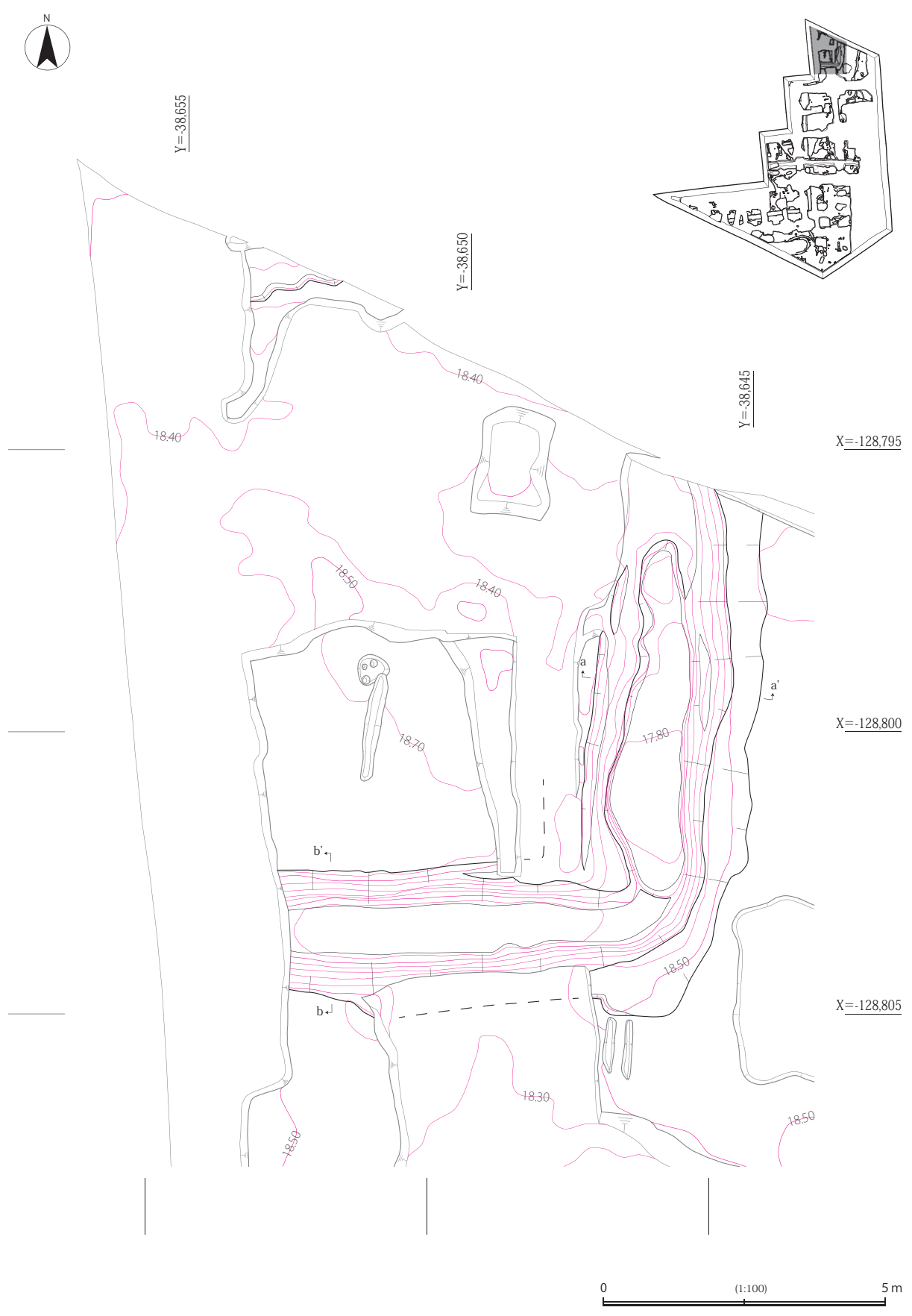


图 15 01014 沟 [9号填] 平面

は 48°を示す。外面の色調は、24 が灰黄色、25 が浅黄色を呈し、焼成はいずれもやや軟質である。

以上の遺物のうち須恵器は TK23・47 型式に比定されることから、13 号墳は古墳時代中期後葉に築造されたと考えられる。

01014 溝 [9号墳] (図 11・15～30、図版 4・5・30～42)

01013 溝の北、調査区北端部において検出した方墳の周溝である。大きく攪乱を受けているものの、古墳南・東辺の周溝と調査区北端際において辛うじて北辺の周溝を検出することができた。検出された位置から、北周溝および南周溝が OT08 - 2 調査の F 区において検出された F S D - 2 に連続すると考えられることから 9 号墳とした。墳丘ならびに埋葬施設は攪乱を受け残存していなかった。また、溝の肩口も削平を受けて残存していない地点があったが、01013 溝に比べると残存状況は良好であり、南周溝の幅は 2.17～2.57 m、深さは 0.82 m、東周溝の幅は 2.40～2.98 m、深さは 0.85 m を測る。また、検出しえた限りにおいては、北周溝と南周溝の墳丘側法肩の距離、すなわち墳丘裾の距離は 10.40 m を測る。

埋土は南周溝と東周溝において、若干様相が異なる。埋土 1～4 層は土質に差はあるが、いずれも第 4 層に由来すると考えられることから、窪みとして残存していた周溝が第 4 層堆積過程において完全に埋没したものと推測される。5～7 層には土器や埴輪が多く含まれており、墳丘からの崩落土や周囲からの流入土などと推測される。8～10 層は南周溝のみに認められるもので、古墳築造後初期の堆積土と考えられる。土質および色調からいずれも第 5・6 層に由来すると考えられる。

出土した遺物については SfM により出土状況図を作成するとともに、トータルステーションを用いて、可能な限り出土地点を記録した。出土状況図ならびに出土地点の記録は 1～3 層包含遺物および 5～7 層包含遺物に分けて作成した。1～3 層包含遺物は南周溝西半部墳丘側において集中部が認められる。一方、東周溝では墳丘側だけでなく周溝東肩付近にも認められるなど、散在的に遺物が出土している状況が窺えた。5～7 層包含遺物は南周溝西半部墳丘側に加え、東周溝においても墳丘側に遺物がまとまる状況が 2 箇所において確認できた。なお、5～7 層出土遺物の取り上げにおいては、特に遺物が

01014 溝 (9号墳)

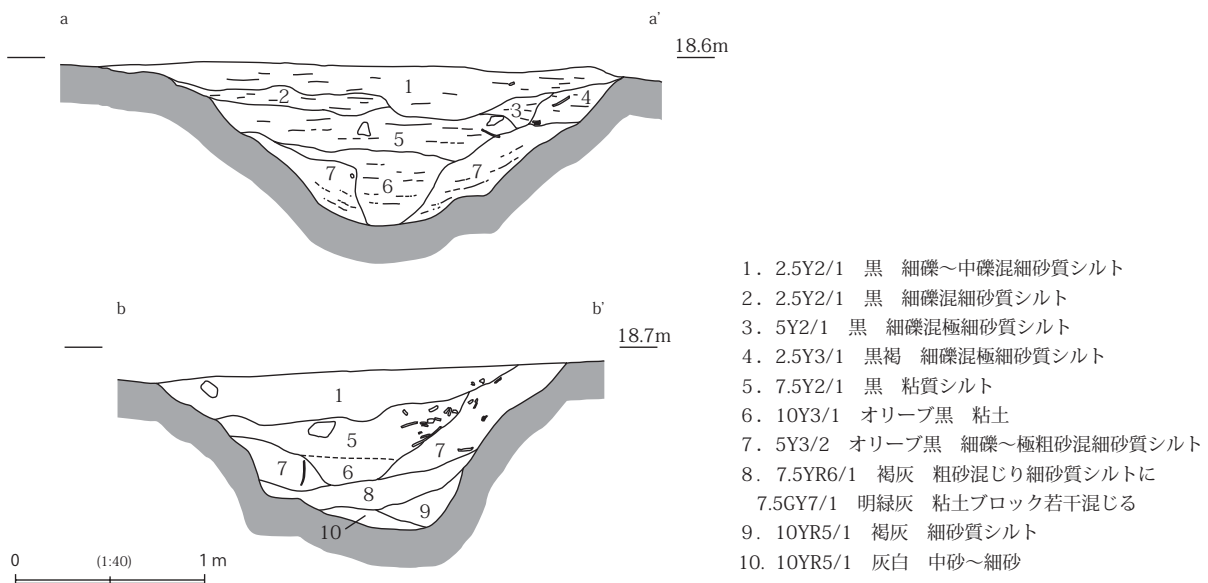


図 16 01014 溝 [9号墳] 平面

集中し、個体で取り上げることが困難な場合には任意により範囲を設定し、ブロックとして取り上げている（図 20 - A ~ G）。また、当調査区の調査を終了する直前に、南周溝の西端部から 0.5 m ほどの範囲において、攪乱が周溝の底付近までおよぼず、部分的ではあるが破壊されずに遺存していることが判明した。このため、当該範囲のみ改めて掘削を行い、遺物を収集したが、時間の制約から出土地点を記録することはできず、一括して取り上げている（図 20 - H）。東と南の各周溝に設定した土層観察用ベルトに含まれる遺物についても、可能な限り層位については記録したが、詳細な出土地点は記録していない。

また、周溝からは土器や埴輪とともに拳大から人頭大の礫が多量に出土した。墳丘の葺石が転落・流入した可能性を考慮し、凶化するとともに位置情報を取得したうえで取り上げたが、肉眼観察の限りにおいてはこれらの礫はいずれも第 6 層中に含まれる礫と同質であり、葺石と断定するには至らなかった。あるいは、後世の開発において露頭した礫が窪地として残っていた周溝に廃棄された可能性もある。

遺物は土器や埴輪、石製品が出土しており、このうち 86 点を図示した。

26 ~ 28 は土師器甕である。26 は東周溝北端部の 5 層より出土した。口縁部から体部にかけて残存し、頸部径 16.8cm を測る。頸部の屈曲は緩やかで、口縁部は肥厚し、内傾しながら端部へと至る。体部外面はタテハケ、内面はナデが施され、口縁端部はつまみながらナデられる。27 は長胴甕である。南周溝東角付近の 3 箇所から出土した破片が接合された。溝底付近からの出土であり、比較的早い時点で投棄されたと考えられる。頸部径 17.0cm を測り、体部外面には煤が付着する。調整は、体部外面はタテハケを基調とし、肩部にはヨコハケを施す。口縁部はヨコナデで仕上げる。内面は口縁部下半はヨコハケ、頸部から体部上半にタテハケを施す。28 はほぼ完形を保つ長胴甕である。27 が出土した 3 箇所の中の西端部の地点より出土しており、出土層位も同じくすることから、同時期に使用され、廃棄に至った可能性が高いと考えられる。体部の中央よりやや上方に最大径をもち、全面的に煤が付着する。頸部径は 15.7cm を測り、強くナデることにより稜を作り出す。口縁部は肥厚し、内湾しながら端部へ至る。口縁端部は丸くおさめる。外面調整は全面にハケを施す。タテハケを基調とするが、部分的に不規則な方向に施されたハケが認められる。内面調整は、口縁部にヨコハケ、体部上半はタテハケ、下半はハケの後ケズリを施している。

29 ~ 32 は須恵器である。29 は杯蓋である。東周溝に設定した土層断面観察用ベルト（以下、便宜的に「東周溝畦」とする）以北の出土であるが、詳細な出土地点を押さえることはできなかった。天井部は丸く、復元された口径は 13.2cm を測る。30 は杯身である。東周溝北端の 5 層より出土した。口径 10.3cm、受部径 12.3cm を測る。受部には別個体の須恵器片が溶着し、かえりの内面には粘土片の付着が認められる。31 は甗である。30 の南側近接地点において 5・6 層を掘削中に出土した。口縁部および頸部にはそれぞれ 1 条の波状文が施される。頸部の波状文は工具のあたりが弱く、線状になる箇所が認められる。体部中央には段と沈線による区画が 1 条あり、その間に穿孔と列点文が施される。穿孔直下には剥離痕跡が認められる。総じて丁寧な作りである。32 は甕である。南周溝に設定した断面観察用ベルト（以下、「南周溝畦」とする）のすぐ東側において 7 層掘削中に出土した。外面は格子目タタキ、内面は同心円状の当具痕が残る。外面のタタキ目は部分的にナデ消されている。外面肩から胴部にかけて自然釉がかかり、底部付近には別個体の破片が溶着する。破片には粘土塊の付着が認められる。

埴輪は円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪が出土した。

33 ~ 93 は円筒埴輪である。33・34・36 は底部から口縁部まで残存する資料である。33 はブロッ



图 17 01014 溝 [9号墳] 埋土1~3層包含遺物 出土状況



图 18 O1014 溝 [9号墳] 埋土5~7層包含遺物 出土状況

クAにおいて口縁部を周溝側に向けて倒れた状態で出土した。すぐ南の地点からは接合する破片が出土しており、直近の墳丘上から転落した可能性が高い。出土層位からは7層の堆積過程において転落したと考えられ、墳丘へ樹立された後、比較的早い段階で転落したものと考えられる。34はブロックDの3～5層にかけて含まれていた。36はブロックEの6・7層より出土した。これら3点の埴輪はいずれも3条4段構成で、底部から口縁部に向けて外方へ開きながら立ち上がる器形を呈し、2段目には相対する2箇所円形透孔が穿たれる。口縁端部は33が水平、34・36がやや外傾する。突帯の断面形状は、33・34がほぼ三角形、36が突出度の低い台形を呈する。器高は33が42.7cm、34が41.9cm、36が45.1cmを測る。基底部高、2段目および3段目の突帯間隔、口縁部高は33が10.5cm、9.3cm、9.9cm、13.0cm、34が9.4cm、9.9cm、9.3cm、13.3cm、36が10.6cm、10.4cm、10.7cm、13.4cmを測る。外面調整は、33と34は1次調整のタテ・ナナメハケを施す。36は1次調整のタテ・ナナメハケの後、部分的にはあるがヨコハケが認められる。工具のあたりが弱かったのであろうか。内面調整は、33は縦方向のコビナデの後、口縁部のみヨコハケを施す。なお、突帯貼付部の内面は丁寧なヨコナデが施される。34は基底部から3段目にかけては縦方向のコビナデ、口縁部は板状工具による縦方向のナデの後、ヨコハケを施す。突帯貼付部の内面はコビオサエの後、丁寧なヨコナデが施される。外面色調は33・36が黄橙色、34が灰黄褐色を呈し、焼成はいずれもやや軟質で、いずれの資料にも黒斑が認められる。

35はブロックD～Fより出土した破片からなる資料である。基底部を欠損するが、残存状況から本来は3条4段構成であったと思われる。基底部から2段目にかけて大きく開き、その後、口縁部へやや開き気味に立ち上がる器形を呈していたと考えられる。2段目には円形透孔を穿つ。口縁端部はわずかに外傾し、中央が凹む。突帯の断面形状は三角形を呈する。2段目および3段目の突帯間隔、口縁部高は、

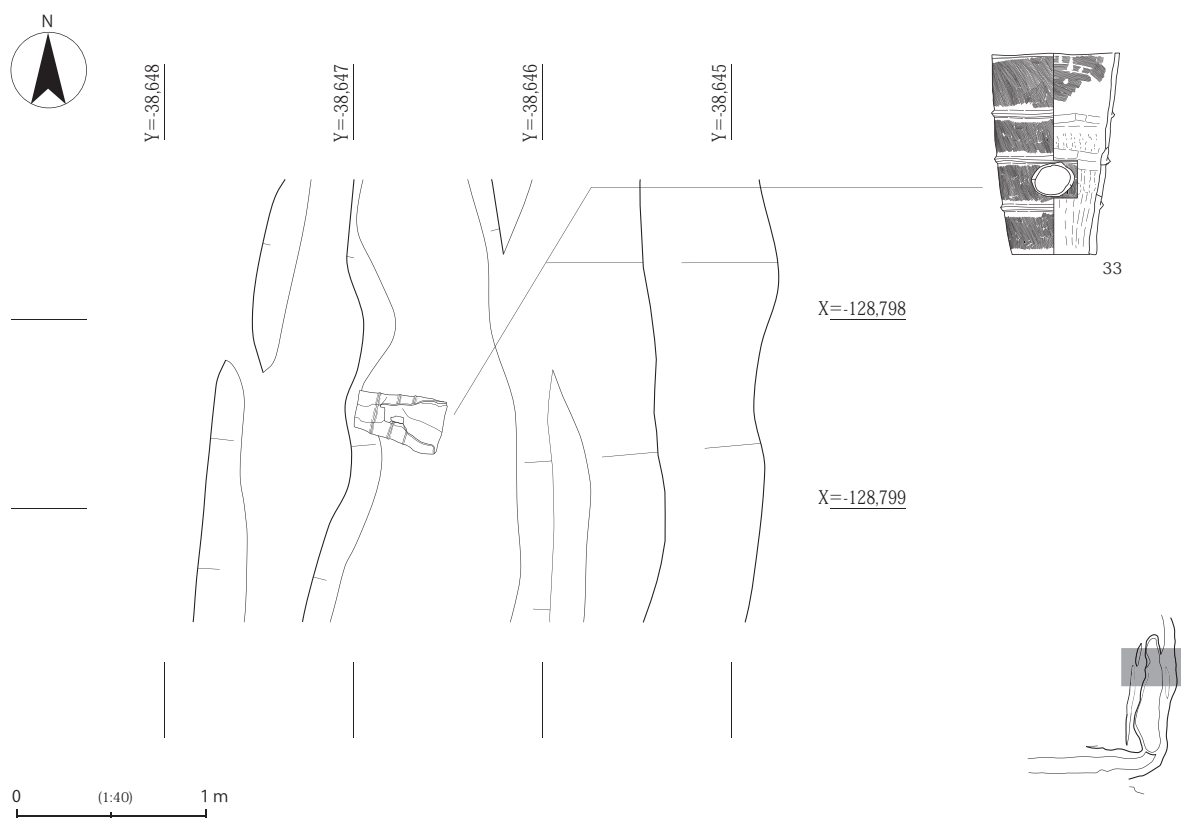


図 19 01014 溝 [9号墳] 円筒埴輪 (33) 出土状況

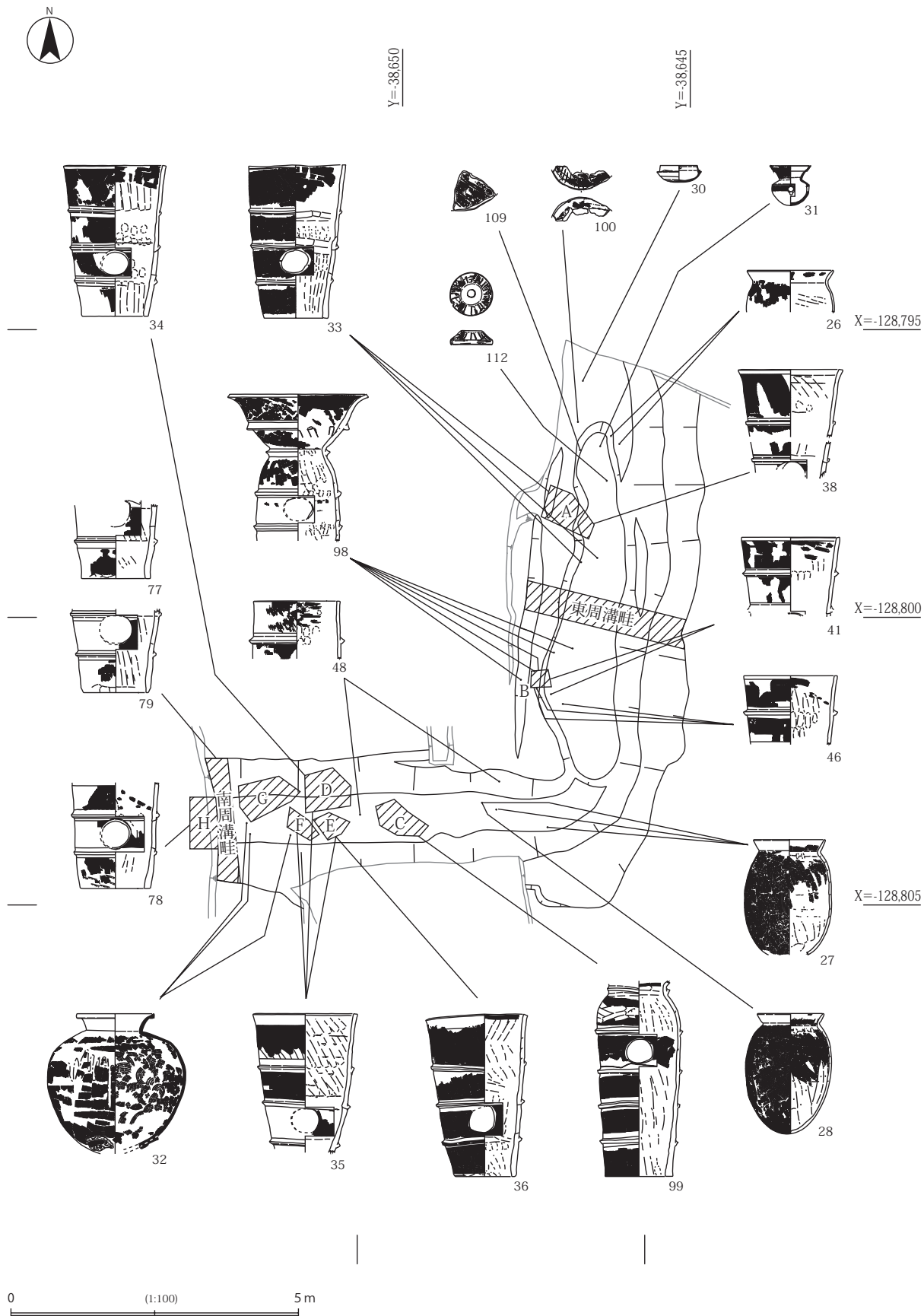
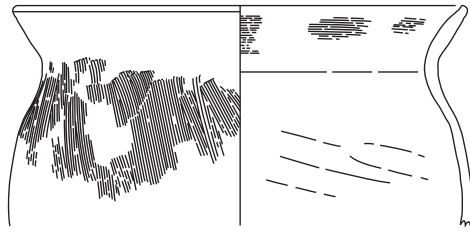
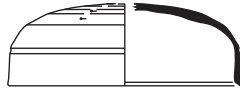


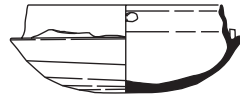
图 20 01014 溝 [9号填] 出土遺物分布



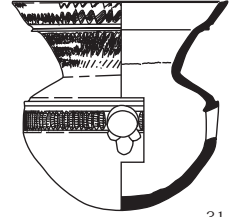
26



29



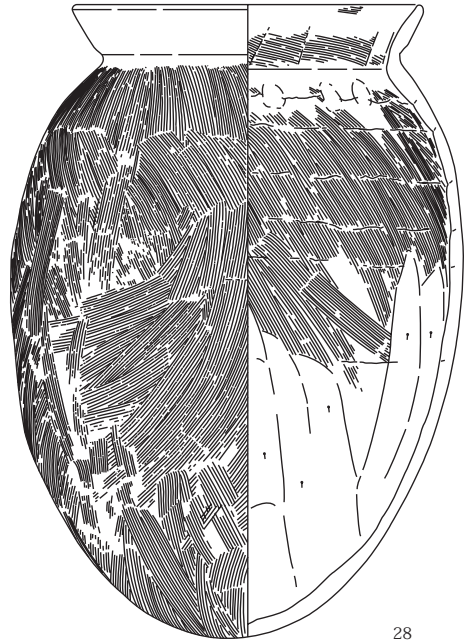
30



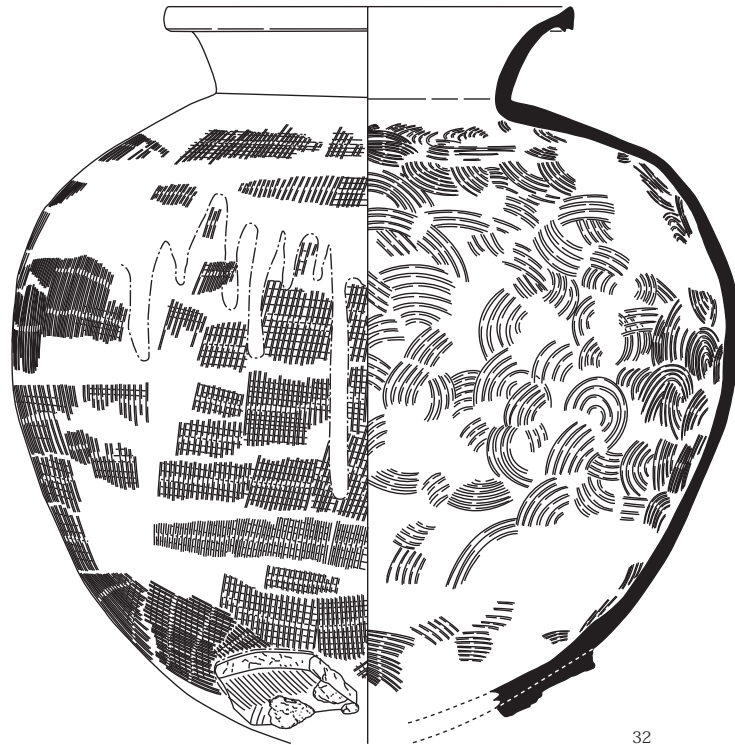
31



27



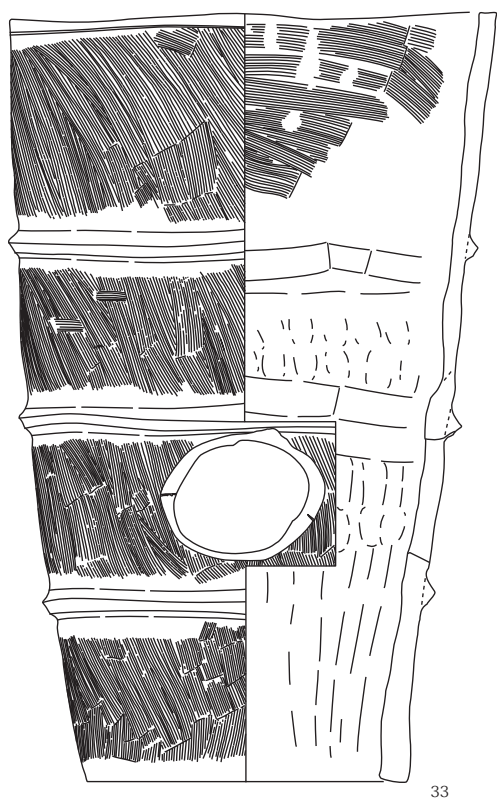
28



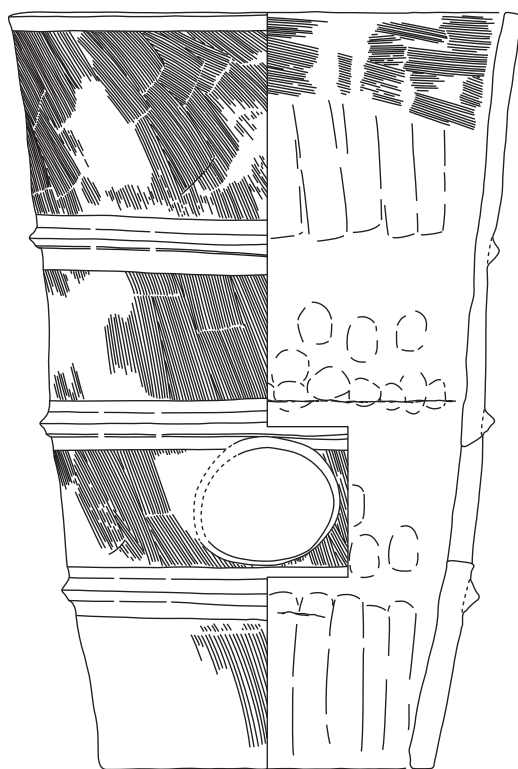
32

0 (1:4) 10 cm

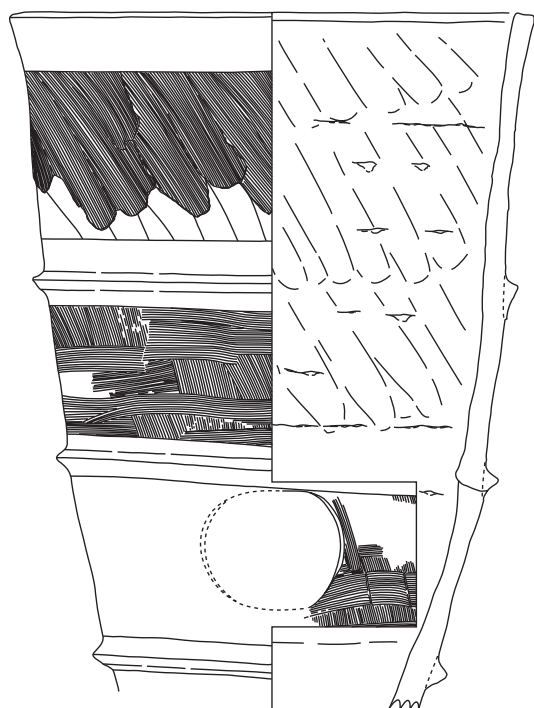
图 21 01014 溝 [9号墳] 出土遺物 (1)



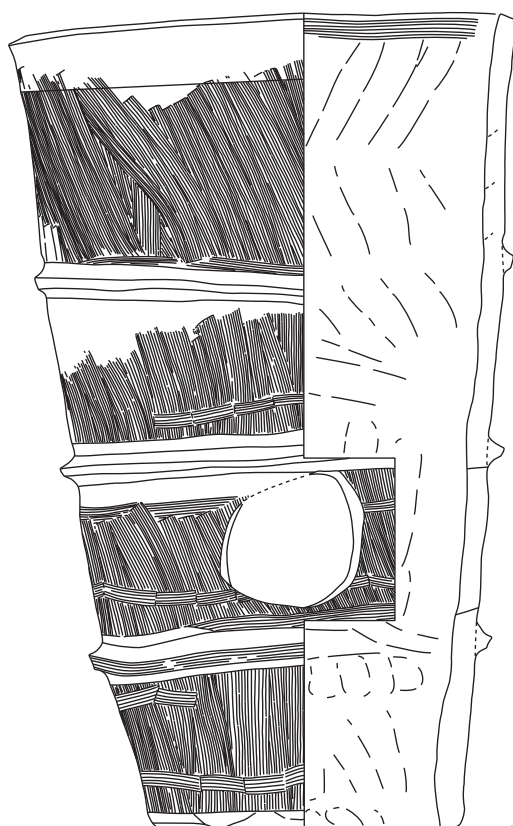
33



34



35



36

0 (1:4) 10 cm

图 22 01014 溝 [9号填] 出土遺物 (2)

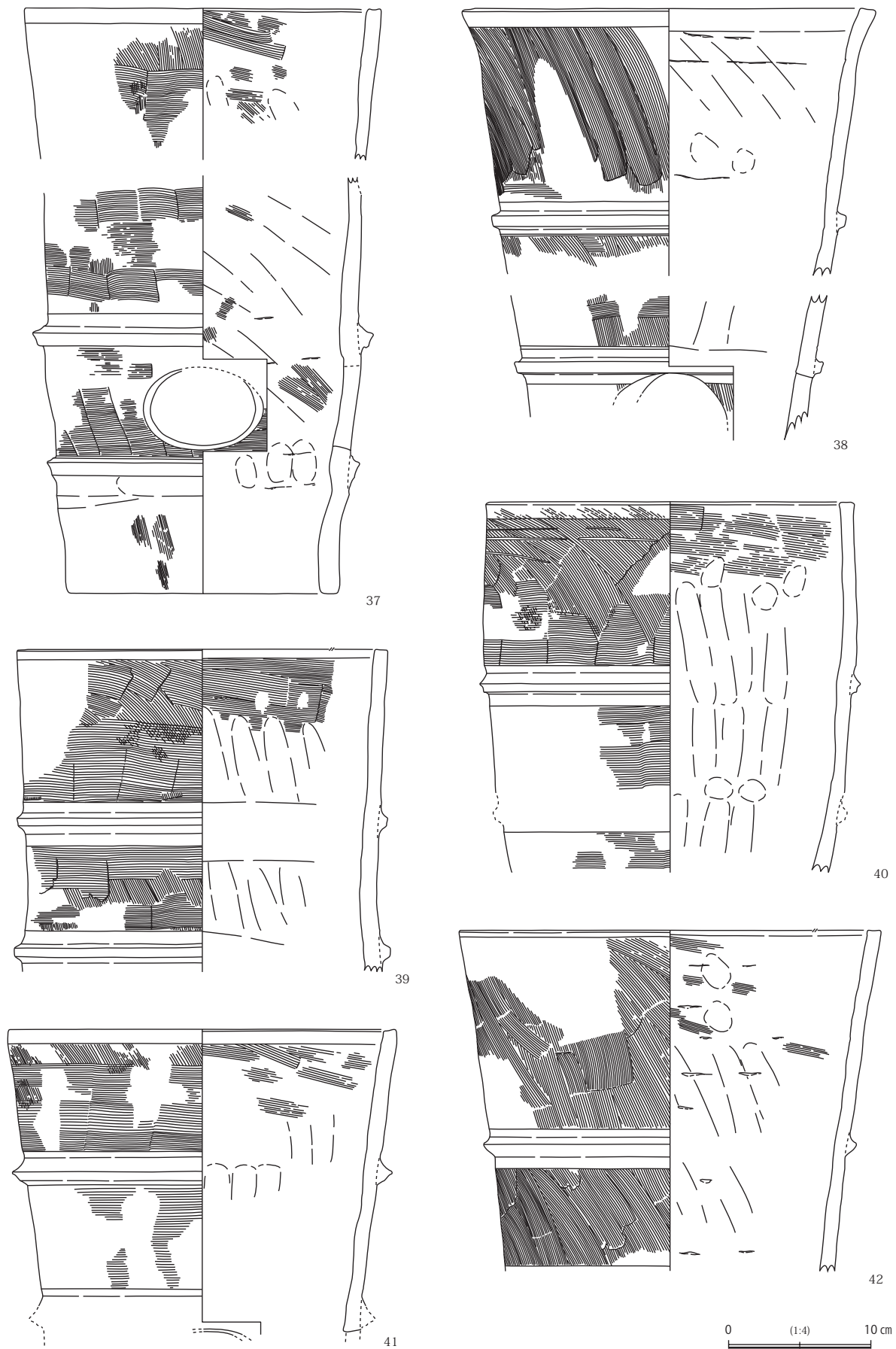


图 23 01014 沟 [9号填] 出土遗物 (3)

10.8cm、10.6cm、15.2cmを測る。外面調整は2段目と3段目はタテハケの後ヨコハケ、口縁部はナナメハケを施すが途中で止まっており、下方は板状工具によるナデが残る。また、口縁端部はナデによりハケを消している。内面調整は斜めもしくは縦方向のコビナデを施す。外面色調は灰黄褐色を呈する。焼成は硬質で、部分的に黒斑が認められる。37は南周溝畦を掘削している際に5～7層より出土した。接点がないため完全には復元できなかったが、基底部から3段目にかけて残存する破片と、同一個体と考えられる口縁部片が出土しており、透孔の位置などから3条4段構成であったと考えられることから、図ではおおよその位置に口縁部を示している。口縁端部は水平で、中央がわずかに凹む。突帯の断面形状は1条目は扁平度が強い三角形、2条目は扁平な台形を呈する。基底部高は9.2cm、2段目の突帯間隔は9.1cmを測る。外面調整は、基底部は摩滅が著しく確実ではないが1次調整のタテハケのみ、2段目および3段目はタテハケの後ヨコハケ、口縁部もタテハケの後ヨコハケを施すが、端部はナデ消される。また、端部直下にはヨコハケが施されておらず、タテハケが残る。内面調整は、口縁端部はナナメハケ、それ以外はナデであるが、部分的にヨコ・ナナメハケが認められる。外面色調はにぶい橙色を呈し、焼成はやや軟質である。38はブロックAにおける2・5層より出土した。3条4段構成と推察される円筒埴輪の2段目から3段目および3段目から口縁部にかけての破片で、同一個体と考えられるが接点が認められなかったことから、図ではおおよその位置を推定して表している。内湾気味に立ち上がり、外反する口縁部に至る器形を呈する。2段目には円形透孔が認められ、口縁端部はわずかに内傾し、中央が凹む。突帯の断面形状は台形を呈する。外面調整は、3段目がタテハケの後ヨコハケ、口縁部がナナメハケであり、口縁端部から1.2cmほどはナデ消される。口縁部のナナメハケは単位の痕跡が強く残る。3段目のヨコハケは、工具の当たりが弱かったのであろうか、部分的にしか認められない。内面調整は縦もしくは斜め方向のナデが施される。口縁部高は14.4cmを測る。3段目の突帯間隔は10cm前後と推測される。外面色調は灰黄褐色を呈し、焼成は硬質である。

39～41は上位2段の高さが窺える資料である。39は34・37と同じくブロックDの5～7層から出土した。口縁部高11.8cm、突帯間隔9.0cmを測る。外面調整はタテハケの後ヨコハケを施すが、口縁部のヨコハケは全面にはおよばない。内面調整は口縁部上半にヨコハケを施した後、縦方向のナデおよびコビオサエを施している。口縁端部は内外面いずれもヨコナデ整形により調整を消す。外面色調は黄色を呈し、焼成はやや軟質である。40は東周溝畦掘削中に5～7層より出土した。口縁部高は12.7cmを測る。突帯間隔は下位の突帯が剥離しているため痕跡からの推測となるが9.0cm前後と思われる。外面調整は39と同様にタテハケの後ヨコハケを施すが、口縁部のヨコハケは全面にはおよばない。内面調整は口縁部上半にヨコハケを施した後、縦方向のナデおよびコビオサエを施している。外面口縁端部のヨコナデ整形により調整が消されている。突帯下端の貼り付けは断続的で粗く、部分的にヨコハケを施した際に工具が当たった痕跡が認められる。また、口縁端部外面には横位に3条ほど引っ掻いたような痕跡が認められた。意図的に付けられた可能性も考えられるが、長さや本数にばらつきが認められることから、端部整形の際に付いた傷である可能性もある。外面色調は黄橙色を呈し、焼成はやや軟質である。41はブロックBにおいて5～7層を掘削中に出土した。外方へ開く器形を呈し、口縁端部はわずかに内傾する。口縁部高は9.9cmを測る。突帯間隔は40と同様に推定となるが9.3cm前後と考えられる。最下部には透孔の上端が辛うじて残存しており、形状から円形透孔であったと推測される。外面には赤彩が認められる。外面調整はいずれもタテハケの後ヨコハケを施すが、口縁部のヨコハケは全面にはおよばない。内面調整は口縁部上半にヨコハケを施した後、縦方向のナデおよびコビオサエを施し

ている。口縁端部は内外面のヨコナデ整形により調整が消されている。外面色調は黄橙色を呈し、焼成はやや軟質である。

42～53は口縁部高が判明する資料である。42は34・35と同じブロックDから出土した。外方へ開き気味に立ち上がる器形を呈し、口縁端部は水平である。突帯の断面形状は三角形に近い扁平な台形である。口縁部高は15.0cmを測る。外面調整はナナメハケ、内面調整はナデの後にヨコハケを施す。外面色調および焼成は橙系でやや軟質である。43はブロックGより出土した。外方へ開き気味に立ち上がり、口縁端部は外傾する。突帯の断面形状は扁平な台形で、口縁部高は13.0cmを測る。外面全体および口縁部内面の一部には赤彩が残る。外面調整はタテもしくはナナメハケの後ヨコハケを施し、口縁端部をナデ消している。しかしながら、口縁端部はナデが弱かったのであろうか、完全にハケを消すことはできていない。内面調整はナデを施す。外面色調は灰黄色を呈し、焼成は硬質であるが、突帯周辺に黒斑が認められる。44はブロックCより出土した。器形はやや内湾気味に立ち上がり、水平な口縁端部へ至る。口縁部高は12.7cmを測る。突帯の断面形状は端面が凹む扁平な台形を呈する。外面には赤彩が残る。外面色調は橙系を呈する。焼成はやや軟質で、黒斑が認められる。45は東周溝畦掘削中に5層から出土した。やや内湾気味に立ち上がる器形を呈し、口縁端部は水平である。口縁部高は13.4cmを測る。突帯の断面形状は端面が凹む扁平な台形を呈する。外面には赤彩が残る。外面色調は橙系で、焼成はやや軟質である。46はブロックBより出土した。外方へ開き気味に立ち上がる器形を呈し、口縁端部は水平である。突帯の断面形状は扁平な台形である。口縁部高は10.0cmを測る。外面調整はタテもしくはナナメハケの後ヨコハケを施した後、口縁端部をナデ消している。内面調整はナデの後にヨコハケを施す。外面色調および焼成は橙系でやや軟質である。47はブロックGより出土した。口縁部が直立する器形を呈する。口縁端部はほぼ平坦であるが、内面側がわずかに上方へ突出する。突帯の断面形状は三角形で、口縁部高は13.9cmを測る。外面調整はナナメハケ、内面調整はナデの後、口縁端部のみヨコハケを施す。外面色調は橙系を呈し、焼成はやや軟質である。48は周溝南東角付近の複数地点から出土した破片からなる資料である。やや内湾気味に立ち上がる器形で、口縁端部は水平である。突帯の断面形状は、下端にわずかながら稜が認められるがほぼ三角形を呈し、口縁部高は9.9cmを測る。外面には赤彩が残り、口縁部外面には横2条、縦1条からなるヘラ記号が施される。外面色調は橙系で、焼成はやや軟質である。49は南周溝畦を掘削中に5～7層より出土した。外方へ開き気味に立ち上がる器形を呈する。口縁端部は中央が凹み、突帯の断面形状は扁平な台形を呈する。口縁部高は12.6cmを測る。外面調整は、外面調整はタテもしくはナナメハケの後ヨコハケを施した後、口縁端部をナデ消す。内面調整はナデの後にヨコハケを施す。外面色調は橙系を呈し、焼成はやや軟質である。50はブロックCの5・6層より出土した。口縁部が直立する器形を呈し、口縁端部は水平である。口縁部高は12.2cmを測る。突帯の断面形状は、下端にわずかに稜をもつが三角形に近い形状を呈する。外面には赤彩が残る。外面色調は橙系を呈し、焼成はやや軟質である。51は南周溝畦を掘削中に5～7層より出土した。外方へ開き気味に立ち上がる器形を呈する。口縁端部は水平で、突帯の断面形状は扁平な台形である。口縁部高は12.4cmを測る。外面調整はタテもしくはナナメハケの後ヨコハケを施した後、口縁端部をナデ消す。内面調整はナデの後にヨコハケを施す。外面色調は橙系を呈し、焼成はやや軟質である。52も49・51と同様に南周溝畦の5～7層を掘削中に出土した。口縁部は直立し、口縁端部外面側がわずかに上方へ突出する器形を呈する。突帯の断面形状は扁平な台形である。口縁部高は13.4cmを測る。外面調整は、口縁部にはナナメハケ、その下位段にはタテハケの後ヨコハケを施

している。口縁部のナナメハケは 38 と同様に単位の痕跡が明瞭に認められる。内面調整は斜め方向のナデを施す。外面色調および焼成はそれ以外は橙系でやや軟質である。53 はブロック H より出土した。外方へ緩やかに開きながら立ち上がる器形を呈する。口縁端部は水平で中央が凹み、突帯の断面形状は三角形を呈する。口縁部高は 11.3cm を測る。外面全体に赤彩が残る。外面調整はナナメハケの後ヨコハケを施し、口縁端部をナデ消す。口縁部の内面調整はナナメハケを施した後、口縁端部をナデ消しており、それ以外はナデおよびユビオサエを施す。口縁端部はナデにより外面はわずかに内湾し、内面には段が形成される。外面色調は黄橙系を呈し、焼成はやや軟質である。

54 ～ 59 は口縁部径を復元しえた資料である。54 は東周溝畦掘削中に 5 ～ 7 層より出土した。口縁部が直立する器形を呈し、口縁端部内面側がわずかに上方へ突出する。外面に赤彩が認められる。外面調整はナナメハケの後、下半部にヨコハケを施す。内面調整は摩滅や剥離のため不明瞭であるが、部分的にヨコハケが残る。口縁端部は内外面ともナデ消しているが、外面はナデが弱く、部分的にハケが残る。外面色調は橙系であり、焼成はやや軟質である。55 はブロック E より出土した。口縁部が直立する器形を呈し、口縁端部はわずかに外傾する。外面に赤彩が認められる。外面調整はナナメハケの後、下半部にヨコハケ、内面調整は縦方向のナデの後、上部にナナメハケを施し、内外面いずれも口縁端部をナデ消す。外面色調は橙系で、焼成はやや軟質である。56 は 33 と同地点となるブロック A より出土した。わずかに外方へ開く器形を呈し、口縁端部は水平である。外面調整はナナメハケの後ヨコハケ、内面調整はヨコ・ナナメハケを施し、内外面いずれも口縁端部をナデ消す。外面色調は橙系を呈し、焼成はやや軟質である。57 もブロック A より出土である。わずかに外方へ開く器形を呈し、口縁端部は中央が凹む。外面調整は 56 と同様にナナメハケの後ヨコハケ施した後、口縁端部をナデ消すが、56 に比してより端部近くまでヨコハケが施されている。内面調整は摩滅のため確実ではないが、56 と同様の調整と思われる。外面色調は橙系を呈し、焼成はやや軟質である。58 はブロック G より出土した。大きく外方へ開く器形を呈し、口縁端部は水平である。外面調整はナナメハケの後、口縁端部をナデ消す。内面調整は摩滅のため不明瞭であるが、ヨコハケがわずかに残る。外面色調は褐色を呈し、焼成はやや軟質である。59 も 58 と同様にブロック G より出土した。口縁部は外反し、口縁端部は外傾する器形を呈する。外面調整はナナメハケを施した後、口縁端部をナデ消すが、他の多くがヨコナデであるのに対し、ハケと同方向のナデを加えている点が異なる。内面調整は不定方向のナデを施すが粗雑であり、粘土の積み上げ痕が残る。外面色調は黄褐を呈し、焼成はやや軟質である。

60 ～ 69 は体部片である。60 ～ 63 は透孔が残存する個体である。いずれも部分的な残存であるが、円形の透孔と考えられる。60 は南周溝畦の 5 ～ 7 層より出土した。基底部から 2 段目にかけて残存し、外方へ開く器形を呈していたと思われる。突帯の断面形状は扁平な台形を呈する。外面調整は基底部が 1 次調整のタテハケのみに対し 2 段目はタテハケの後ヨコハケを施す。内面調整は縦方向のナデである。61・62 は透孔とその上位段が残存する。他との比較からいずれも 2 段目から 3 段目にあたると思われる。61 はブロック D、62 は南東角付近、X = -128,802.8、Y = -38,648.0 地点の 5 ～ 7 層掘削中に出土した。突帯の断面形状は 61 が扁平な台形、62 が三角形を呈する。どちらの個体にも外面に赤彩が認められる。外面および内面調整は 61・62 とともに共通し、外面調整がいずれの段もタテハケの後ヨコハケ、内面調整が縦方向のナデである。外面色調は 61 が黄橙色、62 が褐色を呈し、焼成はいずれもやや軟質である。63 はブロック D の 5 ～ 7 層より出土した。透孔とその下位段が残存しており、基底部から 2 段目にあると推察される。外方へ開く器形と推察され、突帯の断面形状は三角形を呈する。

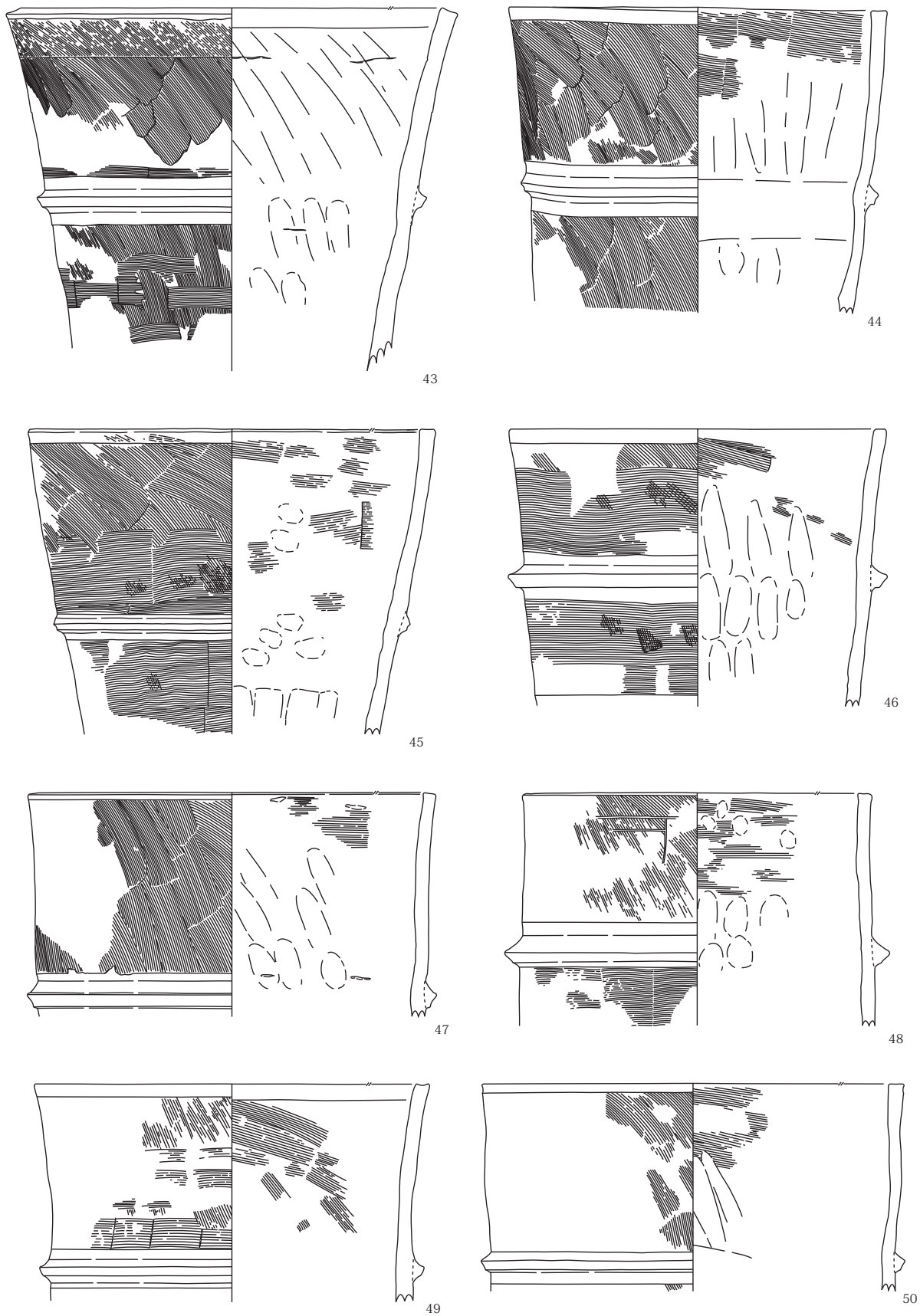


图 24 01014 沟 [9号填] 出土遗物 (4)

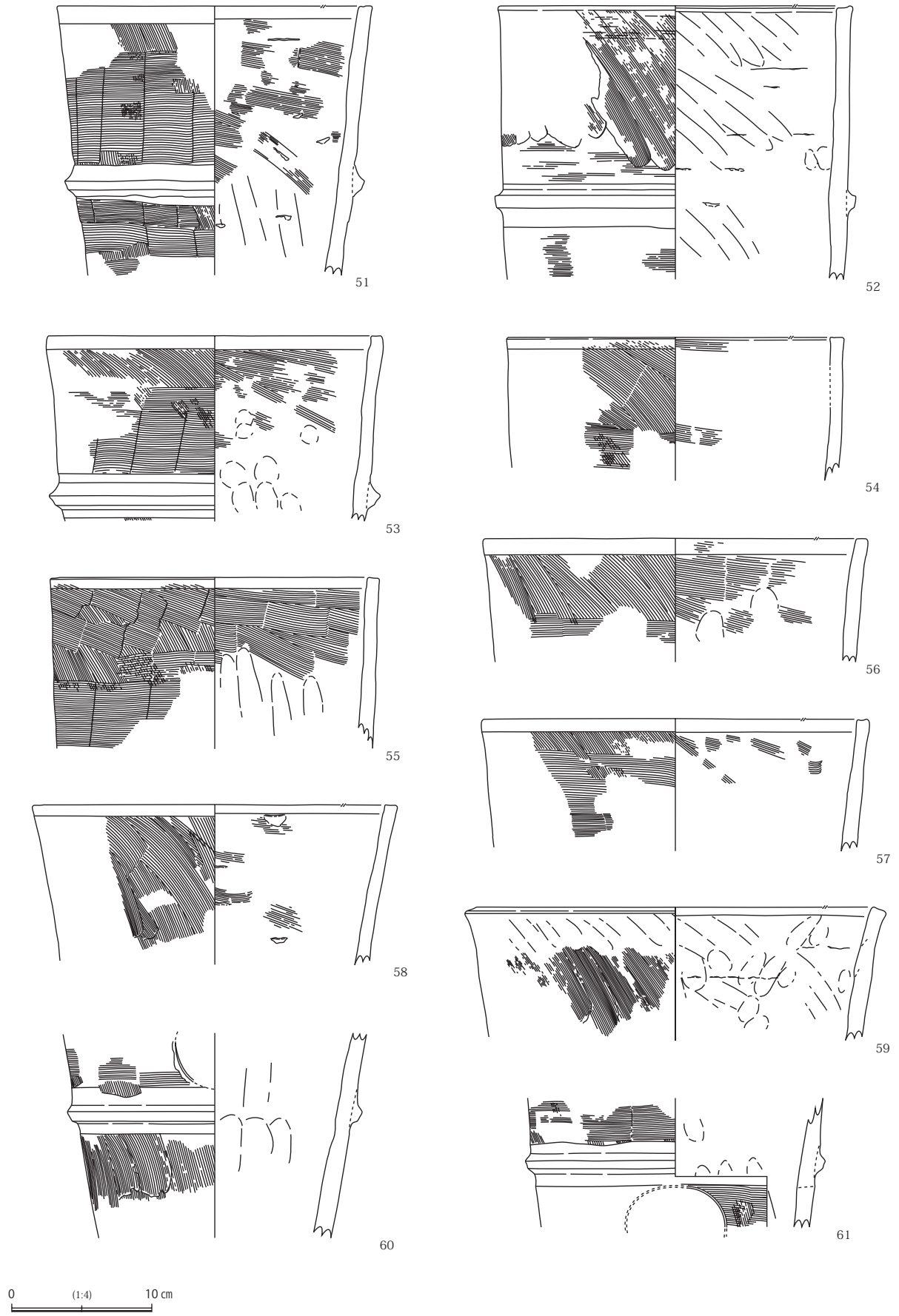


图 25 01014 溝 [9号填] 出土遺物 (5)

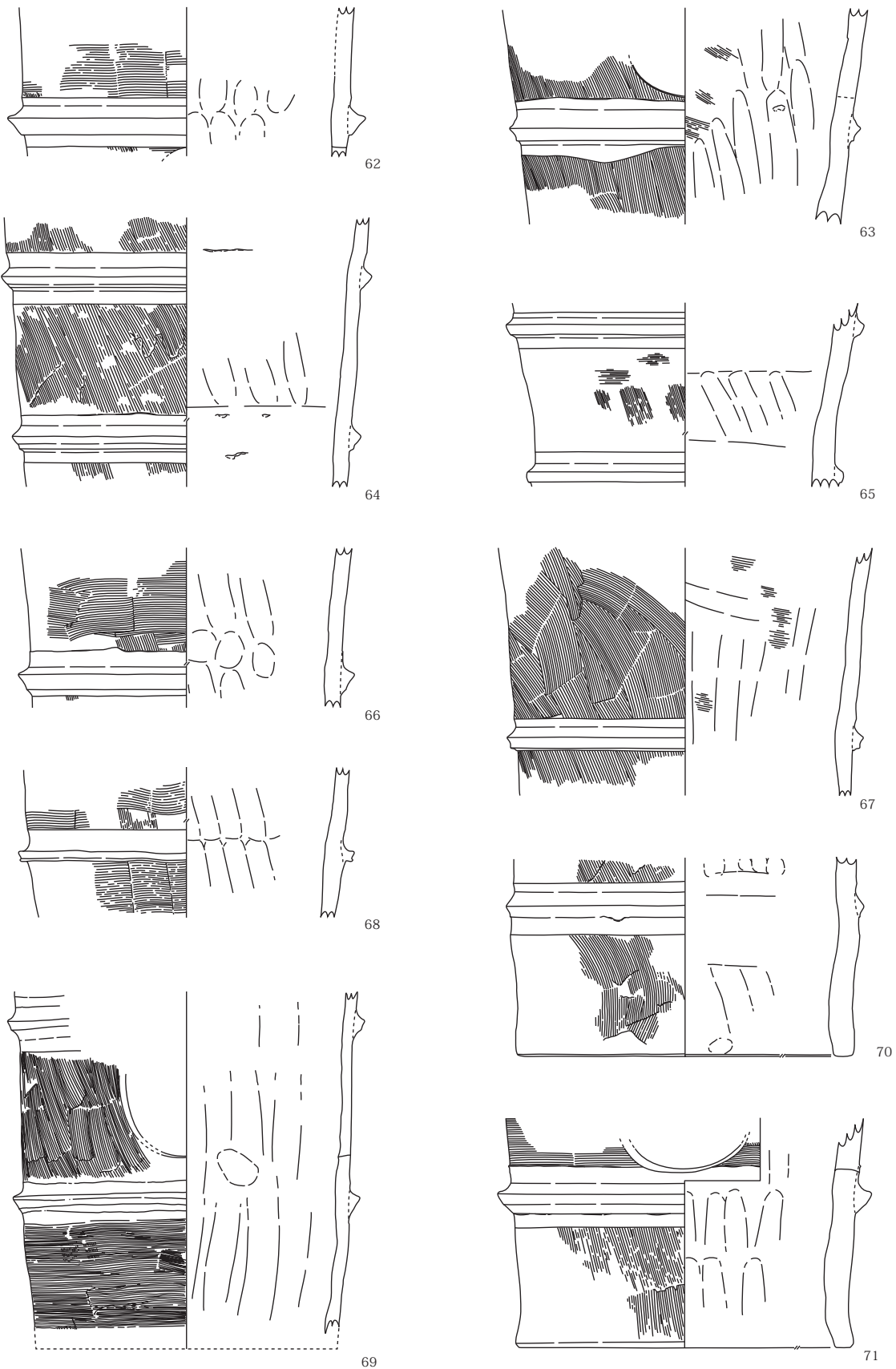


图 26 01014 沟 [9号填] 出土遗物 (6)

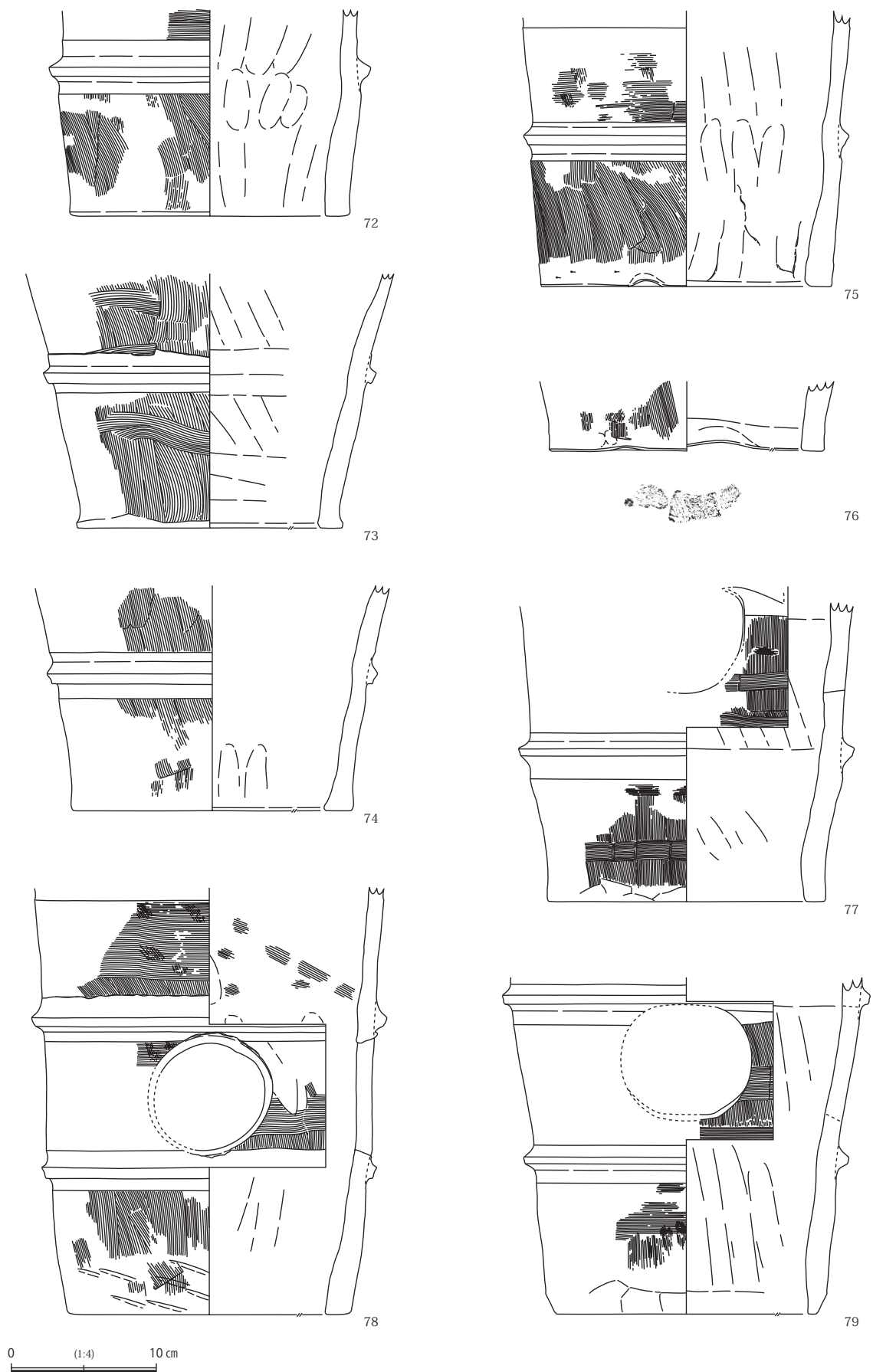


图 27 01014 溝 [9号填] 出土遺物 (7)

外面調整はいずれも1次調整のタテハケのみである。内面調整はヨコハケの後、縦方向のナデを施している。外面色調は黄橙色を呈し、焼成はやや軟質である。

64・65は突帯が2条残存する資料である。64はブロックGより出土した。突帯の断面形状は三角形を呈するが、下位の突帯は下端にわずかに稜を残す。突帯間隔は10.4cmを測る。外面調整は1次調整のナメハケのみである。内面調整は縦方向のユビナデを基調とするが、突帯部分は丁寧なヨコナデを加える。外面色調は黄橙色を呈し、焼成はやや軟質である。65はブロックFより出土した。突帯の断面形状は三角形を呈するが、下位の突帯は下端にわずかに稜を残す。突帯間隔は9.7cmを測る。外面調整はタテハケの後ヨコハケを施す。内面調整は縦方向のユビナデを基調とするが、突帯部分は丁寧なヨコナデを加える。外面色調は黄橙色を呈し、黒斑が認められる。焼成はやや軟質である。

66～68は突帯が1条残存する。66はブロックHより出土した。突帯の断面形状は三角形で、外面に赤彩が残る。外面調整はタテハケの後ヨコハケ、内面調整は縦方向のユビナデを施し、突帯貼り付け位置には連続したユビオサエが認められる。67はX=-128802.9、Y=-38650.6付近より出土した。突帯の断面形状は扁平な台形を呈する。突帯の貼り付けは、上辺を丁寧にナデ付けるのに対し、下辺は粗雑なナデ付けとなっている。外面には赤彩が残る。外面調整はやや不規則なタテ・ナメハケ、内面調整はハケの後ナデている。68は南周溝畦の5～7層掘削中に出土した。突帯の断面形状は、01014溝ではほとんど認められない端面の中央が凹むM字形を呈する。ただし、整形はやや粗雑で、突帯の下辺には波打つような凹凸が認められる。外面調整はタテハケの後ヨコハケ、内面調整は縦方向のユビナデを施す。これら3点の埴輪はいずれも黄橙色の外面色調を呈し、焼成はやや軟質である。

69は2条の突帯および縦に長い円形透孔が残存する資料である。ブロックHより出土した。透孔の位置から、基底部から3段目にあたりと考えられる。突帯の断面形状は1条目が三角形、2条目が扁平な台形を呈する。基底部高は9cm以上あり、2段目の突帯間隔は11.6cmを測る。外面調整は、基底部がタテハケの後ヨコハケを施すのに対し、2段目は1次調整のタテハケのみとなっている。内面調整は縦方向のユビナデを施す。外面色調は灰色を呈し、焼成は硬質である。

70～79は底部径を復元しえた資料である。70～72は基底部から2段目にかけて残存し、直立する器形を呈する。70は南周溝畦掘削中に5～7層より出土した。突帯の断面形状は扁平な三角形を呈し、基底部高は9.9cmを測る。外面調整は基底部、2段目いずれも1次調整のタテハケのみである。内面調整は縦方向のユビナデを施し、突帯貼り付け位置にのみヨコナデを加える。外面色調は黄橙色を呈し、焼成はやや軟質である。71・72はブロックHより出土した。71は2段目に円形透孔の下辺が辛うじて残存する。突帯の断面形状は上辺が抉れるように窪んだ三角形を呈し、基底部高は10.2cmを測る。外面調整は基底部が1次調整のタテハケのみであるが、2段目はタテハケの後ヨコハケを施す。内面調整は縦方向のユビナデである。外面色調は黄橙色を呈する。焼成はやや軟質で、黒斑が認められる。72は断面の突帯形状が台形を呈し、基底部高10.3cmを測る。外面調整は基底部が1次調整のタテハケのみであるが、2段目はタテハケの後ヨコハケを施す。内面調整は縦方向のユビナデであるが、突帯貼り付け位置はナデのストロークが短い。外面色調は黄橙色を呈し、焼成はやや軟質である。73・74も基底部から2段目にかけて残存する資料で、外方へ開く器形を呈する。73はブロックFより出土した。突帯の断面形状は扁平な四角形を呈するが、垂れ下がるように傾いている。基底部高は10.7cmを測る。外面調整は基底部および2段目いずれもタテハケの後ヨコハケを施すが、工具のあたりが弱いのか、ヨコハケは部分的に認められる程度である。内面調整は縦方向のユビナデの後、底端部および突帯貼り付

け位置にはヨコナデを加える。製作時の加重のためであろうか、底端部は外方へ張り出し、部分的に削り取られたような段がみられる。外面色調は黄橙色を呈し、焼成はやや軟質である。74はブロックD・Gより出土した破片からなる資料である。底端部は内面側に張り出し、突帯の断面形状は扁平な台形を呈する。基底部高は9.5cmを測る。外面調整は1次調整のタテハケのみ、内面調整は縦方向のユビナデを施す。外面色調は黄橙色を呈し、焼成はやや軟質で、黒斑が認められる。

75・76は底端部の一部が上方へ捲れ上がるように変形する資料である。75はブロックHより出土した、基底部から2段目にかけて残存する資料である。直立する器形で、突帯の断面形状は三角形を呈する。基底部高は10.4cmを測る。外面調整は基底部がタテハケ、2段目がタテハケの後ヨコハケであり、底端部から1.5cmほどにかけてハケの後にケズリが施される。内面調整は縦方向のナデが施される。端部の変形は作業台から器体を持ち上げる際に付いたものであろうか。76はブロックGより出土した。底端部の小破片であるが、底端部外面にユビオサエが、端面に擦痕が認められる。外面色調は75が黄橙色、76が浅黄色を呈し、焼成はいずれもやや軟質である。

77はブロックGより出土した、基底部から2段目にかけて残存する資料である。やや外反する基底部から直立する2段目へと連続する器形を呈する。突帯の断面形状は台形を呈し、基底部高は10.6cmを測る。2段目には透孔が穿たれるが、円形状の透孔の右上部にも右下がりの切削痕が認められることから、異形の透孔であることが推察される。現存の状態からは巴状の形態を想起するが、詳細は不明である。外面調整はタテハケの後ヨコハケを施すが、ヨコハケは工具の当たりが悪く、部分的に認められる。底端部には不規則なケズリによる整形が施される³⁾。内面調整はナデを施す。外面に黒斑が認められる。

78は南周溝畦の5～7層より出土した。基底部から3段目にかけて残存しており、わずかに外反する器形を呈する。突帯の断面形状は扁平な台形を呈し、2段目には円形透孔が穿たれる。基底部高および2段目の突帯間隔はいずれも10.2cmを測る。外面調整は基底部が1次調整のタテハケのみであり、2・3段目はタテハケの後ヨコハケを施す。しかしながら、2・3段目のヨコハケはいずれの段も下方0.8～1.3cmほどは認められない。なお、円形透孔の周囲では部分的にナデが施されている。また、基底部下端にはタタキ目が残る。内面は基底部および2段目はナデ、3段目はナナメハケの後ナデおよびユビオサエを施す。79はブロックGより出土した。基底部から2条目の突帯まで残存する破片資料で、やや外反する器形を呈する。突帯の断面形状は台形であるが、1条目に比して2条目が低い。2段目には円形の透孔が穿たれる。基底部高は10.8cm、2段目の突帯間隔は11.2cmを測る。外面調整は基底部と2段目いずれもタテハケの後ヨコハケを施す。基底部から1.5～2.3cmほどはケズリによる整形が施されており、外傾し端面が狭い端部となっている。内面調整は縦方向のナデを基本とするが、底端部のみヨコナデを施す。

80～83は口縁部の破片資料である。80は南東角付近のX=-128,802.8、Y=-38,648.3地点の5層、81は南周溝のX=-128799.7、Y=-38647.2地点の5層、82はブロックG、83はブロックHより出土した。80～82は水平、83は内傾する端面を有する。外面調整は80・81がタテ・ナナメハケのみ、82・83が縦・ナナメハケの後ヨコハケを施す。内面調整はいずれもヨコハケの後ナデ・ユビオサエを施す。口縁端部は内外面ともにナデ消されている。81～83には赤彩が残る。

84～88は体部片である。84・85・87はブロックGより、86は南周溝畦の5～7層、88はブロックEより出土した。突帯の形状は85が端面の整形が粗く、歪な形状であるが、それ以外は扁平な台形

を呈する。86は2条の突帯が残存しており、突帯間隔は10.4cmを測る。外面調整は84～86がタテハケの後ヨコハケ、87は1次調整のタテハケのみ、88はタテハケがわずかに残るが、詳細不明である。内面調整は84のみヨコハケの後ナデおよびユビオサエ、それ以外はナデを施す。85・88には赤彩が認められる。

89～93は基底部片である。89～91は南周溝畦の5～7層、92はブロックC、93は南周溝のX = -128,802.7、Y = -38,652.7地点の1層より出土した。89は端部内外面にケズリが施されており、端面の幅が細い端部となっている。90は内面端部にヨコハケを施し、端面には擦痕が認められる。91・93は直立、92は外傾する器体を呈する。93には赤彩が認められる。外面調整は91・93が1次調整のタテハケのみ、92がタテハケの後ヨコハケを施す。内面調整はナデおよびユビオサエである。外面色調は90のみが灰黄褐色で、それ以外は黄橙色を呈し、焼成はいずれもやや軟質である。

このほか、写真のみの掲載となるが、北周溝からも円筒埴輪が出土している（図版36－387～396）。口縁部、体部、基底部など各部位の破片が認められるが、完形に復元しうるものはなかった。突帯の断面形状は、390が三角形、391が端面の中央が凹む扁平な台形、396が扁平な台形を呈する。外面調整は確認できるものはいずれも1次調整のタテ・ナメハケのみである。外面色調は黄橙色を呈し、焼成はやや軟質である。

94～99は朝顔形埴輪である。94はブロックHから出土した、内湾しながら立ち上がる1次口縁部から外反する2次口縁部にかけての破片資料である。1次口縁部径25.0cm、2次口縁部径37.0cmを測る。中位突帯の断面形状は三角形を呈する。外面調整はナメハケ、内面調整はヨコハケの後ナデを施す。95はブロックDより出土した2次口縁部の破片資料である。2次口縁部径は39.4cmを測り、中程で強く外反する器形を呈する。外面調整はナメハケ、内面調整はヨコハケの後ナデを施す。96は中位突帯から2次口縁部にかけての破片資料である。95と共にブロックDより出土した。中位突帯は口縁部から垂下し、断面形状は方形を呈する。内面にはヘラ状の工具によると思われる刻み目が認められる。内外面ともに赤彩が残る。なお、中位突帯内面に刻み目が認められる資料はOT08－2調査においても出土している（写真図版70－512）。中位突帯から2次口縁部にかけて残存する破片であり、口縁端部には黒斑が認められる。同一個体の可能性があるが、接点はなく断定できない。97はブロックHより出土した。肩から頸部にかけて残存する。頸部径は17.0cmを測り、頸部突帯の断面形状は三角形を呈する。肩部の外面調整はタテハケの後ヨコハケ、内面調整は縦方向のナデを施す。98はブロックBおよびその周辺の複数地点より出土した破片からなる資料である。体部から口縁部にかけて残存する。緩やかに湾曲する肩部は高く、内湾する1次口縁部から中程で屈曲し、強く外反する2次口縁部へと連続する。体部最上段に円形透孔が穿たれる。頸部径15.6cm、1次口縁部径26.0cm、2次口縁部径38.0cmを測り、頸部外反角度は48°を示す。突帯は、頸部および中位突帯が三角形、体部は三角形に近い扁平な断面形を呈する。頸部および中位突帯が丁寧な貼り付けであるのに対し、体部の突帯は下辺が断続的でやや粗雑な印象を受ける。外面調整は、体部は摩滅が著しく不明瞭であるがタテハケの後ヨコハケ、肩部はタテハケ、1次口縁部はタテハケの後ヨコハケ、2次口縁部はナメハケを施す。内面調整は体部から頸部が縦方向のナデおよびユビオサエを基本とし部分的にヨコハケ、1次口縁部から2次口縁部下半までがヨコハケの後ナデ、2次口縁部上半がヨコハケを施す。なお、1次口縁と2次口縁の接合部内面には胎土が削り取られる箇所が複数認められた。ヘラ状の工具により2本の鋭い切込みを1.9cm程度の間隔で縦方向に入れた後、口縁部側に直交する切り込みをさらに加え、粘土を削り取っている

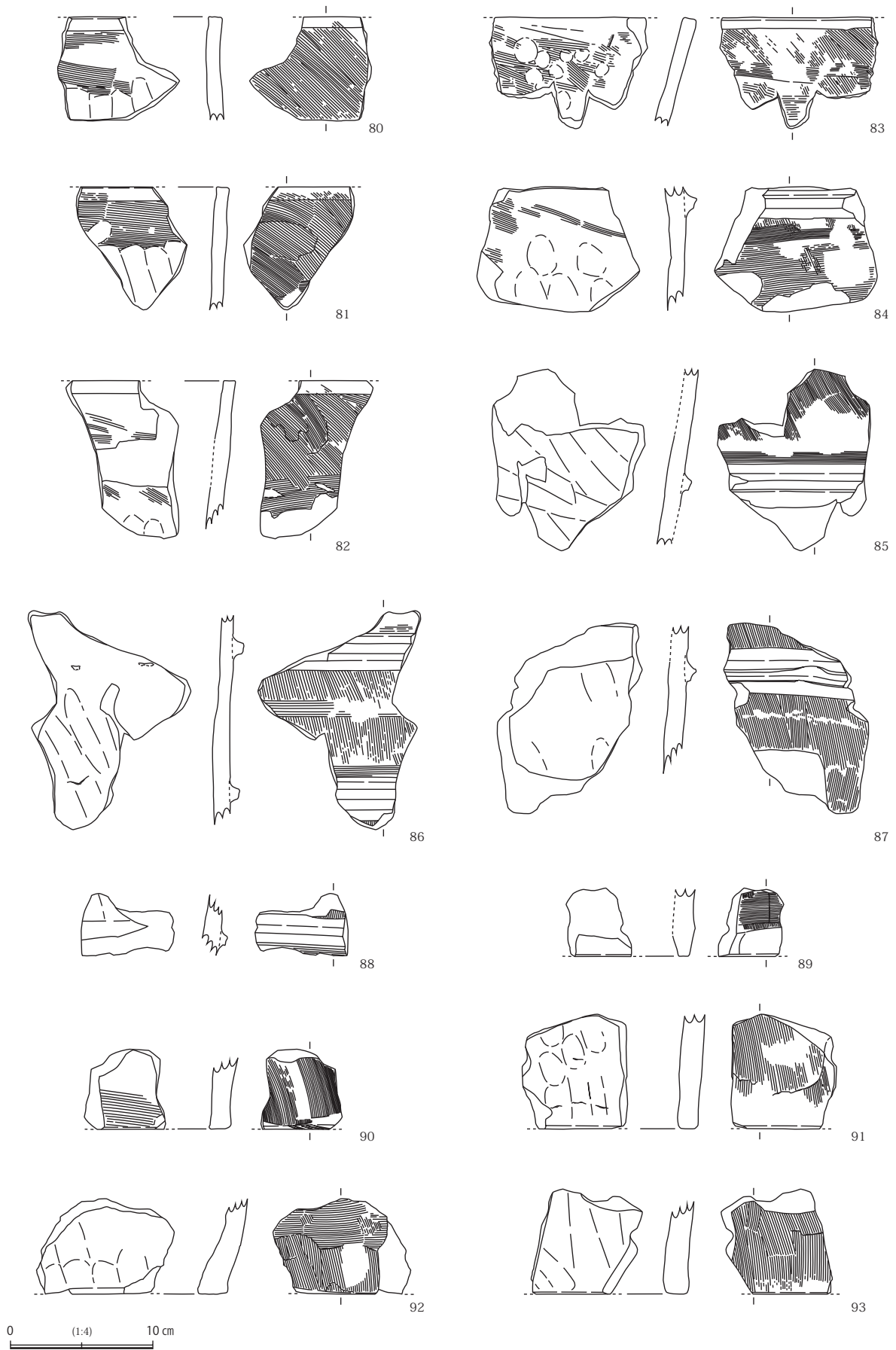
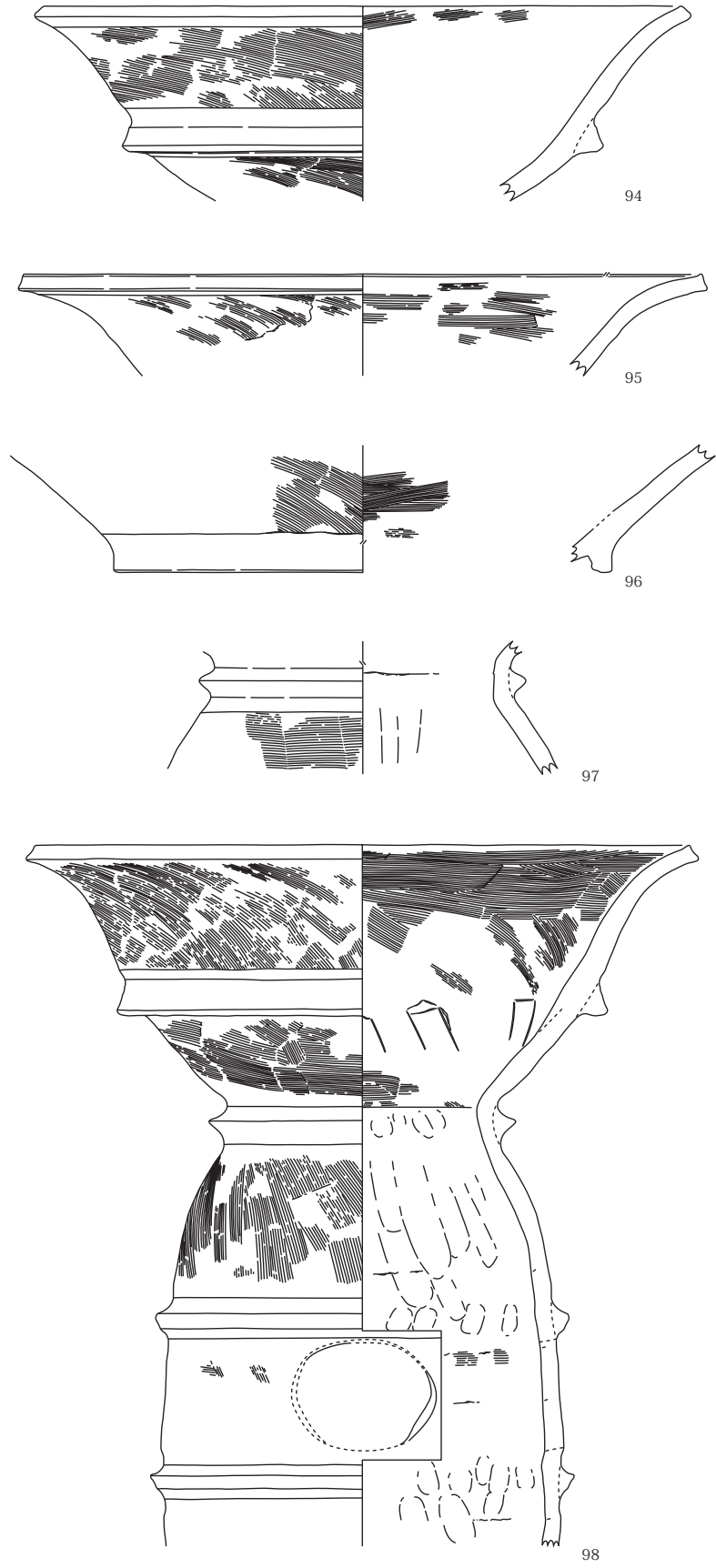


图 28 01014 溝 [9号填] 出土遺物 (8)



0 (1:4) 10 cm

图 29 01014 沟 [9号填] 出土遗物 (9)

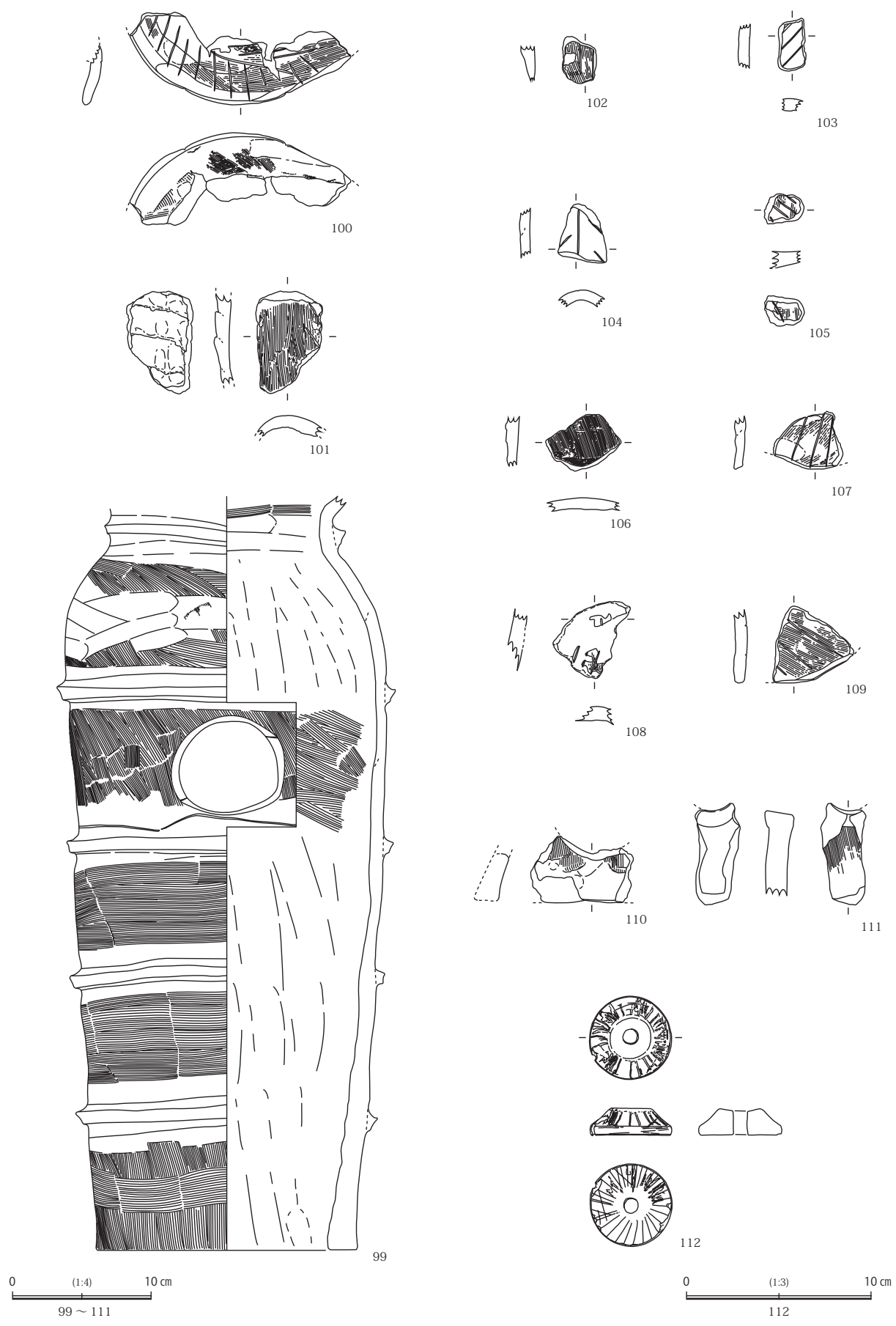


图 30 01014 沟 [9 号填] 出土遗物 (10)

と考えられる。高さは概ね揃うが、間隔は不規則であり、口縁部の一方に集中して認められたことから、96のような接合を強固にするための作業とは考えにくい。器厚を薄くし、軽量とするための造作であろうか。99はブロックCより出土した。基底部から頸部にかけて残存する資料である。体部は3条突帯4段構成で、最上段に円形透孔を穿つ。突帯の貼り付け、成形はやや粗雑であり、断面形状はいずれも下辺が低く、三角形に近い扁平な台形を呈する。底部径16.0cm、体部最大径26.8cm、頸部径15.8cmを測る。残存高は54.3cmで、各段の高さは、基底部9.5cm、2段目突帯間10.3cm、3段目突帯間9.6cm、体部最上段11.0cm、肩部11.4cmを測る。外面調整は基底部から3段目までがタテハケの後ヨコハケ、体部最上段が1次調整のタテハケのみ、肩部はタテ・ナナメハケの後ナデを施す。内面調整は、器体部から3段目および肩部が縦方向のナデ、体部最上段がナナメハケ、頸部内面がヨコハケを施す。外面色調は99のみ灰白色、それ以外は黄橙色を呈し、焼成はいずれもやや軟質であるが、99は他に比べると焼成が良好で締まっている。

100～109は形象埴輪である。100は東周溝北端部の5層より出土した。弧状の破片資料であり、一端は丸くおさめ、他方は剥離している。外面はヨコハケの後にヘラによると思われる線刻を横位4条、縦位11条施している。形状から鳥形埴輪の羽と考えられる。101は東周溝畦付近の1層から出土した。横断面が弧を描く破片資料であり、外面はタテハケの後に斜線を刻み、内面は未調整で接合痕を残す。鳥形埴輪の尾羽と思われる。102～109はいずれも線刻を有する小破片である。102～105・107は東周溝畦以北、106は南周溝からの出土であるが、詳細地点は不明である。108は100と共に東周溝北端部の5層より出土した。109は100・108の南からの出土となる。断面形から101および104は鳥形埴輪の尾羽、それ以外は100と同様に羽の破片と思われるが、105は両面に線刻がなされていることから、異なる器形を呈する可能性も残る。外面色調はいずれも黄橙色を呈し、焼成はやや軟質である。

110・111は器形不明の埴輪である。110は東周溝北端部の5層より出土した。円筒形の器形を呈する基底部片と思われるが円筒埴輪に比して径が小さく、かつ基底端部直上に透孔が穿たれている点で異なる。形象埴輪の基底部であろうか。101はブロックGより出土した。柱状に残存した破片資料で、一方には円形と思われる透孔が施されていたと考えられるが、細片であるため詳細は不明である。外面色調および焼成は110が灰黄褐色を呈しやや硬質、111が橙色を呈しやや軟質である。

112は石製紡錘車である。東周溝北部より出土した。わずかに欠損するがほぼ完形を保つ。直径4.4cm、高さ1.4cm、中心の穿孔は直径0.8cmを測る。表面は幅0.1cmほどのヘラミガキ状に表面を削った筋が全面に認められるが、その間隔は一定ではなく不均等である。裏面には細い線刻が放射状に施され、部分的に表面と同様のヘラミガキ状の筋が認められる。細線は割り付け線のようにも思えるが、詳細は不明である。あるいは施文の途中で中止された可能性も残る。

以上の遺物のうち、須恵器はTK23・47型式に比定され、土師器長胴甕も同時期の所産として矛盾しないことから、01014溝〔9号墳〕は古墳時代中期後葉に築造されたものと考えられる。

2. 溝

01001溝（図12・31～36、図版6・43・44）

調査区南部においては東西方向を指向するが、7N-6fにおいてほぼ90度屈曲し、北へ延びる。攪乱により細かく分断されているが、埋土や規模から連続する一連の溝と判断した。北端、西端いずれも調査区外へと延びており、このうち北はOT08-2調査のF区において検出されたFSD-1や、後



Y=-38,680

Y=-38,670

Y=-38,660

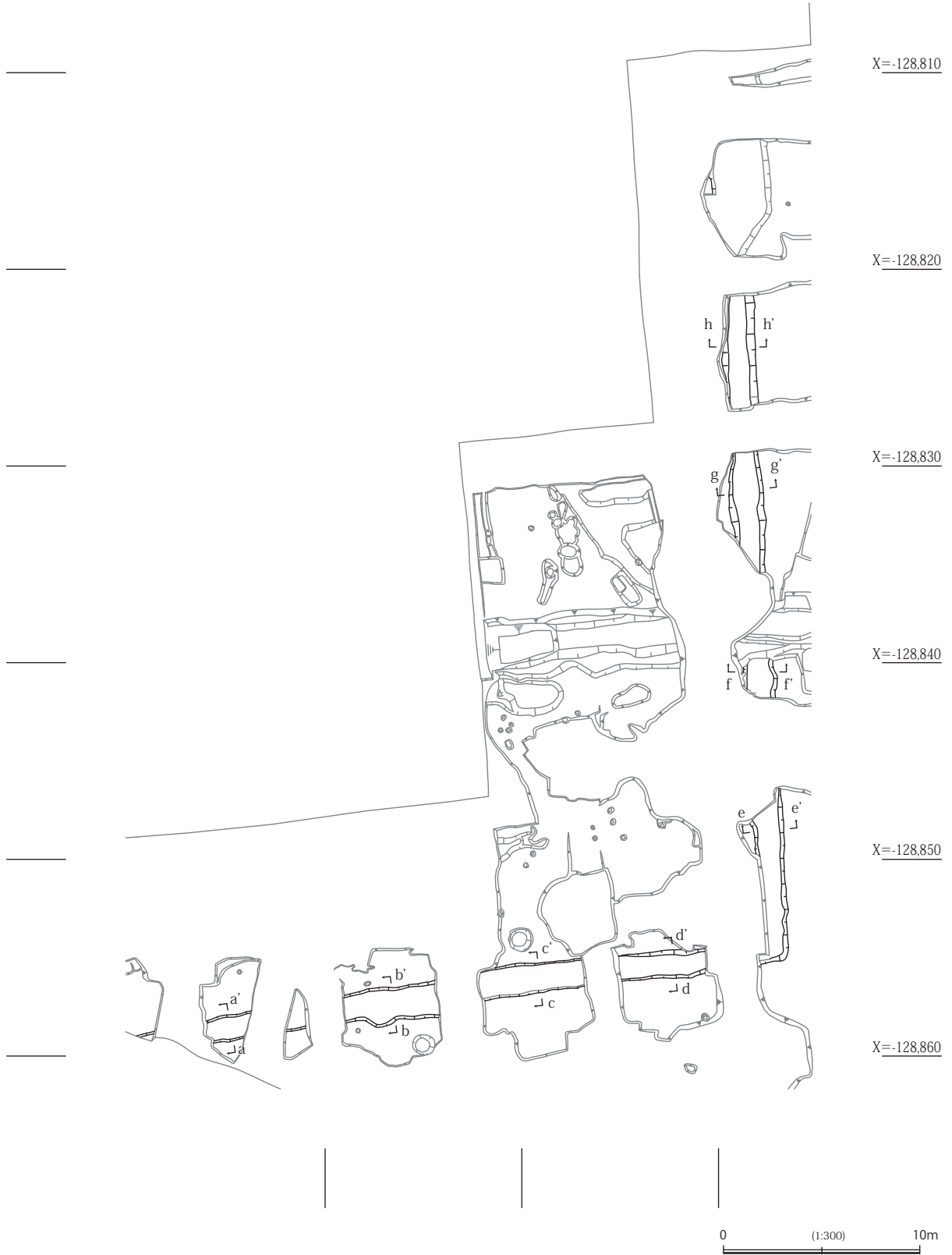


图 31 01001 沟 平面

述する4区において検出された04002溝に連続すると考えられる。本調査区内において検出しえた限りにおいては、南北方向の長さ約42.7m、東西方向の長さ約35.5m、延べおよそ78.2mを測る。幅は1.32～1.80m、深さは0.14～0.27mを測る。

埋土は、断面を観察した9箇所中7箇所においては2層に、2箇所においては3層に細分される。いずれも上層は第4層と同色同質であり、下層は第4層を主体とし第5・6層を母材としたブロック土を含む。流水痕跡が認められないこと、90度屈曲する溝の平面形状から、導水施設としてではなく空間を区画するために掘削された溝であると推測される。この場合、本調査とOT08-2調査を総合して俯瞰すると、溝の北および西側に土坑やピットなどの居住に関する遺構が集中する一方、溝の東および南側では遺構の分布が希薄となることから、居住域を画する溝であった可能性が高いと考えられる。

遺物はほぼ全域において出土している。各地点における点数を計量したわけではないため調査時の感覚となるが、Y=-38,670以東において多く包含する傾向が窺えた。土器は細片で、摩滅が著しいものが

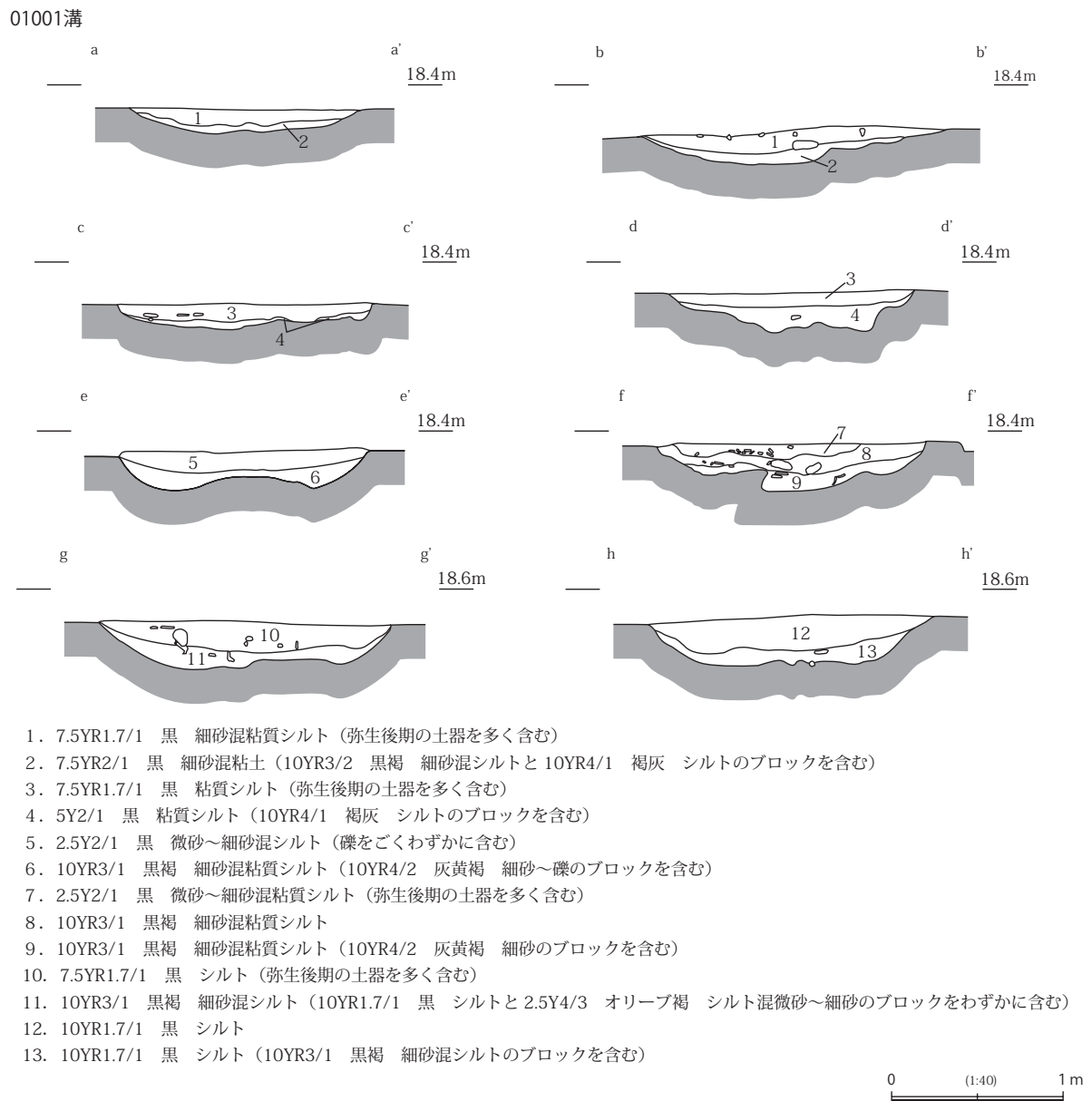


図32 01001溝 断面

多くを占めるが、50点を図示した。

113～122・130は壺である。113は短頸壺である。摩滅のため内外面ともに調整は不明である。114～116は二重口縁壺の口縁部片である。114は外面に大振りな波状文を施す。115は外面に3条の波状文、内面には横方向のヘラミガキと1条の波状文を施す。116は摩滅のため調整不明。117も二重口縁壺と思われる。加飾壺で、頸部に突帯を廻らせており、突帯直下に波状文を施す。118は長頸壺である。口縁部は外反する。摩滅のため調整は不明である。119・121・122は直口壺である。119は頸部から外反する口縁部が延び、端部において内湾する器形を呈す。121は内外面共に横位のヘラミガキを施す。122は外傾して面を有する端部である。調整は外面にタテハケ、内面にヨコハケを施す。120は加飾広口壺である。口縁端部に粘土を付加することにより肥厚させて端面を作り出し、円形浮文を付して竹管文を施している。内面はハケの後ナデを施す。130は大型の壺の肩から胴部にかけての破片資料である。球形を呈し、外面はタテハケ、内面はヨコハケを施す。

123～129・131～135は甕である。123は口径が大きく、頸部から緩やかに外反する口縁を呈する。全体的に摩滅するが、体部外面にはわずかにタタキ目が残る。124は強く屈曲する頸部から内湾気味に口縁が延び、端部は内傾肥厚する。体部外面にはハケ、内面にはケズリが施される。125は厚く、短い口縁部を有し、端部はナデで幅広の面を作る。細片のため傾きを誤認している可能性がある。126は体部外面はハケ、内面はケズリを施す。口縁は直線的に延び、端部は肥厚して、水平な端面を有する。127は肩から頸部にかけてタタキ目が残る。口縁部は直線的に外反し、端部はつまむようにナデて面を作る。128は体部外面はハケ、内面はケズリを施す。頸部はくの字に屈曲し、肥厚した口縁部が内湾しながら延びる。端部は肥厚し、内傾する。129は摩滅のため不明瞭であるが、体部外面はハケを施す。頸部はくの字に屈曲し、口縁は直線的に延び、端部は肥厚し、水平な端面を有する。131は、128と同様に外面ハケ、内面ケズリを施し、内湾する口縁と端部が肥厚し、内傾する端面を有するが、128に比して頸部がややすぼまる。132・133は摩滅のため調整は不明である。132はくの字に屈曲する頸部から直線的に口縁が延びる。133は厚手の口縁が内湾しながら延び、端部は丸くおさめる。134は図では示せていないが、同一個体と思われる破片資料から外面はハケ、内面はケズリを施すと思われる。口縁は内湾しながら延び、端部は丸くおさめる。135は口縁部から体部にかけての破片資料で、肩が張り、口縁は短く外反する。調整は体部外面にハケ、内面にナデを施す。口縁部の断面を観察すると、内外面がにぶい黄橙色であるのに対し、中心はオリーブ黒色を呈する。こうした器形と焼成から、山城もしくは近江地域から搬入された可能性が高いと思われる。

136・137は鉢である。136は球形を呈する胴部から、外反し中位に稜を有する口縁部が延びる。摩滅が著しく、調整は不明である。なお、口縁端部は同一個体と考えられる別の破片資料を用いて図上で復元している。137は身が浅く、短く内湾する口縁を有する。外面は全面に横位のヘラミガキを施す。内面は摩滅のため不明瞭であるが、同様に横位のヘラミガキを施していたものと思われる。外面には全面的に煤が付着する。

138～145は小型丸底土器である。138・139は完形に復元可能な資料である。いずれも口径が体部径を上回るが、138が口縁部と体部の高さの比をほぼ同じくするのに対し、139は口縁部がさらに伸長し、体部よりも大きくなる。いずれも摩滅が著しく調整は不明である。139は体部外面に黒斑が認められる。140・141は口縁部の破片資料である。140は内湾する口縁を有し、体部は膨らみを持たず口縁部に比して小さなものと思われる。141も大きく伸長した口縁部を呈する。調整は140の外面

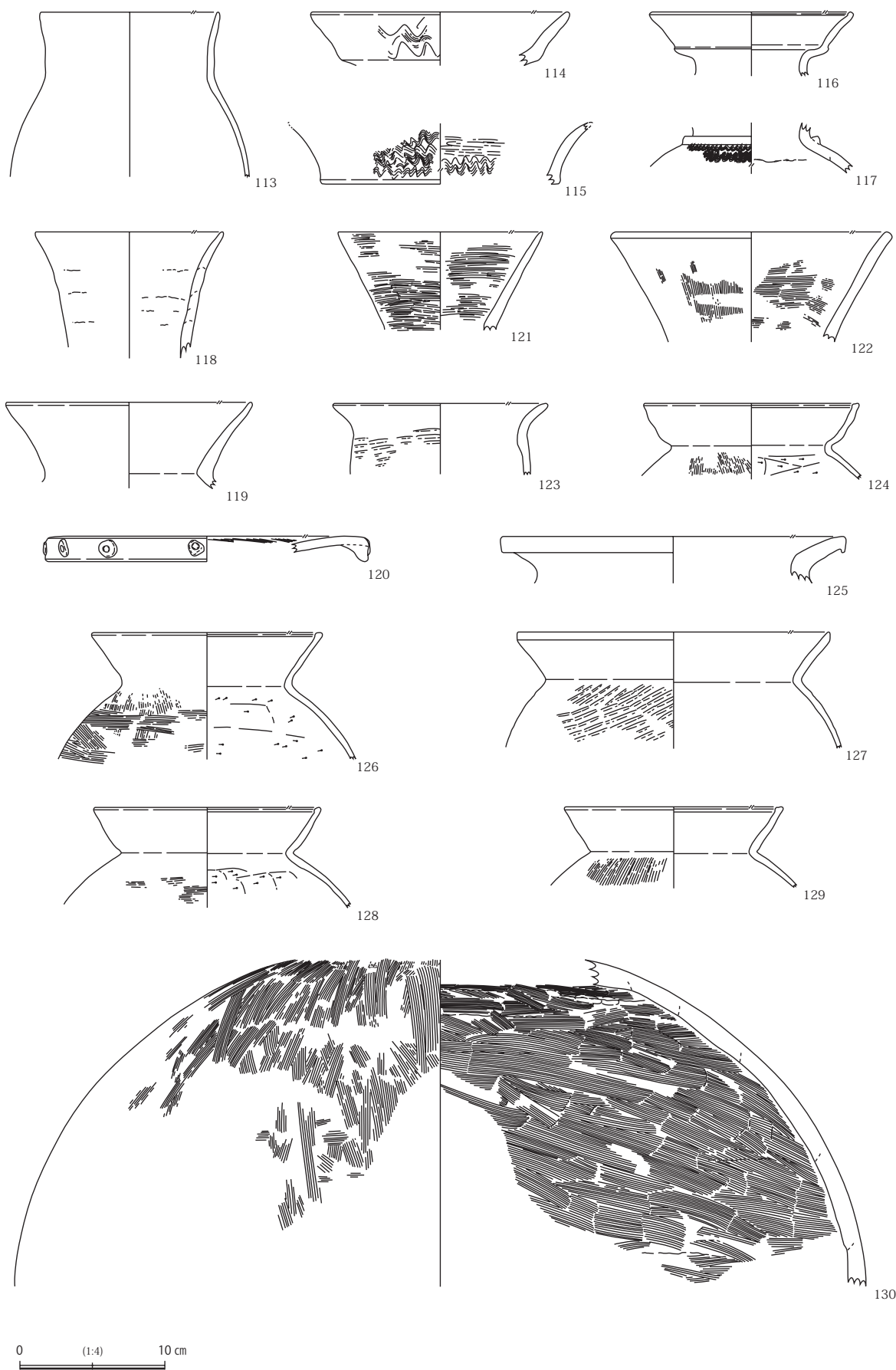


图 33 01001 沟 出土遗物 (1)

および 141 の内外面に横位のヘラミガキが施される。141 の内面は摩滅が著しく不明である。142 は底部を欠損するが、口縁部に比して体部が高い器形を呈する。口縁部は肥厚し内湾する。外面調整は口縁部にヘラミガキ、体部はタテハケの後下半にヘラミガキを、内面調整はナデを施す。143・144 は体部から口縁部にかけての破片資料である。いずれも口径が体部径を上回る器形を呈すると考えられる。調整は、143 の体部外面および内面上半に横位の密なヘラミガキを、口縁部は摩滅のため不明瞭であるが、外面は体部と同様に横位のヘラミガキを、内面は斜位のヘラミガキを施す。144 は口縁内面に横方向の後、縦方向に施されたヘラミガキがわずかに残るが、それ以外は摩滅のため不明である。145 は体部の破片資料である。表面の剥離および摩滅のため調整は不明瞭であるが、内面には板ナデを施した際に付いたと思われる筋状の工具痕が残る。

146～149 は高杯である。146 は杯部から脚柱部が残存する破片資料である。杯底部は小さくかつ低く、杯部は直線的に外方へ開く器形を呈する。147 は脚部片で、裾の 4 箇所円形の透孔が穿たれる。全体的に摩滅しており不明瞭であるが、外面脚柱部は縦方向の、裾部は横方向のヘラミガキが施され、内面には工具痕が残る。148 は脚部の破片資料で、平行する 4 条の沈線と円形の透孔 3 箇所が残る。脚部に沈線を施す点においては東海の影響が窺えるが、器形および胎土は在地のものと考えられる。149 はラッパ状に開く器形を呈する脚部である。円形の透孔が 4 箇所認められるが、摩滅のため調

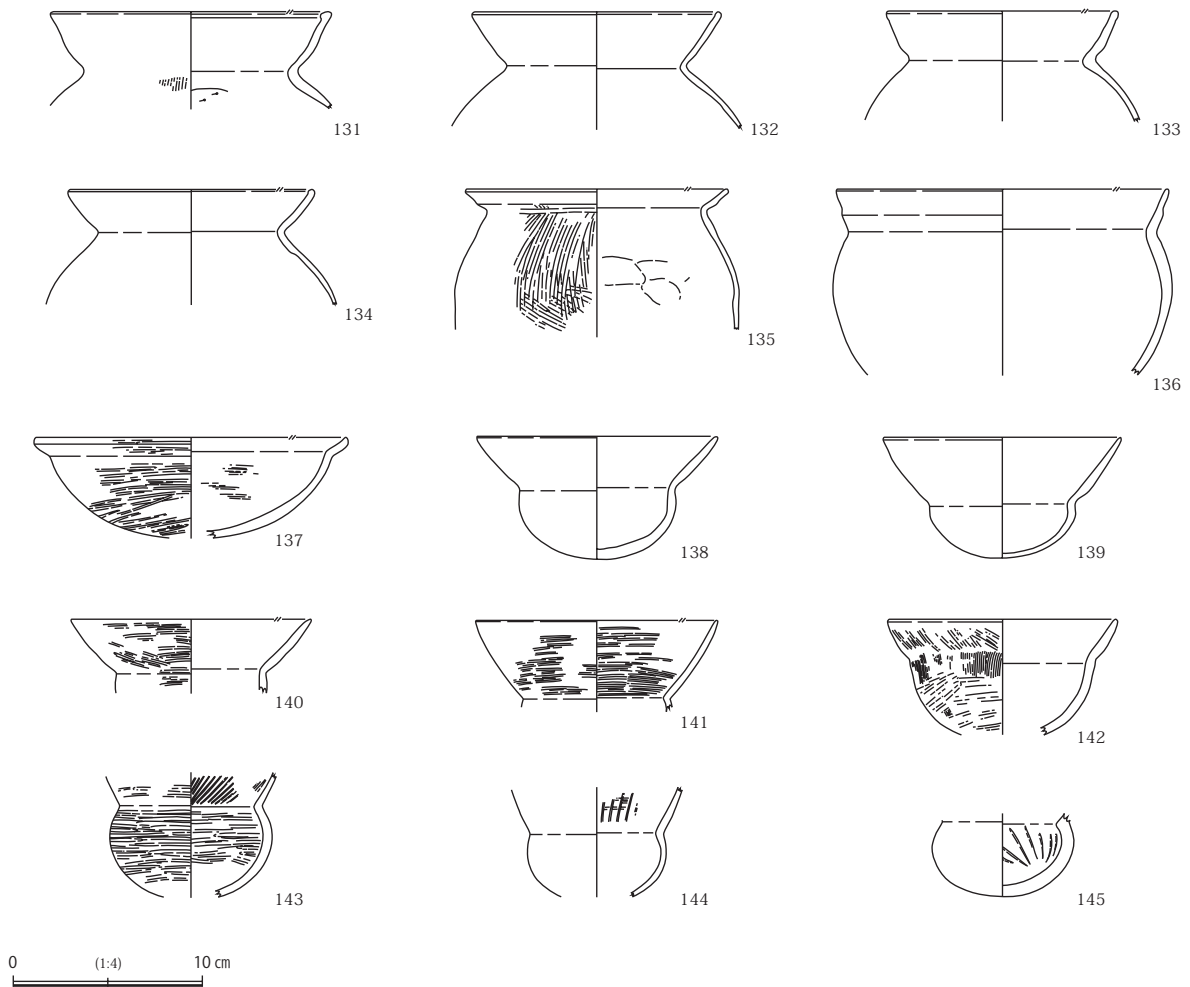


図 34 01001 溝 出土遺物 (2)

整は不明である。

150・151は器台である。150は小型器台である。杯部は欠損するが、直線的に開く脚部の中央やや上方の3箇所に円形の透孔を穿つ。151は器台の胴部で、受部と裾部がわずかに残る。外面は全面に縦方向のヘラミガキを密に施す。内面はナデを施すが、裾部は指頭圧痕を残す。受部内面には黒斑が認められる。

152～159は底部の破片資料である。152は鉢の底部と思われる。端部に粘土紐を貼り付けて肥厚させ、外方へ張り出させている。153・154は壺の底部と思われる。外面調整は、153にはヘラミガキが施され、154は体部にナデ、端部には指頭圧痕が認められる。153の外面には黒斑が認められる。154～159は有孔鉢で、いずれも底部中央付近に穿孔が認められる。穿孔部の平面および断面形態から、155・159は内外面双方から、156は内面から外面へ、157・158は外面から内面に向けて穿孔されたと考えられる。なお、156は2回の穿孔により1個の孔を作り出していることが平面形から窺える。

160は大型の鉢に付随する耳状把手の破片である。

161は縄文土器深鉢の口縁部片である。口縁端部に低く細い突帯が垂れ下がるように貼り付けられ、

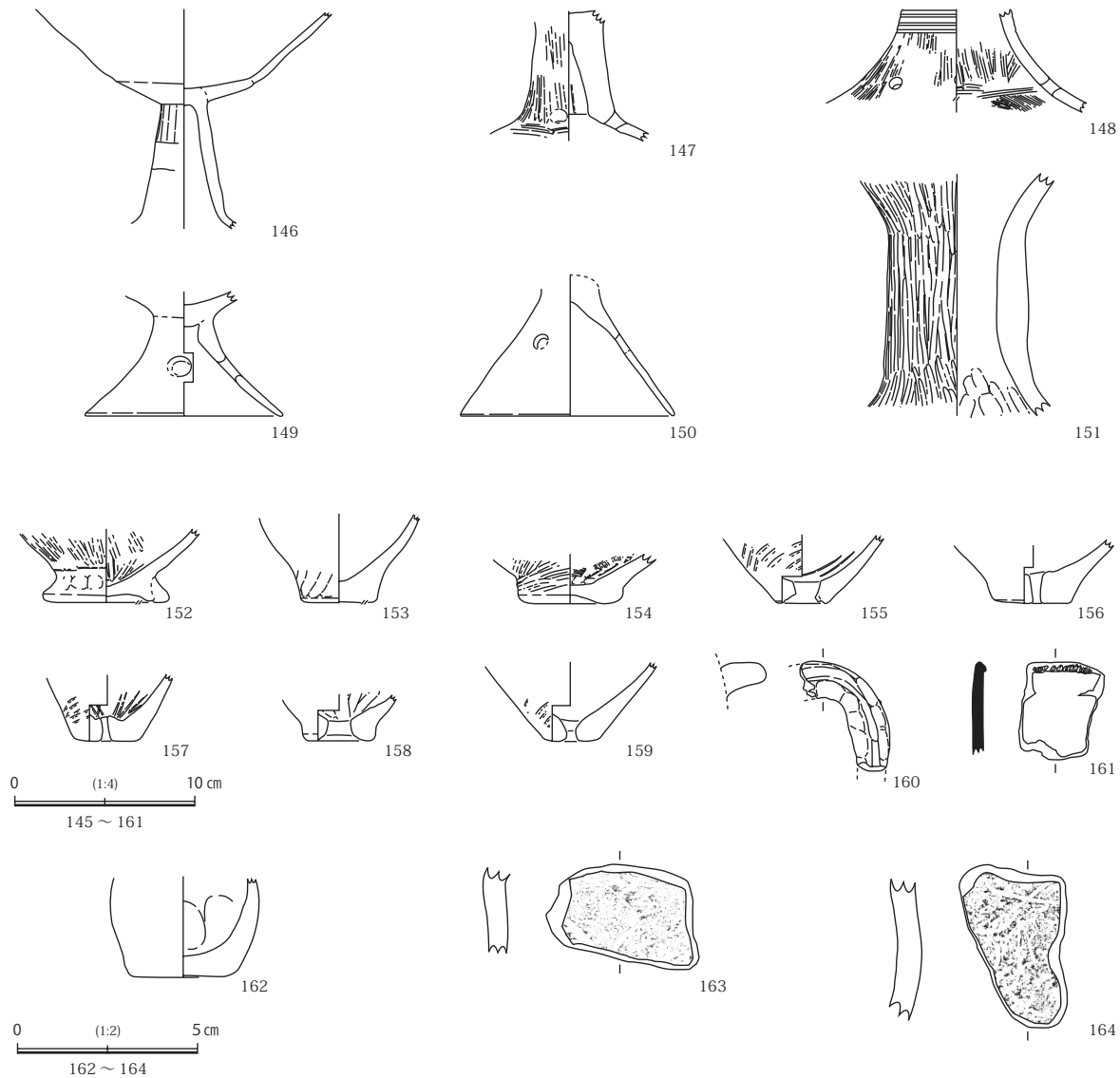
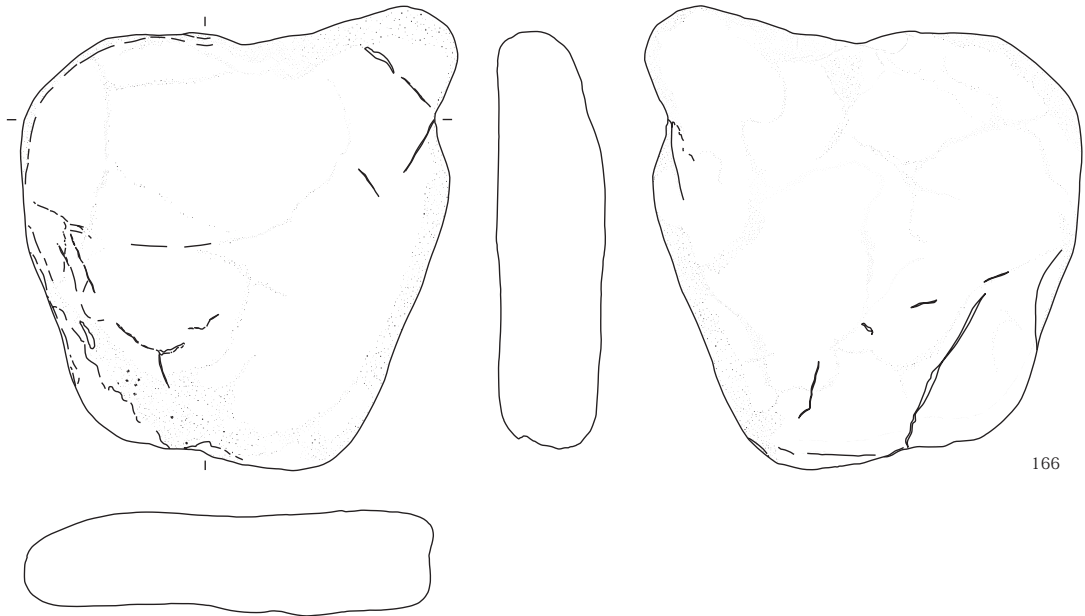


図 35 01001 溝 出土遺物 (3)



165



166

0 (1:3) 10 cm

图 36 01001 溝 出土遺物 (4)

細かい刻目が連続して施される。縄文時代晩期最終末の所産と考えられる。

162 はミニチュア土器で、壺か鉢と思われる。手捏ねによる整形で、内面には指頭圧痕が認められる。

163・164 は線刻が認められる土器片である。同一個体と思われる。複数の曲線が認められ、なんらかのモチーフを描いたと思われるが、詳細は不明である。

石製品は2点を図示した。165は砥石である。ホルンフェルス製と思われる。人為的に整形されており、平面は不整な五角形、断面は一端が丸みを帯びる長方形を呈する。長さ26.5cm、幅8.5cm、厚さ3.8cmを測る。五角形を呈する面を平面とした場合、長軸に平行する側面の一方を砥面として利用している。砥面には長軸に平行する細かい擦痕が認められる。平面には斜行する石目が認められる。砥面側は湾曲するほど摩耗するが、他の面には使用痕がまったく認められない。意図的な使い分けがあったと推測されるが、その理由は明らかにしえない。166は平面不整形を呈する玢岩で、一方の面にやや凹み、平滑な面が形成されていることから台石（石皿）と思われる。長さ18.9cm、幅17.3cm、厚さ4.1cmを測る。

以上の遺物のうち、土器はやや時期幅を有するが、弥生時代後期後半から古墳時代前期に帰属すると考えられることから、01001溝もこの時期に機能したのと考えたい。

01005・01009溝（図37～39、図版6）

7N-6・7g、6・7hにおいて検出した。01005溝は緩やかに弧を描く溝で、部分的に底が深くなる箇所が確認された。東西両端は攪乱により破壊される。幅は0.33～0.88m、深さは0.04～0.30mを測る。埋土は2～3層に細分される。埋土1層は土色および土質から第4層が落ち込んだものと思われる。2層は第4～6層を母材とするブロック土であり、人為的に埋め戻された可能性がある。3層は機能時の堆積土と考えられる。

遺物は弥生土器壺や甕、高杯などが出土しており、5点を図化しえた。167は長頸壺の口縁部片である。緩やかに外方へ開き、口縁端部を屈曲させる。摩滅が著しく、外面調整は不明である。168は甕の口縁部から体部にかけての破片資料である。頸部は強く屈曲し、口縁端部はナデて面をつくる。体部の調整は内外面ともにナデである。169は壺の底部片で、外面中央はわずかに凹む。摩滅のため調整は不明である。170は甕の底部片である。外面は左下がりのタタキ目を残す。171は高杯である。断面の様相から、杯部は挿入付加法により成形されたと考えられる。脚部外面には細い面取りの痕跡が残る。以上の土器のうち、167および168から01005溝は弥生時代後期中葉に帰属すると考えられる。

01009溝は01005溝の東端部南において検出した南北方向を指向する溝である。北端は攪乱により破壊されるが、幅は0.40～0.63m、深さは0.04～0.06mを測る。後述する01010・01061土坑と重複しており、検出状況および埋土の状況から01061土坑に先行し、01010土坑に後出する。埋土は単層で、第4層が落ち込む。遺物は土器の細片が出土したが、図化できるものはなく、詳細時期は不明である。

01005溝と01009溝は位置関係や遺構の規模、埋土の様相から同時期に機能した可能性が高い。攪乱により断絶しているため異なる遺構番号を付与したが、あるいは連続する溝であった可能性も残る。このように考えた場合、円弧の内径は推定で10m程度となる。円弧の内部においては後述するように複数のピットを検出していることから、竪穴建物もしくは平地式建物の外周溝となる可能性が考えられる。しかしながら、周辺および溝の内側が大きく攪乱されており、炉や中央土坑などの施設を検出することができなかったため断定するには至らなかった。

なお、円形に廻る溝はOT08-2調査のG区においても検出されており、円形周溝として報告され

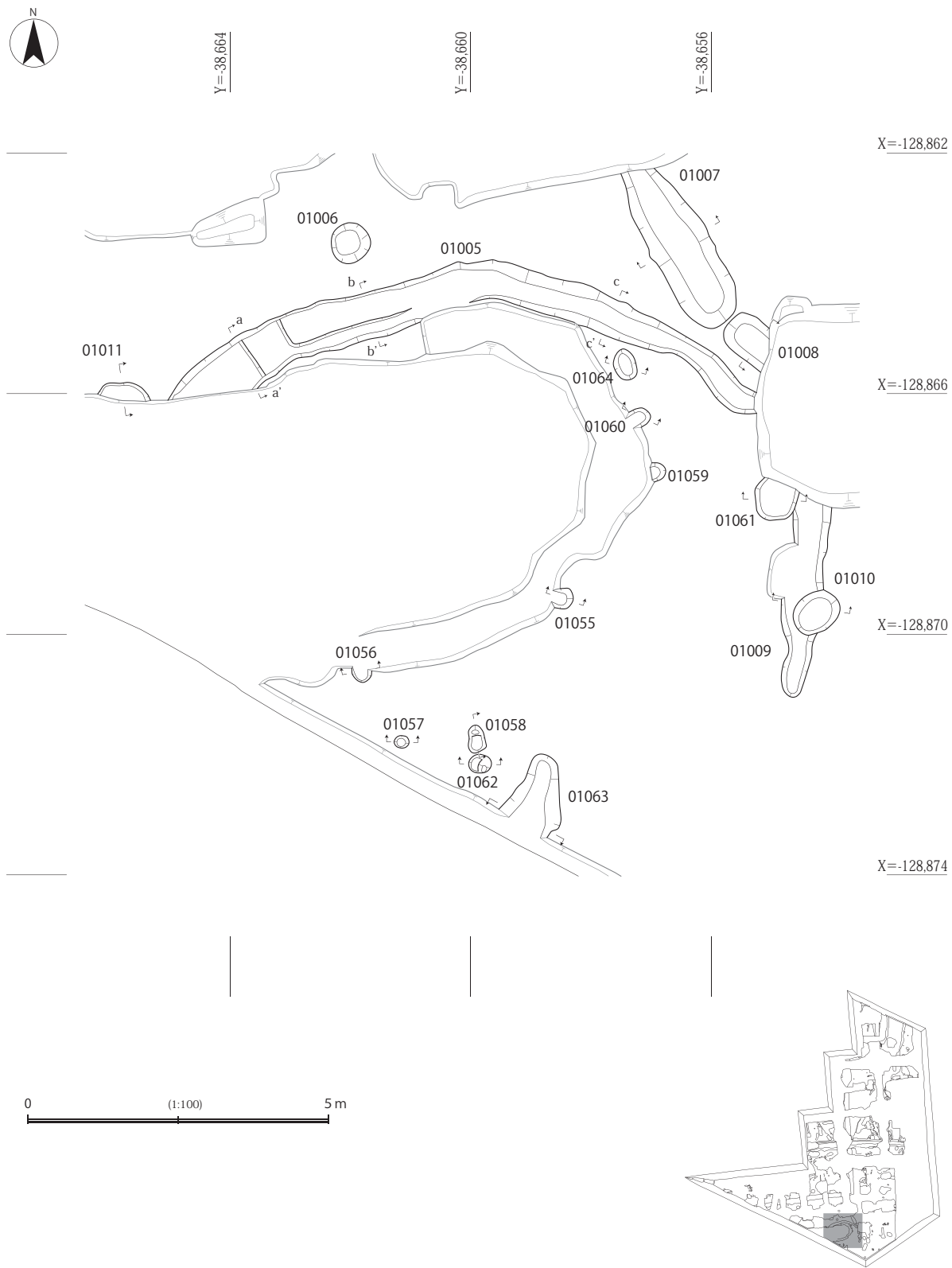
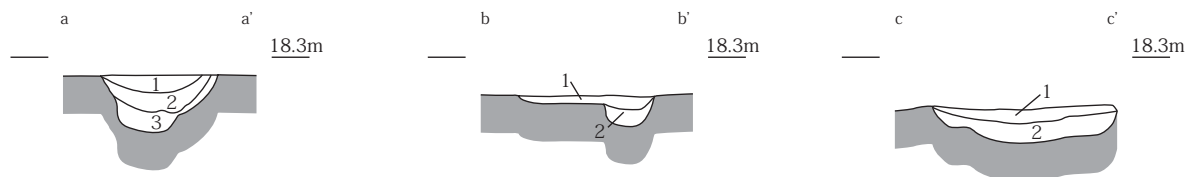


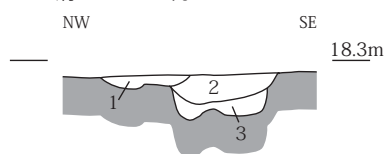
图 37 01005・01009 溝、周辺遺構 平面

01005溝



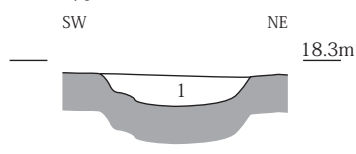
1. 10YR1.7/1 黒 粘質シルト
2. 10YR1.7/1 黒 粘質シルト (10YR3/2 黒褐 粘質シルトと 2.5Y5/3 黄褐 細砂混シルトのブロックを含む)
3. 10YR3/1 黒褐 粘土

01009溝・01010土坑



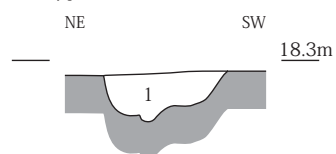
1. 10YR1.7/1 黒 粘質シルト [01009 溝]
2. 2.5Y3/1 黒褐 細砂～粗砂混粘土 [01010 土坑]
3. 10YR3/1 黒褐 粘質シルト [01010 土坑]

01007土坑



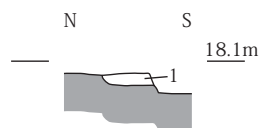
1. 10YR1.7/1 黒 粘質シルト

01008土坑

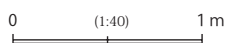


1. 10YR1.7/1 黒 粘質シルトと 2.5Y5/3 黄褐 細砂混シルトのブロック土

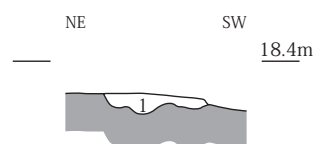
01011土坑



1. 10YR3/1 黒褐 粘質シルト

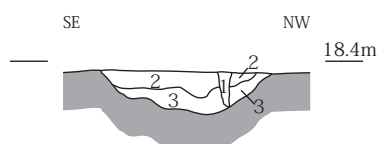


01061土坑



1. 10YR1.7/1 黒 細砂混シルトと 10YR2/2 黒褐 細砂混シルト、10YR6/1 褐灰～2.5Y6/4 にぶい黄シルト～細砂のブロック土

01063土坑



1. 10YR1.7/1 黒 細砂混シルト
2. 10YR2/2 黒褐 細砂混シルト
3. 10YR6/1 褐灰～2.5Y6/4 にぶい黄シルト～細砂の細かいブロック土

図 38 01005・01009 溝、周辺遺構 断面

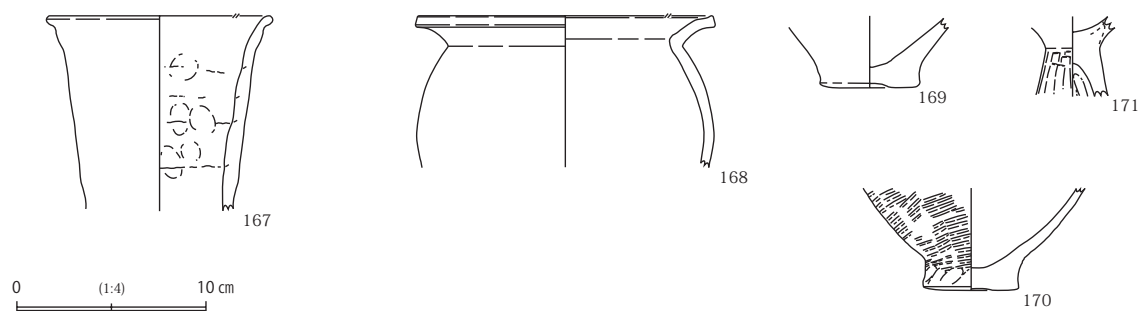


図 39 01005 溝 出土遺物

ている。円形周溝は幅およそ 0.5 ～ 0.9 m、溝の内径約 12.5 m を測り、01005・01009 溝よりも若干大きくなる。円形周溝の内部においても多数のピットなどの遺構が検出されているが、円形周溝を含めて時期が不明確である。調査地の北に位置する名神高速道路建設に伴い昭和 48 年度に実施された調査においても弥生時代後期に帰属する外周溝を伴う竪穴建物が確認されている⁴⁾。平面形の類似をもってただちに同様の機能を有したと断ずることはできないが、関連する可能性も残る。

01026 溝 (図 40・41)

後述する 01031 溝西端部の北側、7N-7d において検出した。北および東側は攪乱により破壊されるため全容は不明であるが、検出した限りにおいては、東西方向を指向する溝 2 条と北西-南東方向を指向する溝 1 条が連結している。調査時は重複関係を確認するべく平面および断面観察に努めたが、明確な先後関係を確認できなかったため一連の遺構として報告する。東西方向の溝 2 条については、01001 溝周辺においては確認できなかったことから攪乱内において収束するものと思われる。一方、01031 溝との関係性については、重複すると想定される地点が攪乱により破壊されているため不明である。規模は、北西-南東方向の溝が幅 0.92 ～ 1.49 m、深さ 0.16 m、東西方向の溝のうち、南側の溝は幅 1.47 ～ 1.59 m、深さ 0.59 m を測り、北西-南東方向の溝に比べやや深くなる。北側の溝は攪乱により破壊されているため詳細は不明である。

埋土は 2 層に細分され、上層は第 4 層に類似する。下層は第 5 層に類似するが、第 4・6 層を母材とするブロック土を含むことから、機能時の堆積と推測される。いずれの溝からも遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

01031 溝 (図 40～43、図版 7・45)

調査区中央付近、7N-5d・e、6d・e において検出した東西方向を指向する溝である。本溝の直上には現代の攪乱が重なっていたが、機械掘削の段階で攪乱土を完全に除去していなかったため当初は遺構の存在を見落としていた。しかしながら、01001 溝との重複部分において、01001 溝埋土掘削後、溝の底から肩にかけて東西方向に延びる掘方が確認されたことから、改めて周辺を精査したところ辛うじて破壊を免れた肩口が検出されたことから、本遺構の存在が判明した。

攪乱のため正確な規模は不明であるが、検出した限りにおいては、幅は東端部付近において 2.00 m 前後、西端部付近において 2.40 m 前後、深さは 0.80 m 以上を測る。溝底面の高さは東端部で 17.3 m、西端部で 17.2 m を測り、東から西に向けて緩やかに低くなる。埋土は 8 層に細分される。このうち、埋土 2 層は第 3 層に類似するが、3 層を切るように堆積することから、第 3 層下面に帰属する遺構を見落として、一括して掘削している可能性がある。また、7 層の堆積状況から 8・9 層堆積後に掘り直された可能性も推測されるが、調査においては細分せず同時に掘削してしまったため確認することはできなかった。

遺物は土器や埴輪が出土した。多くは細片であるが、5 点を図示した。なお、埋土は一括して掘削しているため、遺物の帰属層位は不明である。172 は鉢である。底部外面に葉脈状の線刻が認められる。体部外面は器面の摩滅が著しく不明瞭であるが、左下がりのタタキ整形の後ナゲ消したと思われる。173～175 は高杯である。173 は椀形高杯の杯部片である。摩滅のため内外面ともに調整は不明である。174 は高杯の杯から脚部にかけての破片資料である。摩滅のため調整は不明である。杯部の断面から挿入付加法による成形と考えられる。175 も高杯の脚部の破片資料であるが、胎土が他の 2 点と異なり弥生時代中期初頭、Ⅱ様式の所産に類似する。しかしながら、中空であることからⅢ様式に下る可能

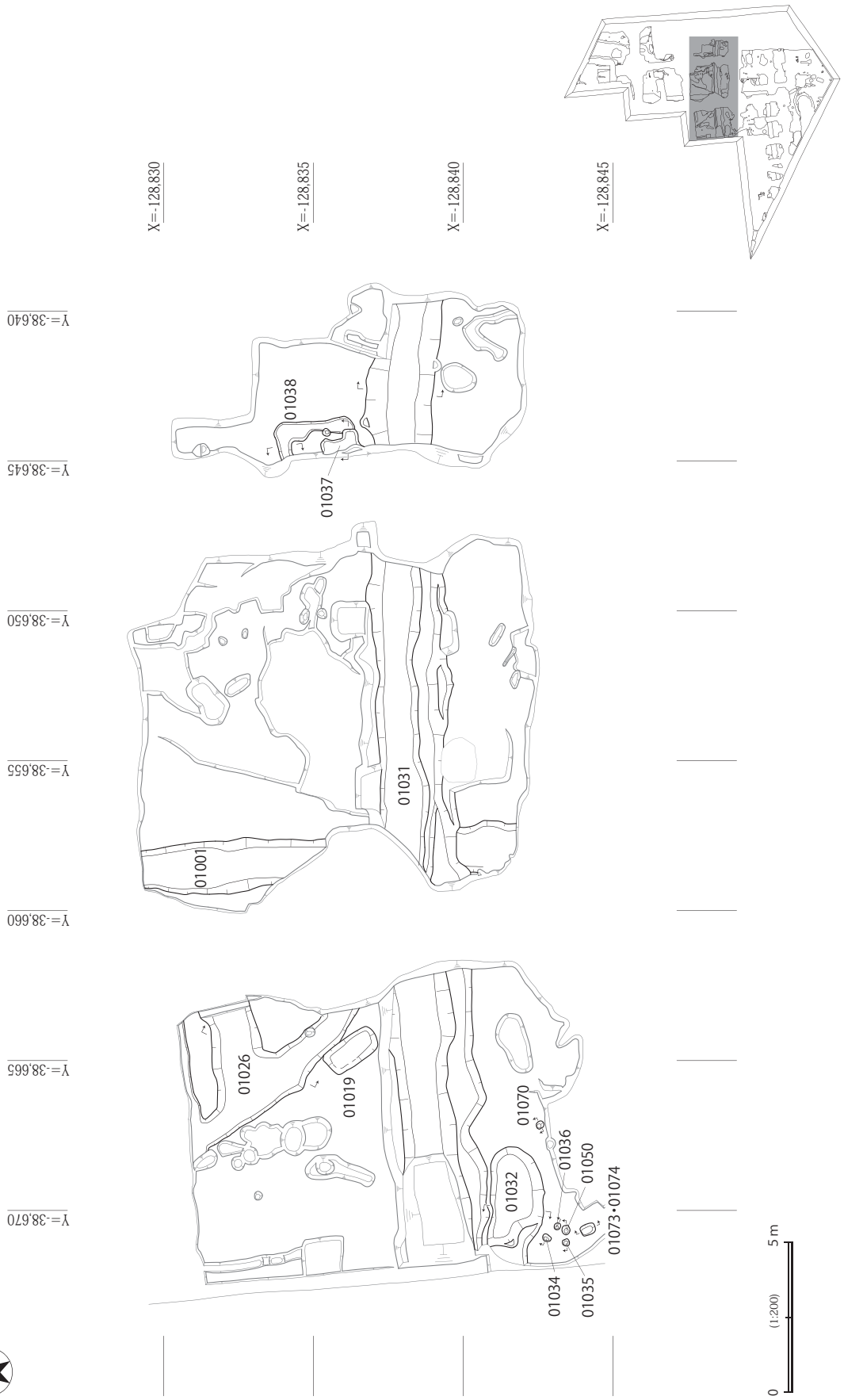
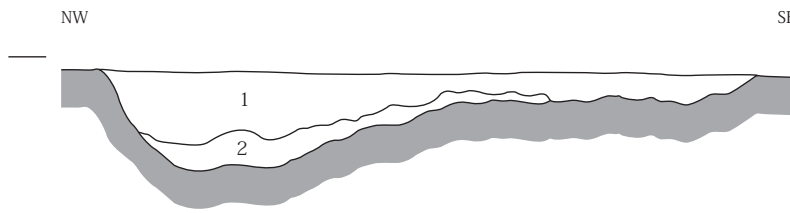


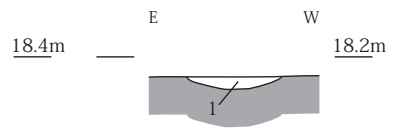
图 40 01031 溝他 平面

01026溝



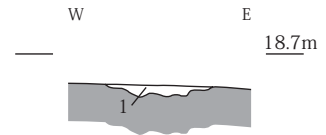
1. 10YR1.7/1 黒 シルト
(10YR3/1 黒褐 細砂質シルトのブロックを含む)
2. 10YR3/1 黒褐 細砂質シルト
(10YR1.7/1 黒 シルトと 2.5Y4/3 オリーブ褐
シルト混微砂～細砂のブロックを含む)

01038溝



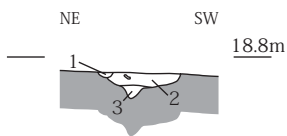
1. 2.5Y2/1 黒 細砂混シルト

01044溝



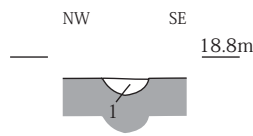
1. 10YR2/1 黒 極粗砂混粘質シルト

01045ピット・01046溝



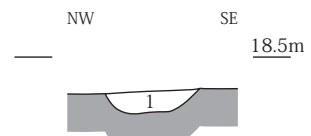
1. 10YR4/1 褐灰 細礫混中砂質シルト
[01046 溝]
2. 2.5Y4/1 黄灰 中砂質シルト
[01045 ピット]
3. 10YR3/1 黒褐 中砂質シルト
(10YR6/2 灰黄褐 細砂質シルトブロック
が若干混じる) [01045 ピット]

01046溝



1. 10YR4/1 褐灰 細礫混中砂質シルト

01067溝



1. 2.5Y2/1 黒 細砂混シルト

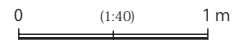
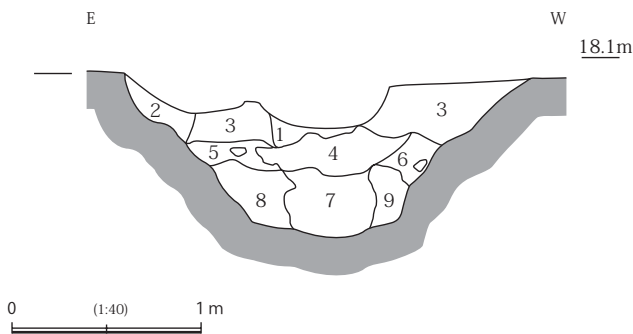
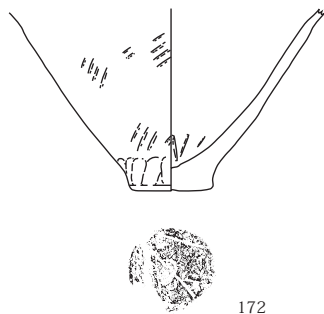
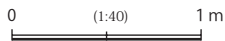


図 41 01026・01038・01044・01046・01067 溝、01045 ピット 断面

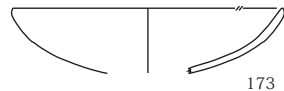
01031溝



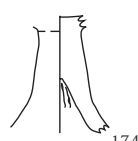
1. 2.5Y5/3 黄褐 シルト混細砂～粗砂 [攪乱]
2. 10YR4/1 褐灰 細砂混シルト
3. 2.5Y2/1 黒 粘質シルト
4. 10YR1.7/1 黒 粘質シルト
5. 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂～粗砂混シルト
6. 10Y5/1 灰 粘土～細砂
7. 10YR1.7/1 黒 細砂混粘質シルト
8. 10YR5/1 褐灰 ～10Y5/1 灰 細砂～粗砂混シルトと
礫混粘質シルトのブロック
9. 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂～粗砂混シルト



172



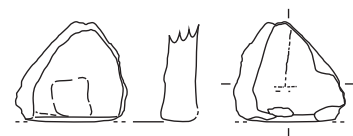
173



174



175



176

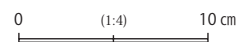


図 42 01031 溝 断面・出土遺物

性も残る。176は円筒もしくは朝顔形埴輪の底部片である。摩滅のため不明瞭であるが、外面にはヨコハケの静止痕が残り、内面には指頭圧痕が認められる。外面の色調は黄橙色を呈し、焼成はやや軟質である。

以上の遺物のうち、172～174は弥生時代後期後半から古墳時代初頭に位置付けられる。176は周辺の状況を勘案するといずれかの古墳から流入した可能性が高く、古墳時代中期後葉に帰属すると思われる。以上から、本溝は古墳時代中期後葉以降に帰属すると考えられるが、上述のとおり攪乱の影響により詳細な時期は不明である。仮に古墳時代中期後葉に掘削されたのであれば、本溝以南には古墳が認められないことから、墓域を画する機能を想定することも可能であろうか。その一方で、OT08-2調査においても、方位に則った溝(CSD-1)が確認されており、奈良時代から平安時代に帰属すると考えられる。溝の規模や埋土も本溝と近いことから、本溝も古代に帰属する蓋然性が高いと思われる。

01038 溝 (図 40・41)

01031 溝の東端北側、7N-5Dにおいて検出した。Lを倒立させたように屈曲する溝で、南側は01037土坑と重複する。幅は最も狭い地点において0.29m、最も広くなる屈曲部において1.12m、深さは0.14mを測る。埋土は単層で、第4層に類似する。遺物は出土しておらず詳細な時期は不明であるが、埋土から第4層下面に帰属すると考えられる。

01044 溝 (図 11・41)

01014 溝の東で検出した。北は調査区外へ延び、南は攪乱に破壊される。北北東-南南西を指向し、南側は一度細くなった後、土坑状に広がる。幅は広がった地点においては1.28m、それ以外では0.35～0.93mを測り、深さは0.07mを測る。埋土は単層で、第4層に類似する。遺物は弥生土器や土師器、須恵器片が出土している。

01046 溝 (図 11・41)

01014 溝の内部において検出した小溝である。長さ1.93m、最大幅0.30m、深さ0.08mを測る。埋土は単層で、第3層に類似する。遺物は土師器の細片が出土しているが図化できるものはなく、詳細な時期は不明であるが、埋土からは第3層下面に帰属する蓋然性が高いと考えられる。このように考えた場合、9号墳の埴丘規模は不明ではあるが、本遺構の規模からは埴丘上部から掘削されたとは考えにくい。このため中世の段階において埴丘は一定程度削平を受けていた可能性が高いと思われるが、本調査においては詳細を明らかにすることはできなかった。

01067 溝 (図 11・41)

01013 溝 [13号墳] の東で検出した。幅は0.70m、深さは0.11mを測る。埋土は単層で、第4層に類似する。遺物は土師器の細片2点が出土したが、図化できるものはなかった。詳細な時期は不明であるが、埋土から第4層下面に帰属すると考えられる。

3. 土坑

01004 土坑 (図 43～45、写真 45・46)

7N-8fにおいて検出した。南東の一部を攪乱により破壊されるが、やや東西に長い円形を呈する土坑と考えられる。長径1.14m、短径0.94m、深さ0.57mを測る。埋土は3層に細分される。最上層である埋土1は第4層が落ち込んだものと思われる。埋土2は第4層に類似するが粘性が強い。最下層となる埋土3は水成堆積層と考えられる。

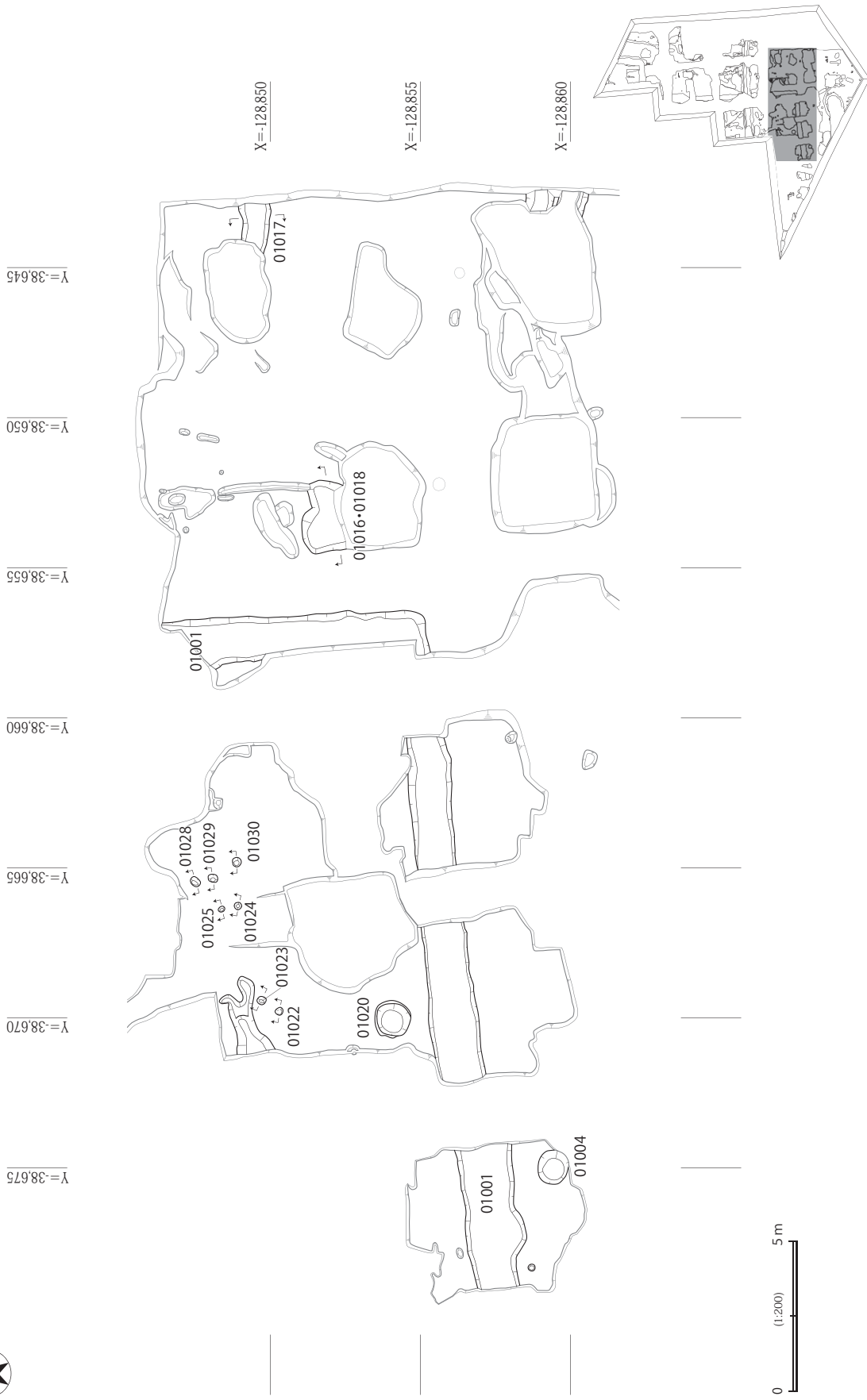


图 43 1区南部 平面

本遺構直上では機械掘削の段階で土器が多く露頭したことから、第4層を幾分残した状態で人力掘削に移行し、遺構および遺物の検出に努めた。その結果、遺物は埋土最上層に集中することが判明した。出土した遺物のうち18点を図示した。

177・191は壺である。177は広口壺の口縁部片である。摩滅のため調整は不明である。191は加飾壺の頸部から肩部にかけての破片資料である。頸部には突帯を貼り付け刻目を施す。突帯の直下には列点文と波状文を施す。調整は摩滅のため不明瞭であるが、頸部が縦方向のハケ、肩から体部にかけてはヘラミガキを、体部内面には横方向のハケを施すと思われる。

178・179・192～194は甕である。178は口縁部の破片資料である。頸部外面に左下がりのタタキ目が認められる。179は受口状口縁甕である。外面調整は摩滅のため不明瞭であるが、体部および口縁部下半はハケ、肩および口縁部上半はナデが施される。内面はナデと思われる。192は胴部中程に最大腹径を持つ甕で、口径が腹径を上回る器形を呈する。外面は幅広で左下がりのタタキ整形の後、部分的にナデ消している。内面は板ナデを施す。胴部下半に接合痕が残り、外面ではその上下において列状に連続する指頭圧痕が認められる。外面全体および底部内面に煤が付着する。193は肩部が張るタタキ甕である。外面の調整は左下がりのタタキ整形の後、部分的にナデ消す。内面は肩より下位にハケ調整を施す。口縁部はナデ調整を施すが、接合痕が残る。体部中程に認められる接合部には指頭圧痕が列状に認められる。194は生駒山西麓産胎土による甕である。肩の張りが弱く、口縁端部に面を持つ。

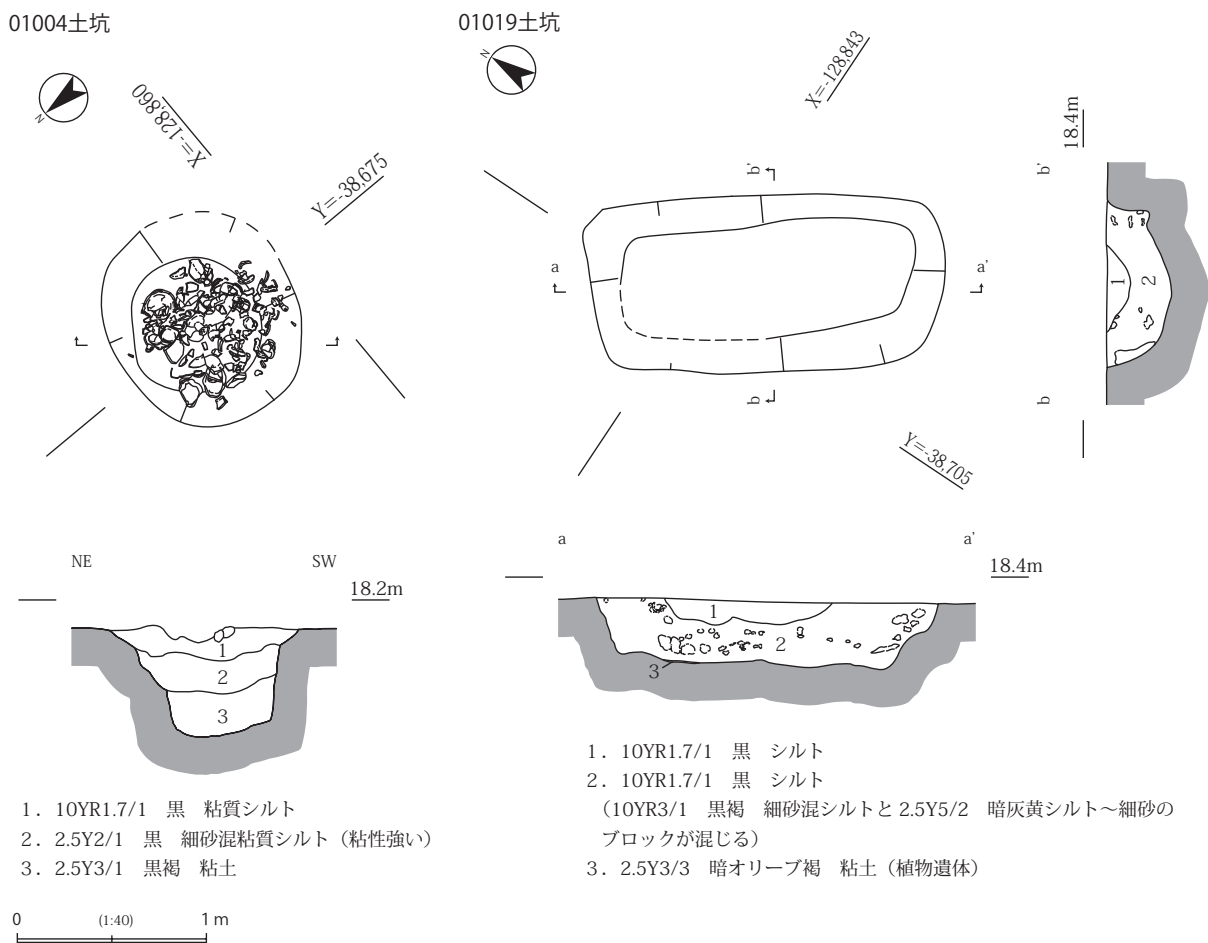


図44 01004・01019土坑 平・断面

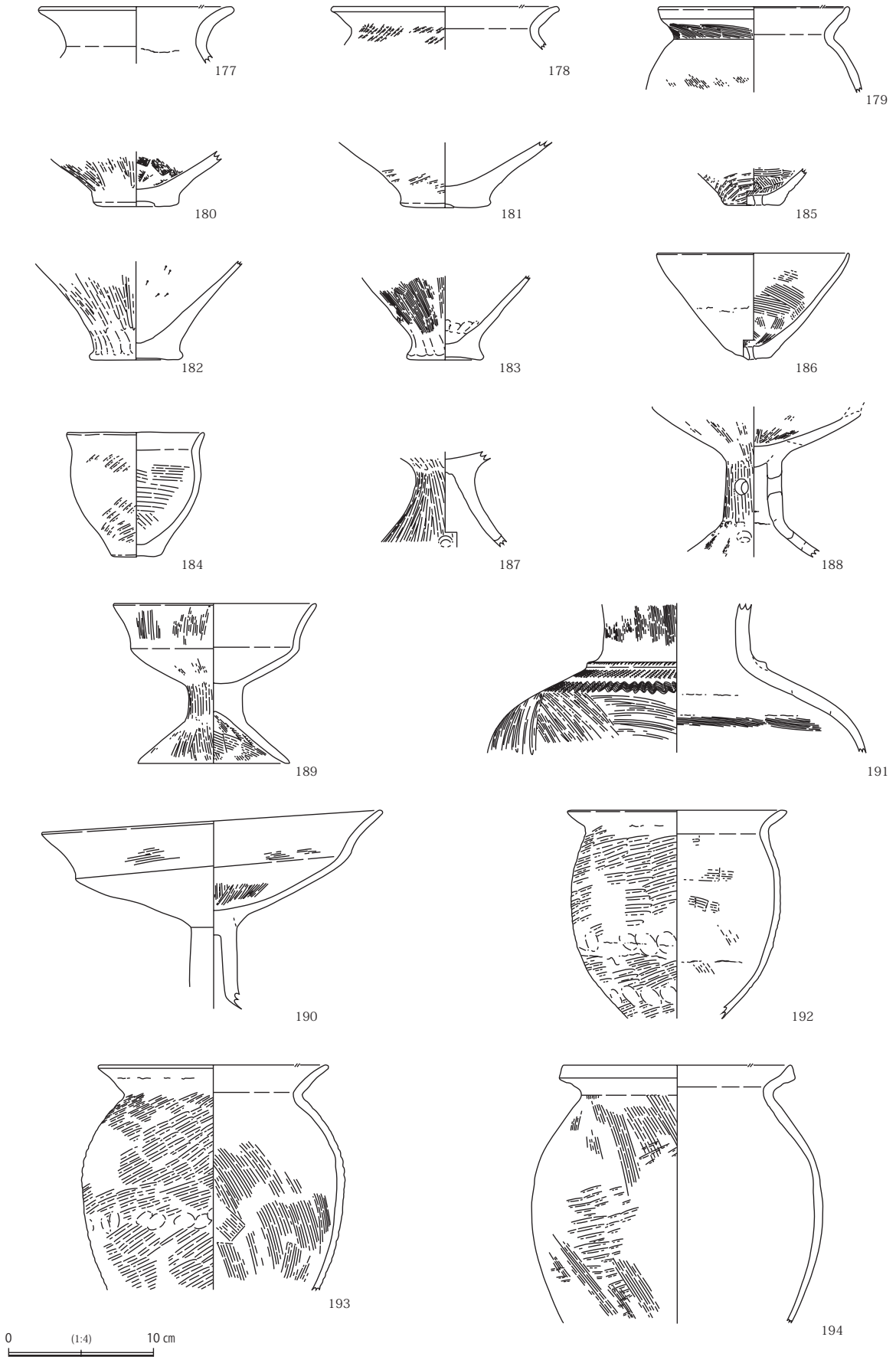


图 45 01004 土坑 出土遺物

体部外面は左下がりのタタキ整形の後ハケ調整を施すが、部分的でありタタキ目が残る。内面はヘラケズリの後ナデ調整を施す。外面下半部には煤が付着する。

184 は短く外反する口縁部を有する鉢である。器面は摩滅するが、体部外面には左下がりのタタキ整形、内面にはハケ調整が認められる。

185・186 は有孔鉢である。185 は底部の破片資料である。外面は左下がりのタタキ整形で、一部に黒斑が認められる。内面はハケ調整を施す。186 は底径が小さく、逆円錐形に近い台形を呈する。外面は摩滅のため調整不明である。内面はハケ調整を施す。底部付近の外面には黒斑が認められる。

187～190 は高杯である。187 はラッパ状に広がる脚部の破片資料で、裾の2箇所に円形の透孔が残る。配置から本来は4箇所に穿たれていたと思われる。外面には縦方向の密なヘラミガキを、内面にはナデ調整を施す。188 は杯部から脚部にかけて残存する。杯部は連続成形法で制作され、杯底部を塞ぐ粘土塊はヘソ状を呈する。杯部の調整は内外面ともにヘラミガキ、脚部は外面にヘラミガキを施す。脚部中程の3箇所および裾部の4箇所に円形の透孔が穿たれる。脚部中程に透孔を穿つ事例は他には認められず特異である。189 は全形を復元可能な資料である。杯部は内湾気味に広がる底部から外反する口縁部へと連続する。脚部は裾が高く大きく広がる器形を呈する。外面にはヘラミガキ、裾部内面にハケ調整を施す。杯部内面は摩滅のため不明である。190 は皿形杯部をもつ高杯で、口縁部は外反する。杯部は挿入付加法による成形と考えられる。脚部は円柱状に直立する。裾部は欠損するが、残存状況から屈曲し外方へ広がる形状を呈すると思われる。全体に器面の摩滅が著しく調整は不明瞭であるが、口縁部は内外面とも横方向のヘラミガキ、杯底部は放射状のヘラミガキが施されたと思われる。口縁部には部分的に黒斑が認められる。

180～183 は底部の破片資料である。180～182 は壺と思われる。180 は外面に縦方向のヘラミガキ、内面に板ナデ調整を施しており、外面には黒斑が認められる。181 は大きく外方へ開く器形を呈し、外面には左下がりのタタキ目が残る。182 は裾広がりの底部から外方へ直線的に立ち上がる器形を呈する。外面にヘラミガキを施し、内面はヘラケズリである。183 は鉢と思われる。裾広がりの底部から外方へ開く器形を呈する。外面はハケ調整を施す。

以上の出土遺物から、本遺構は弥生時代後期中葉から末に帰属すると考えられる。土坑の底は第6層中の礫層に達しており、湧水が認められた。加えて、埋土2・3層の様相から掘削された当初は井戸として機能しており、埋没が進み井戸としての機能を果たさなくなった後、廃棄土坑として利用されたと思われる。

01006 土坑 (図 37・46、図版 7)

01005 溝の北において検出した。平面は直径 0.63～0.65 m のほぼ正円形を呈し、深さは 0.62 m を測る。底は第6層中の礫層に達しており、湧水が認められたことから井戸として利用されていた可能性が高いと思われる。

遺物は弥生土器が複数点出土したが、細片のため図化できたのは1点のみであった。195 は長頸壺の口縁部片である。外方へ開く器形を呈する。外面はハケ調整を施すが、内面は無調整で、ユビオサエの痕跡が残る。口縁端部は丸くおさめ、直下に幅 0.3cm の凹線状の太い沈線を1条廻らせる。弥生時代後期中葉の所産と考えられる。

01007・01008 土坑 (図 37・38、図版 6)

01005 溝東端部北方において検出した。01007 土坑は、北北西—南南東方向に長い不整な楕円形を

呈する土坑で、北西端は攪乱により破壊される。長径 2.92 m 以上、短径 1.00 m、深さは 0.16 m を測る。埋土は単層で、第 4 層が入る。遺物は出土しなかった。

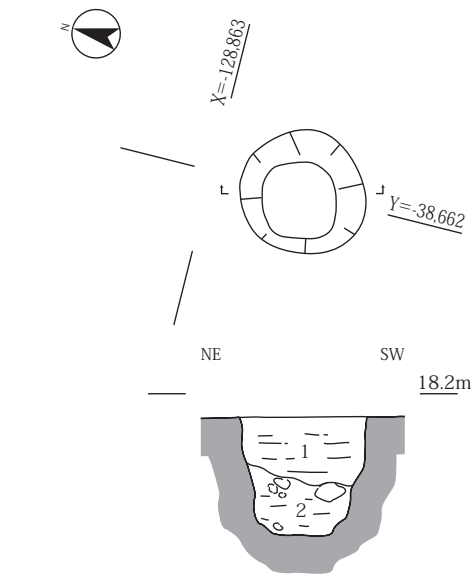
01008 土坑は攪乱に破壊されているため全容は不明であるが、隅丸長方形を呈していたものと推定される。確認しえた限りでは長辺 0.83 m 以上、短辺 0.66 m、深さは 0.25 m を測る。埋土は単層で、第 4 層と第 6 層からなるブロック土で充填されることから、人為的に埋め戻されたものと思われる。遺物は土器の細片がわずかに出土したのみである。

これら 2 基の土坑は埋土からいずれも第 4 層下面に帰属し、検出位置から 01005・01009 溝と関連する可能性も考えられるが、詳細は不明である。

01010 土坑 (図 37・38、図版 6)

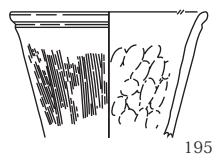
01009 溝と重複する、やや不整な円形を呈する土坑である。検出状況および断面観察から 01009 溝に先行することが明らかである。長径 0.81 m、短径 0.63 m、深さは 0.23 m を測る。埋土は 2 層に細

01006土坑



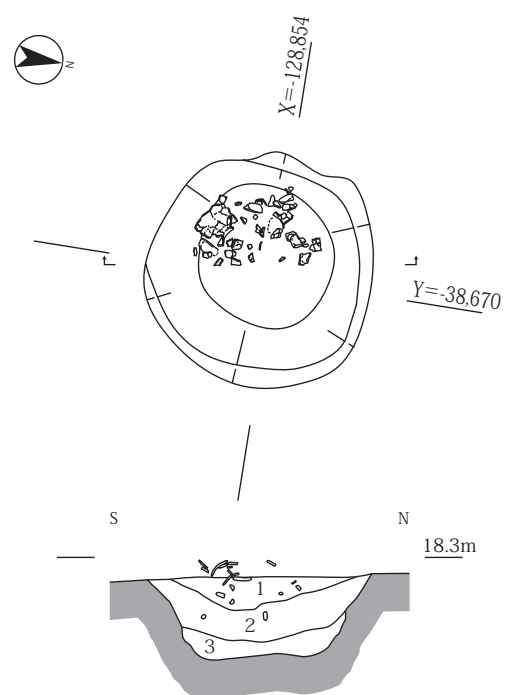
1. 10YR2/1 黒 粗砂質粘土
2. 10YR2/1 黒 粘土
- 2.5GY7/1 明オリーブ灰 シルト～粘土
と 2.5GY6/1 オリーブ灰 粘土～シルト
のブロック混じる

0 1m (1:40)

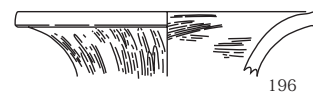


0 10cm (1:4)

01020土坑



1. 7.5Y2/1 黒 極細砂～粗砂混じりシルト質粘土
(遺物を多く含む)
2. 5Y2/1 黒 シルト質粘土
3. 7.5Y2/1 黒 粘土
(5Y6/1 灰 粘土の細かいブロックを含む)



195:01006土坑
196:01020土坑

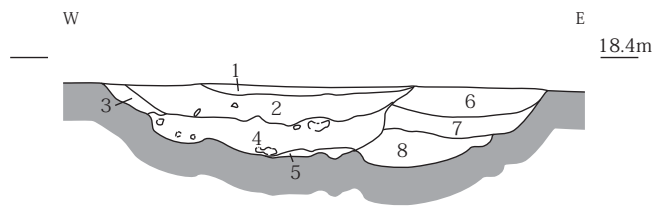
図 46 01006・01020 土坑 平・断面

分され、いずれも第5層に類似する。掘削時に掘りすぎたため平面図では示せていないが、断面観察では底面の一部が盛り上がる、やや不整な形状を呈する。埋土に第4層に由来する土が認められず、かつ遺物も出土していないことから、第5層堆積以前に自然に形成された窪みである可能性も残る。

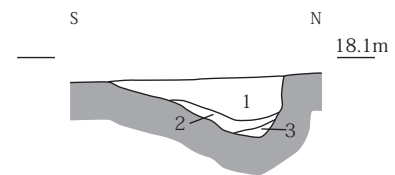
01011 土坑 (図 37・38、図版 6)

01005 溝の西端部に隣接する土坑である。南側は攪乱により大きく破壊されているため全形は不明である。深さは 0.14 m を測る。埋土は単層で、第 5 層に類似する。遺物は出土しなかった。周辺では部分的に第 5 層が残存する地点が認められることから、低くなる地形の先端を土坑と誤認している可能性も考えられる。

01016土坑・01018土坑



01017土坑



[01016 土坑]

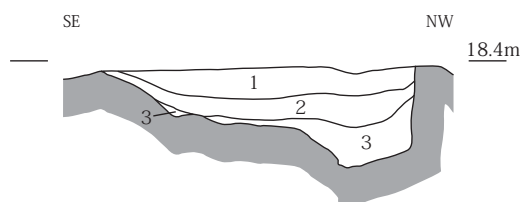
1. 2.5Y4/1 黄灰 細砂混シルト
2. 10YR2/1 黒 細砂混粘質シルト
3. 10YR3/1 黒褐 細砂混シルト
4. 10YR3/1 黒褐 細砂混シルト
(10YR2/1 黒 細砂混粘質シルトと
10YR4/2 灰黄褐 細砂のブロックを
含む)
5. 7.5YR3/1 黒褐 シルト

[01018 土坑]

6. 7.5YR2/1 黒 細砂混粘質シルト
7. 10YR3/1 黒褐 微砂～細砂混シルト
8. 7.5YR3/1 黒褐 微砂混シルト

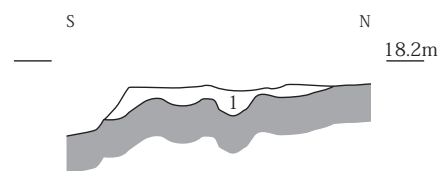
1. 10YR2/1 黒 細砂混シルト
2. 10YR1.7/1 黒 粘質シルト
3. 10YR3/1 黒褐 微砂～細砂混シルト
(やや粘性おびる)

01032土坑



1. 10YR1.7/1 黒 細砂～粗砂混シルト
2. 10YR1.7/1 黒 粘質シルト (粗砂・細礫をわずかに含む)
3. 10YR1.7/1 黒 粘質シルト
(10YR3/2 黒褐 粘質シルトと 10YR4/1 褐灰 細砂～粗砂
のブロック混じる)

01037土坑



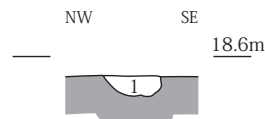
1. 2.5Y2/1 黒 細砂混シルト

01040土坑



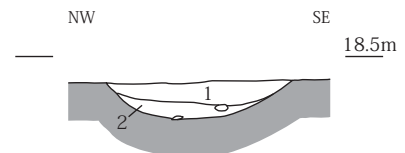
1. 10YR2/1 黒 極細砂混粘質シルト

01041土坑



1. 2.5Y3/1 黒褐 粗砂混粘質シルト

01066土坑



1. 10YR3/1 黒褐 細砂混シルト
(粗砂～礫をわずかに含む)
2. 2.5Y2/1 黒 細砂混シルト

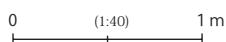


図 47 01016～01018・01032・01037・01040・01041・01066 土坑 断面

01016・01018 土坑 (図 43・47)

7 N-6 f において検出した。2 基の土坑が重複しており、平・断面の状況から 01016 土坑が後出することが明らかである。いずれも南側は攪乱により破壊される。

01016 土坑は幅 1.65 m、深さ 0.35 m を測り、埋土は 5 層に細分される。このうち最上層にあたる埋土 1 層は第 3 層が落ち込むが、2 層以下には第 3 層を含まない。また、遺物は土師器の細片が出土しているが、明らかに中世以降に帰属すると思われるものは認められない。こうしたことから、1 層は窪地状に残存していた箇所に第 3 層が堆積したものであり、第 4 層下面に帰属する可能性が高いと思われる。

01018 土坑は幅 1.02 m 以上、深さ 0.43 m を測る。埋土は 3 層に細分され、最上層は第 4 層が落ち込む。遺物は土師器の極細片 2 点が出土した。詳細時期は不明であるが、埋土から第 4 層下面に帰属すると考えられる。

01017 土坑 (図 43・47)

01016・01018 土坑の東側、7 N-5 e において検出した。東西両端を攪乱に破壊されるため全容は不明である。土坑としたが、東へ延びる溝状の遺構となる可能性もある。幅は 1.04 m、深さは 0.32 m を測る。埋土は 3 層に細分され、埋土 1 層ならびに 2 層は第 4 層に由来すると考えられる。遺物は出土しておらず詳細な時期は不明であるが、第 4 層下面に帰属すると考えられる。

01019 土坑 (図 40・44、図版 7)

01026 溝と 01031 溝の間にあたる、7 N-7 d において検出した。台形に近い隅丸長方形を呈する土坑で、長辺は 1.81 m、短辺は 0.88 m、深さは 0.34 m を測る。埋土は大きく 2 層に細分される。埋土 1 層は土坑の中心部においてのみ確認され、土質から第 4 層が落ち込んだものと考えられる。埋土の大部分を占める 2 層は第 4～6 層を母材とするブロック土であり、人為的に埋め戻されたものと思われる。遺物は土師器の細片が出土しているが、図化できるものはなかった。

長方形を呈する土坑の形状と、埋土が人為的に埋め戻された可能性が高いと思われるブロック土であることから、墓坑の可能性を考慮し調査を行ったが、底の一部に植物遺体の痕跡が認められたのみで、墓と断定するには至らなかった。詳細な時期についても不明であるが、ブロック土に第 3 層を含まないことから第 4 層下面に帰属すると考えられる。

01020 土坑 (図 43・46、図版 7)

7 N-7・8 f において検出した、直径 1.21 m 前後の不整な円形を呈する土坑である。深さは 0.44 m を測る。埋土は 3 層に細分される。最上層である埋土 1 層は第 4 層に類似し、土器を多く含む。2・3 層は水成堆積層と考えられ、底は第 6 層中の礫層に達していることから、01004 土坑や 01006 土坑と同様に、井戸として掘削され、埋没後は廃棄土坑として利用されたものと考えられる。

遺物は弥生土器が出土しているが、大部分は細片であり、図化できたのは 1 点のみである。196 は壺の口縁部片である。外反し、端部は面をもつ。器面は摩滅しており不明瞭であるが、外面は縦方向、内面は横方向のヘラミガキを施す。弥生時代後期後半の所産と思われる。

01032 土坑 (図 40・47、図版 7)

01031 溝の西端南側に近接する。西側は調査区外へと延びるため確実ではないが、東西方向に長い楕円形に近い形状を呈する大振りな土坑と考えられる。長径 3.64 m 以上、短径 1.70 m、深さは 0.53 m を測る。北壁がほぼ垂直に落ち込むのに対し、南側は途中で段状の平坦面を有する。埋土は 3 層に細

分される。いずれも第4層に類似するが、埋土3層は第5層に由来するブロック土を含む。埋土の様相から、一定期間開放状態にあったものと推測される。遺物は弥生時代後期の土器や土師器が出土しているが、詳細な時期を窺えるものはなかった。埋土から第4層下面に帰属すると考えられるが、遺構の性格は不明である。

01037 土坑 (図 40・47)

7 N-5 dにおいて検出した。西側は攪乱により破壊され、東端部は01038溝と重複する。検出状況から本土坑が新しいと考えられる。最大幅0.68 m、深さは0.20 mを測る。埋土は単層で、第4層が落ち込む。遺物は土器の極細片が1点出土したが、器種や時期は不明である。土坑としたが、平面ならびに底面はいずれも不整形を呈しており、自然に形成された窪みである可能性が高い。

01040 土坑 (図 11・47)

01044溝の東で検出した、隅丸方形に近い楕円形を呈する土坑である。長径1.13 m、短径0.62 m、深さは0.07 mを測る。埋土は単層で、第4層に類似することから第4層下面に帰属すると考えられる。遺物は弥生土器や土師器が出土しているが、器形や時期が窺えるものはなかった。

01041 土坑 (図 11・47)

01040土坑の南側、ほぼ接するようにして検出した、隅丸方形に近い楕円形を呈する土坑である。長径0.58 m、短径0.32 m、深さは0.11 mを測る。埋土は第5層に類似する。遺物は土師器の細片3点が出土したが、時期を窺うことはできない。埋土が第5層に類似することから、人為的に掘削されたものではなく、自然に形成された窪みを遺構と誤認した可能性がある。

01061 土坑 (図 37・38)

7 N-6 gにおいて検出した。北側が攪乱により破壊されるが、不整な円形を呈していたと思われる土坑である。東側は01009溝と重複し、検出状況から溝よりも新しいと考えられる。東西径0.73 m、深さは0.16 mを測る。埋土は単層で、第4～6層を母材とするブロック土からなる。掘削時に掘りすぎたため平面図では示せていないが、断面観察では底面は平坦ではなく、凹凸があることが窺える。遺物は土器の細片が出土しているが、図化できるものはなく、詳細時期は不明である。

01063 土坑 (図 37・38、図版6)

調査区南壁際にあたる7 N-6 hにおいて検出した。南は調査区外へと延び、一部側溝掘削に伴い破壊してしまっている。検出しえた限りでは、幅は0.91 m、深さは0.22 mを測る。埋土は3層に細分され、埋土2層は第5層に類似し、3層は第5層と第6層を母材とするブロック土からなる。1層は第4層が柱痕跡状に貫入するものであり、柱穴となる可能性もあるが詳細は不明である。遺物は出土しておらず時期は不明であるが、埋土に第3層を含まないことから第4層下面に帰属すると考えられる。

01066 土坑 (図 11・47)

01067溝の北において検出した。北側は攪乱により破壊される。検出当初は上述した01044溝に連続する溝となる可能性も考慮したが、01044溝よりも深くなることから楕円形を呈する土坑と判断した。幅は1.00 m、深さは0.23 mを測る。埋土は単層で、第4層に類似する。遺物は弥生土器や土師器の細片が出土しているが、図化することはできなかった。

4. ピット

ピットは7 N-7 eと7 N-6 g周辺においてまとまって検出されたが、明確に建物を復元できるも

のはなかった。しかしながら、上述したように 01005・01009 溝が建物の外周溝と想定した場合、その円弧内の中心付近に位置する 01055・01056・01058 ピットについては建物の柱穴となる可能性を含む。その一方で、01055・01056・01058 ピットは隣接する 01059 ピットを含めた建物となる可能性も残るが、いずれにせよ周辺の攪乱が著しく判然としない。なお、01059 ピットは誤って記録を作成する前に掘削してしまったため断面図は示せていないが、調査時の観察から第 4 層下面に帰属すると考えられる。以下、各遺構について記す。

01022 ピット (図 43・48)

7N-7f の北西隅において検出した、直径 0.24 m を測る円形のピットである。深さは 0.09 m と浅い。埋土は単層で、第 4 層が入る。遺物は出土していないため詳細時期は不明であるが、埋土から第 4 層下面に帰属すると考えられる。

01023 ピット (図 43・48)

01022 ピットの北東側に隣接する、円形のピットである。直径 0.22 m、深さ 0.11 m を測る。埋土は単層で、01022 ピットと同質同色である。遺物は出土しておらず、詳細時期は不明である。

01024 ピット (図 43・48)

01023 ピットの東側において検出した、直径 0.28 m を測る円形のピットである。深さは 0.16 m を測り、埋土は 2 層に細分される。埋土 1 層は堆積状況から柱痕跡と思われ、土質から第 4 層が落ち込んだものと考えられる。2 層は第 4 層と第 6 層を母材としたブロック土である。第 4 層下面に帰属すると考えられるが、遺物は出土しなかった。

01025 ピット (図 43・48)

01024 ピットの北側に隣接する楕円形を呈するピットである。長径 0.21 m、短径 0.15 m、深さ 0.12 m を測る。埋土は単層で、第 4 層が落ち込む。遺物は土師器の細片が 1 点出土したが、詳細は不明である。埋土から第 4 層下面に帰属すると考えられる。

01028 ピット (図 43・48)

01025 ピットの北東において検出した隅丸方形に近い楕円形を呈するピットである。長径 0.35 m、短径 0.27 m、深さ 0.23 m を測る。埋土は単層で、第 5 層を主体とし、第 6 層を母材とするブロック土を含む。遺物は土師器の細片が 4 点出土したが、図化できるものはなかった。第 4 層下面に帰属すると思われるが、埋土に第 4 層を含まないため確実ではない。

01029 ピット (図 43・48)

01028 ピットの南に隣接する隅丸方形を呈するピットである。長軸 0.29 m、短軸 0.24 m、深さ 0.34 m を測る。埋土は単層で、01028 ピットと同色同質である。遺物は出土しなかった。

01030 ピット (図 43・48)

01029 ピットの南側において検出した、やや歪な円形を呈するピットである。直径 0.28 m、深さ 0.14 m を測る。埋土は単層で、01028・01029 ピットと同色同質である。遺物は土師器の細片が出土したが、器形や時期などの詳細は不明である。

01034 ピット (図 40・48)

7N-7・8e の境界において検出した楕円形を呈するピットである。長径 0.28 m、短径 0.21 m、深さ 0.09 m を測る。埋土は単層で、第 5 層を主体とし、第 4・6 層を母材とする細かいブロック土を含む。遺物は土師器の極細片が出土した。詳細な時期は不明であるが、埋土の様相から第 4 層下面に帰属する

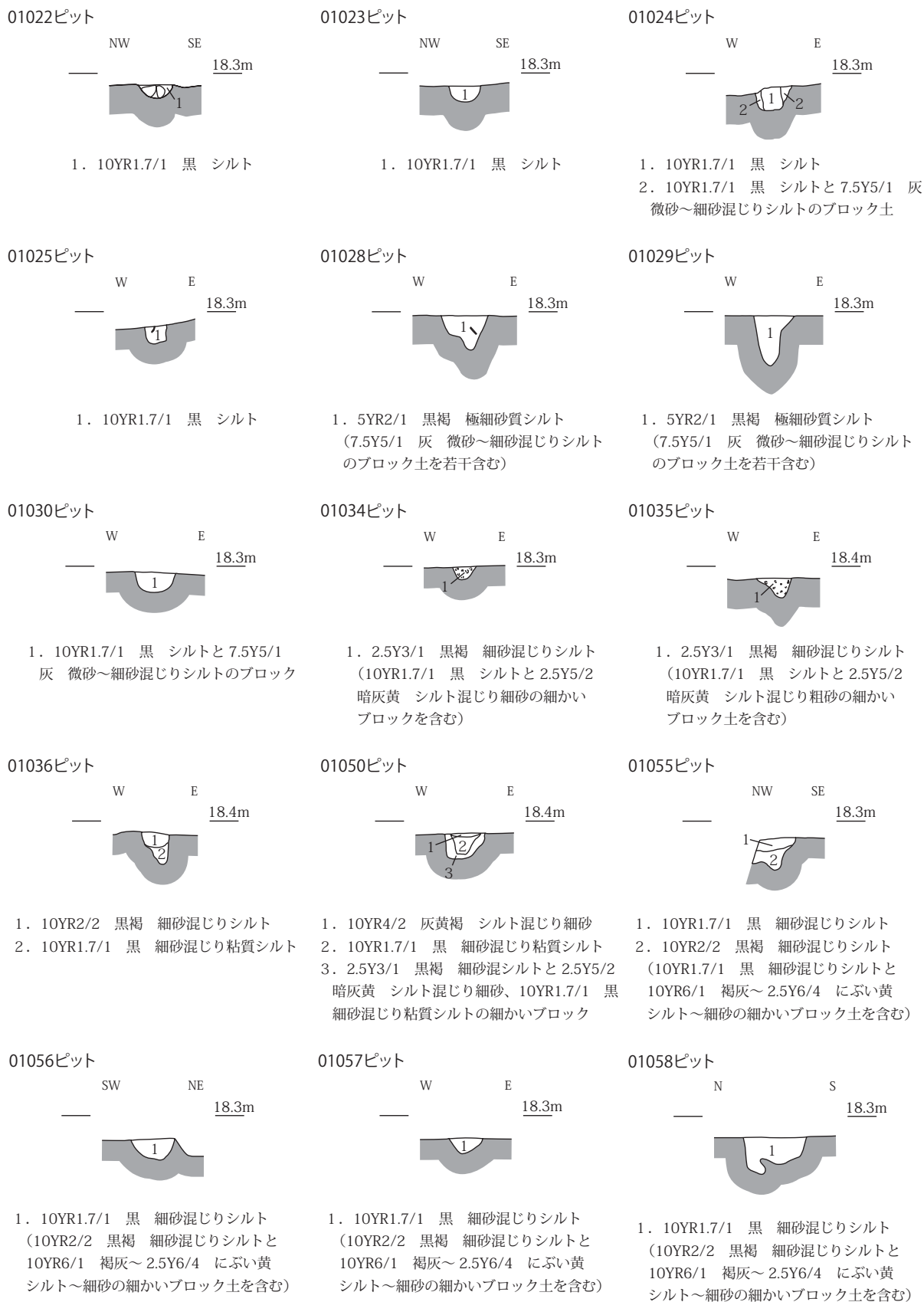


図 48 01022～01025・01028～01030・01034～01036・01050・01055～01058 ピット 断面

と考えられる。

01035 ピット (図 40・48)

01034 ピットの南西に隣接するピットである。平面は歪な円形を呈し、直径 0.29 m、深さ 0.13 m を測る。埋土は単層で、01034 ピットと同色同質である。遺物は土師器の細片 2 点が出土したが、器種や帰属時期は不明である。

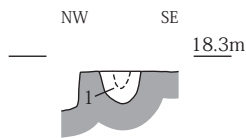
01036 ピット (図 40・48)

01034 ピットの南東側に隣接するピットである。平面は楕円形を呈し、長径 0.22 m、短径 0.18 m、深さ 0.21 m を測る。埋土は 2 層に細分され、上層は第 5 層に類似し、下層は第 4 層に由来すると考えられる。遺物は出土していないが、第 4 層下面に帰属すると考えられる。

01050 ピット (図 40・48)

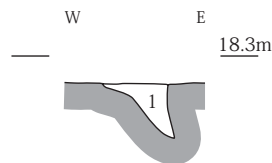
01035 ピットの東側、01036 ピットの南側に隣接する隅丸長方形に近い楕円形を呈するピットである。長径 0.30 m、短径 0.25 m、深さ 0.22 m を測る。埋土は 3 層に細分され、埋土 1 層は第 3 層が落ち込んだと考えられる。2 層は第 4 層に由来し、断面形状から柱痕跡と思われる。3 層は第 4～6 層を母材とするブロック土で、第 5 層を多く含む。遺物は土師器の細片 1 点が出土した。詳細な時期は不明

01060ピット



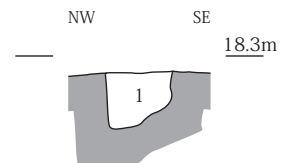
1. 10YR2/2 黒褐 細砂混じりシルト (10YR1.7/1 黒 細砂混じりシルトと 10YR6/1 褐灰～2.5Y6/4 にぶい黄シルト～細砂のブロック土を含む)

01062ピット



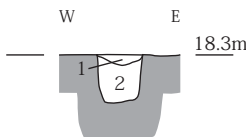
1. 10YR1.7/1 黒 細砂混じりシルト (10YR2/2 黒褐 細砂混じりシルトと 10YR6/1 褐灰～2.5Y6/4 にぶい黄シルト～細砂の細かいブロック土を含む)

01064ピット



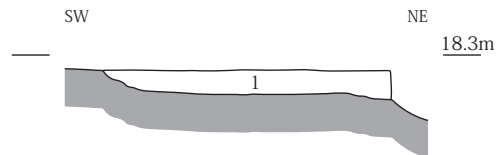
1. 10YR2/2 黒褐 細砂混じりシルト (10YR1.7/1 黒 細砂混じりシルトと 10YR6/1 褐灰～2.5Y6/4 にぶい黄シルト～細砂の細かいブロック土を含む)

01070ピット



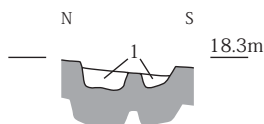
1. 10YR2/2 黒褐 中砂～粗砂混じりシルト
2. 10YR3/1 黒褐 シルト混じり中砂～粗砂 (10YR2/2 黒褐 細砂混じりシルトと 2.5Y6/2 灰黄 シルト～細砂の細かいブロック土を含む)

01071落ち込み



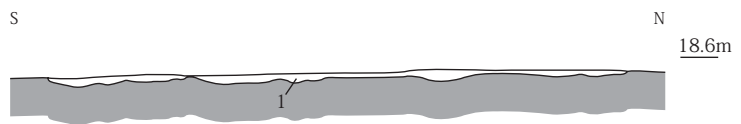
1. 2.5Y2/1 黒 細砂混粘質シルト (微砂～細砂の細かいブロックを含む)

01073・01074ピット



1. 2.5Y3/1 黒褐 細砂混じりシルト (10YR1.7/1 黒 シルトと 2.5Y5/2 暗灰黄シルト混粗砂の細かいブロック土を含む)

01015落ち込み



1. 10YR1.7/1 黒 粘質シルト

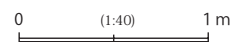


図 49 01060・01062・01064・01070・01073・01074 ピット、01015・01071 落ち込み 断面

であるが、埋土に第3層を含むことから、第3層下面に帰属すると考えられる。

01055 ピット (図 37・48、図版 6)

西側を攪乱により破壊されるが、隅丸方形に近い円形のピットと思われる。直径は0.32 m、深さは0.22 mを測る。埋土は2層に細分され、上層は第4層が落ち込む。下層は第5層を主体とし、第4・6層を母材とするブロック土を含む。遺物は出土しておらず詳細な時期は不明であるが、第4層下面に帰属すると考えられる。

01056 ピット (図 37・48、図版 6)

01055 ピットの南西において検出した。北は攪乱に破壊され残存していないが、直径0.31 m、深さ0.14 mを測る。埋土は単層で、第4層を主体とし、第5・6層を母材とする細かいブロック土を含む土からなる。遺物は出土しなかった。第4層下面に帰属すると考えられる。

01057 ピット (図 37・48)

調査区南端部、7 N-7 hにおいて検出した。平面は楕円形を呈し、長径0.22 m、短径0.17 m、深さ0.10 mを測る。埋土は単層で、第4層を主体とし、第5・6層を母材とするブロック土を含む。第4層下面に帰属すると考えられる。遺物は出土しなかった。

01058 ピット (図 37・48、図版 6)

01055 ピットの南において検出した、平面楕円形を呈するピットである。長径0.43 m、短径0.29 mを測る。底の形状はやや歪であり、北側が抉るように深くなる。深さは南側では0.18 m、北側の最も深い地点において0.26 mを測る。柱の抜き取りに伴う変形であろうか。埋土は単層で、01056 ピットと同様に第4層を主体とし、第5・6層の細かいブロック土が混じる土となる。遺物は出土しなかったが、第4層下面に帰属すると考えられる。

01060 ピット (図 37・49、図版 6)

7 N-6 gにおいて検出した。南東部は攪乱により破壊されるため確実ではないが、隅丸方形に近い楕円形を呈していたと推測される。短径0.30 m、深さ0.17 mを測る。埋土は第5層を主体とし、第4・6層を母材とするブロック土を含む。なお、明確な層界は認められなかったが、断面図において破線で示した範囲の内部には、周辺より第4層が多く認められた。柱痕跡であろうか。遺物は出土しなかったが、第4層下面に帰属すると考えられる。

01062 ピット (図 37・49、図版 6)

01058 ピットの南に隣接する、楕円形を呈するピットである。長径0.36 m、短径0.29 m、深さ0.27 mを測る。埋土は単層で、第4層を主体とし、第5・6層を母材とする細かいブロック土を含む。遺物は出土しなかったが、第4層下面に帰属すると考えられる。

01064 ピット (図 37・49)

01060 ピットの北において検出した、楕円形を呈するピットである。長径0.50 m、短径0.36 m、深さ0.30 mを測る。埋土は単層で、第5層を主体とし、第4・6層を母材とする細かいブロック土を含む。遺物は出土しなかったが、第4層下面に帰属すると考えられる。

01070 ピット (図 40・49)

01032 土坑の東にあたる7 N-7 eにおいて検出した。平面は不整な円形を呈し、長径0.27 m、短径0.19 m、深さ0.25 mを測る。埋土は2層に細分され、上層は第4層が落ち込む。下層は第5層を主体とし、第4・6層を母材とする細かいブロック土を含む。遺物は出土しなかったが、第4層下面に

帰属すると考えられる。

01073・01074 ピット (図 40・49)

01050 ピットの南側において検出した。調査では誤って単一の遺構として掘削してしまったが、いくらか掘り下げた段階で2基のピットが重複していることが明らかとなった。しかしながら、上半部は失ってしまったため先後関係は明らかにしえなかった。推定される検出面からの深さは、01073 ピットが0.13 m、01074 ピットが0.11 mを測る。埋土は同色同質であり、第5層を主体とし、第4・6層を母材とする細かいブロック土を含む。遺物は土師器の細片が出土しており、出土地点から01073 ピットに含まれていたものと考えられる。いずれも埋土に第3層を含まないことから、第4層下面に帰属すると考えられる。

5. 落ち込み

01015 落ち込み (図 11・49、図版 4)

01014 溝の南東角付近において検出した、不整な窪みである。南北3.42 m、東西3.08 m、深さは0.05 mを測る。埋土は単層で第4層が落ち込むことから第4層下面に帰属すると考えられる。遺物は土師器や須恵器が出土しているが時期を窺うことができるものは含まれなかった。

01071 落ち込み (図 11・49)

01067 溝の南方において検出した。大部分を攪乱に破壊されているため全形は不明である。底はほぼ平坦で、深さは0.19 mを測る。埋土は単層で、第4層に類似する。遺物は出土しなかったが、埋土の様相から第4層下面に帰属すると考えられる。

6. 遺構外出土遺物

本項では機械掘削および遺構検出時において出土した主な遺物を一括して報告する。

197は縄文土器深鉢の口縁部片で、端部からやや下がった位置に突帯を貼り付け、刻目を施す。攪乱の整形中に出土した。縄文時代晩期末、長原式に比定される。

198は白磁碗の口縁部片であり、玉縁をもつ。11世紀後半から12世紀前半頃の所産か。第3・4層を一括して掘削している際に出土したものであるが、帰属時期を考慮すると第3層に含まれていた可能性が高いと考えられる。

199～220は第4層掘削中に出土した。

199・218は壺である。199は肩部の破片資料である。外面には横位に連続する3条の竹管文が施される。弥生時代末から古墳時代初頭頃に帰属すると思われる。218は体部から底部にかけての破片資料である。底部はわずかに尖る丸底で、体部は球形を呈する。器面の摩滅が著しく、内外面とも調整は不明である。体部中程および底部付近外面に黒斑が認められる。古墳時代初頭から前期頃の所産か。

200～203は甕である。200・201は口縁部の破片資料である。いずれもくの字状に屈曲する頸部から口縁部が直線的に延びるが、200は口縁部がやや肥厚する。201は体部内面にケズリを施しているが、それ以外の調整は摩滅が著しく不明である。202は緩やかに内湾しながら立ち上がる体部から、直線的に外方へ開く口縁部へと続く。頸部の屈曲は弱い。肩部に左下がりのタタキ目が部分的に認められる。203は口縁端部に面をもつ。摩滅のため調整は不明である。以上の遺物は、弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての所産と考えられる。

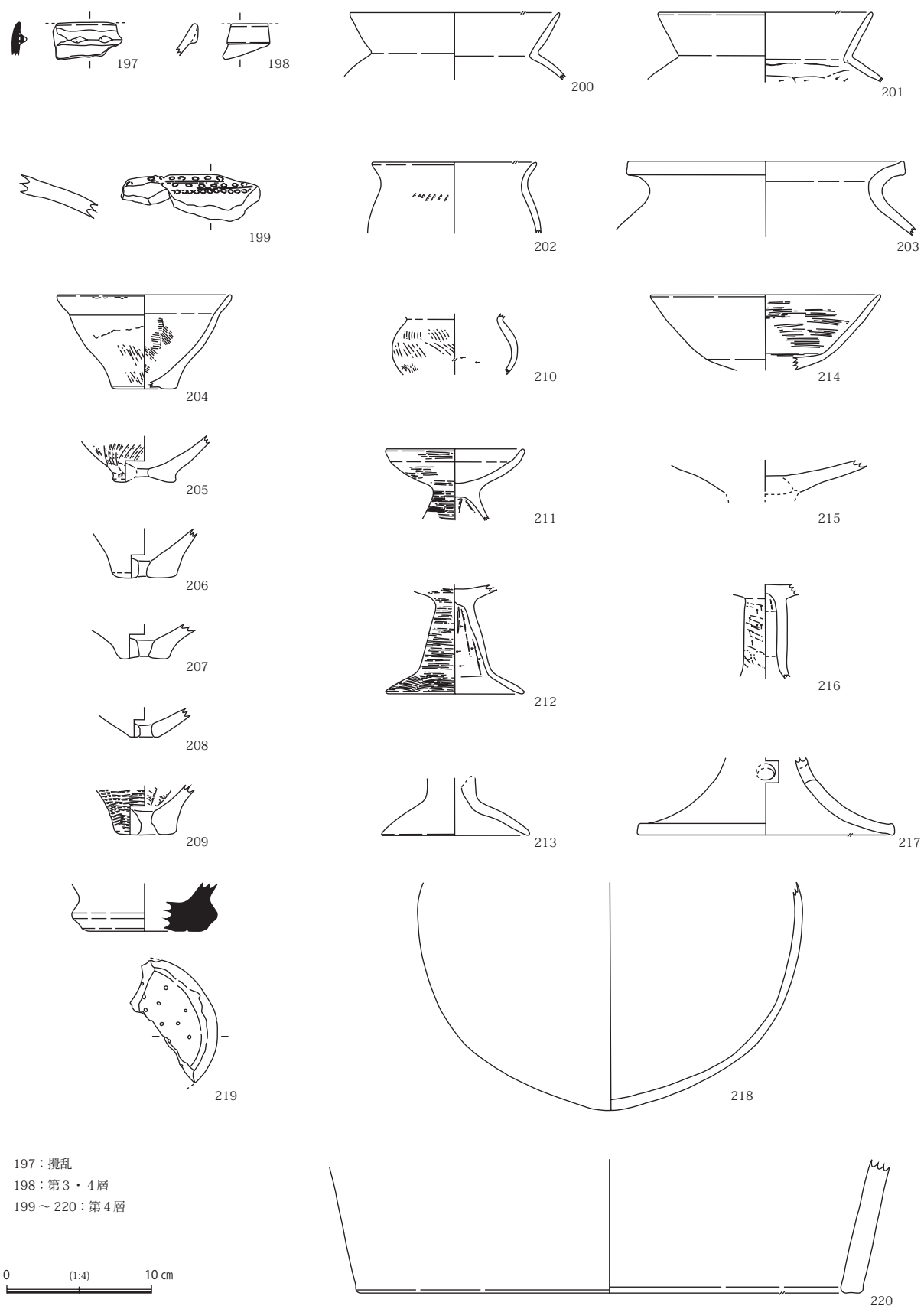


图 50 1区 遺構外 出土遺物(1)

204 は鉢である。体部外面および底部接地面にヘラミガキが施される。

205～209は有孔鉢の底部片である。205・207は2回、それ以外は1回の刺突により穿孔部をつくる。弥生時代後期後半から古墳時代初頭の所産と思われる。

210は小型丸底壺の体部片である。やや扁平な器形を呈していたと思われ、体部外面はハケの後、部分的にナデ調整を施す。

211は小型器台の受部から脚部にかけての破片資料である。口縁端部は直線的に外方へ延びる。外面は全体に横方向のヘラミガキを施す。

212～217は高杯である。212は杯底部から脚部にかけて残存する。脚部はハの字状に開き、屈曲して裾部へと延びる。外面全体に横方向のヘラミガキ、脚柱部内面にはヘラケズリが施される。213は脚部の破片資料であり、直立気味の脚柱部から内湾気味に広がる裾部へと連続する。器面の摩滅が著しく調整は不明である。214は杯部の破片資料である。杯底部は浅い。口縁部は長く、直線的に延びる。摩滅のため外面調整は不明であるが、内面は横方向のヘラミガキが施される。215は杯底部の破片資料である。破断面の様相から、挿入付加法による成形がなされたと考えられる。216は杯底部から脚柱部にかけて残存する。外面はユビオサエ、ヘラケズリ整形の後、粗いヘラミガキが施される。杯底部および脚部内面はナデ調整が施される。217は脚裾部の破片資料で、湾曲しながら延び、端部に面をもつ器形を呈する。円形の透孔が1箇所残存する。摩滅のため調整は不明である。以上のうち、217は弥生時代後期後半、212・214は古墳時代前期に比定される。

219は須恵器捏鉢である。底部外面には直径0.3cm前後の浅い刺突が不規則に施される。

220は移動式竈の脚部片である。生駒山西麓産胎土。器面は摩滅が著しく調整は不明である。なお、図化した以外にも同一個体と思われる破片が認められたが、接合しなかった。

221は砥石である。断面台形に整形されており、各面に整形時のものと思われる擦痕が認められる。台形の上面を砥面として使用しているが摩耗具合は弱く、あまり使用されることなく廃棄されたようである。機械掘削中に出土したが、帰属層位は不明である。222は円礫で、部分的に摩耗し、平滑な面が認められることから磨石として利用されたと思われる。

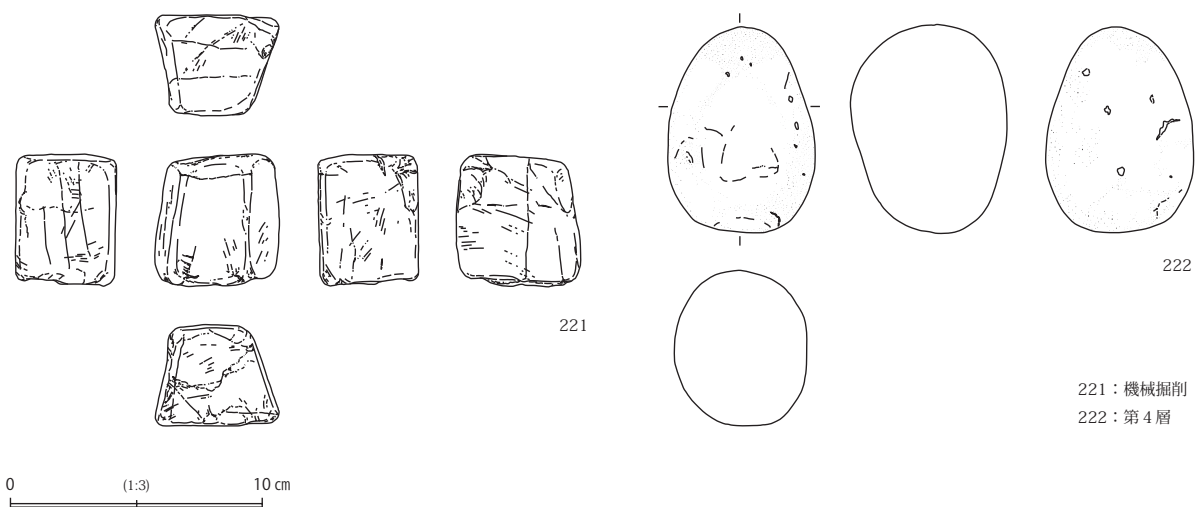


図 51 1区 遺構外 出土遺物(2)

第3節 2区の調査成果

2区と第4節において報告する3区は追手門学院大学新校舎に伴う食堂建設予定地にあたる。建設予定地は斜辺を南東に向ける直角三角形を呈する。このうち中央部分はOT08-2調査により調査が完了しているため、今回の調査対象範囲は東西の2箇所分割される。このため、西側を2区、東側を3区として調査を実施した(図52)。

東に隣接するOT08-2調査C区では2号墳とされた円墳の周溝が確認されていることから、本調査区においてもその延長が検出されることが期待された。しかしながら、機械掘削を実施したところ、本調査区では攪乱が著しく、調査区北西部以外のほぼ全域において第6層以下まで削平されていることが明らかとなった。

第1項 層序

辛うじて削平を免れた調査区北西隅ではあるが攪乱の影響は受けており、北端部は盛土層を除去した段階で基盤層である第6層が露頭した。このような状況にあつて、比較的遺存状態が良好であったX=-128,770以南の調査区西壁において土層断面図を作成した(図54、図版8)。しかしながら、当該箇所においても第1~3層は削平を受け遺存しておらず、盛土層を除去した段階で第4層が露頭した。盛土・造成土層 砂礫や真砂土からなる。層の下部には第1~4層を母材としたブロックを含む。層厚は0.80~0.97mを測る。

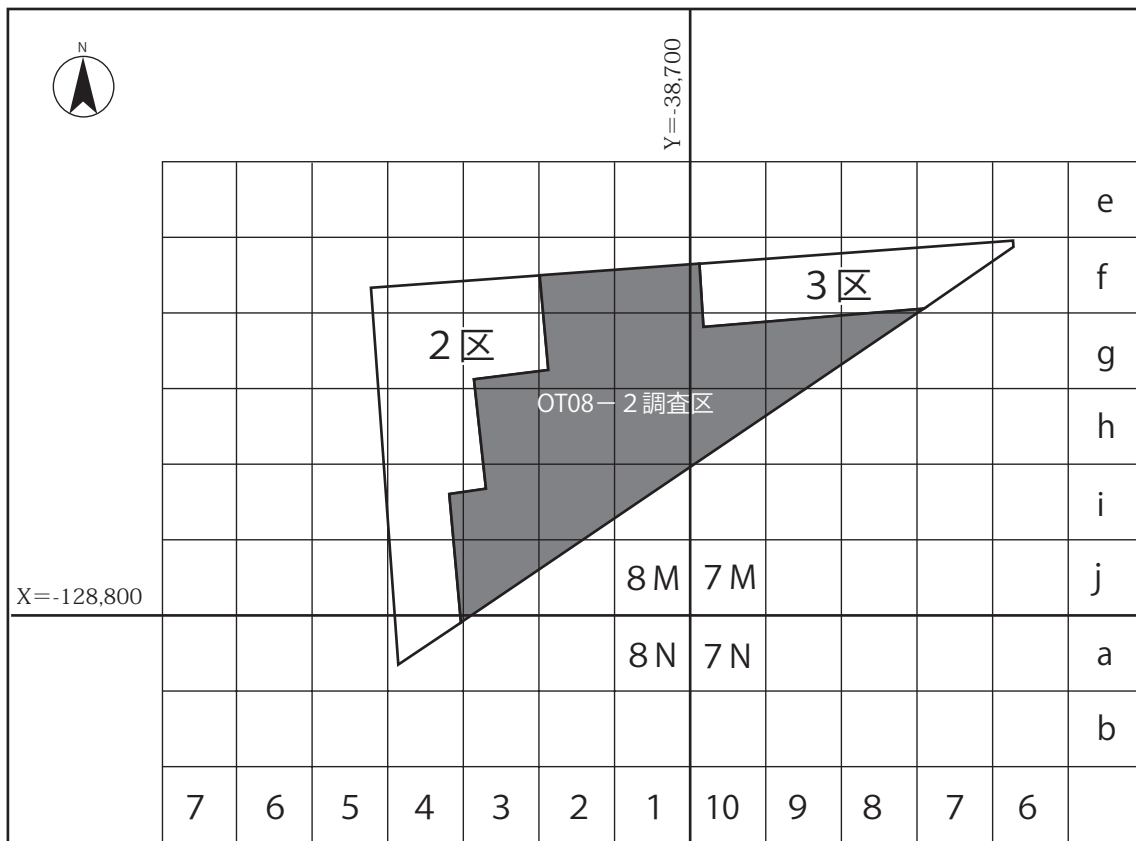


図52 2・3区地区割と既往の調査範囲

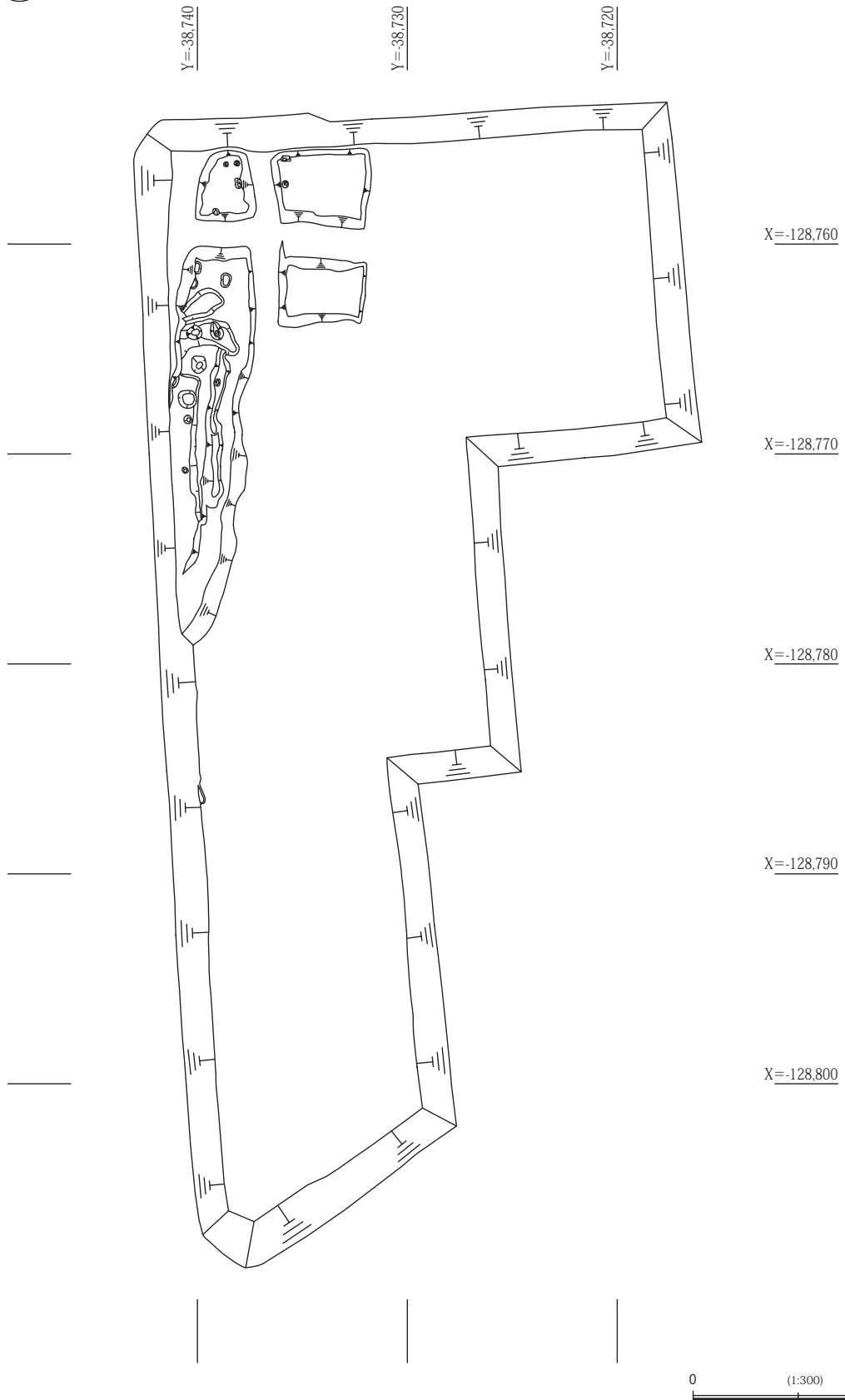


图 53 2区 平面

第4層 10YR2/1 黒 シルト混じり細砂を主体とし、中砂～極粗砂を含む土壌化層である。層厚は0.07～0.24 mを測る。

第5層 10YR3/1 黒褐 シルト混じり細砂を主体とし、中砂～極粗砂とシルトブロックを含む。層厚は0.06～0.14 mを測る。

第6層 10YR7/1 灰白 砂礫。層の上面を確認した段階で掘削を終了したため、層厚は不明である。

第2項 検出された遺構と遺物

前述のとおり、本調査区はほぼ全域において攪乱を受けているため、北西部の一角において溝や土坑、ピットを検出したにとどまる。

1. 溝

02005 溝 (図 55・56、図版 8)

8 M - 4・5 g において検出した、北東-南西方向を指向する溝である。南西部は攪乱に破壊されるため全容は不明であり、あるいは土坑となる可能性も残る。長さは 2.06 m 以上、幅は 1.15 m、深さは 0.21 m を測る。埋土は 2 層に細分される。このうち上層となる埋土 1 は、3 区における第 3 層に類似する。下層は第 5 層に類似するが、第 5 層に比して砂礫を多く含む。本調査区においては第 3 層は残存しておらず、かつ遺物も出土していないため断定はできないが、埋土上層の様相から第 3 層下面に帰属する可能性が考えられる。

02006 溝 (図 55・56、図版 8)

02005 溝の南に隣接する、弧状に湾曲する溝である。西側は攪乱に破壊されるが、調査区外へと延びるものと思われる。なお、調査では単一の遺構と判断して掘削したが、断面観察の結果、2 条の溝が

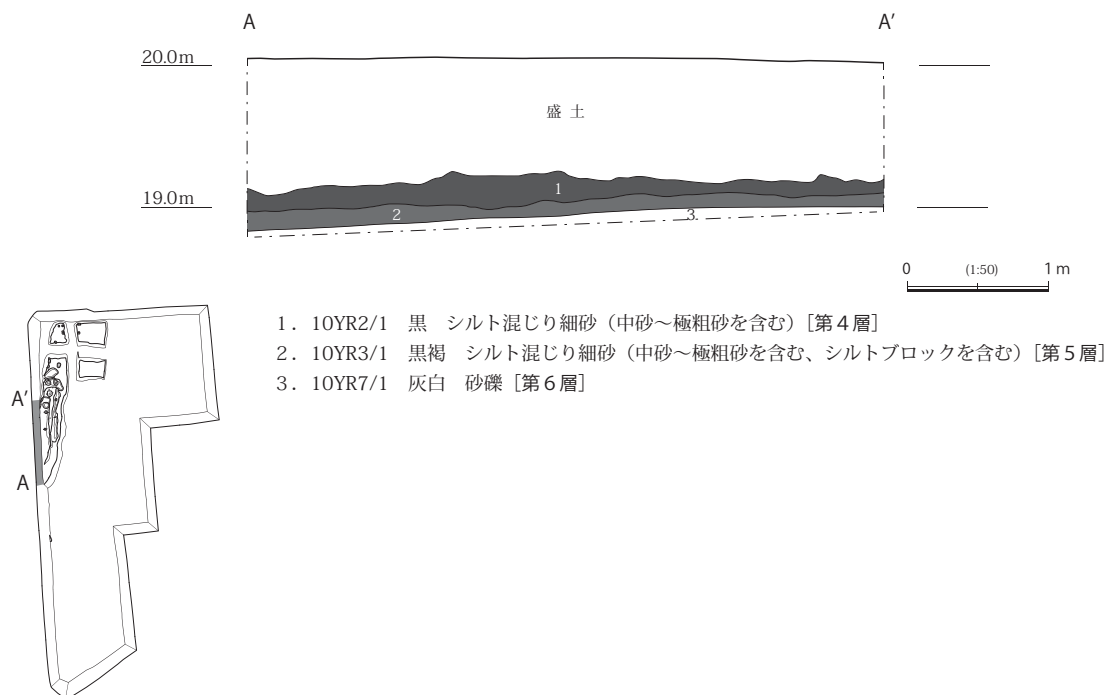
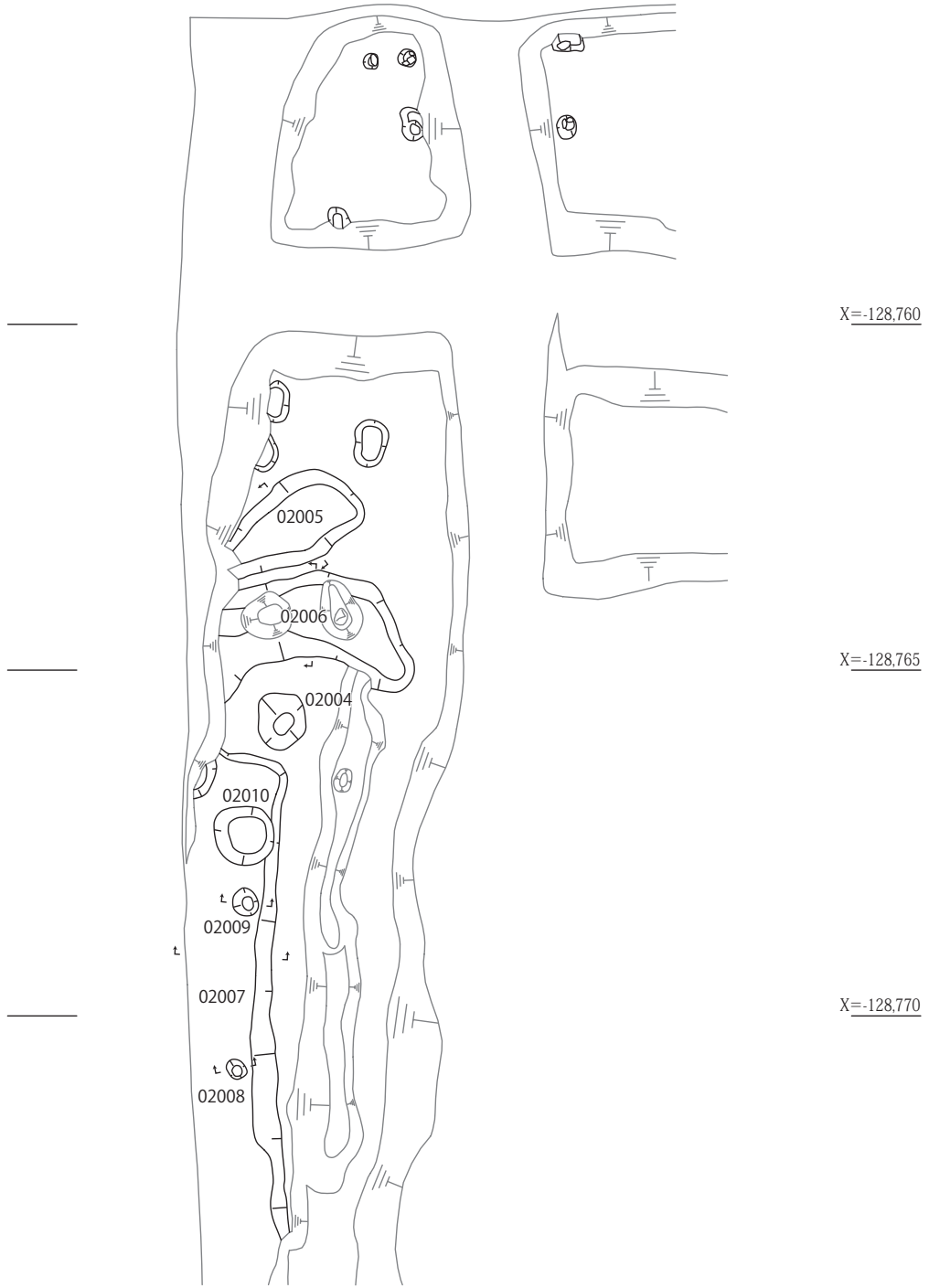


図 54 2区 土層断面



Y=-38.740

Y=-38.735



0 (1:100) 5 m

图 55 2区西北部 平面

接していたと推測される。平面での検討を行えていないため、これらの溝の先後関係は明らかにしえない。また、各溝の規模も不明であるが、断面から復元する限りにおいては北側の溝は幅 0.22 m、深さ 0.15 m、南側の溝は幅 1.03 m、深さ 0.25 mを測る。北側の溝は単一の埋土であり、第 4 層が落ち込む。南側の溝は埋土が 2 層に細分され、上層は第 4 層が落ち込んだものと思われる。下層は第 4 層と類似するが、ブロック土を含む。遺物は出土しなかったが、埋土の様相から、南北いずれの溝も第 4 層下面に帰属すると考えられる。

02007 溝 (図 55・56、図版 8)

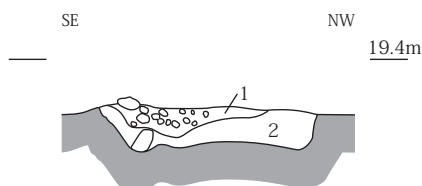
02006 溝の南側に隣接する、南北方向を指向する溝である。南は攪乱に破壊され、西は調査区外へと続くため全容は不明である。北東角が隅丸方形を呈することから、あるいは長大な土坑となる可能性も残る。幅は 1.35 m 以上、深さは 0.26 m を測る。埋土は 3 層に細分したが、埋土 3 層としたものは混在した埋土 1・2 層がたわむような様相を呈しており、なんらかの原因により変形した可能性もある。遺物は出土しなかったが、埋土から第 4 層下面に帰属すると考えられる。

2. 土坑

02010 土坑 (図 55、図版 8)

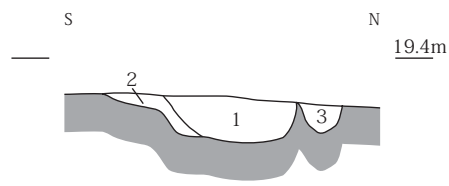
8M-5g において検出した。不整な円形を呈する土坑で、直径 0.82 m、深さ 0.16 m を測る。調査においては、断面の記録を取得する前に誤って掘削してしまったため、断面図は示せていない。遺物は出土しなかった。

02005 溝



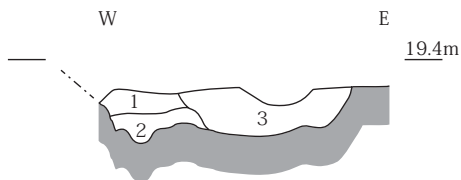
1. 10YR4/1 褐灰 シルト混細砂
(中砂～極粗砂粒、小礫～細礫を多く含む)
2. 10YR3/1 黒褐 シルト混細砂
(中砂～極粗砂粒、小礫～細礫を含む)

02006 溝



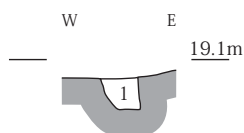
1. 10YR2/1 黒 細砂混シルト
(中砂～粗砂粒を含む、小礫を若干含む)
2. 10YR2/1 黒 細砂混シルト
(中砂～粗砂粒を含む) と細礫のブロック土
3. 10YR2/1 黒 細砂混シルト (中砂を含む)

02007 溝



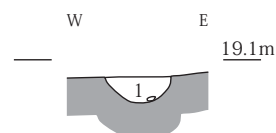
1. 10YR2/1 黒 細砂混シルト (中砂～粗砂粒を含む)
2. 10YR2/1 黒 細砂混シルト
(中砂～粗砂粒含む、10YR7/2 にぶい黄橙 細砂ブロックを多く含む)
3. 埋土 1 と埋土 2 に類似したたわみ (変形構造か)

02008 ピット



1. 10YR3/1 黒褐 細砂混シルト
(中砂～粗砂粒を含む)

02009 ピット



1. 10YR3/1 黒褐 細砂混シルト
(中砂～粗砂粒を含む)

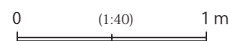


図 56 02005～02007 溝、02008・02009 ピット 断面

3. 柱穴、ピット

02004 柱穴 (図 55・57、図版 8)

02010 土坑の北側において検出した。南辺が突出する五角形を呈する。幅は南北 0.79 m、東西 0.67 m、深さは 0.33 m を測る。埋土は単層で、第 4 層に類似するが、砂礫を多く含む。

柱穴の底面南端中央部において柱根 (223) を検出した。223 は直径 8.0cm を測り、根元から 25cm ほどが遺存していた。幾分腐朽したことを考慮しても、柱穴の規模に比してやや細い印象を受ける。柱根の上部は欠損していることから、抜き取りに際して折損し、根本だけが坑内に残されたものと思われる。そうであれば、平面検出時において明確な抜き取り痕跡は確認できなかったものの、柱穴の平面形が南に突出しているのも、柱を抜き取る際の変形である可能性が高いと考えられる。

02004 柱穴からは土師器も出土しているが、細片のため時期を特定するには至らなかった。

02008 ピット (図 55・56、図版 8)

8M-5 g において 02007 溝の埋土を掘削した後、底面を精査中に検出した。楕円形を呈するピットで、長径 0.40 m、短径 0.34 m、深さ 0.17 m を測る。埋土は単層で、第 5 層に類似する。

土師器の極細片が 3 点出土しているが、詳細な時期は不明である。

02009 ピット (図 55・56、図版 8)

02008 ピットの北側において、02008 ピットと同様に 02007 溝の埋土を掘削した後に検出した。不整な円形を呈するピットで、直径は 0.35 ~ 0.40 m、深さは 0.14 m を測る。埋土は単層で、02008 ピットと同色同質であることから、同時期に掘削された可能性が考えられる。遺物は出土しなかった。

02004 柱穴

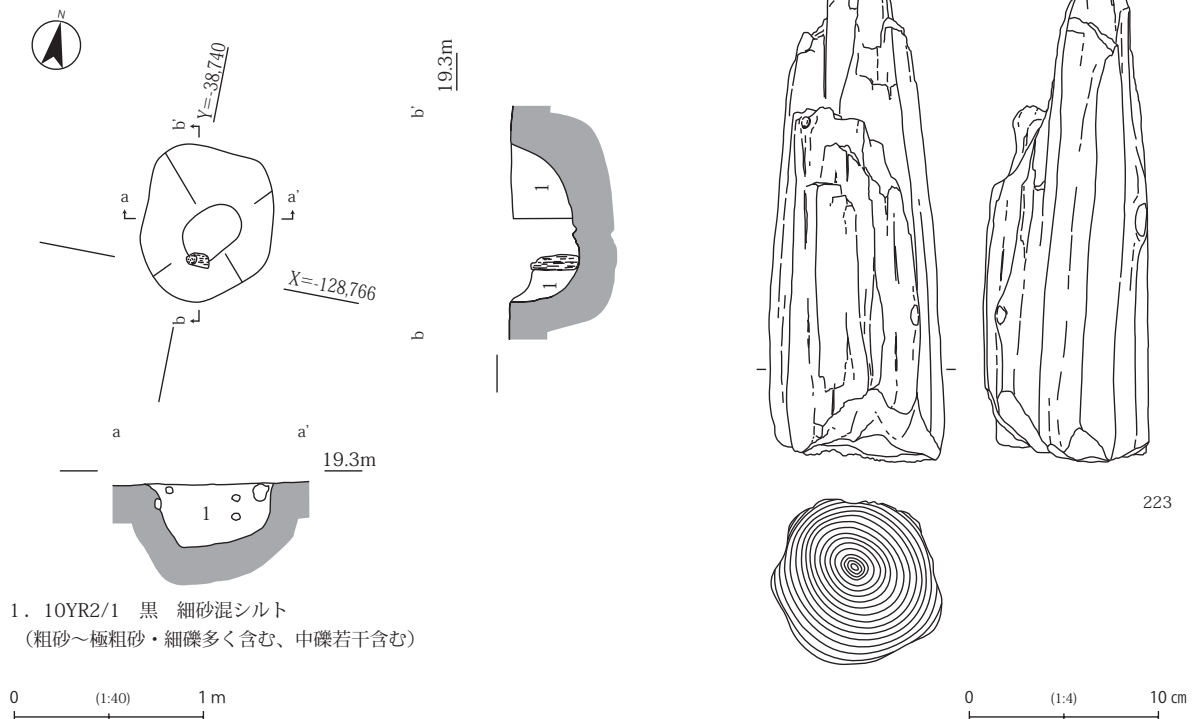


図 57 02004 柱穴 平・断面、出土遺物

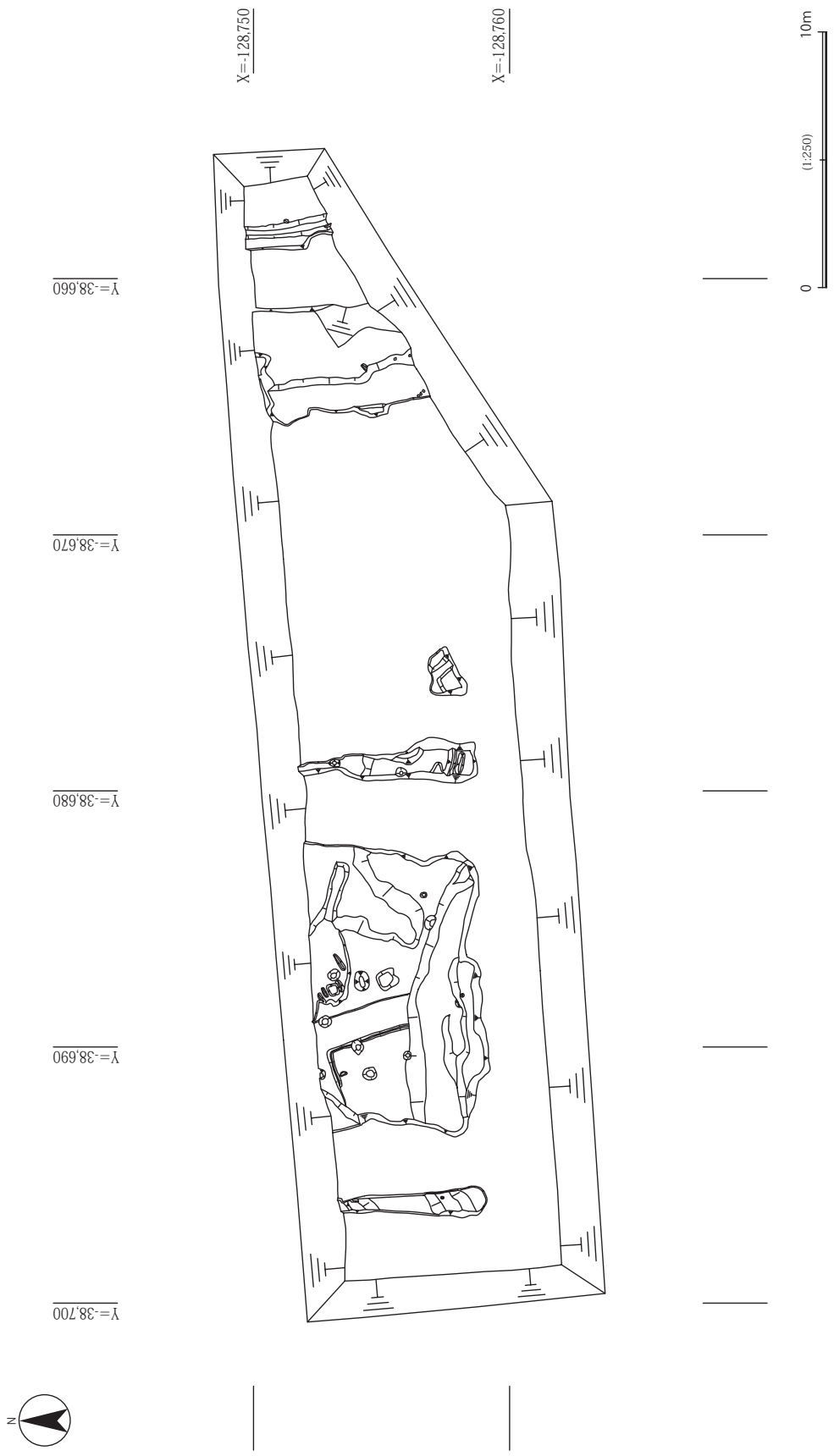


图 58 3区 平面

第4節 3区の調査成果

追手門学院大学新校舎に伴う食堂建設予定地の東部にあたる。OT08 - 2 調査では隣接地において1・3号墳とされた円墳2基と12号墳とされた方墳1基が検出されており、本調査区においてその延長部が検出されることが想定された。しかしながら、2区ほどではないが、本調査区においても攪乱による削平が著しく、特にY = -38,664 ~ 678 においては攪乱が第6層以下にまで達しており、12号墳をはじめとする遺構や遺物は残っていなかった。

第1項 層序

本調査区においては、調査区端の大部分が攪乱により破壊されていたが、調査区東端部のみ第1層以下の各層準が遺存していた（図59、図版9）。以下、同地点における土層について記述を進める。

盛土・造成土層 砂礫と砂を主体とする。層厚は1.05 ~ 1.12 mを測る。

第1層 2.5Y4/3 オリーブ褐 シルト混じり細砂を主体とし、中砂～極粗砂を含む。層厚は0.05 ~ 0.26 mを測る。盛土造成の際の影響を受けたのであろうか、上面に起伏が認められる。

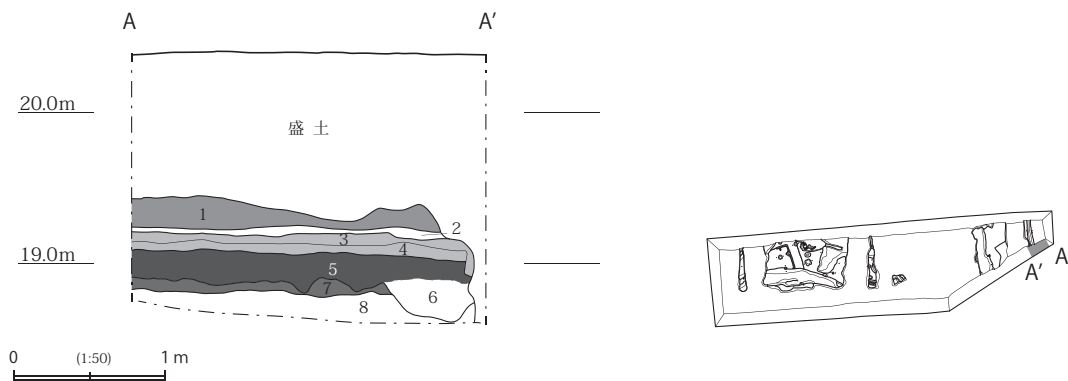
第2層 2.5Y5/3 黄褐 シルト混じり細砂を主体とし、中砂～極粗砂を含む。層厚は0.02 ~ 0.07 mを測る。

第3層 土質から2層に細分される。

第3-1層 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト混じり細砂を主体とし、中砂を多く含み、粗砂～極粗砂を含む。層厚は0.02 ~ 0.09 mを測る。

第3-2層 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 シルト混じり細砂を主体とし、中砂を多く含み、粗砂～極粗砂を含む。層厚は0.04 ~ 0.11 mを測る。

第4層 10YR2/1 黒 シルト混じり細砂を主体とし、中砂～極粗砂を含む。層厚は0.16 ~ 0.26 mを測る。



1. 2.5Y4/3 オリーブ褐 シルト混じり細砂（中砂～極粗砂を含む）【第1層】
2. 2.5Y5/3 黄褐 シルト混じり細砂（中砂～極粗砂を含む）【第2層】
3. 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト混じり細砂（中砂を多く含む、粗砂～極粗砂を含む）【第3-1層】
4. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 シルト混じり細砂（中砂を多く含む、粗砂～極粗砂を含む）【第3-2層】
5. 10YR2/1 黒 シルト混じり細砂（中砂～極粗砂を含む）【第4層】
6. 10YR3/1 黒褐 シルト混じり細砂（中砂～極粗砂を含む）【03001 溝埋土】
7. 10YR3/1 黒褐 シルト混じり細砂（中砂～極粗砂、5Y3/1 黒褐 シルトのブロックを含む）【第5層】
8. 10YR7/1 灰白 砂礫【第6層】

図59 3区 断面

を測る。

第5層 10YR3/1 黒褐 シルト混じり細砂を主体とし、中砂～極粗砂と5Y3/1 黒褐 シルトのブロックを含む。層厚は0.02～0.13 mを測る。

第6層 10YR7/1 灰白 砂礫。層中で掘削を終えたため、層厚は不明である。

第2項 検出された遺構と遺物

上述のとおり、本調査区においてはY = -38,664～678の間は攪乱により削平を受け、遺構や遺物は残存していなかった。また、Y = -38,664以西においても縦横無尽に攪乱がおよび、遺存状態は良好とは言い難い状況であったが、辛うじて攪乱を免れた地点において竪穴建物1棟や円墳の周溝3条などの遺構を検出した。

1. 竪穴建物

竪穴建物1 (図60～63、図版10)

7M-9・10 fにおいて検出した。今回の調査において検出された唯一の竪穴建物である。南は03005溝に、北は03006溝に切られ、西は攪乱により破壊される。このため遺存状態は良好とは言い難いが、わずかに残存した竪穴と壁溝、人為的に盛られたと考えられるブロック土の堆積を確認した。

壁溝は東辺と北辺の東半分において検出した。幅は0.24 m、深さは0.02 mを測る。なお、残存状態は極めて悪いものの、検出段階では図61の破線で示した範囲において西辺の壁溝を確認しており、本来は南北に長い長方形を呈していたものと考えられる。

竪穴の北および東では竪穴や壁溝と並行するようにわずかに高くなる段を検出した。断面観察の結果、この高まりは基盤層である第6層を掘り窪めたのち、第4層と第6層を母材としたブロック土を用いて築造されており、竪穴はこの高まりを掘り込むようにして築かれていることが判明した。このような築造方法による竪穴建物は、大阪府摂津市に所在する明和池遺跡において弥生時代後期後半の事例が⁵⁾、寝屋川市と四條畷市に所在する讃良郡条里遺跡において弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけての事例が確認されており⁶⁾、いずれも竪穴建物に付設されたベッド状遺構と考えられている。遺存状態が悪いため断定はできないものの、本遺構における高まりも同様にベッド状遺構と推察される。

竪穴建物の覆土および高まりからは弥生土器や土師器が出土している。多くは細片であるが、2点を図化しえた。224は竪穴建物の覆土から出土した甕の口縁部片である。口端部は肥厚し、水平な端面をもつ。古墳時代前期に帰属する。225は高まりから出土した。壺の底部と思われる。弥生時代末から古墳時代初頭にかけての所産であろうか。

竪穴建物および高まり内においては壁溝のほか炉跡、柱穴各1基とピット2基を検出した。

03014 炉 (図60～63、図版10)

竪穴内の中央やや北寄りにおいて検出した、隅丸方形に近い不整な円形を呈する土坑である。直径は0.48～0.52 m、深さは0.08 mを測る。埋土は2層に細分され、上層は第4層に、下層は第5層に由来すると考えられるが、いずれの層においても炭化物を多く含み、また上層には焼土も認められたことから炉跡と判断した。

遺物は底面のほぼ中央から鉢(226)が横転した状態で出土した。226は内湾しながら立ち上がる器

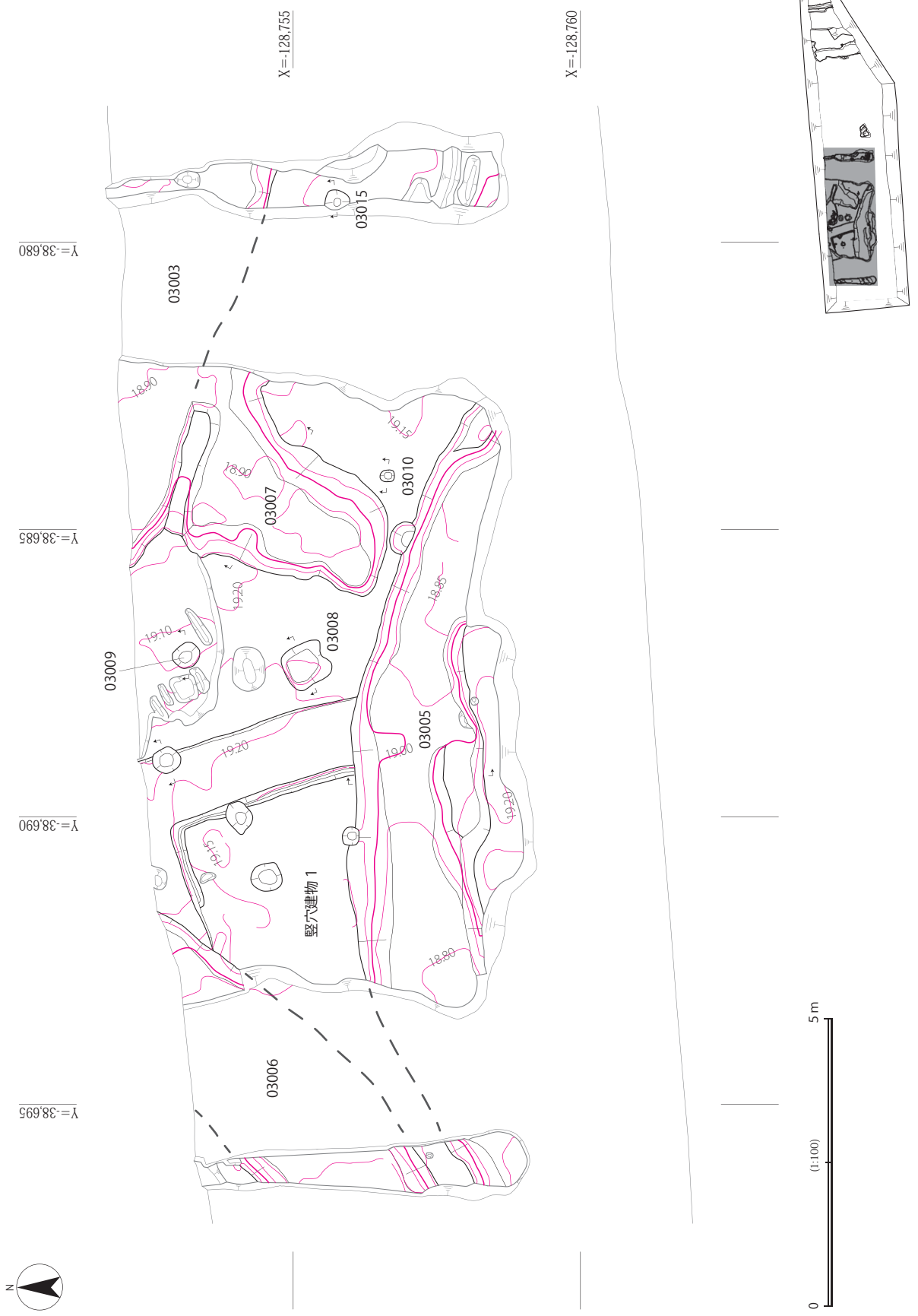
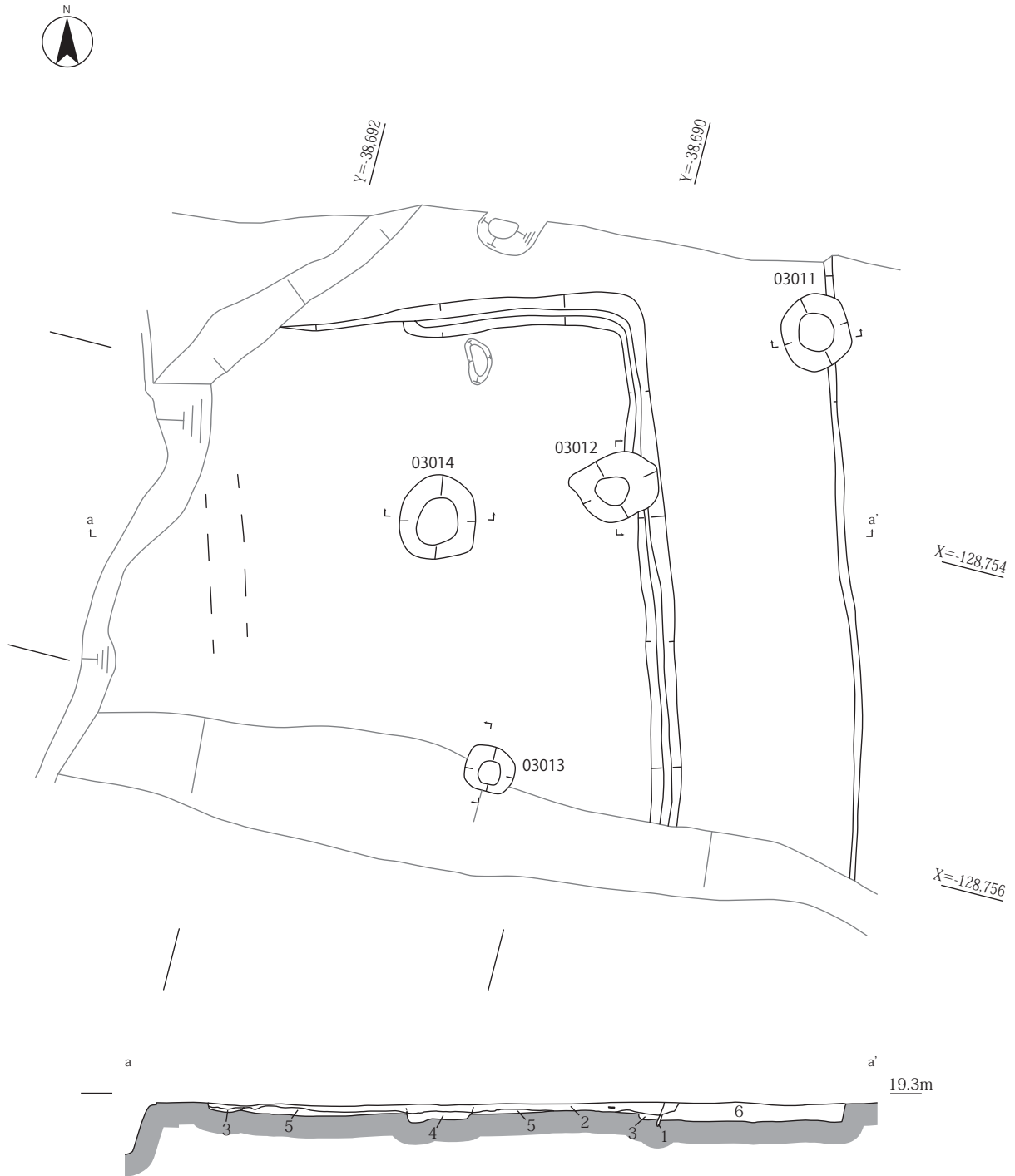


图 60 竖穴建物1、03003・03005・03006 溝他 平面



1. 10YR2/1 黒 シルト混細砂（中砂粒を含む）〔壁溝外側板痕跡か〕
2. 10YR3/1 黒褐 シルト混細砂（中砂～粗砂粒を含む）ブロック土
3. 7.5Y7/1 灰白 シルト混細砂（中砂～極粗砂粒を含む）と 10YR4/1 褐灰 シルト混細砂（中砂～極粗砂粒含む）〔壁溝埋土〕
4. 10YR2/1 黒 シルト混細砂（中砂～粗砂粒を含む、焼土を含む）〔03014 炉埋土〕
5. 7.5Y7/1 灰白 シルト混細砂（中砂～粗砂粒を含む）と 10YR3/1 黒褐 シルト混細砂のブロック土〔貼床か〕
6. 7.5Y7/1 灰白 シルト混細砂（中砂～粗砂粒を含む）と 10YR3/1 黒褐 シルト混細砂（中砂～粗砂粒を含む）のブロック土

0 (1:40) 1 m

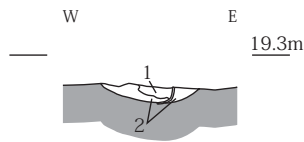
図 61 竪穴建物1 平・断面

形を呈し、外面は底部に右下がり、体部から口縁部にかけては左下がりのタタキ整形を、内面はハケ調整を施す。弥生時代末から古墳時代初頭の所産と考えられる。この他、弥生土器や土師器の破片が出土しているが、図化できるものはなかった。

03013 柱穴 (図 60 ~ 62、図版 10)

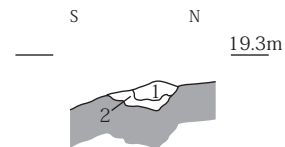
03014 炉の南側において検出した。南半部は 03005 溝と重複しており、同溝の埋土を除去した段階で全形を確認した。平面は歪な五角形に近い隅丸方形を呈し、長軸 0.30 m、短軸 0.26 m、深さ 0.15 m を測る。埋土は 2 層に細分される。明確な柱根や柱痕跡は確認されなかったが、検出された位置から柱穴である可能性が高いと判断した。しかしながら、竪穴建物内においては他の柱穴は確認できず、かつ埋土が後述するピット 2 基と同一であることから、あるいは異なる可能性も残る。遺物は土器の細片

03014 炉



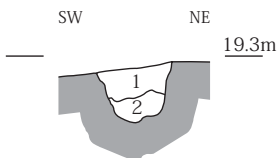
- 1. 10YR2/1 黒 シルト混細砂
(中砂～粗砂粒を含む、炭化物を多く含む、7.5Y8/2 灰白 シルト混細砂 (中砂～粗砂粒を含む)、焼土・ブロックを多く含む)
- 2. 10YR3/1 黒褐 シルト混細砂
(中砂～粗砂粒を多く含む、炭化物を多く含む)

03013 柱穴



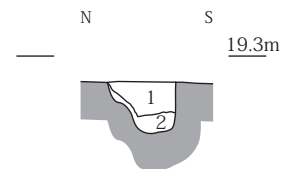
- 1. 10YR2/1 黒 シルト混細砂
(中砂～極粗砂粒を多く含む)
- 2. 10YR2/1 黒 シルト混細砂
(中砂～極粗砂粒を多く含む、7.5Y8/1 灰白 シルト混細砂 (中砂～粗砂粒を含む) のブロックを多く含む)

03011 ピット



- 1. 10YR2/1 黒 シルト混細砂
(中砂～極粗砂粒を多く含む)
- 2. 10YR2/1 黒 シルト混細砂
(中砂～極粗砂粒を多く含む、7.5Y8/1 灰白 シルト混細砂 (中砂～粗砂粒を含む) のブロックを多く含む)

03012 ピット



- 1. 10YR2/1 黒 シルト混細砂
(中砂～極粗砂粒を多く含む)
- 2. 10YR2/1 黒 シルト混細砂
(中砂～極粗砂粒を多く含む、7.5Y8/1 灰白 シルト混細砂 (中砂～粗砂粒を含む) のブロックを多く含む)

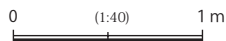
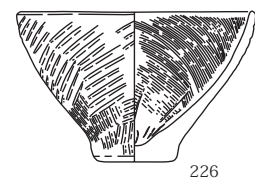
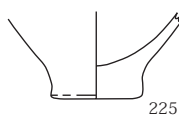
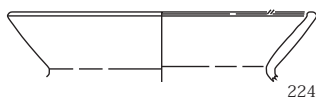


図 62 03014 炉、03013 柱穴、03011・03012 ピット、断面



224・225：竪穴建物 1
226：03014 炉

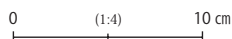


図 63 竪穴建物 1、03014 炉 出土遺物

が出土したが、時期等の詳細は不明である。

03011 ピット (図 60～62、図版 10)

高まりの東辺上において検出されたピットであり、重複関係から本遺構が新しいと考えられる。隅丸方形に近い不整な円形を呈しており、直径 0.42～0.45 m、深さ 0.29 m を測る。埋土は 2 層に細分されるが、上下層ともに 03013 柱穴と同色同質である。遺物は土器の破片が出土したが、いずれも細片であり時期を窺えるものはなかった。

03012 ピット (図 60～62、図版 10)

竪穴建物 1 の東壁溝と重複しており、本遺構が壁溝を切る。平面は歪な五角形を呈しており、長軸 0.52 m、短軸 0.39 m、深さ 0.28 m を測る。埋土は 2 層に細分され、いずれも 03013 柱穴や 03011 ピットと同色同質である。検出位置から壁際に設けられた貯蔵穴の名残である可能性も考えられるが、詳細は明らかにしえなかった。遺物はタタキ目を残す甕などが出土しているが、細片であるため詳細な時期は不明である。

以上の遺構および遺物のうち、高まりおよび 03014 炉出土遺物から竪穴建物 1 は弥生時代末から古墳時代初頭に築造されたものと考えられる。

2. 古墳

03003 溝 [14 号墳] (図 60・64・65、図版 11)

調査区中央北辺、7 M-8・9 f において検出した。検出範囲における中央部と Y=-38,798.5 以東は攪乱により破壊されるが、円弧を描く平面形および出土遺物から円墳の周溝と判断した。北は調査区外へと延び、次節において報告する 04002 溝に連続すると考えられる。OT08-2 調査では確認されていないため、1 区において検出した 01013 溝と同様に新たな古墳名を付し 14 号墳とする。西側の一部は後述する 03007 凹みと重複する。

南側の肩しか検出できなかったため正確な規模は不明であるが、幅は 2.5 m 以上、深さは 0.24 m を測る。埋土は 2 層に細分されるが、下層は部分的に認められただけで、大方は第 4 層を主体とした上層により埋没している。

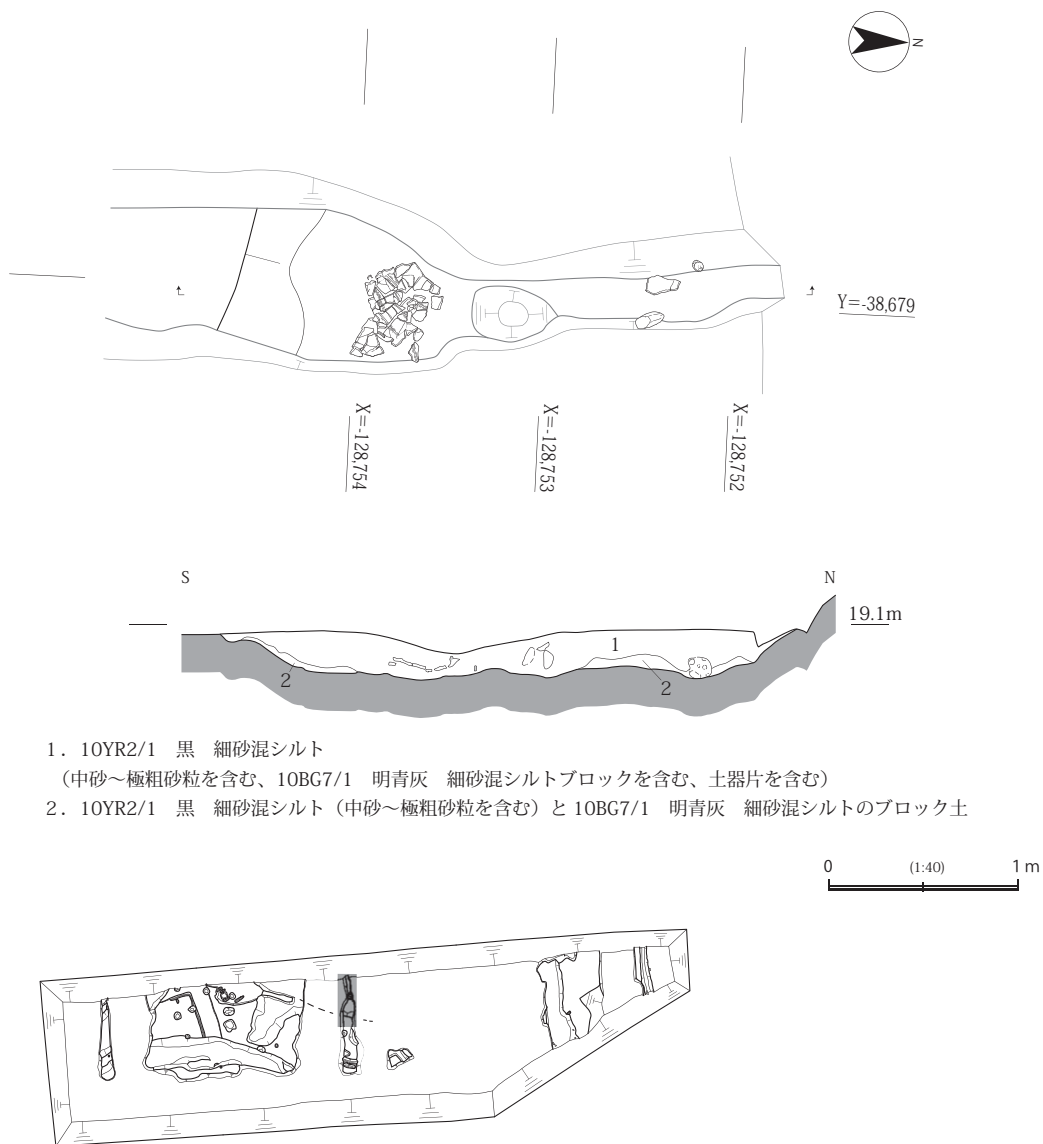
遺物は東側の島状に残った地点から埴輪がまとまって出土している。227～229 は円筒埴輪である。227 は底部から 4 段目にかけて残存する。底部から 2 条目の突帯までは緩やかに外方へ広がり、3 段目以上は直立する器形を呈する。2 段目にやや歪な楕円形の透孔が穿たれる。基底部高および 2・3 段目の突帯間隔はそれぞれ 9.3cm、9.6cm、9.8cm を測る。外面調整は 2・3 段目がタテハケの後ヨコハケを施しているのに対し、4 段目は 1 次調整のナメハケのみである。基底部は摩滅のため調整は不明であるが、端部直上には横位に連続するように施されたユビオサエが認められる。内面はナデを施す。外面色調は黄橙色を呈し、焼成はやや軟質である。第 2 節において既述した 01014 溝出土の円筒埴輪との比較から 4 段目は口縁部にあたと推測され、3 条 4 段構成の円筒埴輪と考えられる。228・229 は基底部および 2 段目が残存する破片資料である。いずれも外方へ開く器形を呈し、229 は 2 段目に円形と推察される透孔の一部が残る。基底部高は 228 が 9.5cm、229 が 8.9cm を測る。外面調整はともにタテハケの後ヨコハケを施すが、228 は基底部下半に縦方向のタタキ目が、229 は基底部外面の端部直上に横位に連続するユビオサエが、基底部内面に横方向のタタキ目が確認できる。また、229 は基底部端面に沈線状の凹みが認められ、一部は内面の端部直上にまで延び、やや粘土が持ち上げられたよ

うな段をつくる。埴輪制作時において作業台から持ち上げる際に付いたものであろうか。230は形象埴輪の破片と思われる。外面にハケを施した後に刻まれた線刻が1条残るが、細片のため器形は不明である。

03005 溝 [3号墳] (図 60・66～69、図版 10・11)

竪穴建物1の南側において検出した、緩やかな弧を描く溝である。竪穴建物1と重複しており、本溝が竪穴建物1を切る。平面形および出土遺物から円墳の周溝と判断した。検出位置および規模から OT08-2 調査の E 区において検出された ESD-12 ならびに ESD-16 に連続すると考えられるため 3号墳とした。幅は最も遺存状態の良い地点において 2.33 m、深さは 0.26 m を測る。埋土は 3層に細分される。最上層は第5層に類似し、中層は第4層が落ち込んだものと思われる。最下層は第4層と第6層を母材とするブロック土からなり、機能時の堆積と考えられる。

遺物は、埋土最上層の底付近から土器や埴輪の細片が溝一面に敷き詰められたかのような状態で出土した。遺構の中心付近に設定した土層観察用ベルトの東側では須恵器が、西側では埴輪が多く認められ



1. 10YR2/1 黒 細砂混シルト
(中砂～極粗砂粒を含む、10BG7/1 明青灰 細砂混シルトブロックを含む、土器片を含む)
2. 10YR2/1 黒 細砂混シルト (中砂～極粗砂粒を含む) と 10BG7/1 明青灰 細砂混シルトのブロック土

0 (1:40) 1 m

図 64 03003 溝 [14号墳] 平・断面

たが、いずれも細片であるため個体の識別および出土地点の記録は困難と判断し、大まかな出土地点の傾向を把握するため任意により出土範囲を28区画に分割し、遺物の取り上げを行った。しかしながら、結果として、ある程度接合・復元が可能であったのは須恵器3点のみであり、埴輪は同一個体と思われる資料は認められるものの、本来の形状に復元しうるものは確認されなかった。

231～233は須恵器である。231・232は甕である。231は外面に格子目タタキの後、粗いカキメを施す。231は口縁部に9条1単位の波状文を、体部に平行タタキの後カキメを施す。233は杯蓋である。口径13.0cmを測る。天井部は丸みを帯び、つまみを有する。

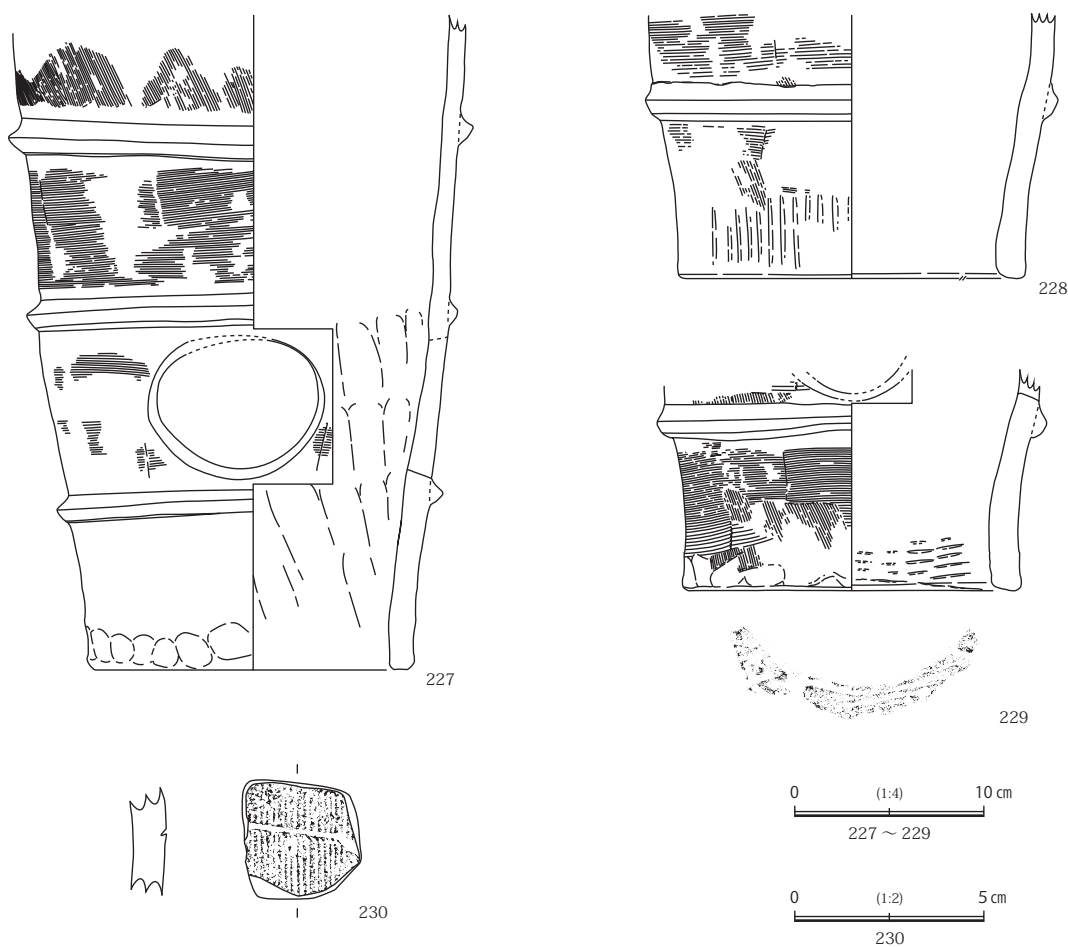
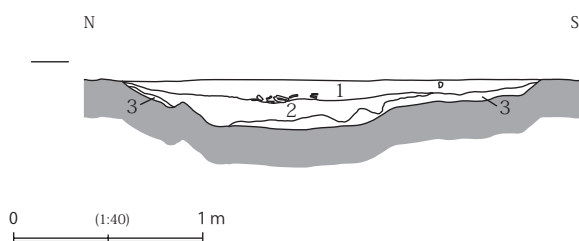


図 65 03003 溝 [14 号墳] 出土遺物

03005 溝 (3 号墳)



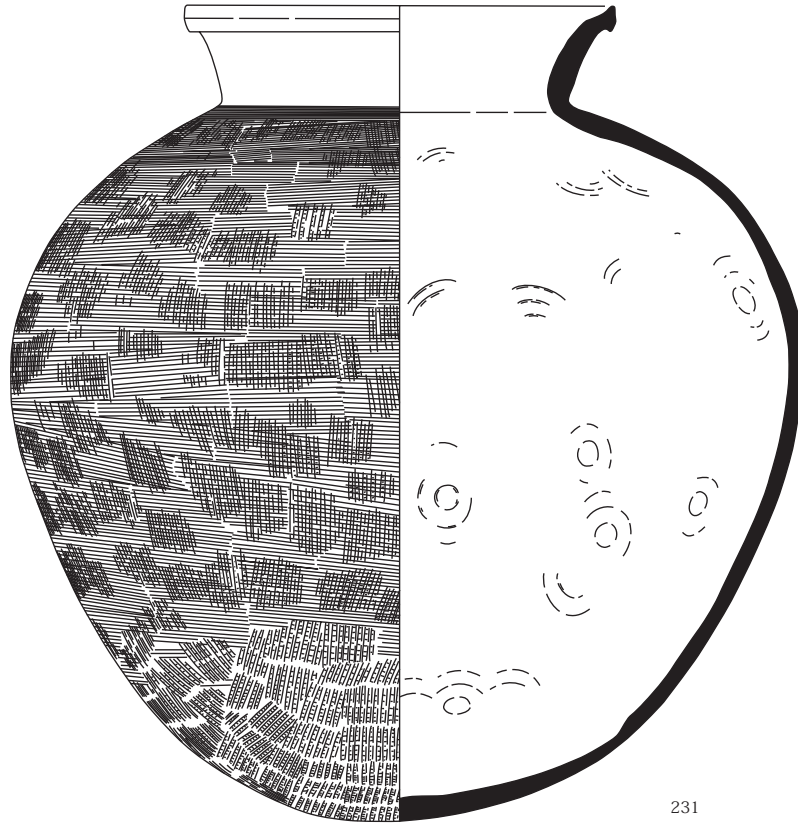
1. 10YR3/1 黒褐 シルト混細砂
(中砂～極粗砂粒を多く含む、土器・埴輪片を含む)
2. 10YR2/1 黒 シルト混細砂 (中砂～極粗砂粒を含む)
3. 10YR2/1 黒 シルト混細砂 (中砂～極粗砂粒を含む)
と 10YR7/1 灰白 シルト混細砂 (中砂～粗砂粒を含む)
のブロック土

図 66 03005 溝 [3 号墳] 平・断面

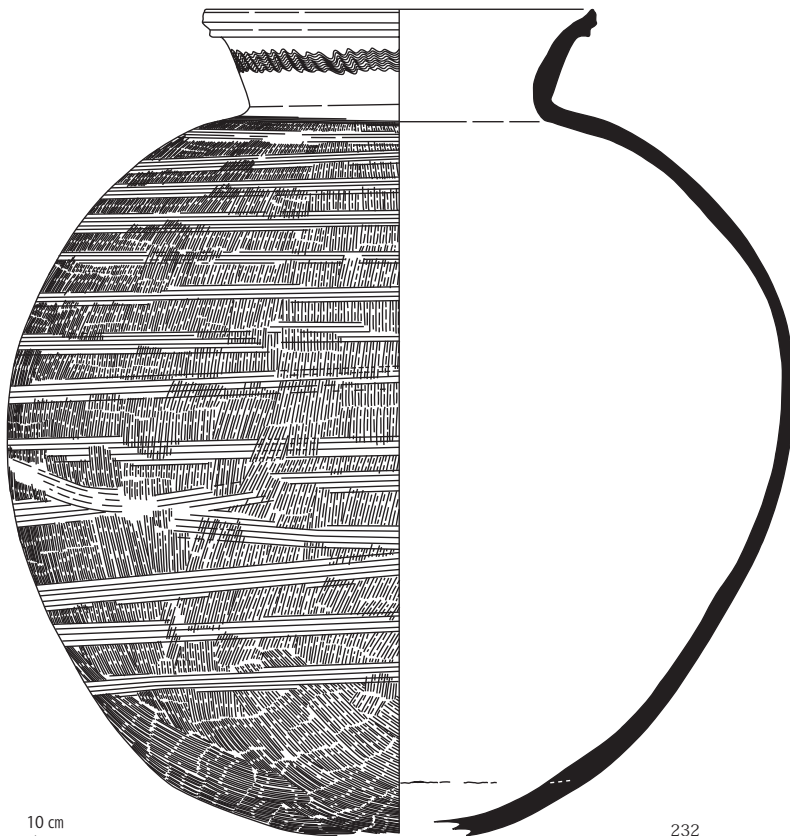
234～256は形象埴輪である。234は緩やかに弧を描く鱗状の突出部を有する破片である。OT08－2調査における1号墳（CSD－2）より出土した鶏形埴輪の鶏冠とほぼ同大同形であることから、同様に鶏形埴輪の鶏冠である可能性が高い。ただし、胎土は若干異なることから、鶏冠であるとしても別個体になるものと思われる。235・236は円筒状の破片資料である。このうち235はOT08－2調査における4号墳（DSD－12）より出土した鶏形埴輪の頸部と形状や大きさが類似する。このため、本資料も同様に鳥形埴輪の頸部である可能性が考えられる。一方、236は235に比して径が大きく、厚みがあり、一方がすばまる形状を呈する。OT08－2調査における2号墳（DSD－22）より出土した動物埴輪の脚部と形状や大きさ、胎土が類似していることから、動物埴輪の脚部である可能性が高いと考えられる。237は帯状に長く延びる埴輪片で、長軸方向の3箇所指で押さえたような決れが認められる。断面形は円筒埴輪の突帯のような不整な台形を呈し、最も広い面には長軸方向に平行するようにハケが施されることから、この面が外面になるものと考えられる。それに接する面のうち一方には端面が、他方には剥離痕が認められることから、なんらかの埴輪を装飾する部材と思われるが、詳細は不明である。

238～246は家形埴輪と思われる。いずれも外面は橙系の色調を呈し、焼成はやや軟質である。238～240は平板で、方形の透孔や外面に線刻を有していることから壁体部と思われる。241は三角柱状の破片である。欠損部の様相から、本来は二方向に板状の器体が伸びていたと考えられることから、壁体部の隅にあたる可能性が高いと思われる。242～246は裾廻突帯から基部にかけての破片と考えられる。242は上端部が低い鋸歯状を呈する。接合部を補強するための細工であろうか。243は裾廻突帯の破片と考えられる。突帯の断面形状は台形で、端面がやや丸みを帯びる。244は壁体部の可能性もあるが、他の壁体部片に比べやや器厚が厚いことから基部と判断した。外面調整はタテハケの後ナデを、内面調整はユビオサエの後粗雑なナデを施す。245・246は裾廻突帯から基部にかけての破片資料である。245は突帯が剥離するが、246は断面台形の突帯を貼り付ける。外面調整は摩滅のため不明瞭であるが、いずれも基部にヨコハケがわずかに残る。

247～256は器形不明の埴輪片である。247・248は平面形が刀の切先のような形態を示す破片である。いずれも幅狭の側面には端面が、幅広の側面には剥離した痕跡が認められる。なんらかの形象埴輪の装飾部の可能性が考えられるが、詳細は不明である。249は板状の破片資料である。上半は緩やかに湾曲し、長側面の一方には端面を有する。なお、古墳は異なるが、類似した資料がOT08－2調査のD区において検出された4号墳（DSD－12）から出土している（図版70－513）。513は縦12.6cm、横7.5cmの破片資料である。長側面の一方には端面を有し、上部は屈曲する。外面には幅4cmほどの粘土帯を貼り付ける。外面調整は下地にヨコハケ、粘土帯にタテハケを施す。内面調整は縦方向のナデを施す。こうした特徴から、249および513は家形埴輪壁体部の頂部、屋根との接合部にあたると思われる。250は円柱の端部を斜めに切り落としたような形状を呈する。内面の様相から、本来は別の個体に貼り付けられていたと考えられるが、中実で重さは203.53gを測ることから、底部付近に貼り付けられていた可能性が高いのではないと思われる。251は板状の破片資料で、緩やかに外反する器形を呈する。外面調整は中央に横位のナデが認められ、それより上部はユビオサエ、下部はナナメハケが施される。内面下半の様相から、接合部で剥離したと考えられる。252は湾曲する破片資料で、外面はタテ・ナナメハケを施し、中央には縦方向に幅1.5～2cmほどの剥離痕跡が認められる。内面は剥離しているため不明である。253は図の上端に端面をもつ破片資料で、端部直下には横位の剥離



231



232

0 (1:4) 10 cm

图 67 03005 沟 [3号填] 出土遗物 (1)

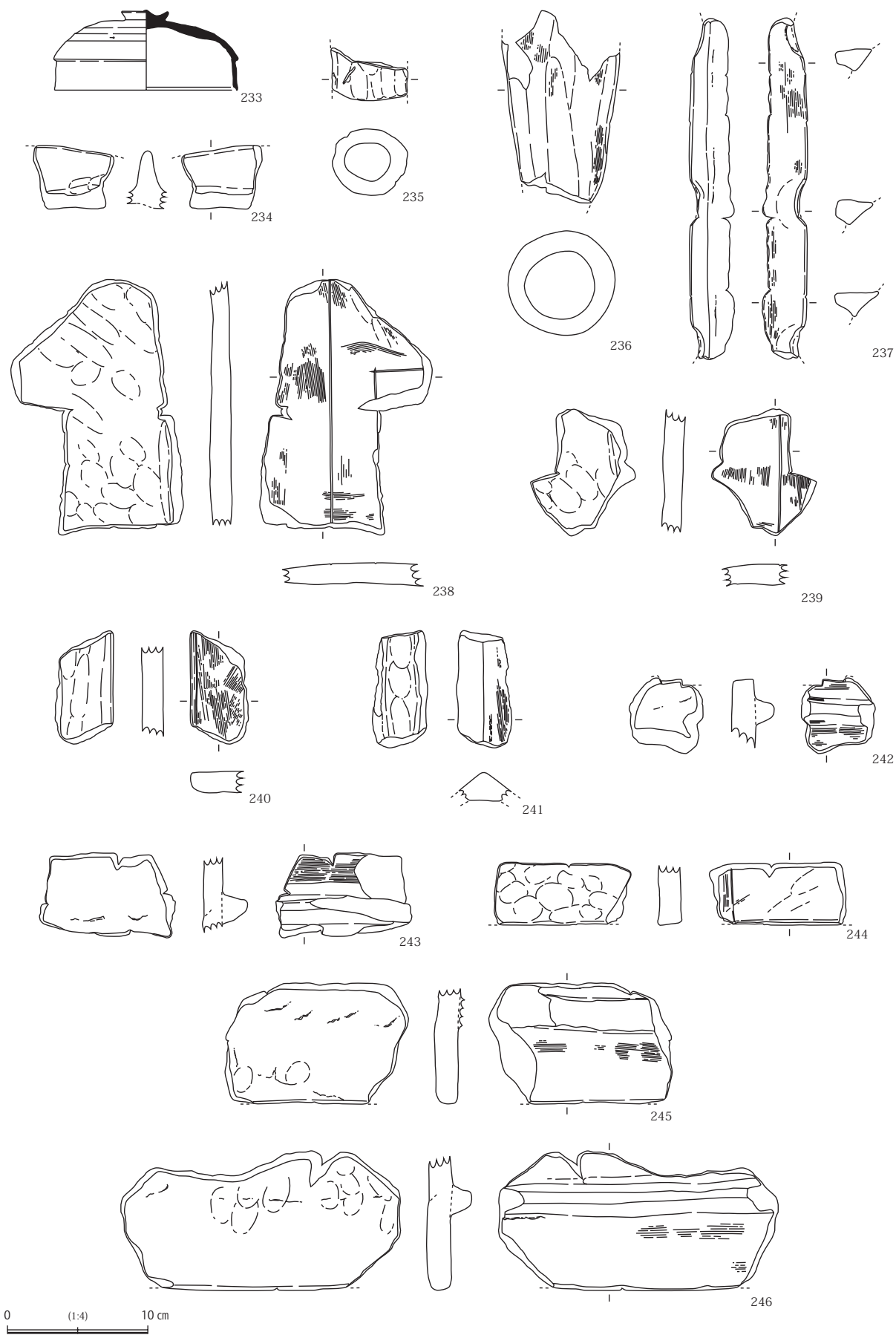


图 68 03005 沟 [3号填] 出土遗物 (2)

痕跡が認められる。外面調整はハケの後ナデを施す。254 は鉢の底部のような形態を示す破片である。大きく屈曲するが、図に示した角度でも安定して接地することから、なんらかの底部と思われる。255 は底部と思われる破片であり、端部を水平に設定した場合、外面には横位の、内面には斜位の剥離痕跡が確認できることとなるが、詳細は不明である。256 は当初、家形埴輪の基部を想定したが、端面が緩やかに湾曲すること、上部および内面に折損が認められることから、異なるものである可能性が高いと判断した。

以上の遺物のうち、須恵器の杯蓋および甕は TK23・47 型式に比定され、古墳時代中期後葉の年代が与えられる。しかしながら、上述のように 03005 溝から出土した遺物の多くは細片の状態であり、かつ埋土が一定程度堆積した後に廃棄されたと考えられること、異なる古墳の周溝から出土した埴輪の破片と同一個体となる可能性を含む資料が存在することなどから、すべての遺物が墳丘上に置かれていたと判断するにはやや難がある。周辺の古墳も含め、土器や埴輪など墳丘上に存在した遺物を意図的に破壊したうえで溝に投棄された可能性も考えられる。このため、土器についてもどこまで古墳の

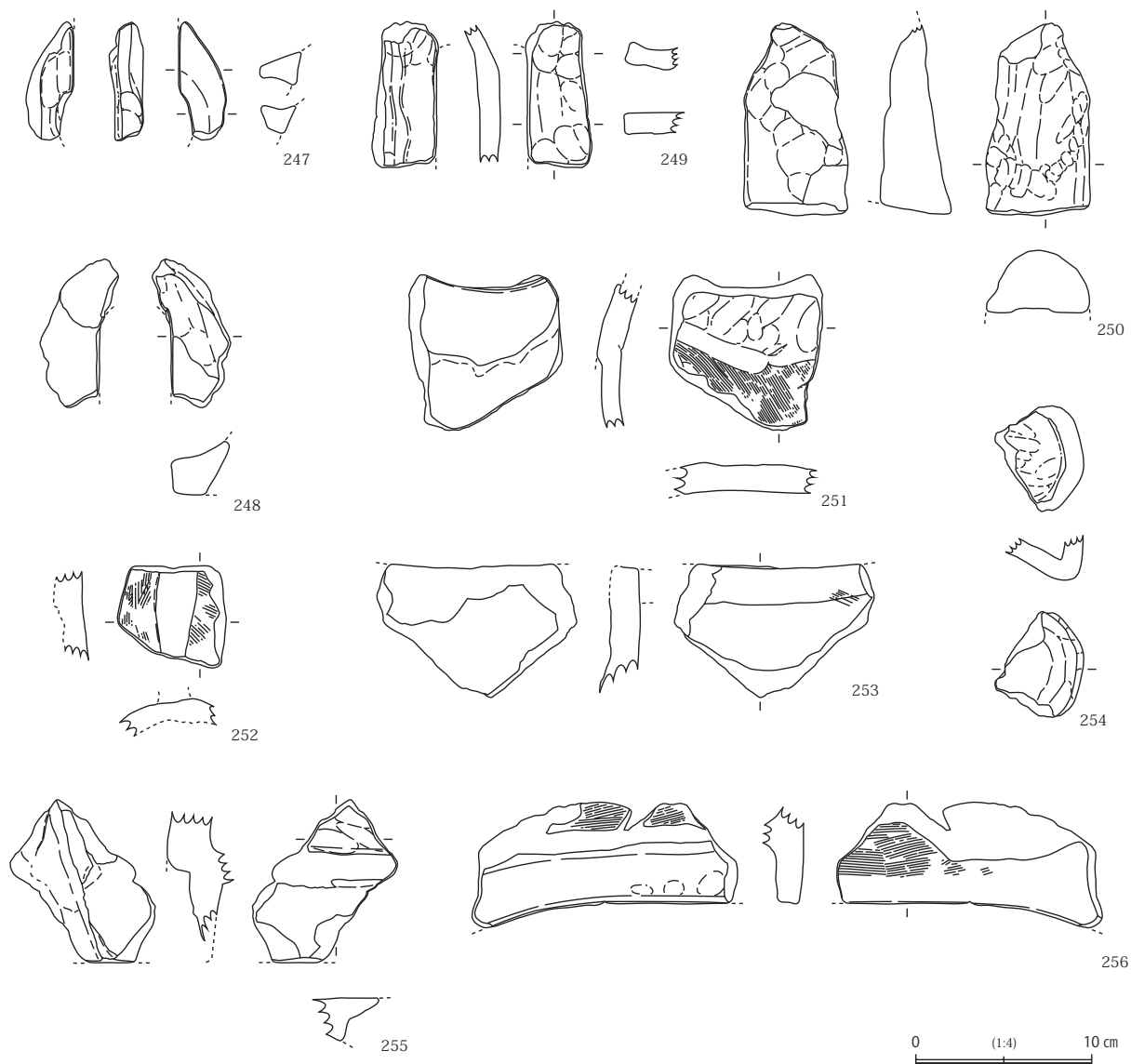
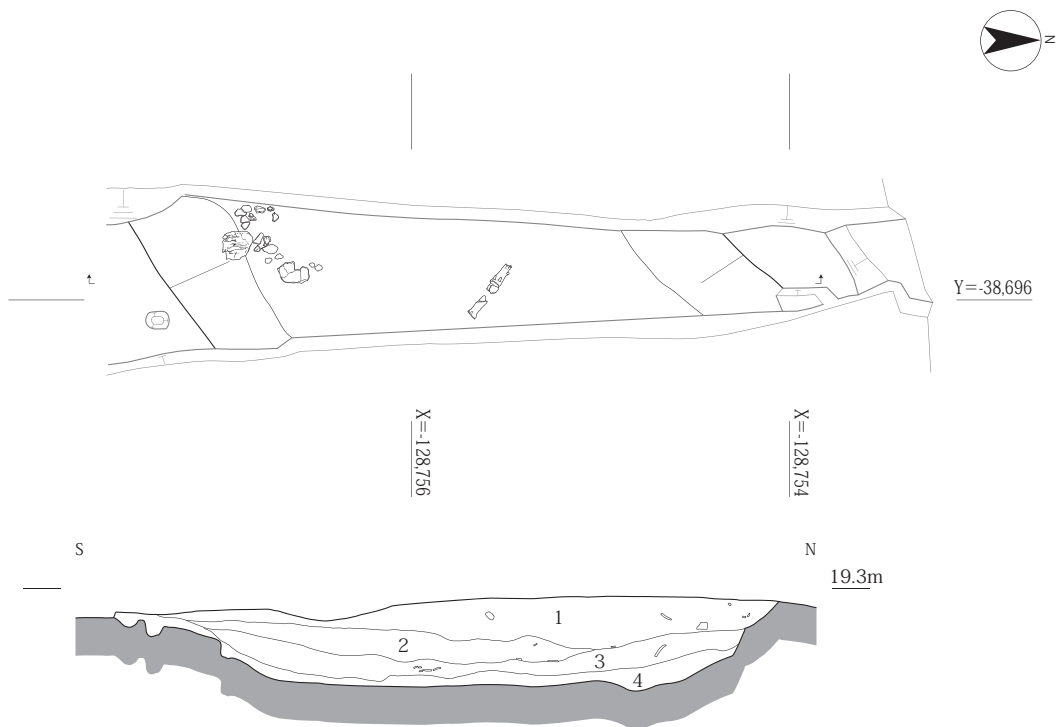


図 69 03005 溝 [3号墳] 出土遺物 (3)

築造もしくは埋葬時期を示すのかは明らかにしえない。ここではひとつの可能性として上記の年代を示すにとどめたい。

03006 溝 [1号墳] (図 60・70・71、図版 12)

竪穴建物 1 の西および北において検出した。中央は攪乱により破壊されているため連続していないが、同一の溝と判断した。竪穴建物 1 と重複しており、本溝が竪穴建物 1 を切る。検出位置および規模から OT08 - 2 調査における ESD - 13 に連続すると考えられることに加え、溝の形状や出土遺物から 3号墳とされた円墳の周溝と判断した。遺存状態が悪く、溝に直交する断面を設定できなかったため正確ではないが、幅は約 2.7 m、深さは 0.47 m を測る。埋土は 4 層に細分される。最上層である埋土 1 層は第 4 層に類似するが、砂粒を多く含む。2・3 層は第 4 層に由来すると考えられる。最下層となる 4 層は第 4・6 層を母材とするブロック土からなり、加工時の堆積と考えられる。



- | | |
|--|--|
| <p>1. 10YR3/1 黒褐 シルト混細砂
(中砂～極粗砂粒を多く含む、土器細片多く含む)</p> <p>2. 10YR2/1 黒 シルト混細砂
(中砂～粗砂粒を含む、全体に 7.5Y7/1～7/3 灰白～浅黄 細砂混シルトブロックを含むが、層下部に特に多く見られる)</p> | <p>3. 10YR2/1 黒 シルト混細砂
(中砂～粗砂粒を含む、埴輪片を含む)</p> <p>4. 7.5Y7/1 灰白 細砂混シルト
(中砂～粗砂粒を含む、7.5Y7/1～7/3 灰白～浅黄 細砂混シルトブロックと 10YR2/1 黒 シルト混細砂 (中砂～粗砂粒を含む) のブロック土</p> |
|--|--|

0 (1:40) 1 m

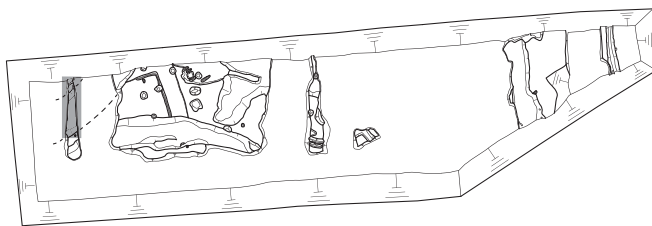


図 70 03006 溝 [1号墳] 平・断面

遺物は土器や埴輪などが出土しており、9点を図示した。

260は弥生土器甕の底部片である。外面は左下がりのタタキの後ハケを施す。底部外面は未調整であり、側面が外方へ突出するなど不整な形状を呈する。

257～259は須恵器である。257は杯蓋である。口径は11.4cmを測り、天井部は丸みを帯びる。258は杯身である。口径は9.0cmを測り、かえりは短い。259は甕である。体部は胴の張る、やや扁平な形状を呈し、中央に1条の凹線を廻らせ、その上位に列点文を施す。口縁部には6条1帯の波状文を施す。口縁端部は欠損する。

261は筒状で一方が若干細くなる形態を呈する土製品である。小径側の端部は欠損するが、おおよそ半周程度が残存しており、器高26.6cm、復元径は大径端部が18.8cm、小径側は12.6cm、厚さは0.8～1.6cmを測る。外面調整はタテハケの後静止痕が伴うヨコハケを施し、一部をナデ消す。内面は縦方

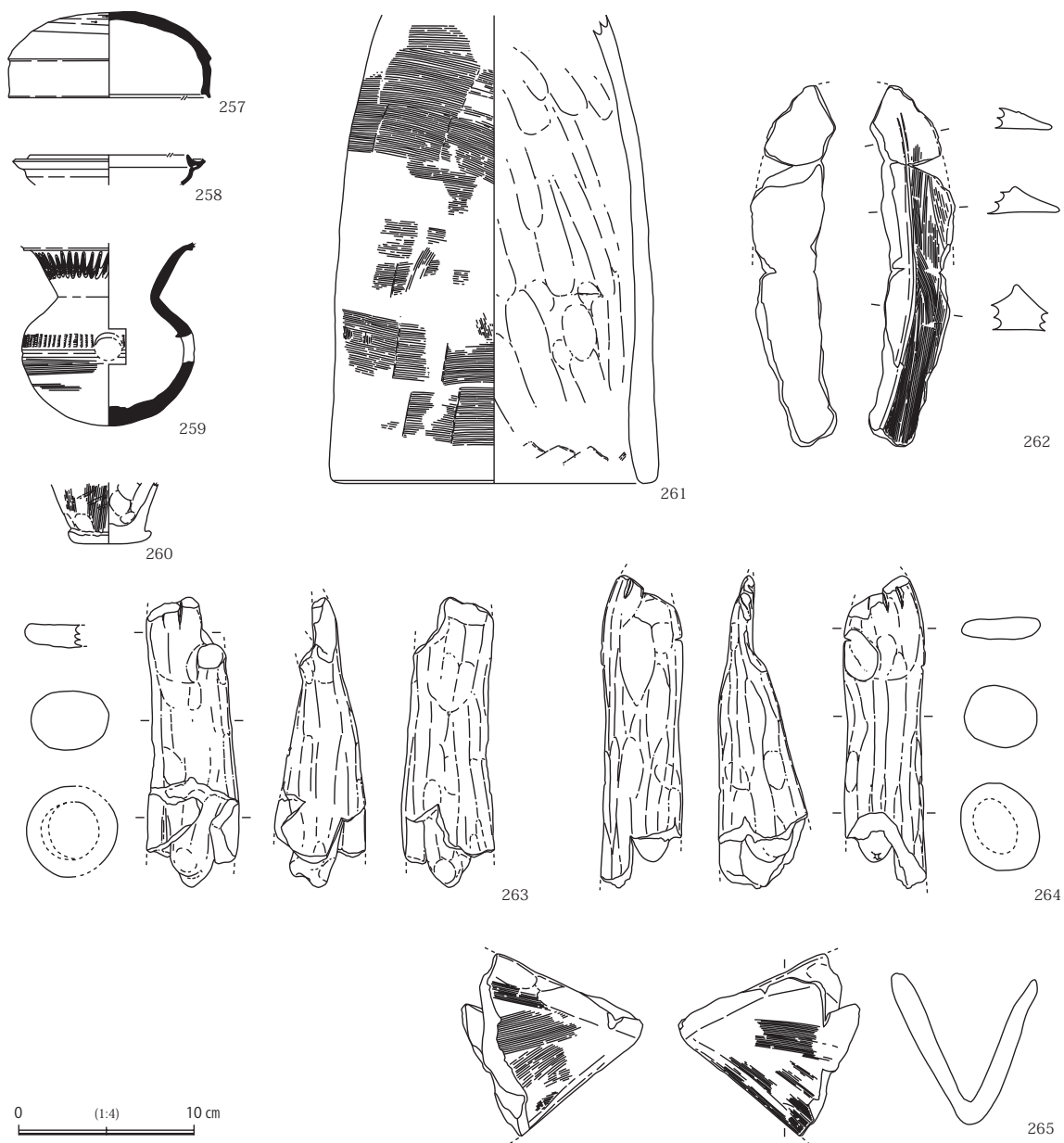


図 71 03006 溝 [1号墳] 出土遺物

向のナデが施され、円筒埴輪と同様の技法を用いて制作されている。大径側内面には器面を削り取った際の痕跡と思われる斜方向の工具痕が残る。内面は全体的に煤けており、大径側端部から 8.5cm ほどは黒色化している。同様に円筒状を呈する土製品は OT08 - 2 調査における 1 号墳 (CSD - 2) から出土している (図版 70 - 516)。端部から 11.6cm ほどが残存し、径は 15.7cm を測る。外面は摩滅が著しいが、タテハケを、内面は縦方向のナデを施す。内面は煤け、端部から 6cm ほどは黒色化している。なお、接合しなかったため写真では示せていないが、同一個体と考えられる破片が複数点出土している。これらの土製品は煙突形土製品の 2 段目となる可能性が高いと思われるが、古墳周溝からの出土事例は知られておらず、また、外面にヨコハケを施す資料も認められないことから⁷⁾、断定するには至らなかった。

262 ~ 265 は埴輪である。262 は器形不明の埴輪片である。平面形は緩やかに弧を描く帯状を、断面は三角形を呈する。外面には長軸に平行するようにハケ調整が施される。内面は平坦な面を有する。形象埴輪を装飾する部材と考えられるが、詳細は不明である。263・264 は人物埴輪の腕部である。262 は右腕、263 は左腕である。形状や大きさ、胎土の様相から同一個体である可能性が高い。端部の形状から、いずれもソケット状の構造で、別に造られた体部や肩部へ挿入されていたものであることが窺える。265 は人物埴輪の女子像に認められる袈裟状衣服の先端部である。OT08 - 2 調査における 2 号墳 (CSD - 22) から出土した人物埴輪 (『概報』図 19 - 98) と同一個体であることが確認された。

これらの遺物のうち須恵器に着目すると、257 と 259 は TK23・47 型式に比定される。一方、258 はやや新しく 6 世紀末から 7 世紀初頭に位置付けられる。同時期の土器は後述する 03007 凹みなどでも確認されることから、後世に窪地として残存した周溝内に流入したものであると思われる。このため、古墳は古墳時代中期後葉の築造と考えたい。

3. 溝

03001 溝 (図 72・73、図版 12)

調査区東端部、7M - 6f において検出した南北方向を指向する溝である。最大幅 0.71 m、深さは 0.15 m を測る。埋土は 3 層に細分され、埋土 1 層は第 4 層に、2・3 層は第 5 層に由来すると思われる。

遺物は 2 点を図示した。266 は土師器高杯である。267 は弥生土器もしくは土師器壺の底部である。端部外面に粘土を貼り付けて拡張している。その他、細片のため図示できなかったが、土師器や須恵器が出土していることから、本遺構は古墳時代中期以降に帰属すると考えられる。

03002 溝 (図 72・73、写真図版 12)

03001 溝の西側において検出した、南北方向を指向する溝である。西側の肩は大部分が攪乱により破壊されているが、確認しえた限りにおいては、幅は 1.23 ~ 1.63 m、深さは 0.31 m を測る。埋土は 4 層に細分され、埋土 1 層は第 4 層に、2・3 層は第 5 層に由来すると考えられる。

遺物は弥生土器や土師器が出土しており、そのうち 8 点を図化した。272 は二重口縁壺の口縁部である。やや肥厚し強く外反する。端部は丸くおさめる。摩滅のため調整は不明である。269・273・274 は甕である。269 は底部片で、外面には葉脈状の痕跡が認められる。273 は口縁部片で端部が内側に肥厚し、水平な端面を有する。274 は同一個体と考えられる口縁部と底部であるが、口縁部の残存状態が悪く接合することはできなかった。底部はやや突出するが、丸みを帯びる。267 は小型の鉢で、底部中央が盛り上がる。268・270 は小型丸底壺である。268 は厚く短い口縁部を有する。269

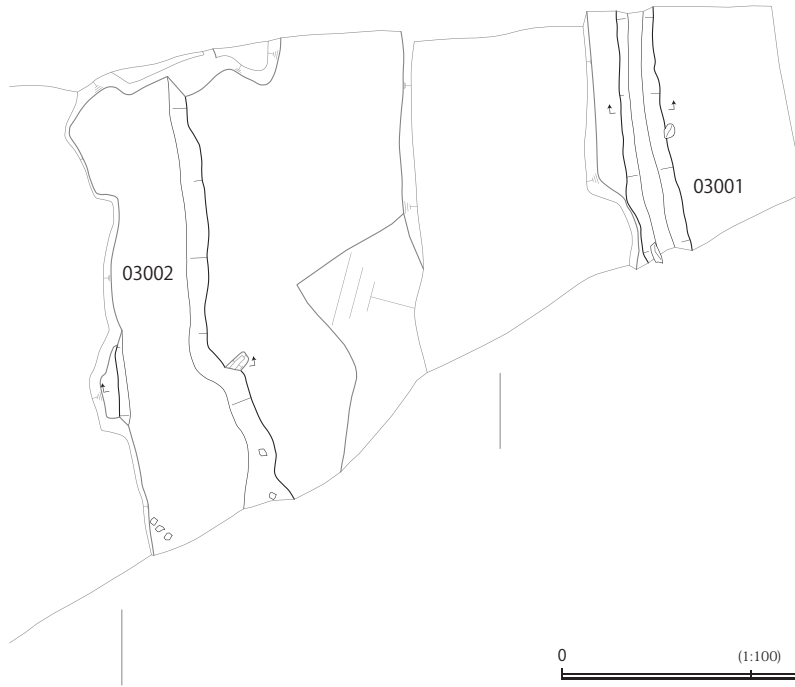


Y=-38,665

Y=-38,660

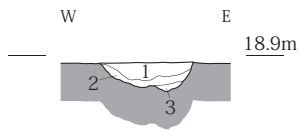
X=-128,750

X=-128,755



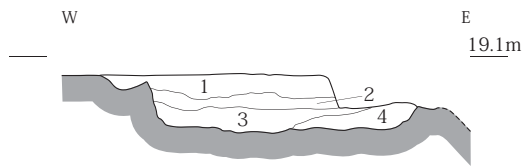
0 1:100 5m

03001溝



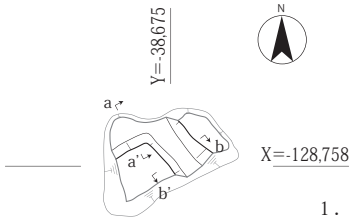
1. 10YR2/1 黒 シルト混細砂 (中砂～極粗砂粒を多く含む)
2. 10YR4/1 褐灰 シルト混細砂 (粗砂粒を若干含む)
3. 10YR5/1 褐灰 シルト混細砂 (粗砂粒を若干含む)

03002溝

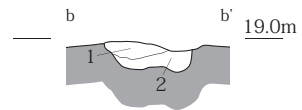
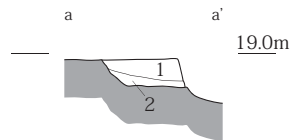


1. 10YR3/1 黒褐 シルト混細砂 (中砂～極粗砂粒を含む)
2. 10YR4/1 褐灰 シルト混細砂 (中砂粒を含む、5Y7/1 灰白 シルト混細砂のブロックを含む)
3. 10YR5/2 灰黄褐 シルト混細砂 (中砂～極粗砂粒を含む)
4. 10YR4/1 褐灰 シルト混細砂 (中砂粒含む、7.5Y4/1 灰 細砂混シルトのブロックを含む)

03004溝



0 1:40 1m



1. 10YR2/1 黒 細砂混シルト (中砂～粗砂粒を含む、土器細片を若干含む)
2. 10YR2/1 黒 細砂混シルト (中砂～粗砂粒を含む) と 5Y7/3 浅黄 細砂混シルトのブロック土

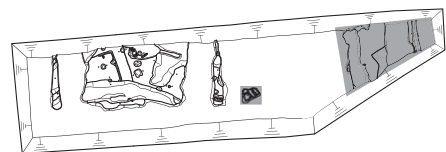


図 72 03001・03002・03004 溝 平・断面

は内湾しながら大きく延びる口縁部で、口径が体部径を上回る器形を呈する。271 は有段屈曲鉢である。体部は浅く、口縁部は上方へ延び、わずかに外反する。

遺構埋土の様相がやや異なり、検出地点も離れているため断定はできないが、本溝は 01001 溝の延長上に位置しており、かつ出土遺物の帰属時期も同じくすることから、同一の遺構であると考えられる。03004 溝 (図 72)

03003 溝の南東において検出した溝である。周囲は広く破壊されており、部分的な検出であるため全体形は不明であるが、残存範囲においては 90 度屈曲する平面形を呈する。溝の規模は、南北方向は幅 0.40 m、深さ 0.15 m、東西方向は北側の肩が破壊されているが、確認しえた限りにおいては幅 0.46 m 以上、深さ 0.14 m を測る。埋土はいずれも 2 層に細分され、上層は第 4 層が落ち込み、下層は第 4 層と第 6 層を母材とするブロック土である。遺物は土器の細片が少量出土しているが時期は不明である。

4. 土坑

03008 土坑 (図 60・74)

竪穴建物 1 の東において検出した。長軸 0.80 m、短軸 0.70 m を測り、南辺の中央がやや窪む土坑である。断面形は皿状を呈し、深さは 0.07 m と浅い。埋土は単層で、第 4 層を主体とする。遺物は土器の破片が出土しているが、細片であるため器種や時期は不明である。

5. 柱穴、ピット

03015 柱穴 (図 60・74)

03003 溝の南側、7 M - 8 f において検出した。西側は攪乱により破壊されるが、確認しえた限りにおいては直径 0.24 m を測る、方形に近い不整な円形を呈する。深さは 0.27 m を測る。明確な柱痕

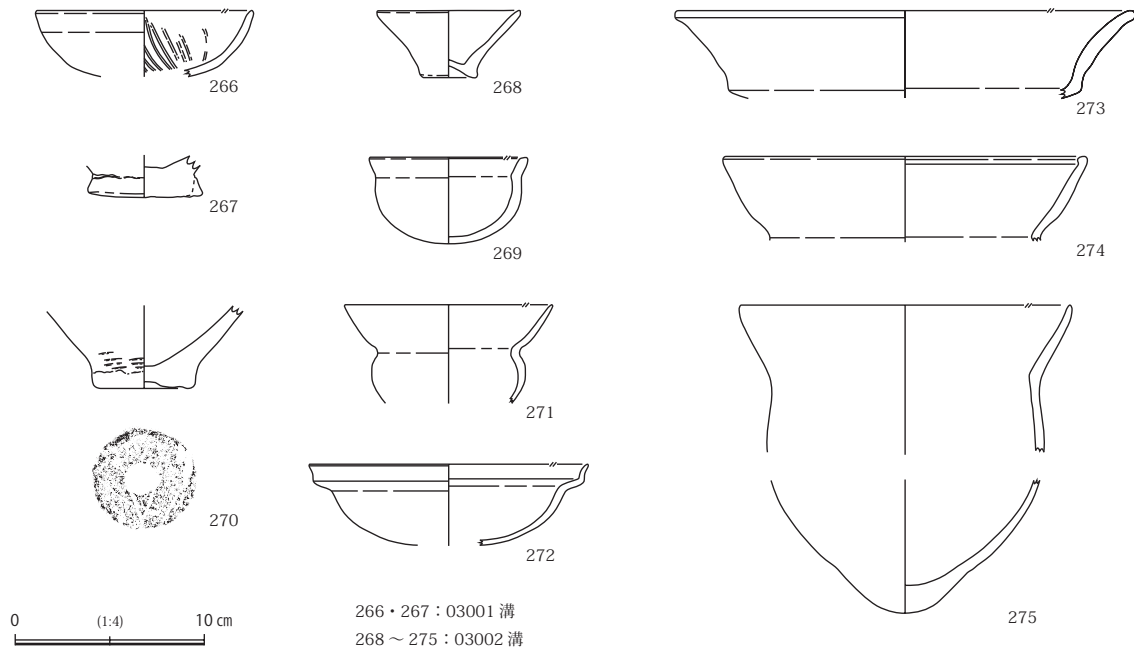


図 73 03001・03002 溝 出土遺物

跡が認められたことから柱穴としたが、周囲は攪乱により破壊されており、建物等を復元することはできなかった。埋土からは土器の細片が出土しているが、詳細時期は不明である。遺構埋土は柱痕跡、掘方埋土のいずれも第4層と第6層を母材とすることから、第4層下面に帰属すると考えられる。

03009ピット (図 60・74)

03008 土坑の北において検出した、やや不整な隅丸長方形を呈するピットである。長軸 0.43 m、短軸 0.41 m、深さは 0.25 m を測り、中央底面がやや窪む断面形を呈する。埋土は単層で、第4層が落ち込む。遺物は高杯の杯部片や土器の細片が出土しているが、詳細な時期は不明である。

03010ピット (図 60・74)

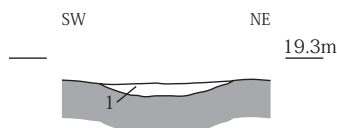
03005 溝の北東において検出した小穴である。平面は長径 0.25 m、短径 0.19 m を測る隅丸方形に近い楕円形を呈する。断面形は逆台形を呈し、底面は平坦であるが、深さは 0.05 m と浅い。埋土は第4層を主体とし、第6層を母材とするブロックを含む。遺物は出土しなかった。

6. 凹み

03007凹み (図 60・75、図版 10)

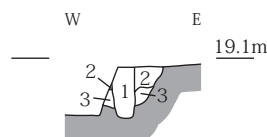
03003 溝の南において検出した。平面形は不整な方形を呈し、南北 3.58 m、東西 1.85 ~ 3.30 m、深さは 0.14 m を測る。埋土は単層で、第4層と第6層を母材としたブロック土である。検出時は、攪乱の影響や埋土が類似することから、03003 溝との重複関係が不明瞭であり、古墳に関係する可能性

03008土坑



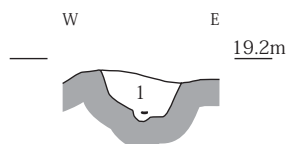
1. 10YR2/1 黒 細砂混シルト
(中砂~極粗砂粒を多く含む、炭化物含む、下部に 10YR7/1 灰白 シルト混細砂 (中砂~粗砂粒を含む) のブロックを若干含む)

03015柱穴



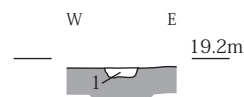
1. 10YR3/1 黒褐 シルト混細砂
(中砂~粗砂粒を含む、5Y7/1 灰白 シルト混細砂 (中砂~粗砂粒を含む) のブロックを含む)
2. 10YR3/1 黒褐 シルト混細砂 (中砂~粗砂粒を含む) と 5Y7/1 灰白 シルト混細砂 (中砂~粗砂粒を含む) のブロック土
3. 5Y7/1 灰白 シルト混細砂 (中砂~粗砂粒を含む) に 10YR3/1 黒褐 シルト混細砂 (中砂~粗砂粒を含む) のブロックを含む)

03009ピット



1. 10YR2/1 黒 細砂混シルト
(中砂~極粗砂粒を含む)

03010ピット



1. 10YR2/1 黒 細砂混シルト
(中砂~粗砂粒を含む、10YR7/1 灰白 シルト混細砂 (中砂~粗砂粒を含む) ブロックを含む)

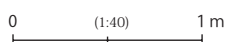


図 74 03008 土坑 03015 柱穴、03009・03010 ピット 断面

も考慮し調査を実施したが、後述するように遺物に古代の土器を含むこと、03007凹みの埋土を除去したのちに03003溝の掘方が検出されたことから、本遺構が後出することが明らかとなった。あわせて、掘方が不整形であることから、人為的に掘削されたものではなく自然に形成されたものと判断した。

遺物は土師器や須恵器、埴輪が出土している。276～280は須恵器である。276・277は杯蓋である。276は口径10.6cm、器高3.4cm、277は口径9.8cm、器高4.0cmを測る。いずれも天井部は静止状態でのヘラ切り離しの後粗いナデを施している。276は口縁部の成形が粗雑であり、場所によって厚さが異なっている。278・279は杯身である。278は口径9.8cmを測る。279は底部外面に別個体の破片が溶着している。280は甕の口縁部で端部を肥厚させる。

281～284は埴輪である。いずれも形象埴輪の破片と思われるが器形は不明である。このため、天地左右や傾きについても誤認している可能性がある。281は不整な筒状の破片である。図上方の一部と下方は失われている。背面には接合痕が認められることから、本来はなんらかの埴輪に貼り付けられ

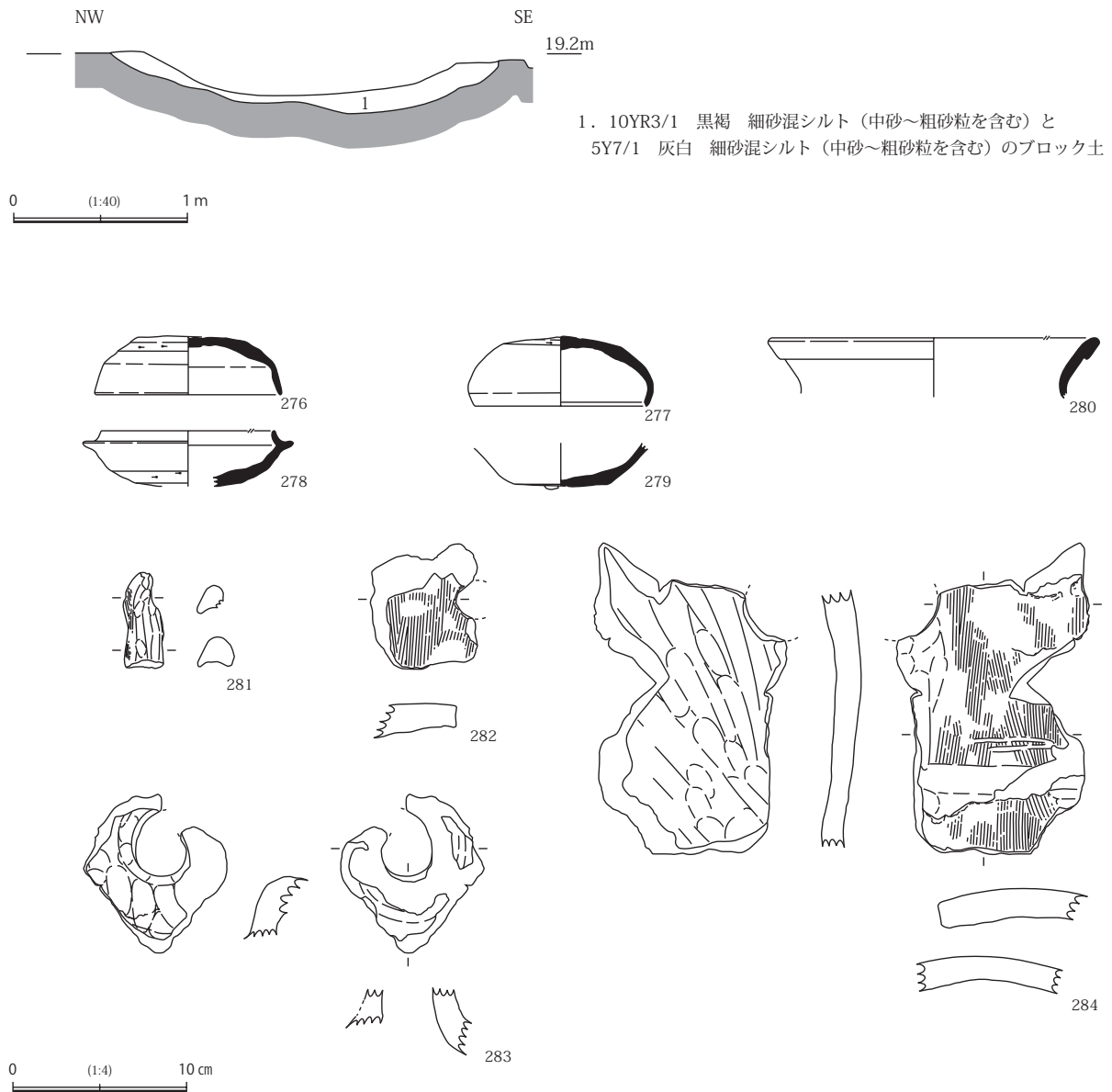


図 75 03007凹み 断面・出土遺物

ていたと思われる。282は円形の透孔がひとつ確認できる。283は壺の頸部状に立ち上がるが、製作技法から埴輪片と考えられる。馬形埴輪など動物埴輪の耳であろうか。284は外面上方左手に円形と思われる透孔が、下半に横位の剥離痕が認められる。人物埴輪の体部片であろうか。

03007凹みは出土した須恵器から6世紀末から7世紀初頭に帰属する。埋土の様相から人為的に埋め戻されたと考えられることから、窪地として残存していた古墳の周溝や自然地形を埋めて平坦化させる行為がなされたものと思われる。埴輪はいずれも本来は周辺の古墳に伴うものが混入したと思われる。



図76 3区 遺構外出土遺物(1)

7. 遺構外出土遺物

3区では第4層の掘削においても土器や埴輪などの遺物が多く出土した。このうち、土器3点、埴輪19点を図示した。

285は土師器高杯の杯部片である。286は須恵器杯身である。6世紀末から7世紀初頭の所産と考えられる。287は肩に縦耳を有する須恵器壺である。7世紀前半か。

288～306は形象埴輪である。288～297は家形埴輪の破片と考えられる。288～290・292・297は平板な器形を呈し、直線的な透孔や線刻を有することから、壁体部片と思われる。291は03005溝から出土した241と類似することから、壁体部の角にあたると思われる。293は図上方が湾曲する器形を呈する。屋根頂部であろうか。294・296は基部と思われる。295は図上端部に接合痕が

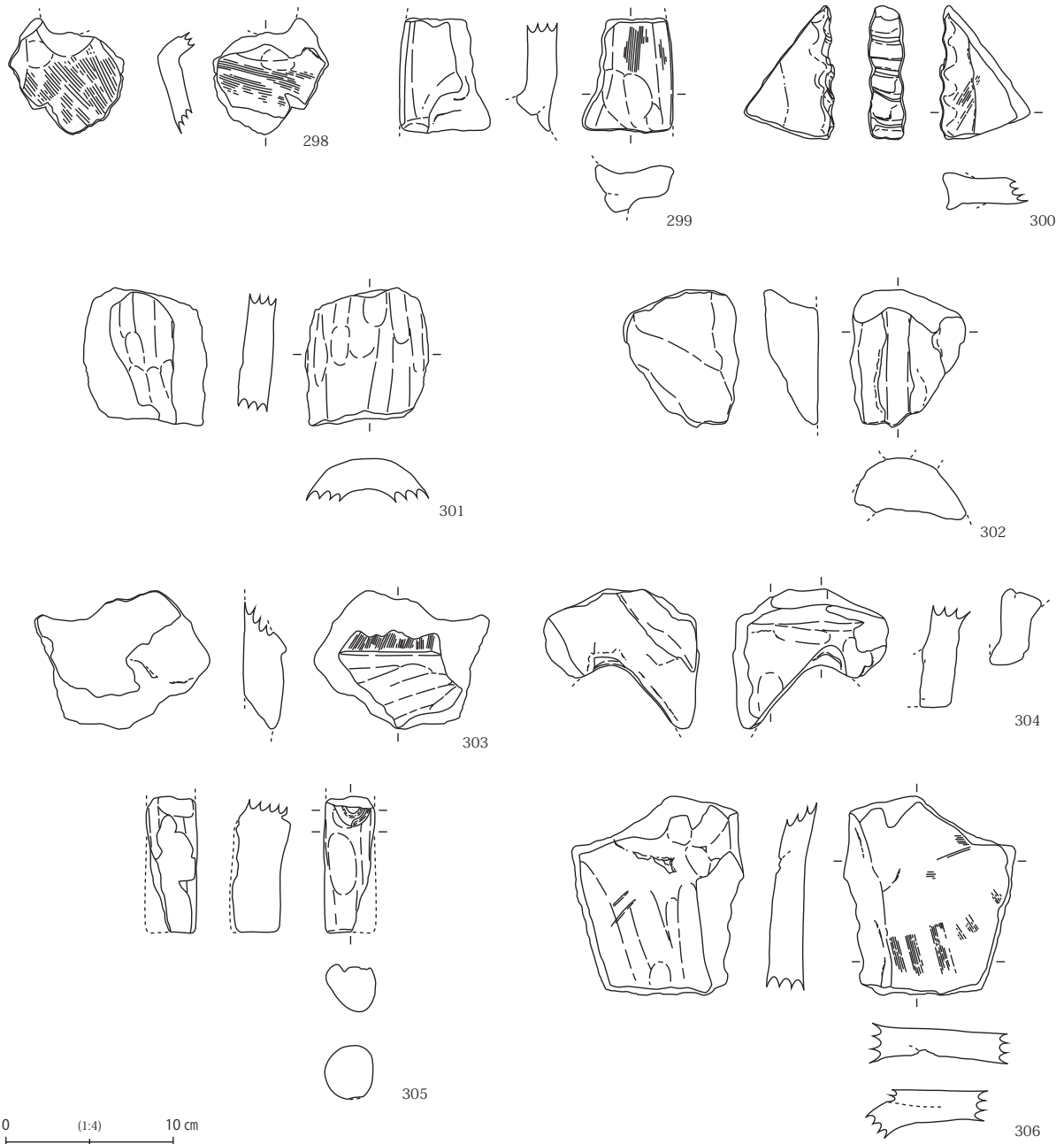


図77 3区 遺構外出土遺物(2)

認められ、断面形状から別個体に直交するように接合されていたと考えられることから、裾廻突帯片の可能性が考えられる。

301 は円柱型の埴輪片である。03005 溝から出土した 226 と同様に動物埴輪の脚部と思われる。

298 ～ 300・302 ～ 306 は器形不明の埴輪である。298 は土器頸部のように屈曲する断面形を呈するが詳細は不明である。299 は 295 に似るが、図の表面左方および下方に剥離痕が認められることから異なる器形のものと思われる。300 は板状の破片の一边に連続する凹みを有する。装飾の可能性もあるが、幅や深さが不規則であり、丁寧さに欠ける。接合を強固にするための造作であろうか。301 も円柱に近い器形を呈するが、外面に線状の剥離痕跡が 2 条認められる点が前出の動物型埴輪脚部とは異なる。303 は平板な器形を呈し、表面にはわずかながら斜位に突出する部位が認められる。出土地点は異なるが、類似した資料は O T 08 - 2 調査 D 区において検出された 4 号墳の周溝 (DSD - 12) からも出土している (図版 70 - 515)。515 は縦 11.3cm、横 20.3cm を測り、断面平板な幅 5 cm ほどの粘土帯を斜位に貼り付ける。外面の調整は、粘土帯以下には部分的にタテハケが認められるが、粘土帯より情報はコビオサエ痕が残る。外面色調は黄橙色を呈し、焼成はやや軟質である。形状から 303 ならびに 515 は屋根を分割して形成する家形埴輪の下屋根頂部と考えられる。304 は一方に鋭角気味に屈曲する端部を有する。他方は欠損のため詳細不明である。端部側内面には端部に沿うように剥離痕が認められる。家形埴輪の破風板であろうか。305 は円柱状の破片で、図下端は平坦に収める。306 は図縦方向の断面形は平坦であるが、横方向は一端がやや湾曲する器形を呈する。また、表面は 2 枚の粘土板を貼り合わせて成形されている。家形埴輪の屋根部であろうか。

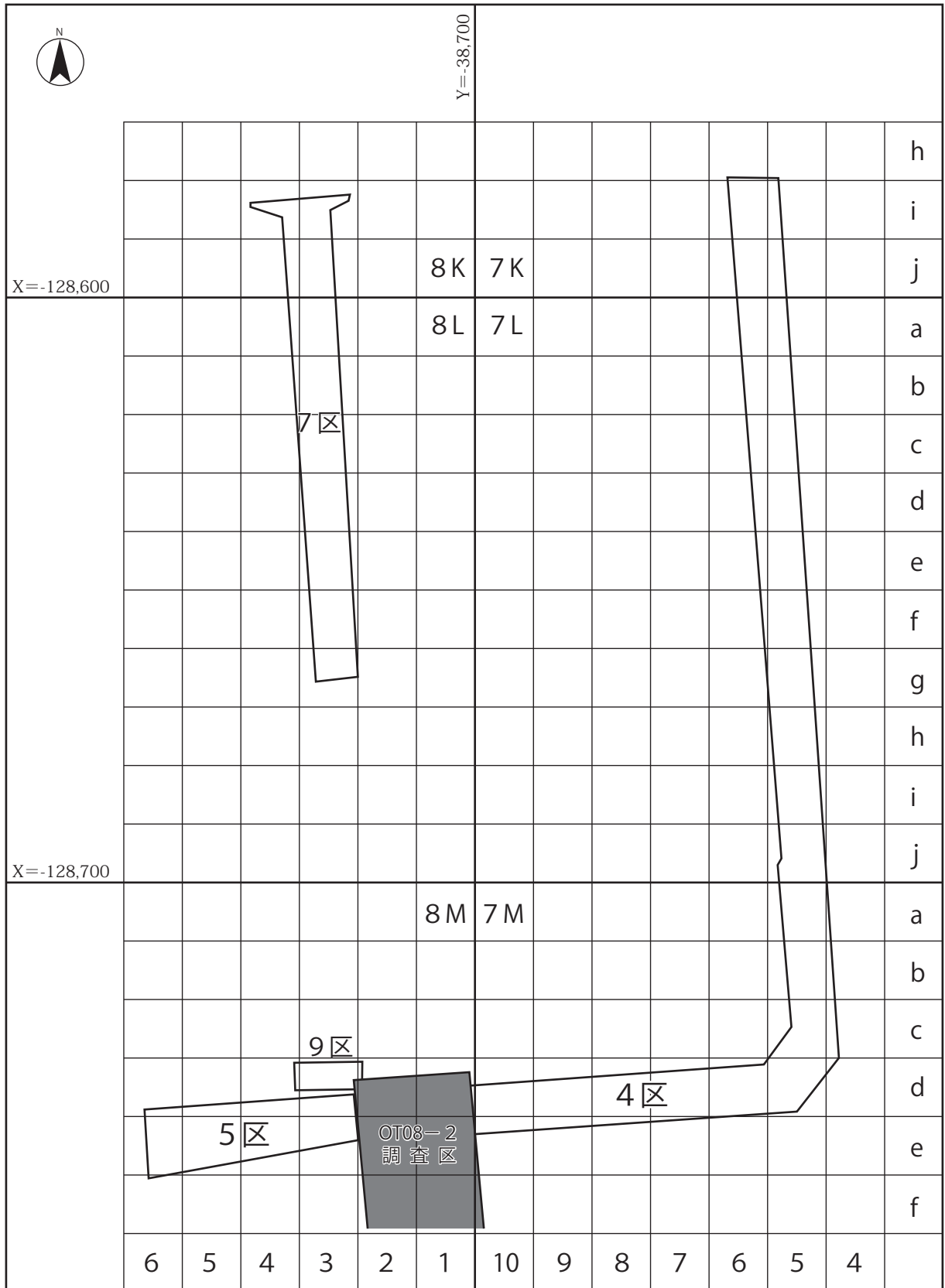


図78 4・5・7・9区 地区割

第5節 4区の調査成果

4区と5区は地区幹線道路建設に伴う調査区である。道路は東西約120m、南北約160m、幅約8mの逆L字形を呈する。このうち、南側の一部はOT08-2調査により既に発掘調査が完了していることから、OT08-2調査区より東側を4区、西側を5区として調査を実施した。

4区の地形は、1区と同様に北東が高く南および西に向けて低くなる。このため調査区北部においては現代の盛土層を除去した時点で第6層が露頭した。一方、調査区南部においては盛土層の下に第1層以下の各層準が遺存しており、調査区南東角周辺においては第5層の堆積も確認された。

調査面にあたる第5面の標高は、調査区北部において19.8m、ほぼ中央にあたるX=-128,660付近において19.6m、南東部において19.3m、南西部において19.2m前後を測る。

4区に隣接する調査区のうち、3区においては1号墳と14号墳が、OT08-2調査区においては1号墳が検出されていることから、本調査区においてもこれらの延長部が検出されることが想定された。しかしながら、当調査区においても現代の開発に伴う攪乱が著しく、辛うじて破壊を免れた地点において調査を実施した。

第1項 層序

上述のとおり、本調査区は調査区の大部分が攪乱により破壊されていたため、層序においても観察可能な地点は限られていた。加えて、上述のとおり地形が高くなる調査区北部および攪乱が深くおよび調査区南西部においては、盛土層を除去した段階で第6層が露頭するなど、層序の観察が可能な地点においても遺存状態は良好とは言い難いものであった。このような状況下ではあるが、4地点において層序を記録した(図80、写真図版14)。

盛土・造成土層 砂礫と砂を主体とする。層厚は0.56～1.17mを測る。

第1層 調査区南東部において部分的に確認された。土質から2層に細分される。

第1-1層 5Y3/2 オリーブ黒 砂質シルト。層厚は0.02～0.19mを測る。

第1-2層 2.5Y5/2 暗灰黄 砂質シルト。第1-1層の床土と考えられる。層厚は最も厚い地点において0.05mを測る。

第2層 7.5Y4/1 灰 粗砂混じり粘質シルト。層厚は0.02～0.19mを測る。

第3層 10YR3/1 黒褐 細砂混じり粘質シルトを主体とし、粗砂～極粗砂をわずかに含む。層厚は0.14～0.21mを測る。

第4層 10YR2/1 黒 細砂混じり粘質シルト。調査区南東部においては砂質がやや強くなる。層厚は0.10～0.30mを測る。

第5層 1区と同様に、地形が低くなる地点において確認した。調査区中央付近においては10YR4/1 褐灰 砂質シルト、南東部においては2.5Y4/3 オリーブ褐 粗砂質シルトからなる。層厚は最も厚い地点において0.24mを測る。

第6層 調査区北部においては2.5Y5/3 黄褐 粗砂～極粗砂混じり粘質シルト、中央部付近においては10YR6/1 褐灰 粘質シルト、南東部においては5Y6/2 灰オリーブ 砂質シルト、南西部においては2.5Y6/1 黄灰 細砂混じり粘質シルトからなる。層厚は不明である。

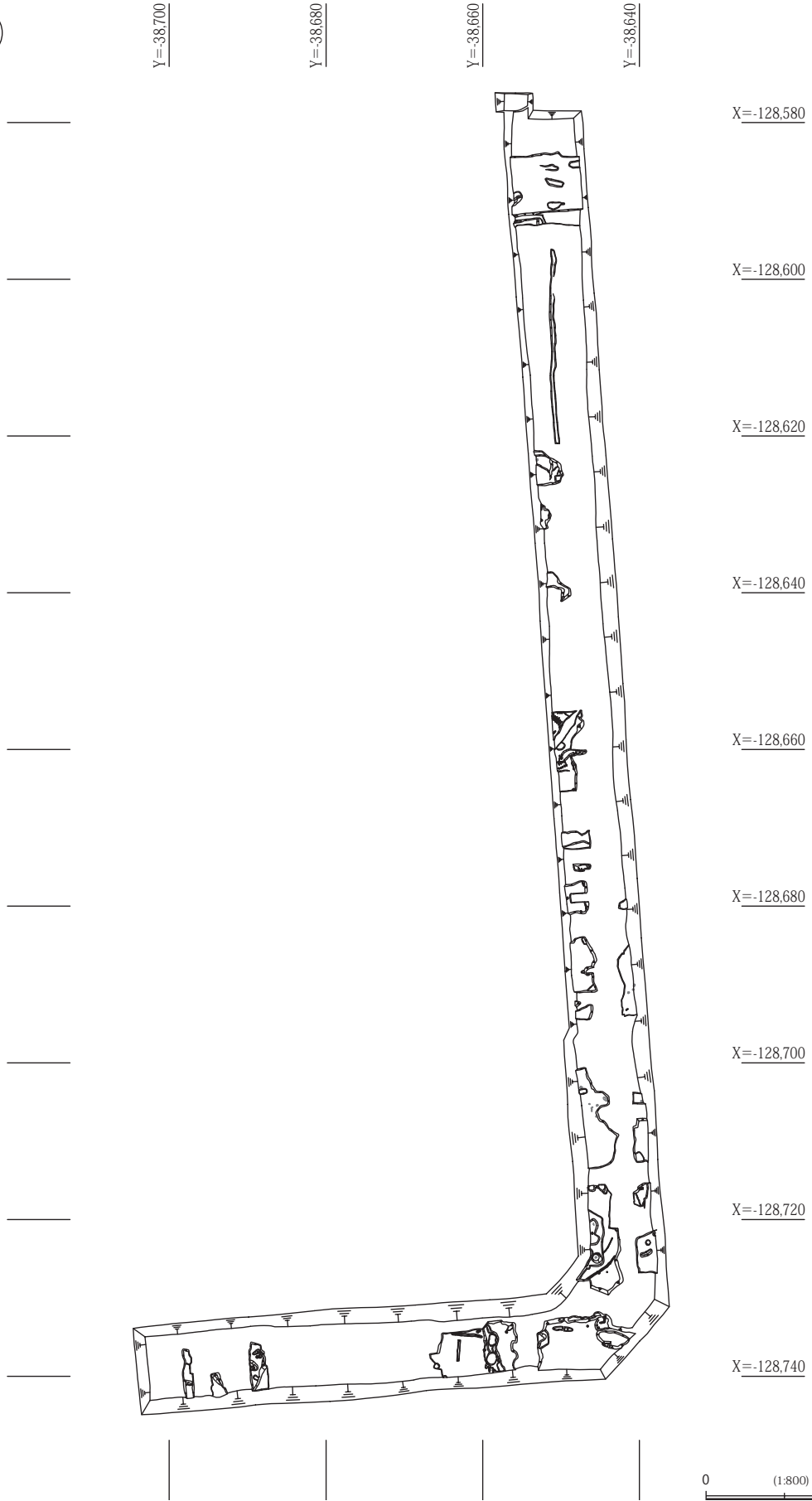
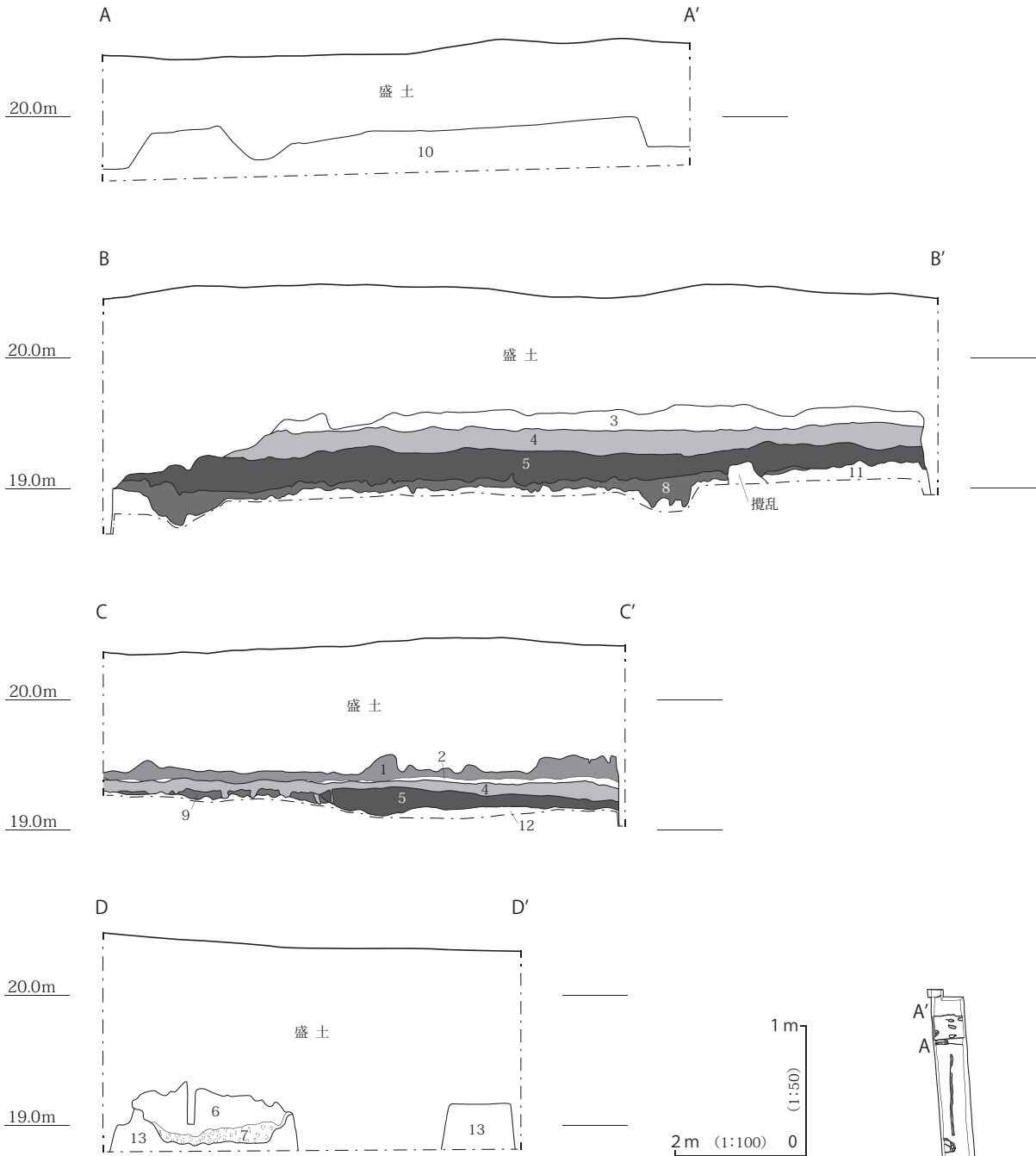


图 79 4区 平面



1. 5Y3/2 オリーブ黒 砂質シルト [第1-1層]
2. 2.5Y5/2 暗灰黄 砂質シルト [第1-2層]
3. 7.5Y4/1 灰 粗砂混じり粘質シルト [第2層]
4. 10YR3/1 黒褐 細砂混じり粘質シルト (粗砂～極粗砂をわずかに含む) [第3層]
5. 10YR2/1 黒 細砂混じり粘質シルト [第4層]
6. 10YR2/1 黒 細砂質シルト [04001 溝埋土]
7. 10YR2/1 黒 細砂質シルトと 2.5Y3/1 黒褐 シルト混じり粗砂～礫の混合土 (2.5Y6/1 黄灰 細砂混じり粘質シルトのブロックを含む) [04001 溝埋土]
8. 10YR4/1 褐灰 砂質シルト [第5層]
9. 2.5Y4/3 オリーブ褐 粗砂質シルト [第5層]
10. 2.5Y5/3 黄褐 粗砂～極粗砂混じり粘質シルト [第6層]
11. 10YR6/1 褐灰 粘質シルト [第6層]
12. 5Y6/2 灰オリーブ 砂質シルト [第6層]
13. 2.5Y6/1 黄灰 細砂混じり粘質シルト [第6層]

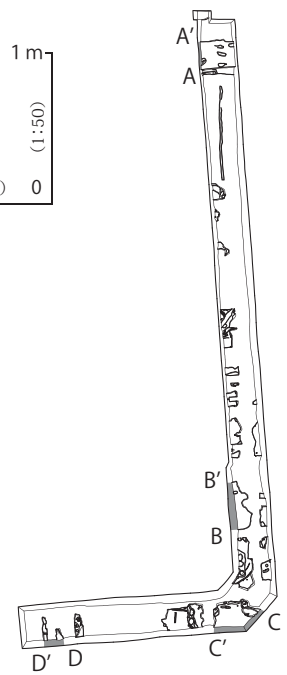


図 80 4区 断面

第2項 検出された遺構と遺物

本調査区においては、X = -128,710 以南において古墳の周溝、溝、土坑、ピット、落ち込みなどを検出した。一方、X = -128,710 以北においては溝や土坑などをわずかに検出したにとどまる。しかしながら、層序の項において記したように調査区北部は基盤層である第6層が高く、現代の開発に伴い大きく削平を受けている。このため、本来は存在していたであろう遺構も消失した可能性が高いと考えられる。

1. 古墳

04001 溝 [1号墳] (図 81 ~ 83、図版 16・53・54)

調査区南西端において検出した。周囲は攪乱が著しく、島状に残存した2地点においてのみの検出となったが、検出位置および出土遺物から3区において検出された03006 溝およびOT08 - 2調査におけるCSD - 2に連続すると考えられる。04001 溝周辺においては、盛土層を除去した段階で第6層が露頭しており、遺構の遺存状態も不良であるが、確認しえた限りにおいては幅 1.91 m、深さ 0.27 mを測る。埋土は2層に細分される。周辺に第5層以上の層準が残存していないため断定はできないが、上層は第4層が落ち込むと推察される。下層は第4層と第5層を母材とした混合土を主体とし、第6層を母材としたブロック土が混じる。墳丘盛土が流入したものであろうか。

遺物は埋土の層界から上層にかけて多く出土した。このうち調査区南壁際において埋土層界から出土した遺物については、SfMを用いて出土状況図を作成した。出土した遺物には縄文土器、土師器、須恵器、埴輪などがあり、13点を図示した。

307・308は縄文土器深鉢である。いずれも口縁端部に突帯を貼り付け、刻目を施す。長原式に比定され、縄文時代晩期末に位置付けられる。309は小型の台付鉢と思われる。体部内面にはヘラミガキが認められる。310は壺もしくは鉢の底部片である。摩滅のため不明瞭であるが、外面には縦方向に3条の線刻が認められる。311は鉢である。口径 14.6cmを測る。外面はハケを施した後、口縁部はナデ消す。

312・313は須恵器杯蓋である。313は東側の調査区南壁際より出土した。口径は312が 12.8cm、313が 13.2cmを測る。312は受部が高く、丸みは帯びるがやや低い天井部である。

314～319は円筒埴輪である。314は体部片である。突帯の断面形状はやや下方に垂れ、突出度は低いものの方形を呈する。外面調整はタテハケの後ヨコハケを施す。315～319は基底部から2段目にかけて残存する資料である。315は端部を欠損するが、底部が外方へ開く器形を呈し、端面が丸い突帯を有する。2段目には円形と思われる透孔の下辺が辛うじて残る。外面調整はタテハケの後ヨコハケを施す。内面調整は縦方向のナデを基調とし、突帯貼り付け部は念入りなユビオサエを加えている。また、端部付近にはわずかであるがヘラケズリの痕跡が残る。外面色調は橙色を呈し、焼成はやや軟質である。316は312と同様に東側の調査区南壁際より出土した。緩やかに外方へ開く器形を呈し、基底部高は 10.0cmを測る。2段目には円形の透孔が穿たれ、突帯の断面形状は三角形を呈する。外面調整はタテハケの後ヨコハケを施すが、基底部が1回のヨコハケであるのに対し、2段目は少なくとも2回にわたってヨコハケが施されている。また、底端部には部分的にはあるが横位に連続するユビオサエが認められ、整形がなされたことが窺える。また、突帯直下から基底部中央付近にかけて小動物の爪痕が刻まれている。内面調整はナデを施す。外面色調は赤褐色を呈し、焼成は硬質である。317は直線的に立ち上がる基底部から外反する2段目へと連続する器形を呈すると考えられ、2段目には円形と

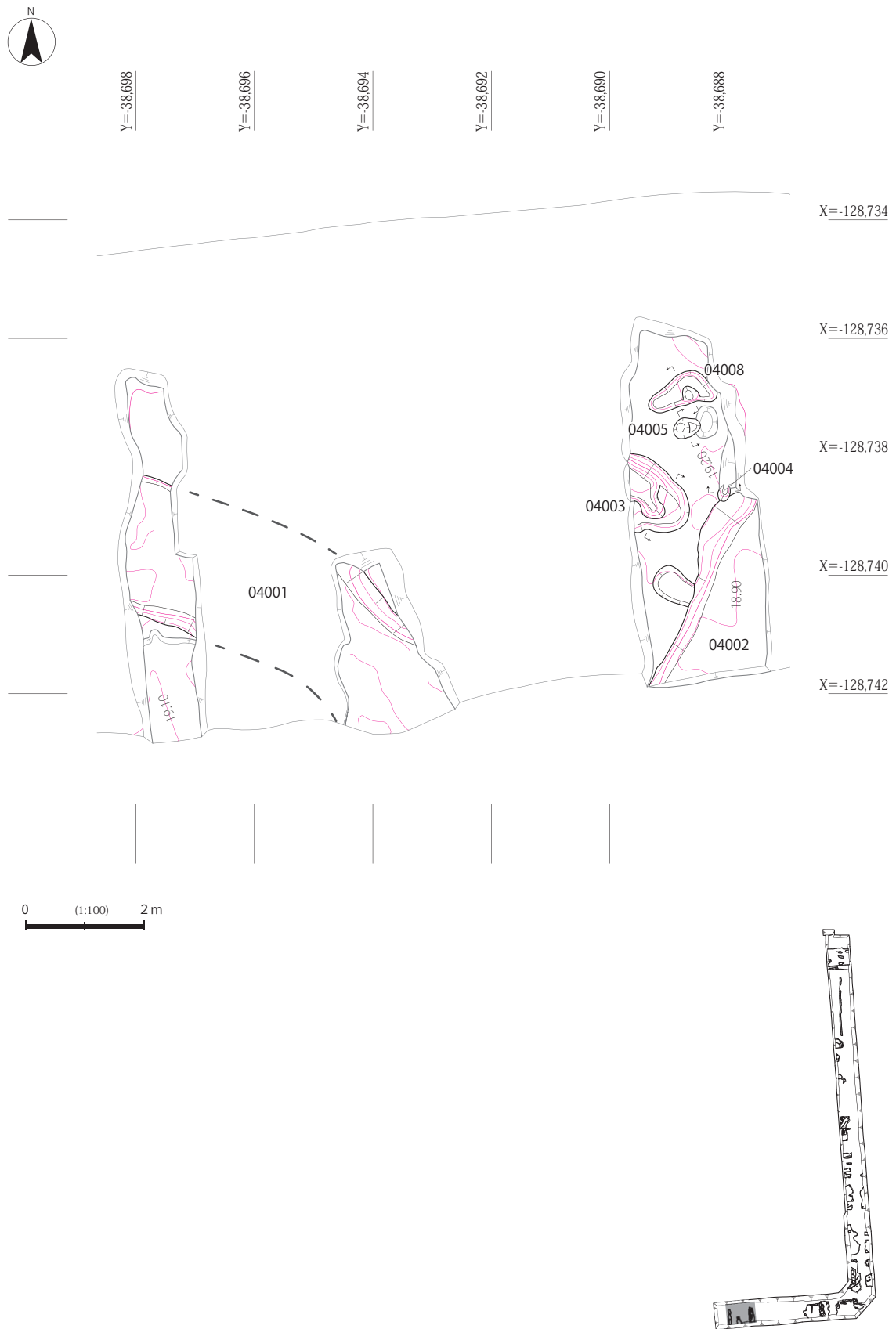
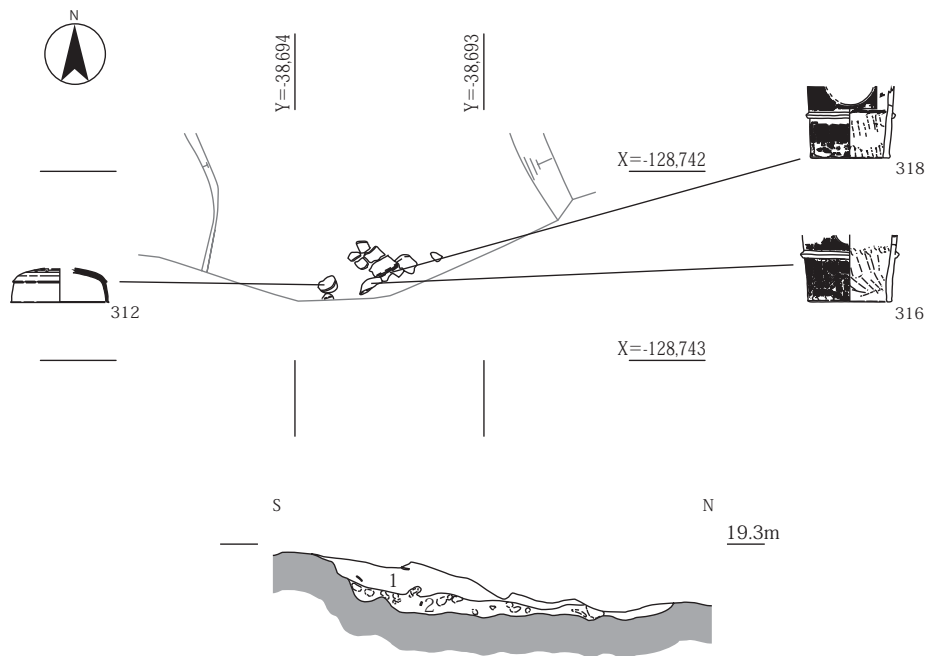
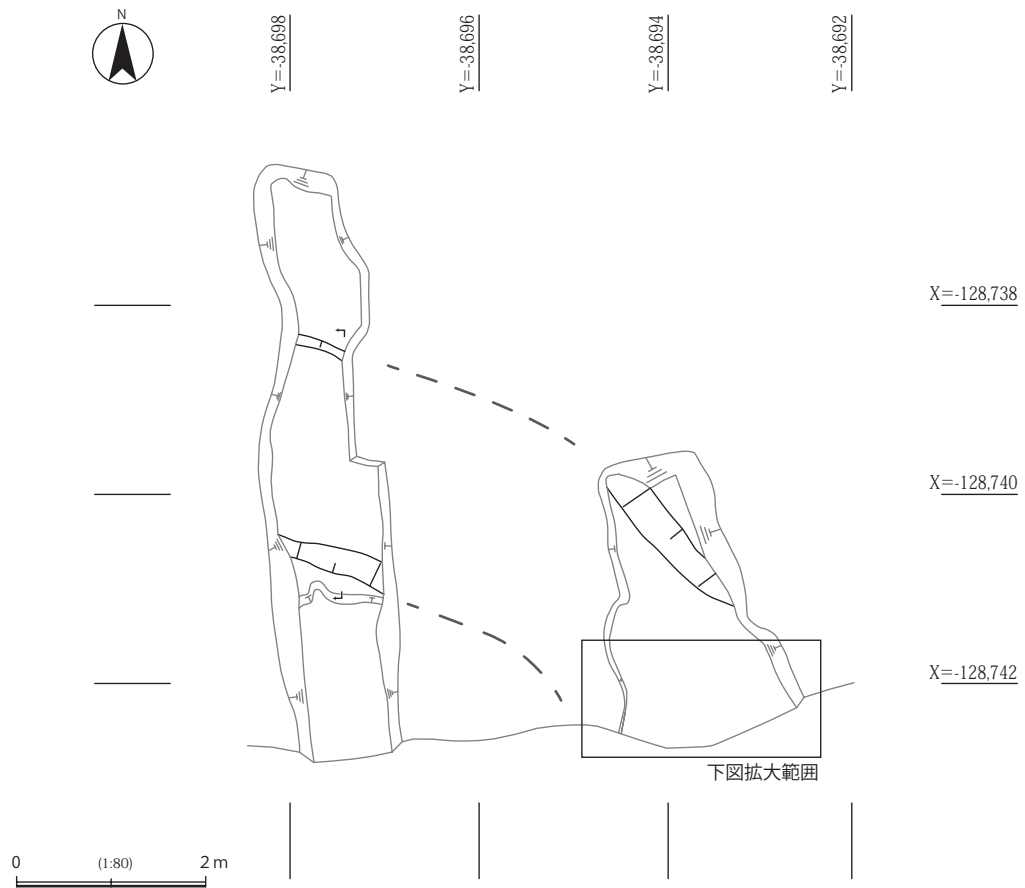


図 81 調査区南西部 遺構配置



1. 10YR2/1 黒 細砂質シルト
2. 10YR2/1 黒 細砂質シルトと 2.5Y3/1 黒褐 シルト混粗砂～礫のブロック土
(2.5Y6/1 黄灰 細砂混粘質シルトのブロック混じる)

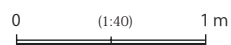


図 82 04001 溝 [1号墳] 平・断面、遺物出土状況

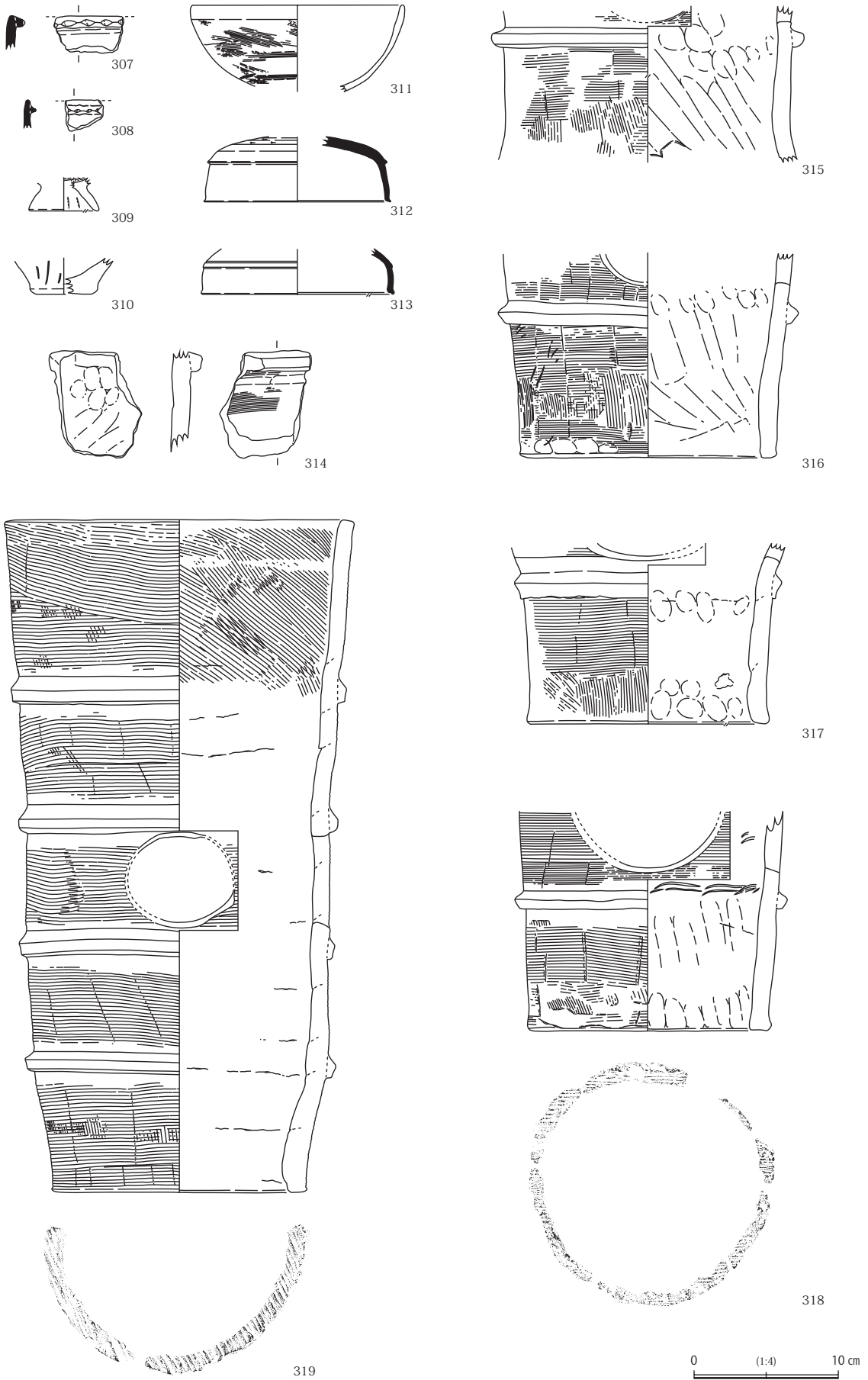


图 83 04001 沟 [1号填] 出土遗物

思われる透孔の下辺が残る。基底部高は 9.8cmを測り、突帯の断面形状は著しく扁平な台形を呈する。外面調整はタテハケの後ヨコハケを施すが、工具の静止痕は不明瞭である。また、底端部付近には一部タタキ目が認められることから、整形が施されたと推察される。内面調整はユビオサエが認められるが、粗雑で接合痕が残る。外面色調は橙色を呈し、焼成はやや軟質である。なお、外面には煤が付着しており、焼成後になんらかの理由で被熱したものと考えられる。318 は 312 や 316 と共に出土した。直線的に立ち上がる器形を呈し、基底部高は 9.2cmを測る。2 段目に円形の透孔が穿たれ、突帯の断面形状は台形を呈する。外面調整はタテハケの後ヨコハケを施すが、基底部に比して 2 段目は工具の静止痕が不明瞭である。また、底部端面には木目の痕跡が認められる。製作時に使用した台の木目が転写したものであろうか。内面調整は縦方向のナデを施すが、突帯貼り付け部から 2 段目にかけては横位の工具痕が認められる。外面色調は黄橙色を呈し、焼成はやや軟質である。以上の 315 ～ 318 はいずれも 2 段目に透孔を有することから 3 条 4 段構成であったと推察される。319 は基底部から 3 段目にかけての破片資料と同一個体と考えられる 4 段目から口縁部にかけての破片資料を図上において復元したものである。4 条 5 段構成で復元高は 46.6cmを測る。基底部高、各段の突帯間隔ならびに口縁部高は、8.9cm、8.4 cm、8.6cm、8.9cm、11.8cmを測り、口縁部が若干高くなる。3 段目には円形の透孔を穿ち、突帯の断面形状は扁平な台形を呈する。外面調整は基底部から 4 段目にかけてはタテハケの後ヨコハケ、口縁部は下半には同様にヨコハケを施すが、上半はナナメハケとなる。底部端面には 318 と同様に木目が転写されている。内面調整は基底部から 4 段目まではナデを施すが、粗雑で粘土積上痕が残る。口縁部はナナメハケを施し端部はナデ消している。外面には赤彩が残る。外面色調は黄橙色を呈し、焼成は硬質である。

04002 溝 [14 号墳] (図 81・84・85、図版 17・54・55)

04001 溝の東において検出した。東側は攪乱により破壊されているが、南側は調査区外へと延びると思われる。溝の形状および検出位置、出土遺物から 3 区において検出された 03003 溝に連続すると考えられる。残存状態は悪いが、確認しえた限りにおいて、幅は 1.44 m以上、深さは 0.31 mを測る。埋土は 3 層に細分される。04001 溝と同様に周辺には第 5 層以上の層準が残存していないため断定はできないものの、上層は第 4 層を主体とし、下半には第 6 層を母材とするブロック土を含む。中層は第 4 層を母材とする止水堆積層と思われる。下層は第 5 層と第 6 層を母材とするブロック土である。墳丘盛土が流入したものであろうか。

遺物は埋土上層から中層にかけて埴輪の破片が出土しており、このうち円筒埴輪 5 点を図化した。320 は透孔とその上位の突帯が残存する破片資料である。透孔は円形で、突帯の断面形状は三角形を呈する。器面は著しく摩滅するが、外面にはわずかにヨコハケが残る。また、突帯貼り付け位置の内面には横位に連続するユビオサエが認められる。321 は口縁部から下位 2 条の突帯までが残存する資料である。外方へ開く器形を呈し、口縁端部はわずかに外反する。突帯の断面形状は 2 条とも三角形を呈する。口縁部高は 11.3cm、突帯間隔は 9.4cmを測る。下方の突帯直下には透孔の上辺が辛うじて残存しており、円形であったと考えられる。外面調整は口縁部が 1 次調整のナナメハケのみであるが、下位段はタテハケの後ヨコハケを施す。上位の突帯の下辺には部分的にユビオサエが認められる。内面調整は口縁部から下位段にかけてタテハケを施すが、口縁部はナデ消している。また、突帯貼り付け位置には横位に連続するユビオサエや横方向のナデが施されている。外面色調は黄橙色を呈し、焼成はやや軟質である。322 は透孔を含む 2 段分が残存しており、基底部および 2 段目と考えられる。底端部を欠損

するため確実ではないが、直立する器形を呈していたと思われる。突帯の断面形状は三角形を呈し、透孔は円形と考えられる。器面の摩滅が著しいが、基底部外面にはわずかにヨコハケが認められる。内面は縦方向のナデを施す。外面色調は橙色を呈し、焼成はやや軟質である。323は基底部と1条目の突帯が残る。わずかに外方へ開きながら立ち上がる器形を呈し、基底部高は9.8cmを測る。突帯の断面形状は下辺が丸みを帯びた三角形を呈する。摩滅のため外面調整は不明瞭であるが、部分的にヨコハケが残り、端部にはユビオサエがみられる。内面調整は縦方向のナデを基調とし、突帯貼り付け位置にはユビオサエを加える。外面色調は黄橙色を呈し、焼成はやや軟質である。324も基底部の破片資料である。外面調整はタテハケの後ヨコハケを施すが、端部には不規則にナデたような痕跡が残り、内面には左下がりのタタキ目が認められることからいわゆる調整がなされたと考えられる。外面色調は黄橙色を呈し、

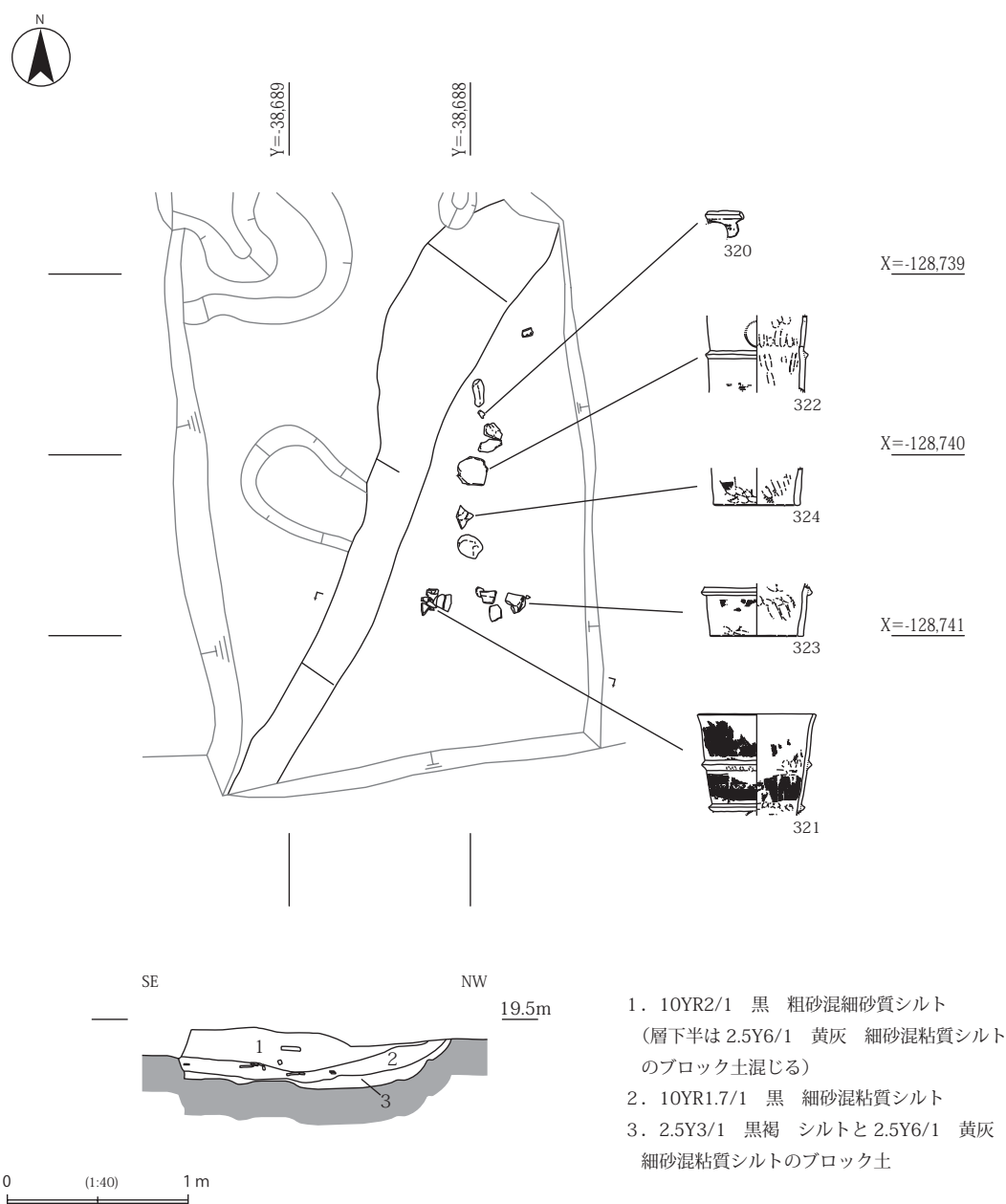


図 84 04002 溝 [14号墳] 遺物出土状況、断面

焼成はやや軟質である。

本溝や連続する 03003 溝からは帰属時期を示す土器は出土していないが、円筒埴輪は 01014 溝などから出土するものと大差ないことから、築造時期も大きな懸隔はないものと推定される。

2. 溝

04007 溝 (図 86 ~ 88、図版 18・55)

7 M-6 d において検出した、北北西-南南東を指向する溝である。平面は一部が細い溝状を呈するなど不整形を呈する。最大幅は 1.88 m、深さは 0.40 m を測る。溝の南北両端においては溝の中央が 1 段深くなる。一方、中央部においては調査の過程において、後述する 04009 土坑のほか、長径 1.52 ~ 1.70 m を測る楕円形の窪み 2 基を検出した。図 87 断面 a-a' は南側の窪み上に設定したため埋土を 6 層に細分しているが、溝の平面形状および埋土の様相から、埋土 1 ~ 3 層が 04007 溝の埋土となり、4 層の堆積後に 04007 溝が掘削されたと判断した。なお、土質などから 4 層は第 4 層が、5 層は第 5 層が落ち込んだものと考えられる。しかしながら、調査においては溝と窪みを同時に掘削してしまったため、平面における検証はできなかった。

遺物は 1 ~ 3 層掘削中に土師器、須恵器、土製品、石器、木製品などが出土しており、6 点を図示した。

325 は土師器鉢である。器面は著しく摩滅する。326 は土師器椀である。南半部の東肩付近から出土した。外面はハケの後ナデを施すが、粘土紐の積み上げ痕を消し切れていない。327 は須恵器杯身である。口径 10.1cm を測り、短いかえりを有する。328 は須恵器平瓶である。325 の北側から出土した。

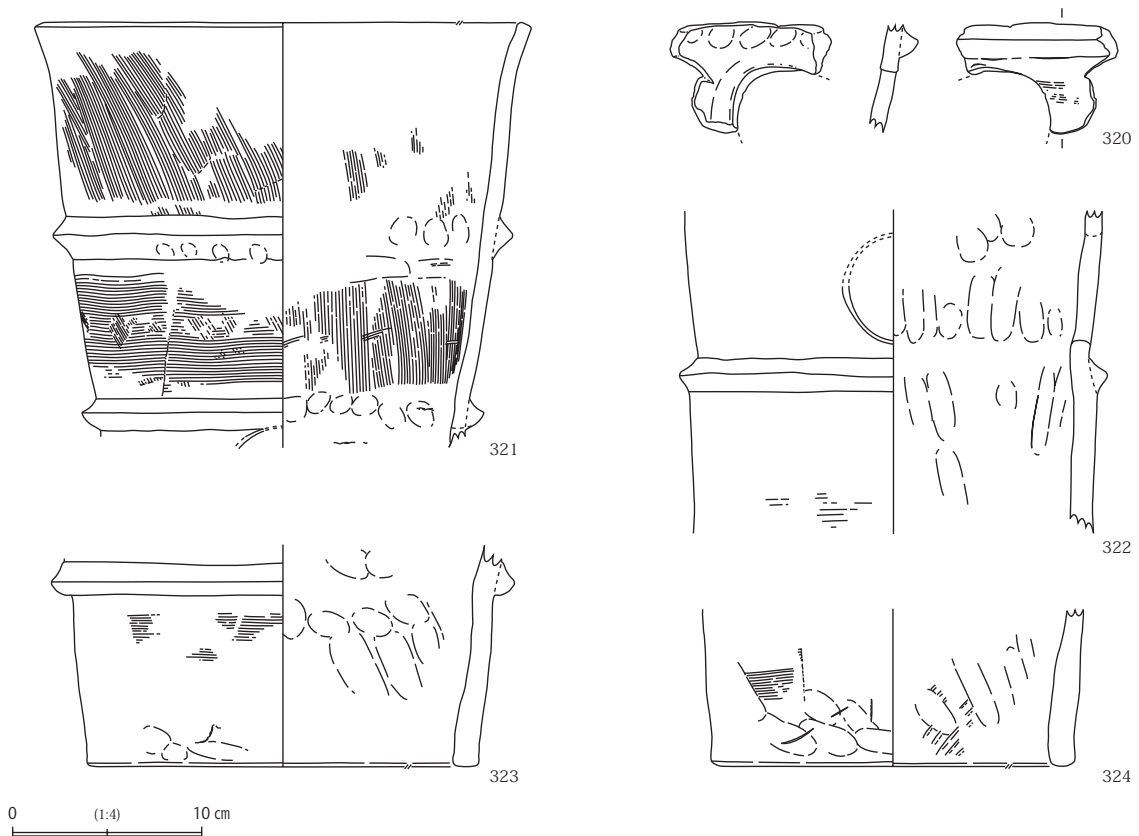


図 85 04002 溝 [14 号墳] 出土遺物

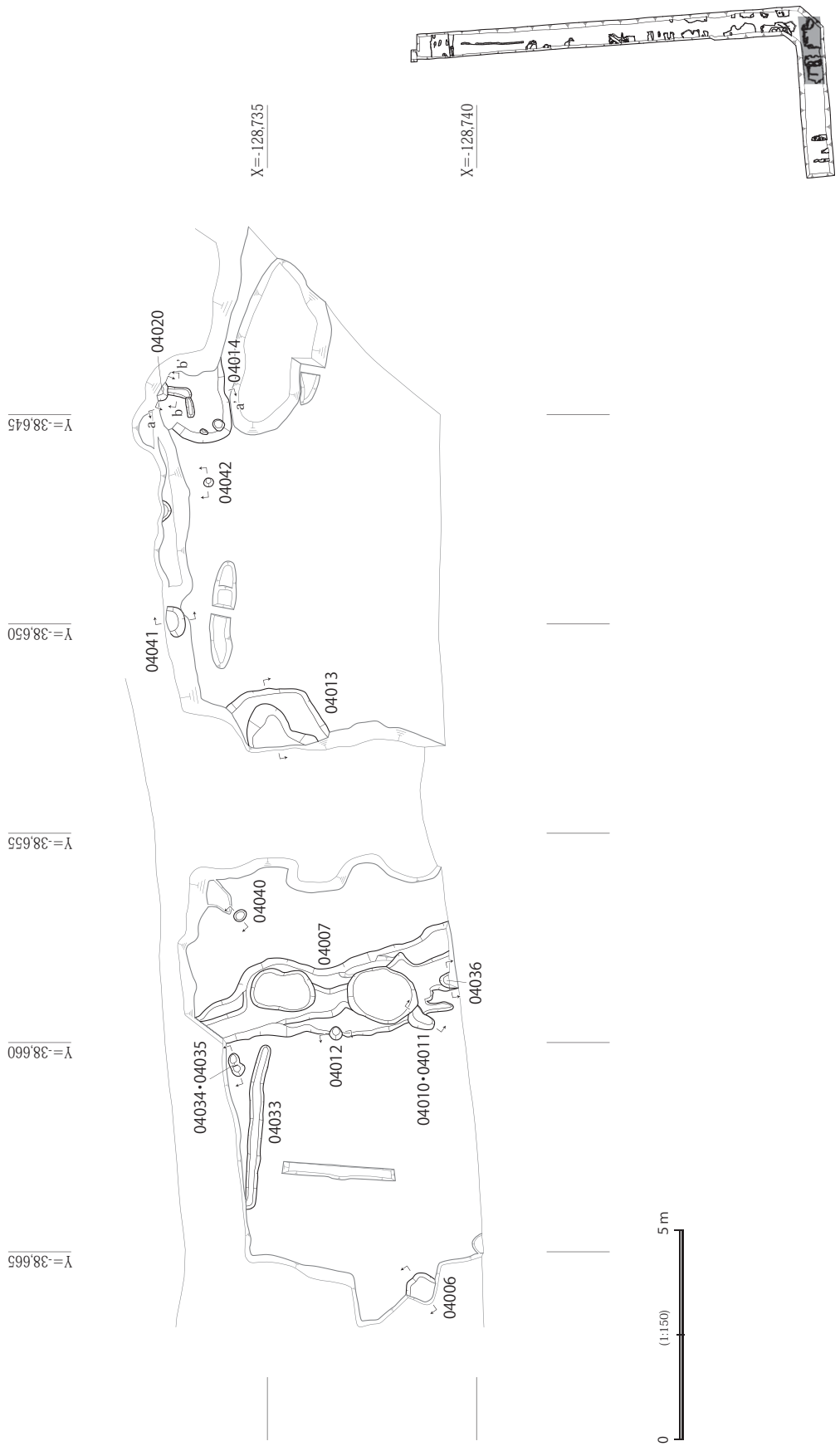


図 86 調査区南東部 遺構配置

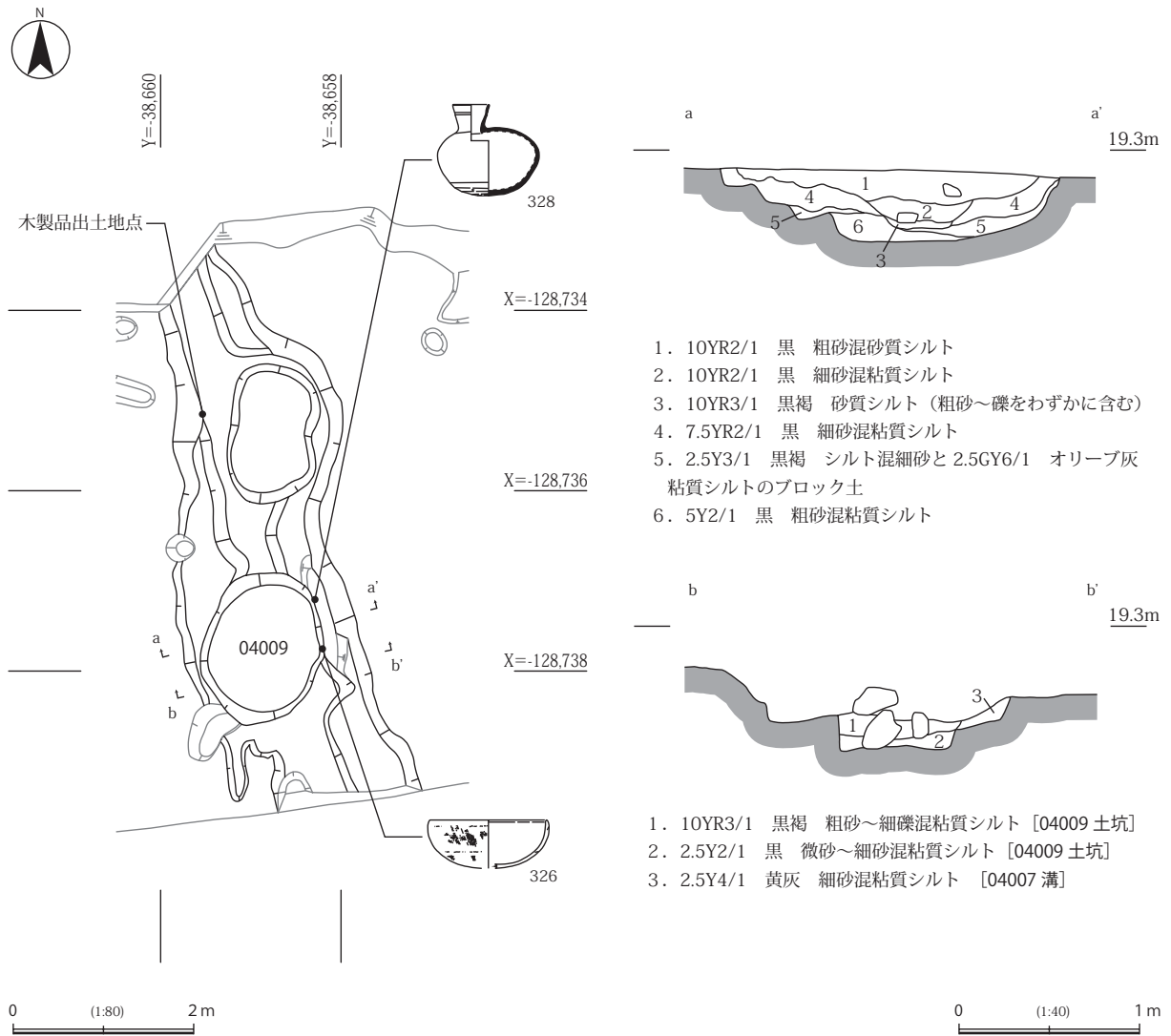


図 87 04007 溝 遺物出土状況、断面

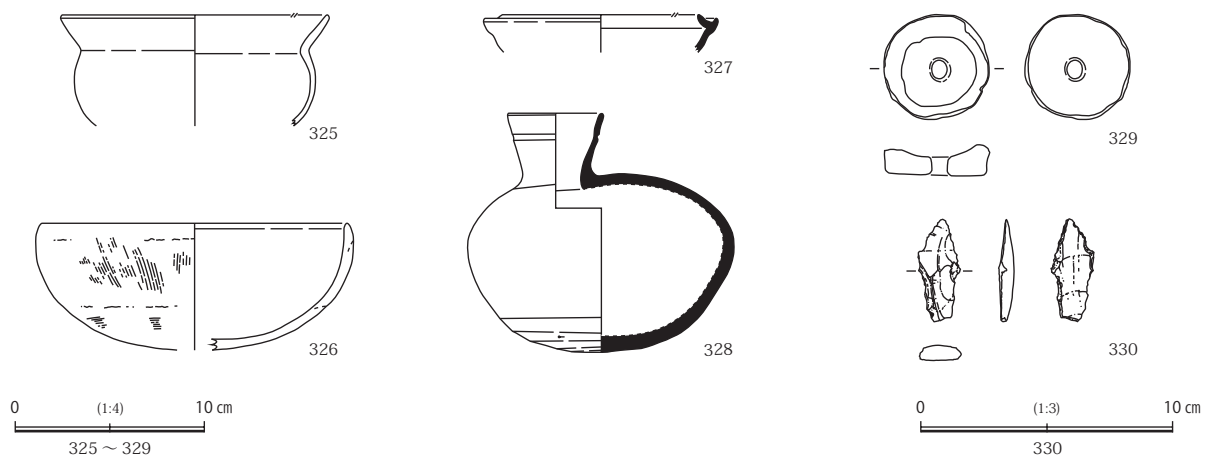


図 88 04007 溝 出土遺物

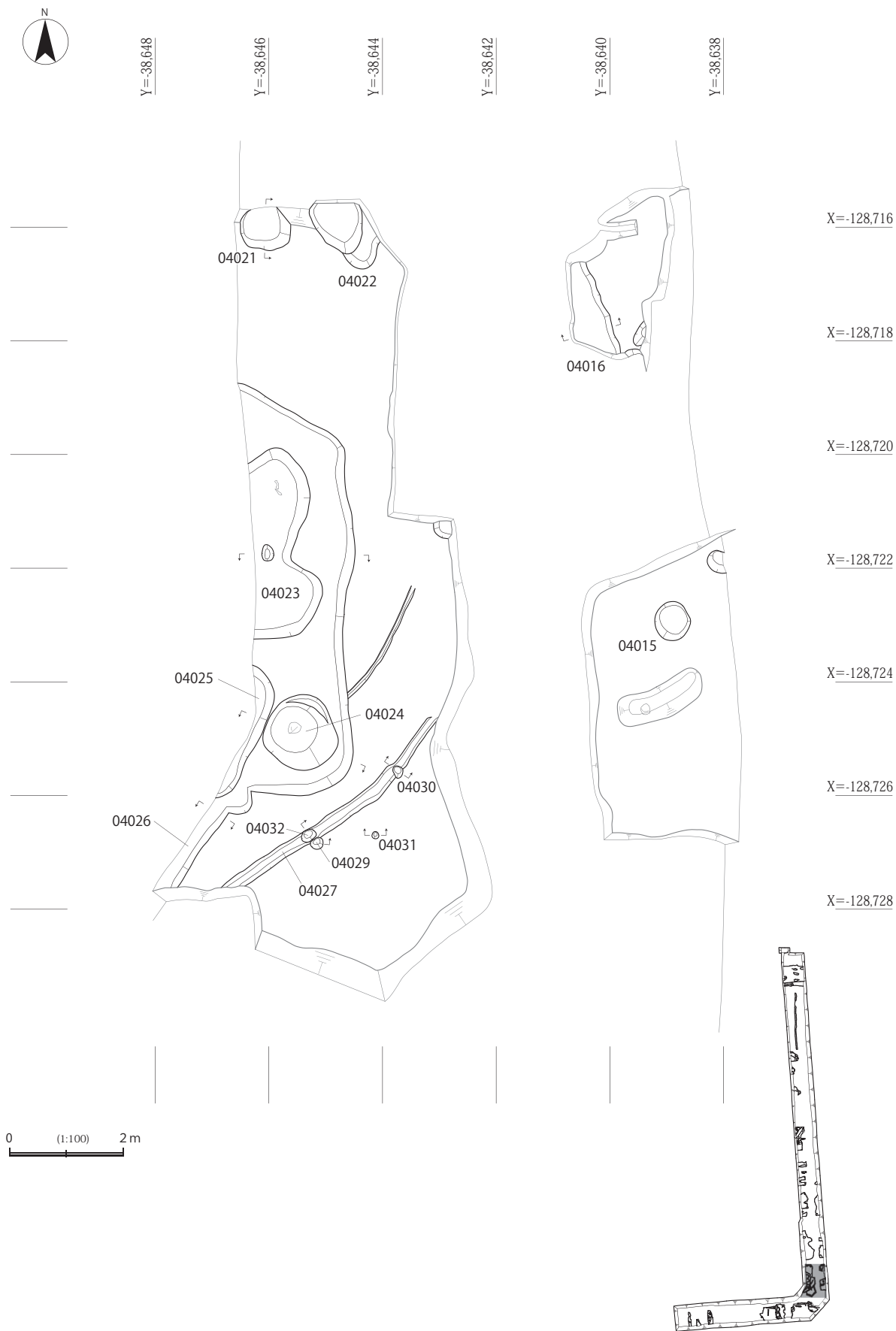


图 89 04016・04026・04027 溝、04015・04021・04022・04024・04025 土坑、04023 落ち込み 平面

丸みを帯びた体部に短い口縁部が取り付く。口縁部には1条の沈線が認められる。329は有孔鉢の底片であるが、内面側を打ち欠き平滑にしている。大きさならびに重さから土錘に転用したものと考えられる。330はサヌカイト製の剥片である。一方の面の側辺に連続した剥離が認められ、刃部を作り出そうとしているものと思われるが、部分的な調整にとどまる。形状から石鏃の未成品と考えられる。

このほか、溝の北西肩部において植物の束を環状に編んだ木製品が出土した。座布団や器財用の台などの用途が窺われるが、腐朽が著しく取り上げることはできなかった。

以上の遺物のうち須恵器杯身ならびに平瓶から、本溝は6世紀末から7世紀初頭に位置付けられる。
04016溝 (図89・90)

7M-5bにおいて検出した。北西-南東方向を指向する溝と思われるが、大部分を攪乱により破壊されているため詳細は不明であり、土坑である可能性も考えられる。幅は0.64m以上、深さは0.14mを測る。埋土は単層で、第4層を主体とし、第6層を母材としたブロックを含む。遺物は土師器の細片が出土しているが、図化しえなかった。埋土から第4層下面に帰属すると考えられるが、詳細な時期については不明である。

04026溝 (図89・90、図版19)

7M-5cにおいて検出した。調査区際における検出であり、西北側は調査区外となるため確実ではないが、北東-南西方向を指向する溝と思われる。北は04023落ち込みに接続し、南は攪乱により破

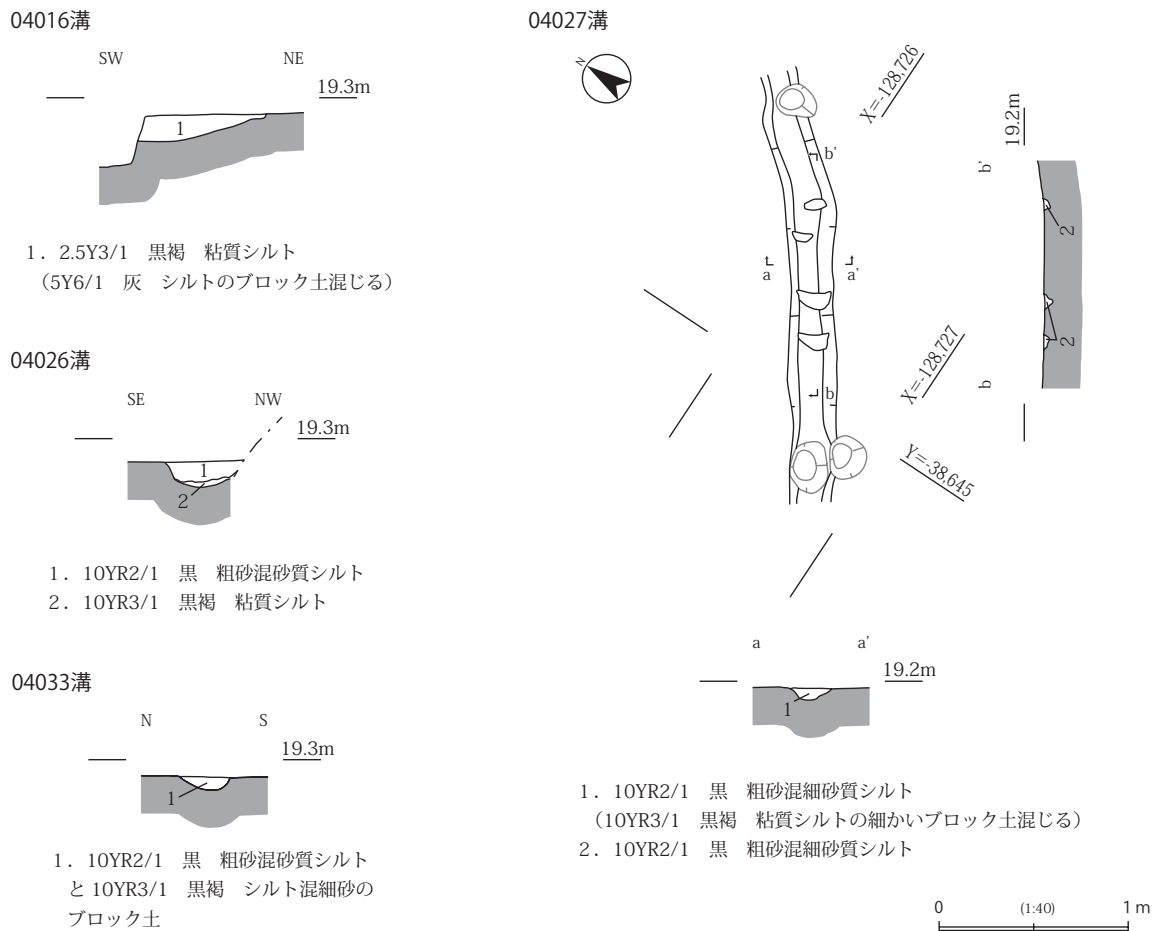


図90 04016・04026・04027・04033 溝 断面

壊される。幅は 0.41 m 以上、深さは 0.13 m を測る。埋土は 2 層に細分され、上層は第 4 層が落ち込んだものと思われる。遺物は土師器の細片 1 点が出土した。埋土から第 4 層下面に帰属すると考えられるが、詳細な時期については不明である。

04027 溝 (図 89・90、図版 19)

04026 溝の東において検出した、わずかに湾曲しながら北東—南西を指向する溝で、両端は攪乱により破壊される。幅は 0.22 m、深さは 0.06 m を測る。埋土は単層で、第 4 層を主体とし、第 5 層を母材とした細かなブロックを含む。溝の底面では連続する半月状の浅い窪みを検出した。溝の掘削に用いられた鋤など工具の痕跡であろうか。遺物は出土しなかった。

04033 溝 (図 86・90)

04007 溝の北西において検出した、東西を指向する溝で、長さ 3.93 m、幅 0.27 m、深さ 0.07 m を測る。埋土は単層で、第 4 層と第 5 層を母材としたブロック土である。遺物は出土しなかった。耕作に伴う小溝であろうか。

04044 溝 (図 92)

7 M-5 g において検出した。北東—南西を指向し、両端は攪乱により破壊される。溝としたが、長大な土坑である可能性も残る。幅は 0.75 m、深さ 0.12 m を測る。埋土は単層で、第 4 層が落ち込む。遺物は出土しなかった。遺構の底面は波打つように不整形であることから、地震動などによる変形を受けている可能性が高い。

3. 土坑

04003 土坑 (図 81・91)

04002 溝の西において検出した。西側は攪乱により破壊されるが、不整な楕円形を呈する土坑と推察される。幅 1.22 m、深さ 0.35 m を測る。埋土は 4 層に細分されるが、埋土 2 層としたものは不整な断面形を呈しており、植物の生痕である可能性がある。1 層は第 4 層と同質であることから、第 4 層下面に帰属すると考えられるが、遺物は出土しておらず詳細な時期については不明である。

04006 土坑 (図 86・91、写真図版 55)

7 M-7 d において検出した。不整な方形を呈する土坑と想定し調査を実施したが、大半を攪乱により破壊されているため全容は不明である。確認しえた限りにおいては幅 0.67 m、深さ 0.15 m を測る。埋土は 2 層に細分され、上層は第 4 層が落ち込む。下層は第 4 層と第 6 層を母材としたブロック土からなる。

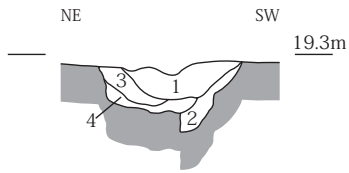
遺物は土師器と埴輪が出土した。334 は形象埴輪である。平面は一端が広がる撥状を呈する。一方の側面は面が形成されており中央部は若干窪む。他方の側面には剥離した痕跡が認められる。断面は緩やかな弧を描くことから、本来は袋状を呈し、異なる個体に貼り付けられていたものと考えられる。人物埴輪の衣装であろうか。

土師器はいずれも細片であるため詳細な時期は明らかにしえないが、埴輪を含む点と周辺で検出された古墳の時期を勘案すると、本土坑は古墳時代中期後葉以降に帰属するものと考えられる。

04008 土坑 (図 81・91)

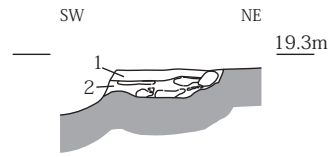
04003 土坑の北において検出した、不整な楕円形を呈する土坑である。東端部は攪乱により破壊される。長径 1 m 以上、短径 0.50 m、深さ 0.18 m を測る。埋土は単層で、第 4 層と第 6 層を母材とす

04003土坑



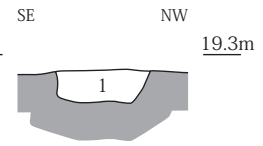
1. 10YR2/1 黒 細砂質シルト
2. 10YR2/1 黒 細砂質シルト
(2.5Y6/1 黄灰 細砂混粘質シルトの細かいブロックを含む)
3. 10YR3/1 黒褐 シルト
4. 2.5Y3/1 黒褐 粘質シルト
(10YR2/1 黒 細砂質シルトと 2.5Y6/1 黄灰 細砂混粘質シルトのブロックを含む)

04006土坑



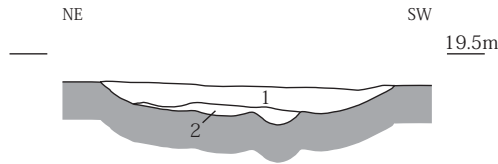
1. 2.5Y2/1 黒 粗砂～細礫混砂質シルト
2. 2.5Y2/1 黒 粗砂～細礫混砂質シルトと 10Y6/1 灰～2.5Y6/2 灰黄 シルトのブロック土

04008土坑



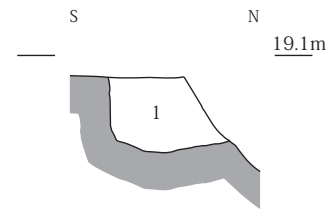
1. 10YR2/1 黒 細砂質シルトと 2.5Y6/1 黄灰、2.5Y8/1 灰白、2.5GY5/1 オリーブ灰 細砂混シルトのブロック土

04013土坑



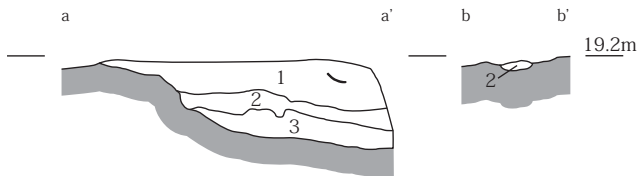
1. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 シルト混細砂 (礫を含む)
2. 2.5Y3/1 黒褐 シルト混細砂～粗砂 (礫を含む)

04021土坑



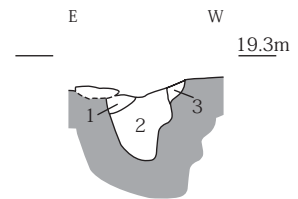
1. 10YR2/1 黒 粘質シルトと 10YR3/1 黒褐 シルト、10YR4/1 褐灰 砂質シルト、2.5Y5/1 黄灰 粘質シルトのブロック土

04014土坑



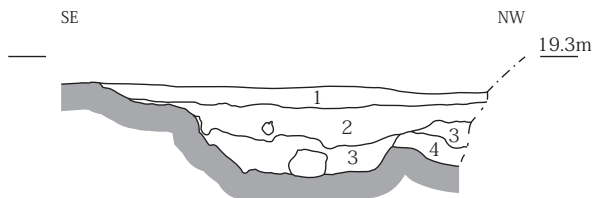
1. 2.5Y2/1 黒 粗砂～礫混粘質シルト
2. 2.5Y2/1 黒 粗砂～礫混粘質シルトと 2.5Y3/1 黒褐 シルト質細砂、10Y6/1 灰～2.5Y6/2 灰黄 シルト混中砂～粗砂のブロック土
3. 10Y6/1 灰～2.5Y6/2 灰黄 シルト混中砂～粗砂 (2.5Y2/1 黒 粘質シルトと 2.5Y3/1 黒褐 シルト質細砂のブロックを含む)

04036土坑



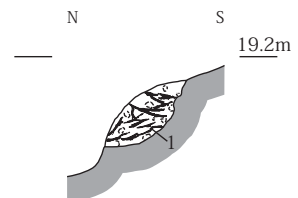
1. 10YR2/1 黒 細砂混粘質シルト
2. 2.5Y3/1 黒褐 粘土
3. 2.5Y3/1 黒褐 シルト混細砂 [04007 溝埋土]

04024・04025土坑



1. 10YR2/1 黒 粗砂混砂質シルト
2. 10YR1.7/1 黒 細砂混粘質シルト
3. 10YR3/1 黒褐 粘質シルト (2.5Y6/1 黄灰 細砂混粘質シルトの細かいブロックを含む)
4. 10YR3/1 黒褐 細砂質シルト (2.5Y6/1 黄灰 細砂混粘質シルトの細かいブロックを含む)

04041土坑



1. 10YR4/1 褐灰 砂質シルト (2.5Y5/1 黄灰 粘質シルトのブロックと 10YR2/1 黒 粘質シルトの薄層を含む)

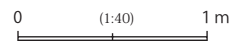


図 91 04003・04006・04008・04013・04014・04021・04024・04025・04036・04041 土坑 断面

るブロック土が入る。遺物は出土しなかった。

04009 土坑 (図 86・87、図版 19)

04007 溝中央付近において、同溝埋土掘削中に検出した。平面円形を呈する土坑であるが、誤って平面の記録を作成する前に掘削してしまったため断面図のみの掲載となる。重複関係から本土坑が04007 溝を切ると考えられる。04007 溝埋土との掘り分けができていないため本来の規模は不明であるが、確認しえた限りにおいては径 0.68 m、深さ 0.21 m を測る。底は平坦で、埋土は 2 層に細分される。

遺物は土師器の破片が出土しているが、時期を特定しうるものはなかった。

04013 土坑 (図 86・91、図版 55)

04007 溝の東において検出した。北および西側は攪乱により破壊されるが、検出しえた限りにおいては南北 1.92 m、東西 1.44 m、深さ 0.27 m を測る。埋土は 3 層に細分され、上層は第 4 層が落ち込む。埋土中・下層はいずれも第 4～6 層を母材とするブロック土であることから、人為的に埋め戻された可

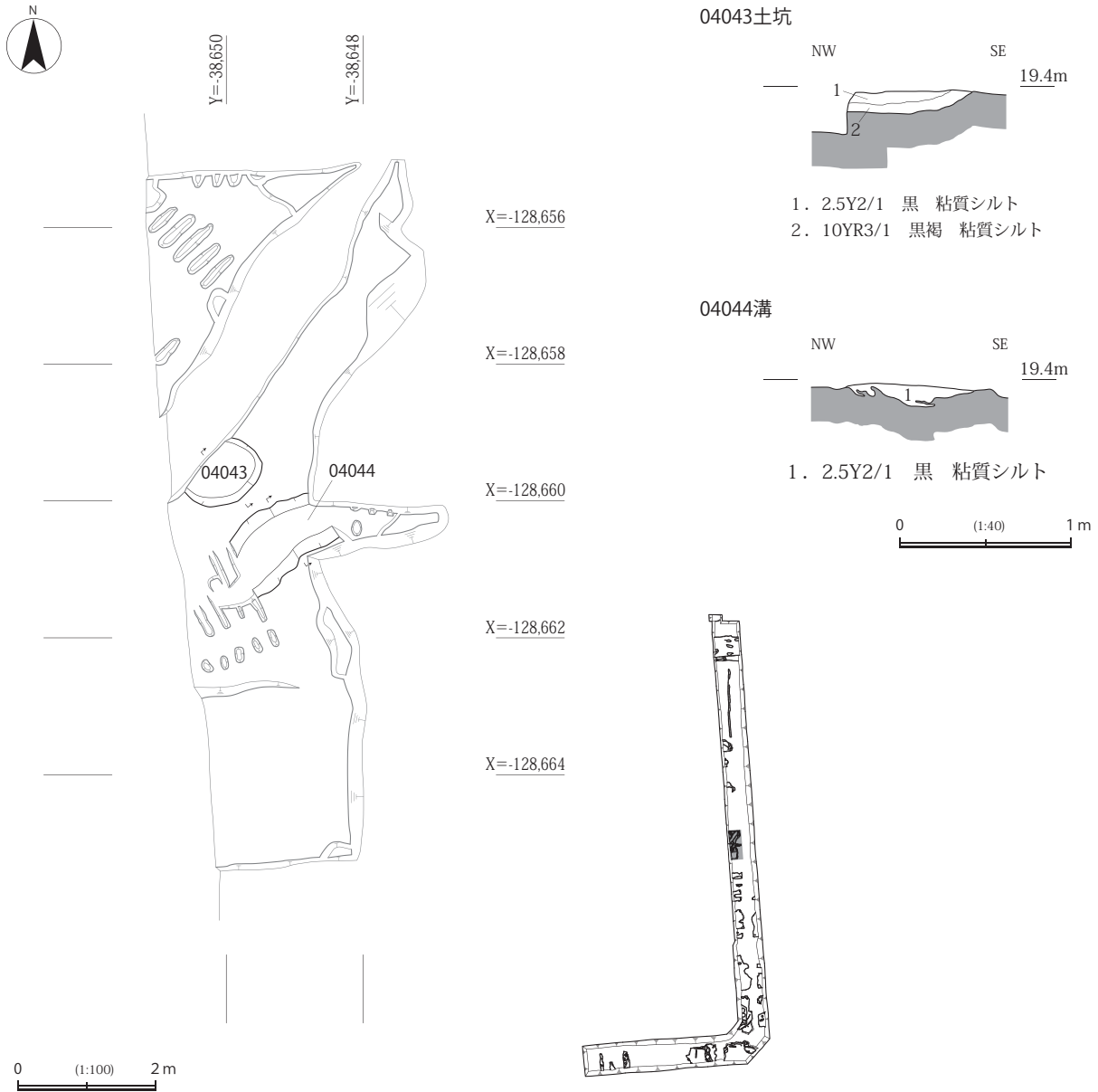


図 92 04043 土坑、04044 溝 平・断面

能性があるが、明らかにしえなかった。

遺物は土師器や須恵器が出土しており、2点を図示した。330は土師器甕である。体部外面には縦方向の、体部および口縁部内面にかけては横方向のハケを施す。331は須恵器杯蓋である。天井部は未調整で、ヘラによる切り離し痕が残る。これらの出土遺物から、本遺構は6世紀末から7世紀初頭に帰属すると考えられる。

04014 土坑 (図 86・91)

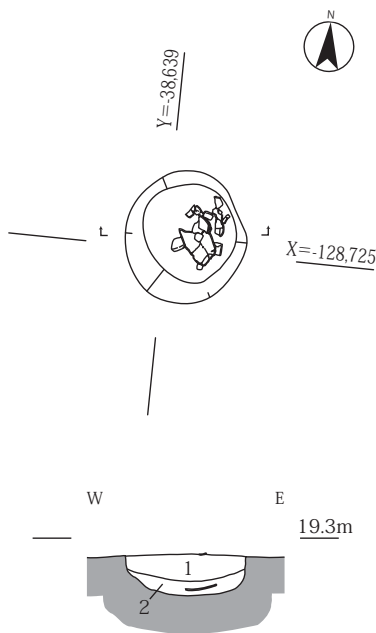
7M-5dにおいて検出した。北および東側は攪乱に破壊されるが、検出範囲においては隅丸方形を呈する。底面中央は溝状に浅く窪む。幅は2.98m、深さは0.20mを測る。埋土は2層に細分され、上層は第3層が落ち込むことから、第3層下面に帰属すると考えられる。遺物は土師器の細片が出土しているが、図示しえるものはなかった。

04015 土坑 (図 89・93)

7M-4cにおいて検出した、正円に近い平面形を呈する土坑である。直径は0.64m、深さ0.21mを測る。埋土は2層に細分され、いずれも第4・6層を母材とする。機械掘削の段階で土器が露頭したことから、本来はさらに上方から掘り込まれたと考えられる。

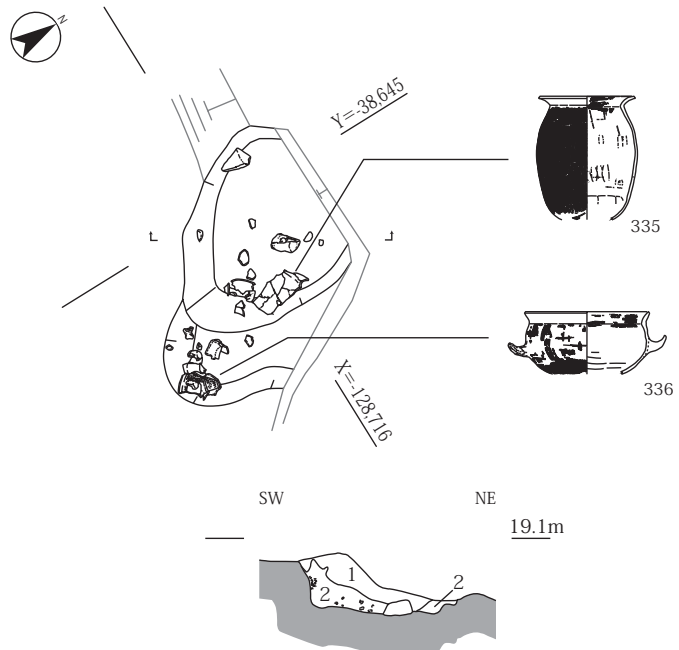
遺物は埋土上層から土師器甕の破片が、埋土下層から土師器壺の破片が出土した。残存状況が悪く図化することはできなかつたため断定はできぬものの、これらの遺物のうち、壺は古墳時代前期の所産と思われる。埋土の様相も矛盾しないことから、本遺構は古墳時代前期に帰属すると考えたい。

04015土坑



1. 10YR2/1 黒 細砂混粘質シルト (礫をわずかに含む)
2. 10YR2/1 黒 細砂混粘質シルトと 2.5Y5/3 黄褐 シルトのブロック土

04022土坑



1. 10YR2/1 黒 粘質シルトと 10YR3/1 黒褐 シルトの混合土を主体とし、10YR4/1 褐灰 砂質シルトのブロック土混じる (一部に地震による変形あり)
2. 10YR3/1 黒褐 シルトを主体とし、10YR2/1 黒 粘質シルトの混合土 (10YR4/1 褐灰~ 2.5Y5/1 黄灰 粘質シルトの細かいブロック土混じる)

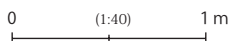
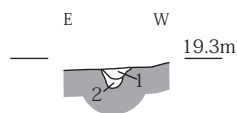


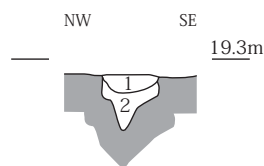
図 93 04015・04022 土坑 遺物出土状況・断面

04004ピット



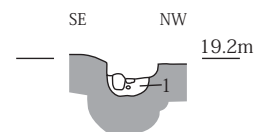
1. 10YR2/1 黒 細砂質シルト
2. 2.5Y8/1 灰白 シルト質微砂～細砂と 10YR2/1 黒 細砂質シルト、5Y5/2 灰オリーブ 細砂混シルトのブロック土

04005ピット



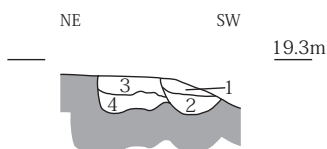
1. 10YR2/1 黒 細砂質シルトと 5Y5/2 灰オリーブ～2.5Y6/1 黄灰 シルト質微砂～細砂のブロック土
2. 土色1と 10YR3/1 黒褐 シルトと 2.5GY5/1 オリーブ灰 細砂～中砂混 粘質シルトのブロック土

04020ピット



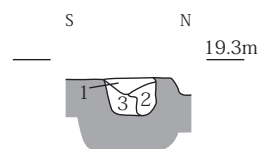
1. 2.5Y2/1 黒 粗砂～細礫混 粘質シルトと 2.5Y3/1 黒褐 シルト質細砂、10Y6/1 灰～2.5Y6/2 灰黄 中砂～粗砂のブロック土

04010・04011ピット



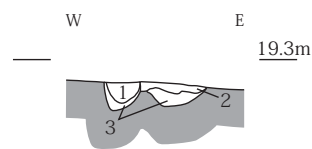
1. 10YR2/1 黒 砂質シルト
2. 10YR2/1 黒 砂質シルトと 2.5GY6/1 オリーブ灰 粘質シルトのブロック土
3. 10YR2/1 黒 砂質シルト (2.5GY6/1 オリーブ灰 粘質シルトのブロック土混じる)
4. 2.5GY6/1 オリーブ灰 粘質シルト (10YR2/1 黒 砂質シルトのブロック土混じる)

04012ピット



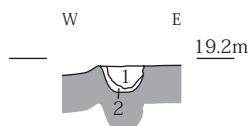
1. 10YR2/1 黒 粗砂混砂質シルト
2. 10YR3/1 黒褐 シルト混細砂 (10YR2/1 黒 粗砂混砂質シルトと 2.5Y5/1 黄灰 シルト混中砂～粗砂のブロック土混じる)
3. 2.5Y5/1 黄灰 シルト混中砂～粗砂 (10YR3/1 黒褐 シルト混細砂のブロック土混じる)

04034・04035ピット



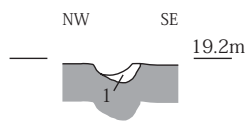
1. 10YR2/1 黒 粗砂混砂質シルト (10YR3/1 黒褐 シルト混細砂のブロック土少量混じる)
2. 10YR2/1 黒 粗砂混細砂質シルトと 10YR3/1 黒褐 シルト混細砂のブロック土
3. 10YR3/1 黒褐 シルト混細砂 (10YR2/1 黒 粗砂混砂質シルトのブロック混じる)

04029ピット



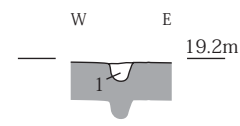
1. 2.5Y2/1 黒 シルト
2. 2.5Y2/1 黒 シルトと 10YR3/1 黒褐 粘質シルトのブロック土

04030ピット



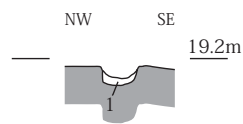
1. 2.5Y2/1 黒 シルトと 10YR3/1 黒褐 粘質シルトの細かいブロック土

04031ピット



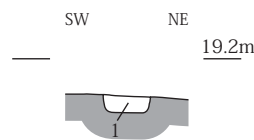
1. 2.5Y2/1 黒 シルトと 10YR3/1 黒褐 粘質シルトのブロック土

04032ピット



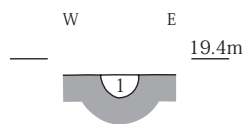
1. 2.5Y2/1 黒 シルトと 10YR3/1 黒褐 粘質シルトのブロック土

04040ピット



1. 10YR3/1 黒褐 シルト混細砂 (10YR2/1 黒 粗砂混砂質シルトのブロック混じる)

04042ピット



1. 10YR2/1 黒 粘質シルトと 10YR3/1 黒褐 シルト、10YR4/1 褐灰 砂質シルトのブロック土

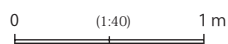


図 94 4区 ピット 断面

04021 土坑 (図 89・91)

7M-5bにおいて検出した、北側を攪乱により破壊された土坑である。検出範囲においては平面隅丸方形を呈するが、本土坑より出土した遺物が隣接する04022土坑出土遺物と接合したことから、本来は不整な平面形を呈する同一の遺構であった可能性も考えられる。南北長0.76m、東西長0.97m、深さ0.39mを測る。埋土は第4～6層を母材とするブロック土である。断面観察では、埋土の上半分が第5層を、下半分が第4層を主体とする傾向が窺えたが、明確な層界は確認できなかったため単層としている。埋土の様相から人為的に埋め戻されたと思われることから、上下の差異は埋め戻しの単位となる可能性も考えられる。

遺物は土師器片が出土しており、このうち甕の破片が後述する04022土坑より出土した長胴甕と接合した(図95-335)。このため、本遺構は古墳時代中期後葉に帰属すると考えられる。

04022 土坑 (図 89・93・95、写真図版 19・56)

04021土坑の東に隣接し、北と東側は攪乱により破壊される。検出範囲においては不整な隅丸方形を呈するが、上述のように本来は04021土坑と同一の遺構であった可能性がある。長さ0.98m、深さ0.28mを測る。底面は南東から北西に向かって落ち込んだ後、障壁状の鞍部を経て再度深くなる。埋土は2層に細分され、上層は第4層と第5層が混じり合った土を主体とし、第6層を母材としたブロック土を含む。下層は第5層を主体とし、第4層と第6層のブロック土が混じる。埋土層界の一部は波打つように変形している。土質から人為的に動かされた土の可能性が高いと考えられることから、埋め戻しの単位である可能性が高いと思われるが、あるいは地震動の影響による可能性も残る。

遺物は底面付近から土師器の長胴甕と把手付鍋が出土している。335は土師器長胴甕である。口縁部から体部にかけて、全体の3分の1程度が残存する。頸部径は17.1cmを測る。肩には平行する2条の弧線が刻まれるが、意図するところは不明である。336は把手付鍋である。やや扁平な体部から延びた短い口縁部が内傾気味に立ち上がる。体部中央には把手が付けられる。これらのほかにも土師器や須恵器が出土したが、細片のため図化できなかった。長胴甕から、本遺構は古墳時代中期後葉に位置付けられる。

04024・04025 土坑 (図 89・91、写真図版 19・56)

04021・04022土坑の南側において検出した。同地は西へ向かって第4層が低くなっており、それらを若干掘り下げた段階で、これらの土坑や後述する04023落ち込みを検出した。

04024土坑は調査区西壁際において検出したため全形は不明であるが、確認しえた範囲においては隅丸長方形を呈し、長さは2.38mを測る。検出面からの深さは0.24mを測るが、肩口の検出にとどまるため、本来はさらに深くなると考えられる。東肩の一部は04025土坑に切られる。埋土は2層に細分され、いずれも第5層に類似する土を主体としている。なお、埋土下層は第6層の上面が土壌化の影響により乱されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。大半が調査区外に延びており、全容が把握できないため土坑としたが、埋土が第5層を主体とし、遺物も含まないことから、自然に形成された窪みである可能性も残る。

04025土坑は直径1.27mを測る不整な円形を呈する。検出面からの深さは0.37mを測り、埋土は2層に細分される。上層は第4層と類似する。下層は水成堆積と考えられることから、一定期間滞水状態にあったものと思われる。断面の様相から、04024土坑が埋没したのちに本遺構が掘削されたものと考えられる。なお、断面図における埋土最上層は低まりに堆積した第4層と考えられる。

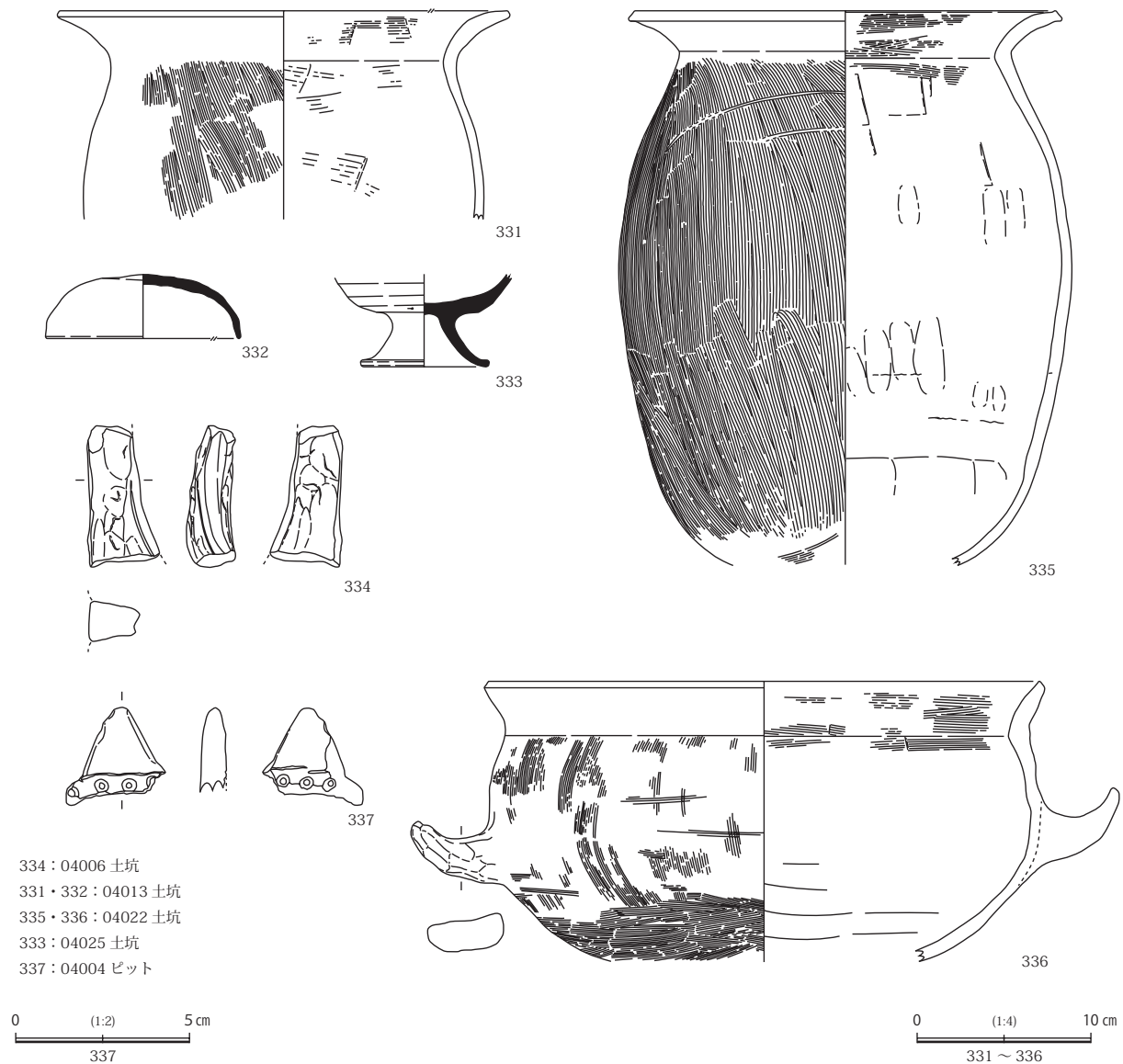
遺物は土師器や須恵器が出土しており、1点を図示した。333は須恵器高杯である。杯部の大半は失われているが、脚部は低く、大きく外方へ広がり、端部は面を有する。TK217型式に比定される。本資料から、04025土坑は飛鳥時代に帰属すると考えられる。

04036土坑(図86・91、写真図版18)

04007溝南端部において、同溝の埋土掘削後に検出した。一部は調査区外へ延びるが、不整な楕円形を呈すると考えられる。04007溝検出時に見落とした可能性もあったため改めて調査区南壁を確認したが、04007溝が本土坑を切ることが判明した。東西幅0.36m、深さ0.35mを測る。埋土は単層で、水成堆積層と考えられることから、掘削後開放状態にあったものと思われる。遺物は出土しなかった。

04043土坑(図92)

04044溝の北に隣接する楕円形を呈する土坑である。北東側の一部は攪乱により破壊される。幅1.06m、深さ0.26mを測る。埋土は2層に細分され、上層は第4層、下層は第5層が落ち込む。遺物は出土しなかった。土坑としたが、埋土の様相から自然の窪みである可能性が高い。



334 : 04006 土坑
 331・332 : 04013 土坑
 335・336 : 04022 土坑
 333 : 04025 土坑
 337 : 04004 ピット

図95 04006・04013・04022・04025土坑、04004ピット 出土遺物

4. ピット

ピットは調査区南半部において複数基検出されたが、いずれも散在しており、建物などを復元しうるものはなかった。

04004 ピット (図 81・94・95)

04002 溝の北端において検出した。北は攪乱に破壊されているが、楕円形のピットと考えられる。04002 溝と重複し、本遺構が 04002 溝を切る。短径 0.16 m、深さ 0.10 m を測る。埋土は 2 層に細分され、上層は第 4 層、下層は第 4～6 層を母材としたブロック土からなる。

遺物は土製品が 1 点出土した。337 は平板な三角形を呈する土製品である。下端は欠損するが、端部の一方が若干湾曲しつつ突出する。下端には両面に線刻と直径 4 mm ほどの竹管文が横位に施される。線刻は一方の面は 1 条で表されるが、他方の面は中央で途切れて 2 条となっている。途切れた箇所には砂礫が露出していることから、これが障害となって連続した線が引けなかったものと推測される。竹管文はわずかに突出部の湾曲に沿うように、緩やかに弧を描くように施文されていることから、本来は弧状ないしは環状を呈する土製品であった可能性がある。本遺構は 04002 溝に隣接することから、形象埴輪の装飾部片である可能性も考慮したが、厚さが 0.7 cm と薄く、線刻や文様も繊細であることから、異なる土製品と考えたい。両面に施文されることから、いずれの面も視認されることを意識していたことが窺える。仮に環状の土製品と想定した場合、外周の直径は 11 cm 程度と推察される。細片のため詳細は明らかにしえないが、なんらかの装飾品であったものと思われる。本遺構からはこの土製品以外に遺物は出土しておらず、帰属時期についても不明である。

04005 ピット (図 81・94)

04004 ピットの北において検出した、東西に長い楕円形を呈するピットである。長径 0.47 m、短径 0.32 m、深さ 0.29 m を測る。埋土は 2 層に細分され、上層は第 4 層と第 6 層を母材とするブロック土、下層は第 4～6 層を母材としたブロック土からなる。断面形は底の一部が突出する形状を呈する。柱痕跡もしくは柱抜き取り時の変形であろうか。遺物は土師器が出土しているが、細片のため時期の特定には至らなかった。しかしながら、埋土から第 4 層下面に帰属すると考えられる。

04010・04011 ピット (図 86・94、図版 18)

04007 溝の南西肩部において検出した。2 基のピットが重複しており、西側が 04010 ピット、東側が 04011 ピットとなる。誤って平面の記録を作成する前に掘削してしまったため、平面図では 1 基の土坑のような表現となっている。検出時および断面の重複関係から 04010 ピットが 04011 ピットに切られる。また、04011 ピットは 04007 溝に切られる。

04010 ピットは東西に長い楕円形を呈するピットで、長径 0.33 m 以上、深さ 0.20 m を測る。埋土は 2 層に細分され、上層は第 4 層を主体とし、第 6 層を母材とするブロック土を含む。下層は第 6 層を主体とし、第 4 層を母材とするブロック土を含む。

04011 ピットは正円に近い平面形を呈し、直径 0.32 m、深さ 0.19 m を測る。埋土は 2 層に細分され、上層は第 4 層からなり、下層は第 4 層と第 6 層を母材とするブロック土からなる。

遺物は 04010 ピットから土師器広口壺の口縁部と思われる破片 1 点が、04011 ピットから土師器の細片 1 点が出土した。このうち前者は古墳時代初頭から前期に帰属する可能性があるが、細片のため図化することができなかった。重複関係から、いずれのピットも 04007 溝に先行することは明らかであるが、詳細時期については不明である。

04012 ピット (図 86・94、図版 18)

04010・04011 ピットの北側において検出した。直径 0.26 m を測る円形のピットである。深さは 0.20 m を測る。埋土は 3 層に細分され、埋土 1 は第 4 層からなる。埋土 2・3 はいずれも第 4～6 層を母材とするブロック土からなる。このうち埋土 2 は下半がほぼ垂直に立ち上がることから、柱の抜き取り痕跡である可能性が考えられる。後述する 04034～04036 ピットと列をなしていた可能性があるが、明らかにすることはできなかった。遺物は土師器の細片 4 点が出土したが時期は不明である。

04020 ピット (図 86・94、図版 18)

04014 土坑と重複し、同土坑の埋土を除去した段階で検出されたピットである。北側は攪乱に、上半は 04014 土坑底面の溝状の窪みに破壊されるが、確認しえた限りにおいては幅 0.22 m、深さ 0.10 m を測る。埋土は単層で、第 4～6 層を母材としたブロック土からなる。埋土から第 4 層下面に帰属する可能性が高いと考えられるが、遺物は出土しておらず、詳細は不明である。

04029 ピット (図 89・94)

04027 溝と重複するピットで、本ピットが 04027 溝に切られる。長径 0.22 m、短径 0.18 m の不整な円形を呈し、深さは 0.13 m を測る。埋土は 2 層に細分され、上層は第 4 層が落ち込み、下層は第 4 層と第 5 層を母材とするブロック土からなる。遺物は土器の細片が 4 点出土したが、図化できるものはなかった。

04031 ピット (図 89・94)

04029 ピットの東において検出した、不整な円形を呈するピットである。直径は 0.08 m、深さは 0.05 m を測る。埋土は単層で第 4 層と第 5 層を母材とするブロック土からなる。遺物は出土しなかった。

04032 ピット (図 89・94)

04029 ピットの北に接するピットである。04027 溝の底面において検出したが、04027 溝検出時には確認できなかったため、同溝に先行すると考えられる。直径 0.27 m、短径 0.19 m、深さは 0.04 m を測る。埋土は単層で、第 4 層と第 5 層を母材とするブロック土からなる。遺物は出土しなかった。

04034・04035 ピット (図 86・94、図版 18)

04007 溝北端部東側において検出した。重複関係から 04034 ピットが 04035 ピットを切る。

04034 ピットは直径 0.20 m のやや不整な円形を呈し、深さは 0.15 m を測る。埋土は 2 層に細分され、上層は第 4 層を主体とし、第 5 層を母材とする細かいブロック土を少量含む。下層は第 5 層を主体とし、第 4 層を母材とするブロック土を含む。遺物は出土しなかった。

04035 ピットは東西に長い楕円形を呈していると考えられ、長径 0.35 m 以上、短径 0.25 m、深さ 0.13 m を測る。埋土は 2 層に細分され、上層は第 4 層と第 5 層を母材とするブロック土からなり、下層は 04034 ピットの埋土下層と同色同質である。遺物は出土しなかった。

04040 ピット (図 86・94、図版 18)

04007 溝の東において検出した、平面楕円形、断面逆台形を呈するピットである。長径 0.32 m、短径 0.25 m、深さは 0.09 m を測る。埋土は単層で、第 4～6 層を母材とするブロック土からなる。遺物は出土しなかった。

04042 ピット (図 86・94)

04014 土坑の西において検出した、円形のピットである。直径 0.10 m、深さ 0.12 m を測る。埋土は単層で、第 4～6 層を母材とするブロック土からなる。遺物は出土しなかった。

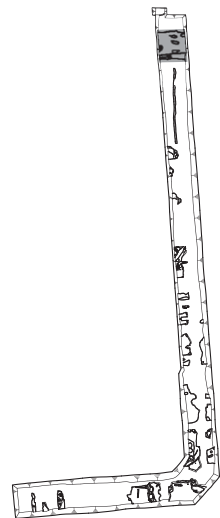
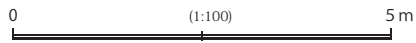
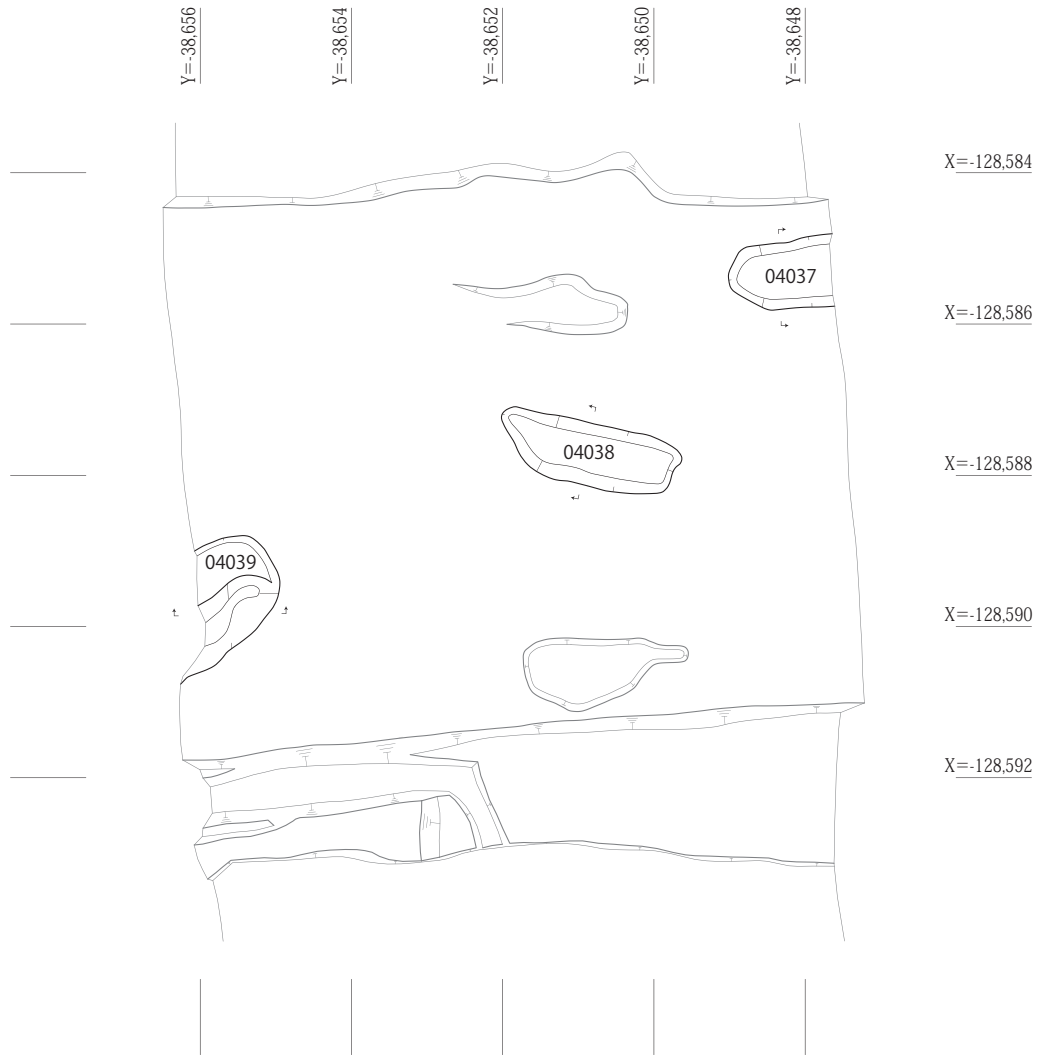


図 96 04037・04038 凹み、04039 落ち込み 平・断面

5. 凹み、落ち込み

04037凹み (図 96・97)

7 k - 5 i において検出した。東側は調査区外へと延びるが、東西に長い楕円形を呈していると考えられる。長径 1.35 m、短径 0.94 m、深さは 0.04 m を測る。埋土は単層で、第 6 層を母材とすると思われる。遺物は出土しなかった。遺構周辺は現代の攪乱により削平されているため断定はできないもの

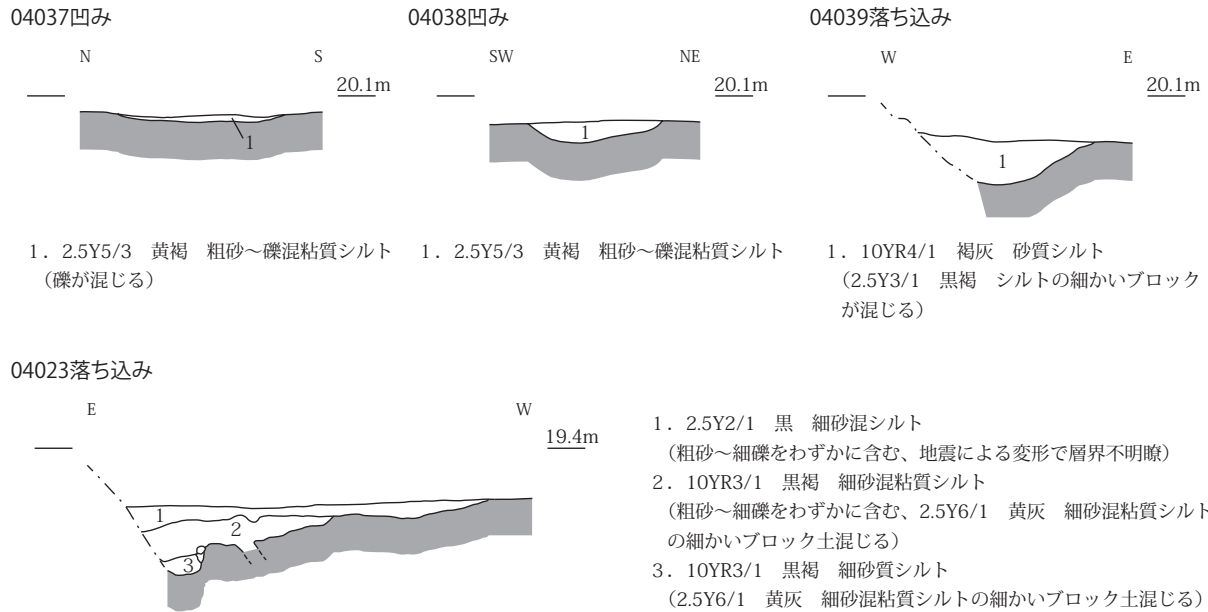


図 97 04037・04038 凹み、04023・04039 落ち込み 断面

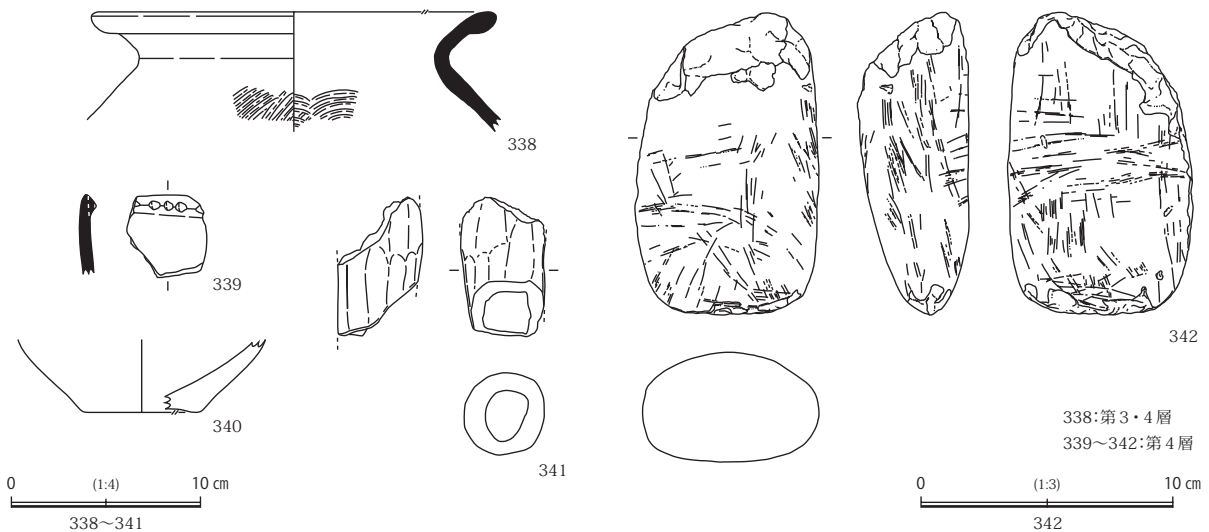


図 98 4区 遺構外出土遺物

の、埋土に第4層より上位の土が含まれないことから、自然に形成された窪みと考えられる。

04038 凹み (図 96・97)

04037 凹みの東において検出した。一角が突出する不整な隅丸方形を呈し、長軸 2.39 m、短軸 0.71 m、深さは 0.11 m を測る。埋土は単層で、第 6 層を母材とし、第 4 層に由来する薄層が挟在する。遺物は同一個体と思われる土師器の細片 9 点が出土したが、図化することはできなかった。埋土の様相から人為的に掘削されたものではなく、地震動により地形が変形したものである可能性が高いと考えられる。

04023 落ち込み (図 89・97、写真図版 19)

04024・04025 土坑の北において、04024・04025 土坑と同様に低まりの中に堆積した第 4 層を掘り下げた段階で検出した。西側は調査区外へと延びるが、確認しえた限りにおいては南北に長い不整形を呈する。南北長 3.30 m、東西長 1.17 m、深さ 0.37 m を測る。埋土はいずれも第 5 層を主体とし、第 6 層を母材とするブロック土を含む点では共通するが、砂礫の混入により 2 層に細分した。不整な平面形、埋土に明確な第 4 層を含まないことから、人為的な遺構ではなく第 5 層堆積以前に形成された落ち込みと判断した。遺物は土師器甕の口縁部片などが出土したが、細片のため図化することはできなかった。

04039 落ち込み (図 96・97)

04037・04038 凹みの西側において検出した。西側は調査区外へと延びるが、平面隅丸方形を呈すると思われる。長軸 2.90 m、短軸 1.32 m、深さは 0.26 m を測る。埋土は単層で、第 5 層と思われる。遺物は出土しなかった。埋土に明確な第 4 層が認められないことから、自然の落ち込みと判断した。

6. 遺構外出土遺物

4 区の遺構外から出土した遺物のうち、5 点を図 98 に示した。338 は玉縁状の口縁を呈する須恵器の甕である。第 3・4 層を一括して掘削している際に出土した。339 は縄文土器深鉢の口縁部片である。口縁端部に突帯を貼り付け、刻みを入れる。縄文時代晩期末、長原式に比定される。340 は弥生土器壺の底部と思われる。器面の摩滅が著しく調整は不明である。341 は円筒形を呈する埴輪片である。直径や器壁の厚さが 3 区 03005 溝より出土した 235 に類似することから、同様に鳥形埴輪の頸部の可能性が考えられる。342 は大型蛤刃石斧である。基部を欠損する。全面に成形時の研磨痕が残る。刃部には細かい剥離が認められる。

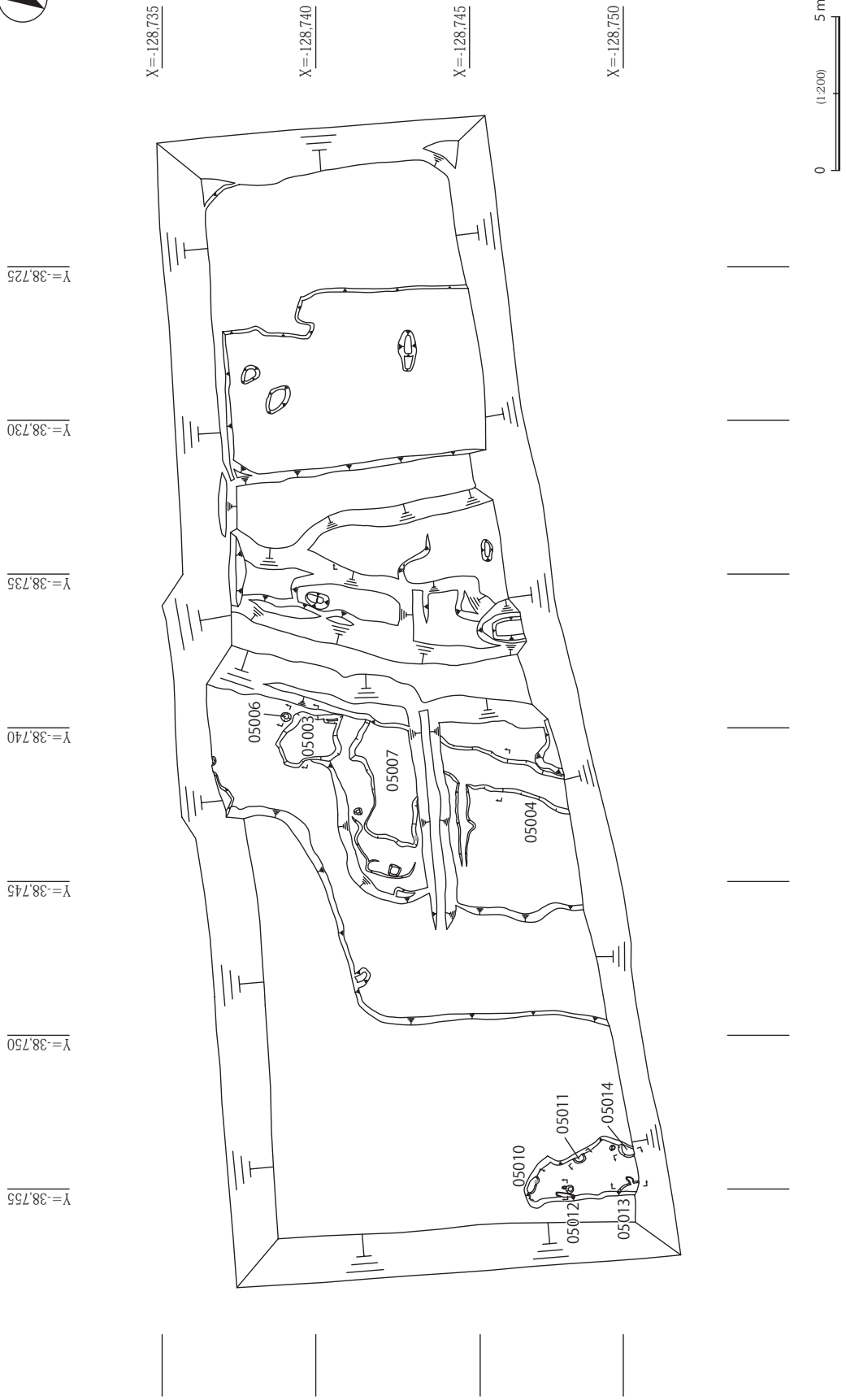


图 99 5区平面

第6節 5区の調査成果

前節において記したとおり、地区幹線道路建設予定地のうち OT08 - 2 調査区より西側を5区として調査を実施した。5区も他の調査区と同様に現代の開発に伴う攪乱が著しく、調査区の東西両端では第6層以下にまで攪乱がおよび、遺構および遺物は確認されなかった。それ以外の地点でも、ほぼ全域において盛土を除去した段階で第6層が露頭した。このような状況であるため、当時の地形をどこまで反映しているか確かではないが、最も残存状態が良好であった調査区中央における第5面の高さは、調査区北端において 19.5 m、南端において 19.3 m 前後を測る。

第1項 層序

本調査区では調査区中央南壁において土層断面の記録を取得した（図 100、図版 20）。

盛土・造成土層 層厚 1.06 ~ 1.30 m を測る。このうち現地表下 0.9 m ほどまでは再生碎石層と真砂土からなるが、図 100 に示した断面図の盛土層中、破線より下位にあたる範囲においては灰色シルトを主体とする層が確認された。他の調査区において確認された盛土・造成土とは様相が異なることから、遺構埋土の可能性も考慮して検討したが、第 1 ~ 5 層を削平、攪拌して形成された攪乱土と判断した。

第4層 10YR2/1 黒 細砂混じりシルトを主体とし、中砂～粗砂粒を含む。層厚は最も厚い地点において 0.11 m を測る。断面観察範囲の西端において部分的に確認された。土質から第4層と考えられるが、削平を受けた遺構の埋土となる可能性も残る。

第6層 2.5GY7/1 明オリーブ灰 細砂混じりシルトを主体とし、中砂～極粗砂粒を含み、小礫～中礫を非常に多く含む。層厚は不明である。

第2項 検出された遺構と遺物

本調査区では中央部において溝やピット、凹みを、南西端部においてピットを検出した。

1. 溝

05004 溝（図 99・101、図版 20）

調査区中央において検出した、北北東-南南西を指向する溝である。南は調査区外へ延び、北は攪乱に破壊される。幅 1.06 m、深さ 0.12 m を測る。埋土は単層で、第 5・6 層を母材とするブロック土

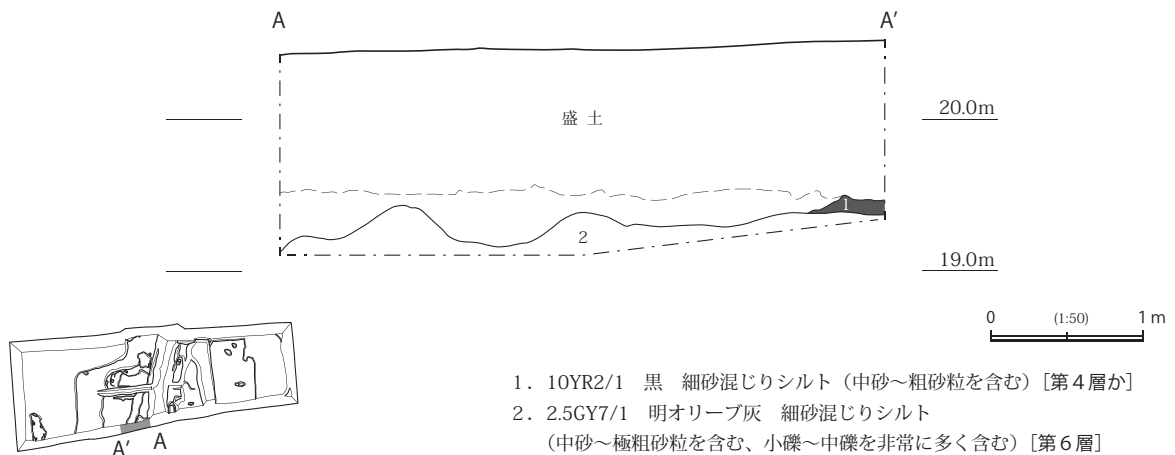


図 100 5区 土層断面

からなる。攪乱より北側においては 05007 凹みと重複する。05007 凹み以北では溝の延長部を確認できなかったことから、一連の遺構である可能性も考えられるが、断定するには至らなかった。遺物は土師器の破片 2 点が出土したが、いずれも細片であり、詳細は不明である。

2. ピット

05006 ピット (図 99・101、図版 20)

8 M-4 d において検出した、円形を呈するピットである。直径 0.25 m、深さは 0.28 m を測る。埋土は単層で、第 4 層を主体とし、第 6 層を母材とするブロック土を含む。遺物は土師器の細片がわずかに出土したが、詳細は不明である。

05010 ピット (図 99・101、図版 20)

調査区南西部、8 M-6 e において検出した。北は攪乱に破壊されるため確実ではないが、不整な楕円形を呈していたと思われる。長径 0.63 m、短径 0.24 m、深さ 0.16 m を測る。埋土は単層で、第 4 層を主体とし、第 6 層を母材とするブロック土を含む。遺物は土師器や須恵器が出土したが、いずれも細片であり、図化できるものはなかった。

05011 ピット (図 99・101、図版 20)

05010 ピットの南において検出した。東は攪乱に破壊されるが、隅丸方形を呈していたと思われるピットである。長さ 0.35 m、深さは 0.04 m を測る。埋土は 2 層に細分され、上層は第 4～6 層を母材とするブロック土からなり、下層は第 4 層に由来する。遺物は出土しなかった。

05012 ピット (図 99・101、図版 20)

05011 ピットの西において検出した。ほぼ正円形を呈しており、直径 0.24 m、深さは 0.23 m を測る。埋土は第 5 層を主体とし、第 6 層を母材とするブロック土を含む。遺物は出土しなかった。

05013 ピット (図 99・101、図版 20)

05012 ピットの南において検出した。南は調査区外へと延び、東は攪乱に破壊される。南北に長い楕円形を呈していたと推測されるが、確実ではない。長径 0.50 m、短径 0.33 m、深さ 0.12 m を測る。埋土は 2 層に細分され、埋土 1 は第 4 層を主体とし、第 6 層のブロック土を含む。埋土 2 は第 4 層が落ち込んだと考えられ、断面形状から柱痕跡の可能性がある。遺物は外面にタタキ目を残し、内面にハケを施す甕の体部片 1 点が出土した。弥生時代後期末から古墳時代初頭の所産と思われる。

05014 ピット (図 99・101、図版 20)

05013 ピットの東において検出した。東は攪乱により破壊される。直径 0.45 m、深さ 0.30 m を測る。埋土は 3 層に細分され 1 層は第 4 層を主体とし、第 6 層のブロック土を含む。2 層は第 4 層が落込み、断面形状から柱痕跡の可能性がある。3 層は第 5 層を主体とし、第 6 層のブロック土を含む。遺物は弥生時代後期末から古墳時代初頭に帰属すると思われる壺や甕の破片が出土したが、図化できるものはなかった。

3. 凹み

05003 凹み (図 99・101、図版 20)

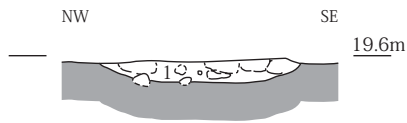
調査区中央において検出した、南北 2.02 m、東西 1.65 m、深さ 0.15 m を測る平面不整形な窪みである。埋土は単層で、第 5 層を主体とし、第 6 層を母材とするブロック土を含む。遺物は土師器の細片が出土

しているが、図化できるものはなかった。平面形および埋土の様相から、自然に形成された窪地と考えられる。

05007 凹み (図 99、図版 20)

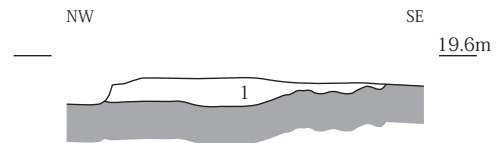
05004 溝の北に位置する、東西に長い不整な方形を呈する窪みである。誤って断面の記録を作成する前に掘削してしまったため、断面図は示せていないが、南北 2.01 m、東西 3.86 m を測る。深さは 0.05 m 前後を測る。遺物は土師器や須恵器の細片が出土したが、図化できなかった。上述のとおり、05004 溝と関連する可能性も残るが、重複関係などを検証できておらず、詳細は不明である。

05004 溝



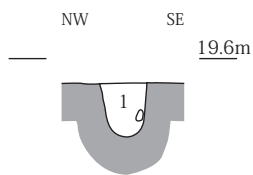
1. 10YR5/1 褐灰 細砂混シルト (中砂～極粗砂を含む) と 10YR5/4 にぶい黄褐 シルト混細砂 (中砂～粗砂粒を含む) のブロック土

05003 凹み



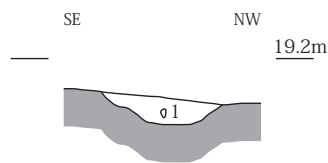
1. 10YR3/1 黒褐 シルト混細砂 (中砂～極粗砂粒を多く含む、10Y7/1 灰白シルトのブロック、細礫を多く含む)

05006 ピット



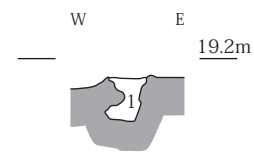
1. 10YR2/1 黒 細砂混シルト (中砂～極粗砂粒、10Y7/1 灰白シルトブロックを含む)

05010 ピット



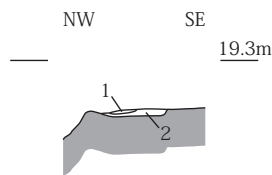
1. 10YR2/1 黒 細砂混シルト (中砂～極粗砂粒、10YR5/4 にぶい黄褐シルト混細砂 (中砂～粗砂粒を含む) のブロックを含む、小礫を若干含む)

05012 ピット



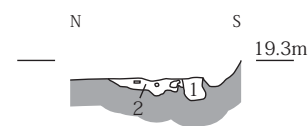
1. 10YR3/1 黒褐 細砂混シルト (中砂～粗砂粒、10YR7/4 にぶい黄橙シルト混細砂 (中砂粒を含む) のブロック土を含む)

05011 ピット



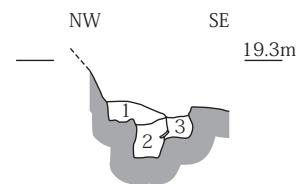
1. 10YR2/1 黒 シルト混細砂 (中砂粒を含む)
2. 10YR5/2 灰黄褐 シルト混細砂 (中砂～粗砂粒を含む) と 10YR6/4 にぶい黄橙 シルト混細砂 (中砂～粗砂粒を含む)、10YR3/1 黒褐シルト混じり細砂 (中砂～粗砂粒を含む) のブロック土

05013 ピット



1. 10YR2/1 黒 細砂混シルト (中砂粒を若干含む)
2. 10YR2/1 黒 細砂混シルト (中砂～粗砂粒を含む) に 10YR7/3 にぶい黄橙 シルト混細砂 (中砂粒を含む) のブロック土、細礫を含む

05014 ピット



1. 10YR2/1 黒 細砂混シルト (中砂～粗砂粒、10Y7/1 灰白シルトのブロックと 10YR6/4 にぶい黄橙シルト混細砂 (中砂粒を含む) のブロックを含む)
2. 10YR2/1 黒 細砂混シルト (中砂～粗砂粒を含む、10YR6/4 にぶい黄橙シルト混細砂 (中砂粒を含む) のブロックを多く含む)
3. 10YR3/1 黒褐 シルト混細砂 (中砂～粗砂粒、10Y7/1 灰白シルトのブロックと 10YR6/4 にぶい黄橙シルト混細砂 (中砂粒を含む) のブロックを含む)

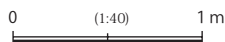


図 101 05004 溝、05006・05010～05014 ピット、05003 凹み 断面

第7節 6区の調査成果

6区は4区の東に隣接する、学校法人追手門大学附属中・高等学校新校舎建設に伴う調査区である。調査区は南北長約190m、東西幅約35mを測り、東西の各辺に凹凸があるやや不整な形状を呈する。調査区が長大であることから、調査においては便宜的に調査区をX = -128,630 ~ 640間で二分割し、北側を北半部、南側を南半部として調査を実施した(図103)。本報告においても適宜この呼称を用いて記述をすすめることとする。

調査は北端より開始した。4区と同様に北半部では基盤層となる第6層が高く、現代の盛土・造成土を除去した段階で第6層が露頭したが、南に向けて徐々に地形が降下し、第1～4層を確認することができた。しかしながら、他の調査区と同様に本調査区においても現代の開発に伴う削平が著しく、調査区中央付近の幅8mほどは比較的残存状態が良好であったが、それ以外は攪乱を免れた地点が島状に点在するような状況であった。

調査区中央における第5面の高さは、調査区北端部において20.6m、X = -128,600付近において19.7m、X = -128,650付近において19.5m、X = -128,700付近において19.3m、南端部において19.1m前後を測る。

第1項 層序

本調査区においては調査区東壁の5地点において層序を記録した(図104、図版23)。盛土・造成土層 砂礫と砂を主体とする。層厚は0.38～0.96mを測る。北端部が最も薄く、南に向けて厚くなる。

第1層 断面C—C'以南において確認された。土質から2層に細分される。

第1-1層 2.5Y3/2 黒褐 細砂質シルト。部分的に上方へ巻き上げられたような痕跡や上方からの圧力により層が途切れるなどの変形が見受けられる。層厚は最も厚い地点において0.32mを測る。

第1-2層 2.5Y5/3 黄褐 シルト混じり細砂。断面D—D'以南において確認された。第1-1層の床土と考えられる。層厚は最も厚い地点において0.08mを測る。

第2層 断面C—C'以南において確認された。観察地点により土質が異なり、断面C—C'においては7.5Y5/2 灰オリーブ 粗砂混じり砂質シルト、断面D—D'においては2.5Y5/3 黄褐 砂質シルトを主体とし極粗砂をわずかに含む、断面E—E'においては7.5Y4/1 灰 粗砂混じり砂質シルトからなる。層厚は最も厚い地点において0.12mを測る。

第3層 断面C—C'以南において確認された。10YR4/2 灰黄褐 粗砂～極粗砂混じり砂質シルト。層厚は最も厚い地点において0.18mを測る。

第4層 断面E—E'において確認された。10YR2/1 黒 粘質シルト。0.20mを測る。攪乱際において部分的に確認したものであり、遺構の埋土である可能性も残る。なお、第4層は調査区南西部においてはより広範に堆積している状況を確認している。

第5層 断面C—C'・D—D'において確認された。観察地点により土質が異なり、断面C—C'においては10YR5/2 灰黄褐 砂質シルト、断面D—D'においては10YR3/1 黒褐 粗砂～極粗砂混じりシルトからなる。層厚は最も厚い地点において0.15mを測る。

第6層 観察地点により土質が異なり、断面A—A'・B—B'においては2.5Y7/2 灰黄 シルト混じり

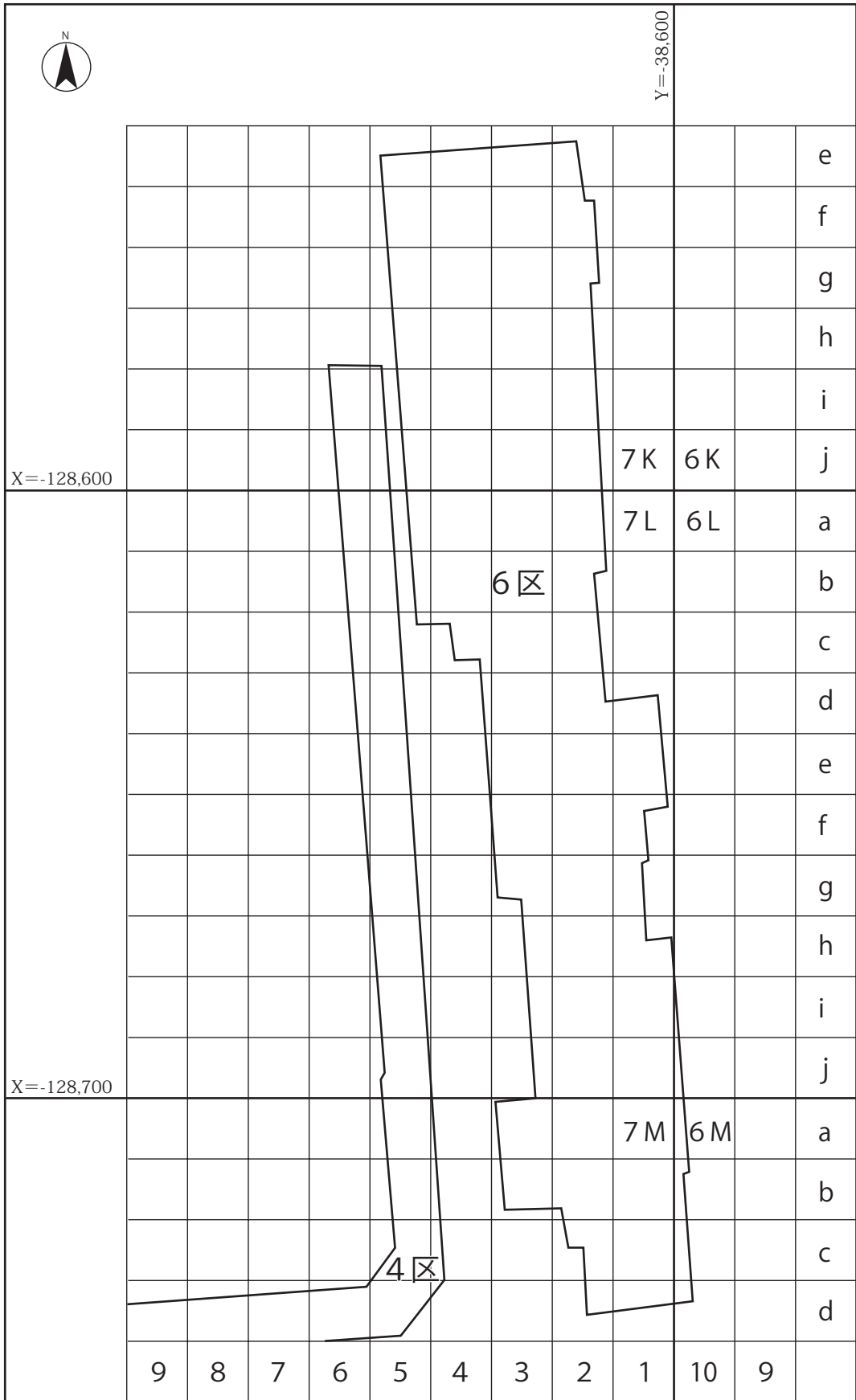


图 102 6区 地区割

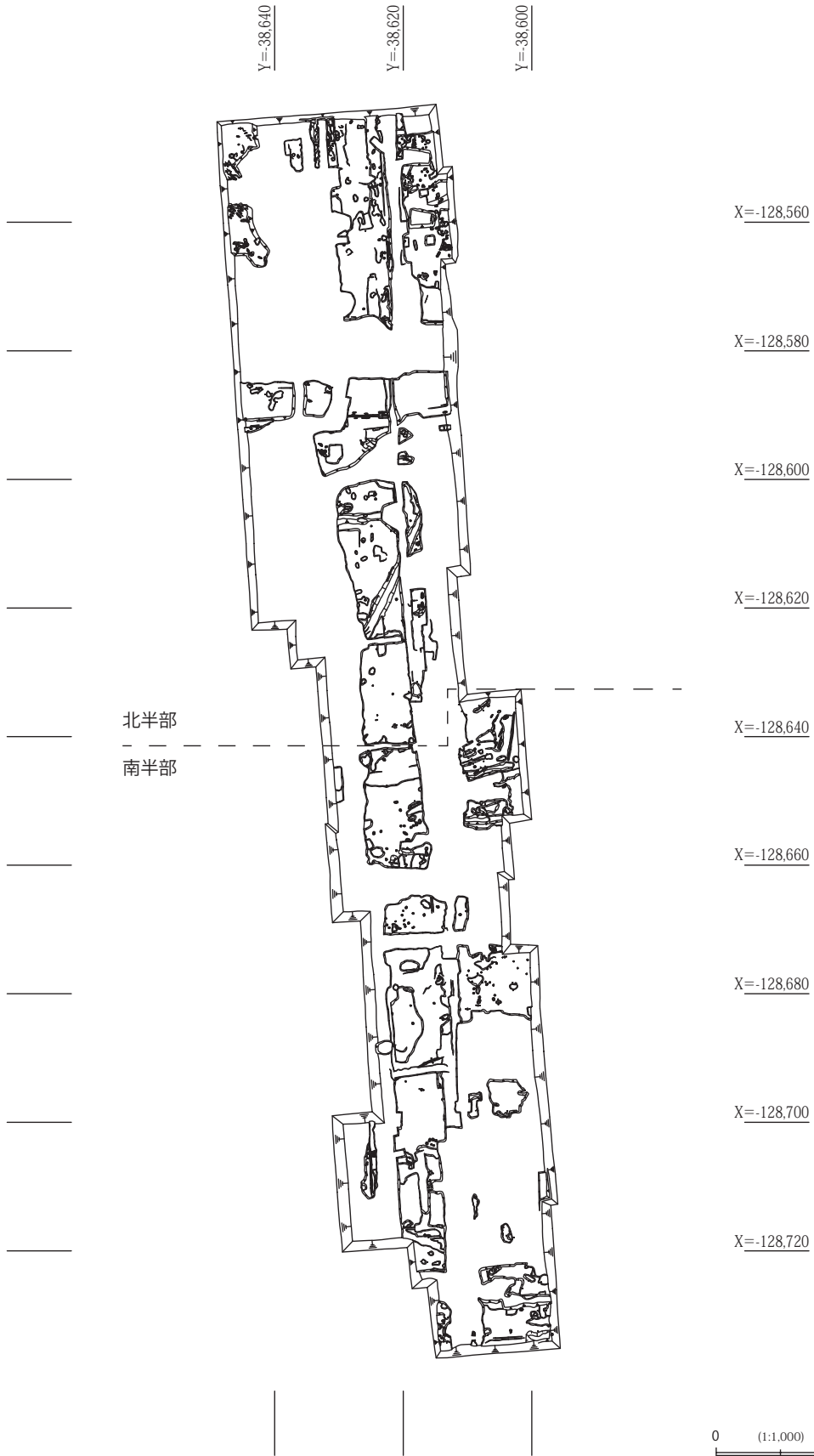
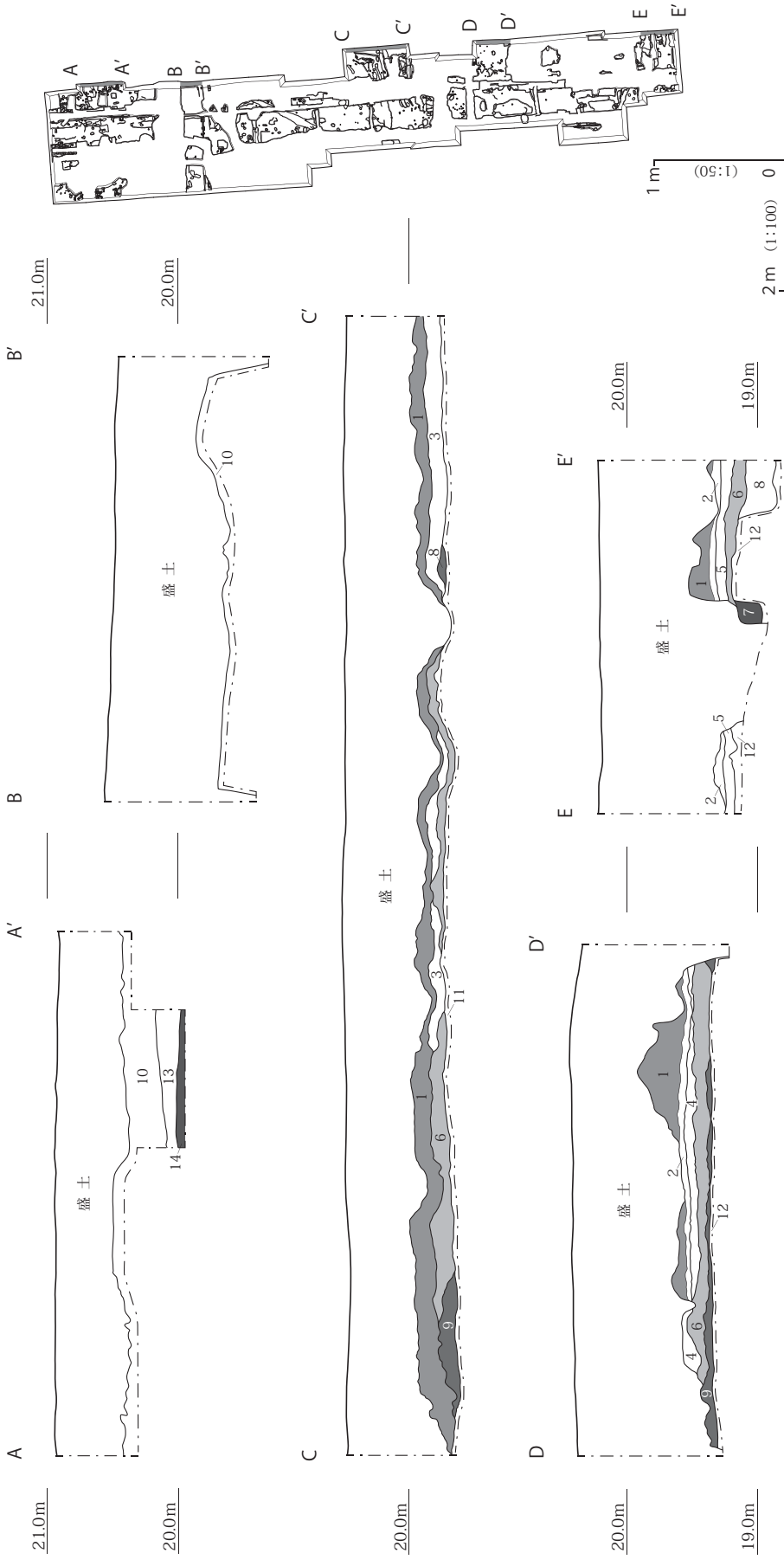


图 103 6区 平面



- | | |
|--|--|
| 1. 2.5Y3/2 黒褐 細砂質シルト [第1-1層] | 8. 10YR5/2 灰黄褐 砂質シルト [第5層] |
| 2. 2.5Y5/3 黄褐 シルト混じり細砂 [第1-2層] | 9. 10YR3/1 黒褐 粗砂〜極粗砂混じりシルト [第5層] |
| 3. 7.5Y5/2 灰オリーブ 粗砂混じり砂質シルト [第2層] | 10. 2.5Y7/2 灰黄 シルト混じり細砂〜中砂 [第6層] |
| 4. 2.5Y5/3 黄褐 砂質シルト (極粗砂をわずかに含む) [第2層] | 11. 2.5Y6/2 灰黄 シルト混じり細砂〜極粗砂 [第6層] |
| 5. 7.5Y4/1 灰 粗砂混じり砂質シルト [第2層] | 12. 2.5Y5/1 オリーブ灰 礫と砂質シルト [第6層] |
| 6. 10YR4/2 灰黄褐 粗砂〜極粗砂混じり砂質シルト [第3層] | 13. 2.5Y5/3 黄褐 細砂〜極粗砂 (ラミナ) [第7層] |
| 7. 10YR2/1 黒 粘質シルト [第4層] | 14. 7.5YR4/1 褐灰 粘質シルト (極粗砂をわずかに含む) [第8層] |

図 104 6区 断面

細砂～中砂、断面C—C'においては2.5Y6/2 灰黄 シルト混じり細砂～極粗砂、断面D—D'・E—E'においては2.5Y5/1 オリーブ灰 礫と砂質シルトからなる。

断面A—A'においては攪乱坑の壁を利用して、第6層より下位の層序についても確認することができた。極めて部分的なものであり周辺への広がりも不明ではあるが、参考として記載する。

第7層 2.5Y5/3 黄褐 細砂～極粗砂。ラミナが顕著である。層厚は0.07～0.19 mを測り、南に向けて厚くなる。

第8層 7.5YR4/1 褐灰 粘質シルトを主体とし極粗砂をわずかに含む。古土壌層である。層厚は不明である。

第2項 検出された遺構と遺物

1. 溝

06006 溝 (図105・109)

調査区北半部、7K—3fにおいて検出した、北北西—南南東を指向する溝である。北側は攪乱により破壊されるが、長さ2.42 m、幅0.76 m、深さ0.09 mを測る。埋土は単層で、調査区南半部において確認された第3層に類似する。遺物は土師器の細片が1点出土したが、図化することはできなかった。

06011 溝 (図105・109)

06006 溝の南方、7K—3hにおいて検出した、北北東—南南西を指向する溝である。長さ2.07 m、幅0.74 m、深さ0.13 mを測る。埋土は単層で、第3層に類似する。埋土下半においては鉄分がレンズ状に沈着している。遺物は土師器の細片が1点出土したが、図化することはできなかった。

06020 溝 (図105・109)

調査区北半部、7K—5iにおいて検出した。東西に長い不整な隅丸方形を呈し、土坑となる可能性も残る。長さ2.00 m、幅0.77 m、深さ0.10 mを測る。埋土は単層で第5層を主体とし、第6層を母材とするブロック土を含む。遺物は出土しなかった。

06022 溝 (図105・109)

06020 溝の東において検出した、緩やかに湾曲する平面形を呈する溝である。長さ3.47 m、幅1.13 m、深さ0.06 mを測る。埋土は単層で、第6層に類似する。遺物は出土しなかった。

06028 溝 (図106・109、図版24)

調査区北半部中央付近において検出した北東—南西を指向する溝である。両端は攪乱により破壊される。長さ20.00 m、幅2.66 m、深さ0.53 mを測る。埋土は5層に細分され、このうち埋土1・3層は砂であり、特に1層はラミナが顕著であることから、流水堆積層と考えられる。なお4層は堆積構造を保ったまま倒立状態で埋没した第6層であり、肩口が大きく崩落したものと思われる。遺物は土師器や須恵器、瓦器、平瓦の細片が出土した。埋土の様相および出土遺物から本溝は中世末に帰属すると考えられる。

06038 溝 (図106・110、図版24)

調査区南半部に位置する、7L—2fにおいて検出した東北東—西南西を指向する溝である。長さ2.18 m、幅0.58 m、深さ0.24 mを測る。埋土は単層で、第3層に類似する。遺物は出土しなかった。

06040 溝 (図106・110、図版24)

06038 溝の南にあたる7L—2・3fにおいて検出した東西方向を指向する溝である。長さ2.49 m、



Y = -38,640

Y = -38,630

Y = -38,620

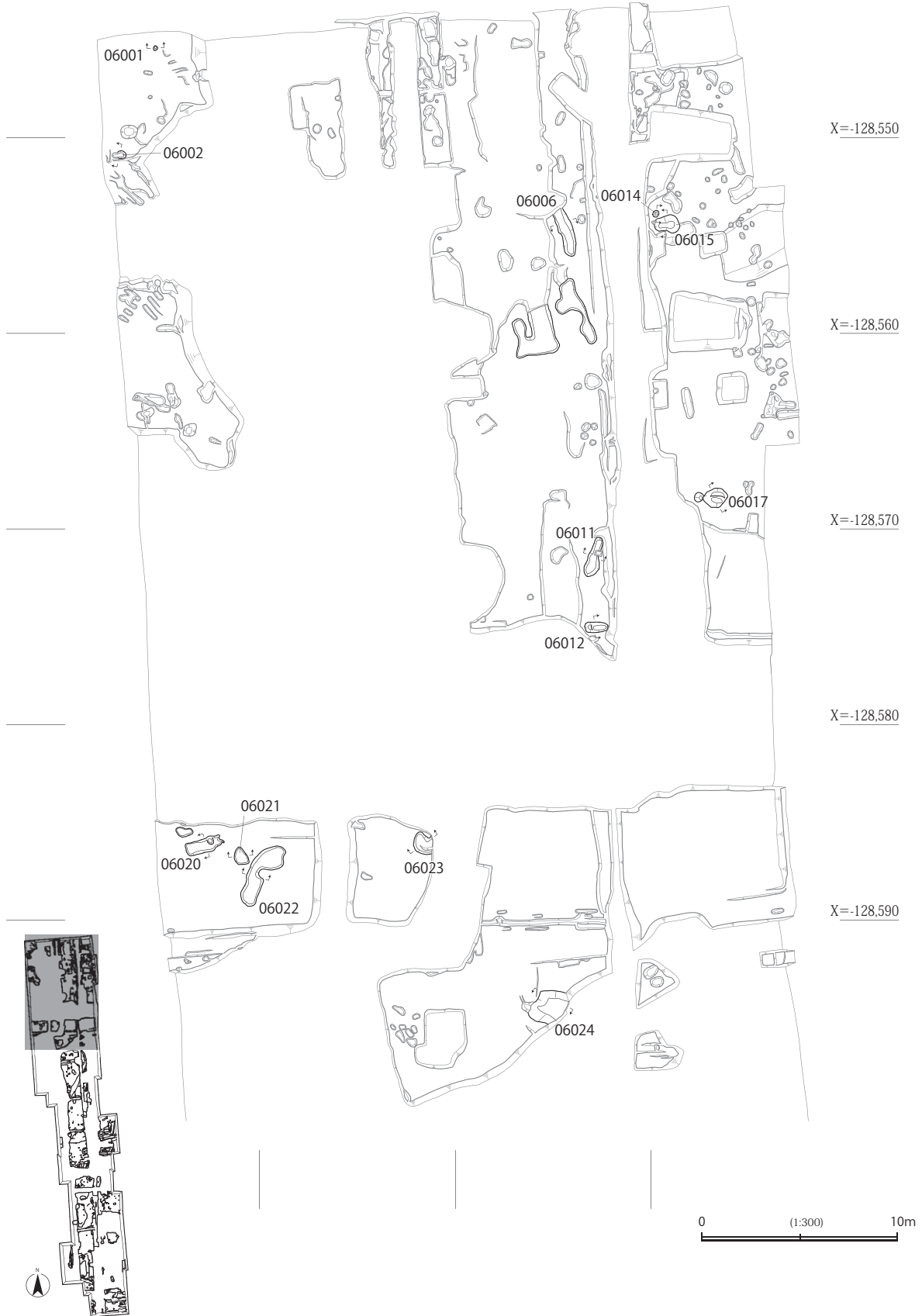


图 105 6区 (X=-128,550 ~ 600) 平面

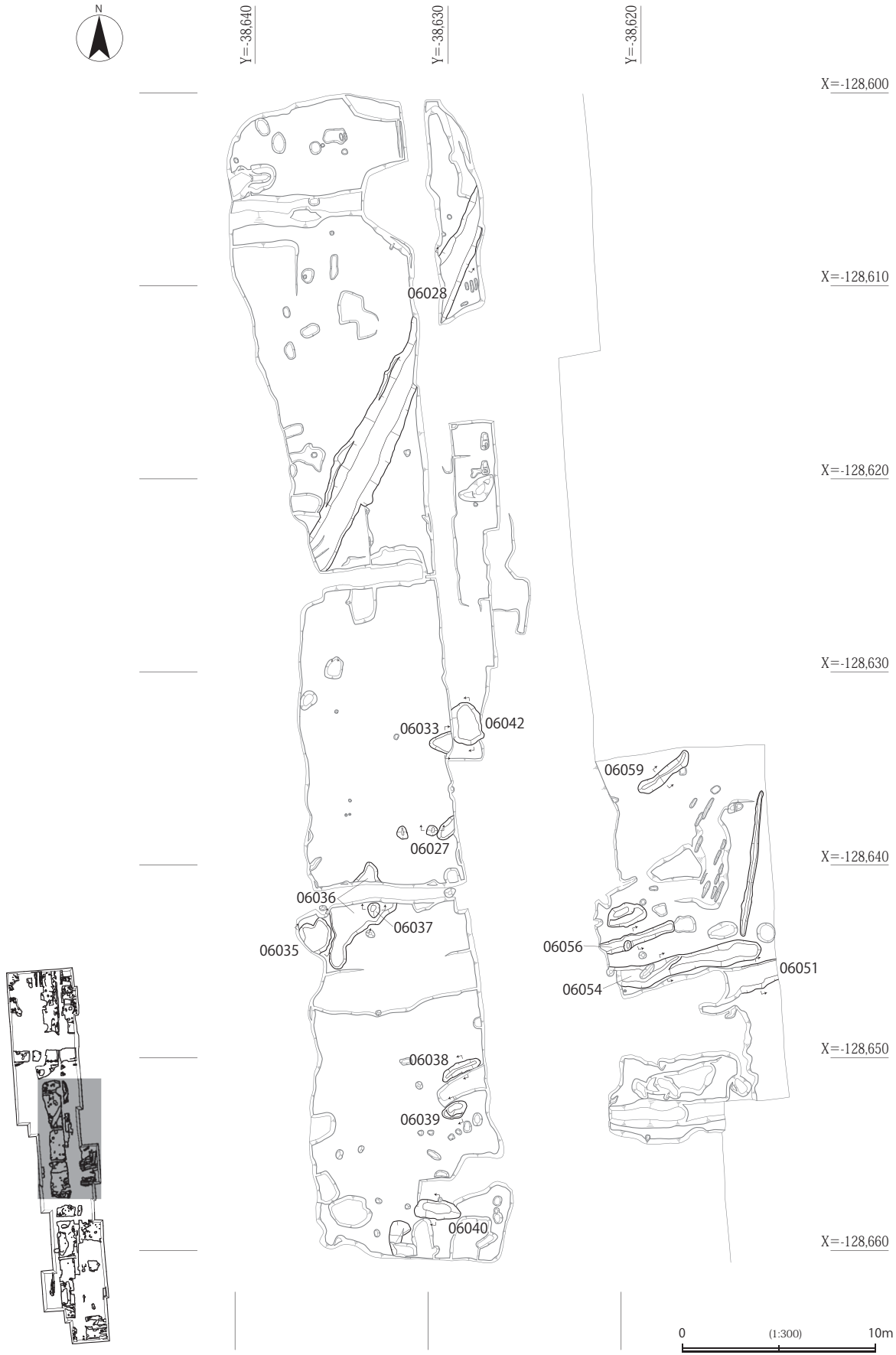


图 106 6区 (X=-128,600 ~ 660) 平面

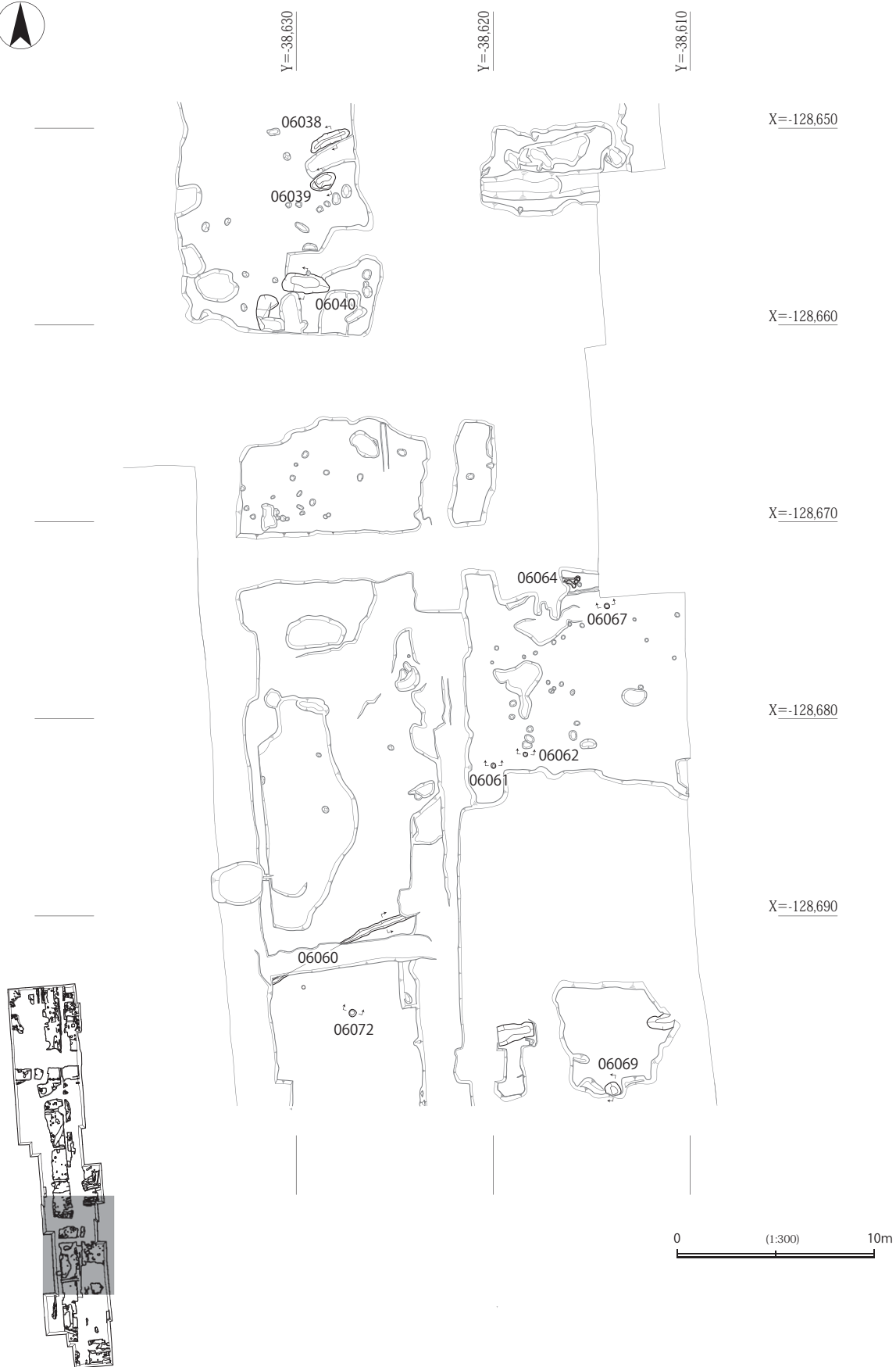


図 107 6区 (X=-128,650 ~ 700) 平面

幅 0.96 m、深さ 0.39 m を測る。埋土は単層で、06038 溝と同色同質である。遺物は出土しなかった。

06051 溝 (図 106・110、図版 24)

調査区南半部、7 L-1 e において検出した東西方向を指向する溝である。西は攪乱に破壊され、東は調査区外へと延びる。長さ 2.38 m、幅 1.08 m、深さ 0.11 m を測る。埋土は単層で、第 3 層に類似する。遺物は細片のため図化できなかったが、土師器、須恵器、瓦器が出土している。埋土の様相および出土遺物から、本遺構は第 3 層下面に帰属すると考えられる。

06054 溝 (図 106・110、図版 24)

06051 溝の北に隣接する東西方向の溝である。西は攪乱により破壊されるが、長さ 7.85 m、幅 1.10 m、深さ 0.46 m を測る。底面は中央付近で西に向けて一段低くなる。埋土は 3 層に細分される。このうち 2 層は第 3 層に類似する。遺物は出土していないが、埋土の様相から 06051 溝と同様に第 3 層下

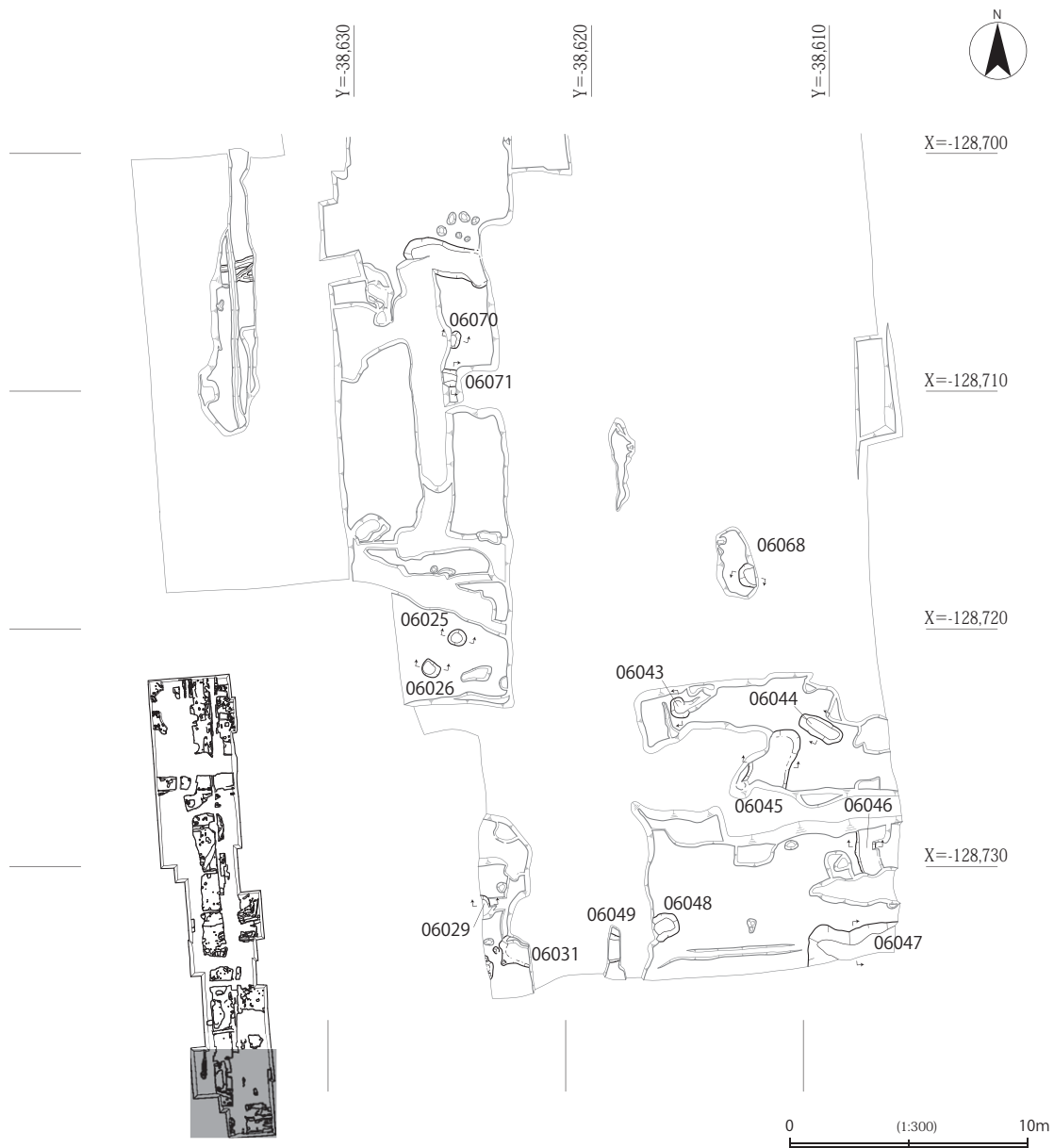


図 108 6区 (X=-128,700 ~ 734) 平面

面に帰属すると考えられる。

06056 溝 (図 106・110、図版 24)

06054 溝の北において検出した東西方向を指向する溝である。西は攪乱に破壊されるが、長さ 4.00 m、幅 0.80 m、深さ 0.05 m を測る。埋土は第 2 層が落ち込んでおり、図では示せていないが下端には第 6 層の薄層が認められる。遺物は出土しなかった。本遺構は、埋土の様相から第 2 層下面に帰属する溝である可能性があるが、周辺では現代の開発に伴うと思われる加重により堆積構造を保持したまま溝状にたわむ状況が複数認められることから、本遺構も同様の变形である可能性も残る。

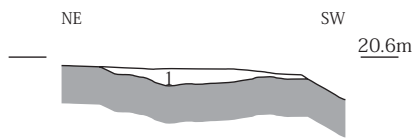
06059 溝 (図 106・110、図版 24)

06056 溝の北において検出した北東-南西方向を指向する溝である。長さ 3.22 m、幅 0.72 m、深さ 0.35 m を測る。埋土は 3 層に細分されるが、いずれも第 5・6 層に由来すると考えられる。遺物も出土していないことから、自然に形成された窪みを溝と誤認している可能性も残る。

06060 溝 (図 107・110、図版 24)

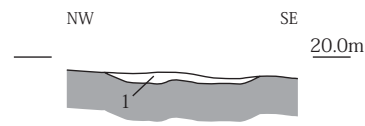
調査区南半部、7 L-2・3 j において検出した北東-南西方向を指向する溝である。東西および中央は攪乱により破壊されるが、長さ 8.02 m、幅 0.40 m、深さ 0.14 m を測る。埋土は 2 層に細分され、上層は第 4 層が落ち込む。下層は第 5・6 層を母材とするブロック土からなり、機能時の堆積と思われる。遺物は須恵器片 1 点が出土したが、細片のため図化することはできなかった。埋土の様相から第 4 層下面に帰属すると考えられる。

06006 溝



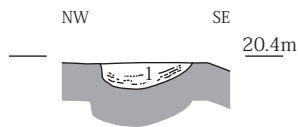
1. 10YR6/2 灰黄褐 極粗砂混細砂質シルト
(7.5Y7/2 灰白 シルトのブロックが混じる)

06022 溝



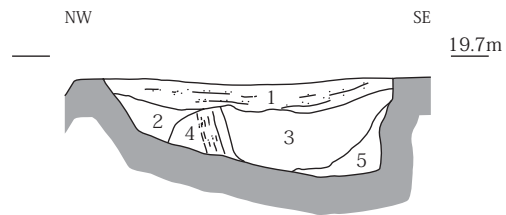
1. 2.5Y5/2 暗灰黄 中礫~極粗砂混
極細砂質シルト

06011 溝



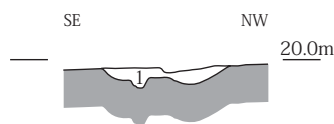
1. 2.5Y6/1 黄灰 極粗砂混極細砂質シルト
(下半に鉄分がレンズ状に沈着)

06028 溝



1. 2.5Y6/2 灰黄 粗砂~細砂 (ラミナ顕著)
2. 5Y6/1 灰 細砂 (シルトのブロックが混じる)
3. 10YR7/2 にぶい黄橙 粗砂~中砂
4. 7.5Y7/2 灰白 シルトのブロック
5. 7.5YR5/1 褐灰 粘質シルト

06020 溝



1. 10YR6/1 褐灰 細礫~中砂
(7.5Y7/2 灰白 シルトのブロックが混じる)

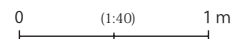


図 109 6区北半部 溝 断面

2. 土坑

06002 土坑 (図 105・111)

調査区北西端部、7 K-5 f において検出した。西は攪乱に破壊されるが、わずかに東西に長い楕円形を呈する土坑と思われる。短径 0.39 m、深さ 0.08 m を測る。埋土は単層で、第 6 層に類似する。遺物も出土しなかった。土坑としたが、自然に形成された窪みを遺構と誤認している可能性も残る。

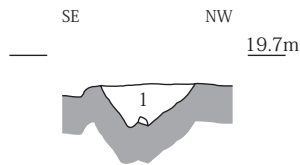
06012 土坑 (図 105・111)

調査区北半部、06011 溝の南において検出した、東西に長い隅丸方形を呈する土坑である。長軸 1.18 m、短軸 0.52 m を測る。断面は逆台形を呈し、深さは 0.25 m を測る。埋土は単層で、第 3 層に類似する。遺物は出土しなかった。

06015 土坑 (図 105・111)

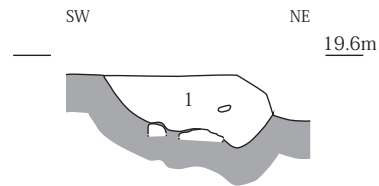
調査区北半部、7 K-2 f において検出した。隅丸方形に近いが南辺の一部が突出する不整形を呈しており、東西長 1.21 m、南北長 0.93 m、深さ 0.43 m を測る。埋土は 3 層に細分され、1 層はラミナが顕著で、2・3 層を切るように堆積する。2 層は第 4 層が落ち込んだものと思われる。3 層は第 5 層

06038 溝



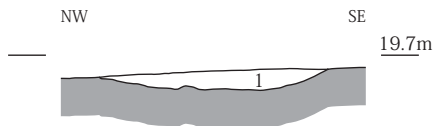
1. 7.5YR4/1 褐灰 極粗砂混極細砂質シルト

06040 溝



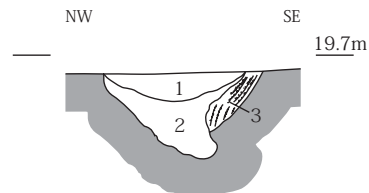
1. 7.5YR4/1 褐灰 極粗砂混極細砂質シルト

06051 溝



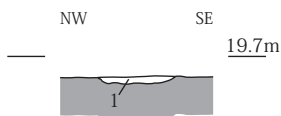
1. 2.5Y5/3 黄褐 粗砂混砂質シルト
(10YR5/1 褐灰 粗砂～極粗砂混シルトブロックが混じる)

06054 溝



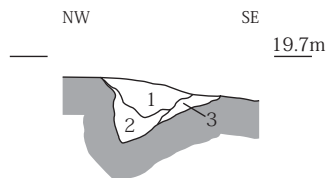
1. 2.5Y7/1 灰白 シルト質細砂 (粗砂～極粗砂をわずかに含む)
2. 10YR6/1 褐灰 中砂～粗砂混砂質シルト
3. 2.5Y6/2 灰黄～10YR6/1 褐灰 シルト～極粗砂 (ラミナ顕著)

06056 溝



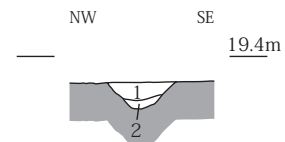
1. 7.5Y5/2 灰オーリーブ
粗砂混砂質シルト

06059 溝



1. 10YR4/1 褐灰 粗砂～礫混シルトと
2.5Y6/1 黄灰 砂質シルトのブロック
2. 10YR4/1 褐灰 粗砂～礫混シルト
3. 10YR5/2 灰黄褐 シルト混粗砂～礫

06060 溝



1. 10YR2/1 黒 粘質シルト
2. 10YR3/1 黒褐 粘土
(2.5Y6/1 黄灰 粘土の細かい
ブロック混じる)

0 (1:40) 1 m

図 110 6区南半部 溝 断面

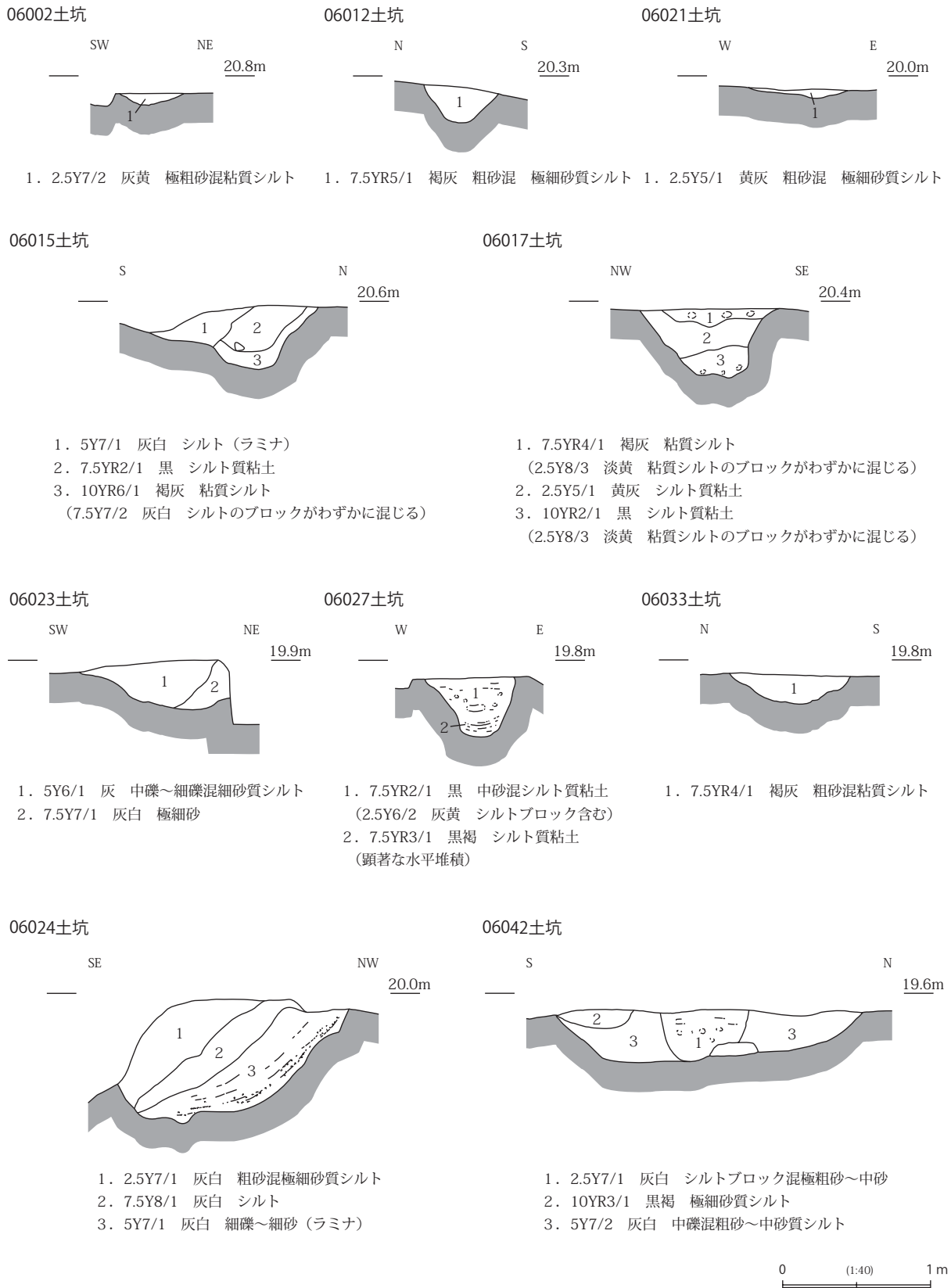


図 111 6区北半部検出土坑 断面

と思われる粘質シルトを主体とし、第6層を母材とするブロック土を含む。遺物は出土しなかった。平面においては検証できなかったが、埋土の堆積状況から2基の土坑が重複している可能性が高いと考えられる。

06017 土坑 (図 105・111)

7 K-2 g において検出した、六角形に近い不整形を呈する土坑である。東西長 1.27 m、南北長 0.97 m、深さ 0.46 m を測る。埋土は3層に細分され、1層は第3層と思われる粘質シルトを主体とし、第6層を母材とするブロック土を含む。2層は第6層に類似する。3層は第4層を主体とし、第6層を母材とするブロック土を含む。遺物は出土していないため断定はできないが、埋土の様相から本遺構は第4層下面に帰属し、第3層形成段階に埋没したと想定される。

06021 土坑 (図 105・111)

06020 溝と 06022 溝の間で検出した不整な楕円形を呈する土坑である。長径 0.80 m、短径 0.69 m、深さ 0.06 m を測る。埋土は単層で、第3層に類似する。遺物は出土しなかった。

06023 土坑 (図 105・111)

06022 溝の東において検出した。東は攪乱に破壊されるが、残存範囲においても北辺が屈曲するなど、不整形を呈する土坑である。東西長 0.97 m、南北長 0.92 m、深さ 0.33 m を測る。埋土は2層に細分され、上層は第5層に、下層は第6層に由来すると考えられる。遺物は出土しなかった。不整な平面形に加え、埋土に第4層以上の土が含まれないことから、自然に形成された窪みを土坑と誤認している可能性も考えられる。

06024 土坑 (図 105・111)

06023 土坑の南東、7 K-3 j において検出した。東は攪乱に破壊されるが、隅丸方形を呈する土坑と思われる。東西長 1.82 m、南北長 1.51 m、深さ 0.83 m を測る。埋土は3層に細分されるが、様相から第6層が堆積構造を保ったまま斜位に転倒したように見受けられる。遺物も出土していないことから、人為的に掘削された土坑ではなく、地震動による変形もしくは風倒木痕である可能性が高い。

06025 土坑 (図 108・112)

調査区南半部、7 M-2 c において検出した。わずかに東西に長い不整な円形を呈し、東西長 0.74 m、南北長 0.69 m、深さ 0.08 m を測る。埋土は単層で、第3層が落ち込む。遺物は出土していないため詳細な時期は不明であるが、埋土から第3層下面に帰属すると考えられる。

06026 土坑 (図 108・112)

06025 土坑の南西において検出した、不整な隅丸方形を呈する土坑である。長軸 0.77 m、短軸 0.64 m、深さ 0.22 m を測る。埋土は2層に細分され、上層は第3層、下層は第3層と第6層を母材とするブロック土からなる。遺物は出土していないが、埋土の様相から 06025 土坑と同様に第3層下面に帰属すると考えられる。

06029 土坑 (図 108・113・114)

調査区南端、7 M-2 c において検出した。西は調査区外へ延び、南は攪乱により破壊される。検出した限りにおいては隅丸方形に近い楕円形を呈していたものと推察される。南北長 0.50 m、深さ 0.19 m を測る。埋土は2層に細分され、上層は第4層が落ち込んだものと考えられる。遺物は出土しなかったが、埋土の様相から第4層下面に帰属すると考えられる。

06031 土坑 (図 108・113・114)

06029 土坑の南東において検出した。北から東にかけて攪乱により破壊されるが、不整な隅丸方形を呈していたと推測される。東西長 1.23 m、深さ 0.25 mを測る。埋土は 2 層に細分され、上層は第 4 層に、下層は第 5 層に由来する。遺物は出土しなかったが、埋土の様相から第 4 層下面に帰属すると考えられる。

06033 土坑 (図 106・111)

調査区中央付近、7 L-3 d において検出した。東は攪乱により破壊されるが、確認しえた限りにおいては南北長 1.18 m、東西長 1.10 m、深さ 0.20 mを測る。埋土は単層で、第 3 層に類似する。遺物は出土しなかった。

06039 土坑 (図 106・112、図版 24)

7 L-2 f、06038 溝の南において検出した東西に長い不整な楕円形を呈する土坑である。長径 1.35 m、短径 0.83 m、深さ 0.30 mを測る。埋土は単層で、第 3 層が落ち込んだものと思われる。遺物は出土していないが、埋土の様相から第 3 層下面に帰属すると考えられる。

06042 土坑 (図 106・111、図版 24)

06033 土坑の東に隣接する、南北に長い隅丸長方形を呈する土坑である。長軸 2.10 m、短軸 1.62 m、深さ 0.36 mを測る。埋土は 3 層に細分される。このうち 1・3 層は第 6 層を母材とし、2 層は第 5 層が落ち込んだものと考えられる。遺物は出土しなかった。埋土の様相から、第 4 層堆積以前に形成された自然の落ち込みである可能性も残る。

06043 土坑 (図 108・113・114)

調査区南端、7 M-1 c において検出した隅丸方形を呈する土坑である。東の一部は攪乱により破壊されるが、長軸 0.81 m、短軸 0.60 m、深さ 0.27 mを測る。埋土は 2 層に細分され、上層は第 4 層、下層は第 5 層に由来すると考えられる。遺物は出土しなかったが、埋土の様相から第 4 層下面に帰属すると考えられる。

06044 土坑 (図 108・113・114)

06043 土坑の南西において検出した隅丸長方形を呈する土坑である。長軸 1.92 m、短軸 0.89 m、深さ 0.12 mを測る。埋土は 2 層に細分され、上層は第 4 層が落ち込んだものと考えられる。下層は第 4～6 層を母材とするブロック土からなる。遺物は出土しなかったが、埋土の様相から第 4 層下面に帰属すると考えられる。

06045 土坑 (図 108・113・114)

06044 土坑の南西において検出した。西の一部と南は攪乱により破壊されるが、南北に長い隅丸長方形を呈していたものと推測される。長軸 2.42 m、短軸 1.73 m、深さ 0.26 mを測る。埋土は 2 層に細分され、上層は第 4 層が落ち込み、下層は第 5 層を主体とし、第 6 層のブロック土を含む。遺物は出土しなかった。なお、本土坑の底では人頭大の礫が検出された。当初は人為的に運ばれた可能性も考慮したが、配置に規則性が認められなかったため周囲の土層を再度検討した結果、遺構周辺の第 6 層には礫が多く含まれていることが明らかとなった。このため、本土坑底において検出された礫も、土坑掘削の結果、第 6 層に含まれた礫が露頭もしくは流入したものであると判断した。

06046 土坑 (図 108・113・114)

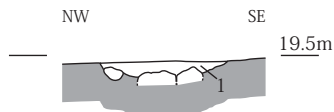
06044 土坑の南において検出した。南北および東は攪乱により破壊される。南北に長い溝状を呈す

るが、いずれも攪乱より先において延長部が確認できなかったことから土坑と判断した。南北長 1.96 m、東西長 0.78 m、深さ 0.20 mを測る。埋土は 2 層に細分され、上層は第 4 層、下層は第 5 層を主体とし、第 6 層を母材とするブロック土を含む。遺物は出土しなかったが、埋土の様相から第 4 層下面に帰属すると考えられる。

06047 土坑 (図 108・113・114)

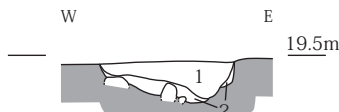
調査区南東隅において検出した。東および南は調査区外へ延びるが、東西に長い隅丸長方形を呈する土坑と推測される。東西長 3.26 m、南北長 1.50 m、深さ 0.53 mを測る。埋土は 3 層に細分され、最

06025土坑



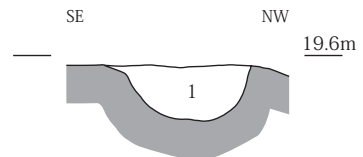
- 1. 10YR4/1 褐灰 砂質シルト (礫をわずかに含む)

06026土坑



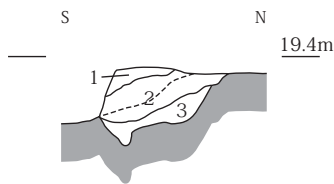
- 1. 10YR4/1 褐灰 砂質シルト (礫をわずかに含む)
- 2. 10YR4/1 褐灰 砂質シルトと 10Y4/2 オリーブ灰 細砂と粘質シルトのブロック

06039土坑



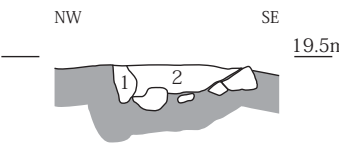
- 1. 7.5YR4/1 褐灰 極粗砂混極細砂質シルト

06069土坑



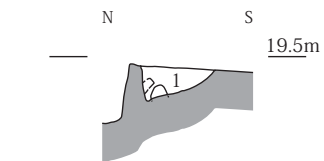
- 1. 7.5YR4/1 褐灰 中砂～粗砂混砂質シルト (礫を含む)
- 2. 7.5YR5/1 褐灰 シルト (破線より上部)
- 2.5Y8/1 灰白 シルト (破線より下部)
- 3. 2.5Y8/1 灰白 シルト～極細砂混シルト

06070土坑



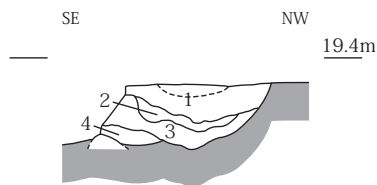
- 1. 10YR5/4 にぶい黄褐 細砂 (10YR3/2 黒褐 粘土と粗砂、礫をわずかに含む)

06071土坑

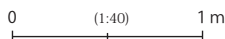


- 1. 2.5Y3/1 黒褐 粘土 (粗砂・礫をわずかに含む)

06068土坑



- 1. 7.5YR3/1 黒褐 シルト (炭化物、風化礫を含む、破線より上部は中砂～粗砂を含む)
- 2. 7.5YR5/1 褐灰 粘質シルト (7.5YR7/1 明褐灰 シルトブロックを含む)
- 3. 7.5YR6/1 褐灰 シルト (7.5YR3/1 黒褐 シルトブロック、礫を含む)
- 4. 7.5YR6/1 褐灰 シルト (7.5YR3/1 黒褐 シルトブロックを含む)



06064土坑

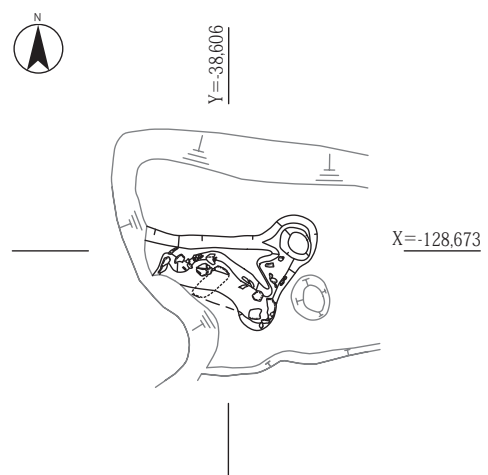


図 112 6区南半部検出土坑 平・断面

上層は第3層、中層は第4層が落ち込む。最下層は第4・6層を母材とするブロック土の混じる灰色粘土からなり、機能時の堆積と思われる。遺物は出土しておらず、部分的な検出であるため断定はできないが、埋土最上層は断面観察から窪みとして残存した部分に落ち込んだものと推察されることから、本遺構は第4層下面に帰属すると思われる。

06048 土坑 (図 108・113・114)

06047 土坑の西において検出した。西は攪乱により破壊されるが、隅丸方形を呈する土坑と推察される。東西長 1.05 m、南北長 0.91 m、深さ 0.31 m を測る。埋土は3層に細分され、上層は第4層が落ち込む。埋土中層は第5層を主体とし、第6層を母材とするブロック土を含み、下層は第5・6層を母材とするブロック土からなる。遺物は出土しなかったが、埋土の様相から第4層下面に帰属すると考えられる。

06049 土坑 (図 108・113・114)

06048 土坑の西において検出した。攪乱による破壊を辛うじて免れ、幅 0.4 m ほどの島状に残された地点における検出であり、遺存状態は悪く本来の形状は不明である。南北長 0.74 m、深さ 0.19 m を測る。埋土は2層に細分され、上層は第4層が落ち込む。下層は第5層を主体とし、第6層を母材とするブロック土を含む。遺物は出土しなかったが、埋土の様相から第4層下面に帰属すると考えられる。

前述の 06048 土坑と埋土が類似することから本来は同一の遺構であった可能性があるが、残存状態が悪く断定するには至らなかった。

06064 土坑 (図 107・112、写真図版 24・56)

調査区南半部、7 L-1 h において検出した平面不整形を呈する土坑である。東西長 0.92 m、南北長 0.50 m を測る。断面形は底面南辺が地中に潜り込み、オーバーハングしながら南肩へと続く形状を呈するが、掘削中に急激な降雨に見舞われ、土層観察ベルトおよび南肩が崩落したため断面の記録を取得することができなかった。埋土は単層で、第4層が落ち込む。

遺物は埋土中から胎土に砂礫を多く含む土器片が複数出土した (写真図版 56-407)。いずれも体部片と思われるが、摩滅が著しく、復元可能なものもなかったため図示することはできなかった。なお、同一個体と思われる破片は直上の第4層からも出土している。胎土および焼成具合から縄文時代に帰属する可能性もあるが、詳細は不明である。

遺物の出土もあって土坑として掘削したが、平面および断面の形状から地震動による変形や風倒木痕など自然の営為によるものである可能性が高いと考えられる。

06068 土坑 (図 108・112)

調査区南半部、7 M-1 b において検出した。周辺は攪乱による損壊が著しく、本土坑も辛うじて攪乱を免れ、島状に残存した地点における検出となる。このため遺構の東は破壊されているが、残存部の形状から本来は隅丸方形を呈していたものと思われる。南北長 0.97 m、東西長 0.70 m、深さ 0.34 m を測る。埋土は4層に細分され、1層は第4層が落ち込んだものと考えられる。2～4層は第5層に由来するが、含まれるブロック土や砂礫に差異がある。遺物は出土していないため詳細な時期は不明であるが、埋土の様相から第4層下面に帰属すると考えられる。

06069 土坑 (図 107・112)

調査区南半部、7 L-1 j において検出した。南は攪乱により破壊されるが、隅丸方形を呈する土坑と考えられる。東西長 0.74 m、南北長 0.70 m、深さ 0.41 m を測る。埋土は3層に細分され、上・中

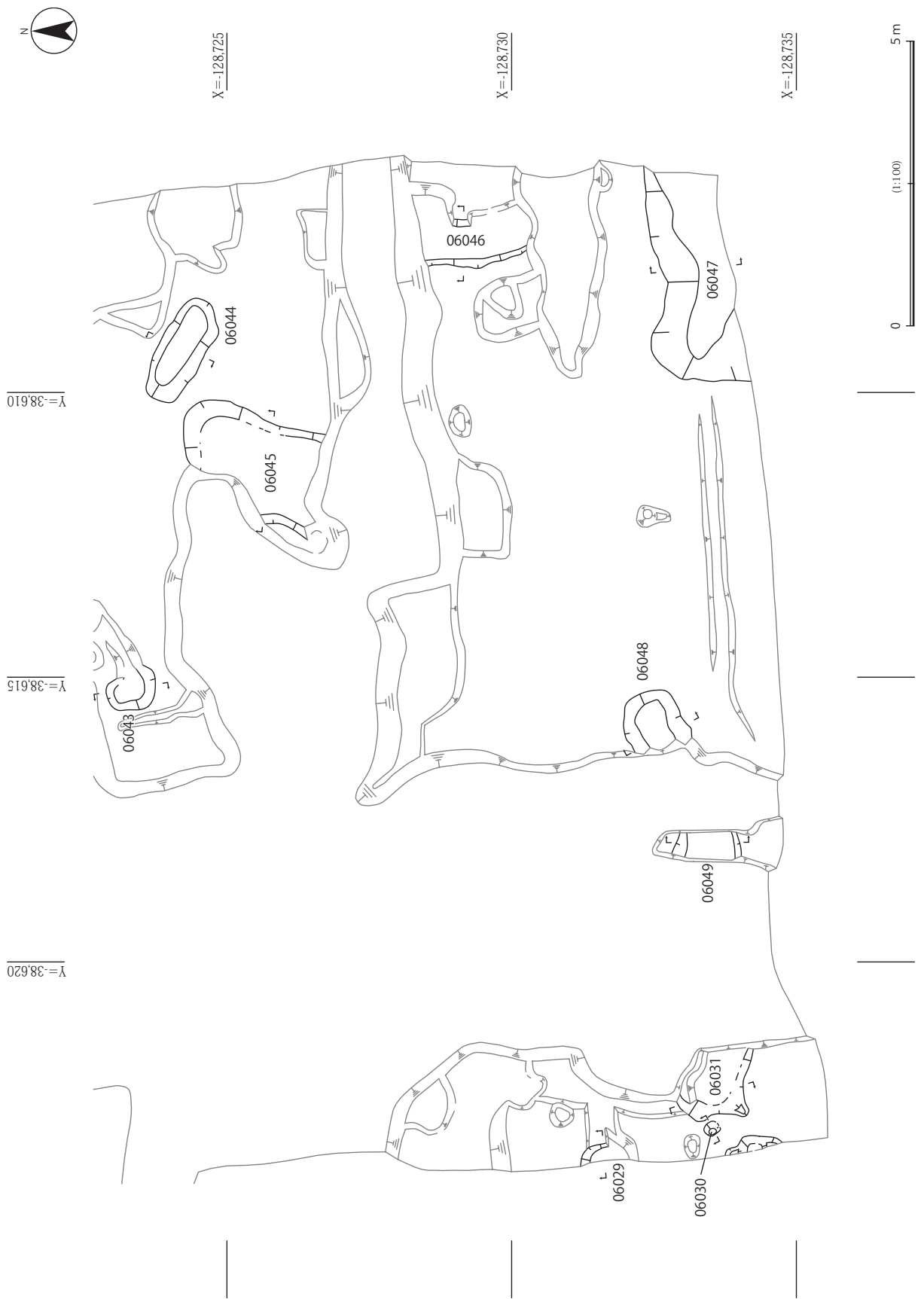
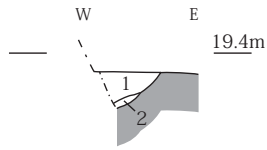


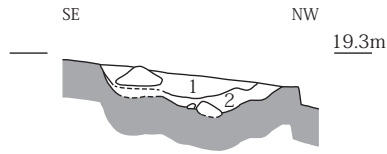
图 113 南端部 (X=-128,723 ~ 734) 平面

06029土坑



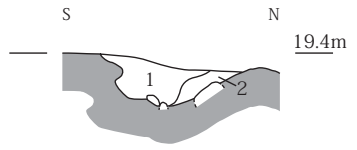
1. 10YR2/1 黒 粘質シルト
2. 10YR4/2 灰黄褐 シルト混細砂

06031土坑



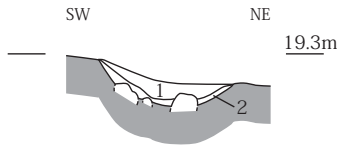
1. 10YR2/1 黒 粘質シルト
2. 2.5Y3/1 黒褐 粗砂混粘質シルト

06043土坑



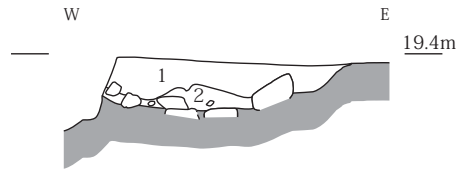
1. 10YR2/1 黒 粘質シルト
2. 2.5Y5/2 暗灰黄 粘質シルト

06044土坑



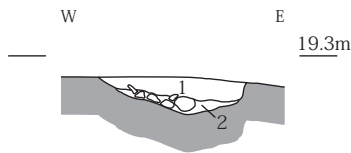
1. 10YR2/1 黒 粗砂混粘質シルト (礫を含む)
2. 2.5Y3/1 黒褐 砂質シルト
(10YR2/1 黒 粗砂混粘質シルトと 2.5Y5/1 黄灰 砂質シルトブロック混じる)

06045土坑



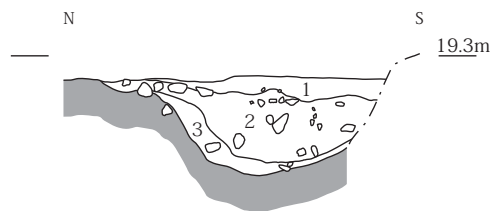
1. 2.5Y2/1 黒 細砂混粘質シルト
(礫、岩をわずかに含む)
2. 2.5Y3/1 黒褐 粗砂～礫混粘質シルト
(2.5Y5/1 黄灰 砂質シルトのブロック混じる)

06046土坑



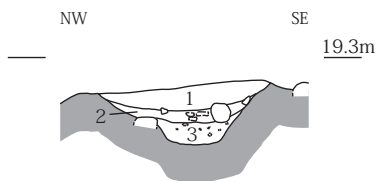
1. 10YR2/1 黒 粗砂混粘質シルト (礫を含む)
2. 2.5Y3/1 黒褐 砂質シルト
(10YR2/1 黒 粘質シルトと 2.5Y5/1 黄灰 砂質シルトのブロック混じる)

06047土坑



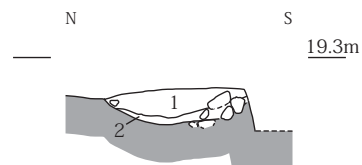
1. 10YR4/2 灰黄褐 砂質シルト (礫をわずかに含む)
2. 10YR2/1 黒 粘質シルト (礫～岩を含む)
3. 2.5Y5/2 暗灰黄 中砂～粗砂混粘土
(10YR2/1 黒 粘質シルトと 2.5Y5/1 黄灰 礫と砂質シルトのブロック混じる)

06048土坑



1. 10YR2/1 黒 粘質シルト
2. 2.5Y3/1 黒褐 粗砂混粘質シルトと 2.5Y5/1 黄灰 砂質シルトのブロック (礫が混じる)
3. 2.5Y3/1 黒褐 粗砂混粘質シルトと 2.5Y5/1 黄灰 砂質シルトのブロック

06049土坑



1. 10YR2/1 黒 粘質シルト
2. 2.5Y3/1 黒褐 粗砂混粘質シルトと 2.5Y5/1 黄灰 砂質シルトのブロック (礫が混じる)

0 (1:40) 1 m

図 114 6区南端部 (X=-128,723 ~ 734) 土坑 断面

層は第5層、下層は第6層に由来すると考えられる。遺物は出土しなかった。埋土の様相から、自然に形成された窪みを土坑と誤認している可能性が残る。

06070 土坑 (図 108・112)

調査区南半部、7 M-2 aにおいて検出した。東西を攪乱により破壊されるため断定はできないが、東西に長い楕円もしくは隅丸方形を呈していたと推測される。南北長 0.67 m、0.58 m、深さ 0.15 mを測る。断面図では埋土を2層に細分して示しているが、1層は第3層を含み、垂直方向に落ち込むことから、上層からの踏込である可能性が高く、本来の埋土は2層のみであると考えられる。しかしながら、2層は第5層に類似し、かつ遺物も出土していないことから、自然の窪みである可能性も考えられる。

06071 土坑 (図 108・112)

06070 土坑の北において検出した。西側の一部は攪乱により破壊されるが、南北に長い楕円形を呈していたと思われる。長径 0.74 m、短径 0.42 m、深さ 0.18 mを測る。埋土は単層で、第5層に由来すると考えられる。遺物は出土しておらず、埋土に第4層以上の土を含まないことから、06070 土坑と同様に自然に形成された窪みを土坑と誤認している可能性がある。

3. ピット

06001 ピット (図 105・115)

調査区北西端部、7 K-5 eにおいて検出した。直径 0.22 m、深さ 0.08 mを測る。埋土は単層で、第3層に類似する。遺物は出土しなかった。埋土の様相から第3層下面に帰属すると思われる。

06014 ピット (図 105・115)

調査区北端部、7 K-2 fにおいて検出した。長径 0.36 m、短径 0.28 m、深さ 0.21 mを測る楕円形を呈するピットである。埋土は単層で、第4層を主体とし、第6層を母材とするブロック土を含む。遺物は出土しなかったが、埋土の様相から第4層下面に帰属すると考えられる。

06030 ピット (図 113・115)

調査区南端、06031 土坑の西に隣接する、隅丸方形を呈するピットである。南北長 0.25 m、深さ 0.20 mを測る。埋土は単層で、第4層に由来する。遺物は出土していない。第4層下面に帰属すると考えられる。

06037 ピット (図 106・115)

調査区中央付近、7 L-3 eにおいて検出した、南北にやや長い不整な楕円形を呈するピットである。長径 0.77 m、短径 0.60 m、深さ 0.15 mを測る。埋土は単層で、第3層に類似する。遺物は出土しなかったが、埋土の様相から第3層下面に帰属すると思われる。

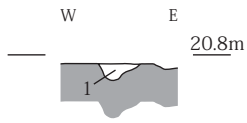
06061 ピット (図 107・116、図版 24)

調査区南半部、7 L-1 iにおいて検出した。南北にわずかに長く、長径 0.28 m、短径 0.22 m、深さ 0.13 mを測る。埋土は単層で、第5層を主体とし、第6層を母材とするブロック土を含む。遺物は出土しなかった。

06062 ピット (図 107・116、図版 24)

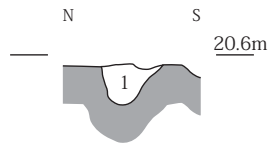
06061 ピットの東において検出した。直径 0.21 m、深さ 0.13 mを測る。埋土は2層に細分される。このうち1層は柱痕跡と思われる。2層は第5・6層を母材とするブロック土からなる。遺物は出土しておらず、帰属時期は不明である。

06001ピット



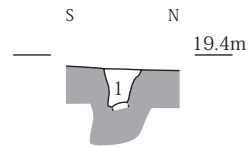
1. 7.5YR4/1 褐灰 粘質シルト

06014ピット



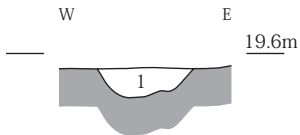
1. 7.5YR2/1 黒 粘質シルト
(7.5Y7/2 灰白 シルトが混じる)

06030ピット



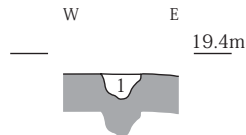
1. 10YR2/1 黒 粘質シルト

06037ピット



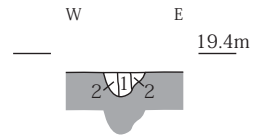
1. 7.5YR4/1 褐灰 粘質シルト
(粗砂が混じる)

06061ピット



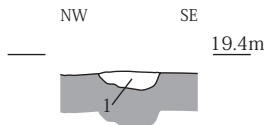
1. 2.5Y4/1 黄灰 細砂混砂質シルト
(2.5Y3/1 黒褐 シルトのブロックと
2.5Y8/2 灰白 砂質シルトのブロック
を含む)

06062ピット



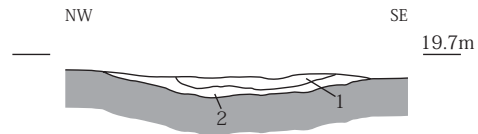
1. 2.5Y5/1 黄灰 細砂～中砂混粘質
シルト (炭化物を含む)
2. 10YR6/1 褐灰 中砂混砂質シルト
(2.5Y7/2 灰黄 砂質シルトのブロック
ク土が等分に混じる)

06072ピット



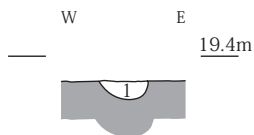
1. 2.5Y3/2 黒褐 細砂混粘質シルト

06035落ち込み



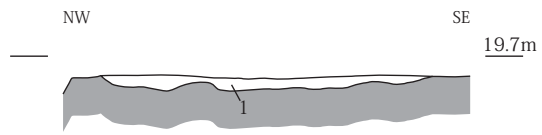
1. 2.5Y6/2 灰黄 粗砂混極細砂質シルト
2. 7.5YR4/1 褐灰 粘質シルト (粗砂が混じる)

06067ピット



1. 10YR3/1 黒褐 中砂～粗砂混
砂質シルト
(極小の炭化物、鉄分粒を含む)

06036落ち込み



1. 7.5YR4/1 褐灰 粘質シルト (粗砂が混じる)

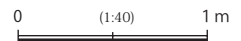


図115 6区 ピット、落ち込み 断面

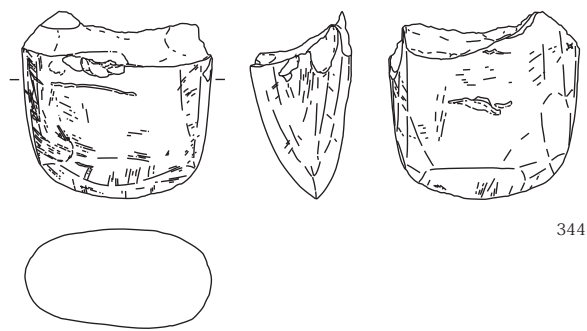
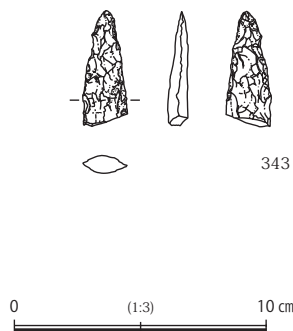


図116 6区 第4層 出土遺物

06067 ピット (図 107・116、図版 24)

7 L-1 h、06064 土坑の南東において検出した。直径 0.25 m、深さ 0.10 mを測る。埋土は単層で、第 4 層に類似する。遺物が出土していないが、埋土の様相から第 4 層下面に帰属すると思われる。

06072 ピット (図 107・116、図版 24)

調査区南半部、7 L-2 j において検出した。直径 0.36 m、深さ 0.10 mを測る。埋土は単層で、第 5 層に由来すると思われる。遺物は出土しておらず、帰属時期は不明である。

4. 落ち込み

06035 落ち込み (図 106・115、図版 24)

調査区中央付近、7 L-3 e において検出した。平面不整形を呈し、西は攪乱により破壊される。長軸 1.99 m、短軸 1.62 m、深さ 0.12 mを測る。埋土は 2 層に細分され、上層は第 2 層、下層は第 3 層に由来すると思われる。遺物は出土しなかったが、埋土の様相から第 2 層下面に帰属すると思われる。

06036 落ち込み (図 106・115、図版 24)

06035 落ち込みの東に隣接し、平面は北東-南西に長軸を持つ不整形を呈する。長軸 10.04 m、短軸 2.46 m、深さ 0.08 mを測る。埋土は単層で、06035 落ち込み埋土 2 と同様に、第 3 層に由来すると思われる。遺物は出土しなかった。異なる遺構番号を付したが、埋土の様相から 06035 落ち込みと一連の窪地であった可能性が高いと考えられる。

5. 遺構外出土遺物

6 区は遺構外においても遺物の出土量は 1 区や 4 区に比して少なく、かつ細片であるため図示できるものはなかった。しかしながら、第 4 層より石器が 2 点出土したため、これらについて報告する (図 116、図版 56)。

343 は石鏃である。鏃身中程から基部にかけては欠損する。サヌカイト製。長身鏃と考えられることから弥生時代中期以降に帰属するものと推測される。344 は太形蛤刃石斧の刃部片である。刃部には使用によって形成されたと思われる細かな凹凸が認められる。

第8節 7区の調査成果

7区は地区幹線道路建設に伴い設定された調査区である。調査の結果、当調査区においては東芝大阪工場建設および解体に伴う大規模な攪乱を受けており、 $X=-128,590 \sim 600$ 、 $X=-128,618 \sim 639$ において、辛うじて基盤層である第6層が残存していることを確認したが、それ以外の地点においてはさらに深く攪乱が及んでいることが判明した。

第1項 層序

上述のとおり、本調査区においては第1～5層は残存しておらず、部分的に第6層を確認した。

第6層 自然堆積層である。層界は不明瞭であるが、土質から上下2層に細分した。

第6-1層 10Y3/1 オリーブ黒 中砂～粗砂。

第6-2層 7.5Y3/1 オリーブ黒 砂礫。

第2項 検出された遺構と遺物

上述のとおり、本調査区は大規模な攪乱を受けており、遺構および遺物は検出されなかった。なお、盛土には第3・4層がブロック状に含まれており、本来はこれらの層が残存していたと考えられることから、現代の開発に伴い破壊されたものと判断した。

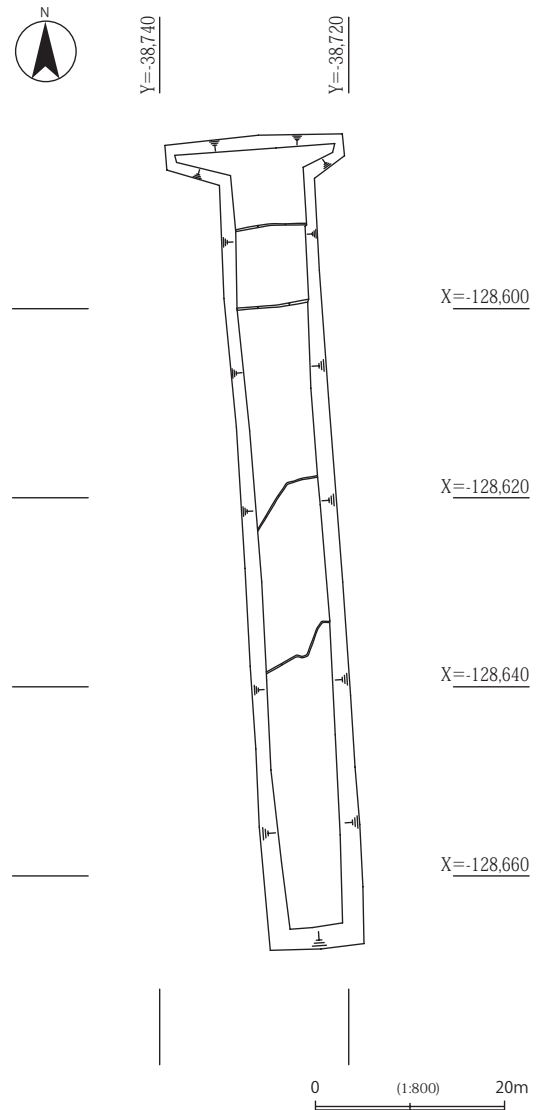


図117 7区 平面

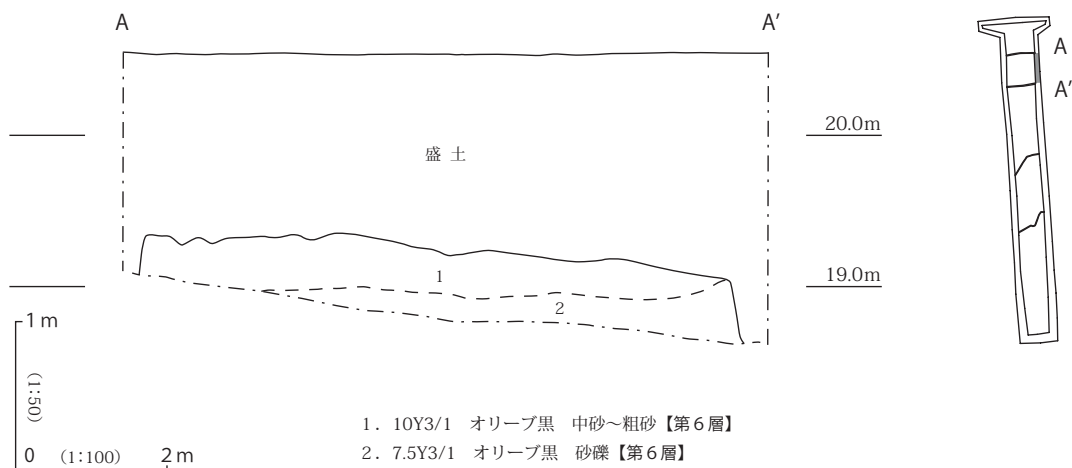


図118 7区 東壁 土層断面

第9節 8区の調査成果

8区は防火水槽建設に伴い設定された調査区である。本調査区は1区の西に位置しており、地区割は8N-4e・2~4fとなる(図119)。1区およびOT08-2調査区に隣接することから、両調査区と同様に弥生時代から古代にかけての遺構や遺物が検出される可能性が考えられた。

第1項 層序

調査着手時には、東芝大阪工場建設および解体に伴う盛土の上に砕石が敷きならされていたため、盛土・造成土とともに除去し、その下層において現代の耕作土層(第1層)および近世の耕作土層(第2層)、基盤層(第6層)の堆積を確認した。

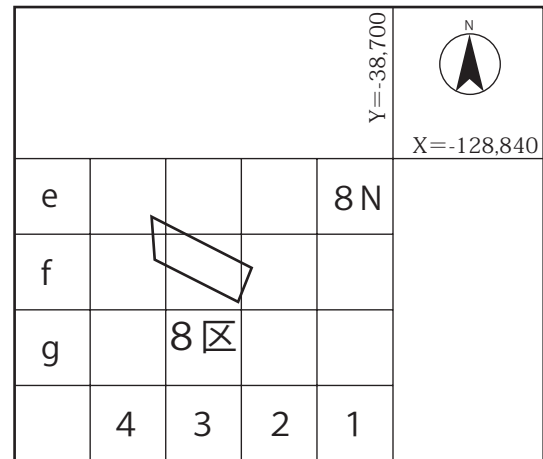


図119 8区 地区割

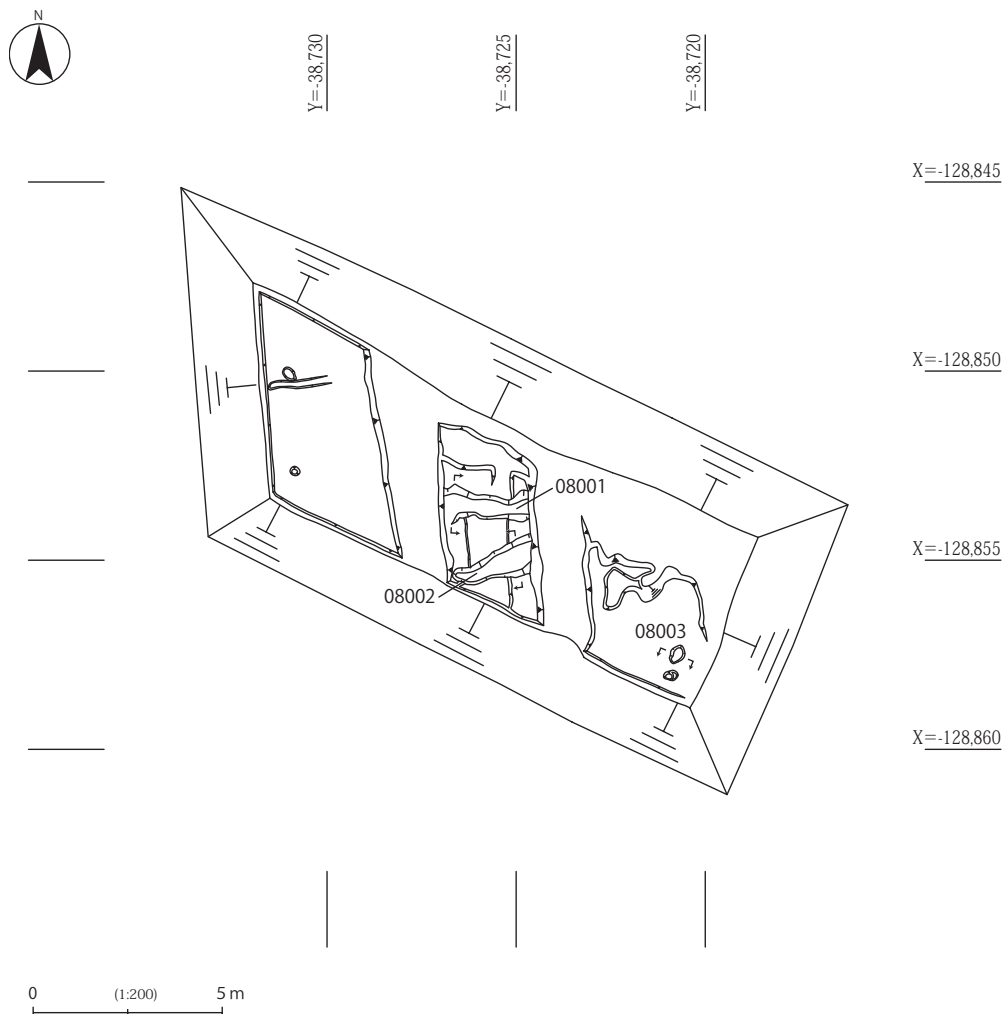


図120 8区 平面

以下、各層準について記述する（図 121、図版 26）。

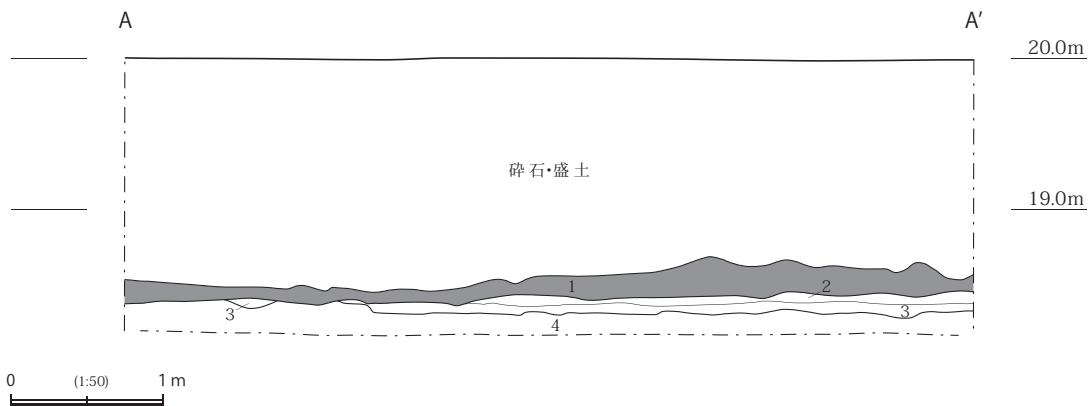
碎石・盛土・造成土層 調査着手前に敷きならされた碎石層と、シルトと砂を主体とする盛土・造成土層である。層厚は碎石層が 0.60 m、盛土・造成土層が 0.75 ～ 1.00 m を測る。

第 1 層 5Y5/2 灰オリーブ 極粗砂混じり細砂質シルト。層厚は 0.07 ～ 0.27 m を測る。

第 2 層 調査区の南西部においては上層の耕作により削平を受け残存していなかった。土質により 2 層に細分される。

第 2-1 層 2.5GY3/1 暗オリーブ灰 シルト混じり細砂を主体とし、中砂を多く含む、粗砂～極粗砂粒を含む。層厚は最も厚い地点において 0.08 m を測る。

第 2-2 層 5GY3/1 暗オリーブ灰 シルト混じり細砂を主体とし、粗砂～極粗砂粒を含む。層厚



1. 5Y5/2 灰オリーブ 極粗砂混じり細砂質シルト【第 1 層】
2. 2.5GY3/1 暗オリーブ灰 シルト混じり細砂
(中砂を多く含む、粗砂～極粗砂粒を含む)【第 2-1 層】
3. 5GY3/1 暗オリーブ灰 シルト混じり細砂
(粗砂～極粗砂粒を含む)【第 2-2 層】
4. 10Y3/2 オリーブ黒 シルト混じり細砂
(小礫～中礫を多く含む、粗砂～極粗砂粒を含む)【第 6 層】

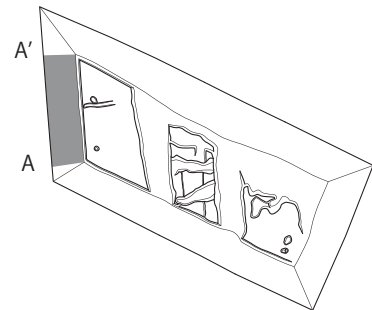
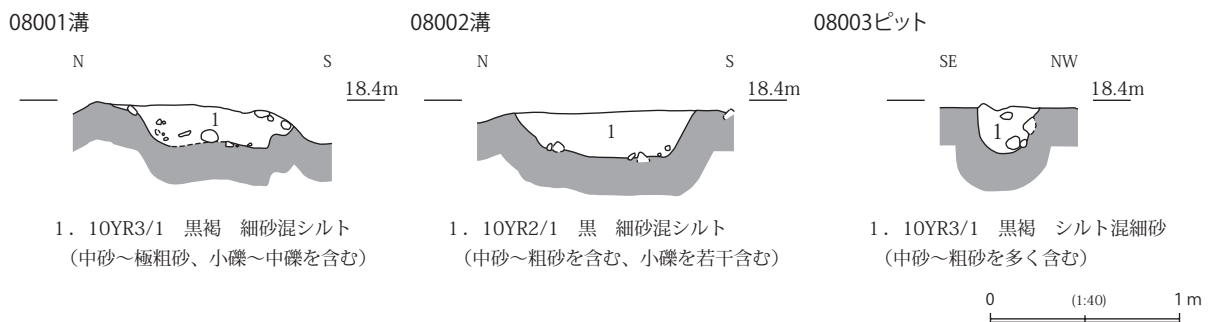


図 121 8区 西壁 断面



08001溝
1. 10YR3/1 黒褐 細砂混シルト
(中砂～極粗砂、小礫～中礫を含む)

08002溝
1. 10YR2/1 黒 細砂混シルト
(中砂～粗砂を含む、小礫を若干含む)

08003ピット
1. 10YR3/1 黒褐 シルト混細砂
(中砂～粗砂を多く含む)

図 122 08001・08002 溝、08003 ピット 断面

は最も厚い地点において 0.09 m を測る。

第 6 層 10Y3/2 オリーブ黒 シルト混じり細砂を主体とし、小礫～中礫を多く含む、粗砂～極粗砂粒を含む。層厚は不明である。本層の上面において調査を行った。

第 2 項 検出された遺構と遺物

第 1 層および部分的に残存していた第 2 層を除去した段階で基盤層である第 6 層が露頭したことから、その上面を第 5 面として調査を実施した。第 5 面の高さは調査区東端が 18.42 m、西端が 18.28 m を測り、東から西に向けて低くなる地形を呈する。本調査区は現代の攪乱および近世以降の耕作による削平を受けているため遺存状況は悪いが、溝 2 条およびピット 1 基を検出した。

1. 溝

08001 溝 (図 120・122、図版 26)

調査区中央において検出した東西方向を指向する溝である。東西両端が攪乱により破壊されているため全容は不明であるが、残存範囲における長さは 2.21 m、幅は 0.54 ～ 0.91 m を測る。埋土は単層で黒褐色を呈する。本調査区においては第 3 ～ 5 層が削平を受け残存していないため断定はできないものの、土色および土質は 1 区における第 3 層に類似する。遺物は土師器が出土しているが、いずれも細片のため図化できるものはなかった。詳細な時期は不明であるが、遺構埋土から第 3 層下面に帰属する可能性が高いと考えられる。

08002 溝 (図 120・122、図版 26)

08001 溝の南側において検出した、北東－南西方向を指向する溝で、北東端部は攪乱により破壊される。残存範囲における最大幅は 0.95 m、長さは 2.18 m を測る。埋土は単層で、1 区における第 4 層に類似した黒色土が入る。遺物は土師器の細片が出土したが、図化できなかった。詳細な時期は不明であるが、遺構埋土から第 4 層下面に帰属する可能性が高いと考えられる。

2. ピット

08003 ピット (図 120・122、図版 26)

調査区南東隅において検出した。やや南北に長い不整な楕円形を呈し、長径 0.54 m、短径 0.37 m、検出面からの深さは 0.15 m を測る。埋土は単層で、08001 溝と同様に 1 区における第 3 層に類似する。遺物は土師器の細片が出土したが、図化できるものはなかった。詳細な時期は不明であるが、埋土から 08001 溝と同様に第 3 層下面に帰属すると推察される。

第 10 節 9 区の調査成果

9 区は 8 区と同様に防火水槽建設に伴い設定された調査区である。調査区の位置は 5 区の北東部に接し、地区割は 8 M 2 ～ 4 D となる (図 78)。

第 1 項 層序

本調査区は、東芝大阪工場建設および解体に伴う攪乱が著しく、特に調査区東半部にあたる $Y = -38,725$ 以東は基盤層である第 6 層も削平されており、遺構面および遺物包含層は遺存していなかった。幸うじて残存する調査区西半部の範囲においても、盛土・造成土を除去した時点で基盤層である第 6 層が露頭した (図 123、図版 27)。

碎石・盛土・造成土層 調査着手前に敷きならされた碎石と東芝大阪工場建設および解体に伴う盛土・造成土である。碎石は北が段を形成するように盛られており、層厚は 0.80 m を測る。盛土・造成土はシルトと砂を主体とする。層厚は第 6 層が残存する範囲においては 0.85 ～ 1.26 m を測る。

第 6 層 2.5Y6/3 にぶい黄 礫～大礫とシルト混じり粗砂～極粗砂。なお、 $Y = -38,729$ 以東においては 7.5Y6/1 灰を呈し、礫がやや多くなる。本層上面において調査を実施した。

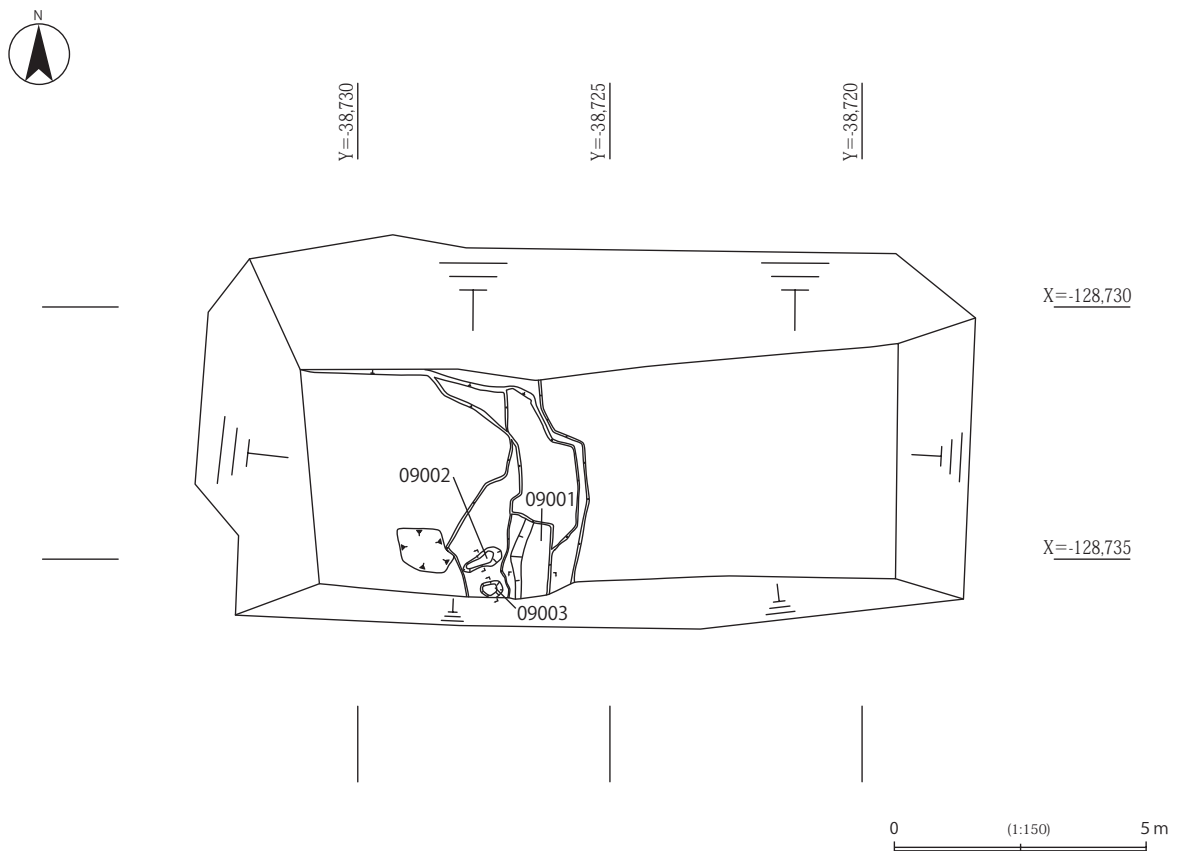


図 123 9 区 平面

第2項 検出された遺構と遺物

上述のとおり、本調査区においては攪乱が著しく、調査区西半部において辛うじて第6層の残存を確認した。第5面の高さは、最も遺存状態の良好であった調査区中央において 18.70 m前後を測るが、本来はさらに高かったものと思料される。遺構の遺存状態も極めて悪く、ピット1基と、自然に形成された窪み2基を検出したにとどまる。

1. ピット

09003ピット (図125、図版27)

調査区南壁際において検出した。平面形は東西にやや長い不整な楕円形を呈し、長径0.42 m、短径0.32 m、深さは0.05 mを測る。埋土は第4層が落ち込む。遺物は出土しなかった。残存状態が悪く、自然の凹みである可能性も残る。埋土から第4層下面に帰属すると考えられる。

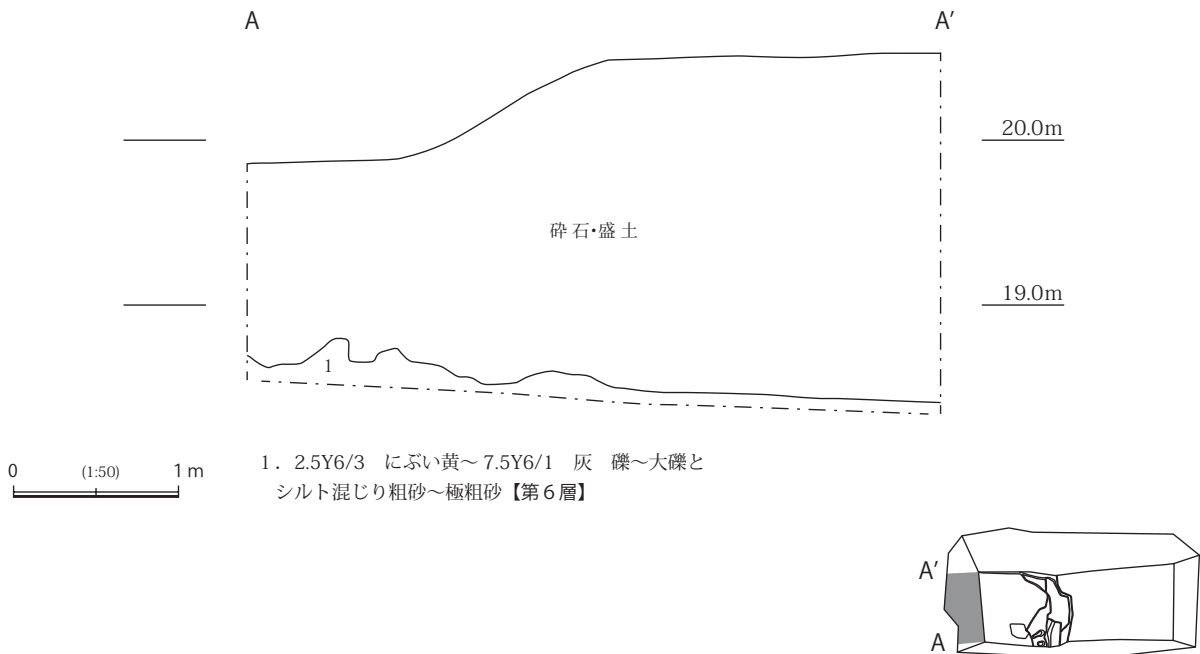


図124 9区 西壁 断面

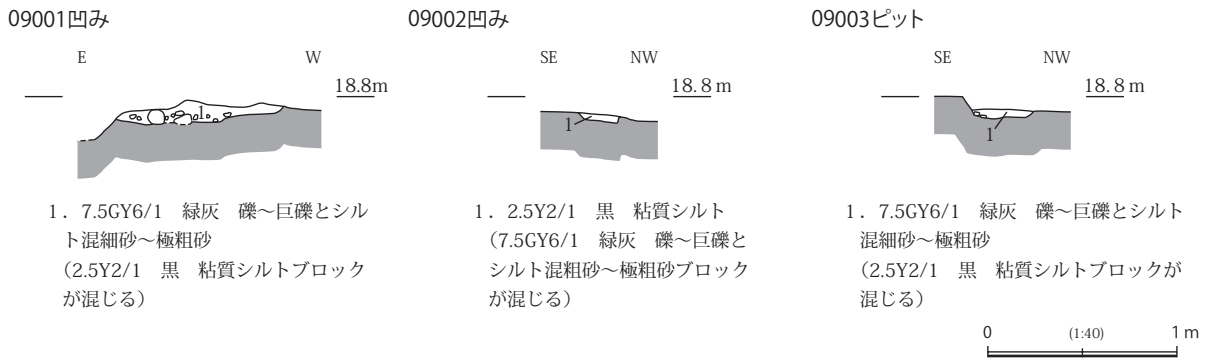


図125 09001・09002凹み、09003ピット 断面

2. 凹み

09001 凹み (図 125、図版 27)

09003 ピットの東隣接部において、西から東に向けて地形が落ち込む状況を確認した。北および東は攪乱により破壊されているため全容は不明である。あるいは溝状の遺構になる可能性もあるが、今回の調査では明らかにすることはできなかった。深さは、最も深い地点において 0.11 m を測る。遺物は出土しなかった。埋土から第 5 面に帰属すると考えられる。

09002 凹み (図 125、図版 27)

09003 ピットの北で検出した、不整な楕円形を呈する凹みである。長径 0.85 m、短径 0.22 m、深さは 0.03 m を測る。遺物は出土しなかった。埋土から第 5 面に帰属すると考えられる。

註・参考文献

- 1) 茨木市教育委員会 2005 『太田遺跡発掘調査概報』茨木市文化財資料集第 61 集
- 2) こうした地形は昭和 23 年に米軍が撮影した空中写真 (USA - M34 - 3 - 60) などからも窺える。なお、同写真は国土交通省のHPより閲覧した。
- 3) 円筒埴輪の基底部分における調整については下記の文献を参考とした。
山内英樹 2003 「円筒埴輪製作工程における「基底調整」」『埴輪—円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析—』第 52 回埋蔵文化財研究集会発表要旨集
- 4) 名神高速道路内遺跡調査会 1998 『太田遺跡発掘調査報告書』名神高速道路内遺跡調査会調査報告書第 7 輯
茨木市 2014 『新修 茨木市史』第 7 巻 資料編 考古
- 5) 公益財団法人大阪府文化財センター 2017 『明和池遺跡』公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書第 279 集
- 6) 財団法人大阪府文化財センター 2008 『讃良郡条里遺跡VI』財団法人大阪府文化財センター調査報告書第 138 集
- 7) 煙突型土製品の出土事例については下記の文献による。
徳網克己 2001 「付章 2 カマドに伴う煙突について」『平成 11 年度 中主町内遺跡発掘調査年報』中主町文化財調査報告書第 60 集 中主町教育委員会
崔 榮柱 2010 「三国・古墳時代における土製円筒研究—韓半島と日本列島を中心に—」『立命館大学考古学論集』V 立命館大学考古学論集刊行会

第5章 太田遺跡・太田城跡 2017－1 調査

第1節 調査の概要

東芝大阪工場跡地のうち、茨木市道東太田一丁目花園二丁目線の西における開発区域に敷設される地区幹線道路建設に伴う発掘調査である。調査期間は平成30年1月11日から3月23日であり、最終的な調査面積は850㎡である。

調査は開放掘削にて実施した。調査に先立って実施した確認調査の結果から、当地においては厚く盛土造成がなされていることが明らかであったため、調査終了面において予定されている道路幅が確保でき、かつ安全を保てるよう掘削開始位置を設定し、調査にあたった。調査では盛土・造成土層以下、第3層とした中世の耕作土層までを機械にて除去し、それ以下を人力にて掘削した。

調査は第4面、第6面、第7面において実施し、第6面においては航空写真測量を実施した。また、調査区東端部においては第7層より下位において古土壌層が存在することが明らかとなったことから、第7面の調査終了後、第7b層以下の堆積状況および遺構・遺物の有無を確認するため、部分的なトレンチ調査を実施した。

なお、後述するように第7面において擬似畦畔を検出したが、検出範囲は部分的であり、かつ遺存状態もあまり良好ではなかった。また、これまでに太田遺跡や周辺の遺跡において弥生時代に遡る水田遺構が検出された事例は認められないことから、当該遺構に対する客観的なデータを得るとともに、当時の環境を復元・考察することを目的として、花粉・珪藻・植物珪酸体の分析を実施した。分析の方法や結果など、詳細については第6章において記述する。

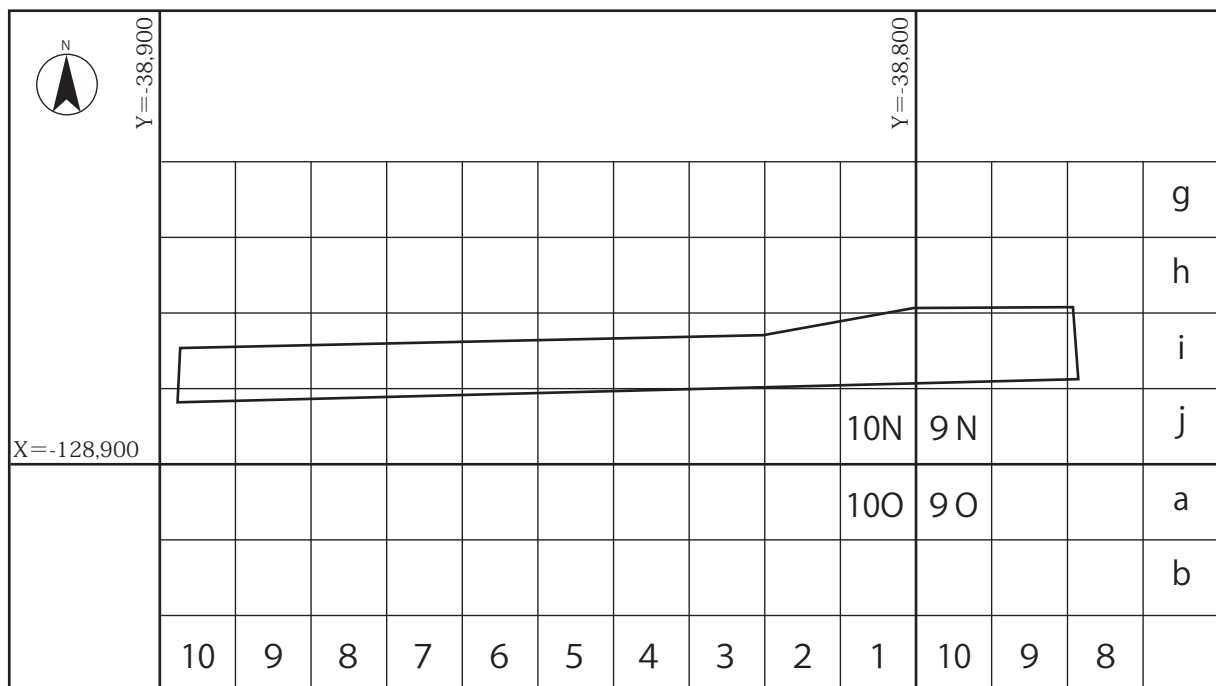


図 126 太田遺跡・太田城跡 2017－1 地区割

第2節 調査の成果

第1項 層序

本調査区は東芝大阪工場建設に伴うと考えられる厚い盛土に覆われていたため、現代の耕作土以下の各層準が良好な状態で残存していた。調査区は東西に長いことから同一層準においても地点によって土質が異なることが多くみられた。しかしながら、その変化は漸移的であることから図上では単一の層として扱い、注記等に堆積範囲を示すこととした（図127・128、図版58）。

盛土・造成土 東芝大阪工場建設および解体に伴い造成された客土層である。碎石、真砂土、周辺を掘削した際に発生した客土などからなる。層厚は、調査区東端部において3.76 m、西端部において3.55 mを測る。

第1層 2.5Y3/2 黒褐 シルト混じり中砂～粗砂。東芝大阪工場建設直前まで利用されていたと考えられる現代の耕作土層である。一部において盛土造成による削平や変形が認められるが、調査区のほぼ全域において確認できた。層厚は最も厚い地点において0.25 mを測る。なお、Y = -38,790 付近以東においては畑の畝が良好な状態で遺存していることが断面観察から窺える。

第2層 第2層は土質などから大きく3層に細分されるが、調査においては機械にて一括して掘削した。出土した遺物から近世から近代にかけての耕作土層と考えられるが、各層の詳細な時期は不明である。

第2-1層 5Y5/2 灰オリーブ 粗砂混じり砂質シルト。一部において上層の耕作に伴う削平を受け滅失しているが、調査区のほぼ全域において確認できた。層厚は最も厚い地点において0.25 mを測る。なお、Y = -38,780～787において、第2-1層直下に砂礫混じりのシルトを主体とする土層が認められた。平面における調査を行っていないため断定はできないが、西肩が鋭角に立ち上がることや土質などから、河川の氾濫などの災害後に耕作地を復旧するために氾濫堆積物を集積し埋めた、いわゆる「復旧土坑」¹⁾と思われる。

第2-2層 2.5Y4/2 暗灰黄 粗砂～礫混じり砂質シルト。上述した「復旧土坑」が確認された地点や後述する第2-2 b層が厚く堆積している範囲においては削平を受けているが、調査区の広い範囲にわたって確認できた。層厚は最も厚い地点において0.30 mを測る。

第2-2 b層 5Y5/2 灰オリーブ 中砂～礫。東側では拳大の礫を含む。河川の氾濫堆積物と思われ、Y = -38,867 以西において確認された。Y = -38,870～880 付近において厚く堆積しており、層厚は0.32 mを測る。

第2-3層 7.5Y4/2 灰オリーブ 細砂混じり砂質シルト。Y = -38,850 以西において確認できたが、上層からの削平を受け残存状況は良好とはいえない。層厚は最も厚い地点において0.21 mを測る。なお、部分的ではあるが、層下端に微砂～細砂が入る踏込が認められることから、本層形成以前においても河川の氾濫がおよんでいたことが推察される。

第3層 第3層は土質から2層に細分が可能である。出土遺物から、古代末から中世末にかけての耕作土層と考えられるが、本層までを機械掘削の対象として一括して除去したため、各層の詳細な帰属時期は不明である。

第3-1層 Y = -38,780～820 においては2.5Y4/2 暗灰黄 細砂混じり粘質シルト、Y = -38,820～840 においては2.5Y4/1 黄灰 粘質シルト、Y = -38,840～900 においては7.5Y3/2 オリーブ黒 粗砂～極粗砂混じり砂質シルトからなる。調査区の全域にわたって確認された。層厚は

0.05～0.22 mを測る。

第3-2層 Y = -38,780～820においては10YR3/1 黒褐 細砂混じりシルト、Y = -38,820～840においては10YR3/2 黒褐 粘質シルト、Y = -38,840～900においては2.5Y3/2 黒褐 細砂混じりシルトを主体とし粗砂～極粗砂をわずかに含む。一部は上層における削平を受け滅失しているが、調査区内の広い範囲において確認できた。Y = -38,796 以東においては比較的残存状態は良く、層厚は最も厚い地点において0.25 mを測る。Y = -38,864 付近以西においては、本層を除去した段階で基盤層とした第8 b層が露頭した。

第4層 第4層は土質から大きく4層に細分される。出土遺物から、古墳時代後期から古代にかけて形成された土壌層および水成堆積層と考えられる。なお、Y = -38,791 以東では本層直上においてブロック土を主体とする土層が確認された。詳細は後述するが、人為的な造成土と考えられ、出土遺物から奈良時代の造作と考えられる。

第4-1層 Y = -38,780～782においては10YR3/1 黒褐 細砂混じりシルト、Y = -38,798～823においては2.5Y3/2 黒褐 粗砂混じり粘質シルトからなる。残存状態は不良で、Y = -38,823 以東において部分的に確認したにとどまる。このため、現地調査においては下層である第4-2層と一括して掘削している。層厚は最も厚い地点において0.20 mを測る。

第4-2層 Y = -38,780～800においては10YR2/1 黒 砂質シルトを主体とし極粗砂～礫を多く含む、Y = -38,800～820においては10YR3/1 黒褐 細砂混じりシルト、Y = -38,820～842においては2.5Y3/1 黒褐 シルトを主体とし粗砂～極粗砂を含む。Y = -38,842 以西においては第3層段階における耕作により削平を受け残存していなかった。層厚は最も厚い地点において0.30 mを測る。古墳時代後期から古代にかけての土壌層と思われる。

第4-3層 2.5Y2/1 黒 シルト。Y = -38,792 以東の低地部においてのみ確認できた土壌層であ

- | | |
|---|---|
| 1. 2.5Y3/2 黒褐 シルト混じり中砂～粗砂 [第1層] | -38,780～800)、10YR3/1 黒褐 細砂混じりシルト (Y = |
| 2. 5Y5/2 灰オリーブ 粗砂混じり砂質シルト [第2-1層] | -38,800～820)、2.5Y3/1 黒褐 シルト (粗砂～極粗砂を含 |
| 3. 2.5Y4/2 暗灰黄 粗砂～礫混じり砂質シルト (拳大の礫を多く含む) [復旧土坑か] | む、Y = -38,820～842) [第4-2層] |
| 4. 2.5Y4/2 暗灰黄 粗砂～礫混じり砂質シルト [第2-2層] | 13. 2.5Y2/1 黒 シルト [第4-3層] |
| 5. 5Y5/2 灰オリーブ 中砂～礫 (東側では拳大の礫を含む) [第2-2b層] | 14. 10YR2/1 黒 粘質シルト (植物遺体の薄層を挟在する) [第4b層] |
| 6. 7.5Y4/2 灰オリーブ 細砂混じり砂質シルト (層下端に微砂～細砂が入る踏込あり) [第2-3層] | 15. 5Y7/1 灰白 中砂～極粗砂 [第4b層] |
| 7. 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂混じり粘質シルト (Y = -38,780～820)、2.5Y4/1 黄灰 粘質シルト (Y = -38,820～840)、7.5Y3/2 オリーブ黒 粗砂～極粗砂混じり砂質シルト (Y = -38,840～900) [第3-1層] | 16. 2.5Y2/1 黒 粘質シルト (Y = -38,780～814)、10YR2/1 黒 シルト (Y = -38,814～862) [第5-1層] |
| 8. 10YR3/1 黒褐 細砂混じりシルト (Y = -38,780～820)、10YR3/2 黒褐 粘質シルト (Y = -38,820～840)、2.5Y3/2 黒褐 細砂混じりシルト (粗砂～極粗砂をわずかに含む、Y = -38,840～900) [第3-2層] | 17. 10YR3/1 黒褐 シルト [第5-2層] |
| 9. 2.5Y2/1 黒 砂質シルト (細かいブロック状の極粗砂～礫を含む、岩を含む) [ブロック土] | 18. 2.5Y3/1 黒褐 中砂～粗砂混じりシルトと7.5GY5/1 緑灰砂質シルトのブロック土 (Y = -38,780～781)、5Y4/1 灰シルト混じり細砂～中砂と2.5Y2/1 黒 シルトのブロック土 (Y = -38,783～805)、2.5Y3/1 黒褐 シルト (5Y4/1 灰粘質シルト (第7層)を母材とする微細なブロック土を含む、Y = -38,805～860) [第6層] |
| 10. 5GY5/1 オリーブ灰 シルトと2.5Y2/1 黒 砂質シルトのブロック (礫を含む) [ブロック土] | 19. 5Y4/1 灰 シルト混じり細砂～中砂 (極粗砂～礫を含む、Y = -38,790～797)、5Y4/1 灰 砂質シルト (Y = -38,812～834)、5Y3/2 オリーブ黒 細砂混じりシルト (Y = -38,836～857) [第7層] |
| 11. 10YR3/1 黒褐 細砂混じりシルト (Y = -38,780～782)、2.5Y3/2 黒褐 粗砂混じり粘質シルト (Y = -38,798～823) [第4-1層] | 20. 7.5GY5/1 緑灰 砂質シルト [第7b層] |
| 12. 10YR2/1 黒 砂質シルト (極粗砂～礫を多く含む、Y = | 21. 2.5Y2/1 黒 シルト (極粗砂～礫を含む、Y = -38,785～791)、7.5Y4/1 灰 細砂混じりシルト (粗砂～礫を含む、Y = -38,791～803) [第8層] |
| | 22. 2.5GY5/1 オリーブ灰 砂質シルト [第8b層] |

図127 北壁 土層注記

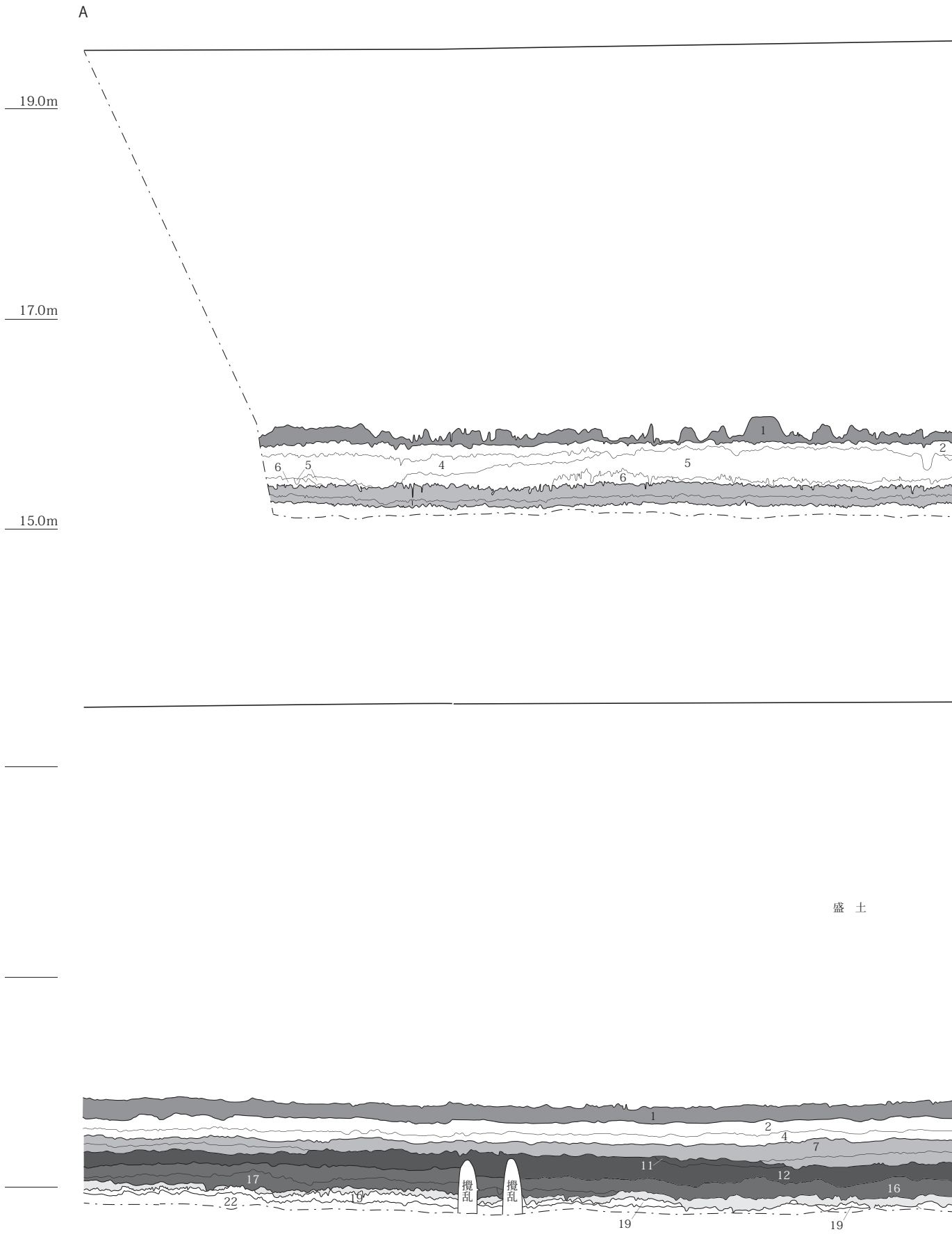
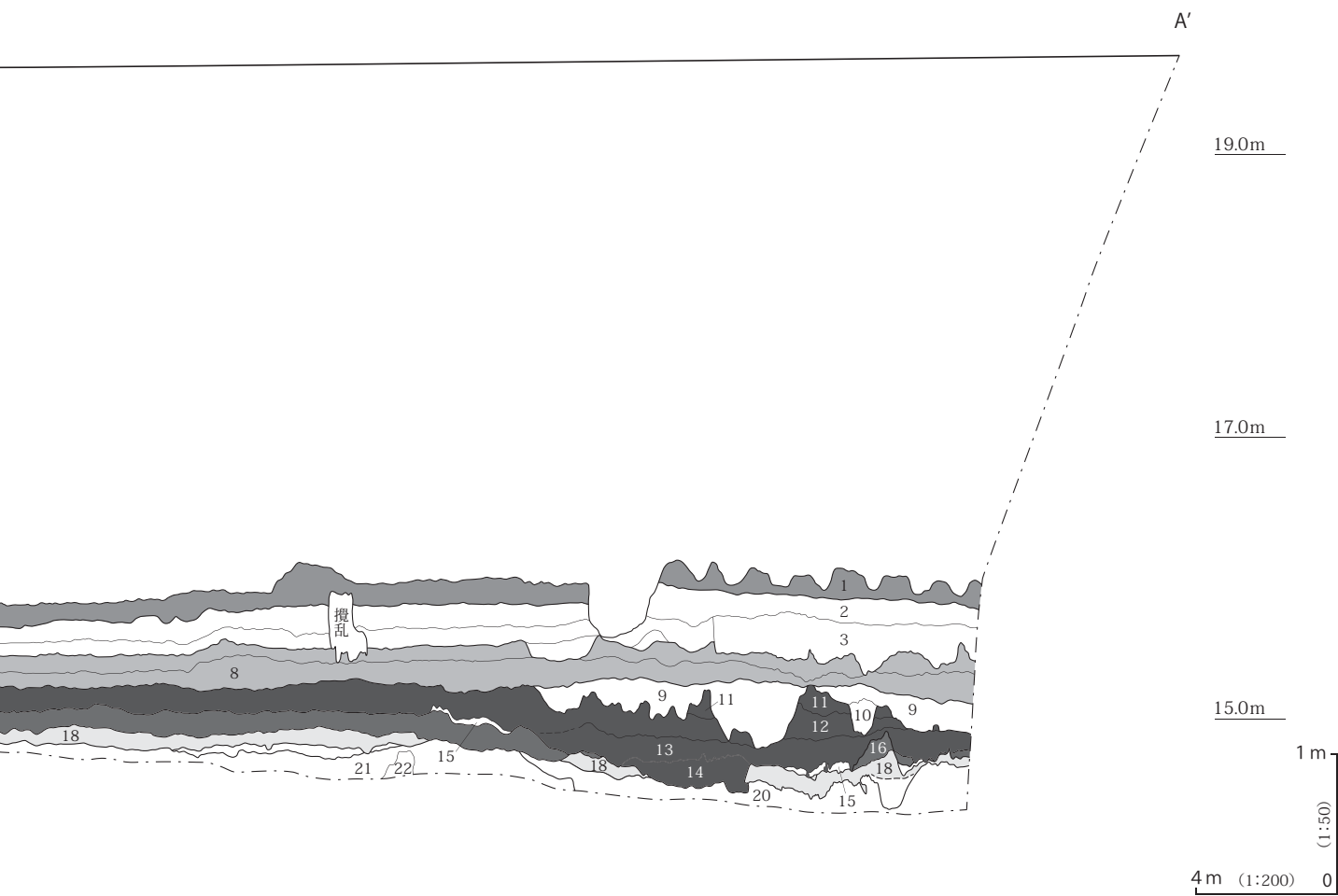
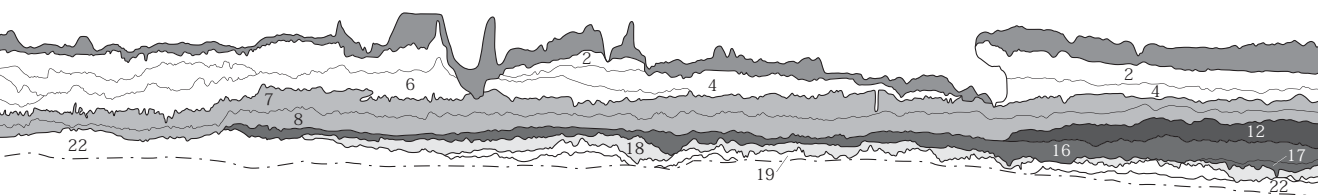


图 128 北壁

盛土



土層断面

る。層厚は最も厚い地点において 0.24 m を測る。

第 4 b 層 Y = -38,783 ~ 792 においては 10YR2/1 黒 粘質シルト、植物遺体の薄層を挟在する水成堆積層であり、Y = -38,793 ~ 796 においては 5Y7/1 灰白 中砂～極粗砂からなる。Y = -38,783 ~ 792 においては第 5・6 層が残存しておらず、本層を除去した段階で第 7 b 層が露頭した。河川の氾濫など、なんらかの要因により当該箇所の第 5・6 層が削平され、湿地状の景観を呈していたものと思われる。

第 5 層 断面観察においては部分的に 2 層に細分が可能であるが、掘削時においては峻別が困難であり、一括して掘り下げた。出土遺物から古墳時代中期から後期にかけて形成された土壤層と考えられる。

第 5 - 1 層 Y = -38,780 ~ 814 においては 2.5Y2/1 黒 粘質シルト、Y = -38,814 ~ 862 においては 10YR2/1 黒 シルトからなる。Y = -38,862 以西においては第 3 層段階における耕作により削平を受け残存していなかった。層厚は最も厚い地点において 0.20 m を測る。本層上面において航空写真測量を実施した。

第 5 - 2 層 10YR3/1 黒褐 シルト。Y = -38,814 ~ 837 において確認した。層厚は最も厚い地点において 0.20 m を測る。

第 6 層 Y = -38,780 ~ 781 においては 2.5Y3/1 黒褐 中砂～粗砂混じりシルトと 7.5GY5/1 緑灰砂質シルトからなるブロック土、Y = -38,783 ~ 805 においては 5Y4/1 灰 シルト混じり細砂～中砂と 2.5Y2/1 黒 シルトからなるブロック土、Y = -38,805 ~ 860 においては 2.5Y3/1 黒褐 シルトを主体とし、第 7 層と考えられる 5Y4/1 灰 粘質シルトを母材とする微細なブロック土を含む。Y = -38,860 以西においては第 3 層段階における耕作により削平を受け残存していなかった。層厚は最も厚い地点において 0.20 m を測る。出土遺物から弥生時代後期の作土層と考えられる。しかしながら、Y = -38,805 ~ 860 では比較的淘汰された作土であるのに対し、Y = -38,860 以東においてはブロックを多く含む作土となっており、淘汰がさほど進まぬうちに耕作を放棄したものと思われる。

第 7 層 自然堆積層である第 7 b 層と土壤化層である第 7 層からなる。

第 7 層 Y = -38,790 ~ 797 においては 5Y4/1 灰 シルト混じり細砂～中砂を主体とし極粗砂～礫を含み、Y = -38,812 ~ 834 においては 5Y4/1 灰 砂質シルト、Y = -38,836 ~ 857 においては 5Y3/2 オリーブ黒 細砂混じりシルトからなる。上層からの削平を受け、全体的に遺存状態は良くない。層厚は最も厚い地点において 0.13 m を測る。下層である第 7 b 層から第 8 b 層の表面が弱く土壤化したものと思われる。本層の上面において溝および擬似畦畔を検出した。

第 7 b 層 7.5GY5/1 緑灰 砂質シルト。Y = -38,787 以東において確認した。層厚は最も厚い地点において 0.35 m を測る。後述する下層確認調査の成果から、旧流路の埋積物と考えられる。

第 8 層 自然堆積層である第 8 b 層と土壤化層である第 8 層からなる。

第 8 層 Y = -38,785 ~ 791 においては 2.5Y2/1 黒 シルトを主体とし、極粗砂～礫を含み、Y = -38,791 ~ 803 においては 7.5Y4/1 灰 細砂混じりシルトを主体とし、粗砂～礫を含む。部分的な確認であるため層厚は不明である。下層確認調査における出土遺物から縄文時代晩期以降に形成された湿地状の環境下における堆積層と思われる。

第 8 b 層 2.5GY5/1 オリーブ灰 砂質シルト。部分的な確認であるため層厚は不明である。縄文時代晩期以前の自然堆積層と思われる。

第2項 検出された遺構と遺物

第4面

古代末から中世の耕作土層である第3層を除去した面を第4面として調査を実施した。本調査区では第8b層が東から西に向けて緩やかに高くなる地形を呈する。このため、 $Y = -38,842$ 以西においては上層の耕作による削平を受け第4層が残存していなかった。第4層残存範囲における第4面の高さは15.2～15.3mで東端部がわずかに低い、ほぼ平坦な地形を呈する。第4面では調査区東端部においてブロック土の堆積を、西半部において土坑や落ち込み、擬似畦畔を検出した。なお、 $Y = -38,842$ 以西においては第5-1層もしくは第8b層の上面における遺構検出となったが、遺構埋土の様相などから当該地区において検出した遺構は本遺構面に帰属する蓋然性が高いと判断した。

1. 擬似畦畔

10005 擬似畦畔 (図130、図版60)

10 N 9 i・10 iにおいて検出した。調査区西端部から8.4mほどは東西方向を指向し、以東はやや南に振れ、西北西-東南東を指向する擬似畦畔である。幅は上端0.5～0.7m、下端1.1～1.3m、長さは13.4m、高さは0.01～0.09mを測る。規模から幹線畦畔の痕跡と思われるが、派生する擬似畦畔は検出できなかった。第3層直下における検出であることに加え、上述のとおり本遺構周辺においては第4層以下が削平され残存していないことから、第3層形成初期段階の水田耕作に伴う畦畔の痕跡である蓋然性が高いと考えられる。

2. 土坑

10003 土坑 (図131、図版60)

10 N 7 iにおいて検出した。平面は南北に長い不整な楕円形を呈し、北端の一部は側溝掘削において破壊してしまった。長径は残存部において0.81m、短径0.62m、深さ0.14mを測る。埋

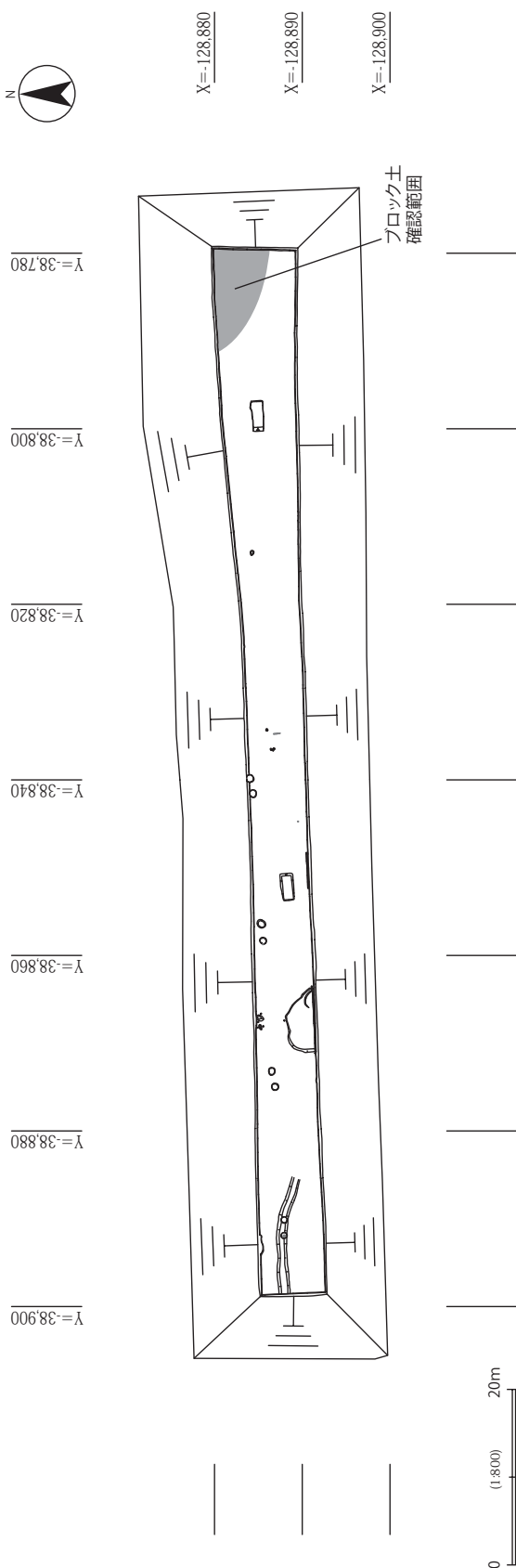


図129 第4面 平面

土は第3層と類似する 5Y4/1 灰 細砂混じり粘質シルトを主体とし 2.5GY3/1 暗オリーブ灰 粘質シルトのブロックをわずかに含む。遺物は出土していないため詳細な時期は不明である。

3. 落ち込み、凹み

10001 落ち込み (図 131、図版 60)

10003 土坑の南において検出した。南側は調査区外へと広がるため全形は不明であるが、検出範囲においては不整な円形を呈する。確認しえた限りでは、長径 7.18 m、短径 3.27 m、深さ 0.25 m を測る。埋土は第3層と類似する 5Y4/1 灰 細砂混じり粘質シルトを主体とし、細礫～礫を含み、鉄分が沈着する。遺物は古代の土師器と思われる破片が出土しているが図化できるものはなく、詳細な時期は不明である。

10002 凹み (図 131、図版 60)

10003 土坑の西に隣接する。平面は東西に長い楕円形を呈し、長径 0.60 m、短径 0.16 m、深さ 0.11 m を測る。埋土は第3層と類似する 5Y4/1 灰 細砂混じり粘質シルトを主体とし 2.5GY3/1 暗オ

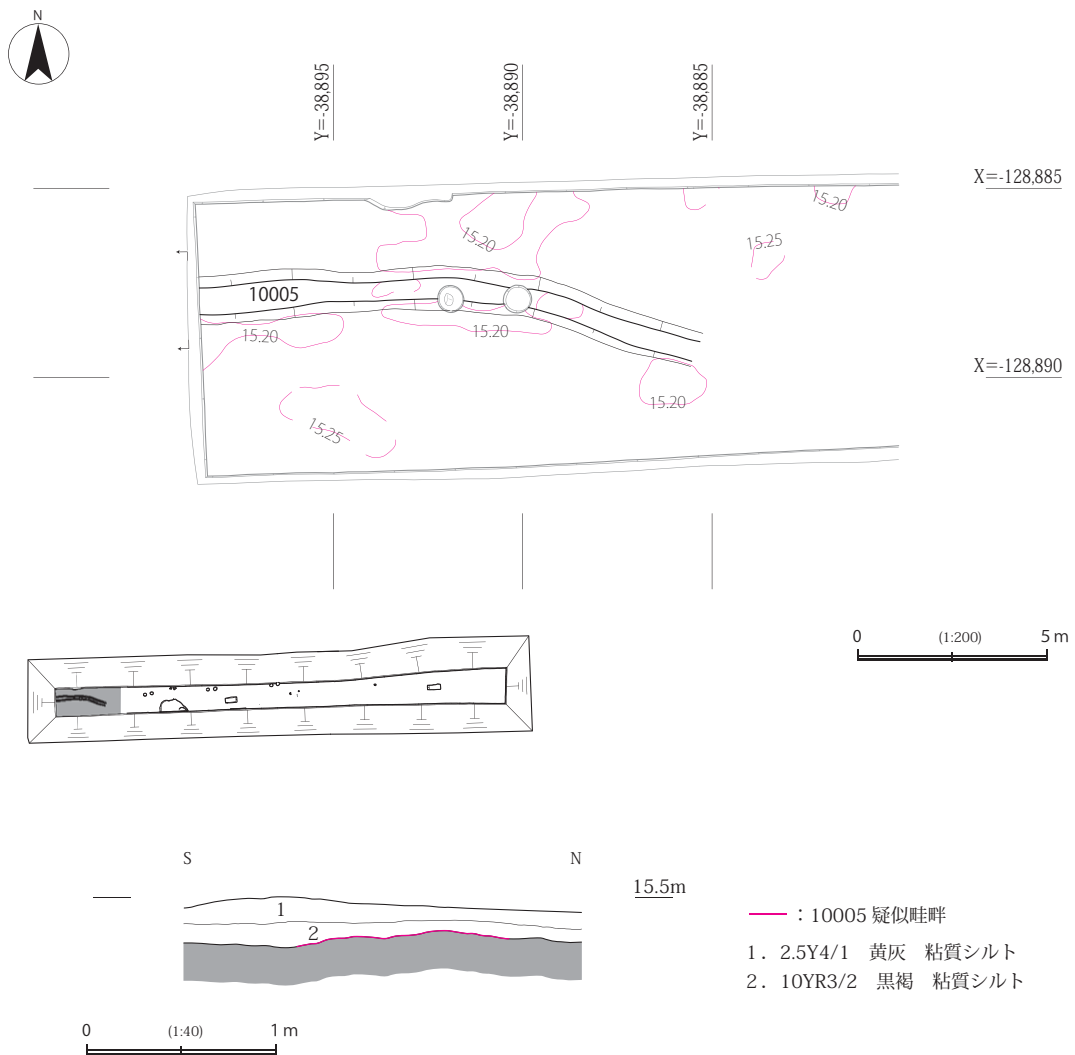


図 130 10005 擬似畦畔 平・断面

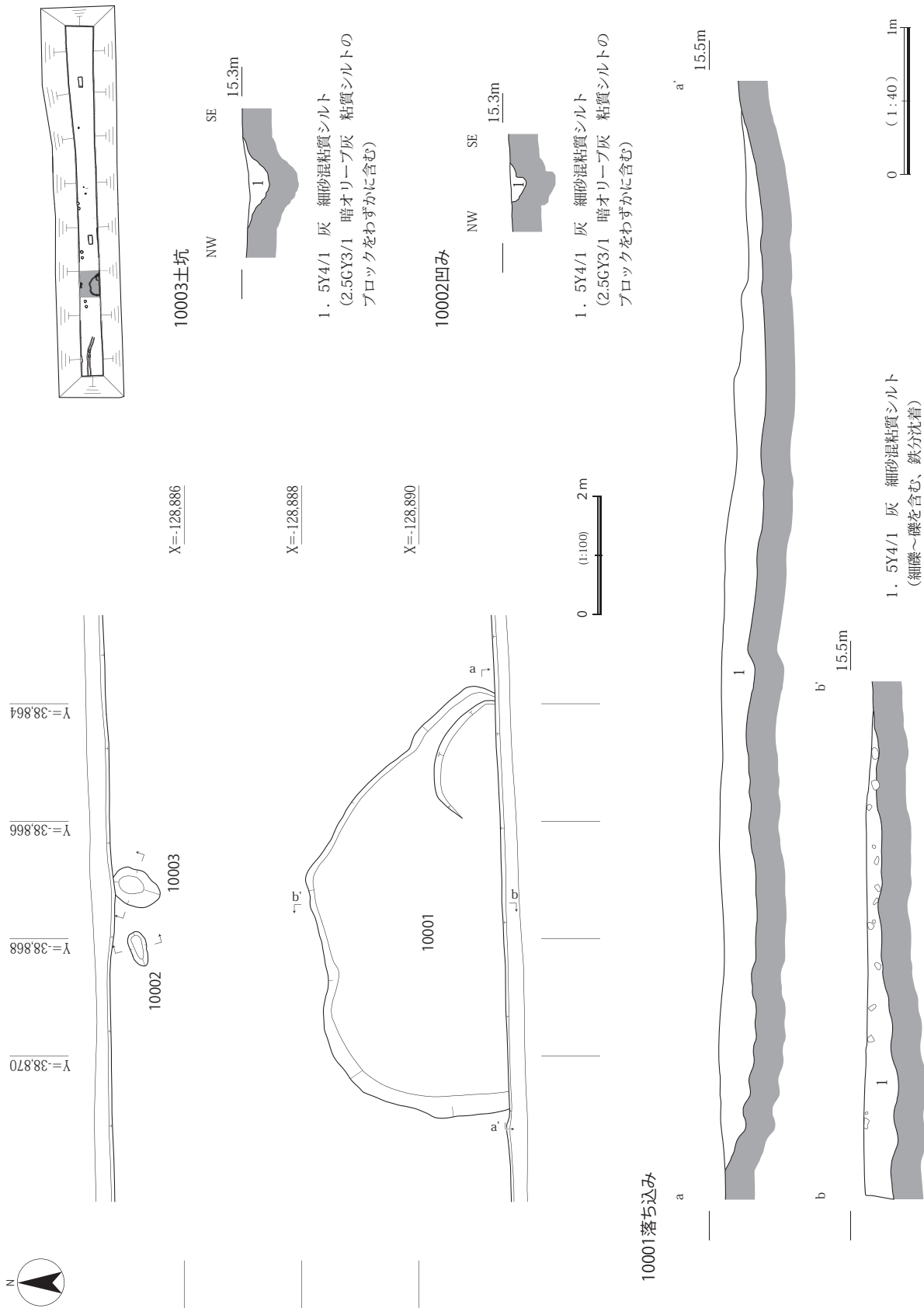


図 131 10002 凹み、10003 土坑、10001 落ち込み 平・断面

リープ灰 粘質シルトのブロックをわずかに含む。平・断面の形状から人為によるものではないと判断した。遺物は出土していないため詳細な時期は不明である。

5. ブロック土

ブロック土 (図 129・132、図版 59・67・68)

調査区東端部においては、第3層を除去した段階で 5GY5/1 オリーブ灰シルトと 2.5Y2/1 黒砂質シルト、礫からなるブロック土が部分的に堆積している状況が認められた。これらのブロック土は検出された範囲においては概ね円弧を描くように認められたことから、古墳などの盛土造成を伴う遺構である可能性も考慮しながら調査を実施したが、周辺の地形や土層断面の観察などから、窪地状の低地を平坦化させるための造成土と判断した。

ブロック土から出土した遺物を図 132 に掲載した。351・352 は土師器である。351 は杯の口縁部片である。外反気味に広がる体部から緩やかな稜を経て内湾する口縁部に連続し、口縁端部は内面

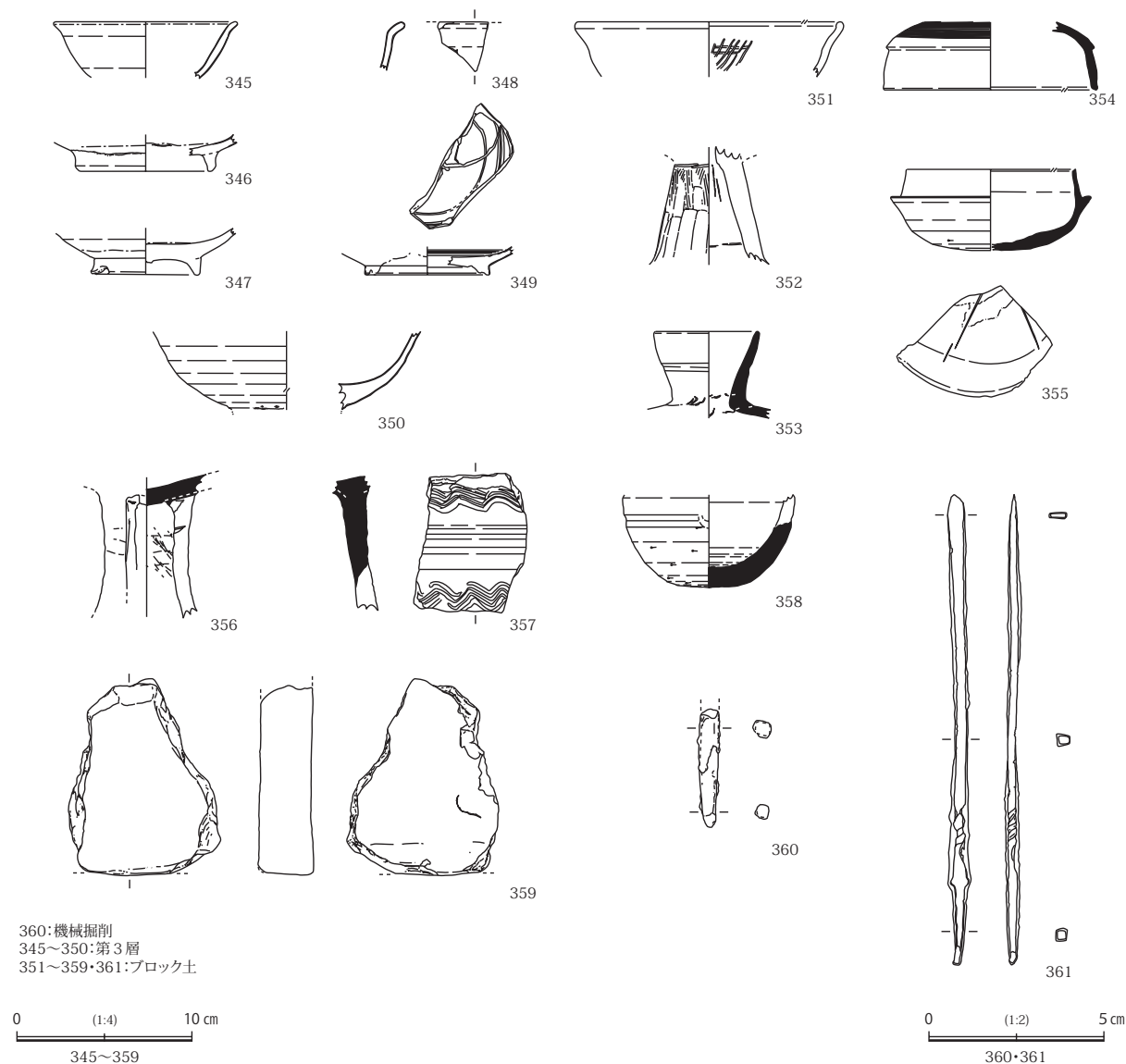


図 132 第3層、ブロック土 出土遺物

側に肥厚させる。内面には横方向の後、斜方向の暗文を入れる。平城宮Ⅲに比定され、8世紀中葉の所産と考えられる。352は高杯の脚部である。外面は粗いケズリにより整形され、杯部との接合部付近のみ縦・斜め方向の粗雑なハケを施す。杯部との境界には横位に施されたヘラミガキが認められる。内面はナデを施すが粗く、工具の痕跡が明瞭に残る。

353～358は須恵器である。353は平瓶の口縁部と考えられる。外方へ開き、口径は5.8cmを測る。中位には1条の凹線が認められる。頸部にはヘラ状の工具により刻まれたと思われる幅1mmほどの線刻が3条残る。なんらかの記号であった可能性もあるが、詳細は不明である。6世紀末から7世紀初頭頃の所産と考えられる。354は杯蓋である。口径は12.1cmを測る。天井部にはカキメがみられる。355は杯身である。口径8.6cm、器高4.6cmを測る。底部外面には3本の直線からなるヘラ記号が残る。354・355はいずれもTK23・47型式に比定されることから、古墳時代中期後葉に帰属すると考えられる。356は高杯もしくは脚付甕の脚部である。長方形の透孔が2辺に残存しており、その配置から本来は3方向の透孔であったと推察される。6世紀末から7世紀頃の所産か。357は器台の脚部片と思われる。大振りで粗雑な波状文が2条認められる。上端部には接合に伴うと思われる刻目が転写した痕跡がみられることから、脚部最上部の破片と考えられる。また、下端には透孔が辛うじて残存しており、波状文との角度から三角形の透孔であったと推測される。358は甕である。体部下半が残存しており、端部の様相から、上半部との接合部で折損したものと思われる。外面には1条の凹線と透孔が認められる。内面はナデを施すが粗く、器面の凹凸が顕著に残る。6世紀末から7世紀初頭の所産と考えられる。359は埴である。一方の端面を残すが、全体的に摩滅しており調整は不明である。

361は鉄鏝である。鏝身11.0cmを測る長頸式で、鏝身部の先端にのみ刃部を有する。頸部下端を握じり、茎との間に山形の関をつくり出す。全体が薄い鍔で覆われ一部を欠損するが、総じて残存状態は良好である²⁾。

ブロック土の母材は太田遺跡・太田廃寺跡2017-1調査区における第4層と第6層に酷似していることから、同調査区周辺において採土し、当地を埋め立てた可能性が高いと思われる。その時期は351から奈良時代中頃のことと思われる。また、出土遺物には古墳と同時期の土器や、時期は不明ながら須恵器の器台片が含まれることから、土の採取にあたって前述の古墳群を破壊している可能性も考えられる。

6. 機械掘削、第3層出土遺物

本章第1項で記したとおり、本調査においては第3層までを機械にて掘削しているが、第1～3層からも遺物の出土が認められ、可能な限り収集した。このうち第3層より出土した土器は概ね古代から中世末に帰属すると考えられるが、多くは細片であった。記述の順番が前後するが、ここでは機械掘削において出土した遺物のうち、特徴的なものについて記述する(図132、図版67)。

345～350は第3層掘削中に出土した。345は白磁皿である。口縁部は外反し、口径は10.2cmを測る。口縁端部は施釉後に釉を掻き取り、口禿げとする。大宰府編年Ⅸ類に比定され、13世紀後半から14世紀前半の所産と考えられる。348・350は青磁碗である。348は端部が強く外反する口縁部の破片資料である。細片のため詳細は不明であるが、14世紀の所産であろうか。350は体部片で、口縁部および高台は欠損する。腰が低く、内面見込みが広い器形を呈する。14世紀初頭から後半にかけての所産であろうか。346・347は灰釉陶器碗の底部片である。346の高台は断面三日月形を呈するが幅広

で、外側の稜が弱い。釉薬は体部内外面に施されるが高台および見込みには認められない。見込み内面には重ね焼きの痕跡が残る。347は三角形に近い断面形を呈する高台が付されており、一部に棒状工具による捲り上がりと思われる痕跡が認められる。346は9世紀後半、347は10世紀後半から11世紀初頭に位置付けられる。349は近江系緑釉陶器碗の底部片である。見込み内面に3条の圈線を廻らせ、高台端部には圈線状に廻らされた1条の沈線により段がつくられる。高台から見込み外面にかけては釉薬が一部黒く変色している。なお、見込み内面には弧を描くように1条の線刻が認められる。重複関係から圈線を巡らせた後に付いたものと考えられるが、内部にも釉薬がかかっていることから施釉以前のものであることが明らかである。しかしながら、圈線に比べ幅は一定せず、精緻さはみられないことから意図せずについた傷である可能性が高い。10世紀後半の所産と考えられる。

360は鉄釘である。先端部から胴部にかけて残存する。断面形は方形を呈する。出土層位を把握できておらず、帰属時期は不明である。

第6面

Y = -38,862 以東において確認された第5層を除去した、第6層上面を第6面として調査を実施した。第6面は西から東に向けて緩やかに下降する地形を呈する。高さは東端部において14.6 m、Y = -38,830 付近において15.1 m、第6層残存範囲の西端にあたるY = -38,860 付近において15.2 mを測る。本遺構面では調査区東端部において溝と畦畔状の高まり各1条を検出した。なお、高まりの西では第5層堆積後に形成された地形のたわみを検出した。このたわみは第4-2層を除去した段階で検出されたものであり、本来は第4-3面に帰属するものであるが、第4-3面では他に遺構が認められなかったことからここであわせて報告する。

1. たわみ

10006 たわみ (図 133 ~ 135、図版 61)

9 N - 9 i ・ 10 i において、第4-2層を除去した段階で検出した。上述のように本来は第4-3面に帰属すると考えられる。なお、図 134 に示した平面図は第6面におけるものであり、検出時に比して幾分規模が小さくなっている。予めご承知おきいただきたい。平面形は北においては溝状を呈するが、南に向けて不整に広がる。北半の溝状部は遺構の可能性も残るが、南半は人為的に掘削されたものではなく、自然の営為により形成されたものと思われる。

たわみ内および周辺においては他所では認められない土壌層と自然堆積層を確認しており、土壌層を第4-3層、自然堆積層を第4 b層とした。

第4-3層はシルトからなる第4-3-1層と粗砂~礫混じり砂質シルトからなる第4-3-2層に細分される。第4-3-2層の下部には粗砂や礫が認められることから、氾濫堆積後、一定期間安定した環境下において土壌化したものと考えられる。

第4 b層は植物遺体を含むシルト層と砂層の互層を一括した。いずれも自然堆積層と考えられ、小規模な氾濫と湿地状の堆積を繰り返していたものと考えられる。

10006 たわみが形成された要因について、今回の調査では明らかにすることはできなかった。しかしながら、検出された範囲は今回の調査区において最も地形が低くなる地点であり、かつ東からも地形が急激に落ち込むと考えられる。このため、降雨時などは水が集中する地であったと想定されることから、流水作用により当時の地表面が下刻された可能性が考えられる。

10006 たわみ内および周辺からは土器、木製品が出土した（図 135）。

362 は須恵器杯蓋である。調査区南辺の側溝掘削中に出土したものであり、正確な層位は確認できなかったが、出土地点から 10006 たわみに含まれていたと考えられる。口径は 13.6cm を測る。口縁部外面には傷や擦痕、接合痕が残るなど、調整は粗い。TK43 型式に比定され、6 世紀後半に位置付けられる。363 は須恵器杯身である。第 4-3-2 層より出土した。口径は 12.2cm を測る。TK10 型式に比定されることから、6 世紀中頃の所産と考えられる。364・365 は第 4 b 層より出土した。364 は器種不明の土師器片である。外面には幅 0.2cm、長さ 4cm ほどの鋭利で深い切り込みを連続して施している。また、一方の端部の状況から透孔が穿たれていたと思われる。内面は摩滅のため不明瞭であるが、斜方向のヘラミガキが施されていると考えられる。内面調整から高杯状の器形を想定し図化した。器種不明であるため誤認している可能性もある。365 は須恵器杯身である。図 133 における×印で示した地点の第 4 b 層から出土した（図版 60-2）。口径 11cm、器高 4.5cm を測る。TK23・47 型式に比定されることから 5 世紀後葉の年代を与えることができる。369 は第 4 b 層より出土した木製品である。一方の側辺が湾曲する細長い板状を呈し、端部を緩やかに細くして把手をつくり出す。他方は欠損するため不明である。把手の形状は紡織具の布送具に類似するが³⁾、仮に布送具と想定した場合、身部の断

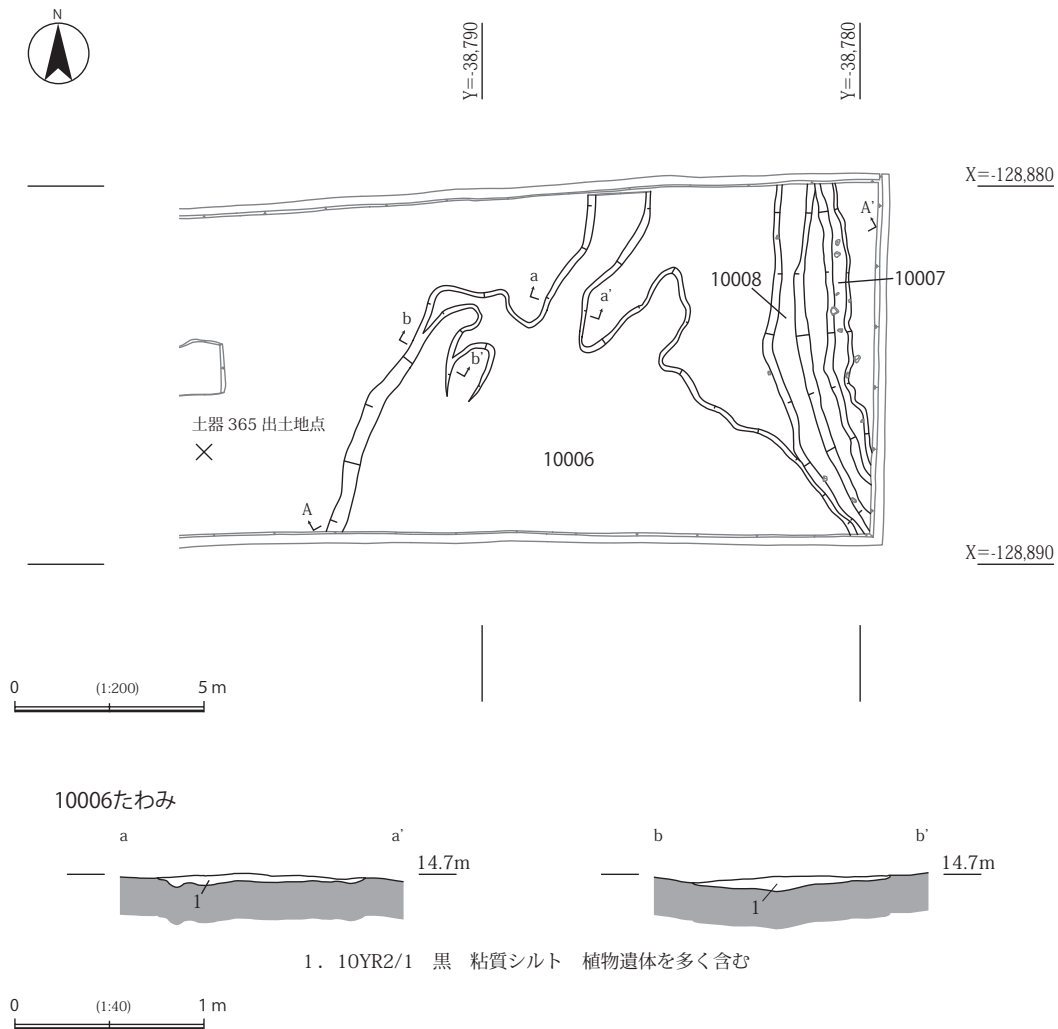


図 133 第 6 面 平面、10006 たわみ断面

面は厚みをもった長方形を呈しており、側辺に加工が認められないことから未成品と思われる。あるいは異なる機能を有する木製品である可能性も考えられる。

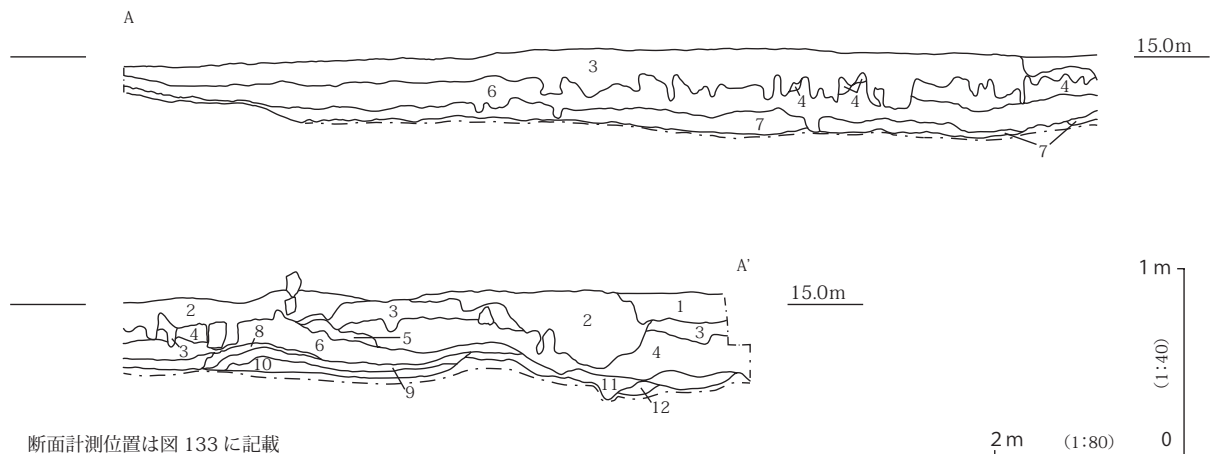
以上の遺物のうち須恵器に着目すると古墳時代中期後葉から後期後半と時期幅を有するが、後述するように第5層からも古墳時代後期に帰属する土器が出土していることから、10006 たわみは古墳時代後期以降に形成されたと考えられる

2. 溝

10007 溝 (図 133・136・137・140、図版 60・61・66)

9N-8i・9iにおいて検出した、南北方向を指向する溝である。幅は0.48～0.81mを測る。検出面からの深さは0.05～0.09mと浅いが、埋土直上に第5層が堆積していることから、削平を受けたと考えられる。埋土は北と南で概ね同様であるが、南では第7層が母材と考えられるブロック土を含む。また、南に比して北の方が砂を多く含む。

遺物は、検出範囲北側において礫や木片などとともに弥生土器の甕が出土しているほか、土器の破片が出土しており、3点を図示した。371は弥生土器甕である。体部は丸みを帯び、口縁部は受口状を呈する。外面は左下がりのタタキの後部分的にハケを施し、頸部直下には沈線状に工具の跡が残る。体部内面はハケで部分的にナデを施す。外面には全体的に煤が付着する。372は壺底部片と思われる。外面に煤が付着しており二次的に被熱したものと思われる。373は甕底部片である。内外面ともにハケを施し、外面には煤が付着する。以上の遺物のうち、371から本遺構は弥生時代後期後半に帰属するものと考えられる。



断面計測位置は図 133 に記載

- | | |
|---|--|
| 1. 2.5Y2/1 黒 砂質シルト (極粗砂～礫・岩を含む)
[ブロック土] | 7. 2.5Y2/1 黒 細砂混じりシルト (2.5Y3/1 黒褐 シルト質
細砂のブロックが混じる) [第4 b層相当] |
| 2. 5GY5/1 オリーブ灰 シルトと 2.5GY2/1 黒 砂質シルト
のブロック (礫を含む) [ブロック土] | 8. 10YR3/1 黒褐 シルトと細砂 (極粗砂をわずかに含む)
[第4 b層相当] |
| 3. 10YR2/1 黒 砂質シルト (極粗砂～礫を多く含む)
[第4-2層] | 9. 10YR2/1 黒 中砂混じりシルト (植物遺体を含む)
[第4 b層相当] |
| 4. 2.5Y2/1 黒 シルト [第4-3-1層] | 10. 10YR3/1 黒褐 シルトと細砂 (5GY5/1 オリーブ灰 シル
トの細かいブロックと植物遺体を含む) [第4 b層相当] |
| 5. 10YR3/1 黒褐 粗砂～礫混じり砂質シルト (層下部に粗砂
～礫を含む) [第4-3-2層] | 11. 2.5Y2/1 黒 粘質シルト [第5-1層] |
| 6. 10YR2/1 黒 粘質シルト (植物遺体を多く含む) [第4 b層] | 12. 10YR3/1 黒褐 中砂～礫混じり粘質シルト [10007 溝埋土] |

図 134 10006 たわみ 断面

3. 高まり

10008 高まり (図 133・136・140、図版 60・61)

10007 溝の西側に並行する高まりである。検出した幅は上端において 0.15～0.67 m、下端において 0.77～1.26 m、高さは 0.14 m を測る。南端部の西側下端は 10006 たわみにより削平を受ける。調査の結果、 $X = -128,865$ 以北においては後述する 10010 疑似畦畔を利用し、以南においては盛土により造成されたことが明らかとなった。なお、本遺構については、調査当初から水田畦畔の可能性を想定していたが、明確に水田であることを証することができなかつたため高まりとしている。しかしながら、後述する第 7 面において疑似畦畔が検出されたことに加え、詳細は第 6 章で述べるが、自然科学分析を実施したところ、第 6 層は水田作土層である可能性が高いとの結果が得られたことから、10007 溝とともに第 6 面における水田耕作に関連する遺構である可能性が高まった。

4. 第 5 層出土遺物

第 5 層からは弥生土器や土師器、須恵器などが出土した。多くは細片であったが、須恵器 3 点と木製品 1 点を図示しえた (図 135、図版 68)。

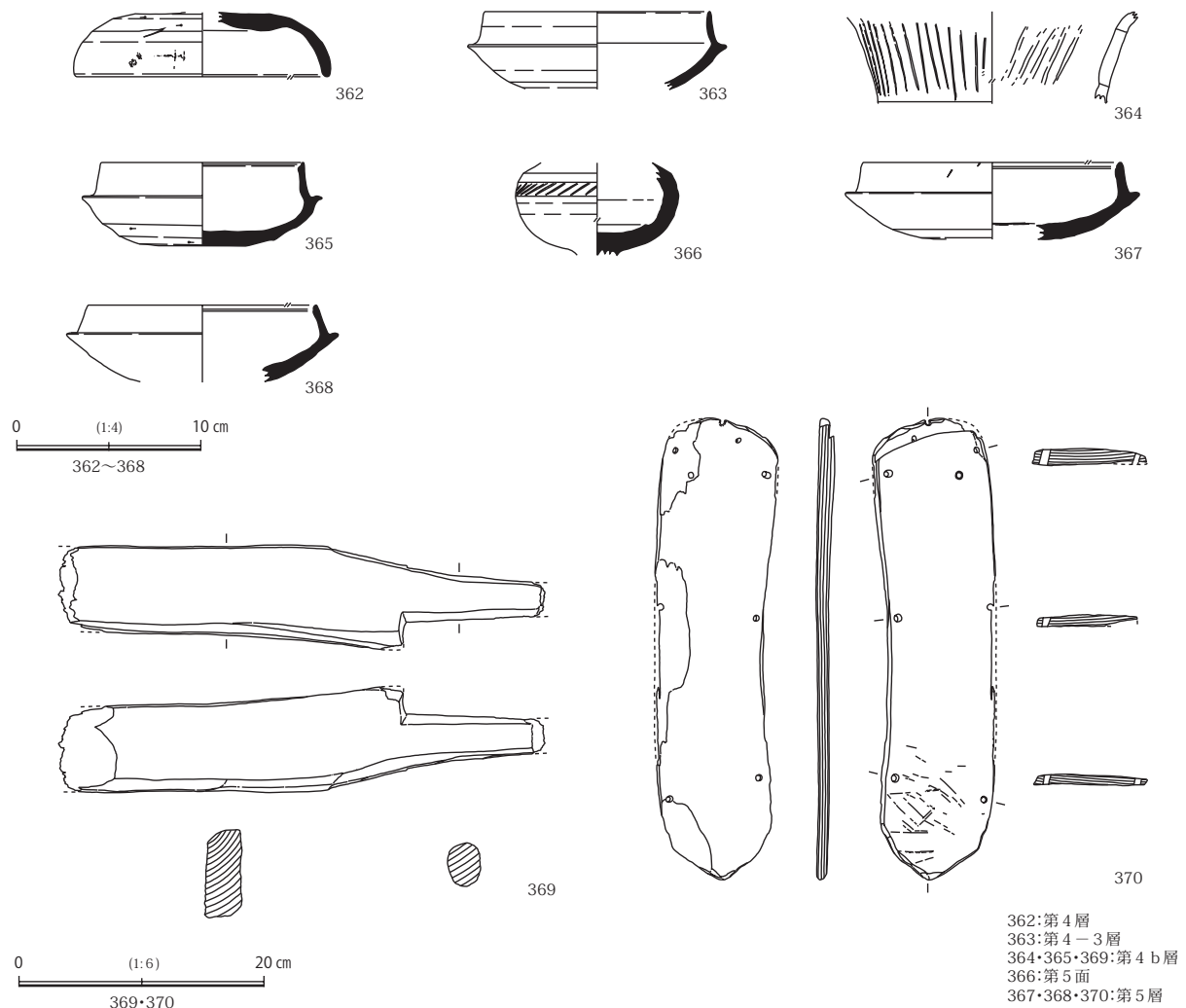


図 135 10006 たわみ・第 5 層 出土遺物

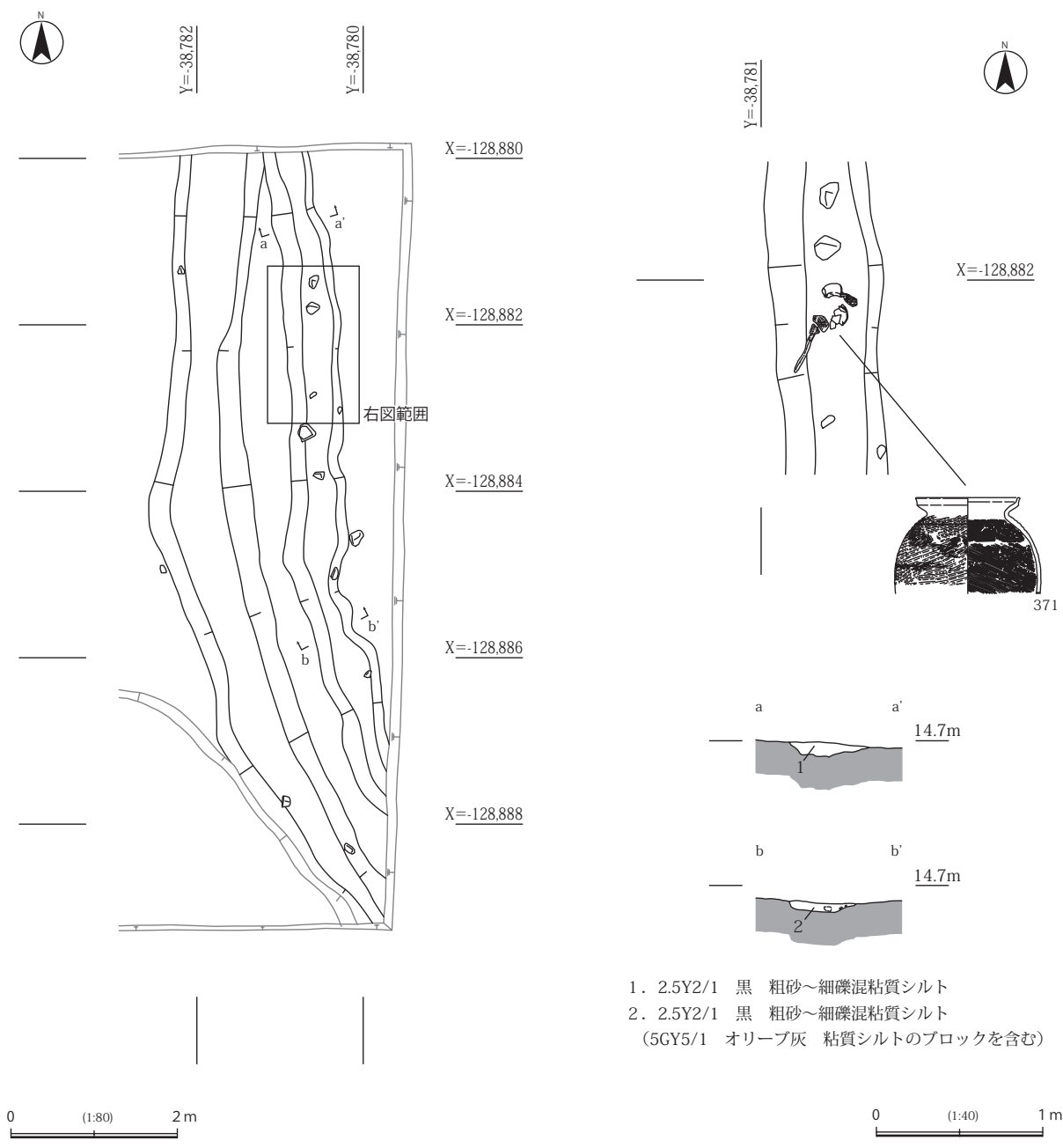


図 136 10007 溝・10008 高まり 平面、10007 溝 遺物出土状況、断面

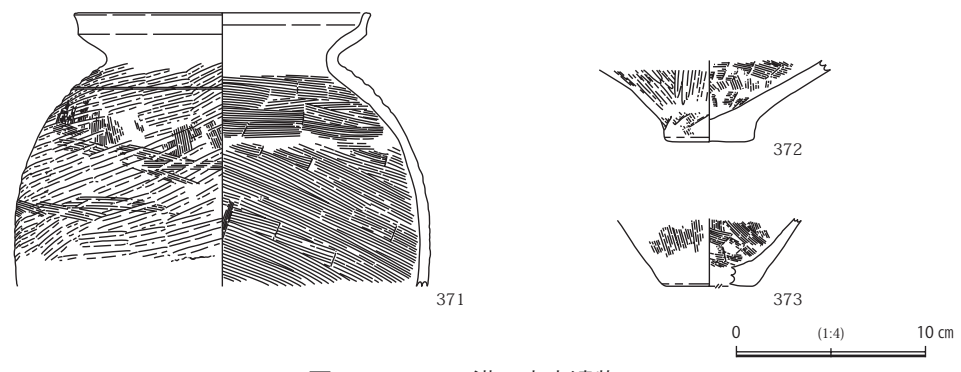


図 137 10007 溝 出土遺物

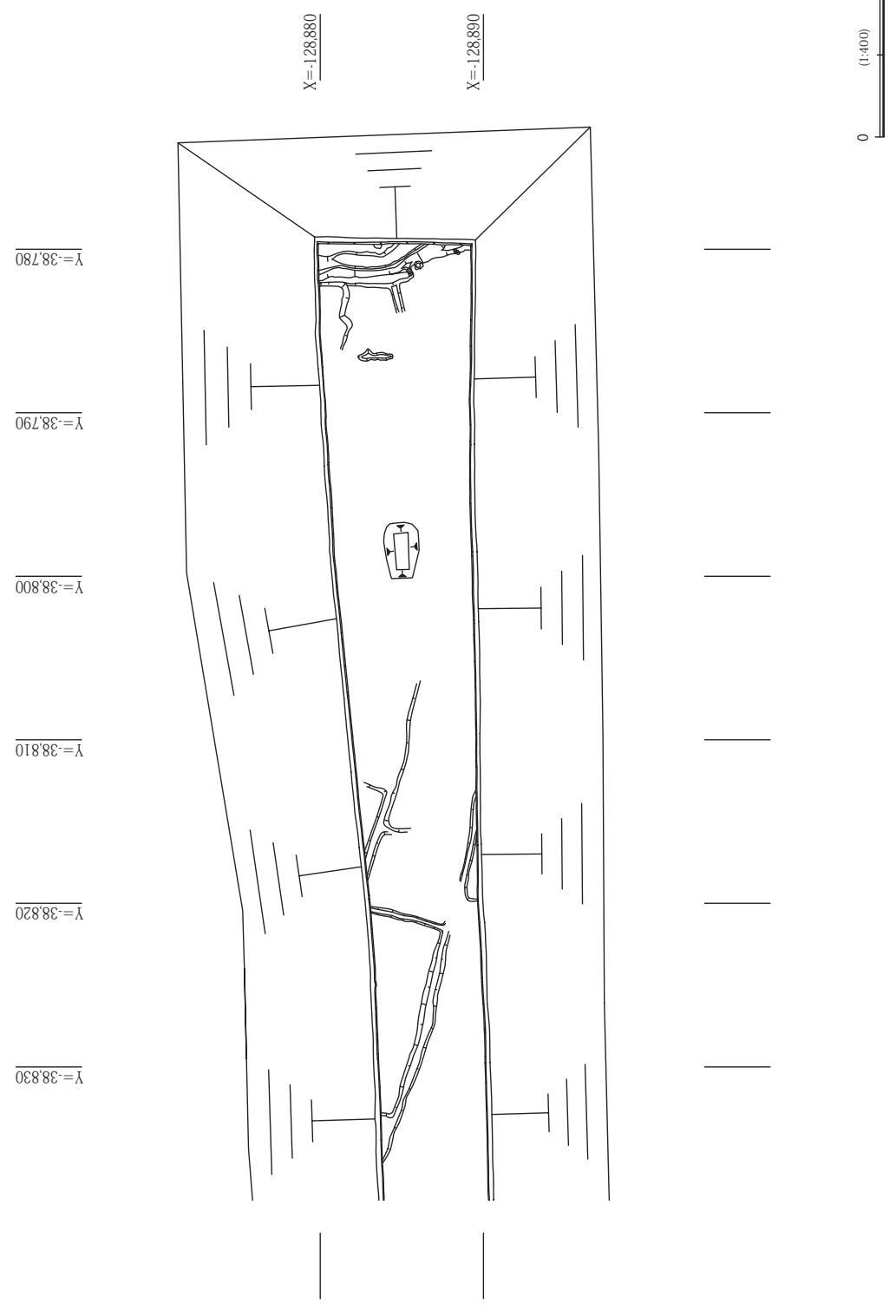


图 138 第7面 平面

366～368は須恵器である。366は調査区西部にあたる9N-8iにおいて第5面検出中に出土した。脚付甕もしくは長頸壺の体部片であり、口縁部および脚部は欠損する。中位には列点文が施される。367・368は杯身の破片資料である。口径は367が12.3cm、368が14.0cmに復元される。

370は緩やかに湾曲する平面形を呈する板状の木製品である。上端と側辺の一部を欠損するが、上方中央に3箇所、両側辺に各3箇所ずつ、計9孔が認められる。形状から田下駄と思われる。

以上の遺物のうち須恵器の時期は367が最も古く6世紀中頃から後半、368が6世紀後半、366がやや新しく6世紀末から7世紀初頭に位置付けられる。しかしながら、366は出土状況から、上層からの混入である可能性が高いと考えられる。また、第5層は10007溝が埋没した後に形成されていることが土層断面の観察から読み取れる。以上から、第5層は古墳時代前期から古墳時代後期後半にかけて堆積したと考えたい。

第7面

Y=-38,861以東において残存していた第6層を除去することにより検出された第7～8b層上面を第7面として調査を実施した。第7面は西から東に向けて緩やかに下降し、Y=-38,785付近が最も低く、以東では緩やかに上昇する地形を呈する。高さは調査区東端部において14.6m、Y=-38,785付近において14.2m、第7層残存範囲の西端にあたるY=-38,860付近において15.2mを測る。本遺構面では調査区東端部およびY=-38,805～835において擬似畦畔を検出したことから水田が営まれていたと判断した。その他の遺構としては、溝や土坑、ピットなどを検出している。

1. 水田

水田1

調査区東端部において検出した水田痕跡である。10010・10016擬似畦畔、10009溝、10011水口から構成される。以下、各遺構について報告する。

10010 擬似畦畔 (図139、図版62・63)

10009溝北西部において検出した、南北方向を指向する疑似畦畔である。幅は上端において0.30～0.54mを測る。Y=-38,865付近で収束するが、畦畔としての機能を考慮すると、さらに南へと畦畔が続いていたと考えられる。恐らくは上面において検出した10008高まりのような盛土による畦畔が造成されていたものと推察される。なお、南側先端部においては後述する10011水口を、先端よりやや北側においては西へ派生する10016擬似畦畔を検出している。

10016 擬似畦畔 (図139、図版62・63)

10010擬似畦畔から派生する、東西方向を指向する疑似畦畔である。1.64mほど残存していたが、その先は10006たわみにより削平されていた。上端幅は0.20～0.25m、下端幅は0.50～0.55m、高さは0.02mを測る。

10009 溝 (図139～142、図版62～64・66)

9N-8i・9iにおいて検出した。北側では南北方向を指向するが、X=-128,884付近において緩やかに弧を描くように南東へ方向を変え、調査区外へと延びる。北西側では後述する10010擬似畦畔と接する。検出しえた限りでは、幅は1.24～1.64m、深さは0.23～0.28mを測る。埋土は4層に細分されるが、このうち最下層は第6層と第7b層を母材としたブロック土であり、人為的に埋め戻さ

れた可能性がある。その後、一定期間開放された状態のもと緩やかな堆積と小規模な氾濫堆積により埋没したと考えられる。

図 142 は 10009 溝から出土した遺物である。

374 ~ 377 は壺である。374 はほぼ完全な状態を保つ広口壺である。胴部が強く張る形態を呈し、頸部に 7 状の沈線が認められる。外面調整は、口縁部から頸部および底部はタテハケ、胴部はタテハケの後ヨコハケを施し、その後横方向の粗いヘラミガキを施す。内面は口縁部周辺にヨコハケを施す以外はナデで仕上げる。胴部が強く張る形態はやや古い要素を残すが、ヘラミガキが粗いなどの新しい要素

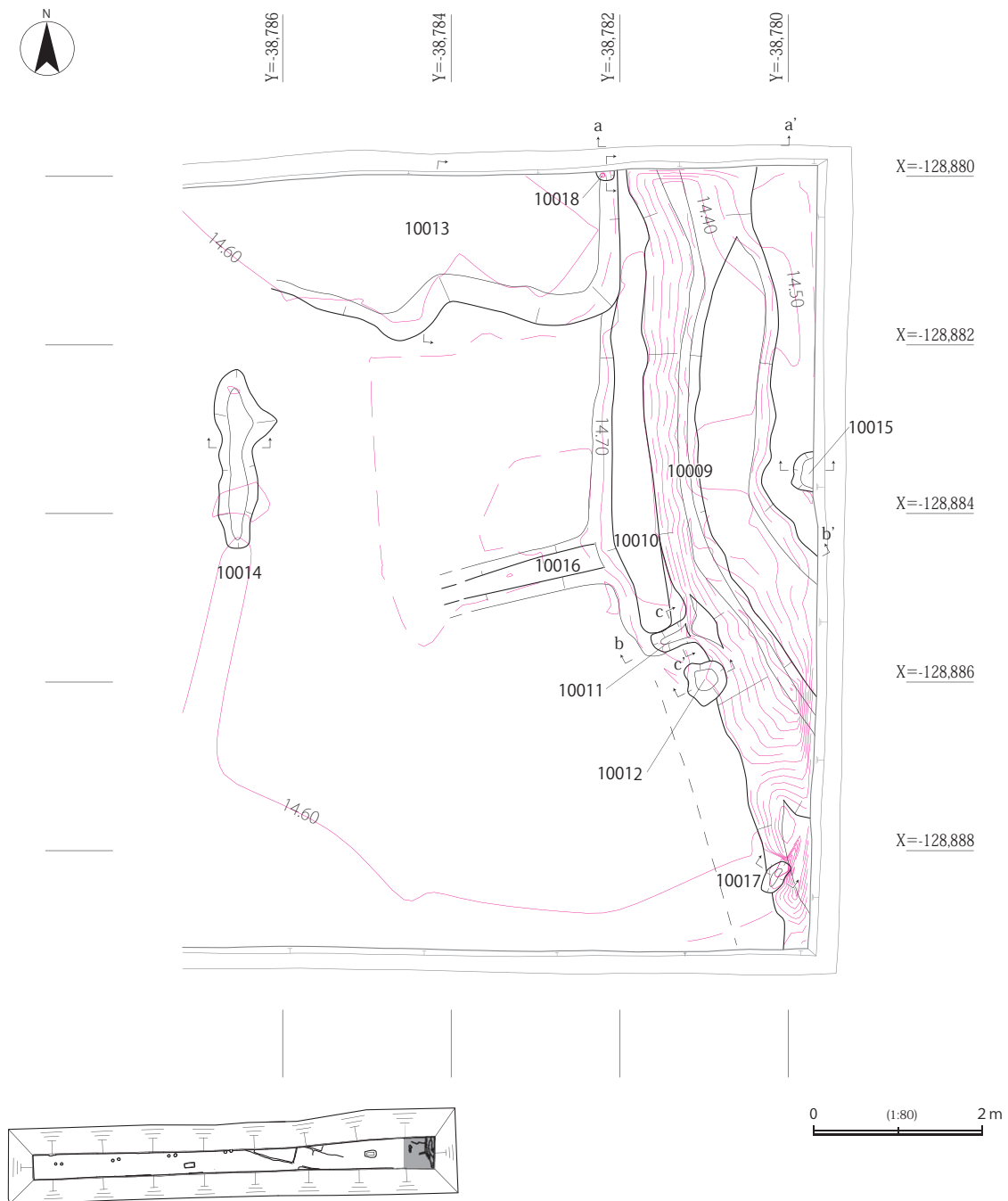
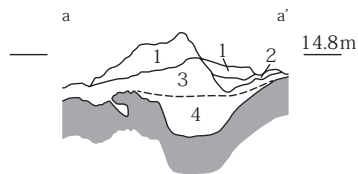


図 139 水田1 平面

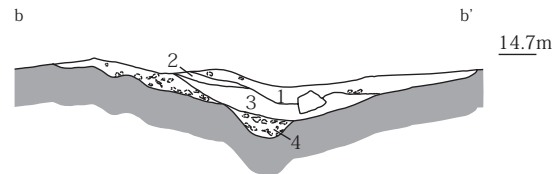
も認められることから、弥生時代前期末に位置付けられると考える。375は細頸壺の頸部である。外面は縦方向の密なヘラミガキを施し、口縁部のみヨコナデを施す。内面は下半に縦方向の粗いヘラミガキを施すが、上半は横方向のハケの後ナデで仕上げる。口縁端部外面には黒斑がみられる。体部は失われているが、口縁部の形態から吉備において認められる算盤珠状の扁平で胴部が強く張る器形を呈していたと思われる。しかしながら、胎土は他の土器と同様であることから当地において製作された可能性が高い。弥生時代後期前半の所産と考えられる。376は広口壺の口縁部である。外方へ屈曲気味に広がり、端部はナデにより直立する面を作る。外面調整はタテハケの後横方向のヘラミガキ、端部内面も横方向のヘラミガキを施すが、摩滅のため不明瞭である。377は加飾広口壺である。口縁端部に粘土

10007・10009溝・10008高まり



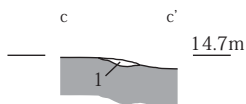
1. 2.5Y2/1 黒 細砂混シルト [第5層]
2. 2.5Y2/1 黒 粗砂～細礫混じり粘質シルト [10007 溝埋土]
3. 2.5Y3/1 黒褐 中砂～粗砂混じりシルトと 7.5GY5/1 緑灰 砂質シルトのブロック土 [第6層]
4. 7.5Y2/1 黒 シルトと 2.5GY4/1 暗オリブ灰 シルトのブロック土 [10009 溝埋土]

10009溝・10011水口



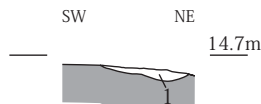
1. 2.5Y2/1 黒 細砂混じりシルト (粗砂～礫と 7.5Y2/1 黒 シルトのブロック・巨礫を含む) [第6層]
2. 2.5Y6/2 灰黄 中砂～細礫
3. 2.5Y2/1 黒 シルト (植物遺体を含む)
4. 7.5Y2/1 黒 シルトと 2.5GY4/1 暗オリブ灰 シルトのブロック土

10011水口



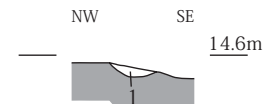
1. 7.5Y2/1 黒 シルトと 2.5GY4/1 暗オリブ灰 シルトのブロック土

10012土坑



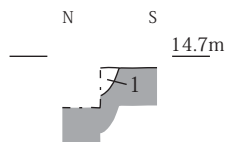
1. 2.5Y3/1 黒褐 中砂～粗砂混シルトと 7.5GY5/1 緑灰 砂質シルトのブロック

10017ピット



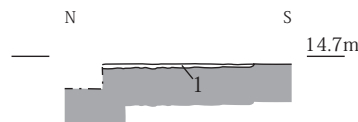
1. 2.5Y3/1 黒褐 中砂～粗砂混シルトと 7.5GY5/1 緑灰 砂質シルトのブロック

10018ピット



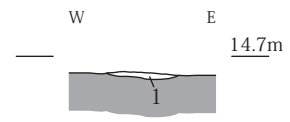
1. 2.5Y2/1 黒 粘質シルト (7.5GY5/1 緑灰 砂質シルトの細かいブロックをわずかに含む)

10013凹み



1. 2.5Y3/1 黒褐 中砂～粗砂混シルトと 7.5GY5/1 緑灰 砂質シルトのブロック

10014凹み



1. 2.5Y3/1 黒褐 中砂～粗砂混シルトと 7.5GY5/1 緑灰 砂質シルトのブロック

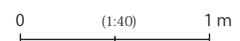


図 140 10007・10009 溝、10008 高まり、10011 水口、10012 土坑、10017・10018 ピット、10013・10014 凹み 断面

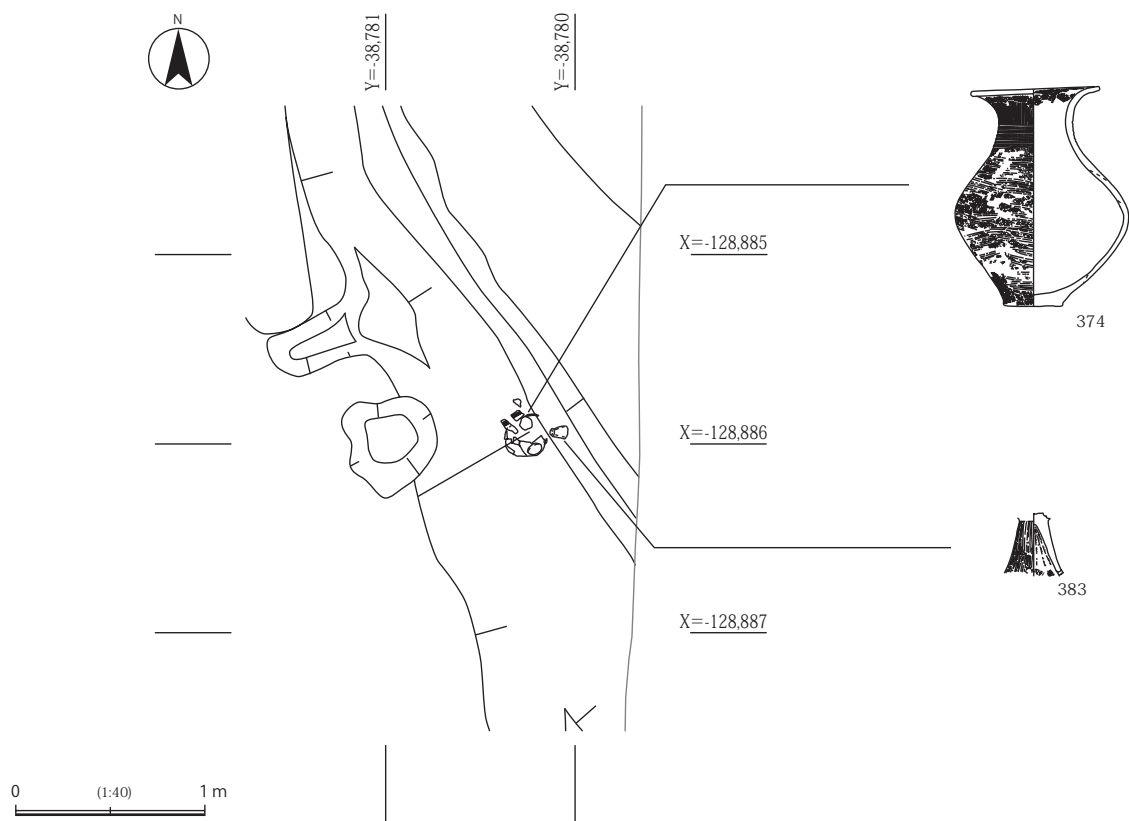


图 141 10009 溝 遺物出土狀況

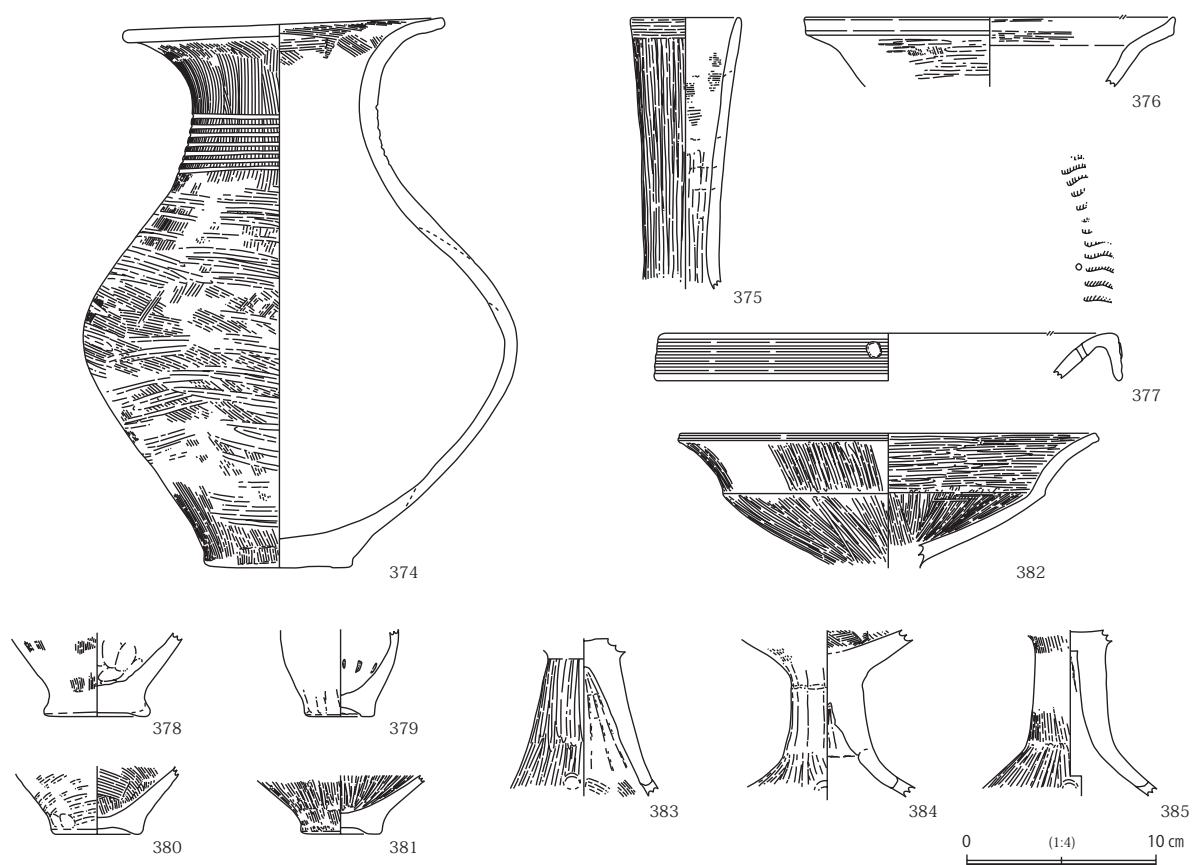


图 142 10009 溝 出土遺物

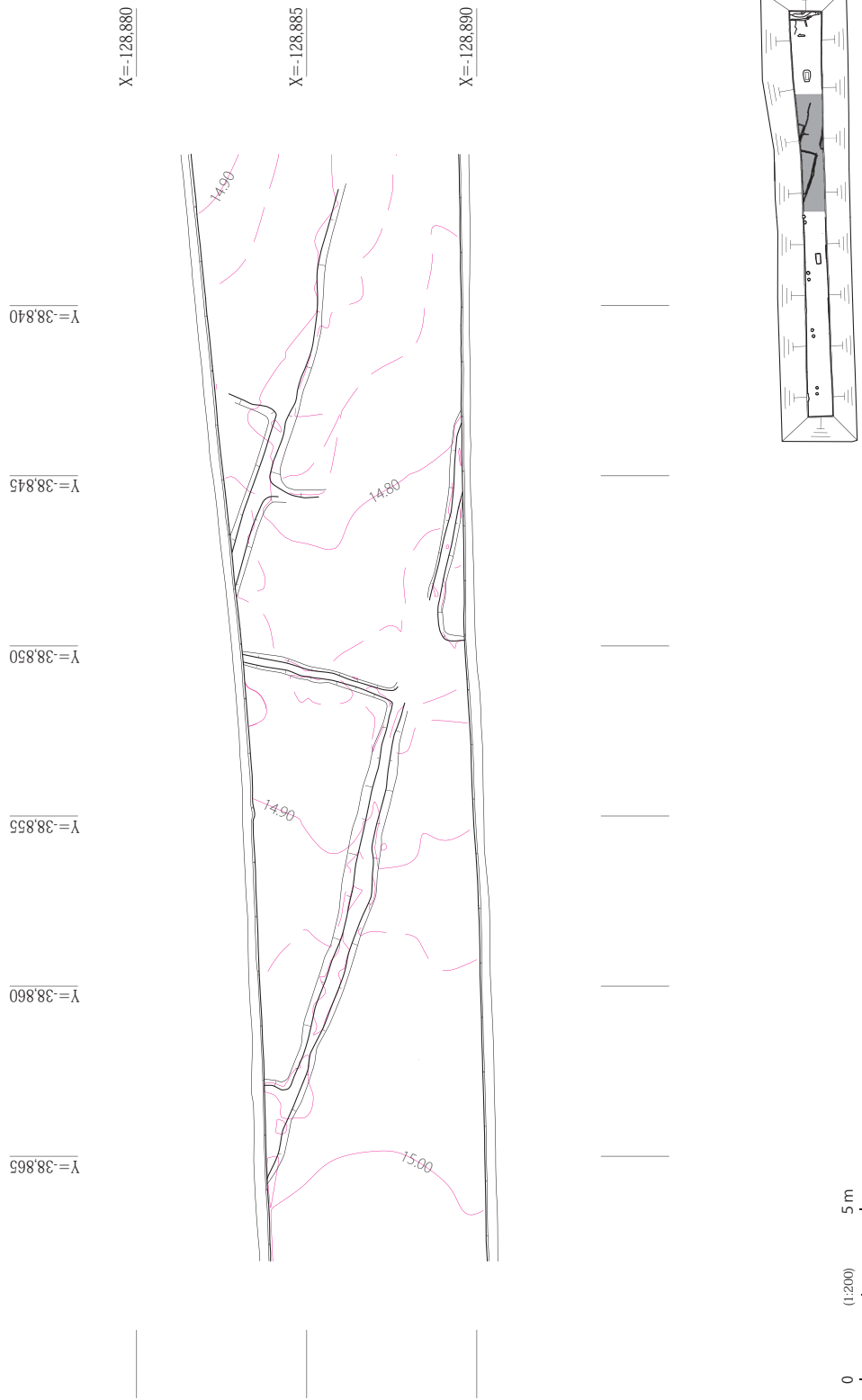


图 143 水田2 平面

帯を付加して拡張し、4条からなる凹線文を刻んだのち円形浮文を付す。内面には口縁に沿うように列点文を施す。列点文の内側には小さな穿孔が1箇所残存するが、小片であるため全体の構図およびその意図するところは不明である。弥生時代後期前半の所産と思われる。

378～381は底部片である。378・380は甕の底部である。378は底端部に粘土紐を貼り付けて拡張している。外面は煤の付着および表面剥離のため不明瞭であるが、タテハケを施しておりタタキ目は認められない。内面はナデで仕上げるが、底付近では指頭圧痕が残る。全面に煤が付着する。380の外面はタタキ目を残し、底部付近には指頭圧痕が認められる。内面はハケで仕上げる。外面には煤が付着する。379は小型の鉢と思われる。体部はさほど広がらずに頸部へ続くものと思われる。調整は内外面ともにナデのみで仕上げしており、内面には成形時の工具痕が残る。なお、体部折損部は口縁端部状を呈しているが粘土紐積上単位において剥離したものと思われる。381は壺の底部で、外面はハケの後縦位のヘラミガキ、内面にもヘラミガキを施す。外面には黒斑が認められ、底部外面中央は窪む。

382～385は高杯である。382は口縁部が外反する皿形杯部を有する高杯である。口縁部のうち下縁部は内外面ともに縦方向に密なヘラミガキを施す。上縁部は内面が横方向に密なヘラミガキを施す一方、外面はおおよそ等間隔に幅5cmほどの縦方向のヘラミガキを施している。確認しうる限りにおいては、上縁外面を6分割しているようである。383は374と共に出土した高杯の脚部である。裾部に向けて緩やかに開き、4方向の円形透孔を穿つ。外面調整は密なヘラミガキ、内面は裾周辺にハケが施される。384は杯部から脚部にかけて残存する。脚部裾には円形の透孔が1箇所残存しているが、本来は4方向に穿たれていたものと考えられる。摩滅のため不明瞭であるが、脚部裾にヘラミガキを施す一方で、外面では杯部と脚部の境界に接合時のものであろうかヘラケズリ状の痕跡を、内面では粘土紐の接合痕を残すなど、調整はやや粗い。杯部内面全体と脚部の一部には黒斑が認められる。385は裾部が屈曲して開く脚部である。4方向に円形の透孔が認められるが、そのうち一対は中軸からややずれた位置に穿たれている。外面柱状部はタテハケの後ナデ、裾部は従位のヘラミガキを施す。内面は全体にナデで仕上げている。

以上の土器のうち、374は弥生時代前期後半と他と大きく時期を異にすることから混入したものと考えたい。それ以外では375・377・378がやや古く、弥生時代後期前半の様相を示すが、それ以外は概ね弥生時代後期中葉以降に帰属することから、本遺構も弥生時代後期中葉から後葉にかけて機能したものと考えられる。

10011 水口 (図 139・140、図版 62～64)

10010 擬似畦畔の南側先端部において、浅い窪みを確認した。くぼみは10010 擬似畦畔を横断し、10009 溝へとつながっていることから水口の可能性が高いと判断した。幅は0.12 m、検出面からの深さは0.03 mを測る。埋土は10009 溝の埋土4層と同一であり、平・断面いずれの観察においても明確な重複関係は認められなかったことから、同時期に埋没したものと思われる。

水田 2 (図 143、写真図版 62・63)

Y = -38,805～835において北西—南東方向を指向する擬似畦畔2条、北東—南西方向を指向する擬似畦畔1条および段差を検出したことから水田の痕跡と判断した。検出した範囲においては、北西—南東方向の畦畔を基準とし、その間をさらに細分することにより、北から南および西から東へと水を廻しながら水田を営んでいたものと思われる。残存状態が不良であるため検出することができなかったものも多いと思われるが、Y = -38,845～850における検出状況から、本来は1筆が1辺5～6 m程

度に区画された水田であったと推測される。

2. 土坑

10012 土坑 (図 139・140、図版 62・64)

10011 水口の南、10009 溝の西側肩口において検出した。長径 0.47 m、短径 0.42 mを測るほぼ正円形を呈する土坑である。深さは 0.06 mと浅い。掘方の東半部は 10009 溝の埋土掘削後に検出されたことから、10009 溝に先行すると考えられる。遺物は出土しなかった。

3. ピット

10017 ピット (図 139・140、図版 62)

調査区南東隅、10009 溝西肩口において検出した、楕円形を呈する凹みである。長径 0.47 m、短径 0.24 m、深さ 0.03 mを測る。埋土からは弥生土器片 5 点が出土したが、いずれも細片であり図化できるものはなかった。

10018 ピット (図 139・140、図版 62)

10010 擬似畦畔北西隅において検出した。北側は側溝掘削により破壊してしまったため確実ではないが、検出した限りにおいては円形を呈すると考えられ、径 0.20 m、深さ 0.15 mを測る。重複関係から 10013 凹みに先行すると考えられる。遺物は出土しなかった。

4. 凹み

10013 凹み (図 139・140、図版 62)

10010 擬似畦畔の北西側に接するように検出した、方形の凹みである。北は調査区外へと続き、西側は 10006 たわみによって破壊されている。検出面からの深さは 0.04 mを測り、底はほぼ平坦である。検出範囲が限られ、不明な点も多いことからたわみとしたが、底の形状や 10010・10016 擬似畦畔とほぼ平行することなどから、水田区画の痕跡である可能性も残る。

10014 凹み (図 139・140、図版 62)

10016 擬似畦畔の西において検出した、南北に長い不整な楕円形を呈する凹みである。長径 2.11 m、短径 0.38 m、検出面からの深さ 0.03 mを測る。埋土からは弥生土器片 3 点が出土したが、いずれも細片であり図化できなかつた。

10015 凹み (図 139・140、図版 62)

調査区東端において検出した。東半部は側溝掘削により破壊しているが、検出した限りにおいては平面形は隅丸方形を呈する。検出面からの深さは 0.04 mを測る。埋土からは弥生土器片 1 点が出土したが、細片であり図化できなかつた。

第3項 下層確認トレンチ

第7面において検出された10009溝の調査過程において、第7b層より下位に暗色帯が形成されていることが確認された。また、弥生時代後期に帰属すると考えられる同溝からの出土遺物にほぼ完全な形をとどめる弥生時代前期末の壺(374)が含まれていたことから、周辺に同時期の遺構が存在する可能性が考えられた。

こうしたことから、10009溝周辺において、第7b層以下における遺構・遺物の有無、および土層の堆積状況を確認するためトレンチ調査を実施した。調査は東西方向に長さ11.9m、南北方向に長さ5.8m、いずれも幅2mのトレンチをT字形に交わるように設定し、実施した。以下、便宜的に前者をトレンチ1、後者をトレンチ2として記述を進める(図144)。

1. 層序(図144、写真図版65)

第7b層 流路埋積物と氾濫堆積層からなる。大きく5層に分かれ、第7b-5層はさらに3層に細分される。

第7b-1層 10Y4/1 灰 極細砂～細砂混じり粘質シルト。トレンチ1の西端部において部分的に確認した。上層における土壌化の影響で擾乱を受けている。層厚は最も厚い地点において0.18mを測る。

第7b-2層 5GY4/1 暗オリーブ灰 シルトと極細砂～細砂。トレンチ1の西半部およびトレンチ2の全域において確認した。層厚は最も厚い地点において0.32mを測る。

第7b-3層 2.5Y4/2 暗灰黄 粗砂～礫と細砂。流路埋積物と思われる。トレンチ1の西端部およびトレンチ2において確認した。層厚は最も厚い地点において0.52mを測る。トレンチ1北壁においては下位に堆積し、同様に流路埋積物と思われる第7b-5-2層との層界は不明瞭であるが、南壁においてはシルト層が介在しており、時期差を有することが明瞭である。

第7b-4層 5GY4/1 暗オリーブ灰 シルト～粗砂。ラミナが明瞭に認められる。トレンチ1では広範に認められた。一方、トレンチ2では北端部における部分的な確認にとどまり、直上に堆積していた第7b-2層との層界も不明瞭であった。層厚は最も厚い地点において0.39mを測る。

第7b-5層 トレンチ1において確認した。北壁では第7b-5-1層と第7b-5-3層は漸移的に変化しているため層界は不明瞭であったが、南壁において層間に流路埋積物と思われる第7b-5-2層の堆積が認められたことから細分した。

第7b-5-1層 10Y3/1 オリーブ黒 シルト。層厚は最も厚い地点において0.12mを測る。

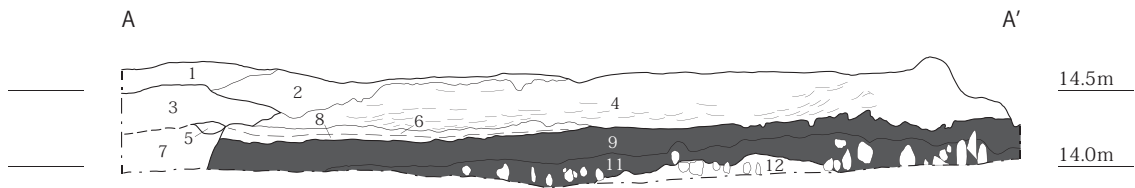
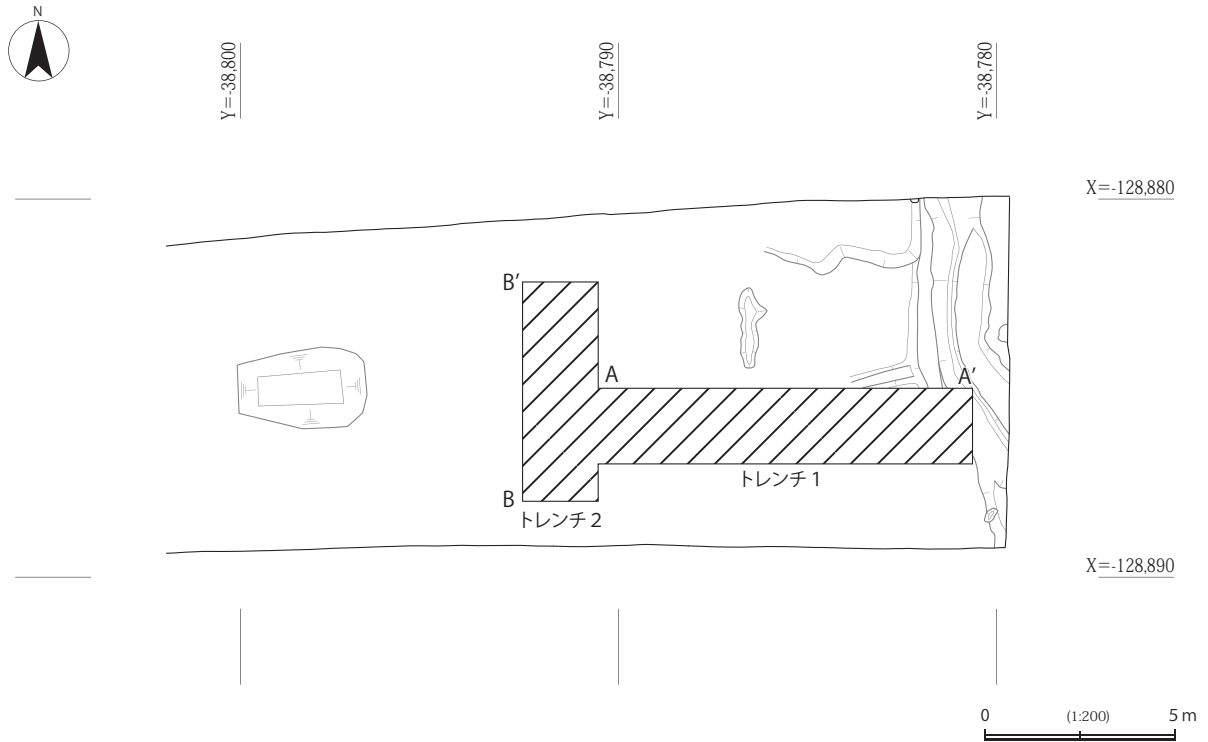
第7b-5-2層 5GY4/1 暗オリーブ灰 粗砂～礫と細砂。流路埋積物と思われる。

第7b-5-3層 5Y2/1 黒 粘質シルト。層厚は最も厚い地点において0.12mを測る。

第8層 水成堆積物である第8b層と暗色帯である第8層からなる。第8層は土質から2層に細分される。

第8-1層 トレンチ1にあっては2.5Y3/1 黒褐～2.5Y2/1 黒 シルトを主体とし、細砂～粗砂の薄層および植物遺体を挟在する。一方、トレンチ2にあっては2.5Y2/1 黒 シルトを主体とし、礫と植物遺体を含む。層厚は、確認しえた限りにおいては0.06～0.37mを測る。

第8-2層 2.5Y2/1 黒 粘質シルトを主体とし、細砂～粗砂の薄層および植物遺体を挟在する。トレンチ1において確認した。層厚は0.22m以上である。



1. 10Y4/1 灰 極細砂～細砂混じり粘質シルト
[第7b-1層]
2. 5GY4/1 暗オリーブ灰 シルトと極細砂～細砂
[第7b-2層]
3. 2.5Y4/2 暗灰黄 粗砂～礫と細砂
[第7b-3層]
4. 5GY4/1 暗オリーブ灰 シルト～細砂の互層
(ラミナ) [第7b-4層]
5. 5Y2/1 黒 粘質シルトと10Y3/1 オリーブ黒
シルトのブロック
6. 10Y3/1 オリーブ黒 シルト [第7b-5-1層]
7. 5GY4/1 暗オリーブ灰 粗砂～礫と細砂
[第7b-5-2層]
8. 5Y2/1 黒 粘質シルト [第7b-5-3層]
9. 2.5Y3/1 黒褐～2.5Y2/1 黒 シルト
(細砂～粗砂の薄層、植物遺体を挟在) [第8-1層]
10. 2.5Y2/1 黒 シルト (礫と植物遺体を含む)
[第8-1層]
11. 2.5Y2/1 黒 粘質シルト
(細砂～粗砂の薄層、植物遺体を挟在) [第8-2層]
12. 2.5Y3/1 黒褐 中砂～極粗砂とシルト
(巨礫、植物遺体を含む) [第8b層]

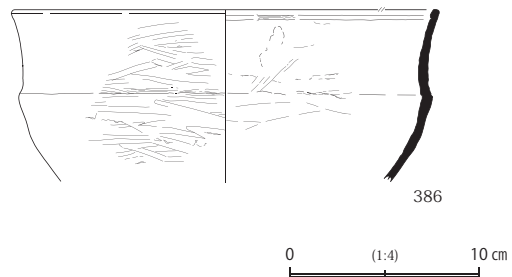
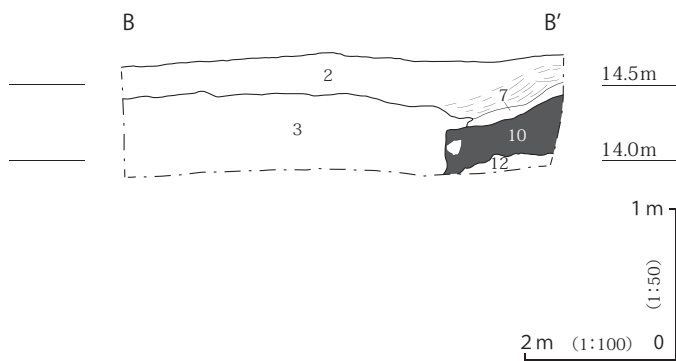


図 144 下層確認トレンチ 平・断面、出土遺物

第8 b層 2.5Y3/1 黒褐 中砂～極粗砂とシルトを主体とし、巨礫と植物遺体を含む。部分的な検出であるため、層厚は不明である。

2. 検出された遺構と遺物

第8層下面において平面調査を実施したが、明確な遺構を検出することはできなかった。

第7 b層中においては流路を2条確認したが、面的な調査は実施しておらず、かつ湧水が著しく壁面が崩落する危険があったため完掘もしていない。このため断面観察からの推定となるが、第7 b-5-2層および第7 b-3層を供給した流路は、いずれも北西から南東に向かって流下していたものと思われる。また、流路肩口の位置から、流心が東へ遷移していたことが窺える。

遺物は第7 b層もしくは第8層より弥生土器が、第8層より縄文土器(385)が出土した。385は縄文土器深鉢である。胴部から頸部において屈曲を有し、外反する口縁部へとつながる。胴部はミガキ、口縁部はナデ調整が施され、口唇部内面に1条の沈線が巡る。滋賀里Ⅲ a式に比定され、縄文時代晩期前葉に位置づけられる。弥生土器は細片のため時期は不明である。

第8・8 b層の様相から、当地は近隣に河川が流れ、しばしば水に漬かる湿潤な環境下にあったものと推測される。当時の河川は、第7 b-5-2層の堆積状況から、トレンチの西側を流れていたと推測される。その後、氾濫により微高地を形成しつつ流心を東へと移動させ、遅くとも弥生時代後期には本調査区の東まで遷移したものと考えられる。その後も小規模な氾濫は発生し、徐々に地形を平坦化させていたと思われるが、少なくとも調査地周辺においては大きく地形を改変させることはなく、弥生時代後期中葉以降は生産域として開発がなされたと考えられる。

註・参考文献

- 1) 「復旧土坑」は河川の氾濫や火山の噴火など、自然災害により土砂や火山灰などに埋没した水田や畠を復旧するために、地表面を覆っている堆積物を集積し、埋め立てることを目的として掘削された穴のことを指す。大阪府下においては東大阪市・八尾市に所在する池島・福万寺遺跡などにおいて大規模な復旧土坑が確認されている。
- 2) 鉄鏃の各部位の呼称は下記の文献を参考とした。
川畑 純 2015 『武具が語る古代史—古墳時代社会の構造転換』 京都大学学術出版会
- 3) 布送具の類例については下記の文献を参考とした。
東村純子 2012 『考古学からみた古代日本の紡織』 改定新装版 六一書房

第6章 自然科学分析

第1節 分析の目的と概要

前章で記したとおり、太田遺跡・太田城跡 2017-1 調査では第7面において弥生時代後期に帰属すると考えられる擬似畦畔を検出した。しかしながら、検出範囲が限定されることに加え、遺存状態も良好とは言い難いものであった。また、周辺の調査においては当該期の水田は検出されておらず、本調査が初めての調査事例となる。こうしたことから、考古学的な調査や分析に加え、科学的な分析により耕作物の種類のほか、周辺の植生や土地利用の状況など、当地を取り巻く環境を復元し、検証することを目的として、珪藻・花粉・植物珪酸体分析を実施した。

第2節 珪藻・花粉・植物珪酸体分析

第1項 原理

1 珪藻分析

珪藻は、10～500 μm ほどの珪酸質殻を持つ単細胞藻類で、殻の形や刻まれた模様などから多くの珪藻種が調べられ、現生の生態から特定環境を指標する珪藻種群が設定されている(小杉 1988、安藤 1990)。一般的に、珪藻の生育域は海水域から淡水域まで広範囲に及び、中には河川や沼地などの水成環境以外の陸地においても、わずかな水分が供給されるジメジメとした陸域環境(例えばコケの表面や湿った岩石の表面など)に生育する珪藻種が知られている。こうした珪藻群集の性質を利用して、堆積物中の珪藻化石群集の解析から、過去の堆積物の堆積環境について知ることができる。

2 花粉分析

花粉・胞子は、外膜が化学的に安定で比較的分解に強く、多量に生産され、種類ごとに形が異なるなどの特徴をもつ。生殖に役立つことのなかった花粉・胞子は大気や水を浮遊し、最終的には堆積物中に取り込まれ、化石として保存される。花粉分析は、堆積物中の花粉・胞子化石を抽出し、研究する方法で、過去の植生の状態解明などに利用されている。花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生復原に応用されてきたが、最近では小凹地堆積物や土壌を対象に局所的な植生の推定も試みられており、遺跡調査においても遺構内の堆積物などを対象に同様の検討が行われている。ここでは、弥生時代後期から古墳時代後期～古代までの堆積物について、花粉分析を実施し、調査区および周辺の古植生について検討する。

3 植物珪酸体分析

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸(SiO_2)が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石(プラント・オパール)となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている(杉山, 2000, 2009)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である(藤原・杉山, 1984)。

ここでは、土層堆積物を対象に植物珪酸体分析を行い、水田稲作をはじめとする農耕とイネ科植生について検討した。

第2項 試料

珪藻・花粉・植物珪酸体分析試料は、調査区北壁断面より採取した。採取地点は 10010 高まり西側と調査区中央部において検出した擬似畦畔間の 2 箇所であり、前者では第 4 b 層と第 6 層において各 1 点、後者では第 5 - 2 層と第 6 層において各 1 点、計 4 点の試料を採取した(図 145)。試料は採取地点の壁面を露頭面から 5 cm ほどスコップで削り、風雨の影響を受けていない面を露出させた後ただちに 35 mm フィルムのケースを嵌入させ採取した。

各試料の観察結果を表 1 に示す。

第3項 分析方法

1 珪藻分析

各試料について、以下の処理を行い、珪藻分析用プレパラートを作製した。

- 1) 湿潤重量約 1.0 g を取り出し、秤量した後ビーカーに移して 30% 過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。
- 2) 反応終了後、水を加え、1 時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この作業を 20 回ほど繰り返した。
- 3) 懸濁残渣を遠心管に回収し、マイクロピペットで適量取り、カバーガラスに滴下し、乾燥させた。乾燥後は、マウントメディアで封入し、プレパラートを 2 枚ずつ作製した。

作製したプレパラートを顕微鏡下 600~1000 倍で観察し、珪藻化石 200 個体以上について同定・計数した。珪藻殻は、完形と非完形(原則として半分程度残っている殻)に分けて計数し、完形殻の出現率として示した。さらに、試料の処理重量とプレパラート上の計数面積から堆積物 1 g 当たりの殻数を計算した。また、保存状態の良い珪藻化石を選び、写真 5 に載せた。

2 花粉分析

試料(湿重量約 3~4 g)を遠沈管にとり、10% 水酸化カリウム溶液を加え 10 分間湯煎する。水洗後、46% フッ化水素酸溶液を加え 1 時間放置する。水洗後、比重分離(比重 2.1 に調整した臭化亜鉛溶液を

表1 分析試料採の特徴

調査位置	層位	試料名	時期	堆積物試料の層相
1 東側	第 4 b 層	S1	古墳時代後期~古代	5Y2/1~3/1 黒~オリーブ黒。塊状をなす極細粒~細粒砂混じり有機質泥。擾乱が著しい。下位層との層界は明瞭。
2 東側	第 6 層	S2	弥生時代後期	5Y3/2~4/2 オリーブ黒~灰オリーブ。塊状をなす中粒~細粒砂質泥。擾乱が著しい。直下の第 7 b 層に由来する 2~3mm 程度の灰色砂質泥の微小ブロックが散在する。
3 西側	第 5 層	S3	古墳時代前期~中期	5Y3/1 オリーブ黒。塊状をなす細粒砂~極細粒砂質泥。擾乱ないし攪拌が著しい。
4 西側	第 6 層	S4	弥生時代後期	5Y3/2~4/2 オリーブ黒~灰オリーブ。塊状をなす細粒砂~極細粒砂質泥。擾乱ないし攪拌が著しい。

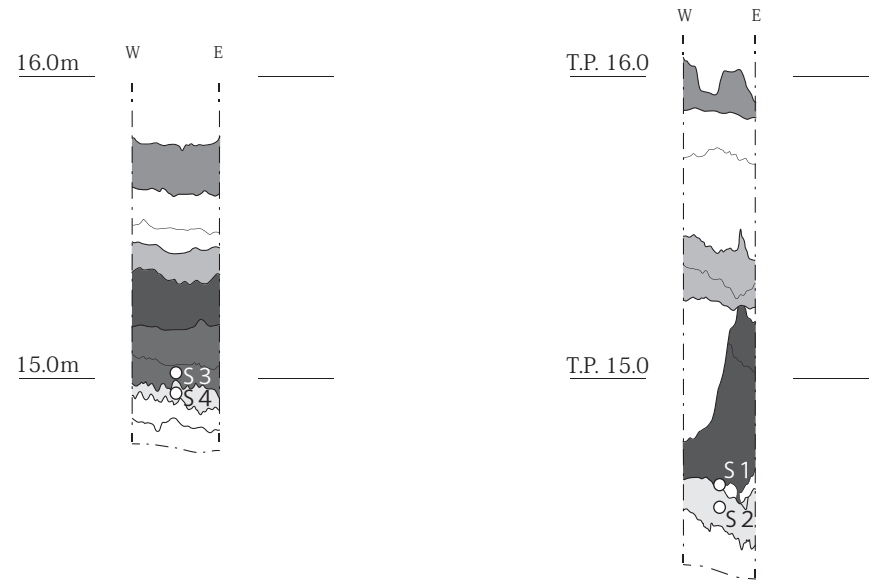
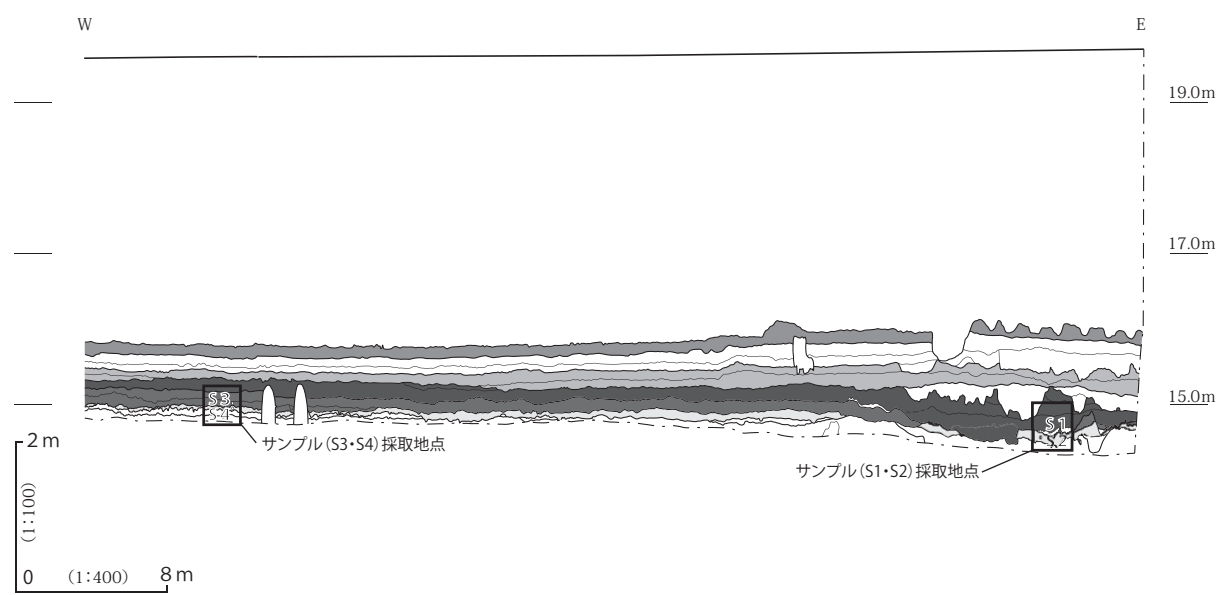
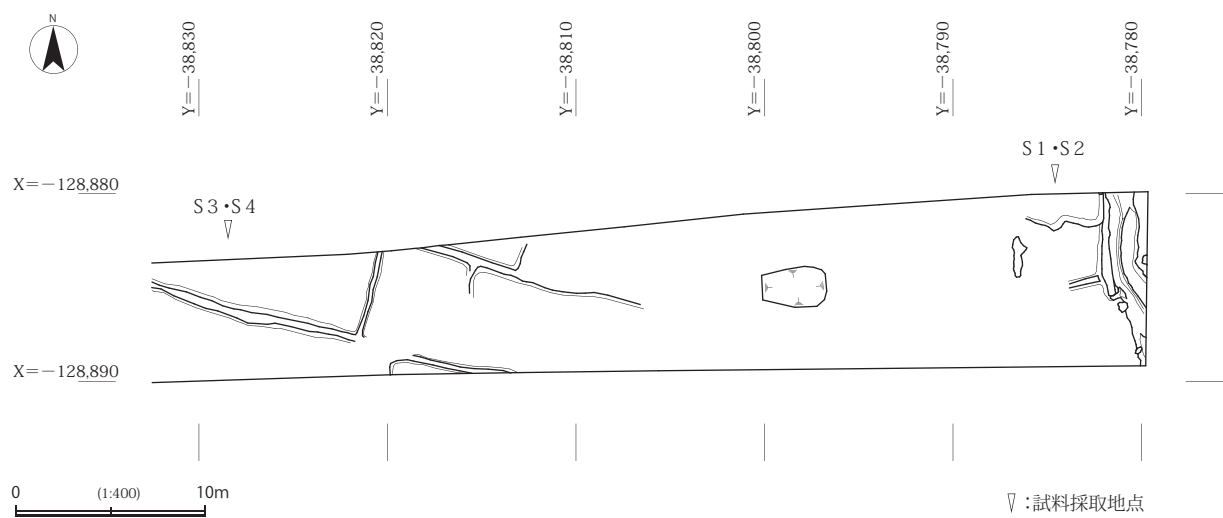


図 145 分析試料採取地点

加え遠心分離)を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理(無水酢酸9:濃硫酸1の割合の混酸を加え20分間湯煎)を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。プレパラート作成は、残渣を適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入する。検鏡は、プレパラート全面を走査し、その間に産出する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表と花粉化石群集の層位分布図として示す。なお、複数の種類(分類群)をハイフンで結んだものは種類間の区別が困難なものである。また、産出した主な花粉化石の写真を写真6に示す。

3 植物珪酸体分析

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法(藤原, 1976)を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥(絶乾)
- 2) 試料約1gに対し直径約40 μ mのガラスビーズを約0.02g添加(0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法(550℃・6時間)による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射(300W・42KHz・10分間)による分散
- 5) 沈底法による20 μ m以下の微粒子除去
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が500以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率を乗じて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重)を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる(杉山, 2000)。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

第4項 分析結果

1 珪藻分析

(1) 珪藻化石の環境指標種群

珪藻化石の環境指標種群は、主に小杉(1988)および安藤(1990)が設定し、千葉・澤井(2014)により再検討された環境指標種群に基づいた。なお、環境指標種群以外の珪藻種については、淡水種は広布種(W)として、その他の種はまとめて不明種(?)として扱った。また、破片のため属レベルの同定にとどめた分類群は、その種群を不明(?)として扱った。以下に、安藤(1990)が設定した淡水域における環境指標種群の概要を示す。

上流性河川指標種群(J)

河川上流部の渓谷部に集中して出現する種群である。これらは、殻面全体で岩にぴったりと張り付いて生育しているため、流れによってはぎ取られてしまうことがない。

中～下流性河川指標種群(K)

河川の中～下流部、すなわち河川沿いで河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形がみられる部分に集中して出現する種群である。これらの種には、柄またはさやで基物に付着し、体を水中に伸ばして生活する種が多い。

最下流性河川指標種群(L)

最下流部の三角州の部分に集中して出現する種群である。これらの種には、水中を浮遊しながら生育している種が多い。これは、河川が三角州地帯に入ると流速が遅くなり、浮遊生の種でも生育できるようになるためである。

湖沼浮遊生指標種群(M)

水深が約 1.5m以上で、岸では水生植物がみられるが、水底には植物が生育していない湖沼に出現する種群である。

湖沼沼沢湿地指標種群(N)

湖沼における浮遊生種としても、沼沢湿地における付着生種としても優勢な出現がみられ、湖沼・沼沢湿地の環境を指標する可能性が大きい種群である。

沼沢湿地付着生指標種群(O)

水深 1m内外で、一面に植物が繁殖している所および湿地において、付着の状態に優勢な出現がみられる種群である。

高層湿原指標種群(P)

尾瀬ヶ原湿原や霧ヶ峰湿原などのように、ミズゴケを主とした植物群落および泥炭層の発達がみられる場所に出現する種群である。

陸域指標種群(Q)

上述の水域に対して、陸域を生息地として生活している種群である(陸生珪藻と呼ばれている)。

陸生珪藻 A 群(Qa)

耐乾性の強い特定のグループである。

陸生珪藻 B 群(Qb)

A 群に随伴し、湿った環境や水中にも生育する種群である。

(2) 分析結果

堆積物から検出された珪藻化石は、淡水種が 50分類群 28属 33種 2変種であった(表2)。これらの珪藻化石は、淡水域における 7 環境指標種群(K、M、N、O、P、Qa、Qb) に分類された(図 146)。

以下では、調査位置ごとに珪藻化石の特徴と推定される堆積環境について述べる。

東側(S 1、S 2)

第 6 層(S 2: 弥生時代後期の耕作土): 堆積物 1 g 中の珪藻殻数は 5.1×10^4 個、完形殻の出現率は 37.2% である。堆積物中の珪藻殻数は、やや少ない。環境指標種群では、沼沢湿地付着生指標種群(O) が多く、高層湿原指標種群(P) や陸生 A 群(Qa) などわずかに伴う。高層湿原指標種群(P) の *Eunotia serra* は、高層湿原のほか、湿地、腐植性湖沼で産出が確認されている(田中, 2002)。

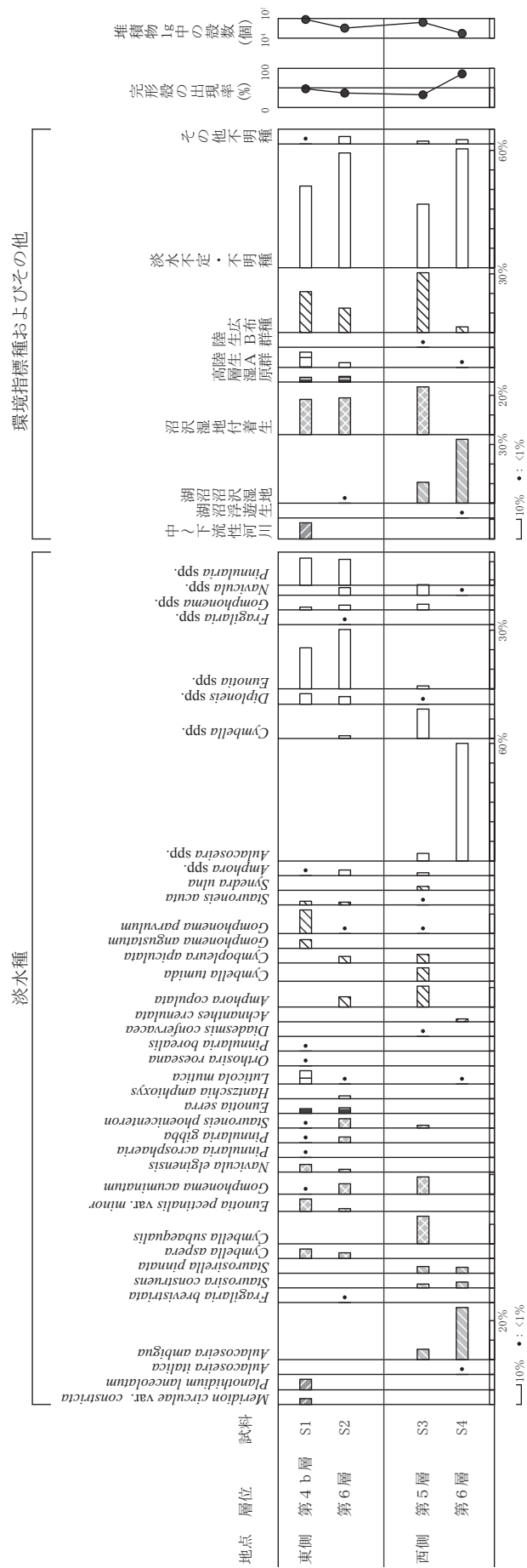
環境指標種群の特徴から、ミズゴケなどを主とした植物群落やジメジメとした陸域を伴う沼沢湿地環境が推定される。

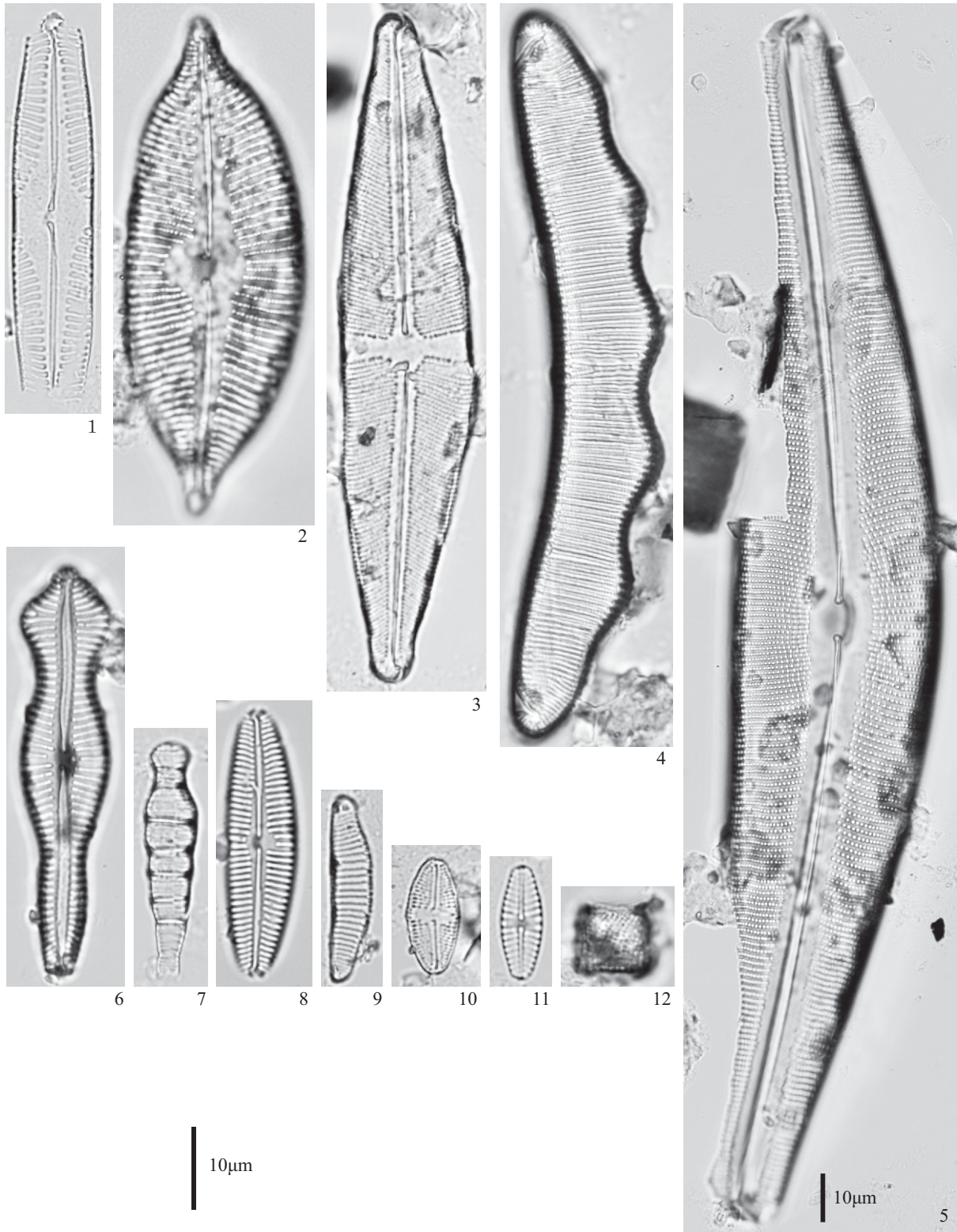
表2 太田遺跡・太田城跡における珪藻分析結果

分類群	種群	1段目：位置		2段目：層位		3段目：試料名	
		東側		西側			
		第4b層	第6層	第5層	第6層		
		S1	S2	S3	S4		
<i>Achnanthes crenulata</i>	W				2		
<i>A. spp.</i>	?		1				
<i>Amphora copulata</i>	W		11	22			
<i>A. spp.</i>	?	2	6	3			
<i>Anomoeoneis spp.</i>	?			2			
<i>Aulacoseira ambigua</i>	N			11	36		
<i>A. italica</i>	M				1		
<i>A. spp.</i>	?			8	81		
<i>Caloneis spp.</i>	?		1				
<i>Cocconeis placentula</i>	W			1			
<i>Cymbella aspera</i>	O	10	6				
<i>C. silesiaca</i>	W			3			
<i>C. subaequalis</i>	O			29			
<i>C. tumida</i>	W			14			
<i>C. spp.</i>	?		3	31			
<i>Cymbopleura apiculata</i>	W		7	9			
<i>Diademsis confervacea</i>	Qb			1			
<i>Diploneis spp.</i>	?	11	8	1			
<i>Eunotia pectinalis var. minor</i>	O	13	3				
<i>E. serra</i>	P	5	6				
<i>E. spp.</i>	?	43	63	3			
<i>Fragilaria brevistriata</i>	N		2				
<i>F. spp.</i>	?		1				
<i>Gomphonema acuminatum</i>	O	2	11	18			
<i>G. angustatum</i>	W	9					
<i>G. parvulum</i>	W	25	2	2			
<i>G. spp.</i>	?	3	5	6			
<i>Hantzschia amphioxys</i>	Qa		3				
<i>Luticola mutica</i>	Qa	14	2		1		
<i>Meridion circulae</i>	W	3					
<i>M. circulae var. constricta</i>	K	6					
<i>Navicula cuspidata</i>	W			6	2		
<i>N. elginensis</i>	O	8	3				
<i>N. spp.</i>	?		8	11	1		
<i>Neidium spp.</i>	?		3				
<i>Nitzschia spp.</i>	?	2		1			
<i>Orthosira roeseana</i>	Qa	1					
<i>Pinnularia acrosphaeria</i>	O	1					
<i>P. borealis</i>	Qa	1					
<i>P. gibba</i>	O	1	6				
<i>P. spp.</i>	?	24	23				
<i>Planothidium lanceolatum</i>	K	11					
<i>Rhopalodia gibberula</i>	W	2	3				
<i>Sellaphora bacillum</i>	W			1			
<i>Stauroneis acuta</i>	W	4	3	1			
<i>S. phoenicenteron</i>	O	2	10	3			
<i>S. spp.</i>	?	1		1			
<i>Staurosira construens</i>	N			4	4		
<i>Staurosirella pinnata</i>	N			7	4		
<i>Synedra ulna</i>	W			4			
Unknown	?	2	8	3	3		
中～下流性河川	K	17					
湖沼浮遊生	M				1		
湖沼沼沢湿地	N		2	22	44		
沼沢湿地付着生	O	37	39	50			
高層湿原	P	5	6				
陸生A群	Qa	16	5		1		
陸生B群	Qb			1			
広布種	W	43	26	63	4		
淡水不定・不明種	?	86	122	67	82		
その他不明種	?	2	8	3	3		
淡水種		204	200	203	132		
合計		206	208	206	135		
完形殻の出現率(%)		47.8	37.2	32.5	85.9		
堆積物1g中の殻数(個)		94971	51146	81010	24328		

*種群は、千葉・澤井(2014)による

図 146 太田遺跡・太田城跡の珪藻化石層位分布 (主な分類群を表示)





1.*Pinnularia gibba* (第6層 : S2) 2.*Cymbopleura apiculata* (第5層 : S3) 3.*Stauroneis phoenicenteron* (第6層 : S2)
 4.*Eunotia serra* (第4 b層 : S1) 5.*Cymbella aspera* (第4 b層 : S1) 6.*Gomphonema acuminatum* (第5層 : S3)
 7.*Meridion circularae* var. *constricta* (第4 b層 : S1) 8.*Cymbella subaequalis* (第5層 : S3)
 9.*Eunotia pectinalis* var. *minor* (第4 b層 : S1) 10.*Luticola mutica* (第4 b層 : S1)
 11.*Planothidium lanceolatum* (第4 b層 : S1) 12.*Aulacoseira ambigua* (第6層 : S4)

写真5 太田遺跡・太田城跡の珪藻化石

第4b層(S1:古墳時代後期～古代):堆積物1g中の珪藻殻数は 9.5×10^4 個、完形殻の出現率は47.8%である。堆積物中の珪藻殻数は、やや少ない。環境指標種群では、沼沢湿地付着生指標種群(O)が多く、中～下流性河川指標種群(K)や陸生A群(Qa)などを伴う。

環境指標種群の特徴から、中～下流性河川やジメジメとした陸域を伴う沼沢湿地環境が推定される。
西側(S3、S4)

第6層(S4:弥生時代後期の耕作土):堆積物1g中の珪藻殻数は 2.4×10^4 個、完形殻の出現率は85.9%である。堆積物中の珪藻殻数は少ない。環境指標種群では、湖沼沼沢湿地指標種群(N)が多く、湖沼浮遊生指標種群(M)や陸生A群(Qa)をわずかに伴う。

環境指標種群の特徴から、湖沼沼沢湿地環境が推定される。

第5層(S3:古墳時代前期～中期):堆積物1g中の珪藻殻数は 8.1×10^4 個、完形殻の出現率は32.5%である。堆積物中の珪藻殻数は、やや少ない。環境指標種群では、沼沢湿地付着生指標種群(O)が多く、湖沼沼沢湿地指標種群(N)などを伴う。

環境指標種群の特徴から、湖沼沼沢湿地～沼沢湿地環境が推定される。

2 花粉分析

分析結果を表3、図147に示す。花粉化石の保存状態は、西側の地点(S3・S4)で良好であったが、東側の地点(S1・S2)は悪く、同定不能の化石の割合が高く、化石数も少なかった。以下に調査位置ごとに産状について述べる。

東側(S1、S2)

第6層(S2):花粉化石の含有量が少なく、産出する化石の保存状態が悪い。産出する種類(分類群)は西側地点の第6層(S4)と類似する。

第4b層(S1):下位の第6層に比較して化石数は多いが、保存状態は不良である。花粉化石群集の構成比は、木本花粉が50%程度、草本花粉が40%程度である。木本花粉では、針葉樹のスギ属が多産し、次いで針葉樹のイチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、常緑広葉樹のアカガシ亜属、落葉広葉樹のコナラ亜属、シイノキ属-マテバシイ属などを伴う。草本花粉ではイネ科が多産し、カヤツリグサ科、アブラナ科、荒れ地に普通なヨモギ属などを伴う。

西側(S3、S4)

第6層(S4):花粉化石群集の構成比は、木本花粉55%程度、草本花粉45%程度である。木本花粉では針葉樹のスギ属・イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科が多産する。次いで常緑広葉樹のアカガシ亜属、シイノキ属-マテバシイ属が10%程度の産出を示す。草本花粉では、イネ科が25%程度と最も多産し、オモダカ属・ミズオアイ属・キカシグサ属などが産出する。

第5層(S3):花粉化石群集の構成比は直下の第6層と類似する。群集組成も概ね類似するが、木本花粉においてアカガシ亜属が増加し、針葉樹のスギ属・イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科が減少傾向を示す。

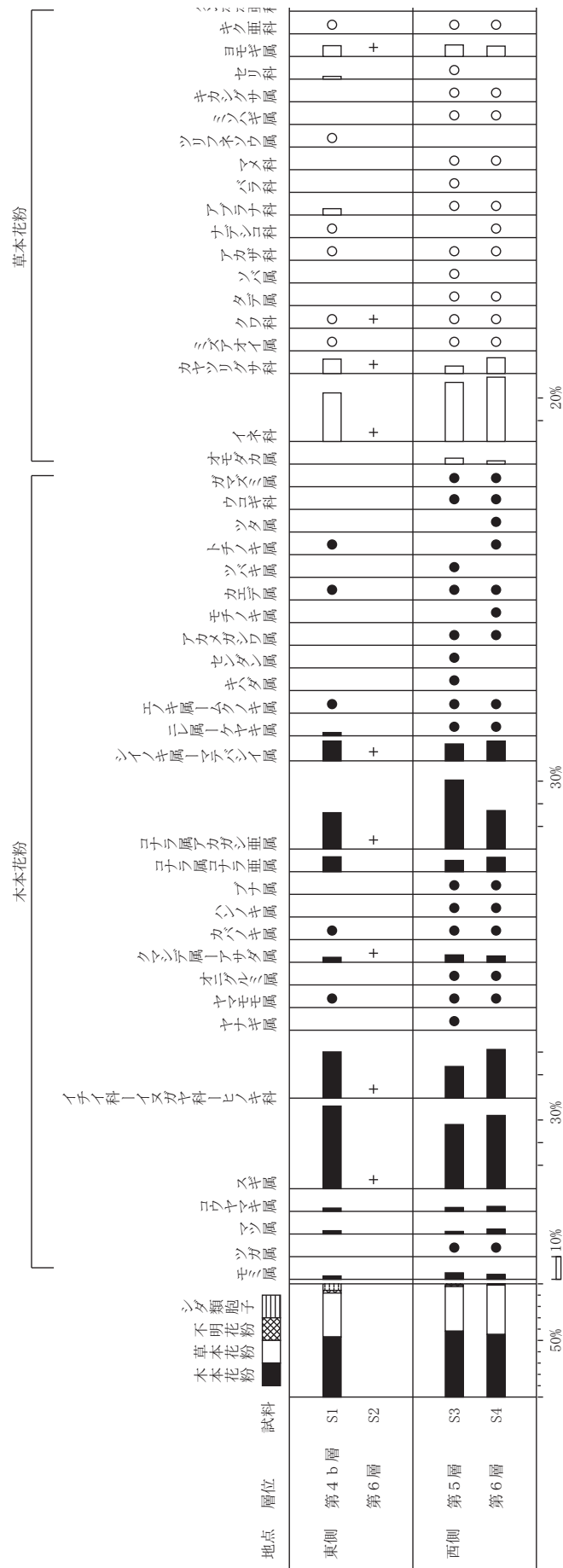
3 植物珪酸体分析

(1) 分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結

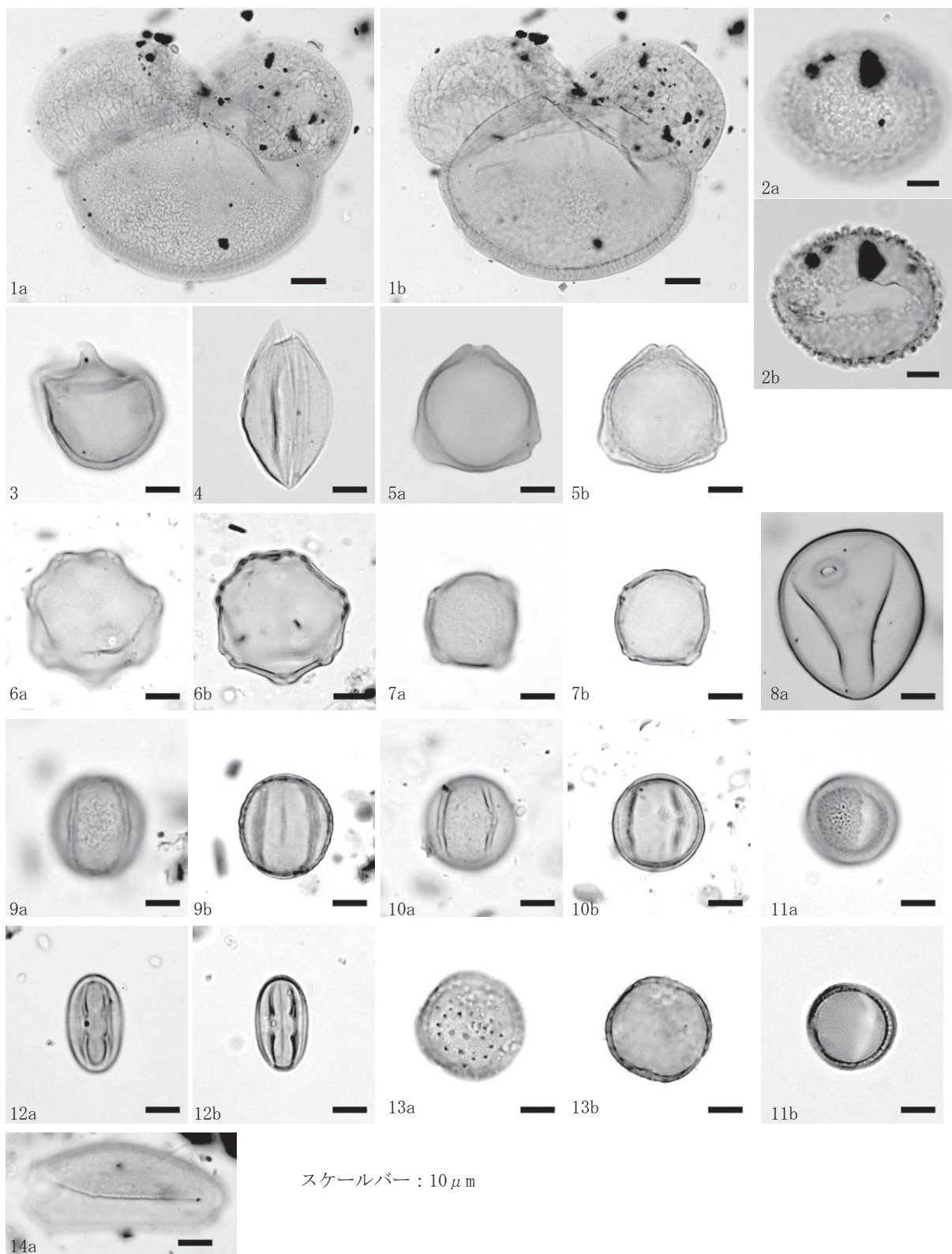
表3 太田遺跡・太田城跡における花粉分析結果

種類(分類群)	Taxon	1段目:位置 2段目:層位 3段目:試料名			
		東側		西側	
		第4b層	第6層	第5層	第6層
		S1	S2	S3	S4
木本花粉	Arboreal pollen				
モミ属	<i>Abies</i>	2	-	15	19
ツガ属	<i>Tsuga</i>	-	-	5	6
マツ属	<i>Pinus</i>	2	-	6	19
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	2	-	9	19
スギ属	<i>Cryptomeria</i>	50	7	148	280
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	28	2	73	186
ヤナギ属	<i>Salix</i>	-	-	1	-
ヤマモモ属	<i>Myrica</i>	1	-	3	3
オニグルミ属	<i>Pterocarya-Juglans</i>	-	-	2	6
クマシデ属-アサダ属	<i>Carpinus-Ostrya</i>	3	1	17	24
カバノキ属	<i>Betula</i>	1	-	3	1
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	-	-	2	4
ブナ属	<i>Fagus</i>	-	-	2	6
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	9	-	26	55
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	22	4	159	147
シイノキ属-マテバシイ属	<i>Castanopsis-Pasania</i>	12	4	39	75
ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus-Zelkova</i>	2	-	1	2
エノキ属-ムクノキ属	<i>Celtis-Ahananthe</i>	1	-	3	4
キハダ属	<i>Phellodendron</i>	-	-	1	-
センダン属	<i>Melia</i>	-	-	1	-
アカメガシワ属	<i>Mallotus</i>	-	-	1	2
モチノキ属	<i>Ilex</i>	-	-	-	1
カエデ属	<i>Acer</i>	1	-	1	1
ツバキ属	<i>Camellia</i>	-	-	1	-
トチノキ属	<i>Aesculus</i>	1	-	-	1
ツタ属	<i>Parthenocissus</i>	-	-	-	2
ウコギ科	Araliaceae	-	-	1	1
ガマズミ属	<i>Viburnum</i>	-	-	2	1
草本花粉	Nonarboreal pollen				
オモダカ属	<i>Sagittaria</i>	-	-	23	22
イネ科	Gramineae	54	3	230	441
カヤツリグサ科	Cyperaceae	16	1	29	108
ミズアオイ属	<i>Monochoria</i>	1	-	2	10
クワ科	Moraceae	1	1	4	4
ギンギン属	<i>Rumex</i>	-	-	1	1
ソバ属	<i>Fagopyrum</i>	-	-	1	-
アカザ科	Chenopodiaceae	1	-	1	4
ナデシコ科	Caryophyllaceae	2	-	-	2
アブラナ科	Brassicaceae	7	-	2	2
バラ科	Rosaceae	-	-	1	-
マメ科	Leguminosae	-	-	1	2
ツリフネソウ属	<i>Impatiens</i>	2	-	-	-
ミソハギ属	<i>Lythrum</i>	-	-	1	1
キカシグサ属	<i>Rotala</i>	-	-	4	4
セリ科	Umbelliferae	3	-	3	-
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	12	2	45	71
キク亜科	Asteroidae	1	-	4	8
タンポポ科	Cichorioideae	-	-	1	2
不明花粉	unknown				
不明花粉	unknown	6	-	13	11
シダ類胞子	Pteridophyta				
その他のシダ類胞子	other Pteridophyta	15	-	9	7
合計	Total				
木本花粉	Arboreal pollen	137	18	522	865
草本花粉	NonArborealpollen	100	7	353	682
不明花粉	unknown	6	0	13	11
シダ類胞子	Pteridophyta	15	0	9	7
合計(不明を除く)	Total(Exclude unknown)	252	25	884	1554
保存状態が悪く同定できない花粉	Weathered pollen	24	5	1	3



出現率：木本花粉が木本総数、草本花粉が総数（不明花粉除く）を基数とする百分率 ●○1%未満

図 147 太田遺跡・太田城跡の花粉化石群集層位分布



1. モミ属 (第5層 : S3) 2. コウヤマキ属 (第6層 : S4) 3. スギ属 (第5層 : S3)
 4. イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科 (第5層 : S3) 5. ヤマモモ属 (第5層 : S3)
 6. オニグルミ属 (第6層 : S4) 7. クマシデ属-アサダ属 (第5層 : S3)
 8. イネ科 (第5層 : S3) 9. コナラ亜属 (第5層 : S3) 10. アカガシ亜属 (第6層 : S4)
 11. ヨモギ属 (第5層 : S3) 12. シイノキ属-マテバシイ属 (第5層 : S3)
 13. オモダカ属 (第5層 : S3) 14. ミズアオイ属 (第6層 : S4)

写真6 太田遺跡・太田城跡の花粉化石

表4 太田遺跡・太田城跡における植物珪酸体分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群	Taxon	1段目: 地点		2段目: 層位		3段目: 試料名	
		東側		西側			
		第4b層	第6層	第5層	第6層		
		S1	S2	S3	S4		
イネ科	Gramineae						
イネ	<i>Oryza sativa</i>	29	30	62	57		
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	29	18	16	11		
キビ族型	Paniceae type	6	6	8	6		
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	52	41	39	29		
タケ亜科	Bambusoideae						
メダケ節型	<i>Pleiolabstus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	23	12	16	11		
ネザサ節型	<i>Pleiolabstus</i> sect. <i>Nezasa</i>	69	47	39	29		
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	12	6	8	6		
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	6	6	8	6		
未分類等	Others	29	36	47	34		
その他のイネ科	Others						
未分類等	Others	58	41	70	51		
植物珪酸体総数	Total	313	243	313	240		

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m²・cm) : 試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イネ	<i>Oryza sativa</i>	0.85	0.88	1.82	1.68
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	1.83	1.14	1.01	0.69
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.64	0.51	0.48	0.36
メダケ節型	<i>Pleiolabstus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	0.27	0.14	0.19	0.13
ネザサ節型	<i>Pleiolabstus</i> sect. <i>Nezasa</i>	0.33	0.23	0.19	0.14
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	0.09	0.05	0.06	0.04
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	0.02	0.02	0.02	0.02

タケ亜科の比率 (%)

メダケ節型	<i>Pleiolabstus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	38	32	41	39
ネザサ節型	<i>Pleiolabstus</i> sect. <i>Nezasa</i>	47	53	41	42
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	13	11	13	13
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	3	4	5	5
メダケ率	Medake ratio	85	85	82	81

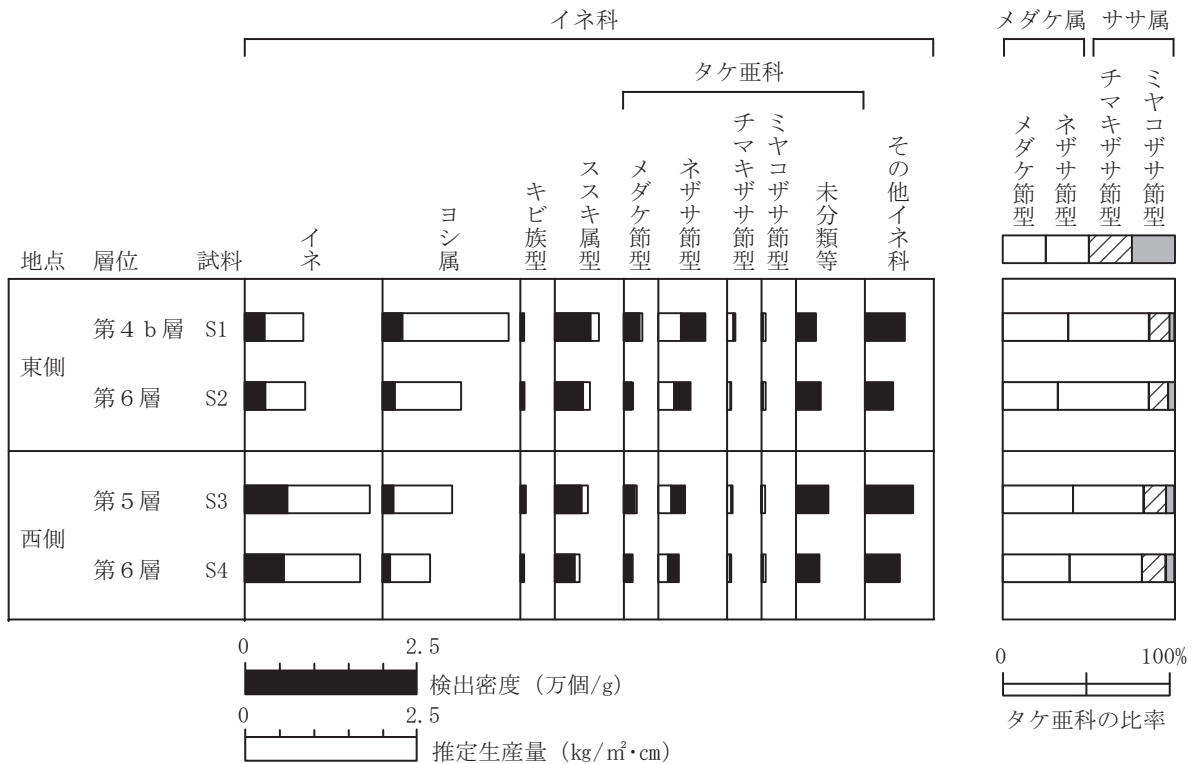
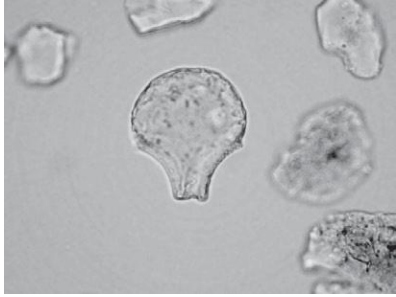
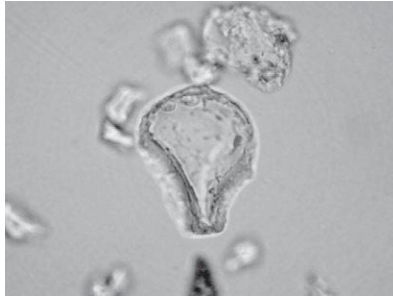


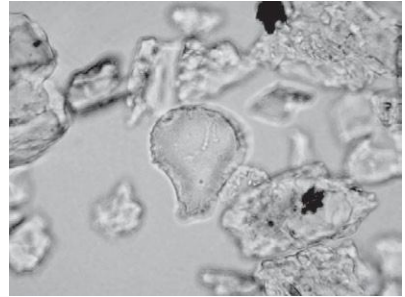
図148 太田遺跡・太田城跡の植物珪酸体分析結果



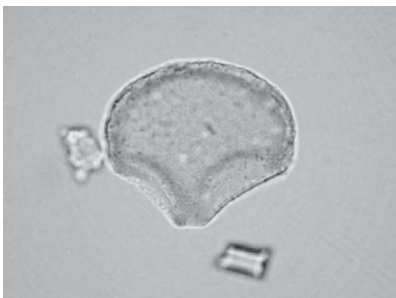
イネ (第4 b層 : S1)



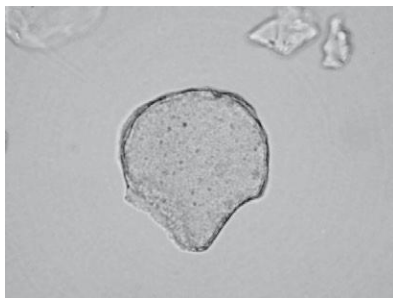
イネ (第6層 : S2)



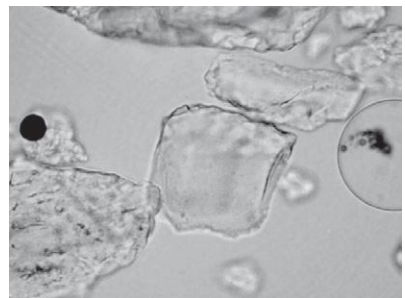
イネ (第5層 : S3)



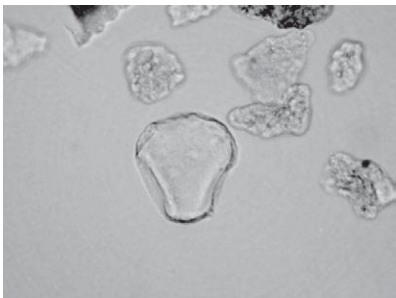
ヨシ属 (第4 b層 : S1)



ヨシ属 (第5層 : S3)



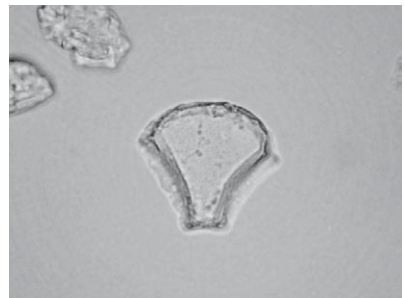
キビ族型 (第5層 : S3)



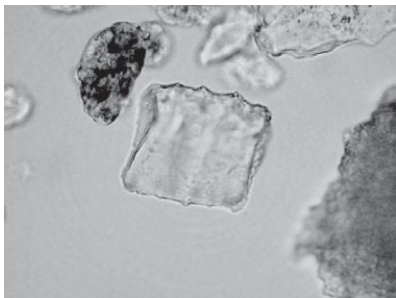
ススキ族型 (第4 b層 : S1)



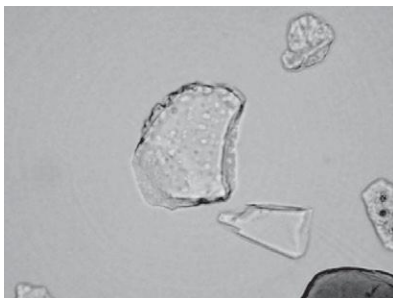
ススキ族型 (第6層 : S2)



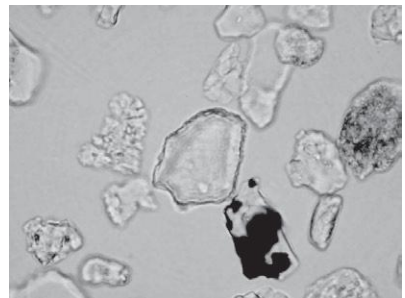
メダケ節型 (第4 b層 : S1)



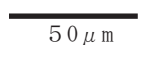
ネザサ節型 (第6層 : S2)



チマキザサ節型 (第4 b層 : S1)



ミヤコザサ節型 (第5層 : S3)



50 μ m

写真7 太田遺跡・太田城跡の植物珪酸体

果を表4および図148に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を写真7に示す。

〔イネ科〕

イネ、ヨシ属、キビ族型、ススキ属型(おもにススキ属)

〔イネ科-タケ亜科〕

メダケ節型(メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属)、ネザサ節型(おもにメダケ属ネザサ節)、チマキザサ節型(ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など)、ミヤコザサ節型(ササ属ミヤコザサ節など)、未分類等

〔イネ科-その他〕

未分類等

(2) 植物珪酸体の検出状況

東側地点の第4b層(S1)では、イネ、ヨシ属、ススキ属型、ネザサ節型が比較的多く検出され、キビ族型、メダケ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型、タケ亜科未分類なども認められた。イネの密度は2,900個/gと比較的高い値である。第6層(S2)でも、おおむね同様の結果である。イネの密度は3,000個/gと比較的高い値である。

西側地点の第5層(S3)では、イネが多く検出され、ススキ属型とネザサ節型が比較的多く検出された。他にヨシ属、キビ族型、メダケ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型、タケ亜科未分類なども認められた。イネの密度は6,200個/gと高い値である。一方、キビ族型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型は少量である。第6層(S4)では、第5層(S3)とおおむね同様の検出状況であり、イネの密度は5,700個/gと高い値である。ここでもキビ族型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型は少量である。

おもな分類群の推定生産量では、西側地点の第5層(S3)と第6層(S4)ではイネが優勢であり、次いでヨシ属が多い。東側地点では第4b層(S1)と第6層(S2)でヨシ属が優勢であり、次いでイネが多い。

第5項 珪藻分析から推定される堆積環境

弥生時代後期の耕作土である第6層の珪藻化石群集および推定される堆積環境は、上記したように西側と東側の地点で多少異なっていた。西側では湖沼沼沢湿地環境が優勢で、東側では沼沢湿地環境が優勢であったと推定される。西側の高所の耕作地は安定した水域であったことが示唆される。当時の地形勾配、および東側の珪藻群集が西側のように特定の種類が多産する組成ではなく、異なる生態性の群集が混在する、氾濫堆積物などで特徴的に確認される混合群集の様相を示していることから、東側の低所の耕作地は周囲からの流れ込みの影響を受ける沼沢湿地の堆積場であった可能性が示唆される。

西側の古墳時代前期～中期の第5層では、直下の第6層に比較して湖沼沼沢湿地生種が減少し、沼沢湿地生種が増加することから、水位が低下し、沼沢湿地のような堆積場に変化したことが推定される。

一方、東側の古墳時代後期～古代の第4b層形成期には、中～下流性河川種などを伴う沼沢湿地環境へと変化し、一時的にせよ河川水の流入が認められる、沼沢湿地のような堆積場に変化した可能性が推定される。このように東側の低所は、弥生時代後期の第6層形成期、および古墳時代後期～古代の第4層形成期ともに周辺からの流れ込みの影響を受ける堆積場で、第4層形成期はある程度の水深があった可能性が考えられる。

第6項 花粉分析から推定される植生と環境

(1) 周辺森林植生

弥生時代後期の耕作土である第6層の花化石群集は、東側(S2)で保存不良であったが、西側では良好であった。スギ属およびイチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科を主体に随伴するモミ属・ツガ属・コウヤマキ属など温帯性針葉樹の割合が高く、常緑広葉樹のアカガシ亜属やシイノキ属-マテバシイ属が比較的多産することが特徴である。このうち温帯性針葉樹は地すべり地や新たに形成された扇状地ロウブなどの攪乱地が更新適地とされる(中静, 2004)。当時も後背の扇状地などに生育していたことが推定される。暖温帯性常緑広葉樹林(いわゆる照葉樹林)の構成要素であるアカガシ亜属やシイノキ属-マテバシイ属などともに扇状地から丘陵地の森林植生を形成していたとみられる。随伴して産出するクマシデ属-アサダ属・カエデ属・トチノキ属・オニグルミ属などの渓谷林ないし河畔林要素であり、当時も扇状地の流路や安威川沿いなどに生育していたと考えられる。

古墳時代中期~後期の第5層(西側S3)では、スギ属・イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科といった針葉樹が減少し、常緑広葉樹のアカガシ亜属が増加することから、当該期に周辺森林植生において多少の変化が起こった可能性がある。常緑広葉樹のアカガシ亜属は、上記したように暖温帯における植生遷移(一次遷移・二次遷移)における最終段階の暖温帯性常緑広葉樹林(いわゆる照葉樹林)の構成要素である。ただし、アラカシのように萌芽能力の高い樹種は、同様の性質をもつシイノキ属などとともに植生攪乱が及んだ照葉二次林を形成している。第5層形成期には、周辺でアカガシ亜属が分布を拡げたと考えられるが、これは後述するように当該期の安威川流域の植生変化パターンが退行遷移を示すことを踏まえると、照葉二次林としての分布拡大と考えるのが妥当である。この点は、当該地域における人間の占拠領域の変化などを踏まえ、慎重に評価していきたい課題である。

古墳時代後期~古代の第4b層(東側S1)では、アカガシ亜属が減少し、温帯性針葉樹のスギ属・イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科が増加し、第6層と同等の産出率を示すようになる。随伴する種類数は第6層・第5層に比較して減少していることから、第4層形成期には森林植生に対する攪乱の影響が強まり、植生の退行遷移が進んだ可能性がある。

(2) 調査区の植生

木本花粉に比較して、局所的な植生を反映している可能性が高い草本花粉の産状をみると、第6層では総花粉・孢子に占める草本花粉の割合が45%程度と比較的高く、調査区近辺に草地植生が存在したことが推定される。イネ科草本を主体とし、オモダカ属・ミズアオイ属などの小型の水生植物が生育する水湿地やヨモギ属が生育する荒地などが存在したとみられる。第6層は、その下面で疑似畦畔が確認されており、層相から耕作土と推定されている。多産するイネ科花粉で認められた大きさ40 μ mm以上のものには栽培種のイネ属が含まれている可能性がある。また、オモダカ属・ミズアオイ属は水田雑草群落の構成要素でもある。耕作地雑草として生育していたものに由来する可能性がある。

第5層形成期も草本花粉の産状から、第6層形成期と同様な草地が存在したとみられる。本層準からは栽培種のソバ属が産出する。産出率は低率であるが、ソバ属花粉が虫媒性で、生産量も少ないことから、わずかな産出でも周辺での栽培が示唆される。第4b層形成期も第5層形成期と同様に草地が卓越していたとみられる。

(3) 周辺遺跡の花粉化石群集との比較

本遺跡周辺域の花粉分析結果は、安威川東岸の丘陵から台地にかけて展開する新池遺跡(松江, 1993)、安威川下流域の沖積低地に位置する溝咋遺跡(新山・鈴木, 2000)、茨木川西岸の沖積低地に位置する東奈良遺跡(川崎地質株式会社, 1995など)、中条小学校遺跡(パリノ・サーヴェイ株式会社, 2015)などで確認されている。これら各遺跡における花粉化石群集をみると、丘陵・台地に近い新池遺跡では、古墳時代前期頃にアカガシ亜属やシイノキ属—マテバシイ属などの照葉樹林要素が多産する傾向にあるが、古墳時代後期層準にかけて照葉樹林要素が減少し、逆にマツ属復雑管束亜属や落葉広葉樹のコナラ亜属が増加する傾向が確認されている。丘陵から離れた安威川の氾濫低地に位置する溝咋遺跡では、古墳時代前期に照葉樹林要素とスギ属、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科といった温帯性針葉樹が多産する傾向を示し、古墳時代後期に照葉樹林要素が減少する。一方、東奈良遺跡・中条小学校遺跡では弥生時代中期層準で既にコナラ亜属・マツ属などの二次林要素が特徴的に産出し、中条小学校遺跡の庄内式期の井戸埋土でマツ属が多産している。今回の結果は溝咋遺跡の結果に類似する。

上記のような各遺跡における花粉化石群集の層位変化の差異は、遺跡周辺の植生の違いを反映している可能性がある。弥生時代に活発な居住域の形成がみられる中条小学校遺跡・東奈良遺跡では、弥生時代中期頃に既に人間による強い植生攪乱を受けていた可能性がある(パリノ・サーヴェイ株式会社, 2015)。これに比較して、本遺跡および溝咋遺跡では植生攪乱の程度は低く、変化の傾度も緩やかであった可能性がある。さらに埴輪窯跡が確認されている新池遺跡では6世紀頃から7・8世紀にかけて照葉樹林が急激に衰退している。このように三島地方の台地・丘陵の弥生時代以降の植生変化は退行遷移を示し、その変化の時期は各遺跡における人間活動と連動して起こっている可能性が高い。なお、安威川流域では弥生時代の植生変化情報が不足しており、今後の情報蓄積と考古学成果との複合的解析により、より詳細な植生変化の検討が可能になると考える。

第7項 植物珪酸体分析から推定される稲作、農耕、植生および環境

(1) 稲作跡の検討

植物珪酸体分析において稲作跡の探査や検証を行う場合、通常、イネの植物珪酸体(プラント・オパール)が試料1gあたり5,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している(杉山2000)。なお、最近の調査では密度が3,000個/g程度あるいはそれ未満であっても水田遺構が検出された事例が報告されていることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行う。

西側地点の第5層(S3)と第6層(S4)では、イネの植物珪酸体がそれぞれ6,200個/g、5,700個/gと高い密度である。また、東側地点の第4b層(S1)と第6層(S2)では、それぞれ2,900個/g、3,000個/gと比較的高い密度である。いずれも稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている3,000個/gに近似するか超過していることから、これらの層では調査地において稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。なお、発掘調査所見では、第6層は弥生時代後期の耕作土層とされており、植物珪酸体分析の結果はそのことを支持している。なお、西側と東側の地点における植物珪酸体密度の差は、おもに耕作地としての利用期間の違いに起因するものと考えられる。後述するように、東端部は調査区で最も低い部分であり、東側地点は湿地的環境であったことが想定されることから、長期の耕作には適さなかったと推定される。

(2) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型(ヒエが含まれる)、エノコログサ属型(アワが含まれる)、キビ属型(キビが含まれる)、ジュズダマ属型(ハトムギが含まれる)、オヒシバ属(シコクビエが含まれる)、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがある。本遺跡の試料からはこれらの分類群はいずれも検出されなかった。

イネ科栽培植物の中には検討が不十分なものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性がある。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題である。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類、葉菜類などの畑作物は分析の対象外となっている。

(3) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群の推定生産量と、そこから推定される植生・環境について検討を行った。東側地点の第4b層(S2)と第6層(S3)では、ヨシ属が優勢であり、ススキ属型も多い。他にはキビ族型、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型などが認められたが、いずれも少量である。こうしたことから、当時の調査地点付近はヨシ属などの繁茂する湿地あるいはそれに近い環境であったと推定される。第4b層(S2)の時期になるとヨシ属が卓越し、より湿地に近い環境へと推移したとみられる。なお、植物珪酸体分析でススキ属型を細分することは困難であるが、湿地の環境が想定されることから、これらの層で多く検出されたススキ属型は、湿った環境に生育するオギの可能性が高い。

西側地点の第5層(S5)と第6層(S6)でも概ね同様の状況であるが、推定生産量はやや少ない。なお、発掘調査所見によると、調査区の地形は東端部が最も低く、西に向けて緩やかに高くなっていることが指摘されている。このことは、東側地点がより湿地的環境であったことと矛盾しない。

参考文献

(珪藻分析)

安藤一男(1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, 73-88.

千葉 崇・澤井裕紀(2014) 環境指標種群の再検討と更新. Diatom, 30, 7-30.

小杉正人(1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 第四紀研究, 27, 1-2

田中正明(2002) 日本淡水産動物プランクトン図鑑.名古屋大学出版会,584p.

(花粉分析)

川崎地質株式会社(1995) 東奈良遺跡における花粉・珪藻分析.東奈良遺跡-大阪府茨木東奈良第2期第1次住宅建替事業に伴う発掘調査報告書一,(財)大阪府埋蔵文化財協会,53-62

松江美千代(1993) 新池遺跡周辺における古植生とその変遷。「高槻市文化財調査報告書 第17冊 新池新池埴輪製作遺跡発掘調査報告書」,高槻市教育委員会・高槻市埋蔵文化財調査センター,314-332

中村 純(1967) 花粉分析.古今書院,232p.

中静 透(2004) 森のスケッチ(日本の森林・多様性の生物学シリーズ).東海大学出版会,236p.

新山雅広・鈴木 茂(2000) 溝咋遺跡遺構堆積物中の花粉化石群集。「(財) 大阪府文化財調査研究センター調査報告書第 49集 大阪府茨木市学園町所在 溝咋遺跡(その 1・2) ー茨木・学園町地区埋蔵文化財発掘調査 1次。2次報告書ー本文編」,(財) 大阪府文化財調査研究センター ,328ー 342

パリオ・サーヴェイ株式会社(2015) 中条小学校遺跡の自然科学分析 .中条小学校遺跡発掘調査報告書(分析・考察編) ー立命館大学大阪いばらきキャンパス建設に伴う発掘調査報告書ー ,茨木市教育委員会 ,1ー 46

(植物珪酸体分析)

杉山真二・藤原宏志(1986) 機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定ー古環境推定の基礎資料としてー. 考古学と自然科学, 19, p.69ー 84.

杉山真二(2000) 植物珪酸体(プラント・オパール). 考古学と植物学. 同成社, p.189ー 213.

杉山真二・松田隆二・藤原宏志(1988) 機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用ー古代農耕追及のための基礎資料としてー. 考古学と自然科学, 20, p.81ー 92.

藤原宏志(1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) ー数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法ー. 考古学と自然科学, 9, p.15ー 29.

藤原宏志・杉山真二(1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究(5) ープラント・オパール分析による水田址の探査ー. 考古学と自然科学, 17, p.73ー 85.

第7章 総括

第1節 遺構の変遷

本章では、最初に今回の調査と OT08 - 2 調査において検出された遺構をもとに太田遺跡における遺構の変遷を概観し、次節においては太田遺跡を特徴付ける古墳群について今少し詳細にみていきたいと思う。なお、以下では太田遺跡・太田廃寺跡 2017 - 1 調査と太田遺跡・太田城跡 2017 - 1 調査双方の調査成果を総合して記述を進めるが、記述が煩雑になることを避けるため、太田遺跡・太田廃寺跡 2017 - 1 調査を「太田廃寺跡」、太田遺跡・太田城跡 2017 - 1 調査を「太田城跡」と省略して記述する。

1. 弥生時代前期以前

今回の調査において帰属時期を判断しうる遺物のうち最古となる資料は太田城跡における下層確認トレンチ第8層より出土した縄文時代晩期前葉の土器片(386)となる。第8層は湿地状の低湿な環境下における堆積と考えられることから当地に集落が営まれた可能性は低いと思われるが、土器の器面がさほど摩滅していないことから近隣より運ばれてきたものと推測される。やや時期は下るが、太田廃寺跡においても縄文時代晩期末に帰属する土器が細片ながら複数点出土している。また、太田城跡第7面において検出された 10009 溝からはほぼ完形を保つ弥生時代前期末の壺が出土している。これまでのところこれらの時期に帰属する遺構は認められないものの、今後周辺の調査が進めば当該期の集落が検出される可能性がある。

2. 弥生時代後期から古墳時代前期

当地において、確実に人間の活動が確認できるのは弥生時代後期以降となる。一部においては後期前葉まで遡る可能性を示す資料も認められるが、遺物量が増加するのは後期中葉以降となる。図 149 は弥生時代後期から古墳時代前期における遺構の分布を示したものである。このうち弥生時代後期中葉に帰属する遺構としては、太田廃寺跡 1 区における 01005・01009 溝や 01006 土坑、太田城跡の第7面において検出された 10009 溝や 10010 高まり、疑似畦畔などから構成される水田跡などが挙げられる。また、詳細時期は不明であるが、OT08 - 1 調査 D 区において検出された円形周溝(DSD - 21)もこの時期に帰属する可能性がある。帰属時期を明らかにしえない遺構が多いため断定はできぬが、当該期の遺構は調査範囲の南部にまとまる傾向が認められる。これらの遺構から、太田廃寺跡側を居住域とし、太田城跡側の低地帯を生産域として開発していたことが明らかになった。

太田城跡における調査で検出された弥生時代後期に帰属する水田跡は、当該地域においては初めての事例となる。調査の結果、これらの水田は北から南および西から東に向けて低くなる地形を利用して水を廻していたと考えられる。しかしながら、水田作土である第6層を観察すると、調査区中央付近と東端部では様相が異なっており、中央部の第6層が均質なシルトであるのに対し、東端部では細かいブロック土を多く含むものであった。こうした土質の状況と今回の調査区において最も低地となる地形を勘案すると、東端部付近においては水田を造営したものの排水の難など何らかの要因により水田耕作には不適と判断され、さほど利用されることなく放棄されたのではないかとの推測がたてられた。こうした仮説を検証する目的も含め、当該地点において試料を採取し自然科学分析を実施した。結果は第6章に記したところであるが、調査区東端部付近ではイネ科の植物珪酸体は確認されるものの調査区中央部にお

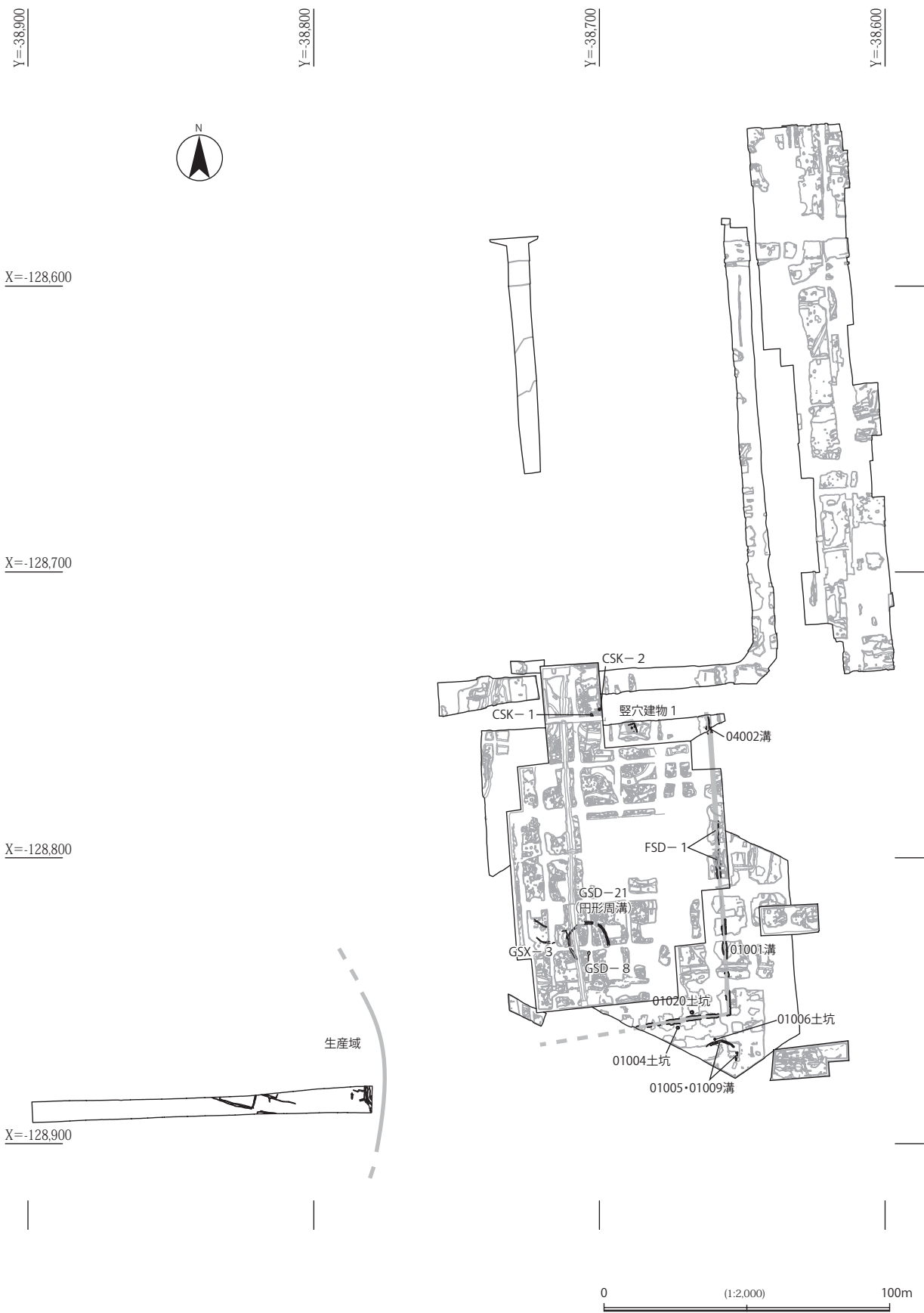


図 149 弥生時代後期から古墳時代前期の遺構分布

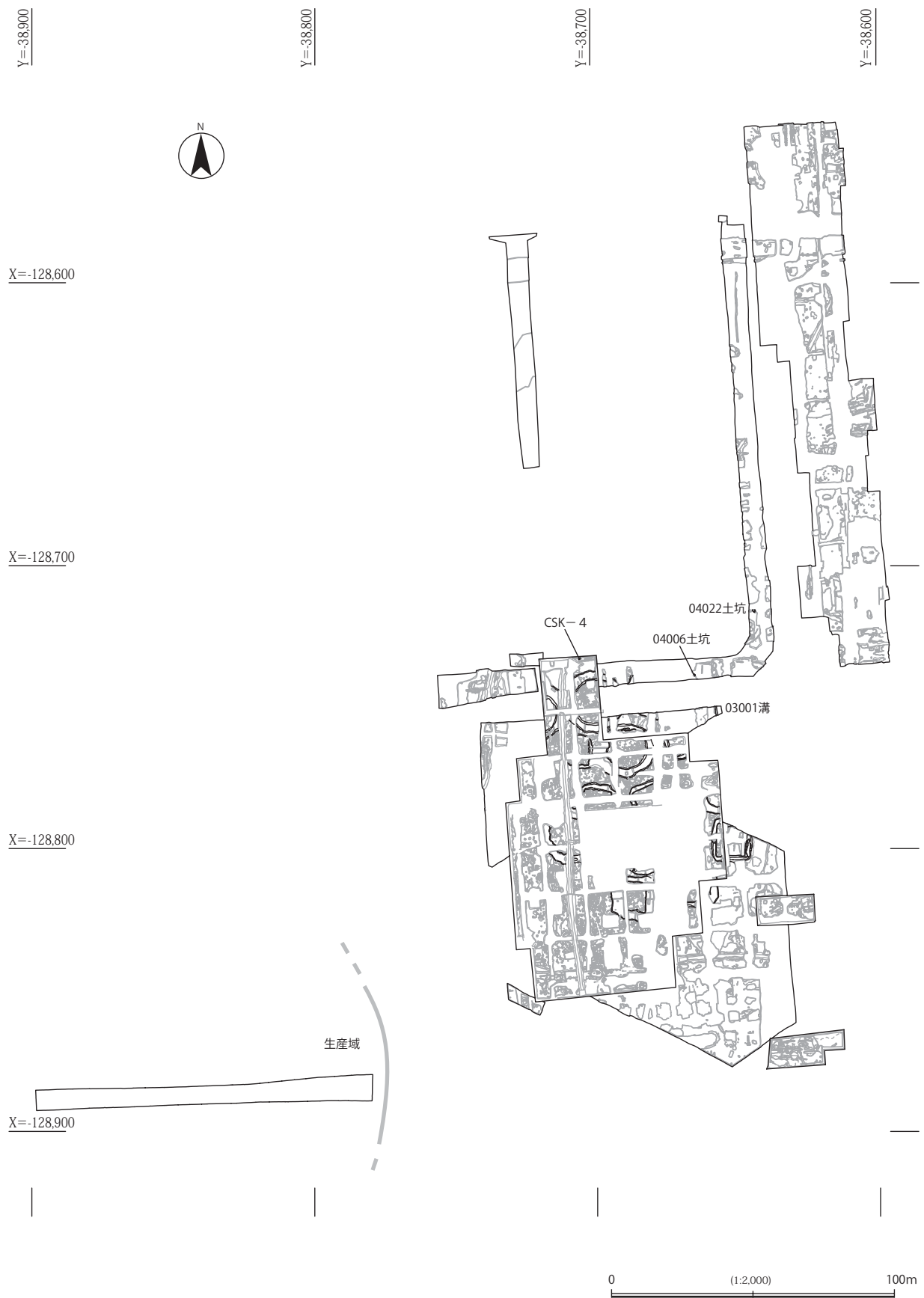


図 150 古墳時代中期の遺構分布

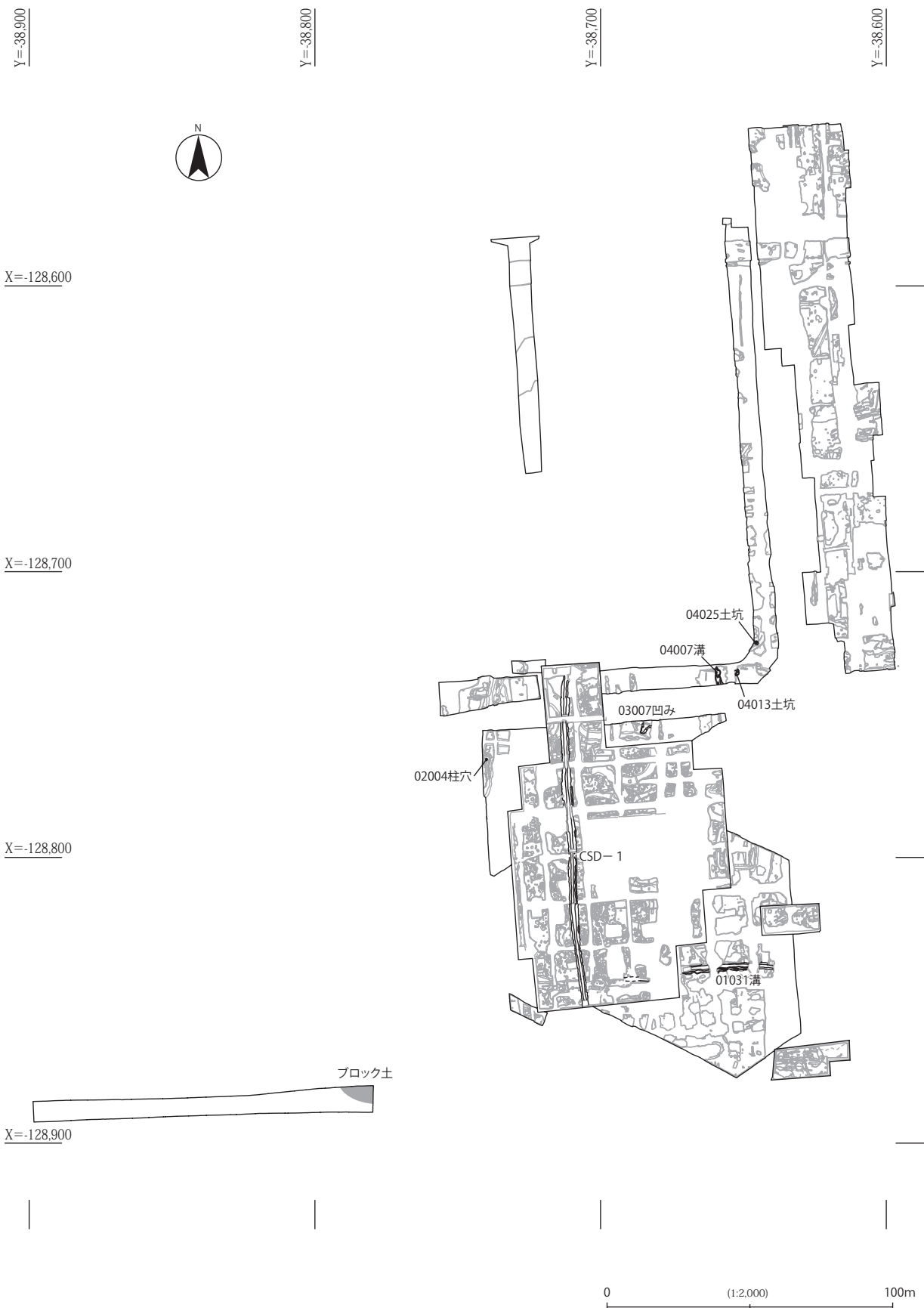


図 151 古墳時代後期末から古代の遺構分布

いて採取した試料に比して少ない。また、栽培植物以外の植物珪酸体をみても調査区東端部においてはヨシ属の植物珪酸体が多く認められた。このため、当該地は周辺から水が集積する湿潤な環境を呈していたことが推察される。珪藻・花粉分析の結果もこれを肯定するものであることから、調査の所見と矛盾しない結果となった。

以上のことから、当該期の水田耕作においては、当初は低地部においても溝や畦畔を造成し耕作を試みたが、周囲からの水の流れ込みなどを要因として比較的早い段階で低地部における耕作は放棄され、より安定した調査区中央部以西において水田が営まれたものと考えられる。

こうした人びとの営みは古墳時代前期にかけて継続されるが、弥生時代後期後葉以降は居住域を北へと拡大させたようで、OT08 - 2 調査C区において検出されたCSK - 1やCSK - 2、太田廃寺跡3区の竪穴建物1など、調査範囲の中央部においても遺構が認められるようになる。また、遅くとも古墳時代初頭には集落を画する長大な溝（FSD - 01、01001 溝、04002 溝）が掘削されたと考えられ、古墳時代前期にかけてこの溝の西および北側を居住域として継続的に利用していたものと考えられる。

3. 古墳時代中期

これまでのところ古墳時代中期前半の遺物や遺構は認められないことから、古墳時代中期を迎えると集落は廃絶したと考えられる。次に当地において活動が確認されるのは古墳時代中期後半のこととなる（図 150）。この時期にはかつて居住域として利用されていた調査範囲中央部において円墳や方墳からなる古墳群が築かれるようになる。古墳群については次節においてあらためて記述するが、傾向としては北に円墳が、南に方墳が多く認められる。時期は一部が中期中頃に遡る可能性を残すが、多くは中期後葉と考えられる。これらの古墳を造営した人びとの居住域については、これまでのところ明確な遺構が検出されておらず明らかにしえないが、太田廃寺跡4区において検出された04022 土坑から古墳群と同時期と考えられる長胴甕と鍋が出土している。周辺において検出された03001 溝や04006 土坑、OT08 - 2 調査C区北端部において検出されたCSK - 4も同時代と考えられ、古墳群の北においてこの時期の遺構が認められる。一方で、古墳群の南においては確実に当該期に帰属すると考えられる遺構は認められないことから、前代の居住域よりも一段高い、古墳群の北に当該期の集落が営まれていた可能性を指摘することができる。しかしながら、今回の調査においては当該範囲は攪乱が著しく検証することはできなかった。

太田城跡においては第5層が古墳時代前期から後期にかけて形成されたと考えられる。前章で記したように、自然科学分析の結果では調査区中央において採取した第5 - 2層からもイネ科の植物珪酸体が6,200 個/gという高い密度を示していることから、当該期においても前代に引き続き水田稲作が営まれていたものと思われる。今回の調査では第4層から第5層にかけては土壌層が連続しており、水田稲作を証する遺構を検出することができなかったが、今後は水田跡が検出される可能性があることを考慮したうえで調査に臨むことが必要と考える。

4. 古墳時代後期から奈良時代

古墳時代後期になると当地における活動は再び低調となるようであり、これまでのところ確実にこの時期に帰属すると考えられる遺構は検出されていない。しかしながら、数は多くないもののOT08 - 2 調査ならびに太田城跡では当該期の遺物出土していることから、向後周辺の調査が進めば集落が確認

される可能性がある。

古墳時代末から飛鳥時代になると再び遺構が確認されるようになり、遺物の出土量も増加する。当該期の遺構としては、太田廃寺跡3区における03007凹みや4区における04007溝、04013・04025土坑が該当する(図151)。03007凹みからは窪地として残存した古墳の周溝や自然に形成された低まりを廃棄場所として利用するとともに埋め立てて平坦化させていたことが窺える。同様の行為はOT08-2調査における10～12号墳においても認められる一方で9・13号墳をはじめ、太田廃寺跡1区からは当該期の遺物がほとんど出土していないことから、概ね9・13号墳の西あたりに居住域の東限があったと推測される。これは前代までと同様に、太田廃寺跡1区の南東部が東および南に向けて緩やかに下降する地形を呈しているため、居住地には不適と判断されたためと推測される。

奈良時代ではOT08-2調査におけるCSD-1が奈良時代から平安時代にかけての開削と推定されている。また、詳細時期は不明であるが、太田廃寺跡1区における01031溝もCSD-1と同様に正方位を指向し、規模も同等であることから時期を同じくして掘削された可能性がある。この他、太田廃寺跡2区で検出された02004柱穴も掘方が大型の方形を呈することから、この時期に帰属する可能性が高い。また、本報告においては平面図を示せていないが、OT08-1調査において検出された石敷遺構(SF-1)もCSD-1と同様に奈良時代後半から平安時代前期の造営と考えられる。

太田城跡では第5層から第4層が当該期に帰属すると考えられる。第5面では調査区東端部において10006たわみの形成を確認した。形成された原因は明らかにしえなかったものの、自然科学分析の結果からも裏付けられるように、このたわみの形成により元来低地であった調査区東端部がさらに低く、湿潤な環境におかれたと想定される。こうした低まりは第4層の堆積により徐々に埋没していったようであるが、最終的に第4面において確認されたブロック土の投入により平坦化が図られたようである。ブロック土からは古墳時代から飛鳥時代にかけての遺物が多く出土しているが、細片1点ながらも奈良時代中頃の杯が含まれることから、この時期に開発されたものと考えられる。この場合、CSD-1の開削とブロック土の帰属時期が合致することから、溝の掘削に伴い発生した土砂が投入された可能性も考えられる。ブロック土を構成する土が太田廃寺跡において確認された第4～6層に類似していることもひとつの傍証となるであろうか。なお、OT08-2調査では調査区西端部において、古墳などの遺構が流水により破壊された痕跡が確認されている。安威川の氾濫に起因すると想定されているが、流域では大規模な地形の改変を引き起こした可能性が高い。あるいはこうした自然災害を契機として、土地の再開発が行われた可能性も考えられる。

5. 平安時代以降

平安時代から鎌倉時代ではOT08-2調査では第1面として調査が行われ、柱穴や耕作に伴うと考えられる小溝が検出されている。一方、太田廃寺跡においては第4面が当該期に帰属する遺構面と考えられるが平面調査を実施しておらず、第5面においてわずかに残存した遺構を確認しえたのみであるため詳細は不明である。太田城跡では調査区西端部において第4面(第3層下面)に帰属する擬似畦畔を検出していることから、引き続き耕作域として利用されていたことが窺える。第3層からは細片ながらも輸入陶磁器のほか、他地域産の灰釉陶器や緑釉陶器が出土している。調査地北の微高地は太田城跡の推定地となっている。発掘調査がなされていないため詳細は明らかにし得ないが、こうした奢侈品を手に行うことができる在地領主層が当地の開発を主導していたものと思われる。

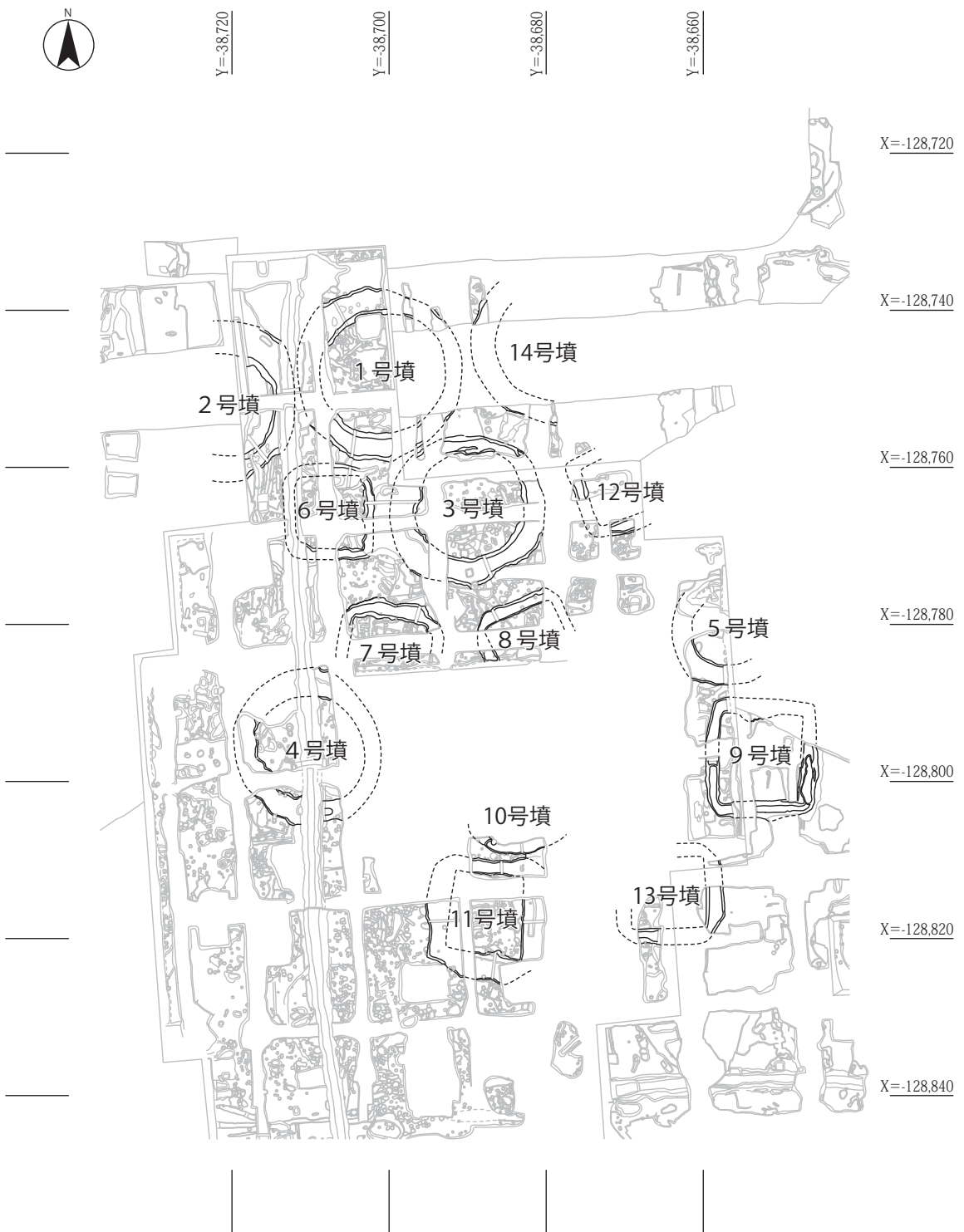


图 152 古墳分布

第2節 太田古墳群の検討

今回の調査では OT08 - 2 調査において確認された古墳の延長部に加え、新たに 2 基の古墳を検出した。これにより、太田遺跡においては円墳 6 基、方墳 7 基、墳形不明 1 基が確認されたこととなる。本節ではまず各古墳の概要について、OT08 - 2 調査の成果を踏まえながら概観する。次に本調査において検出された古墳の中で最も遺存状態が良好であった O1014 溝〔9号墳〕より出土した埴輪をもとに太田古墳群における埴輪の特徴について検討を加える。そのうえで古墳群の変遷についてまとめ、総括としたい。

各古墳の概要を述べる前に、太田古墳群の立地について再度確認する。第5章において記したように、調査地は北と東を段丘崖に画され、巨視的には北から南に向けて緩やかに下降する地形を呈する。調査面である第5面の高さは、最も北に位置する太田廃寺跡6区北端部において 20.7 m、最も南に位置する太田廃寺跡1区南端部において 18.1 mを測り、比高は 2.6 mとなる。一方、古墳群検出面の高さは、現在までのところ最も北に位置する 1号墳ならびに 2号墳において 19.2 m、南に位置する 13号墳において 18.4 m前後を測る。また、最も東に位置する 9号墳においては 18.6 m前後を測る。太田廃寺跡1区の調査成果から、9号墳より東においては第6層が段丘崖に向けて緩やかに下降する地形を呈することが明らかとなった。また、太田城跡の調査成果から、古墳群の西方にはさらに一段低くなる段丘崖が存在したと考えられる。以上から、太田古墳群は北の丘陵から舌状に延びる微高地中央の安定した地に築かれたと考えられる。

第1項 古墳群概観

1号墳 (図 152・153)

本調査における O3006・O4001 溝、および OT08 - 2 調査における CSD - 2、ESD - 15 から構成される円墳である。周溝を含めた平面形はやや南北に長い楕円形を呈し、周溝外法の南北長は約 22.4 mを測る。周溝の内法、すなわち検出面における墳丘の裾はやや不整な円形を呈していたと思われ、南北長は 14.9 mを測る。東西の周溝は攪乱により破壊されるか未調査地に含まれるため推定となるが南北と同様に 15 m前後と思われる。現在までのところ、古墳群の中で最も北に位置しており、西に 2号墳、東に 14号墳、南に 3号墳が隣接する。本調査以前には 3号墳と周溝が重複すると想定されていたが、太田廃寺跡3区における調査の結果、検出面においてわずか 1 mほどではあるが周溝間に間隙を設けており、重複させることなく築かれていたことが判明した。未調査地や攪乱、古代の溝である CSD - 1 などが介在するため断定はできないものの、2号墳や 14号墳においても同様に周溝を重複させることなく古墳が築造されていたのではないかと推測される。

遺物は須恵器や円筒埴輪、形象埴輪が出土している。須恵器は概ね TK23・47 型式に比定されることから古墳時代中期後葉の築造と考えられる。円筒埴輪は OT08 - 2 調査における CSD - 2 や ESD - 13 から多量に出土している。多くは 4条5段構成で3段目に円形透孔を穿つ。また、図版 69 - 502 のように突帯剥離面に凹線が認められるものもあることから、製作過程において突帯間隔を一定に保つ設定(突帯間隔設定技法)がなされていたことが窺える¹⁾。外面色調は灰白もしくは淡黄色を呈し、焼成は硬質で黒斑は認められないことから窖窯焼成と考えられる。これらの埴輪は川西編年におけるⅣ期に比定され、埴輪製作地の候補として高槻市に所在する新池遺跡が挙げられる²⁾。しかしながら、1号

墳からは太田廃寺跡4区04001溝から出土した319のように同様の構成ならびに焼成でありながら口縁部が高く、突帯間隔にも若干のばらつきが認められる埴輪も一定量出土している。また、315や509のように焼成は硬質ながらも外面色調が赤褐色を呈し、断面形状が丸い突帯を貼り付けるものや、316や506・510のように外面色調が黄橙色を呈し、焼成がやや軟質な埴輪なども出土しており、埴輪の様相は一様ではない。形象埴輪は人物埴輪や動物埴輪、鶏形埴輪、家形埴輪などが出土している。ただし、03006溝から出土した女子埴輪の衣装片が2号墳の南東周溝であるDSD-2より出土した体部片と接合することから、すべての埴輪が原位置付近の周溝へ転落したとは考えにくく、埋没するまでの過程において外的な要因により移動した可能性が高い資料も含まれる。今回の調査ではその要因を特定するには至らなかったが、古墳時代末から飛鳥時代においては太田廃寺跡3区03007凹みのように人為的に窪地を平坦化するための造作や、周溝に土器を投棄したと考えられる事例が複数基の古墳において認められることから、当該期において古墳を損壊するような開発行為がなされた可能性がある。

2号墳(図152・153)

1号墳の西に隣接する円墳である。OT08-2調査において周溝東半部の一部が確認されており(CSD-3、DSD-22)、太田廃寺跡2区および5区にかかることから、延長部の検出が期待されたが、いずれも大規模な攪乱を受けており残存していなかった。このため墳丘規模は不明である。

遺物は円筒埴輪や朝顔形埴輪、人物・動物・家形などの形象埴輪が出土している。円筒埴輪のうち、全形が復元された4条5段構成のものはいずれの段もタテハケ後にヨコハケが施され、太田遺跡にあつては丁寧なつくりである一方で、突帯が三角形を呈するなどの簡略化も認められる。また、口縁部が高く、外面調整を1次調整のナメハケのみとする資料も出土しており、1号墳と同様の傾向が窺える。しかしながら、前述のように今回の調査において03006溝より出土した人物埴輪の衣装片(265)が2号墳出土の人物埴輪と接合することから、これらの埴輪がどこまで本古墳に伴うかは疑問が残る。そうした前提のもとではあるが、新池埴輪窯から供給されたと推察される4条5段構成の円筒埴輪が1・2号墳にしか認められないという事実は、当古墳群の成立を考えるうえで重要な成果といえるであろう。

3号墳(図152・153)

1号墳の南に隣接し、本調査における03005溝とOT08-2調査におけるESD-12・16からなる。周溝を含めた平面形は東西に長い楕円形を呈し、周溝外法の南北長は約19.0mを測り、東西長は20～21m程度と推測される。検出面における墳丘の裾は、崩落によるものであろうか北西部が一部墳丘側に凹むなど不整な円形を呈しており、南北長13.1m、東西長13.9mを測る。

遺物は須恵器や円筒埴輪、形象埴輪が出土している。須恵器は古墳時代末から飛鳥時代に帰属する杯身や杯蓋も含まれるが後世の混入と考えられる。それ以外はTK23・47型式に比定されることから1号墳と同様に古墳時代中期後葉に築造されたと考えられる。円筒埴輪は本調査においては出土していないが、OT08-2調査においてESD-12・16より出土している。突帯の断面形状は扁平な台形と三角形を呈するものが混在しており、外面調整はタテハケの後ヨコハケを施す。外面色調は黄橙系である。いずれも透孔は残存していないため構成は不明である。形象埴輪は動物埴輪や家形埴輪が出土している。しかしながら、第5章において既述したとおり、03005溝における遺物の出土状況をみる限りにおいては、本来は異なる古墳に伴っていた資料が含まれている可能性を考慮する必要がある。

4号墳(図152)

古墳群の南西部に築かれた円墳である。1～3号墳とは若干距離を置き、北東には7号墳が接する。

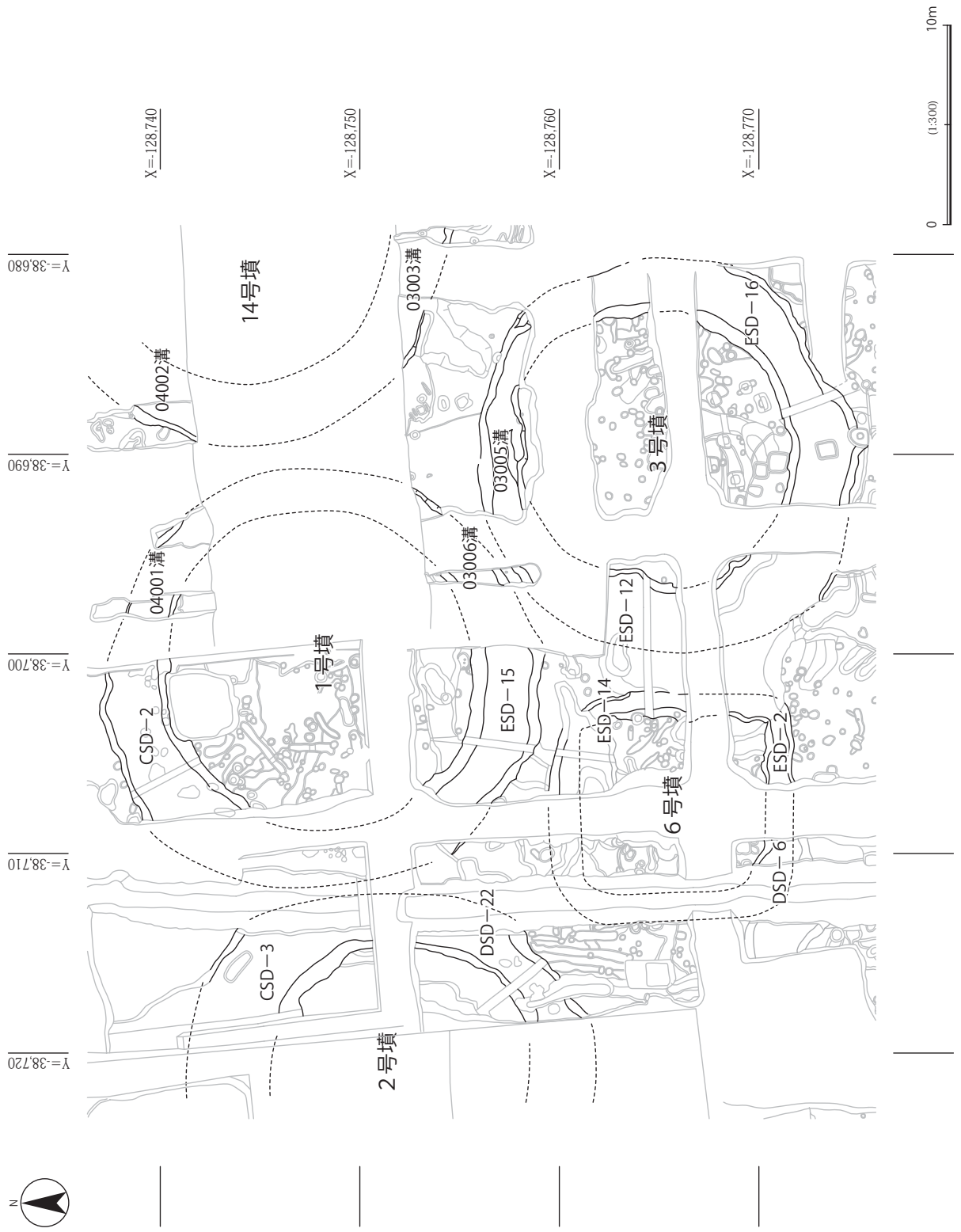


图 153 1~3·6·14号墳 平面

周溝の南西部（DSD - 12）と北部が検出されているが、東半は大きく攪乱を受ける。

遺物は須恵器や円筒埴輪、鶏形埴輪が報告されているほか、家形埴輪の屋根および壁体部の破片資料も確認された（図版 70 - 513・515）。

5号墳（図 152・154）

古墳群の東部、9号墳の北において検出された円墳である。周溝南西部にあたる FSD - 11 が検出されたのみであるため、規模は不明である。また、遺物も出土していないため帰属時期についても現段階では明らかにはしえない。

6号墳（図 152・153）

3号墳の西に隣接する方墳である。DSD - 6 と ESD - 2・14 からなり、南・東周溝のほぼ全域と北周溝の一部が確認されている。西周溝は CSD - 1 掘削に伴い破壊されたと思われる。墳丘の規模は北周溝墳丘側の肩が攪乱されているため確実ではないが、南北 9 m 程度と思われ、南周溝墳丘側の掘方は $N - 3^{\circ} - W$ に偏移する。

遺物は ESD - 14 より須恵器甕が、ESD - 2 より円筒埴輪、形象埴輪などが出土している。このうち須恵器甕は TK23・47 型式に比定されることから、古墳時代中期後葉に位置付けられる。

7号墳（図 152）

3・6号墳の南方で検出された。北周溝の全域が検出されており（ESD - 11）、それに連続する東西周溝の北端部が辛うじて残る。東西辺約 12 m の方墳と考えられ、周溝墳丘側の掘方は $N - 11^{\circ} - E$ に偏位する。南西には 4号墳が接しており、『概報』においては周溝が重複するように復元されるが、上述の 1・3号墳の周溝を参考にすると、周溝間にわずかな間隙を残している可能性が高いと推察される。

遺物は須恵器、円筒埴輪が出土している。

8号墳（図 152）

7号墳の東に隣接する方墳である。北および西周溝が部分的に検出されており、北周溝の墳丘側掘方は $N - 21^{\circ} - W$ に偏移する。南ならびに東周溝は攪乱に破壊され残存していないが、古墳東方の残存地からは周溝が確認されていないため、周溝は攪乱内で屈曲するものと思われる。この場合、墳丘の東西長は 9.3 m 前後と思われる。

遺物は須恵器杯身、杯蓋、甕、円筒埴輪、形象埴輪が出土している。須恵器は甕が若干古くなる要素を残すが、概ね TK23・47 型式に比定される。また、円筒埴輪も透孔の位置から 3条 4段構成と考えられ、基底部のヨコハケが省略されるなど、他の多くの古墳と同様の形態を示す。以上から、本古墳も古墳時代中期後葉の築造と考えたい。なお、須恵器杯身には飛鳥時代に下る資料も含まれるが、1号墳や 3号墳と同様に混入したものと考えられる。

9号墳（図 152・154）

本調査における 01014 溝と OT08 - 2 調査における FSD - 2 からなる方墳である。周溝墳丘側の掘方は $N - 3^{\circ} - E$ に偏移する。検出面における周溝外法の南北長は約 15.1 m、東西長は 15.0 m を測る。墳丘裾の南北長は 11.6 m、東西長は 10.2 m を測り、わずかながら南北に長い墳形を呈する。なお、本調査において検出された北周溝は、FSD - 2 における北周溝よりも若干墳丘側に入ることから、崩落などにより墳丘が抉れている可能性がある。

遺物は FSD - 2 から須恵器や円筒埴輪が、01014 溝から土師器や須恵器、円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪、石製品が出土している。このうち須恵器は杯身、杯蓋、甕が出土しており、いずれも



Y=-38.670

Y=-38.660

Y=-38.650

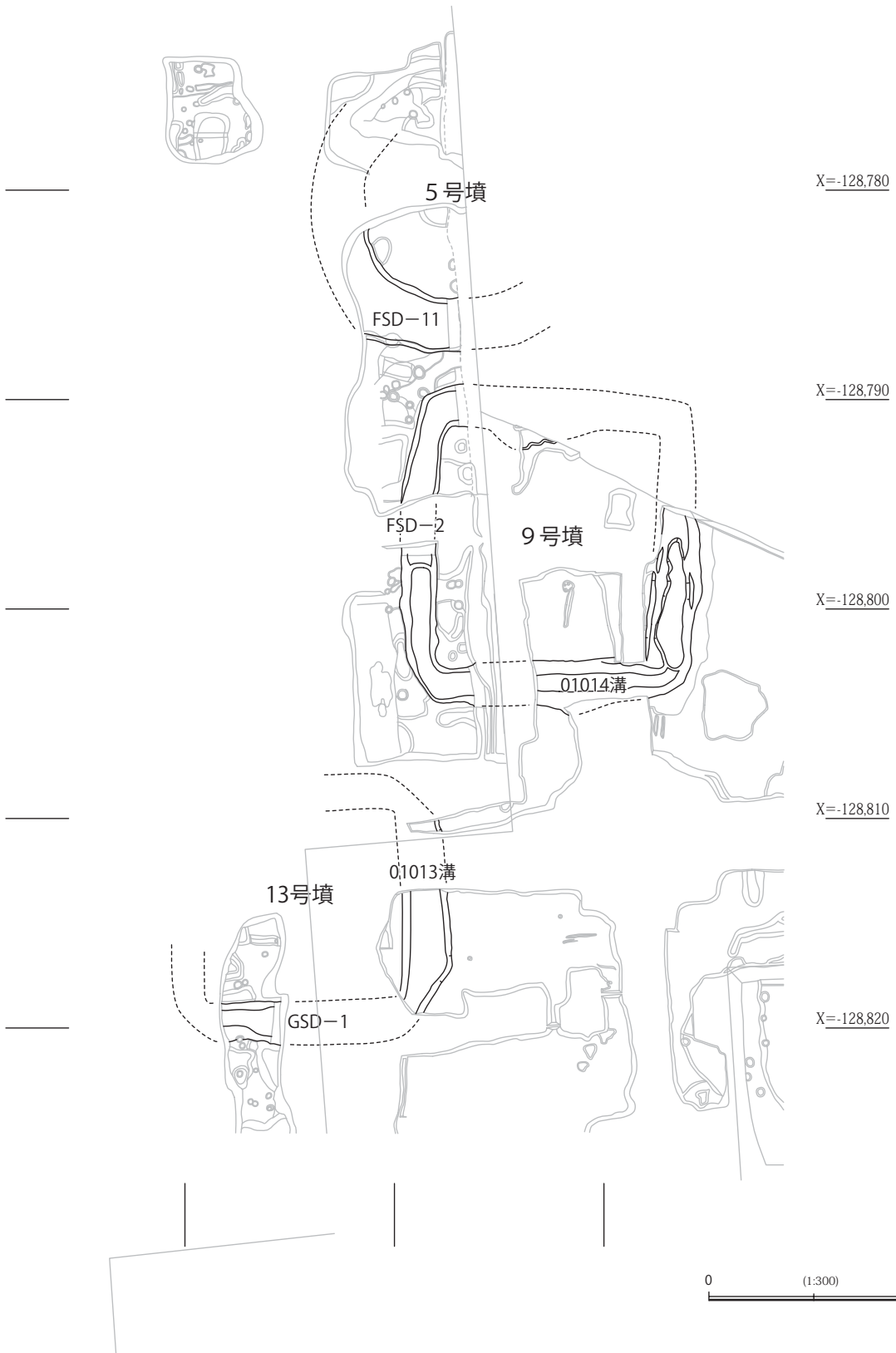


图 154 5·9·13号墳 平面

TK23・47 型式に比定され、古墳時代中期後葉に位置付けられる。土師器は 01014 溝から甕が 3 点出土しており、うち 2 点は原形を復元可能な長胴甕である。これらの甕も須恵器と同時期の所産と考えると矛盾しないことから、9 号墳は古墳時代中期後葉の築造と判断される。これらの土器のうち、須恵器杯身、杯蓋、甕、土師器甕の口縁部片は古墳全体からみると東周溝中央部付近、土師器長胴甕は東南角、須恵器甕は南周溝中央からの出土となる。

円筒埴輪ならびに朝顔形埴輪は今回の調査において最も多く出土している。これについては次項において改めて詳述する。形象埴輪のうち鶏形もしくは水鳥形埴輪の羽部と思われる破片は東周溝中央部付近から多く出土していることから、墳丘東部に配置されていた可能性が窺える。

10 号墳 (図 152)

4 号墳と 9 号墳の間に位置し、後述する 11 号墳の北に隣接する古墳である。検出地周辺は土壤汚染のため調査除外と判断された。このため GSD - 12 とされた南周溝の外側掘方の一部が検出されたのみであるため墳丘規模は不明である。なお、『概報』においては 10 号墳は方墳を想定した復元がなされているが、周溝掘方が緩やかな弧を描くことから円墳となる可能性も残る。いずれにせよ墳丘側の掘方が残存していないため判断としないことから、墳形不明としておく。

遺物は須恵器、円筒埴輪が出土している。このうち円筒埴輪には透孔を有する体部片が認められ、透孔の下位には 2 段分が残存していることから 4 条 5 段構成であったと考えられる。しかし、外面調整は 1 次調整のタテハケのみで仕上げしており、1・2 号墳より出土した同規格の円筒埴輪に比して簡略化が進んでいることが看取される。

11 号墳 (図 152)

10 号墳の南において検出された方墳である。GSD - 13・14・17 からなり、各辺の周溝が部分的に残存する。墳丘裾の南北長は 10.3 m を測る。東周溝墳丘側の掘方は N - 11° - E に偏移する。

遺物は須恵器杯身、甕、朝顔形埴輪が出土している。朝顔形埴輪は 2 段目に円形の透孔を穿っており、9 号墳出土のものと様相を異にする。

12 号墳 (図 152)

3 号墳の東において検出した。南周溝および西周溝の一部 (ESD - 17・18) が検出され、いずれも直線的に延びることから方墳と考えられる。墳丘規模は不明である。西周溝墳丘側の掘方は N - 16° - W に偏移する。

遺物は須恵器杯身・甕・甕および円筒埴輪が出土している。このうち甕と甕は TK23・47 型式に比定されることから古墳時代中期後葉に位置付けられる。

13 号墳 (図 152・154)

9 号墳の南に位置し、本調査により新たに確認された方墳である。本調査における 01013 溝と OT08 - 2 調査における GSD - 1 から構成される。周溝の東辺および南辺を部分的に検出したにとどまるため詳細な規模は不明である。東周溝墳丘側の掘方は N - 1° - E に偏移すると思われる。

遺物は須恵器杯蓋と高杯、円筒埴輪、朝顔形埴輪が出土している。杯蓋ならびに高杯は TK23・47 型式に比定されることから古墳時代中期後葉の築造と考えられ、北に隣接する 9 号墳と同時期にあたる。

円筒埴輪は口縁部片 1 点のみを図化しえたが、器面の摩滅が著しく調整は不明である。朝顔形埴輪は口縁部から体部最上段にかけて残存する資料 2 点を復元しえた。口縁部の形態は 01014 溝出土の 98 と概ね同様である。

14号墳（図152・153）

1号墳の東に隣接し、本調査において新たに確認された古墳である。03003溝と04002溝から構成され、両溝の形状から円墳と考えられるが、調査範囲においては遺存状態が悪く部分的な検出にとどまり、かつ未調査区を間に挟むため規模は不明である。

遺物は円筒埴輪が出土している。このうち器形を窺える資料に着目すると、03003溝より出土した227や229から2段目に円形透孔を有する3条4段構成の埴輪であったと思われる。04002溝出土の321や322は基底部を欠損しているため確実ではないが、突帯の断面形状や外面調整、焼成などの諸要素から同様に3条4段構成をとっていたものと思われる。突帯の断面形状は三角形が多いが、229のように丸みを帯びるものもある。また、228や229のように基底部にタタキ目を残すものが認められ、底部調整が施されていたことが看取される。14号墳からは詳細な時期を窺うことができる土器が出土していないため断定はできないが、前述のように底部調整を施した円筒埴輪が1号墳や9号墳からも出土している。このうち1号墳は規格を異にする4条5段構成の円筒埴輪が大半を占めることから、14号墳に帰属する埴輪が混入した蓋然性が高い。一方、次項で述べるように9号墳は後世の攪乱の影響が小さいと考えられることから、14号墳は9号墳と同時期の築造と考えたい。

第2項 01014溝〔9号墳〕出土埴輪

太田廃寺跡1区において検出された01014溝〔9号墳〕は、今回の調査において検出された古墳周溝では最も残存状態が良好であり、円筒埴輪を中心に多量の遺物が出土している。また、1～3号墳など古墳群北部に位置する古墳の周溝には後代の遺物が混在していることから、これらの古墳が後世の開発による影響を受けたと考えられる一方で、01014溝においては新しい時代の遺物を含まないことから、埋没過程において大きな改変は受けなかったものと推察される。こうしたことから、01014溝より出土した埴輪群は太田古墳群に供給された埴輪とその製作集団を考察するうえで良好な資料と考えられる。以下では、出土した埴輪の諸特徴や出土地点などから検討を加える。

01014溝より出土した円筒埴輪を俯瞰すると、規格はいずれも3条4段構成で統一されるが、器形や口縁部径は不揃いである。突帯の形状は扁平な台形か三角形が大半を占めるが、稀に突出するものも認められるなど一様ではない。突帯間隔は個体間のみならず同一個体内においてもばらつきがあり、突帯が剥離した資料を観察する限りでは突帯間隔設定技法は確認できなかった。外面調整も2次調整のヨコハケを施す個体と省略する個体が併存する。さらには、基底部にタタキやケズリ、連続したユビオサエなどの整形を施したと考えられる資料も散見された。

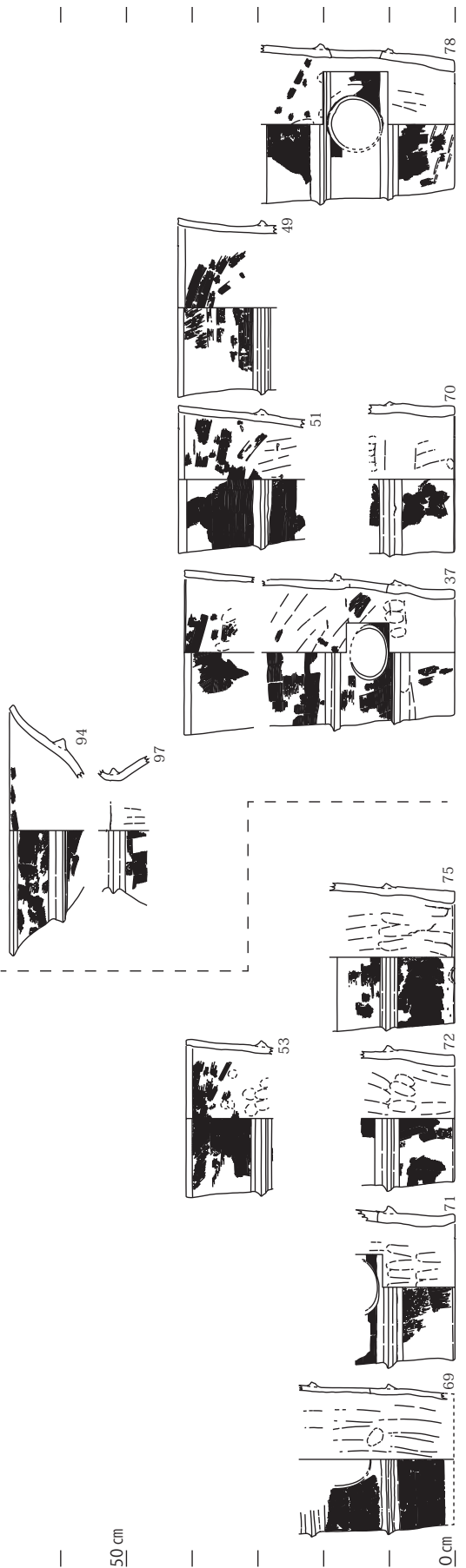
それでは、こうした個体差が顕著な埴輪が樹立された場合、どのような景観を呈するのであろうか。残念ながら太田古墳群は9号墳のみならず、いずれの古墳も墳丘は削平されており、埴輪の配置状況を直接的に確認することはできない。しかしながら、上述のように01014溝は後世の改変の影響が小さく、比較的に原位置から近い周溝へと転落した可能性が高いと思われる。無論のことながら、いずれも周溝出土の遊離資料であるため墳丘に樹立された当時の配置を保つものではないが、おおまかな傾向は掴むことは可能と思われることから、出土地点をもとに配置の復元を試みたい。

図155・156は出土した円筒埴輪および朝顔形埴輪のうち、基底部もしくは口縁部が残存し、かつある程度形態を復元できたものを、出土地点ごとに並べたものである。図155の左上方が01014溝南西端となり、以下、右に向けて東、北へと出土地点が変位する。完形に復元される資料や基底部など1

南周溝畦

ブロックH

SW



ブロックG

ブロックD~F

ブロックD

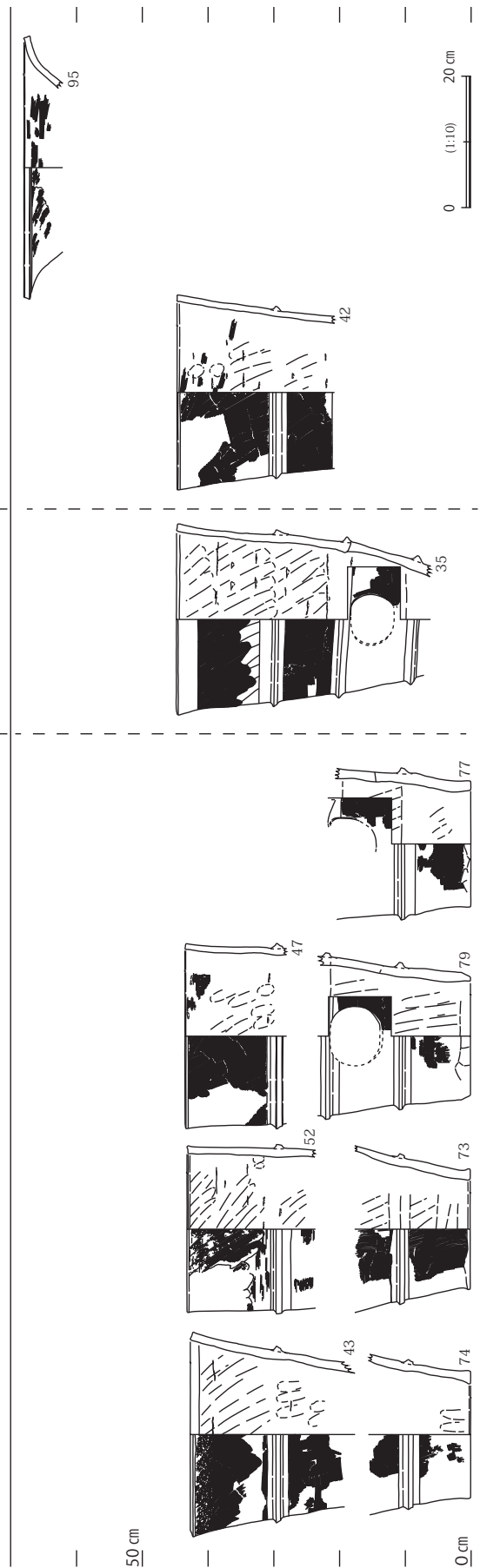


図 155 01014 溝 [9号墳] 出土埴輪 (1)

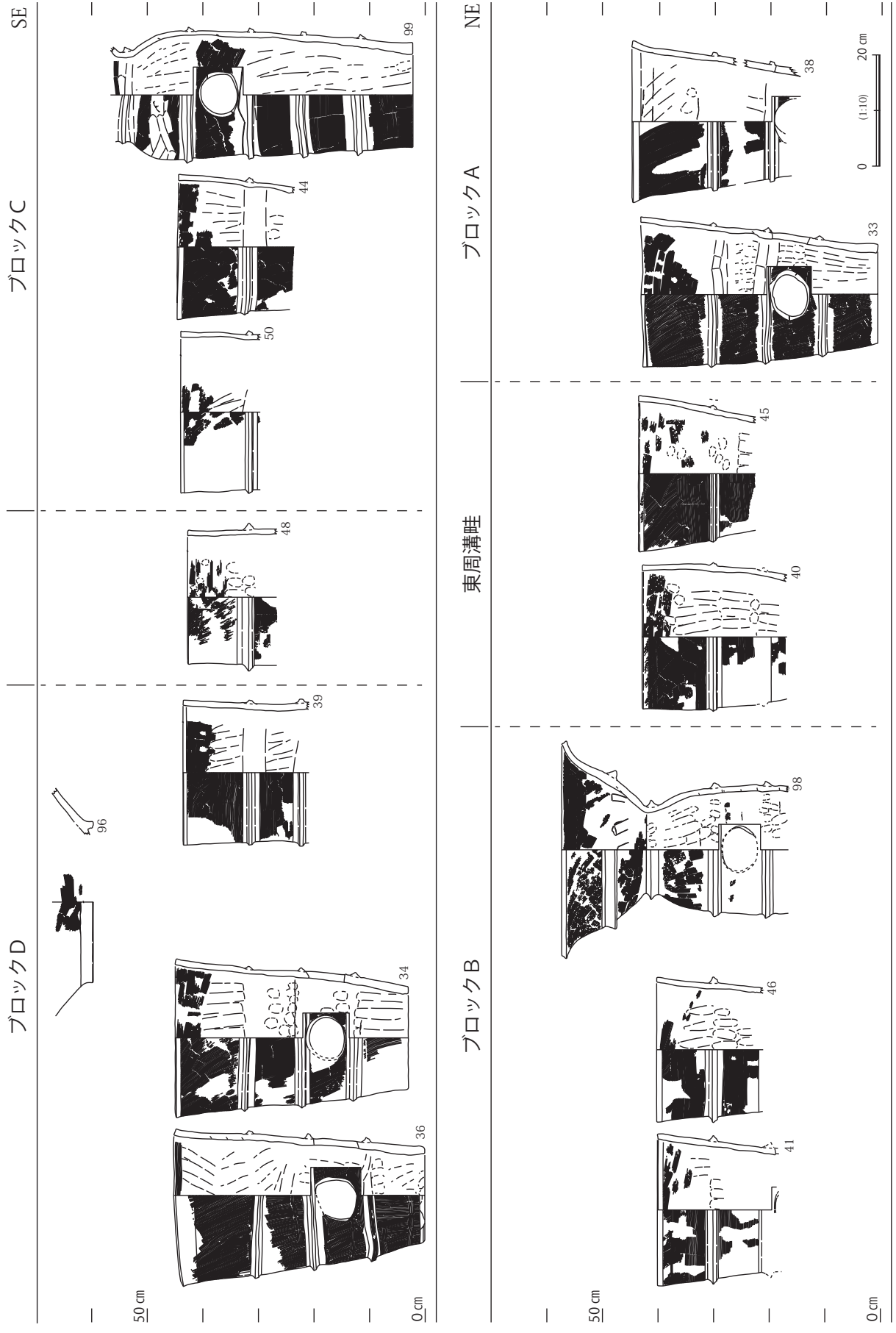


図 156 01014 溝 [9号墳] 出土埴輪 (2)

条目の突帯が残存する資料については1条目の突帯を基準とし、口縁部の資料については最上段の突帯を基準として並置している。

両図に掲載した円筒埴輪のうち、最も口縁部高が高いのは35の15.2cm、最も低いのは48の9.9cmとなりその差は5.3cmを測る。一方、基底部高は79が最も高く10.8cm、34が最も低く9.4cmで差は1.4cmとなる。このようにみると、基底部高は設置の際の据え付け穴の調整で解消を図れる程度の差であると考えられるが、そうした処理が困難な口縁部高において5.3cmの懸隔は大きなものと考えられる。しかしながら、図を俯瞰すると各ブロック内および隣接するブロックにおいては基底部高や口縁部高が比較的近似する資料が一定程度存在することが窺える。例えばブロックGより出土した43・47・52をみると口縁部高はそれぞれ13.0cm、13.9cm、13.4cmを測る。隣接するブロックDでは34・36が、15.2cm、15.0cmと近似値を示す。34・39は13.3cm 11.8cmとやや差を有するが、さらに東の地点から出土した48の口縁部高が9.9cmであることを考慮すると、口縁部高が漸移的に増減する配置を想定することも可能であろう。その一方で、埴輪の諸特徴には同一ブロック出土品においても個体差が大きい。こうした差異は工人の技術差や癖に起因すると考えられ、1基の古墳に樹立される埴輪の製作に複数の工人が携わったと考えられる。

また、基底部調整を施したと考えられる資料(78・79)や、基底部調整に加え異質な透孔を有する資料(77)はいずれも南周溝畦周辺からまとまって出土しており、こうした製作技術を擁する工人集団がこの一角の埴輪製作を担っていたことを伝える。こうした状況は、複数の工人集団が製作に関わり、かつ各集団ごとに製作量、現代の言葉で言い換えるならばノルマが課されていたことを窺わせる。すなわち、工人集団ごとに一定の範囲が割り振られ、その範囲を充足する分量の埴輪を製作することが求められていたと推察されるのである。なお、破片のため掲載していないが、基底部の内外面にケズリを施し端部を鋭角に仕上げている資料(89)も南周溝畦からの出土である。

朝顔形埴輪は南周溝畦からブロックBにおいては満遍なく出土していることから、埴輪列の中に一定の間隔で配されていたことが推察される。このうち、99に着目すると朝顔形埴輪においても体部は3条4段構成が採用されていたことが窺える。また、98と99からは体部最上段に透孔を穿つ点で共通する。しかしながら、肩部の立ち上がりや体部径には若干の差異が存在する。また、94～96の口縁部片を比較しても2次口縁部の外反度合いや径、中位突帯の形状や貼り付け方など細部においては差異が認められることから、円筒埴輪と同様に複数の工人が製作に関与したことが考えられる。

このように考えた場合、01014溝より出土した円筒埴輪の製作にあたっては、3条4段構成という規格の厳守が絶対条件として課される一方で、高さや製作技法の統一は厳密には図られず、製作者個人あるいは所属する集団の裁量に一任されていたと想定される。こうした規格性の弛緩は偏に生産量の増加を第一義としたことに起因すると考えられる。太田古墳群においてはほぼすべての古墳に埴輪が樹立されていたことが遺物の出土状況から窺うことができる。一方で、出土した土器の型式からは各古墳群の築造時期に大きな懸隔は認められず、短期間の間に多量の埴輪が必要とされたことが推測される。こうした状況に対応するために複数の工人集団が集められたと考えられるが、更なる生産性の向上のため、統一的な規格性を放棄し、製作工程の省力化が図られたと思料される。こうした省力化は焼成方法にも現出している。太田古墳群より出土した埴輪の大半は焼成がやや軟質であることに加え、黒斑を有するものが一定量認められることから、野焼きによるものが少なくないと考えられる。生産工程の省力化と複数の工人集団による人海戦術的な生産体制の強化、01014溝より出土した埴輪からはこのような姿

が想定される。

以上、01014 溝より出土した円筒埴輪について出土地点と埴輪を構成する諸特徴から、当該期の埴輪生産についてみてきた。01014 溝より出土した円筒埴輪は一部に川西編年Ⅳ期の製作技法を残しつつ、Ⅴ期に比定される省略化が認められる。また、川西編年においてⅤ期に特徴的な手法として理解されている底部調整を伴う円筒埴輪が出土している点も興味深い。底部調整を施した円筒埴輪は、近隣では豊中市に所在する穂積古墳や新免2・3号墳などに類例を求めることができるが³⁾、これらはいずれも古墳時代後期前葉の築造と考えられ、太田古墳群よりも一段階新しいものとなる。近年の研究ではⅣ期からⅤ期への技術変換は古墳時代中期後葉（TK23・47 型式期）より漸次的に行われ、続く古墳時代後期前葉（MT15 型式期）に完了したとされ、その背景として埴輪生産組織の再編成に伴う埴輪製作技術の省略化が進行したとされる⁴⁾。01014 溝より出土した埴輪群は正しく過渡期の様相を如実に物語る資料といえ、埴輪製作工人の移動や技術の伝播を考察するうえで貴重な資料となろう。

第3項 太田古墳群の変遷

以上、各古墳の概要と01014 溝出土埴輪を通じて太田古墳群における埴輪生産についてみてきた。最後に古墳群における各古墳の関係性と変遷について検討を加えたい。

太田古墳群の特徴のひとつとして方墳と円墳が混在することが挙げられる。まず最初に、古墳の形態により大別し、それぞれの様相をみていくこととする。

方墳は7基が確認されている。主体部が削平されているため断定はできぬものの、墳丘裾の方位に着目すると大きく3群に分類が可能である。1群は墳丘裾の方位と正方位との差が5°未満であり、極めて正方位に近い数値を示す古墳である。6・9・13号墳がこれにあたる。2群は東へ10°前後偏移する古墳であり7・11号墳が該当する。3群は西へ15°程度偏移するものであり8・12号墳が相当する。

埴輪は円筒埴輪および朝顔形埴輪が主体であり、形象埴輪は9号墳において鶏や水鳥形埴輪の羽部と思しき破片が出土しているが、円墳に比して出土量は少ない。円筒埴輪は確認しえた限りにおいてはいずれも3条4段構成である。

円墳は古墳群の北部に集中する1～3・14号墳と中央以南に位置する4・5号墳からなる。ここでは仮に1～3・14号墳を北群、4・5号墳を南群とする。円墳については埋葬施設が失われている現状においては主軸方向を窺うことはできない。このため、古墳の配置および出土した円筒埴輪をもとに分類を試みる。

北群の円墳4基については周溝が重複しそうなほど密接する古墳の配置から被葬者の間に緊密な関係性が窺える。いずれの古墳からも円筒埴輪が出土しているが、このうち1・2号墳からは4条5段構成で規格性を保持した埴輪がまとまって出土している。前項において記述したとおり、埴輪製作技術が変容する過渡期にあたる太田古墳群においては技術的に最も古い段階に位置付けることができるであろう。一方、14号墳からは3条4段構成で、底部調整が施された円筒埴輪が出土している。3号墳では基底部から2段目にかけて残存する資料が認められる。透孔が残存していないため構成は不明であるが、突帯の断面形状は三角形、外面色調は黄橙系を呈する点では1・2号墳から出土している4条5段構成の埴輪よりは14号墳から出土している3条4段構成の埴輪に類似するといえよう。こうした仮定のもとではあるが、北群においては1号墳と2号墳が先行して築造された蓋然性が高く、両古墳の被葬者がより密接な相関関係を有していたと推測される。

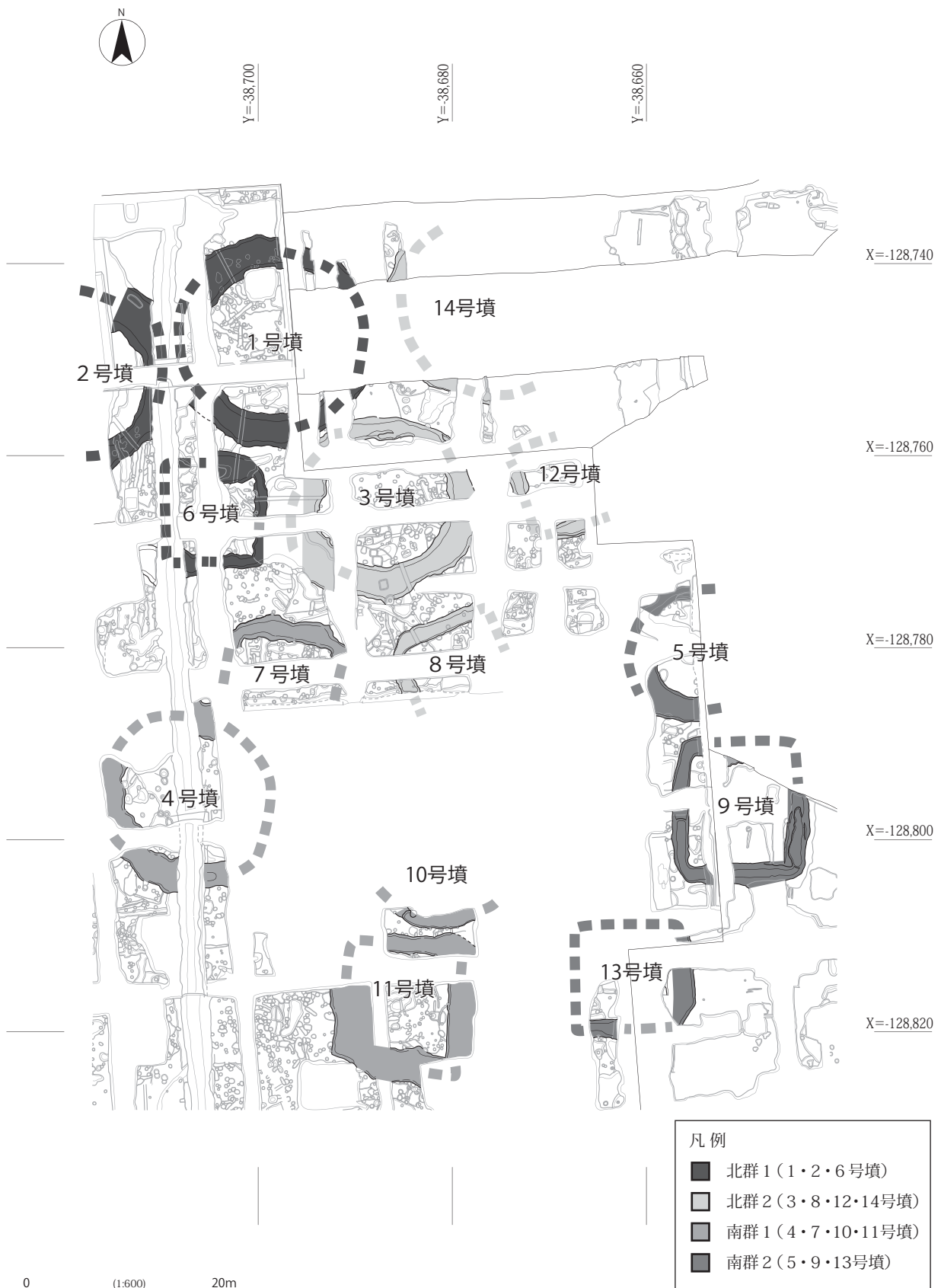


图 157 古墳分類

南群に目を転ずると、上述のように4号墳と5号墳との間には37 mほどの懸隔が存在しており、北群に認められるような緊密な関係性は見出し難い。しかしながら、これまで方墳と想定されてきた10号墳を円墳と考えると、様相が異なってくる。仮に10号墳を円墳と捉えた場合、4号墳と5号墳の間に配置されることとなるが、古墳の位置関係からみると5号墳に比して4号墳に近いことから、後者との関係性が高いと推察される。一方で、10号墳を方墳と考えた場合、南群は方墳を中心とする構成となり、10号墳はその中央部を占めることとなる。

遺物からはどうであろうか。10号墳からは4条5段構成と考えられる円筒埴輪の体部片が出土している。しかしながら、1・2号墳より出土した円筒埴輪が2次調整のヨコハケを施すのに対し、10号墳出土の円筒埴輪は1次調整のタテハケのみとなっている。突帯の断面形状も三角形を呈し、1・2号墳出土の円筒埴輪に比べ省略化が認められる。これを製作工人集団あるいは製作時期の差に起因するか判断が難しいが、4条5段構成を採用した円筒埴輪が当古墳と1・2号墳以外の古墳には認められないことを考慮すると、3・14号墳よりは1・2号墳に近い時期に製作されたと考えられるのではないであろうか。一方、4号墳は出土した円筒埴輪の様相が不明であり、5号墳は遺物が出土していないため現時点においては判断することはできない。

以上から、北群においては1・2号墳が先行して築造され、やや遅れて隣接する地に3・14号墳が築かれたと考えられる。一方、南群においては不確定な要素が多く、判然としない。10号墳の墳形により大きく左右されるが、これについては今後も調査成果の増加が見込めない状況にあっては、近接する4号墳や7号墳、11号墳より出土した遺物との比較を通じて、さらなる検討が必要といえよう。

次に、方墳と円墳の関係性についてみていきたい。あらためて古墳の配置を俯瞰すると、北群では1・2号墳と6号墳、14号墳と12号墳、そして、3号墳と7・8号墳が隣接して築かれている。南群では4号墳と7号墳、10号墳と11号墳、5号墳と9号墳が接する。このうち北群において方墳の方位および円墳の築造時期を加味すると、3・14号墳と8・12号墳がそれぞれに相関関係を有しつつ隣接していることが窺える。南群では7号墳と11号墳に相関性が見出せることから、間接的にはあるがそれらの古墳に隣接する4号墳と10号墳の間にも関係性が存在した可能性が考えられる。また、出土遺物においても12号墳と14号墳からは底部調整を施した円筒埴輪が出土していることから、同一の埴輪製作集団が関与したと考えられる。また、前項においても記述したように9号墳においても底部調整を施した円筒埴輪が認められることから、これら3基は築造時期を同じくする可能性が高いと考えられる。

このようにみえてくると、隣接する方墳と円墳にも相関性を見出すことができよう。それではその関係性とはどのようなものであったのであろうか。主体部を喪失している現況においては具体的に比較することは困難であるが、北群においてはいずれも方墳に比して円墳の規模が大きいことが明らかである。また、現時点においては最も高所となる地を占めるのも円墳であり、規模や配置からは方墳に対する円墳の優位性が窺える。出土遺物においても、新池遺跡より供給されたと想定される円筒埴輪は1・2号墳に限られており、形象埴輪においても太田古墳群ではその大半が円墳からの出土となる。前述のように後世の攪乱と混入という問題を残すが、その影響が少ない9号墳や13号墳の様相をみる限りでは、そうした不確定要素を差し引いても質・量ともに円墳が方墳を凌駕すると想定される。すなわち円墳と方墳の間に階層差が想定される。このように考えた場合、3・14号墳と8・12号墳の関係性からは円墳1基に対し方墳1基が付随するという構図を想定することができる。ただし、現時点においては1・2

号墳と6号墳のように円墳2基に対し方墳1基しか検出されておらず、また南群においても5号墳と9・13号墳のように円墳1基に対して方墳2基が検出されている事例も確認される。これらについては周辺の攪乱が著しく、本来存在した古墳が消失している可能性も残るが、現時点では断ずることはできず、今後見直す必要が出てくる可能性も十分に想定される。また、概ね円墳の南に方墳が築かれている中で4号墳と7号墳のみ配置が逆転しており、方墳である7号墳が円墳である4号墳の北に築造されている。何らかの要因により南方に築くことができなかつたと考えることも可能であろうが、4号墳と10・11号墳の間には空間が存在していることから本来はここに方墳が築かれており、複数の方墳が衛星状に配置されていた可能性も排除できない。

太田古墳群については、これまで古墳時代中期中頃を築造開始時期とし、方墳が円墳に先行するという認識がなされてきた⁵⁾。しかしながら、再度検討を試みた結果、少なくとも土器型式からはいずれも古墳時代中期後葉に帰属し、各古墳間に明確な時期差を見出すことはできなかった。一方、円筒埴輪に着目すると、太田古墳群においては1・2・6号墳からなる北西の一群を最古とし、それと同時かやや遅れて南西に4・10・7・11号墳からなる一群が、そしてそれらに後出して東方に3・14・8・12号墳からなる一群と5・9・13号墳からなる一群が築造されたと考えられる。さらに墳丘規模や配置、保有する埴輪などから円墳と方墳の間には階層差が存在し、円墳が方墳に対して優位にあることも窺うことができた。しかしながら、古墳群の被葬者については主体部が喪失した現況においては何ら判断材料がなく不明と言わざるを得ない。また、卒然と現れ、極めて短期間に造営を終えた母体集団についても同様である。近隣では南に位置する総持寺遺跡において古墳時代中期前葉から中葉の古墳群が確認されているが、これらは方墳のみで構成される。今回の想定が是とされるのであれば、円墳を主体とする太田古墳群とは墳形を異にすることとなり、直接的な系譜を求めることはやや難がある。太田古墳群内のさらなる検証に加え、今後は周辺の集落や古墳群も含めたより広い視野での検討が必要と考えられる。

註・参考文献

- 1) 鐘方正樹 1997「前期古墳の円筒埴輪」『堅田直先生古希記念論文集』真陽社
辻川哲朗 1999「円筒埴輪の突帯間隔設定技法の復元―埴輪受容形態検討の基礎作業として―」『埴輪論叢』1 埴輪検討会
- 2) 高槻市教育委員会 1993『新池―新池埴輪製作遺跡発掘調査報告書―』高槻市文化財調査報告書第17冊
高槻市立しろあと歴史館 2006『三島古墳群の成立―初期ヤマト政権と淀川―』
- 3) 豊中市史編さん委員会 2005『新修 豊中市史』第4巻 考古
- 4) 藤井幸司 1999「円筒埴輪製作技術の復元的研究―竈窯焼成導入以降を中心に―」『埴輪論叢』1 埴輪検討会
- 5) 茨木市史編さん委員会 2014『新修 茨木市史』第7巻 史料編 考古

遺物觀察表

遺物観察表凡例

本一覧表は本報告書に図面を掲載した遺物を対象としたものであり、文章の記述および写真のみの掲載となる遺物は含まない。

調査区は、太田遺跡・太田廃寺跡 2017 - 1 調査にあつては各調査区番号を、太田遺跡・太田城跡 2017 - 1 調査にあつては城と表記している。

法量は、土器および円筒・朝顔形埴輪の完形もしくは復元資料にあつては口径、底径、高さを、土器や埴輪の破片資料および埴輪以外の土製品、石製品、木製品にあつては長さ、幅、厚みを示している。口径、底径における復元値は () を付して表記し、長さ、幅、高さならびに厚みは現存する最大値を示している。

法量の表記は小数点第一位までを有効とし、小数点第二位以下は切り捨てる。単位はcmである。残存率は約を省略し、5 %単位で表記している。なお、5 %未満についても5 %としている。

挿図 番号	遺物 番号	写真図 版番号	器種 器形	時期	調 査 区	遺構名 層位名	法量(単位cm)			残存 率 (%)	特徴	外色調	備考
							口径 長さ	底径 幅	器高 厚				
13	1	—	二重口縁 壺	古墳前期	1	01013溝	(16.0)	—	5.0	5		外・内・断面:10YR7/3 にぶい黄橙	布留式中段階
	2	—	甗	古墳前期	1	01013溝	(14.2)	—	3.7	5		外面:10YR7/3 にぶい黄橙 内面:10YR7/2 にぶい黄橙 断面:10YR6/2 灰黄褐	布留式中段階
	3	—	有段 屈曲鉢	古墳前期	1	01013溝	(18.0)	—	2.9	5		外・内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:2.5Y6/2 灰黄	布留式 古段階か
	4	—	有段 屈曲鉢	古墳前期	1	01013溝	(15.0)	—	3.1	10		外面:7.5YR6/4 にぶい橙 内面:10YR6/3 にぶい黄橙 断面:5YR6/6 橙	布留式中段階
	5	—	小型器台	古墳前期	1	01013溝	8.6	—	4.6	70		外面:5YR6/6 橙 内面:5YR6/6 橙 断面:5YR6/6 橙	布留式古～ 中段階
	6	—	高杯	古墳前期	1	01013溝	—	—	6.7	15		外面:2.5Y8/2 灰白 内面:10YR8/2 灰白 断面:2.5Y8/2 灰白	布留式中段階
	7	28	須恵器 杯蓋	古墳中期	1	01013溝	12.2	—	5.5	95		外・内・断面:N5/0 灰	TK23・47
	8	28	須恵器 杯蓋	古墳中期	1	01013溝	12.2	—	5.5	90		外・内・断面:N5/0 灰	TK23・47
	9	28	須恵器 杯蓋	古墳中期	1	01013溝	11.8	—	5.3	95		外・内・断面:N5/0 灰	TK23・47
	10	28	須恵器 杯蓋	古墳中期	1	01013溝	12.1	—	5.4	80		外面:N5/0 灰 内面:N4/0 灰 断面:7.5Y4/1 灰	TK23・47
	11	28	須恵器 杯蓋	古墳中期	1	01013溝	11.3	—	5.5	80		外・内・断面:N5/0 灰	TK23・47
	12	28	須恵器 杯蓋	古墳中期	1	01013溝	12.2	—	5.5	70		外・内・断面:N5/0 灰	TK23・47
	13	29	須恵器 有蓋高杯	古墳中期	1	01013溝	10.3	9.0	9.5	90	方形透孔3方向	外・内・断面:N5/0 灰	TK23・47
	14	29	須恵器 有蓋高杯	古墳中期	1	01013溝	10.4	8.8	10.1	90	方形透孔3方向	外・内面:N6/0 灰 断面:10YR5/1 褐灰	TK23・47
	15	29	須恵器 有蓋高杯	古墳中期	1	01013溝	10.5	8.8	9.9	90	方形透孔3方向	外・内面:N5/0 灰 断面:7.5YR5/1 褐灰	TK23・47
	16	29	須恵器 有蓋高杯	古墳中期	1	01013溝	10.7	9.0	10.1	95	方形透孔3方向	外・内・断面:N5/0 灰	TK23・47
	17	28	須恵器 有蓋高杯	古墳中期	1	01013溝	(10.4)	8.6	9.4	80	方形透孔3方向 脚部:線刻1条	外面:N6/0 灰 内・断面:N5/0 灰	TK23・47
	18	28	須恵器 有蓋高杯	古墳中期	1	01013溝	9.55	8.4	9.4	90	方形透孔3方向 脚部:線刻1条	外・内・断面:N5/0 灰	TK23・47
	19	28	須恵器 有蓋高杯	古墳中期	1	01013溝	10.4	8.2	8.7	85	方形透孔3方向 脚部:線刻1条	外・内面:N5/0 灰 断面:2.5Y5/1 黄灰	TK23・47
	20	28	須恵器 有蓋高杯	古墳中期	1	01013溝	9.9	8.6	8.7	90	方形透孔3方向 脚部:線刻1条	外・内・断面:N5/0 灰	TK23・47
	21	29	須恵器 有蓋高杯	古墳中期	1	01013溝	(12.4)	9.0	8.0	50	方形透孔3方向	外・内・断面:N5/0 灰	TK23・47
	22	29	須恵器 甕	古墳中期	1	01013溝	—	—	8.9	80	体部:穿孔、列点文、 線刻1条	外・内面:7.5Y5/1 灰 断面:5YR5/2 灰褐	TK23・47
	23	—	円筒 埴輪	古墳中期	1	01013溝	(21.8)	—	10.5	5		外・内・断面:10YR7/4 にぶい黄橙	
14	24	29	朝顔形 埴輪	古墳中期	1	01013溝	(41.2)	—	39.6	30		外面:2.5Y7/2 灰黄 内面:7.5YR7/4 にぶい橙 断面:7.5YR6/6 橙	
	25	29	朝顔形 埴輪	古墳中期	1	01013溝	(41.0)	—	35.2	30	口縁部歪み	外・内面:2.5Y7/3 浅黄 断面:7.5YR7/8 黄橙	
21	26	30	甗	古墳中期	1	01014溝	(23.6)	—	11.6	10		外面:10YR6/2～5/2灰黄褐 内面:10YR6/2 灰黄褐 断面:10YR5/2 灰黄褐	
	27	30	長胴甗	古墳中期	1	01014溝	16.9	—	32.0	40		外面:10YR7/3 にぶい黄橙 内面:10YR6/3 にぶい黄橙 断面:10YR7/3 にぶい黄橙	
	28	30	長胴甗	古墳中期	1	01014溝	18.2	—	33.4	60		外面:10YR7/3 にぶい黄橙 内面:10YR6/4 にぶい黄橙 断面:10YR6/4 にぶい黄橙	
	29	30	須恵器 杯蓋	古墳中期	1	01014溝	(13.2)	—	4.3	35		外・内・断面:N5/0 灰	TK23・47
	30	30	須恵器 杯身	古墳中期	1	01014溝	10.3	—	4.6	70		外面:N6/0 灰 内面:5Y4/1 灰 断面:7.5YR5/1 褐灰	TK23・47

挿図 番号	遺物 番号	写真図 版番号	器種 器形	時期	調 査 区	遺構名 層位名	法量(単位cm)			残存 率 (%)	特徴	外色調	備考
							口径 長さ	底径 幅	器高 厚				
21	31	30	須恵器 罎	古墳中期	1	01014溝	11.7	—	11.0	100	口縁部:波状文 体部:穿孔、列点文	外・内・断面:N6/0 灰	TK23・47
	32	30	須恵器 甕	古墳中期	1	01014溝	21.2	—	39.0	70	外面に須恵器別個体 破片溶着	外面:2.5Y3/1 黒褐 内・断面:2.5Y4/1 黄灰	TK23・47
22	33	31	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	29.2	18.4	42.7	90	円形透孔(2段目) 黒斑	外・内面:10YR7/4 にぶい黄橙断面:7.5YR5/6 浅黄橙	IV～V期
	34	31	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	(28.4)	(18.4)	41.9	60	円形透孔(2段目) 黒斑	外・内面:10YR6/2 灰黄褐 断面:5YR7/3 にぶい橙	IV～V期
	35	32	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	29.0	—	38.6	60	円形透孔(2段目) 黒斑	外・内・断面:10YR6/2 灰黄褐	IV～V期
	36	31	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	(28.4)	(16.3)	45.1	60	円形透孔(2段目) 黒斑	外面:10YR8/3 浅黄橙 内・断面:7.5YR8/4 浅黄橙	IV～V期
23	37	31	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	(25.0)	(19.0)	29.4	30		外・内・断面:7.5YR6/4 にぶい橙	IV～V期
	38	33	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	(29.2)	—	30.2	10	円形透孔(2段目か)	外・内・断面:2.5Y5/2 暗灰黄	IV～V期
	39	33	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	(26.0)	—	22.6	5	赤彩	外・内面:2.5Y6/3 にぶい黄 断面:5YR5/6 明赤褐	IV～V期
	40	32	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	(25.9)	—	26.0	10	赤彩	外・内面:10YR5/3 にぶい黄橙 断面:2.5YR5/6 明赤褐	IV～V期
	41	33	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	(27.2)	—	21.4	5	円形透孔(2段目) 黒斑、赤彩	外・内面:10YR7/2 にぶい黄橙 断面:7.5YR6/4 にぶい橙	IV～V期
	42	33	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	(29.6)	—	23.9	10		外・内・断面:10YR6/3 にぶい黄橙	IV～V期
24	43	33	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	(31.0)	—	25.0	5	赤彩 黒斑	外・内・断面:10YR6/2 灰黄褐	IV～V期
	44	32	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	26.0	—	21.0	20	赤彩 黒斑	外・内・断面:7.5YR6/4 にぶい橙	IV～V期
	45	33	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	(28.0)	—	21.0	10	赤彩	外・内面:7.5YR7/4 にぶい橙 断面:5YR6/4 にぶい橙	IV～V期
	46	32	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	(26.0)	—	19.0	10		外・内・断面:10YR6/3 にぶい黄橙	IV～V期
	47	37	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	(28.0)	—	15.4	5		外・内面:10YR6/3 にぶい黄橙 断面:7.5YR5/3 にぶい褐	IV～V期
	48	33	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	(24.0)	—	16.0	5	口縁部外面ヘラ記号 赤彩	外・内・断面:7.5YR6/6 橙	IV～V期
	49	34	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	(27.2)	—	15.0	5		外・内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:5YR6/6 橙	IV～V期
	50	36	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	(29.0)	—	14.3	5	赤彩	外面:7.5YR7/4 にぶい橙 内・断面:10YR6/3 にぶい黄橙	IV～V期
25	51	41	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	(22.4)	—	19.2	5		外・内面:7.5YR6/4 にぶい橙 断面:5YR6/6 橙	IV～V期
	52	37	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	(25.2)	—	19.5	10		外・内・断面:10YR6/4 にぶい黄橙	IV～V期
	53	32	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	(23.6)	—	13.2	5	赤彩	外・内面:10YR6/3 にぶい黄橙 断面:5YR6/6 橙	IV～V期
	54	37	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	(24.0)	—	10.2	5	赤彩	外・内面:7.5YR6/3 にぶい褐 断面:5YR6/4 にぶい橙	IV～V期
	55	32	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	(23.4)	—	12.2	5	赤彩	外・内・断面:10YR7/3 にぶい黄橙	IV～V期
	56	37	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	(27.4)	—	8.8	5		外・内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:5YR6/6 橙	IV～V期
	57	37	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	(27.6)	—	9.4	5		外・内面:10YR5/3 にぶい黄橙 断面:2.5YR6/6 橙	IV～V期
	58	36	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	(26.0)	—	11.4	5	赤彩	外・内・断面:10YR7/3 にぶい黄橙	IV～V期
	59	37	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	(30.0)	—	9.5	5	赤彩	外・内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:2.5Y6/2 灰黄	IV～V期
	60	34	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	—	—	14.6	5	円形透孔(2段目か)	外・内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:5YR6/6 橙	IV～V期
	61	39	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	—	—	9.2	5	円形透孔(2段目か)	外・内・断面:10YR7/3 にぶい黄橙	IV～V期

挿図 番号	遺物 番号	写真図 版番号	器種 器形	時期	調査 区	遺構名 層位名	法量(単位cm)			残存 率 (%)	特徴	外色調	備考
							口径 長さ	底径 幅	器高 厚				
26	62	39	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	—	—	9.8	5	赤彩	外・内・断面:7.5YR5/3 にぶい褐	IV~V期
	63	39	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	—	—	14.2	5	円形透孔(2段目か)	外・内面:10YR6/4 にぶい黄橙 断面:2.5YR6/6 橙	IV~V期
	64	38	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	—	—	17.7	5		外・内・断面:10YR7/3 にぶい黄橙	IV~V期
	65	39	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	—	—	12.1	5	黒斑	外・内・断面:10YR7/3 にぶい黄橙	IV~V期
	66	39	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	—	—	10.6	5	赤彩	外・内面:10YR6/3 にぶい黄橙 断面:5YR6/6 橙	IV~V期
	67	41	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	—	—	16.3	5	赤彩	外・内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:5YR6/4 にぶい橙	IV~V期
	68	41	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	—	—	9.9	5		外・内面:10YR6/3 にぶい黄橙 断面:7.5YR6/4 にぶい橙	IV~V期
	69	34	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	—	—	23.5	10	円形透孔(2段目)	外・内・断面:10YR8/2 灰白	IV~V期
	70	38	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	—	(22.0)	13.1	5		外・内面:10YR6/3 にぶい黄橙 断面:5YR5/4 にぶい赤褐	IV~V期
	71	34	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	—	(22.2)	15.1	5	円形透孔(2段目) 黒斑	外・内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:5YR6/4 にぶい橙	IV~V期
27	72	34	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	—	(19.2)	14.2	5		外・内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:5YR6/6 橙	IV~V期
	73	35	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	—	(18.2)	17.5	5	黒斑	外・内・断面:7.5YR6/2 灰褐	IV~V期
	74	40	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	—	(19.4)	15.5	5	黒斑	外・内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:5YR6/6 橙	IV~V期
	75	34	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	—	(20.0)	18.5	10	基底端部歪み	外・内・断面:10YR6/3 にぶい黄橙	IV~V期
	76	39	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	—	(18.6)	4.8	5	基底端部線状擦痕と 歪み	外・内面:2.5YR7/3 浅黄 断面:2.5Y6/1 黄灰	IV~V期
	77	35	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	—	(19.0)	21.6	10	巴状透孔か(2~3段目) 基底部外面ケズリ 黒斑	外・内・断面:10YR7/3 にぶい黄橙	IV~V期
	78	35	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	—	(19.4)	29.4	5	円形透孔(2段目) 基底部外面タタキ目	外・内面:10YR6/3 にぶい黄橙 断面:5YR6/6 橙	IV~V期
	79	35	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	—	(17.8)	23.2	5	円形透孔(2段目) 基底部外面ケズリ 黒斑	外・内・断面:10YR6/3 にぶい黄橙	IV~V期
28	80	36	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	—	—	5.2	5		外・内・断面:10YR5/2 灰黄褐	IV~V期
	81	36	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	—	—	8.6	5	赤彩	外・内・断面:7.5YR6/3 にぶい褐	IV~V期
	82	36	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	—	—	10.4	5	赤彩	外・内・断面:7.5YR7/3 にぶい橙	IV~V期
	83	37	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	—	—	7.6	5	赤彩	外面:10YR7/3 にぶい黄橙 内面:10YR6/3 にぶい黄橙 断面:7.5YR6/4 にぶい橙	IV~V期
	84	39	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	—	—	8.7	5		外・内・断面:10YR7/3 にぶい黄橙	IV~V期
	85	37	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	—	—	7.2	5	赤彩	外・内・断面:10YR6/2 灰黄褐	IV~V期
	86	37	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	—	—	14.7	5		外・内・断面:10YR6/2 灰黄褐	IV~V期
	87	37	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	—	—	13.2	5	黒斑	外面:2.5Y5/1 黄灰 内・断面:10YR7/3 にぶい黄橙	IV~V期
	88	38	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	—	—	4.3	5	赤彩	外・内・断面:10YR6/2 灰黄褐	IV~V期
	89	35	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	—	—	4.7	5		外・内・断面:10YR7/2 にぶい黄橙	IV~V期
	90	40	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	—	—	5.0	5		外・内・断面:10YR6/2 灰黄褐	IV~V期
	91	40	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	—	—	8.0	5		外・内・断面:7.5YR6/4 にぶい橙	IV~V期

挿図番号	遺物番号	写真図版番号	器種器形	時期	調査区	遺構名層位名	法量(単位cm)			残存率(%)	特徴	外色調	備考
							口径長さ	底径幅	器高厚				
28	92	35	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	—	—	6.7	5	外面:10YR6/2 灰黄褐 内・断面:10YR6/3 にぶい黄橙	IV～V期	
	93	40	円筒埴輪	古墳中期	1	01014溝	—	—	6.5	5	黒斑、赤彩	外・内・断面:10YR6/3 にぶい黄橙	IV～V期
29	94	41	朝顔形埴輪	古墳中期	1	01014溝	(38.0)	—	11.5	10		外・内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:7.5YR6/4 にぶい橙	
	95	40	朝顔形埴輪	古墳中期	1	01014溝	(40.0)	—	5.9	5		外・内・断面:10YR7/3 にぶい黄橙	
	96	40	朝顔形埴輪	古墳中期	1	01014溝	—	—	7.4	5	赤彩	外面:7.5YR6/4 にぶい橙 内面:10YR6/3 にぶい黄橙 断面:7.5YR6/4 にぶい橙	
	97	40	朝顔形埴輪	古墳中期	1	01014溝	—	—	7.7	5		外・内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:7.5YR6/4 にぶい橙	
	98	41	朝顔形埴輪	古墳中期	1	01014溝	(38.0)	—	40.7	30	円形透孔(4段目か) 赤彩	外・内・断面:10YR7/4 にぶい黄橙	
	30	99	41	朝顔形埴輪	古墳中期	1	01014溝	—	(16.0)	54.3	体部 80	円形透孔(4段目) 黒斑	外・内面:2.5T8/2 灰白 断面:5YR6/8 橙
100		42	形象埴輪	古墳中期	1	01014溝	(15.9)	(6.7)	0.8	5	水鳥形埴輪か	外・内・断面:10YR6/4 にぶい黄橙	
101		42	形象埴輪	古墳中期	1	01014溝	7.1	4.8	1.0	5	鳥形埴輪尾羽か	外面:10YR7/3にぶい黄橙 内・断面:10YR7/2 にぶい黄橙	
102		42	形象埴輪	古墳中期	1	01014溝	(0.3)	(0.3)	1.0	5	水鳥形埴輪か	外・内・断面:10YR7/2 にぶい黄橙	
103		42	形象埴輪	古墳中期	1	01014溝	(3.8)	(2.1)	0.9	5	水鳥形埴輪か	外・内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:5YR6/6 橙	
104		42	形象埴輪	古墳中期	1	01014溝	(4.3)	(3.5)	0.8	5	水鳥形埴輪か	外・内・断面:10YR7/3 にぶい黄橙	
105		42	形象埴輪	古墳中期	1	01014溝	(2.2)	(2.9)	1.3	5	水鳥形埴輪か 表裏両面に線刻	外面:10YR6/3 にぶい黄橙 内面:10YR6/2 灰黄褐 断面:10YR6/3 にぶい黄橙	
106		42	形象埴輪 か	古墳中期	1	01014溝	(4.1)	(5.4)	1.0	5	水鳥形埴輪か 黒斑	外・内面:10YR7/2 にぶい黄橙 断面:7.5YR6/4 にぶい橙	
107		42	形象埴輪	古墳中期	1	01014溝	(4.2)	(5.0)	0.8	5	水鳥形埴輪か	外・内面:10YR7/2 にぶい黄橙 断面:10YR6/3 にぶい黄橙	
108		42	形象埴輪	古墳中期	1	01014溝	5.6	5.6	1.1	5	水鳥形埴輪か	外・内・断面:10YR7/3 にぶい黄橙	
109		42	形象埴輪	古墳中期	1	01014溝	5.8	5.5	0.9	5	水鳥形埴輪か	外・内・断面:10YR7/3 にぶい黄橙	
110		39	形象埴輪 か	古墳中期	1	01014溝	4.8	7.1	1.7	5	透孔(基底部)	外面:10YR6/2 灰黄褐 断面:7.5YR6/4 にぶい橙	
111		41	形象埴輪 か	古墳中期	1	01014溝	6.8	3.1	1.5	5	黒斑	外面:7.5YR7/3 にぶい橙 内面:10YR6/1 褐灰 断面:7.5YR7/3 にぶい橙	
112		42	石製 紡錘車	古墳中期	1	01014溝	4.45	4.45	1.45	100		外面:5GY4/1 暗オリーブ灰	
33	113	—	短頸壺	弥生後期	1	01001溝	(12.2)	—	11.3	10		外・内面:7.5YR7/4 にぶい橙 断面:2.5Y7/1 灰白	
	114	—	二重口縁 壺	弥生後期 ～古墳初頭	1	01001溝	(17.4)	—	3.7	5	口縁部:波状文	外面:5YR6/6 橙 内面:7.5YR6/4 にぶい橙 断面:10YR7/3 にぶい黄橙	
	115	43	二重口縁 壺	弥生後期 ～古墳初頭	1	01001溝	—	—	4.2	5	口縁部:波状文	外面:10YR7/3 にぶい黄橙 内面:7.5YR7/3 にぶい橙 断面:5YR6/6 橙	
	116	—	二重口縁 壺	古墳前期	1	01001溝	(13.6)	—	4.4	5		外面:7.5YR7/4 にぶい橙 内面:7.5YR6/4 にぶい橙 断面:2.5YR7/1 灰白	布留式中段階
	117	43	壺(加飾 二重口縁 壺か)	弥生後期 ～古墳初頭	1	01001溝	—	—	3.5	5	頸部:貼付突帯 肩部:波状文	外・内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:2.5Y4/1 黄灰	
	118	43	長頸壺	弥生後期	1	01001溝	(12.8)	—	8.7	5		外・内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:2.5Y7/2 灰黄	V-3様式～ VI-0様式
	119	43	広口直口 壺	古墳初頭	1	01001溝	(16.4)	—	5.9	5		外面:5YR6/6 橙 内面:2.5YR6/6 橙 断面:7.5YR6/4 にぶい橙	庄内式中段階

挿図 番号	遺物 番号	写真図 版番号	器種 器形	時期	調査 区	遺構名 層位名	法量(単位cm)			残存 率 (%)	特徴	外色調	備考
							口径 長さ	底径 幅	器高 厚				
33	120	43	広口壺	弥生後期	1	01001溝	(21.8)	—	1.8	5	口縁部:円形浮文	外・内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:7.5YR6/4 にぶい橙	
	121	43	直口壺	古墳初頭	1	01001溝	(14.0)	—	6.7	5		外面:7.5YR7/4 にぶい橙 内面:10YR7/2 にぶい黄橙 断面:7.5YR6/4 にぶい橙	庄内式新段階
	122	—	直口壺	古墳前期	1	01001溝	(18.4)	—	7.5	5		外面:5YR7/6 橙 内面:10YR8/3 浅黄橙 断面:10YR7/2 にぶい黄橙	布留式古段階
	123	—	甗	古墳初頭	1	01001溝	(14.6)	—	4.9	5		外面:10YR6/2 灰黄褐 内面:10YR5/2 灰黄褐 断面:10YR6/2 灰黄褐	
	124	—	甗	古墳前期	1	01001溝	(14.6)	—	5.2	5		外・内面:10YR6/3 にぶい黄橙 断面:2.5Y7/2 灰黄	布留式古段階
	125	43	甗	弥生後期	1	01001溝	(23.4)	—	3.2	5		外・内面:10YR7/2 にぶい黄橙 断面:10YR6/2 灰黄褐	
	126	43	甗	古墳前期	1	01001溝	(15.6)	—	8.7	5		外面:10YR7/3 にぶい黄橙 内面:7.5YR6/4 にぶい橙 断面:2.5Y4/1 黄灰	布留式古段階
	127	43	甗	弥生後期	1	01001溝	(21.4)	—	9.0	5		外・内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:2.5Y5/1 黄灰	
	128	43	甗	古墳前期	1	01001溝	(15.4)	—	6.9	5		外面:7.5YR7/3 にぶい橙 内面:10YR8/2 灰白 断面:10YR6/2 灰黄褐	布留式 中～新段階
	129	43	甗	古墳前期	1	01001溝	(14.8)	—	5.6	5		外面:10YR7/3 にぶい黄橙 内面:10YR7/4 にぶい黄橙 断面:2.5Y6/2 灰黄	布留式新段階
	130	—	壺	古墳初頭～ 前期	1	01001溝	—	—	22.5	10		外面:10YR7/3 にぶい黄橙 内面:10YR4/1 褐灰 断面:2.5Y6/2 灰黄	
34	131	43	甗	古墳前期	1	01001溝	(7.4)	—	5.1	5		外・内面:10YR6/3 にぶい黄橙 断面:2.5Y3/1 黒褐	布留式中段階
	132	—	甗	古墳初頭 ～前期	1	01001溝	(12.8)	—	6.2	10		外・内面:7.5YR7/4 にぶい橙 断面:10YR7/4 にぶい黄橙	
	133	—	甗	古墳前期	1	01001溝	(11.8)	—	5.7	5		外面:10YR6/3 にぶい黄橙 内面:10YR7/3 にぶい橙 断面:2.5Y5/1 黄灰	布留式新段階
	134	—	甗	古墳前期	1	01001溝	(12.8)	—	6.1	5		外・内・断面:10YR7/3 にぶい黄橙	布留式古～ 中段階
	135	—	甗	古墳初頭	1	01001溝	(13.8)	—	7.4	5	山城～近江系か	外・内面:10YR7/2 にぶい黄橙 断面:5Y3/1 オリーブ黒	庄内古段階 併行
	136	43	鉢	古墳前期	1	01001溝	(17.4)	—	9.8	10		外・内面:5YR6/6 橙 断面:7.5YR5/4 にぶい褐	布留式 中段階か
	137	—	鉢	古墳初頭 ～前期	1	01001溝	(16.2)	—	5.3	20		外面:2.5Y3/1 黒褐 内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:7.5YR6/3 にぶい褐	
	138	44	小型 丸底壺	古墳前期	1	01001溝	(12.6)	—	6.5	60		外・内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:2.5Y7/2 灰黄	布留式中段階
	139	44	小型 丸底壺	古墳前期	1	01001溝	(12.5)	—	6.4	60	黒斑	外面:5YR7/6 橙 内面:7.5YR8/4 浅黄橙 断面:2.5Y5/1 黄灰	布留式中段階
	140	43	小型 丸底壺	古墳前期	1	01001溝	(12.6)	—	3.9	10		外面:10YR7/2 にぶい黄橙 内面:10YR8/3 浅黄橙 断面:10YR7/2 にぶい黄橙	布留式中段階
	141	—	小型 丸底壺	古墳前期	1	01001溝	(12.6)	—	4.8	5		外面:7.5YR6/4 にぶい橙 内面:5YR6/6 橙 断面:7.5YR4/3 褐	布留式中段階
	142	43	小型 丸底壺	古墳前期	1	01001溝	(12.0)	—	6.1	20		外面:7.5Y7/3 にぶい橙 内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:10YR6/3 にぶい黄橙	布留式古段階
	143	—	小型 丸底壺	古墳前期	1	01001溝	—	—	6.6	40		外・内面:10YR6/3 にぶい黄橙 断面:7.5Y6/4 にぶい橙	布留式 古～中段階
	144	43	小型 丸底壺	古墳初頭 ～前期	1	01001溝	—	—	5.8	20		外面:5YR7/4 にぶい橙 内面:10YR7/2 にぶい黄橙 断面:7.5YR7/4 にぶい橙	布留式中段階

挿図 番号	遺物 番号	写真図 版番号	器種 器形	時期	調査 区	遺構名 層位名	法量(単位cm)			残存 率 (%)	特徴	外色調	備考
							口径 長さ	底径 幅	器高 厚				
34	145	44	小型 丸底壺	古墳初頭 ～前期	1	01001溝	—	—	4.4	50	外:10YR7/3 にぶい黄橙 内:5YR6/6 橙 断面:10YR6/3 黄橙		
35	146	44	高杯	古墳前期	1	01001溝	—	—	12.2	40	外・内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:10YR6/4 にぶい黄橙	布留式新段階	
	147	—	高杯	古墳初頭 ～前期	1	01001溝	—	—	7.2	25	円形透孔4方向 外:10YR7/2 にぶい黄橙 内:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:2.5Y6/3 にぶい黄		
	148	—	高杯	弥生後期	1	01001溝	—	—	5.7	5	脚部:複数条の沈線 (東海系か) 円形透孔3方向残存 外・内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:5YR6/6 橙		
	149	44	高杯	弥生後期 ～古墳初頭	1	01001溝	(10.8)	—	6.9	30	円形透孔4方向 外:2.5YR6/6 橙 内:5YR6/4 橙 断面:2.5YR5/4 にぶい赤褐		
	150	—	小型器台	古墳初頭 ～前期	1	01001溝	—	(11.8)	7.0	20	円形透孔3方向 外・内面:10YR7/4 にぶい黄橙 断面:7.5YR6/4 にぶい橙		
	151	44	器台	弥生後期	1	01001溝	—	—	13.4	60	外・内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:10YR6/4 にぶい黄橙		
	152	44	鉢	弥生後期か	1	01001溝	—	7.0	4.1	5	外:10YR7/3 にぶい黄橙 内:10YR6/3 にぶい黄橙 断面:2.5Y5/2 暗灰黄		
	153	43	壺	弥生後期か	1	01001溝	—	4.2	4.9	25	外・内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:2.5Y4/1 黄灰		
	154	—	壺	弥生後期か	1	01001溝	—	5.8	2.7	5	外・内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:7.5YR6/4 にぶい橙		
	155	43	有孔鉢	弥生後期 ～古墳初頭	1	01001溝	—	2.6	3.8	5	外:10YR8/3 浅黄橙 内:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:10YR6/4 にぶい黄橙		
	156	43	有孔鉢	弥生後期 ～古墳前期	1	01001溝	—	4.2	3.5	10	外:7.5YR7/4 にぶい橙 内:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:2.5Y6/1 黄灰		
	157	43	有孔鉢	弥生後期 ～古墳前期	1	01001溝	—	3.7	3.7	20	外:10YR7/3 にぶい黄橙 内:7.5YR7/4 にぶい橙 断面:5YR6/6 橙		
	158	—	有孔鉢	弥生後期 ～古墳前期	1	01001溝	—	(4.1)	2.6	10	外:10YR6/2 灰黄褐 内:10YR7/2 にぶい黄橙 断面:2.5Y7/2 灰黄		
	159	43	有孔鉢	弥生後期 ～古墳前期	1	01001溝	—	3.3	4.4	10	外・内面:5YR6/6 橙 断面:7.5YR5/4 にぶい褐		
	160	—	鉢	弥生後期 ～古墳初頭	1	01001溝	6.1	2.2	1.5	5	把手破片 外・内面:10YR8/3 浅黄橙 断面:2.5Y7/2 灰黄		
	161	43	深鉢	縄文晩期	1	01001溝	5.4	4.3	0.6	5	口縁部:突帯刻目 外・内面:10YR6/3 にぶい黄橙 断面:7.5YR6/4 にぶい橙	長原式	
	162	43	ミニチュア 土器 鉢	弥生後期か	1	01001溝	(3.8)	3.0	2.8	70	外:10YR7/3 にぶい黄橙 内:7.5YR6/2 にぶい橙 断面:10YR5/2 灰黄褐		
	163	44	鉢か	弥生後期か	1	01001溝	2.2	4.1	0.6	5	絵画土器 外・内・断面:10YR7/3 にぶい黄橙		
164	44	鉢か	弥生後期か	1	01001溝	4.2	2.9	0.7	5	絵画土器 外・内・断面:10YR7/3 にぶい黄橙			
36	165	44	砥石	古墳前期か	1	01001溝	26.5	8.5	3.8	100	外:面:N7/0 灰白		
	166	—	石皿	弥生後期か	1	01001溝	18.4	17.3	4.3	100	外:面:N8/0 灰白に近い		
39	167	—	長頸壺	弥生後期	1	01005溝	(11.6)	—	10.3	10	外・内面:10YR7/2 にぶい黄橙 断面:2.5Y6/2 灰黄	V-3 様式	
	168	—	甕	弥生後期	1	01005溝	(15.4)	—	8.0	15	外:10YR7/3 にぶい黄橙 内:10YR6/2 灰黄褐 断面:2.5Y5/1 黄灰	V-3 様式	
	169	—	壺	弥生後期	1	01005溝	—	5.2	3.7	5	外:10YR5/2 灰黄褐 内:10YR6/2 灰黄褐 断面:7.5YR7/4 にぶい橙 ・2.5Y5/1 黄灰		
	170	—	甕	弥生後期	1	01005溝	—	5.0	5.4	20	外:10YR5/2 灰黄褐 内:10YR6/2 灰黄褐 断面:10YR6/3 にぶい黄橙		

挿図 番号	遺物 番号	写真図 版番号	器種 器形	時期	調 査 区	遺構名 層位名	量(単位cm)			残存 率 (%)	特徴	外色調	備考
							口 径 長 さ	底 径 幅	器 高 厚				
39	171	—	高杯	弥生後期	1	01005溝	—	—	4.2	10		外・内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:2.5Y6/1 黄灰	
42	172	45	斐か鉢	弥生後期 ~古墳初頭	1	01031溝	—	4.4	9.6	50	底部:葉脈の痕	外面:10YR7/3 にぶい黄橙 内面:2.5Y7/3 浅黄 断面:2.5Y5/1 黄灰	
	173	—	高杯	弥生後期	1	01031溝	(14.2)	—	3.4	20		外・内面:10YR8/3 浅黄橙 断面:10YR7/4 にぶい黄橙	
	174	—	高杯	弥生後期	1	01031溝	—	—	6.2	15		外面:7.5YR7/4 にぶい橙 内面:7.5YR7/6 橙 断面:2.5Y5/1 黄灰	
	175	—	高杯	弥生中期か	1	01031溝	—	—	4.5	5		外面:7.5YR7/4 にぶい橙 内面:2.5YR6/6 橙 断面:10YR6/2 灰黄褐	II~III様式
	176	—	円筒埴輪	古墳中期	1	01031溝	5.3	5.8	1.7	5		外面:10YR6/3 にぶい黄橙 内・断面:7.5YR5/4 にぶい橙	
45	177	—	広口壺か	弥生後期	1	01004 土坑	(13.0)	—	3.9	5		外面:7.5YR7/4 にぶい橙 内・断面:10YR7/3 にぶい黄橙	
	178	—	斐	弥生後期	1	01004 土坑	(15.4)	—	3.0	5		外面:10YR7/3 にぶい黄橙 内・断面:10YR8/3 浅黄橙	
	179	—	斐	弥生後期	1	01004 土坑	(12.8)	—	5.9	10		外面:7.5YR6/4 にぶい橙 内・断面:10YR6/3 にぶい黄橙	V-1様式か
	180	—	壺	弥生後期 ~古墳初頭	1	01004 土坑	—	5.9	3.8	5		外面:10YR6/2 灰黄褐 内面:10YR5/2 灰黄褐 断面:2.5Y6/2 灰黄	
	181	—	壺	弥生後期 ~古墳初頭	1	01004 土坑	—	6.2	4.5	5		外・内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:2.5Y5/1 黄灰	埋土下層出土
	182	—	壺	弥生後期 ~古墳初頭	1	01004 土坑	—	6.4	6.8	10		外面:10YR7/3 にぶい黄橙 内面:10YR5/2 灰黄褐 断面:10YR6/2 灰黄褐	
	183	46	鉢か	弥生後期 ~古墳初頭	1	01004 土坑	—	5.3	5.8	15		外・内面:10YR7/2 にぶい黄橙 断面:10YR5/1 褐灰	
	184	45	小型斐	弥生後期	1	01004 土坑	(9.3)	3.6	8.6	55		外面:7.5YR7/4 にぶい橙 内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:10YR6/3 にぶい黄橙	
	185	—	斐	弥生後期 ~古墳初頭	1	01004 土坑	—	3.6	2.5	5	底部穿孔	外・内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:10YR6/2 灰黄褐	埋土下層出土
	186	46	有孔鉢	弥生後期 ~古墳初頭	1	01004 土坑	(13.1)	2.4	7.3	40		外面:10YR7/3 にぶい黄橙 内面:10YR6/3 にぶい黄橙 断面:2.5Y6/1 黄灰	埋土下層出土
	187	—	高杯	弥生後期	1	01004 土坑	—	—	6.5	20	円形透孔4方向 (うち2方向残存)	外・内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:2.5Y5/1 黄灰	
	188	45	高杯	弥生後期か	1	01004 土坑	—	—	10.4	40	円形透孔(脚柱3方向、 裾部4方向)	外・内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:2.5Y6/2 灰黄	
	189	—	高杯	弥生後期	1	01004 土坑	(13.8)	(10.4)	11.0	60		外面:10YR7/3 にぶい黄橙 内面:10YR6/2 灰黄褐 断面:2.5Y7/2 灰黄	埋土下層出土
	190	45	高杯	弥生後期	1	01004 土坑	23.3	—	13.7	70		外面:10YR7/3 にぶい黄橙 内面:7.5YR7/6 橙 断面:2.5Y6/1 黄灰	
	191	45	二重口縁 壺	古墳初頭	1	01004 土坑	12.3	—	10.3	15	頸部:突帯刻目 肩部:列点文、波状文	外面:7.5YR7/4 にぶい橙 内・断面:10YR7/3 にぶい黄橙	庄内式中段階 埋土下層出土
	192	45	斐	古墳初頭	1	01004 土坑	(15.1)	—	14.4	50		外面:7.5YR5/3 にぶい橙 内・断面:10YR5/2 灰黄褐	V様式系か
193	45	斐	古墳初頭	1	01004 土坑	(15.4)	—	15.5	20		外・内・断面:10YR6/2 灰黄褐	V様式系か	
194	45	斐	弥生後期	1	01004 土坑	(15.6)	—	17.8	20	生駒山西麓産胎土	外・内・断面:10YR5/3 にぶい黄橙	V-1様式か	
46	195	—	長頸壺	弥生後期	1	01006 井戸	(10.2)	—	6.6	5		外・内・断面:2.5Y6/2 灰黄	V-3様式
	196	—	小形の 広口壺か	弥生後期	1	01020 土坑	(15.6)	—	3.4	5		外面:10YR6/2 灰黄褐 内面:10YR5/2 灰黄褐 断面:10YR6/2 灰黄褐	
50	197	—	深鉢	縄文晩期	1	攪乱	2.5	4.6	0.5	5	口縁部:突帯刻目	外面:10YR5/3 にぶい黄橙 内面:2.5Y5/2 暗灰黄 断面:2.5Y4/1 黄灰	長原式

挿図 番号	遺物 番号	写真図 版番号	器種 器形	時期	調査 区	遺構名 層位名	法量(単位cm)			残存 率 (%)	特徴	外色調	備考
							口径 長さ	底径 幅	器高 厚				
50	198	—	白磁 碗	平安	1	第3～4 層	—	—	2.4	5		外・内面:5Y7/1 灰白 断面:N8/0 灰白	大宰府編年 X II～X III類
	199	—	壺	古墳初頭か	1	第4層	—	—	3.0	5	肩部:竹管文	外・内・断面:10YR7/3 にぶい黄橙	
	200	—	甕	古墳初頭 ～前期	1	第4層	(14.4)	—	4.6	5		外・内面:7.5YR6/4 にぶい橙 断面:10YR7/3 にぶい黄橙	
	201	—	甕	古墳初頭 ～前期	1	第4層	(14.6)	—	4.8	5		外面:7.5YR6/4 にぶい橙 内面:10YR7/2 にぶい黄橙 断面:2.5Y5/2 暗灰黄	
	202	—	甕	弥生後期	1	第4層	(11.2)	—	4.9	5		外面:7.5YR7/4 にぶい橙 内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:2.5Y6/2 黄灰	
	203	—	甕	弥生後期	1	第4層	(18.8)	—	5.2	5		外・内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:2.5Y6/2 灰黄	
	204	—	鉢	弥生後期	1	第4層	(11.8)	(4.5)	6.5	20		外・内面:10YR7/2 にぶい黄橙 断面:7.5YR6/4 にぶい橙	
	205	—	有孔鉢	弥生後期 ～古墳初頭	1	第4層	—	4.3	3.2	10		外面:10YR7/3 にぶい黄橙・ 2.5YR6/4 にぶい橙 内面:10YR5/2 灰黄褐 断面:7.5YR6/4 にぶい橙	
	206	—	有孔鉢	弥生後期 ～古墳初頭	1	第4層	—	4.5	3.4	5		外・内・断面:10YR7/3 にぶい黄橙	
	207	46	有孔鉢	古墳初頭か	1	第4層	—	3.4	2.4	5		外面:10YR6/3 にぶい黄橙 内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:10YR6/4 にぶい黄橙	
	208	—	有孔鉢	古墳前期	1	第4層	—	2.0	2.0	10		外面:2.5Y7/3 浅黄 内面:2.5Y6/4 にぶい黄 断面:2.5Y5/2 暗灰黄	布留式 中～新段階か
	209	—	有孔鉢	弥生後期	1	第4層	—	4.2	3.4	5		外・内面:10YR7/4 にぶい黄橙 断面:2.5Y6/3 にぶい黄	
	210	—	小型 丸底壺か	古墳前期か	1	第4層	—	—	4.2	10		外・内・断面:10YR7/3 にぶい黄橙	布留式 古～中段階
	211	46	小型器台	古墳初頭 ～前期	1	第4層	(9.4)	—	4.9	45		外面:10YR7/3 にぶい黄橙 内面:7.5YR6/4 にぶい橙 断面:10YR6/4 にぶい黄橙	布留式 古～中段階
	212	—	高杯	古墳前期	1	第4層	—	(9.2)	7.5	30		外・内・断面:10YR6/3 にぶい黄橙	布留式新段階
	213	—	高杯	古墳前期	1	第4層	—	10.0	4.0	40		外面:7.5YR6/4 にぶい橙 内面:5YR6/6 橙 断面:7.5YR6/4 にぶい橙	
	214	—	高杯	古墳前期	1	第4層	(15.8)	—	5.2	10		外面:5YR6/4 にぶい橙 内面:2.5YR6/6 橙 断面:5YR6/3 にぶい橙	
	215	—	高杯	古墳前期か	1	第4層	—	—	2.1	10		外・内面:7.5YR7/4 にぶい橙 断面:10YR6/3 にぶい黄橙	
	216	—	高杯	弥生後期	1	第4層	—	—	5.9	15		外・内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:10YR6/2 灰黄褐	
	217	—	高杯	弥生後期	1	第4層	—	(17.4)	5.3	5	円形透孔1方向残存	外・内面:10YR6/3 にぶい黄橙 断面:2.5Y5/2 暗灰黄	
218	46	壺	古墳初頭 ～前期	1	第4層	—	—	15.7	25		外面:7.5Y7/4 にぶい橙 内面:10YR6/2 灰黄褐 断面:7.5Y6/4 にぶい橙		
219	—	須恵器 捏鉢	古墳後期 ～飛鳥	1	第4層	—	(7.6)	3.3	5	底部:刺突	外面:10YR6/1 褐灰 内面:2.5Y6/1 黄灰 断面:10YR5/2 灰黄褐		
220	—	甕か	飛鳥か	1	第4層	—	(34.4)	9.2	5	生駒山西麓産胎土	外面:7.5YR4/3 褐 内・断面:10YR4/2 灰黄褐		
51	221	46	砥石	古墳か	1	機械掘削	5.25	4.9	5.0	100		外面:7.5Y8/1 灰白	
	222	—	磨石	弥生か	1	第4層	13.15	5.85	6.2	100	ほぼ全体を 磨面として利用		
57	223	46	柱根	飛鳥～奈良	2	02004 柱穴	(25.9)	9.2	8.8	10			
63	224	47	甕	古墳前期	3	竪穴建物 1	(16)	—	3.7	5		外面:7.5YR7/4 にぶい橙 内面:10YR7/2 にぶい黄橙 断面:2.5Y4/1 黄灰	布留式古段階 覆土出土
	225	47	壺	弥生後期 ～古墳初頭	3	竪穴建物 1	—	4.8	4.6	10		外面:10YR7/2 にぶい黄橙 内面:2.5Y6/1 黄灰 断面:7.5YR6/4 にぶい橙	東側盛土出土

挿図 番号	遺物 番号	写真図 版番号	器種 器形	時期	調査 区	遺構名 層位名	法量(単位cm)			残存 率 (%)	特徴	外色調	備考
							口径 長さ	底径 幅	器高 厚				
63	226	47	鉢	弥生後期 ~古墳初頭	3	03014炉	(12.2)	4.4	7.9	90		外面:10YR7/2 にぶい黄橙 内面:7.5YR7/3 にぶい橙 断面:10YR7/3 にぶい黄橙	IV~V期
65	227	47	円筒埴輪	古墳中期	3	03003溝	—	(16.4)	34.6	50	円形透孔(2段目) 基底部外面 連続ユビオサエ 黒斑	外面:10YR7/3 にぶい黄橙 内・断面:7.5YR7/4 にぶい橙	IV~V期
	228	47	円筒埴輪	古墳中期	3	03003溝	—	(17.8)	14.0	5	基底部外面タタキ目	外面:10YR7/3 にぶい黄橙 内面:2.5Y7/3 浅黄 断面:7.5YR6/4 にぶい橙	IV~V期
	229	47	円筒埴輪	古墳中期	3	03003溝	—	(17.2)	11.7	5	円形透孔(2段目) 基底部内面タタキ目 黒斑	外・内・断面:10YR7/4 にぶい黄橙	IV~V期
	230	47	形象埴輪 か	古墳中期	3	03003溝	3.1	3.0	0.9	5	線刻か	外面:10YR6/3 にぶい黄橙 内面:5YR7/6 橙 断面:10YR7/3 にぶい黄橙	
67	231	48	須恵器 甕	古墳中期	3	03005溝	22.5	—	43.1	85		外・内面:2.5Y6/1 黄灰 断面:N7/O 灰	TK23・47
	232	48	須恵器 甕	古墳中期	3	03005溝	20.4	—	43.6	70	口縁部:波状文 体部焼成時すみあり	外面:N5/O 灰 2.5Y6/2 灰黄 内面:10YR5/1 褐灰 断面:7.5YR5/2 灰褐	TK23・47
68	233	48	須恵器 杯蓋	古墳中期	3	03005溝	(13.0)	—	5.7	40		外面:N4/O 灰 内・断面:N5/O 灰	TK23・47
	234	48	形象埴輪	古墳中期	3	03005溝	4.5	5.7	1.7	5	鶏形埴輪鶏冠部	外・内・断面:7.5YR7/4 にぶい橙	
	235	49	形象埴輪	古墳中期	3	03005溝	3.0	5.4	1.2	5	人物埴輪 肩から腕の接合部か	外・内・断面:10YR7/3 にぶい黄橙	
	236	48	形象埴輪	古墳中期	3	03005溝	12.8	8.3	1.5	5	動物埴輪脚部か	外・内面:7.5YR7/4 にぶい橙 断面:10YR6/3 にぶい黄橙	
	237	48	形象埴輪	古墳中期	3	03005溝	24.2	3.1	1.7	5		外面:7.5YR7/4 にぶい橙 内・断面:10YR7/4 にぶい黄橙	不明 247と 同一個体か
	238	49	形象埴輪	古墳中期	3	03005溝	17.7	10.9	1.5	5	家形埴輪壁体部か 線刻	外・内・断面:7.5YR7/3 にぶい橙	
	239	—	形象埴輪	古墳中期	3	03005溝	8.9	6.9	1.5	5	家形埴輪壁体部か 線刻	外・内・断面:7.5YR7/4 にぶい橙	不明
	240	49	形象埴輪	古墳中期	3	03005溝	7.0	4.1	1.5	5	家形埴輪壁体部 方形透孔	外面:10YR7/3 にぶい黄橙 内面:7.5YR7/4 にぶい橙 断面:10YR7/3 にぶい黄橙	
	241	49	形象埴輪	古墳中期	3	03005溝	8.0	3.8	2.0	5	家形埴輪壁体部角か	外面:10YR7/2 にぶい黄橙 内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:5YR6/6 橙	
	242	48	形象埴輪	古墳中期	3	03005溝	5.2	5.2	1.7	5	家形埴輪か	外面:10YR7/3 にぶい黄橙 内面:7.5YR7/4 にぶい橙 断面:7.5YR6/4 にぶい橙	不明
	243	49	形象埴輪	古墳中期	3	03005溝	5.9	9.5	1.4	5	家形埴輪裾廻突帯か	外・内・断面:7.5YR7/4 にぶい橙	
	244	49	形象埴輪	古墳中期	3	03005溝	4.5	9.5	1.6	5	家形埴輪壁体部 方形透孔上辺か	外・内・断面:10YR7/3 にぶい黄橙	
	245	49	形象埴輪	古墳中期	3	03005溝	8.6	12.5	1.7	5	家形埴輪基部 ~裾廻突帯	外・内・断面:7.5YR7/4 にぶい橙	
	246	49	形象埴輪	古墳中期	3	03005溝	9.9	19.8	1.7	5	家形埴輪 裾廻突帯	外・内・断面:7.5YR7/4 にぶい橙	
69	247	49	形象埴輪	古墳中期	3	03005溝	6.0	2.6	1.7	5		外・内面:7.5YR7/4 にぶい橙 断面:10YR7/3 にぶい黄橙	不明 237と 同一個体か
	248	49	形象埴輪	古墳中期	3	03005溝	7.7	3.8	2.3	5	家形埴輪切妻式の 妻側屋根付近か	外面:7.5YR7/4 にぶい橙 内・断面:10YR7/3 にぶい黄橙	
	249	49	形象埴輪	古墳中期	3	03005溝	8.2	3.6	1.2	5	家形埴輪切妻屋根の 屋根接合部付近か	外・内・断面:7.5YR7/4 にぶい橙	
	250	48	形象埴輪	古墳中期	3	03005溝	10.8	5.8	3.9	5	中実 重さ:203.53g	外面:7.5YR7/3 にぶい橙 内面:7.5YR7/4 にぶい橙 断面:10YR7/3 にぶい黄橙	不明
	251	—	形象埴輪	古墳中期	3	03005溝	8.3	8.5	1.7	5		外面:10YR7/3 にぶい黄橙 内面:5YR7/6 橙 断面:7.5YR8/4 浅黄橙	不明
	252	48	形象埴輪	古墳中期	3	03005溝	5.7	6.2	1.6	5	人物埴輪体部片か	外面:7.5YR6/2 灰褐 内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:10YR7/4 にぶい黄橙	不明
	253	—	形象埴輪	古墳中期	3	03005溝 (上部)	7.4	11.7	1.7	5		外・内面:7.5YR7/4 にぶい橙 断面:10YR7/2 にぶい黄橙	不明
	254	49	形象埴輪	古墳中期	3	03005溝	5.9	4.8	1.3	5		外・内・断面:10YR7/2 にぶい黄橙	不明

挿図 番号	遺物 番号	写真図 版番号	器種 器形	時期	調 査 区	遺構名 層位名	法量(単位cm)			残存 率 (%)	特徴	外色調	備考
							口径 長さ	底径 幅	器高 厚				
69	255	49	形象埴輪	古墳中期	3	03005溝	7.9	6.9	2.4	5		外・内面:7.5YR7/4 にぶい橙 断面:10YR8/3 浅黄橙	不明
	256	49	形象埴輪	古墳中期	3	03005溝	5.8	14.6	1.5	5	家形埴輪基部 ～裾廻突帯か	外・内・断面:10YR7/3 にぶい黄橙	
71	257	—	須恵器 杯蓋	古墳中期	3	03006溝	(11.4)	—	4.9	30		外・内面:N5/0 灰 断面:2.5Y5/1 黄灰	TK23・47
	258	—	須恵器 杯身	飛鳥	3	03006溝	(9.0)	—	1.7	10		外面:7.5YR5/1 褐灰 内面:N5/0 灰 断面:5YR4/3 にぶい赤褐	TK217
	259	—	須恵器 壺	古墳中期	3	03006溝	—	—	10.4	50	口縁部:波状文 体部:穿孔、列点文	外面:10YR6/1 褐灰 内・断面:2.5Y5/1 黄灰	TK23・47
	260	—	甕か	弥生後期	3	03006溝	—	2.7	3.5	10		外面:10YR6/3 にぶい黄橙 内面:10YR4/2 灰黄褐 断面:10YR7/2 にぶい黄橙	
	261	50	筒形 土製品	古墳中期	3	03006溝	—	(18.5)	26.6	50	内面:煤化	外面:7.5YR7/4 にぶい橙 内面:2.5Y4/1 黄灰 断面:7.5YR7/4 にぶい橙	煙突形土製品 2段目か
	262	50	形象埴輪 か	古墳中期	3	03006溝	20.5	4.2	2.5	5		外・内・断面:10YR7/3 にぶい黄橙	不明
	263	50	形象埴輪	古墳中期	3	03006溝	(16.5)	(5.25)	5.1	5	女子埴輪右手	外面:10YR7/2 にぶい黄橙 断面:10YR7/3 にぶい黄橙	
	264	50	形象埴輪	古墳中期	3	03006溝	(17.8)	(4.2)	5.0	5	女子埴輪左手	外面:10YR7/3 にぶい黄橙 内面:10YR8/3 浅黄橙 断面:10YR7/3 にぶい黄橙	
	265	50	形象埴輪	古墳中期	3	03006溝	9.8	9.0	1.3	5	女子埴輪衣装	外・内・断面:10YR7/3 にぶい黄橙	
	73	266	—	高杯		3	03001溝	(6.4)	—	3.5	10	暗文	外・内面:10YR6/3 にぶい黄橙 断面:7.5YR7/4 にぶい橙
267		—	壺		3	03001溝	—	6.1	2.2	5		外面:10YR7/2 にぶい黄橙 内・断面:10YR6/2 灰黄褐	
268		51	ミニチュア 土器 鉢	弥生後期 ～古墳前期	3	03002溝	(7.4)	3.0	3.5	30		外・内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:10YR5/3 にぶい黄褐	
269		51	鉢	古墳前期	3	03002溝	(8.2)	—	推定 4.6	30		外面:2.5Y7/3 浅黄 内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:10YR5/3 にぶい黄褐	布留式 古～中段階
270		51	甕	弥生後期 ～古墳初頭	3	03002溝	—	5.4	4.4	5	底部:葉脈の痕	外面:10YR7/3 にぶい黄橙 内面:10YR6/2 灰黄褐 断面:10YR7/3 にぶい黄橙	
271		51	小型 丸底壺	古墳前期	3	03002溝	(10.8)	—	5.2	15		外面:7.5YR7/3 にぶい橙 内面:7.5YR7/4 にぶい橙 断面:2.5Y5/2 暗黄灰	布留式中段階
272		51	有段 屈曲鉢	古墳初頭 ～前期	3	03002溝	(14.6)	—	4.3	20		外面:10YR7/4 にぶい黄橙 内面:10YR6/4 にぶい黄橙 断面:2.5Y4/1 黄灰	布留式中段階
273		51	二重口縁 壺	古墳初頭 ～前期	3	03002溝	(24.0)	—	4.6	5		外面:10YR6/3 にぶい黄橙 内面:10YR6/2 灰黄褐 断面:10YR5/3 黄褐	布留式中段階
274		51	甕	古墳前期	3	03002溝	(19.0)	—	4.5	5		外・内面:10YR7/2 にぶい黄橙 断面:10YR5/2 灰黄褐	布留式 古～中段階か
275		51	甕	古墳初頭	3	03002溝	—	—	7.0	20		外面:5YR7/3 にぶい橙 内面:10YR8/3 浅黄橙 断面:7.5YR6/3 にぶい褐	
75	276	51	須恵器 杯蓋	飛鳥	3	03007 凹み	10.6	—	3.4	90		外・内・断面:N6/0 灰	TK209
	277	51	須恵器 杯蓋	飛鳥	3	03007 凹み	9.8	—	4.0	80		外面:5Y6/1 灰 内面:7.5YR5/1 褐灰 断面:7.5YR5/3 にぶい褐	TK209
	278	—	須恵器 杯身	飛鳥	3	03007 凹み	(9.8)	—	3.2	10		外・内面:N7/0 灰白 断面:10YR7/1 灰白	TK217
	279	—	須恵器 杯身	飛鳥	3	03007 凹み	—	—	2.7	30		外面:N5/0 灰 内面:N6/0 灰 断面:10YR5/1 褐灰	TK217
	280	—	須恵器 甕	飛鳥	3	03007 凹み	(18.6)	—	3.4	5		外面:10YR6/1 褐灰 内面:7.5YR5/2 灰褐断面: 10YR7/1 灰白	TK217
	281	51	形象埴輪	古墳中期	3	03007 凹み	5.4	2.2	1.4	5		外面:10YR7/2 にぶい黄橙 内面:7.5YR7/4 にぶい橙 断面:10YR6/4 にぶい黄橙	不明

挿図 番号	遺物 番号	写真図 版番号	器種 器形	時期	調査 区	遺構名 層位名	法量(単位cm)			残存 率 (%)	特徴	外色調	備考
							口径 長さ	底径 幅	器高 厚				
75	282	51	形象埴輪	古墳中期	3	03007 凹み	6.7	6.0	1.6	5	円形透孔	外・内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:10YR6/3 にぶい黄橙	不明
	283	—	形象埴輪	古墳中期	3	03007 凹み	9.1	8.2	1.5	5	動物形埴輪耳部か	外・内・断面:10YR7/3 にぶい黄橙	
	284	51	形象埴輪	古墳中期	3	03007 凹み	15.8	10.2	1.8	5	円形透孔 人物埴輪か	外面:10YR7/2 にぶい黄橙 内・断面:10YR7/3 にぶい黄橙	
76	285	—	高杯	古墳前期	3	第4層	15.0	—	4.3	30		外面:10YR6/2 灰黄褐 内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:10YR6/4 にぶい黄橙	
	286	—	須恵器 杯身	飛鳥	3	第4層	8.8	—	2.7	80		外・内面:2.5Y6/1 黄灰 断面:2.5Y5/1 黄灰	TK217
	287	—	須恵器 双耳壺か	飛鳥	3	第4層	—	—	6.1	5		外面:10YR4/1 褐灰 内面:N5/0 灰 断面:5YR5/2 灰褐	TK217
	288	52	形象埴輪 か	古墳中期	3	第4層	11.2	4.8	1.8	5	家形埴輪壁体部か	外面:10YR7/4 にぶい黄橙 内面:7.5YR7/4 にぶい橙 断面:10YR6/3 にぶい黄橙	
	289	52	形象埴輪	古墳中期	3	第4層	10.5	5.1	1.5	5	家形埴輪壁体部か	外・内面:7.5YR7/4 にぶい橙 断面:10YR6/4 にぶい黄橙	
	290	52	形象埴輪	古墳中期	3	第4層	8.5	4.8	1.3	5	家形埴輪壁体部か	外面:10YR7/3 にぶい黄橙 内面:7.5YR7/4 にぶい橙 断面:10YR8/3 浅黄橙	
	291	52	形象埴輪	古墳中期	3	第4層	6.8	4.2	2.3	5	家形埴輪壁体角部か	外面:7.5YR7/4 にぶい橙 内・断面:10YR7/3 にぶい黄橙	
	292	52	形象埴輪	古墳中期	3	第4層	6.3	4.4	0.9	5	家形埴輪壁体部か	外面:7.5YR7/3 にぶい橙 内・断面:10YR7/3 にぶい黄橙	
	293	52	形象埴輪	古墳中期	3	第4層	5.8	5.8	1.3	5	家形埴輪屋根部か	外・内面:7.5YR7/4 にぶい橙 断面:7.5YR8/4 浅黄橙	
	294	52	形象埴輪	古墳中期	3	第4層	5.0	5.6	1.9	5	形象埴輪基部か	外面:10YR7/4 にぶい黄橙 内面:7.5YR7/4 にぶい橙 断面:10YR7/3 にぶい黄橙	
	295	52	形象埴輪	古墳中期	3	第4層	3.8	6.3	1.0	5	家形埴輪裾廻突帯か	外面:7.5YR6/4 にぶい橙 内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:5YR6/6 橙	
	296	52	形象埴輪	古墳中期	3	第4層	11.7	4.8	1.9	5	家形埴輪裾廻突帯か	外面:10YR7/3 にぶい黄橙 内面:7.5YR7/4 にぶい橙 断面:10YR7/3 にぶい黄橙	
	297	52	形象埴輪	古墳中期	3	第4層	13.4	11.7	1.6	5	家形埴輪壁体部か	外・内面:7.5YR7/4 にぶい橙 断面:10YR7/4 にぶい黄橙	
	77	298	52	形象埴輪	古墳中期	3	第4層	6.0	6.8	1.2	5		外・内・断面:10YR7/3 にぶい黄橙
299		52	形象埴輪	古墳中期	3	第4層	6.8	5.3	1.8	5		外・内面:7.5YR7/4 にぶい橙 断面:10YR7/3 にぶい黄橙	不明
300		52	形象埴輪	古墳中期	3	第4層	8.0	5.2	1.5	5		外・内面:7.5YR7/4 にぶい橙 断面:10YR7/3 にぶい黄橙	不明
301		52	形象埴輪	古墳中期	3	第4層	7.7	7.3	1.8	5	動物埴輪脚部か	外面:10YR7/4 にぶい黄橙 内・断面:10YR7/3 にぶい黄橙	
302		52	形象埴輪	古墳中期	3	第4層	6.9	6.6	3.1	5		外面:5YR7/6 橙 断面:10YR7/3 にぶい黄橙	不明
303		52	形象埴輪	古墳中期	3	第4層	7.7	9.5	2.4	5		外面:7.5YR7/4 にぶい橙 内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:7.5YR7/4 にぶい橙	不明
304		52	形象埴輪	古墳中期	3	第4層	7.0	9.1	1.9	5		外面:7.5YR7/4 にぶい橙 内・断面:10YR7/3 にぶい黄橙	不明
305		52	形象埴輪	古墳中期	3	第4層	8.0	3.0	3.1	5		外面:7.5YR7/4 にぶい橙 断面:10YR7/3 にぶい黄橙	不明
306		52	形象埴輪	古墳中期	3	第4層	11.8	10.0	2.0	5		外面:7.5YR7/4 にぶい橙 内・断面:10YR7/3 にぶい黄橙	不明
83	307	53	深鉢	縄文晩期	4	04001溝	2.6	4.7	0.6	5	口縁部:突帯刻目	外面:10YR7/3 にぶい黄橙 内面:2.5Y5/2 暗灰黄 断面:5Y4/1 灰	長原式
	308	53	深鉢	縄文晩期	4	04001溝	2.1	2.6	0.4	5	口縁部:突帯刻目	外・内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:10YR5/1 褐灰	長原式
	309	—	小型 台付壺か	弥生後期か	4	04001溝	—	(4.6)	2.3	5		外・内面:7.5YR7/3 にぶい橙 断面:10YR6/3 にぶい黄橙	

挿図 番号	遺物 番号	写真図 版番号	器種 器形	時期	調 査 区	遺構名 層位名	法量(単位cm)			残存 率 (%)	特徴	外色調	備考
							口径 長さ	底径 幅	器高 厚				
83	310	—	壺か	弥生後期か	4	04001溝	—	(4.6)	2.5	5	線刻3条	外・内・断面:10YR7/2 にぶい黄橙	
	311	53	杯	古墳中期	4	04001溝	14.6	—	5	40		外面:10YR6/2 灰黄褐 内・断面:10YR7/3 にぶい黄橙	
	312	53	須恵器 杯蓋	古墳中期	4	04001溝	(12.8)	—	4.5	40		外面:5Y5/1 灰 内面:5YR5/1 褐灰 断面:5YR4/1 褐灰	TK23・47
	313	—	須恵器 杯蓋	古墳中期	4	04001溝	(13.2)	—	3.1	9		外面:N5/0 灰 内面:7.5YR5/1 褐灰 断面:7.5YR5/2 灰褐	TK23・47
	314	54	円筒埴輪	古墳中期	4	04001溝	7.2	5.5	1.2	5		外・内・断面:2.5Y7/2 灰黄	IV期か
	315	54	円筒埴輪	古墳中期	4	04001溝	—	—	10.8	5	円形透孔(2段目)	外面:7.5YR6/4 にぶい橙 内面:7.5YR6/6 橙 断面:10YR6/3 にぶい黄橙	IV～V期
	316	54	円筒埴輪	古墳中期	4	04001溝	—	(17.8)	14.2	6	円形透孔(2段目) 基底部外面 連続ユビオサエ 赤彩 小動物の爪痕あり	外面:5YR5/4 にぶい赤褐 内面:10YR6/3 にぶい黄橙 断面:2.5Y5/1 黄灰	IV～V期
	317	54	円筒埴輪	古墳中期	4	04001溝	—	(16.8)	12.5	5	円形透孔(2段目) 基底部外面タタキ目 外面:煤付着	外面:7.5YR7/4 にぶい橙 ・10YR4/1 褐灰(黒斑部) 内面:7.5YR7/4 にぶい橙 断面:10YR7/4 にぶい黄橙	IV～V期
	318	53	円筒埴輪	古墳中期	4	04001溝	—	16.4	15.2	20	円形透孔(2段目) 黒斑	外・内面:10YR6/3 にぶい黄橙 断面:7.5YR6/4 にぶい橙	IV～V期
	319	53	円筒埴輪	古墳中期	4	04001溝	(24.1)	17.6	46.4	30	円形透孔(3段目) 赤彩	外面:10YR7/3 にぶい黄橙 内面:10YR7/3 にぶい黄橙 ・5YR6/4 にぶい橙 断面:10YR7/3 にぶい黄橙	IV期
85	320	54	円筒埴輪	古墳中期	4	04002溝	5.7	8.4	0.8	5	円形透孔	外・内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:10YR7/4 にぶい黄橙	IV～V期か
	321	54	円筒埴輪	古墳中期	4	04002溝	(25.2)	—	22.4	10	円形透孔 黒斑	外面:10YR7/3 にぶい黄橙 内・断面:7.5YR7/4 にぶい橙	IV～V期
	322	54	円筒埴輪	古墳中期	4	04002溝	(22.5)	—	17.0	6	円形透孔	外面:5YR7/6 橙 内面:7.5YR7/4 にぶい橙 断面:5YR6/6 橙	IV～V期
	323	55	円筒埴輪	古墳中期	4	04002溝	—	(20.6)	11.7	5	基底部外面 ユビオサエ	外面:10YR7/3 にぶい黄橙 内面:7.5YR7/4 にぶい橙 断面:5YR6/6 橙	IV～V期
	324	55	円筒埴輪	古墳中期	4	04002溝	—	(19.2)	8.3	5	基底部外面 列状ユビオサエ 基底部内面タタキ目	外面:10YR7/2 にぶい黄橙 内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:5YR6/6 橙	IV～V期
88	325	55	甕	飛鳥	4	04007溝	(14.0)	—	5.8	20		外面:2.5Y7/2 灰黄 内面:10YR7/2 にぶい黄橙 断面:10YR6/4 にぶい橙	
	326	55	椀	飛鳥	4	04007溝	(16.0)	—	6.7	40		外・内・断面:10YR7/3 にぶい黄橙	
	327	—	須恵器 杯身	飛鳥	4	04007溝	(10.2)	—	2.0	5		外・内面:10YR5/1 灰褐 断面:2.5YR5/2 灰赤	TK217
	328	55	須恵器 平瓶	飛鳥	4	04007溝	5.0	—	12.6	95		外・内面:N5/0 灰 断面:7.5YR5/1 褐灰	TK217
	329	55	土鍾か	弥生後期 ～古墳初頭か	4	04007溝	5.5	5.5	1.6	95	土師器有孔鉢の 底部を転用	外・内面:2.5Y7/3 浅黄 断面:10YR6/3 にぶい黄橙	
	330	55	石鏝	弥生後期 ～古墳初頭か	4	04007溝	4.05	1.7	0.6	90	未成品	外面:2.5Y4/1 黄灰	サヌカイト製
95	331	55	甕	飛鳥	4	04013 土坑	(25.3)	—	12.0	5		外面:10YR5/2 灰黄褐 内面:10YR6/2 灰黄褐 断面:10YR7/3 にぶい黄橙	
	332	55	須恵器 杯蓋	飛鳥	4	04013 土坑	(11.0)	—	3.7	50		外面:N5/0 灰 内・断面:N6/0 灰	TK217
	333	56	須恵器 高杯	飛鳥	4	04025 土坑	—	(7.0)	5.3	40		外・内面:10YR6/2 灰黄褐 断面:2.5Y7/1 灰白	TK217
	334	55	形象埴輪	古墳中期	4	04006 土坑	8.0	4.0	2.3	5	人物埴輪の衣装か	外・内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:2.5Y5/1 黄灰	
	335	56	長胴甕	古墳中期	4	04022 土坑北半	(24.0)	—	31.8	30	肩に線刻	外・内・断面:10YR6/1 灰黄褐	
	336	56	鍋	古墳中期	4	04022 土坑	(3.18)	—	16.1	25	把手付	外面:10YR8/4 浅黄橙 内・断面:7.5YR8/4 浅黄橙	
	337	—	土製品	不明	4	04004 ビット	2.4	2.9	0.7	5	両面に線刻、竹管文		弧状か環状土 製品か

挿図 番号	遺物 番号	写真図 版番号	器種 器形	時期	調査 区	遺構名 層位名	法量(単位cm)			残存 率 (%)	特徴	外色調	備考
							口径 長さ	底径 幅	器高 厚				
98	338	—	須恵器 甕	飛鳥	4	第3・4 層	(20.6)	—	6.3	5		外面:N6/0 灰 内面:N5/0 灰 断面:7.5YR6/2 灰褐	TK217
	339	56	深鉢	縄文晩期	4	第4層	4.8	4.2	0.6	5	口縁部:突帯刻目		長原式
	340	—	壺か	弥生後期 ~古墳初頭	4	第4層	—	(6.0)	3.9	5	外面マーブル状に 劣化(植物の生痕に よるものか)	外面:2.5YR6/6 橙 ・10YR6/3 にぶい黄橙 内面:10YR6/3 にぶい黄橙 断面:10YR5/2 灰黄褐	
	341	56	形象埴輪	古墳中期	4	第4層	7.2	4.4	1.1	5	鳥(鶏)形埴輪の首か	外・内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:7.5YR6/4 にぶい橙	
	342	56	蛤刃石斧	弥生	4	第4層	(12.0)	7.2	4.4	70		外面:7.5Y7/1~6/1 灰白~灰	
116	343	56	石鏃	弥生	6	第4層	(4.5)	1.8	0.8	50	風化著しい	外面:5Y6/1 灰	サマカイト製
	344	56	蛤刃石斧	弥生	6	第4層	(7.4)	7.5	3.9	40		外面:7.5Y8/1 灰白 断面:10Y8/1 灰白	
132	345	67	白磁 皿	鎌倉~南北朝	城	第3層	(10.2)	—	3.2	15	口禿げ	外面:露胎2.5Y8/1 ・施釉2.5GY8/1 灰白 内面:露胎2.5Y8/2 ・施釉2.5GY8/1 灰白 断面:N8/0 灰白に近い	太宰府編年 IX類
	346	67	灰釉陶器 椀か皿	平安	城	第3層	—	(7.2)	2.1	5		外面:露胎5Y8/1 灰白 ・施釉5Y6/2 灰オリーブ 内面:露胎2.5Y8/1 灰白 ・施釉5Y6/2 灰オリーブ 断面:2.5Y8/1~7/1	
	347	67	灰釉陶器 椀	平安	城	第3層	—	6.0	2.7	30		外・内面:露胎2.5Y7/1 ・施釉2.5Y8/1~7/1 灰白 断面:2.5Y7/1 灰白	
	348	67	青磁 碗	鎌倉~南北朝	城	第3層	—	—	2.8	5		外・内面:施釉2.5GY7/1 明オリーブ灰 断面:N8/0 灰白にやや近い	太宰府編年 龍泉窯碗IV類 か
	349	67	緑釉陶器 椀か 皿(底部)	平安	城	第3層	—	(7.0)	1.6	10	近江系	外・内面:施釉7.5Y7/3~6/3 浅黄~オリーブ黄 ・10Y6/2 オリーブ灰 (外面露胎2.5Y8/1 灰白) 断面:5Y7/1 灰白	
	350	67	青磁 碗	平安~鎌倉	城	第3層	(15.2)	—	4.5	5		外・内面:施釉5Y6/2 灰オリーブ 断面:N8/0 灰白	太宰府編年 龍泉窯碗I類
	351	67	杯	奈良	城	ブロック土	(14.8)	—	3.15	5	暗文	外・内面:10YR6/2 灰黄褐 断面:10R5/4 赤褐	平城皿
	352	—	高杯	弥生後期	城	ブロック土	—	—	6.7	15		外・内面5YR6/2 にぶい橙 断面:10YR5/4 にぶい黄褐・ 2.5Y5/1 黄灰	
	353	67	須恵器 平瓶か	飛鳥	城	ブロック土	(5.85)	—	4.9	5	頸部:線刻か	外・内面:N7/0 灰白 断面:2.5Y6/2 灰赤	TK217
	354	67	須恵器 杯蓋	古墳中期	城	ブロック土	(12.1)	—	3.8	5	天井部:カキメ	外面:N6/0 灰 内・断面:N5/0 灰	TK23・47か
	355	67	須恵器 杯身	古墳中期	城	ブロック土	(8.6)	—	4.6	20	底部:線刻	外・内面:N5/0 灰 断面:N4/0 灰	TK23・47
	356	—	須恵器 高杯	古墳後期	城	ブロック土	—	脚柱径 (5.5)	8.2	5	方形透孔3方向	外面:N5/0 灰 内・断面:N6/0 灰	TK43
	357	67	須恵器 器台	古墳中期	城	ブロック土	—	—	7.7	5	三角形透孔か 波状文	外面:N7/0 灰白 内面:N7/0 灰白 ・2.5YR5/1 赤灰 断面:2.5YR6/1 赤灰	
	358	67	須恵器 甕	飛鳥	城	ブロック土	—	胴径 (9.8)	5.3	25	体部:穿孔	外・内・断面:N5/0 灰	TK217
	359	69	埴	奈良か	城	ブロック土	(11.2)	(8.7)	3.1	?		A:10YR8/2 灰白 B:10YR7/2 にぶい黄橙 ・10YR8/1 灰白 断面:10YR8/1 灰白	
	360	—	鉄釘	不明	城	機械掘削	(3.35)	0.5	0.4	60			
361	69	鉄鏃	奈良か	城	ブロック土	13.4	0.5	0.2	95	長頸式 頸部下端に振じり			
135	362	—	須恵器 杯蓋	古墳後期	城	第4層	(13.6)	—	3.5	20		外面:N6/0 灰 内面:N5/0 灰 断面:N6/0 灰	TK43 側溝出土
	363	—	須恵器 杯身	古墳後期	城	第4~3層	(12.2)	—	4.2	20		外・内・断面:N5/0 灰	TK10

挿図 番号	遺物 番号	写真図 版番号	器種 器形	時期	地区	遺構名 層位名	法量(単位cm)			残存 率 (%)	特徴	外色調	備考
							口径 長さ	底径 幅	器高 厚				
135	364	—	不明	古墳後期か	城	第4b層	—	—	4.8	5	外面:線刻 内面:ミガキ	外・内・断面:10YR7/3 にぶい黄橙	
	365	—	須恵器 杯身	古墳後期	城	第4b層	11	4.8	4.5	90		外面:10Y5/1 灰 内・断面:N6/0 灰	TK23・47
	366	—	須恵器 脚付甕 or 長頸壺	飛鳥	城	第5層 上面	—	—	5.0	10	体部:列点文	外面:N8/0 灰白・N4/0 灰 内面:N7/0 灰白 断面:7.5YR6/2 灰褐	飛鳥I 第4層からの 混入か
	367	—	須恵器 杯身	古墳後期	城	第5層	(14.0)	—	4.1	10		外・内・断面:N6/0 灰	MT15
	368	—	須恵器 杯身	古墳後期	城	第5層	(12.3)	—	4.1	10		外面:N7/0 灰白 内・断面:N6/0 灰	TK43
	369	69	紡織具	古墳後期か	城	第4b層	(39.7)	(8.6)	3.1	50			
	370	69	田下駄	古墳後期か	城	第5層	37.6	10.1	1.3	90			
137	371	66	甕	弥生後期	城	10007溝	(15.2)	—	14.4	20	受口状口縁	外・内面:10YR5/3 にぶい黄褐 断面:2.5Y5/1 黄灰	V-3~VI-1 様式か
	372	—	壺	弥生後期	城	10007溝	—	4.8	4.3	5		外面:10YR5/2 灰黄褐 内・断面:10YR7/2 にぶい黄橙	
	373	—	甕	弥生後期	城	10007溝	—	(4.6)	3.6	5		外・内面:2.5Y5/2 暗灰黄 断面:2.5Y6/2 灰黄	
142	374	66	壺	弥生前期	城	10009溝	16.5	7.6	29.0	70	頸部:沈線	外面:2.5Y7/2 灰黄 内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:2.5Y5/1 黄灰	I-4様式
	375	66	細頸壺	弥生後期	城	10009溝	5.6	—	14.3	25 (口 ~頸 95)		外・内・断面:2.5Y7/2 灰黄	V-0様式か
	376	—	広口壺	弥生後期	城	10009溝	(19.4)	—	3.7	5		外・内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:10YR8/3 浅黄橙	
	377	66	広口壺	弥生後期か	城	10009溝	(23.4)	—	2.5	5	凹線、円形浮文 列点文、穿孔1箇所	外・内・断面:10YR7/3 にぶい黄橙	V-1様式か
	378	—	甕	弥生後期	城	10009溝	—	(5.0)	4.4	5		外面:10YR4/1 褐灰 内面:10YR3/1 黒褐 断面:10YR6/2 灰黄褐	
	379	66	小型鉢	弥生後期	城	10009溝	—	3.4	4.6	50		外面:2.5Y6/2 灰黄 内・断面:2.5Y5/1 黄灰	
	380	—	甕	弥生後期	城	10009溝	—	(4.4)	3.6	5		外面:2.5Y7/2 灰黄 内面:10YR3/1 黒褐 断面:2.5Y7/3 浅黄	
	381	—	壺	弥生後期	城	10009溝	—	4.0	3.1	5		外・内面:10YR7/3 にぶい黄橙 断面:2.5Y7/2 灰黄	
	382	66	高杯	弥生後期	城	10009溝	21.8	—	7.1	40		外・内面:2.5Y6/2 灰黄 断面:7.5YR6/4 にぶい橙	V-3~VI-1 様式
	383	66	高杯	弥生後期	城	10009溝	—	—	8.3	20	円形透孔4方向	外面:2.5Y7/2 灰黄 内面:10YR6/3 にぶい黄橙 断面:10YR6/2 灰黄褐	
	384	66	高杯	弥生後期	城	10009溝	—	—	8.8	30	円形透孔1方向残存	外面:10YR7/2 にぶい黄橙 内面:杯10YR4/1 褐灰 ・脚10YR7/2 にぶい黄橙 断面:10YR7/2 にぶい黄橙	
	385	—	高杯	弥生後期	城	10009溝	—	—	8.7	25	円形透孔4方向	外面:2.5Y8/2 灰白 内面:2.5Y7/1 灰白 断面:2.5Y8/2 灰白	
144	386	68	深鉢	縄文晩期	城	下層確認 トレンチ	(22.2)	—	9.1	5		外面:10YR5/2 灰黄褐 内面:10YR5/3 にぶい黄褐 断面:10YR4/1 褐灰	滋賀里Ⅲa式

写 真 图 版



1. 調査区 全景 (南から)



2. 調査区 全景 (西から)



1. 調査区北壁
断面(南西から)



2. 調査区南東壁
断面(西から)



3. 調査区南壁
断面(北東から)



1. 01013 溝 [13号墳] (南から)



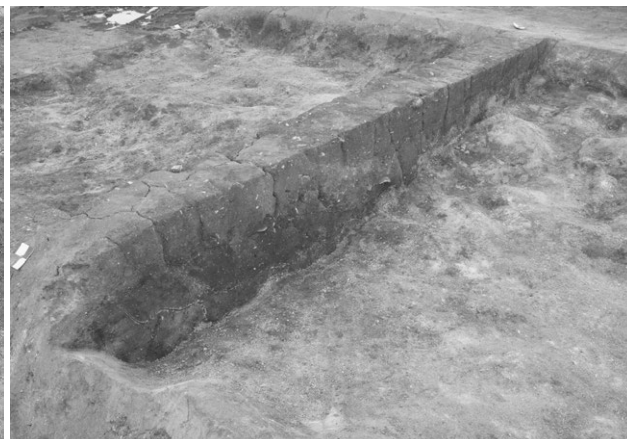
2. 01013 溝 [13号墳] 遺物出土状況 (西から)



3. 01013 溝 [13号墳] 遺物出土状況 (西から)



4. 01001・01013 溝 [13号墳] 完掘状況 (西から)



5. 01001・01013 溝 [13号墳] 断面 (南西から)



1. 01014 溝 [9号墳] (西から)



2. 01014 溝 [9号墳] 断面 a-a' (北から)



3. 01014 溝 [9号墳] 断面 b-b' (東から)



4. 01014 溝 [9号墳] 円筒埴輪出土状況 (東から)



5. 01014 溝 [9号墳] 石製品出土状況 (南から)

1. 01014 溝 [9号墳]
遺物出土状況 (南東から)



2. 01014 溝 [9号墳]
遺物出土状況 (南東から)



3. 01014 溝 [9号墳]
遺物出土状況 (南から)





1. 01001 溝 (北から)



2. 01001 溝 (西から)



3. 01005・01009 溝 (南東から)



1. 01004 土坑 遺物出土状況 (西から)



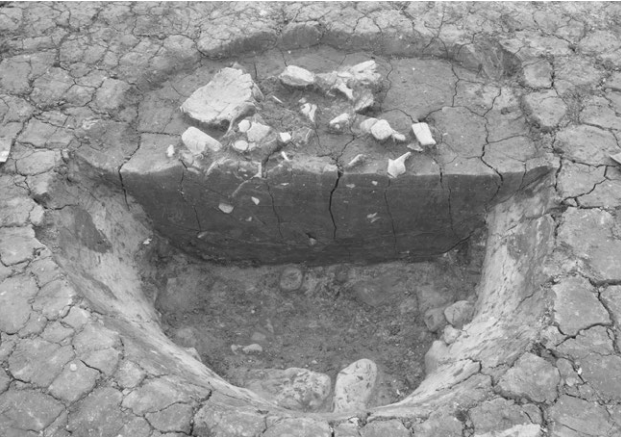
2. 01004 土坑 断面 (北西から)



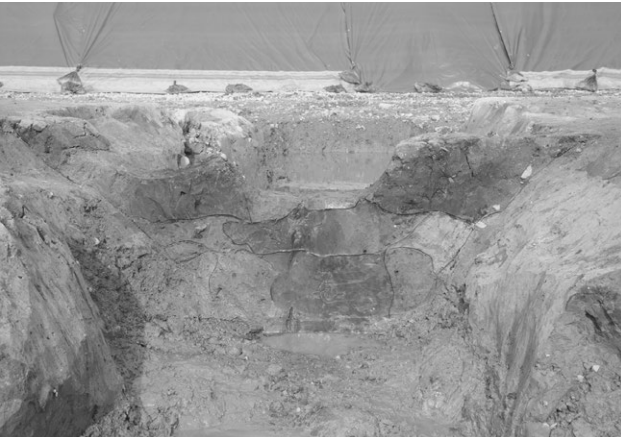
3. 01006 土坑 断面 (西から)



4. 01019 土坑 断面 (南西から)



5. 01020 土坑 断面 (北西から)



6. 01031 溝 断面 (西から)



7. 01031 溝 (西から)



1. 調査区 全景 (西から)



2. 調査区西壁 断面 (東から)



3. 調査区北西部 近接 (北から)



4. 02004 柱穴 柱根検出状況 (東から)



1. 調査区 全景 (南から)



2. 調査区南壁 断面 (東から)



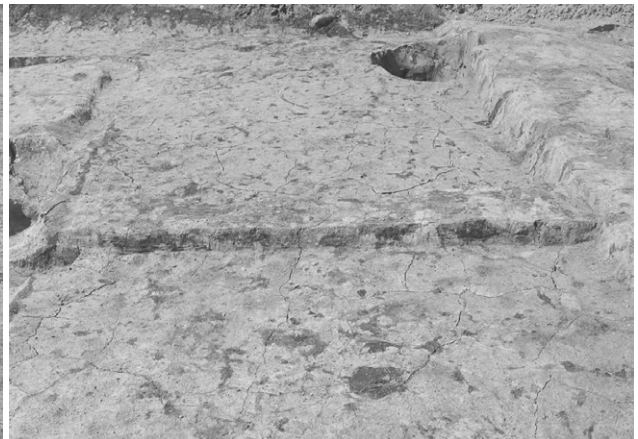
3. 調査区 全景 (西から)



1. 竪穴建物1、03005溝 [3号墳]・03006溝 [1号墳] (西から)



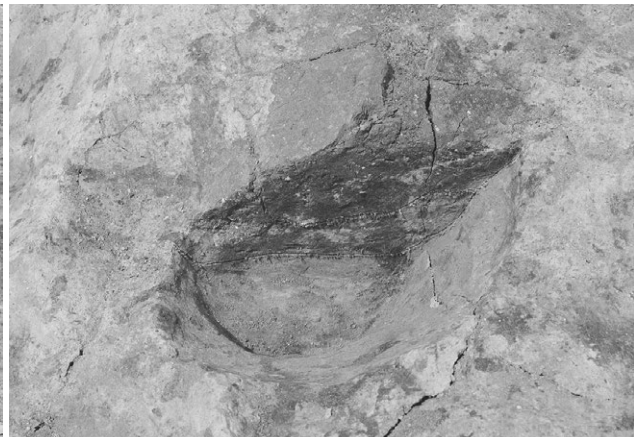
2. 竪穴建物1 断面 (北東から)



3. 竪穴建物1 東側高まり 断面 (南から)



4. 03014 炉 [竪穴建物1] 断面 (南から)



5. 03013 柱穴 [竪穴建物1] 断面 (東から)



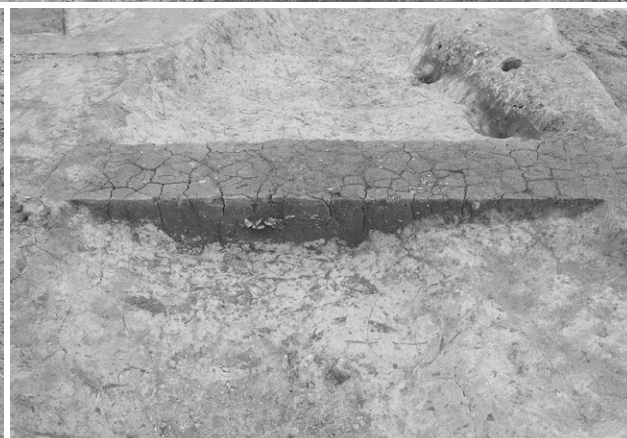
1. 03003 溝 [14号墳]
遺物出土状況 (南東から)



2. 03005 溝 [3号墳]
遺物出土状況 (西から)



3. 03003 溝 [14号墳] 断面 (東から)



4. 03005 溝 [3号墳] 断面 (西から)



1. 03006 溝 [1号墳]
遺物出土状況
(北東から)



2. 03006 溝 [1号墳] 女子埴輪出土状況 (北東から)



3. 03006 溝 [1号墳] 断面 (南東から)



4. 03001 溝 断面 (北から)



5. 03002 溝 断面 (北から)



1. 調査地 遠景 (南東から)



2. 調査区 全景 (写真上が西)



1. 調査区西壁(a-a')
断面(東から)



2. 調査区西壁(b-b')
断面(南東から)



3. 調査区東壁(c-c')
断面(南東から)



1. 調査区南部 全景 (西から)



2. 調査区南部 全景 (東から)



3. 調査区東部 全景 (南から)



1. 04001 溝 [1号墳]
遺物出土状況
(北西から)



2. 04001 溝 [1号墳]
遺物出土状況(東から)



3. 04001 溝 [1号墳]
完掘状況(北西から)

1. 04002 溝 [14 号墳]
遺物出土状況
(北東から)

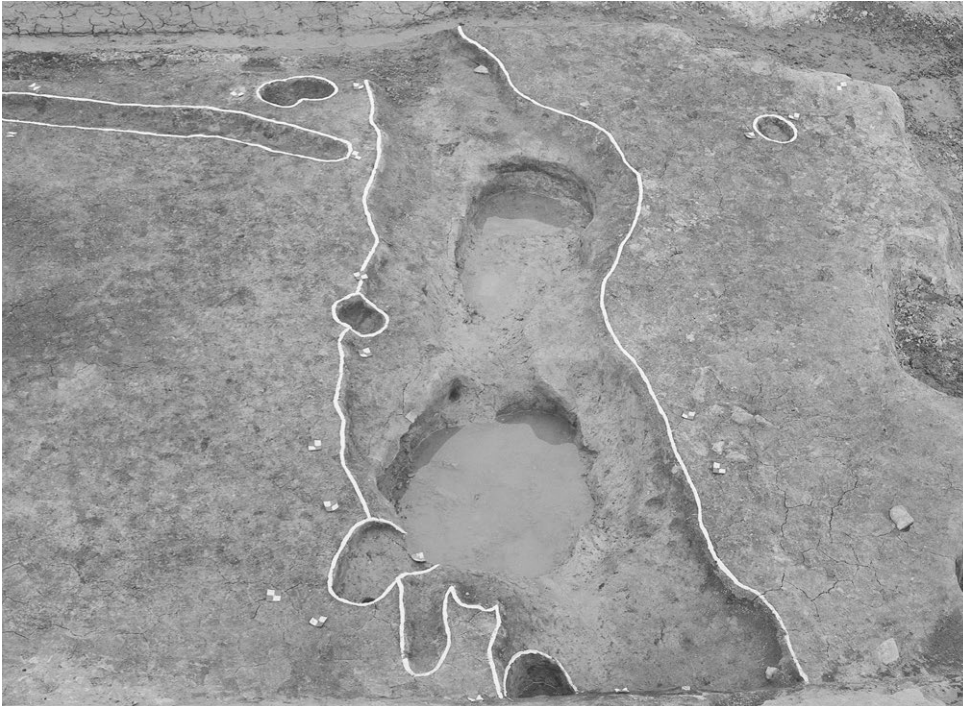


2. 04002 溝 [14 号墳]
断面 (北東から)



3. 04002 溝 [14 号墳]
完掘状況 (北東から)





1. 04007 溝
近接 (南から)



2. 04007 溝
遺物出土状況 (南から)



3. 04007 溝 断面 (南から)



4. 04007 溝 遺物出土状況 (南西から)



1. 04009 土坑 (04007 溝内) 断面 (北から)



2. 04022 土坑 遺物出土状況 (北東から)



3. 04024・25 土坑 断面 (北東から)



4. 04023 落込み 断面 (南東から)



5. 04027 溝 底面検出状況 (東から)



6. 04023 落込み周辺 近接 (東から)



1. 調査区 全景 (北から)



2. 調査区南壁 断面 (北から)



3. 調査区西部 近接 (北から)



1. 調査区北半部 全景 (南から)



2. 調査区北半部 全景 (北から)



1. 調査区南半部 全景 (北から)



2. 調査区南半部 全景 (南から)



1. 調査区東壁 断面



1. X = -128,633 ~ 654
近接 (東から)



2. X = -128,672 ~ 694
近接 (北東から)



3. 06028 溝 (南西から)

1. 調査区 全景 (南から)



2. 調査区 全景 (北から)



3. 調査区東壁 断面 (西から)





1. 調査区 全景 (写真上が南)



2. 調査区西壁 断面 (東から)



3. 08002 溝 断面 (東から)



4. 08001 溝 断面 (南西から)



5. 08003 ピット 断面 (北から)

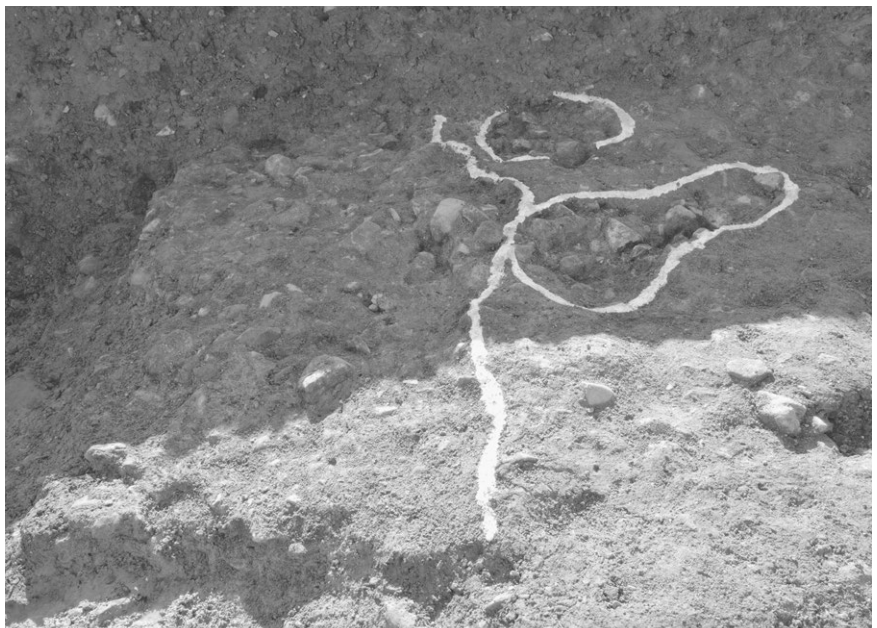
1. 調査区 全景 (西から)



2. 調査区西壁 断面 (北から)



3. 09001・09002 凹み
09003 ピット 近接(北
から)











01014 溝

33



01014 溝

36



01014 溝

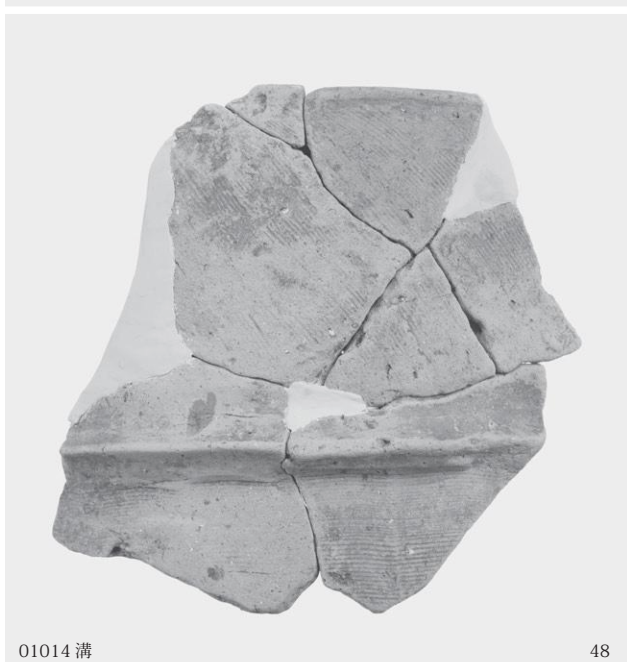
34



01014 溝

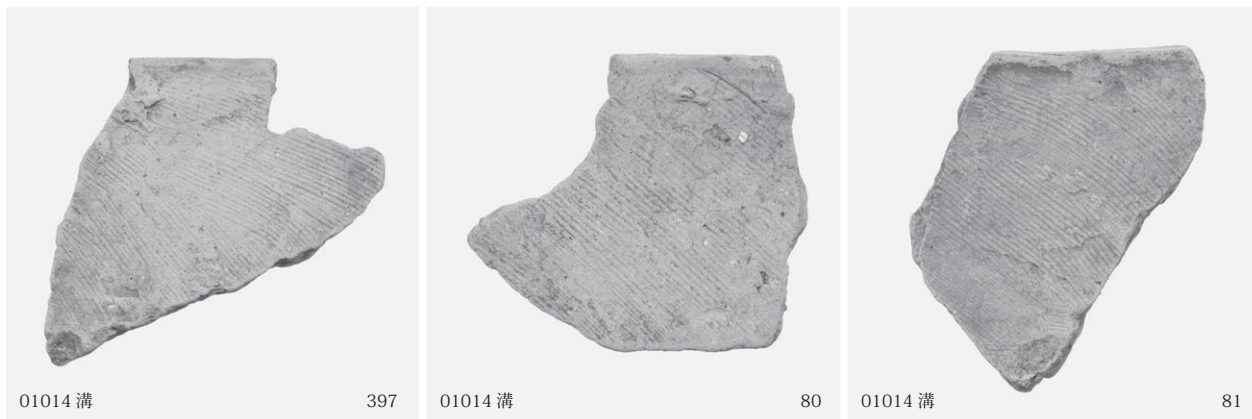
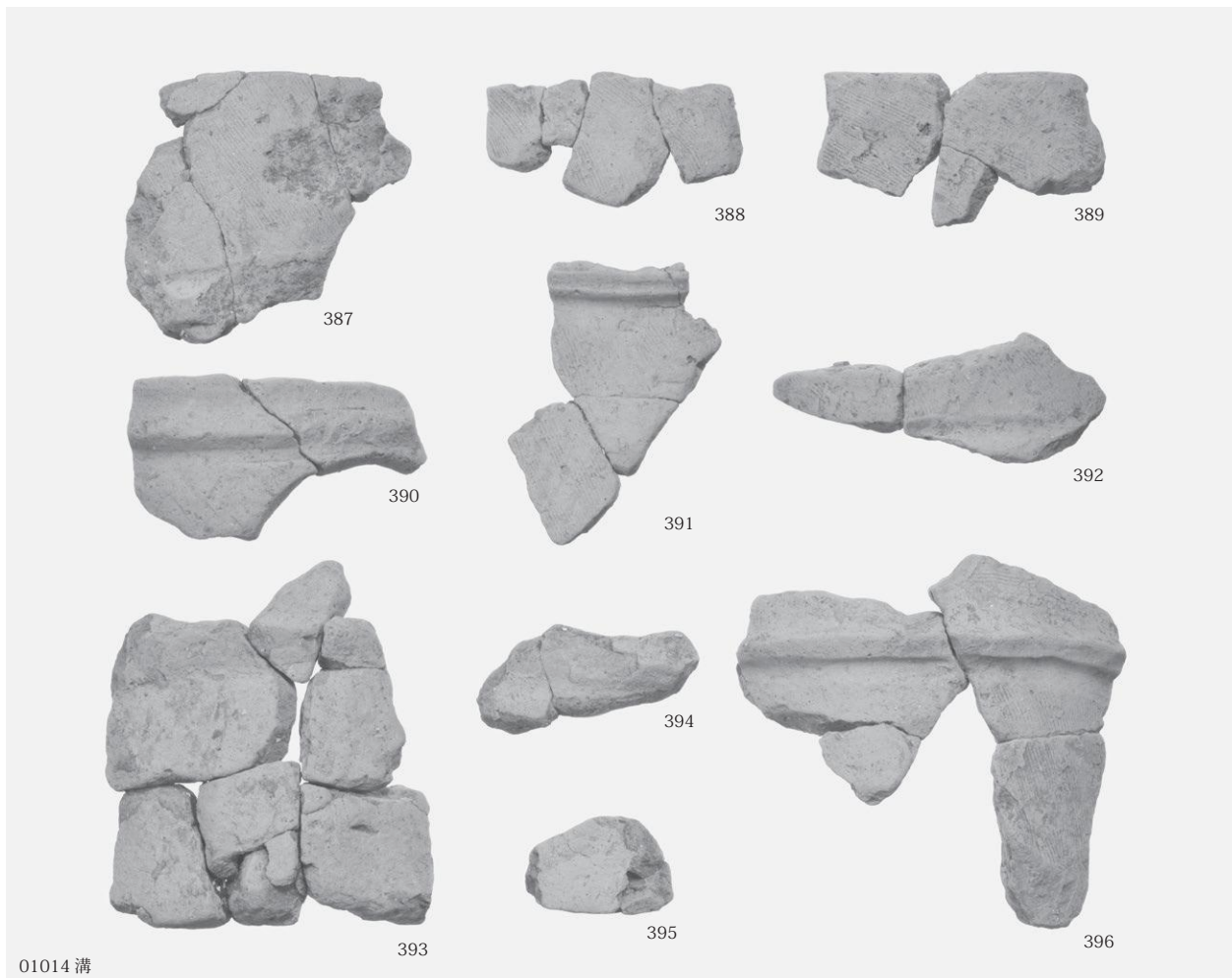
37



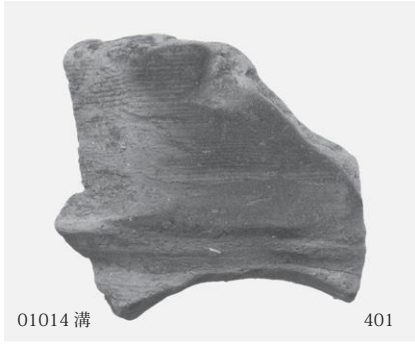
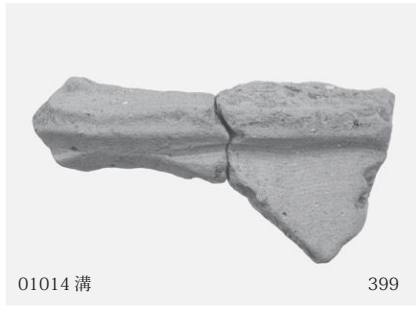


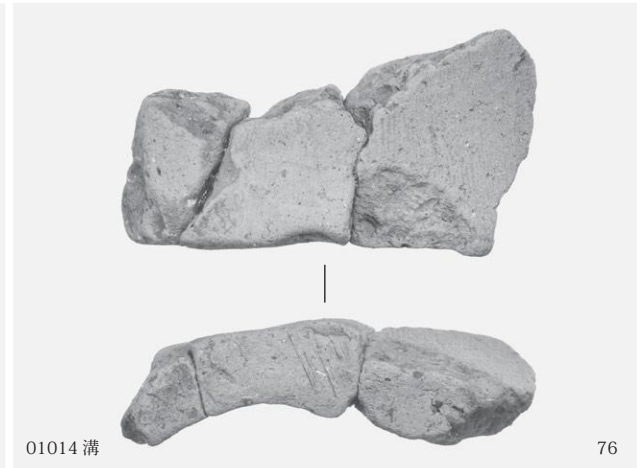
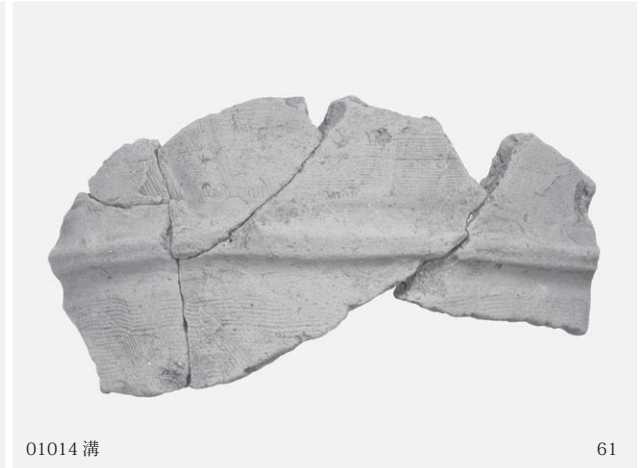


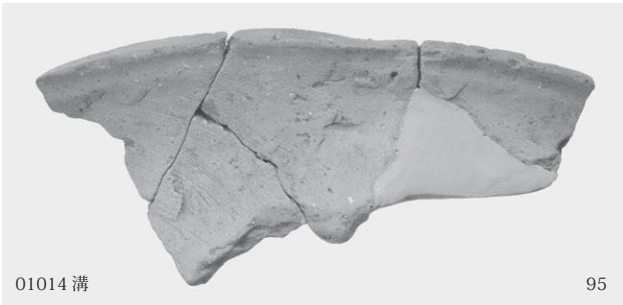


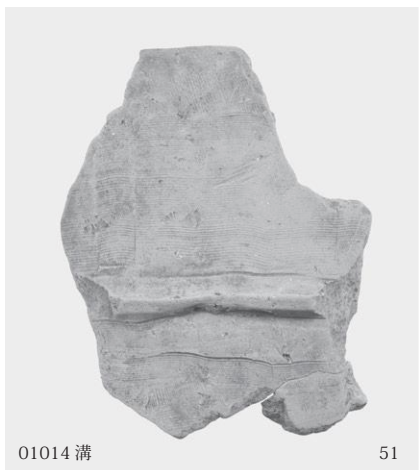












01014 溝

51



01014 溝

67



01014 溝

68



01014 溝

94



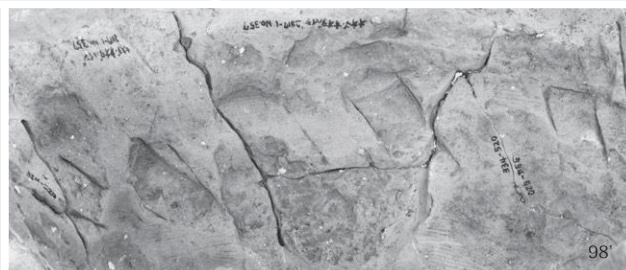
01014 溝

111



01014 溝

99

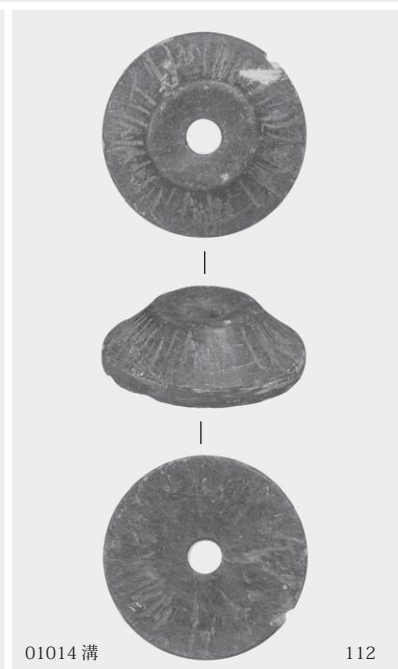
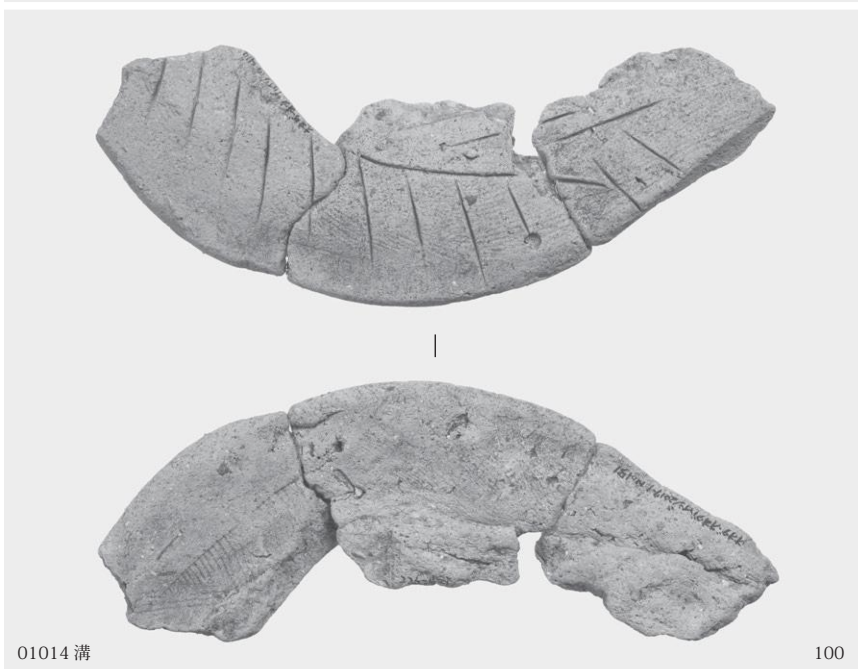
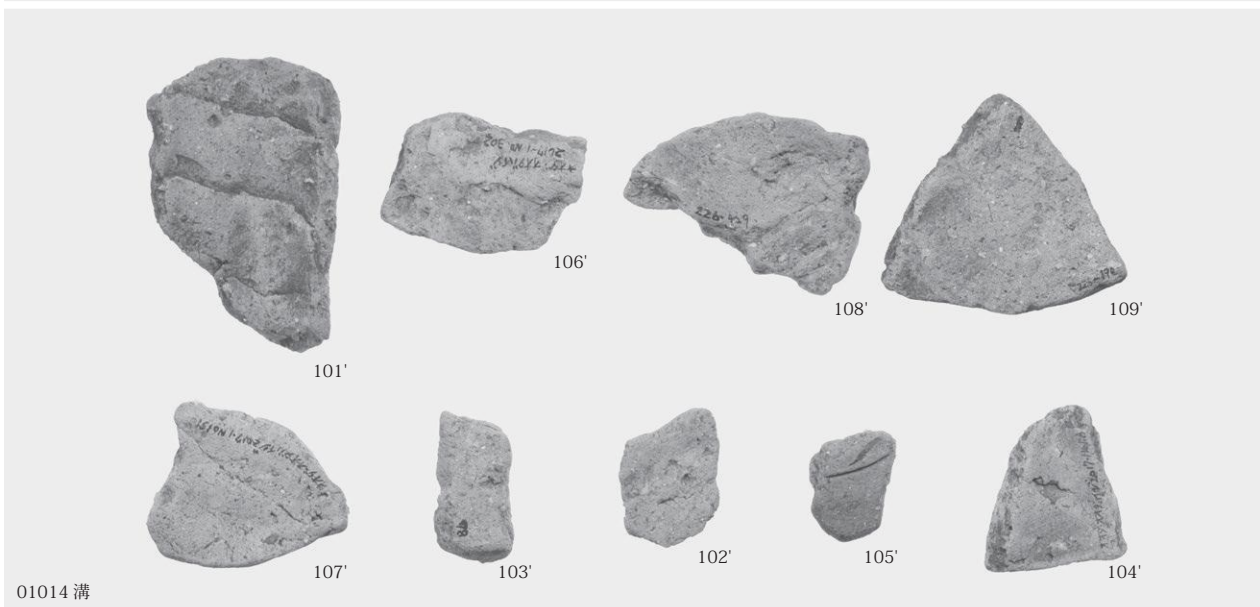
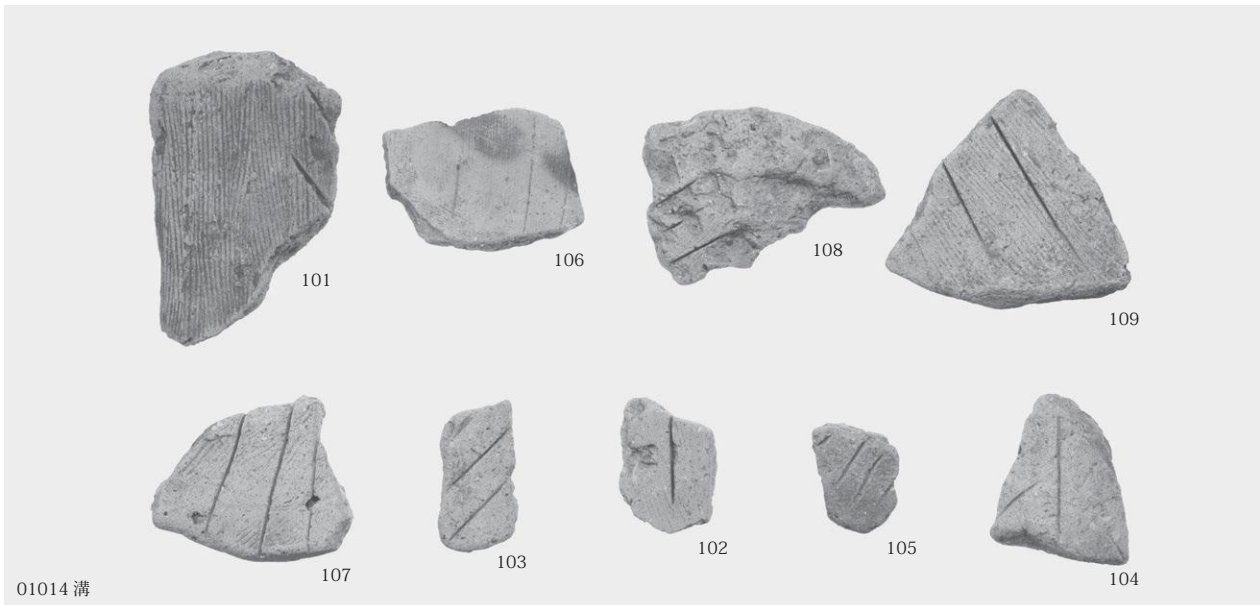


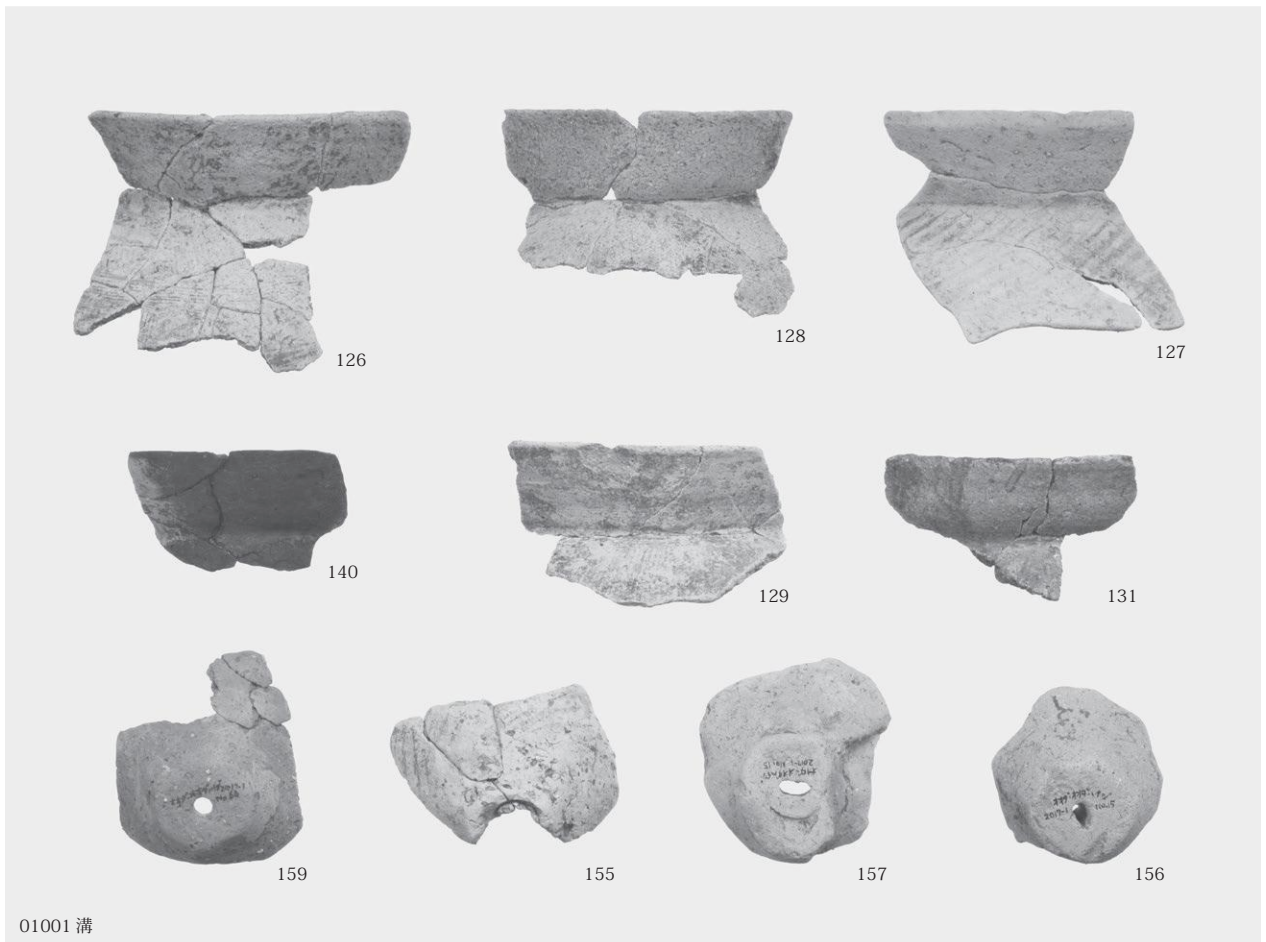
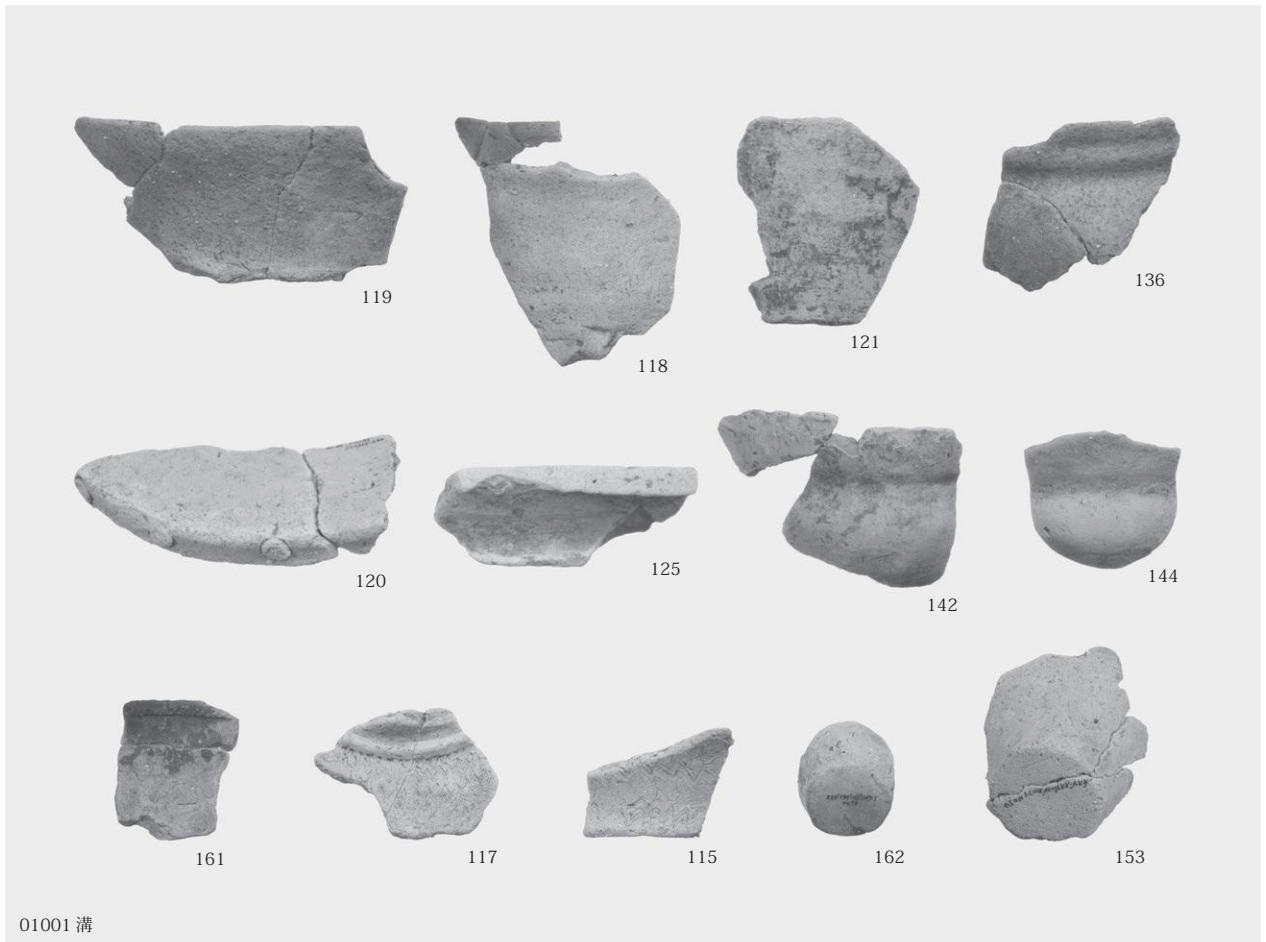
98

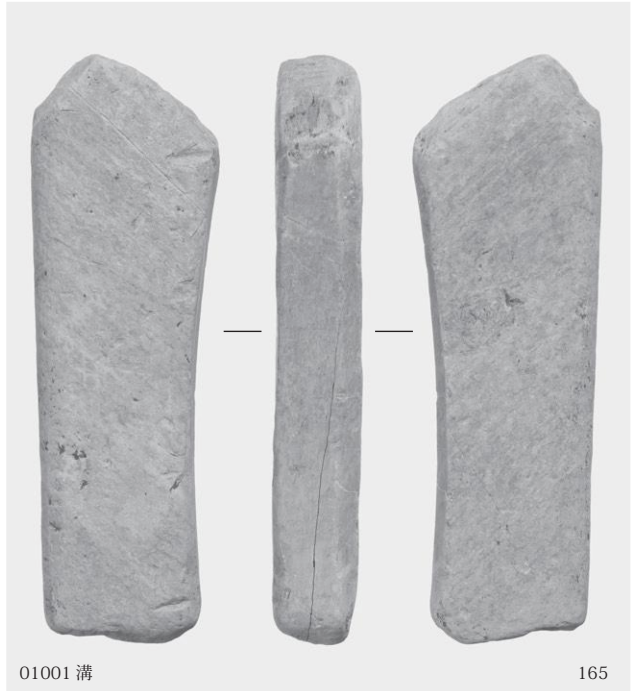


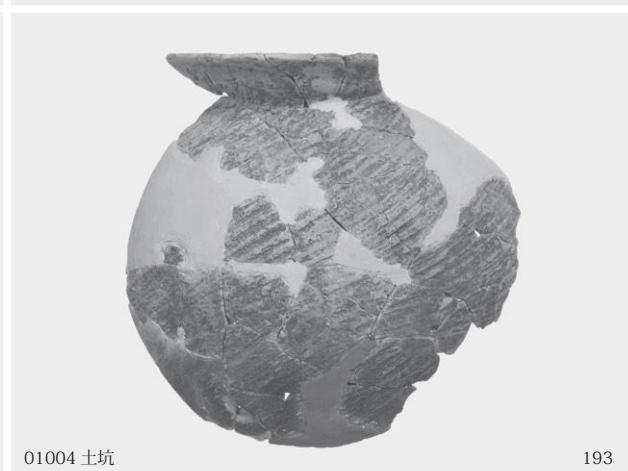
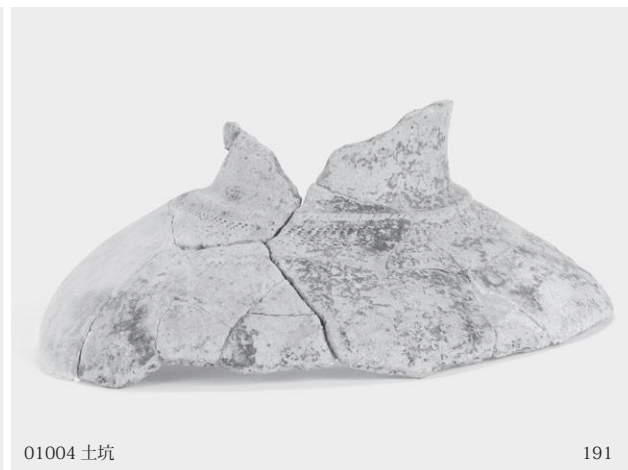
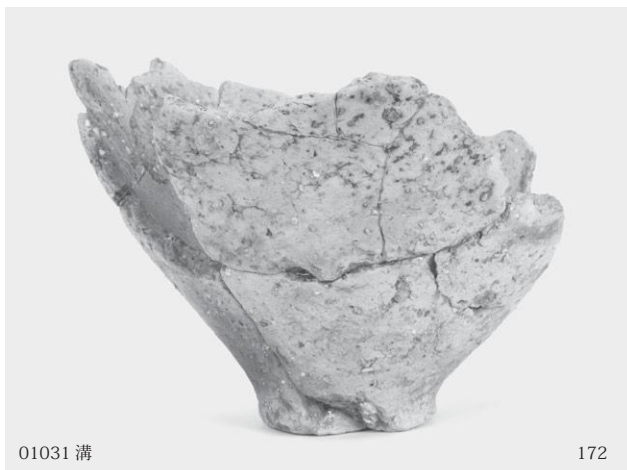
01014 溝

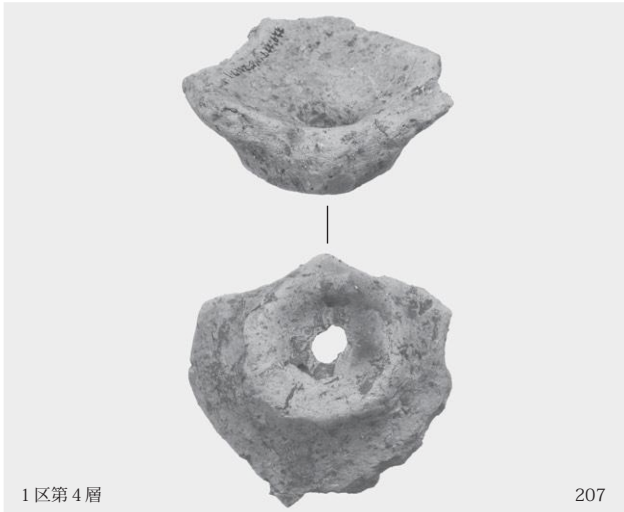
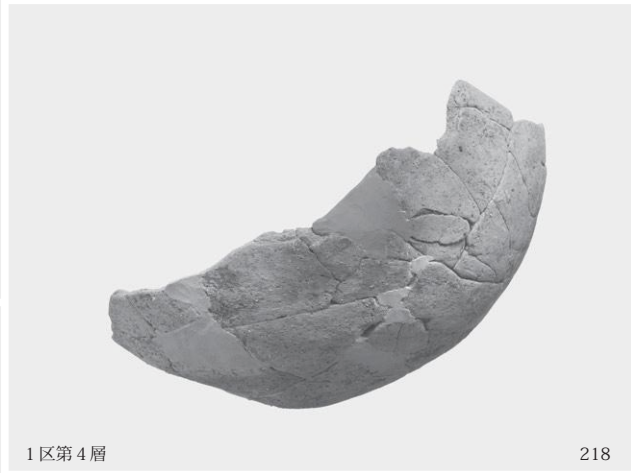
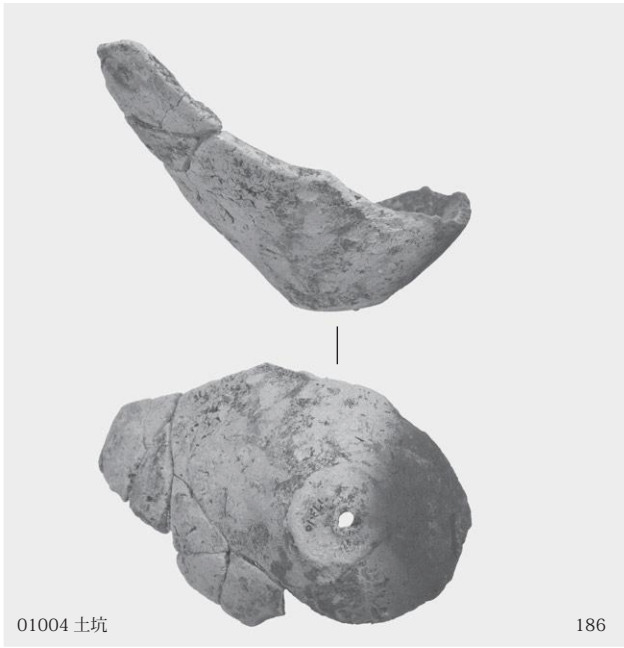
98



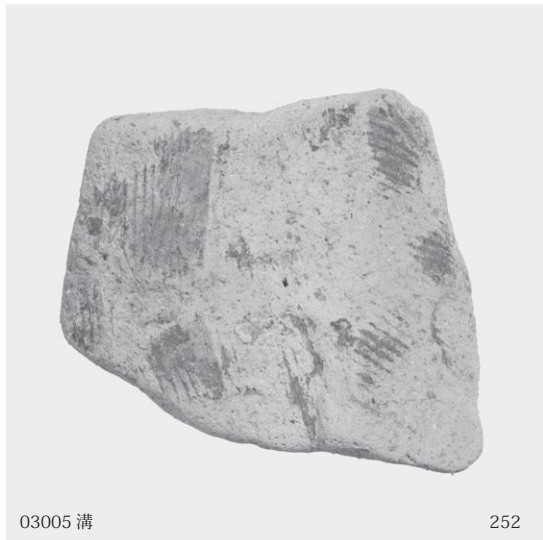
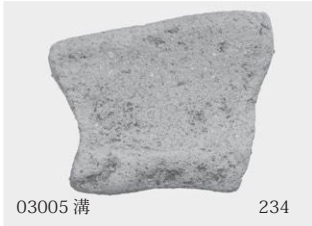
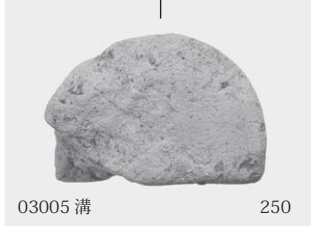


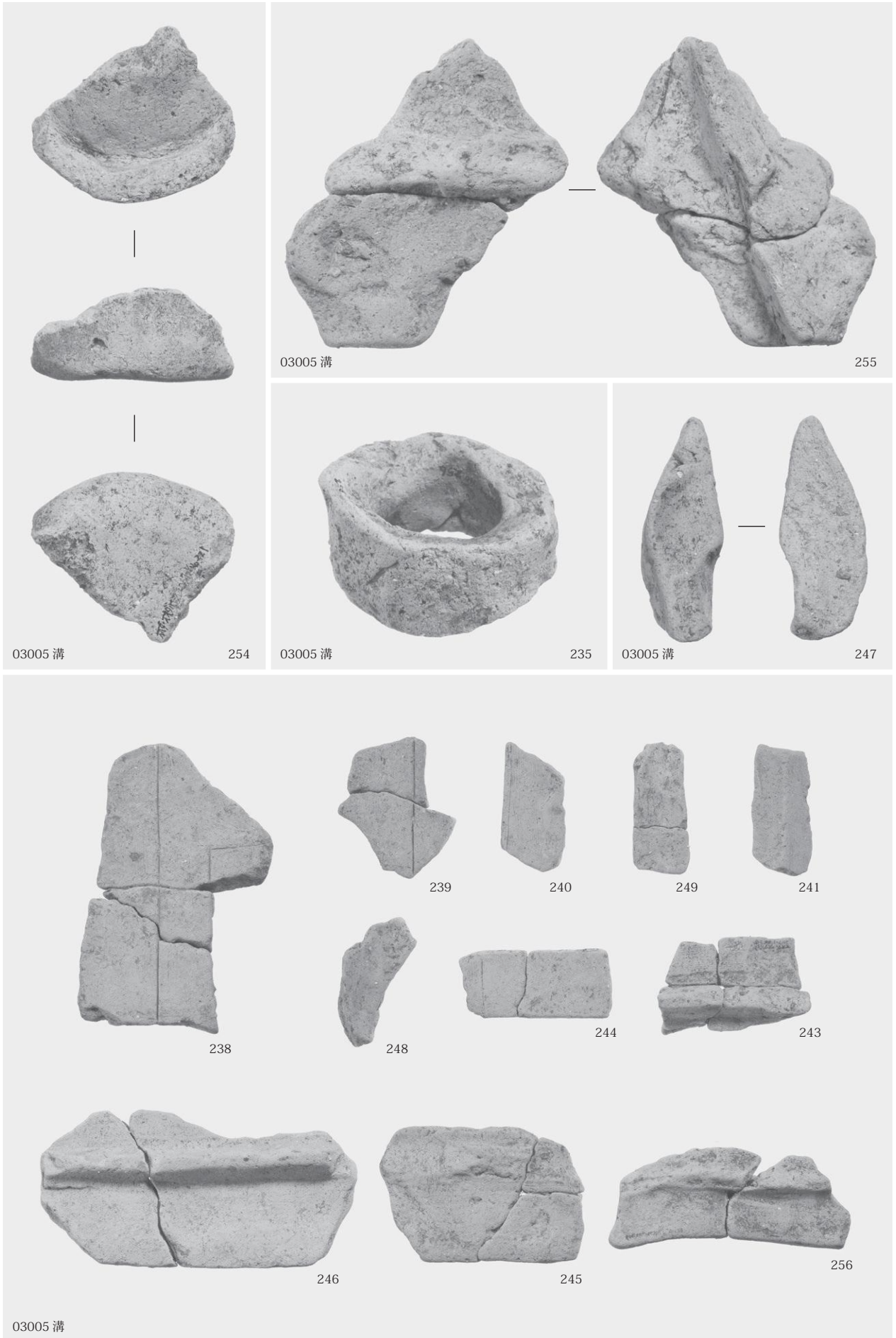


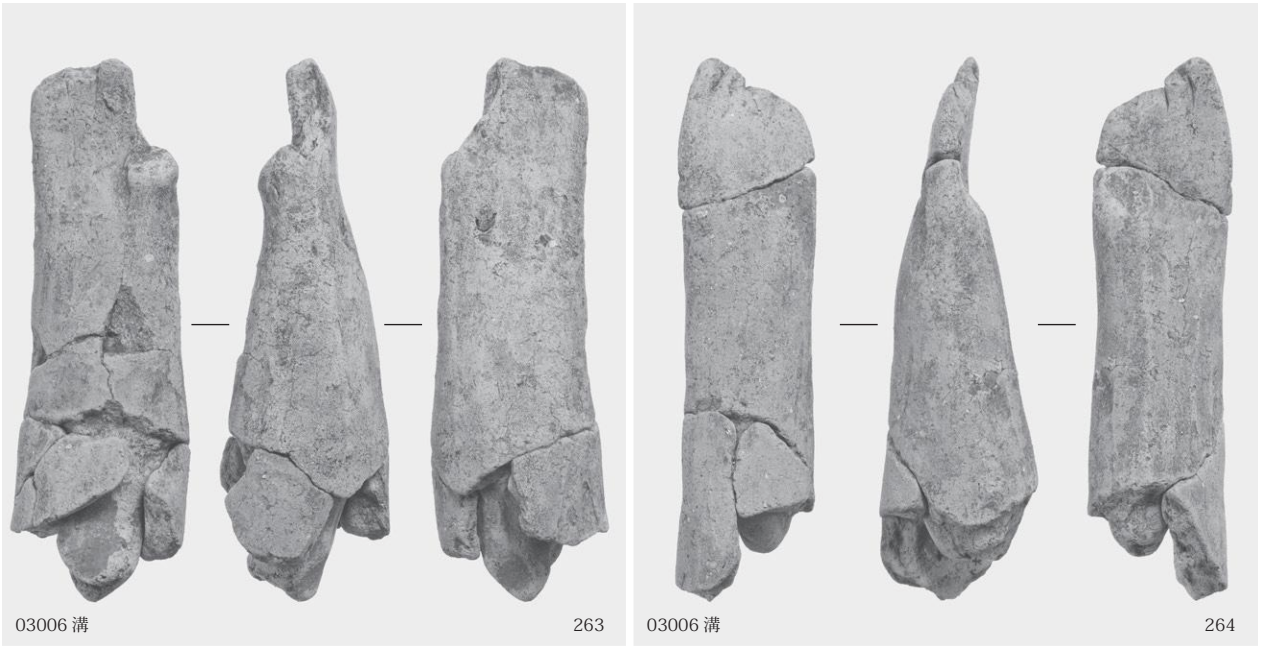




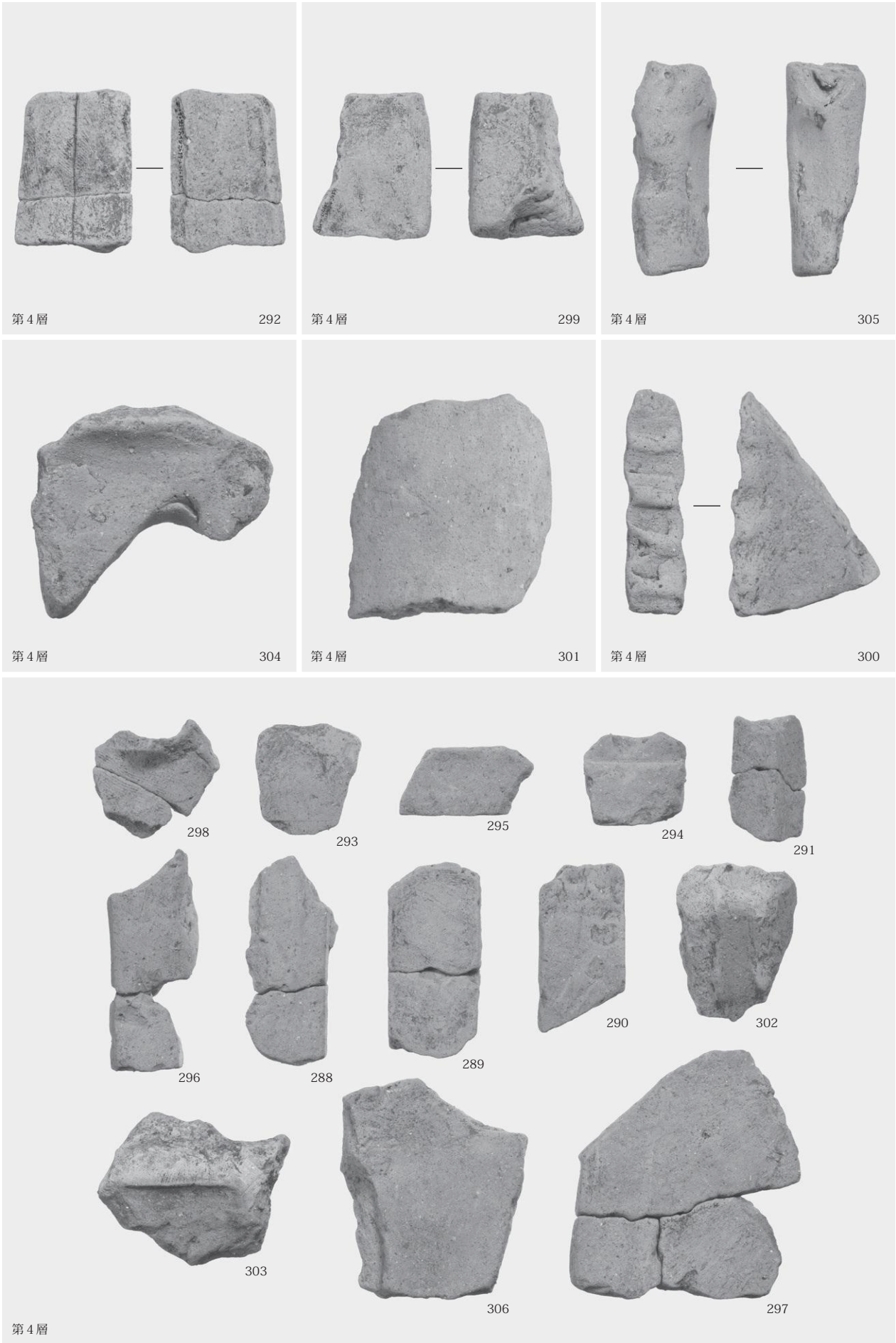






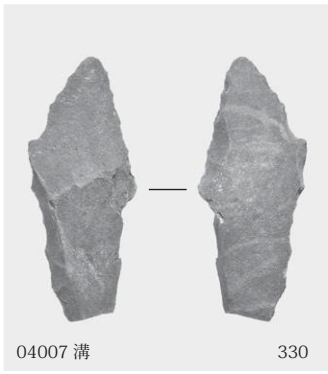
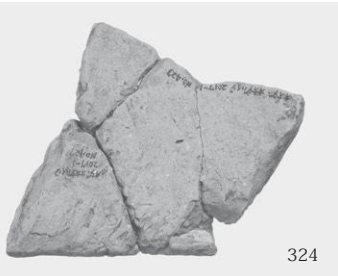
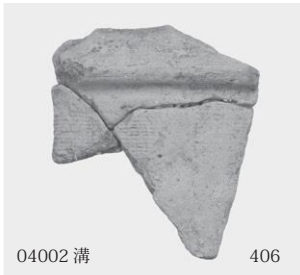
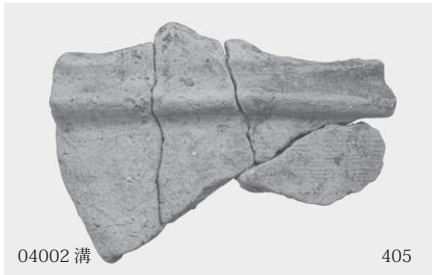


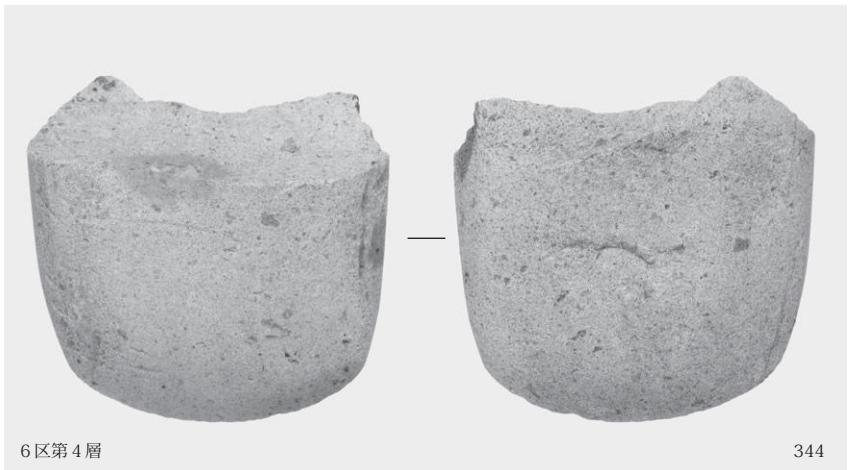
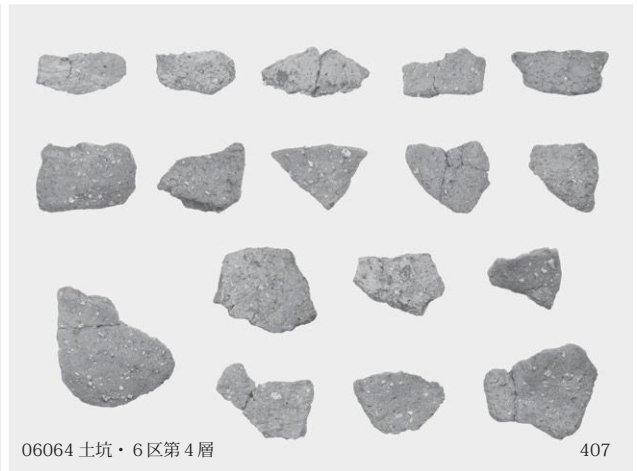
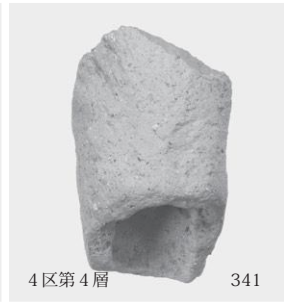
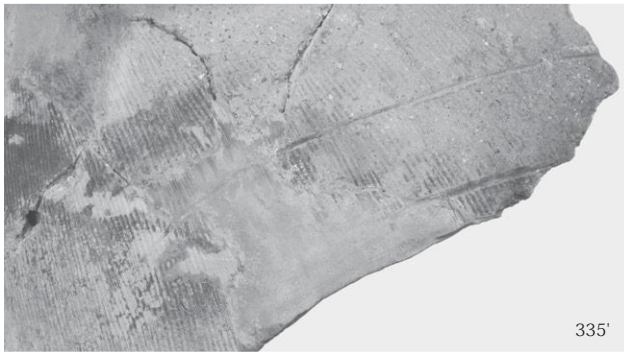










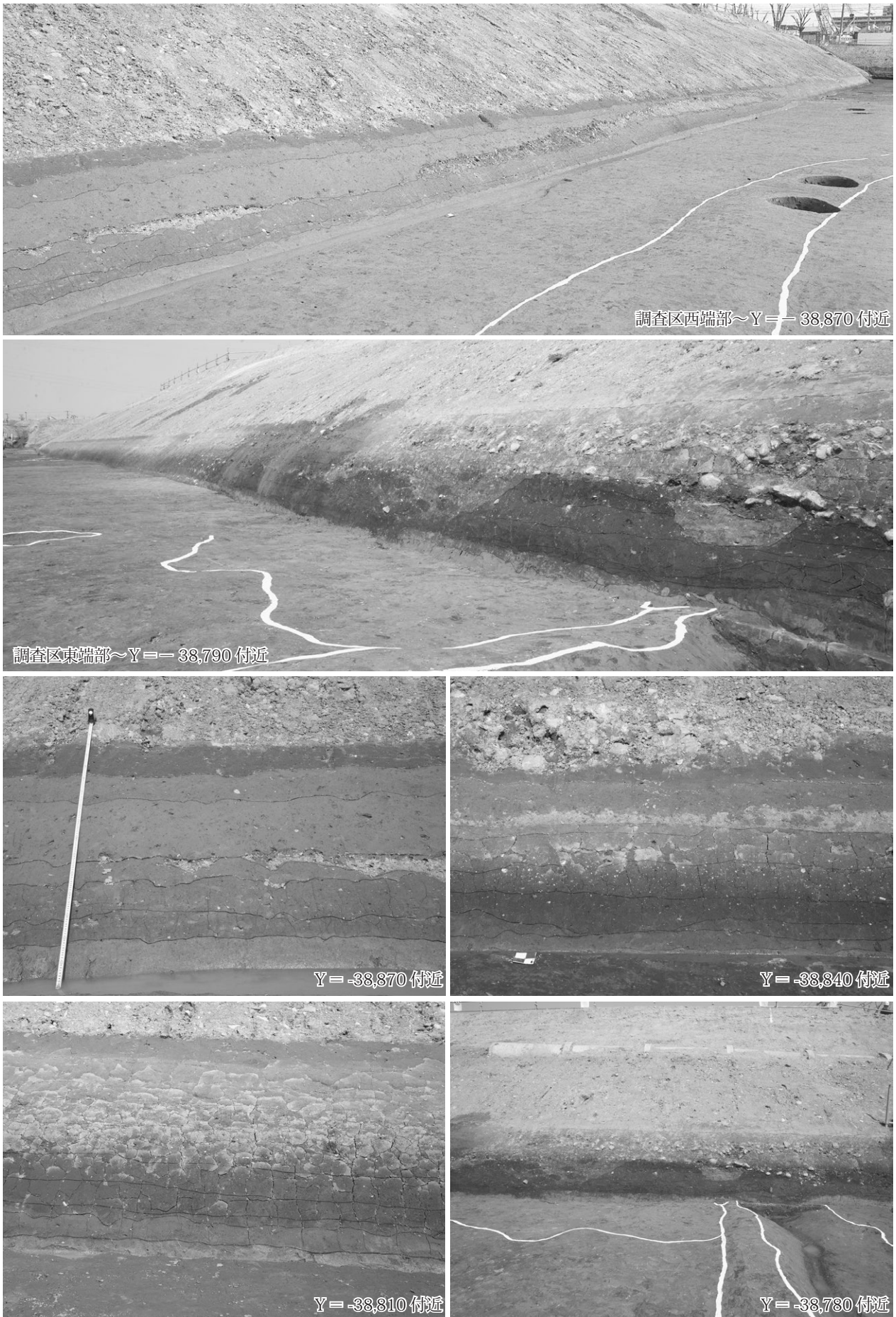




1. 調査地 遠景 (南西から)



2. 調査地 遠景 (南から)



1. 調査区北壁 断面 (南から)

1. 第4面
ブロック土検出状況
(南東から)

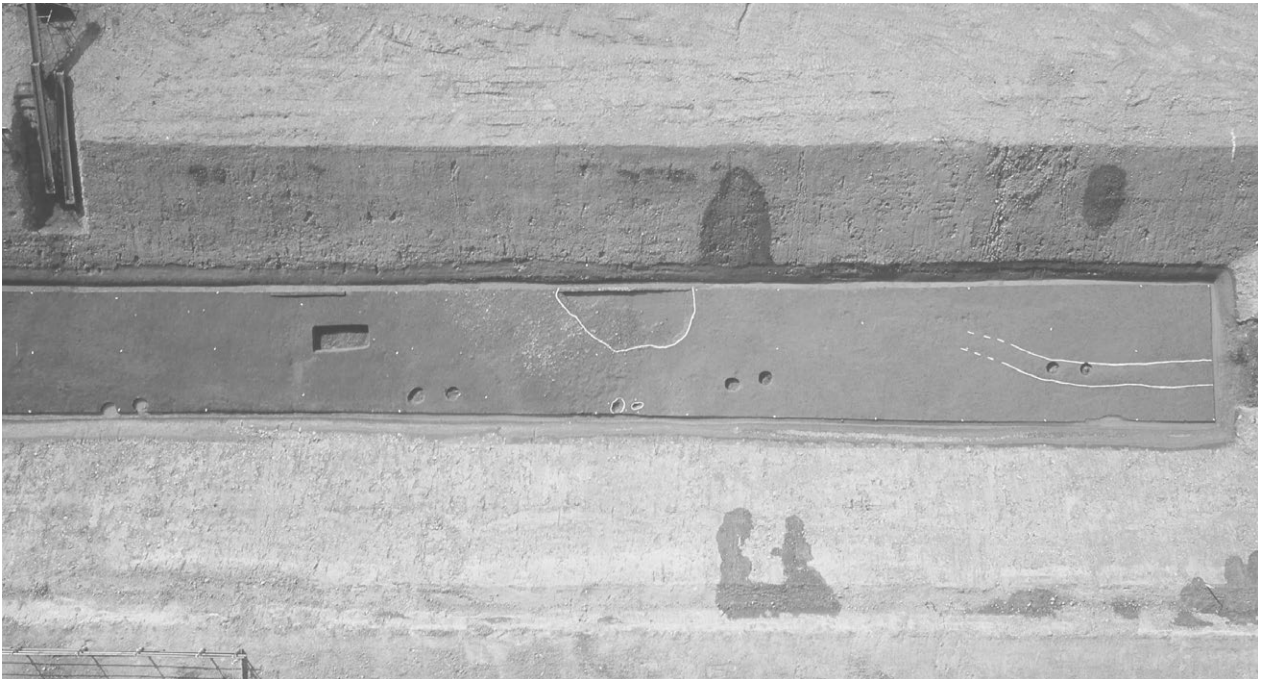


2. 第4面
ブロック土完掘状況
(東から)

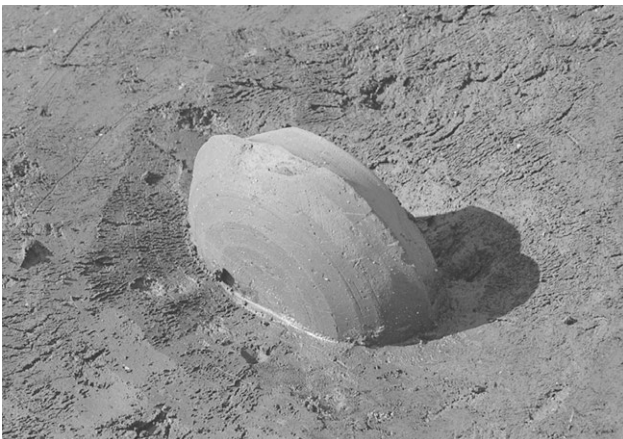


3. 調査区東半部
第4面(東から)





1. 調査区西半部 第4面 (写真上が南)



2. 第4b層 土器出土状況 (東から)



3. 第5層上面 土器出土状況 (東から)



4. 調査区東半部 第6面 (写真上が北)



1. 調査区東端部
第6面(北から)



2. 調査区東端部 第6面
10007溝・10008高まり
近接(北から)



3. 10007溝・10008高まり 断面(南から)



4. 10007溝 土器出土状況(南から)



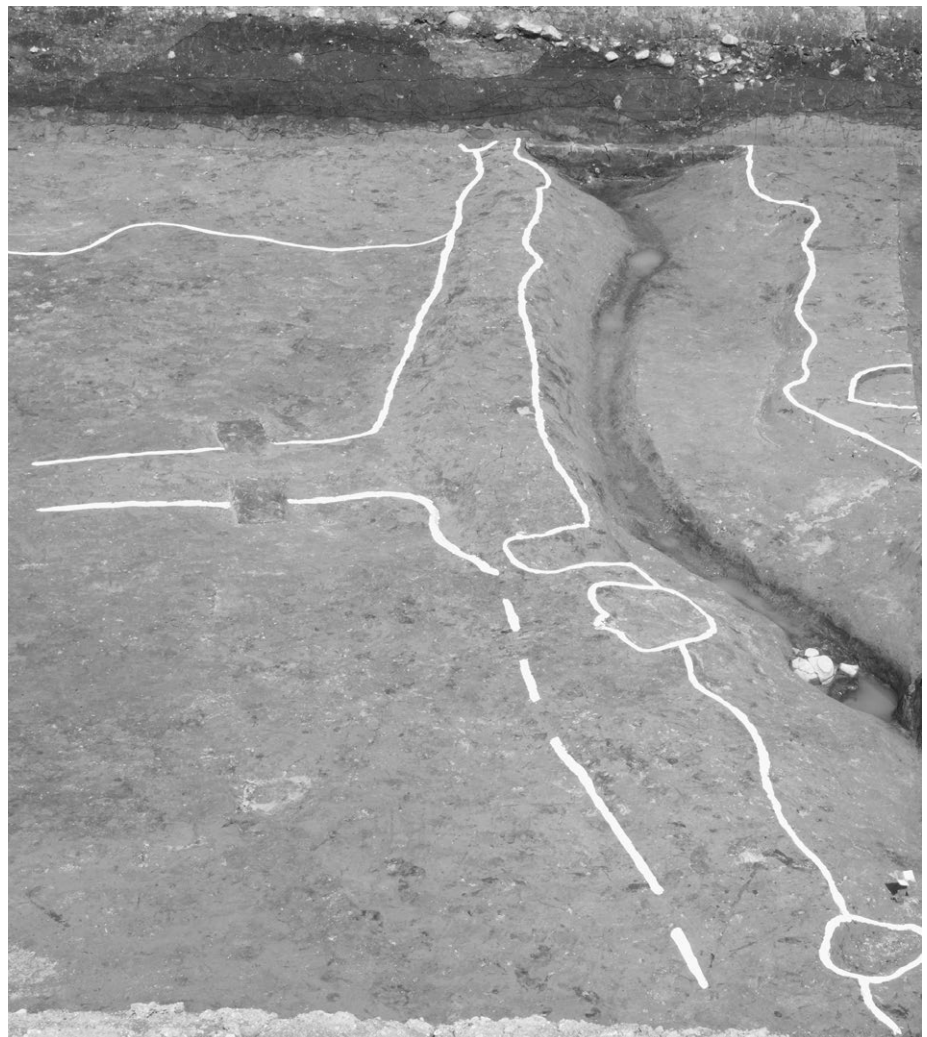
1. 調査区東半部 第7面 全景 (東から)



2. 調査区東半部 第7面 全景 (南西から)



1. 擬似畦畔 (南東から)



2. 10009 溝
10010・10016 擬似畦畔 (南から)



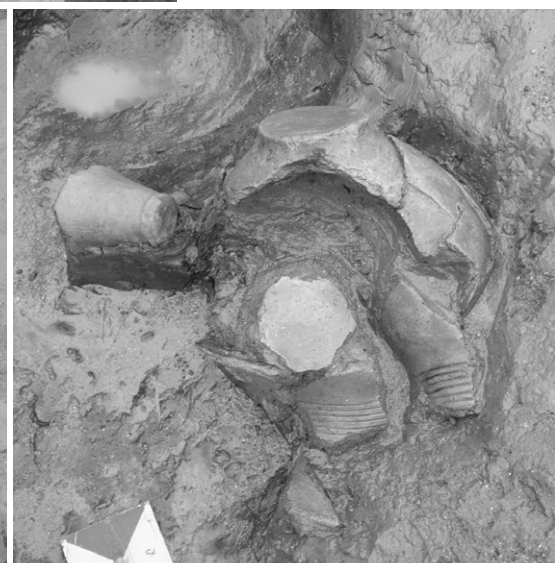
1. 10011 水口 (南東から)



2. 10009 溝 断面 (南東から)



3. 10009 溝 土器出土状況 (南東から)



4. 10009 溝 土器出土状況 (北から)



1. 下層確認トレンチ (東西) 全景 (東から)



2. 下層確認トレンチ (南北) 全景 (南から)



3. 下層確認トレンチ (東西)
北壁 断面 (南東から)

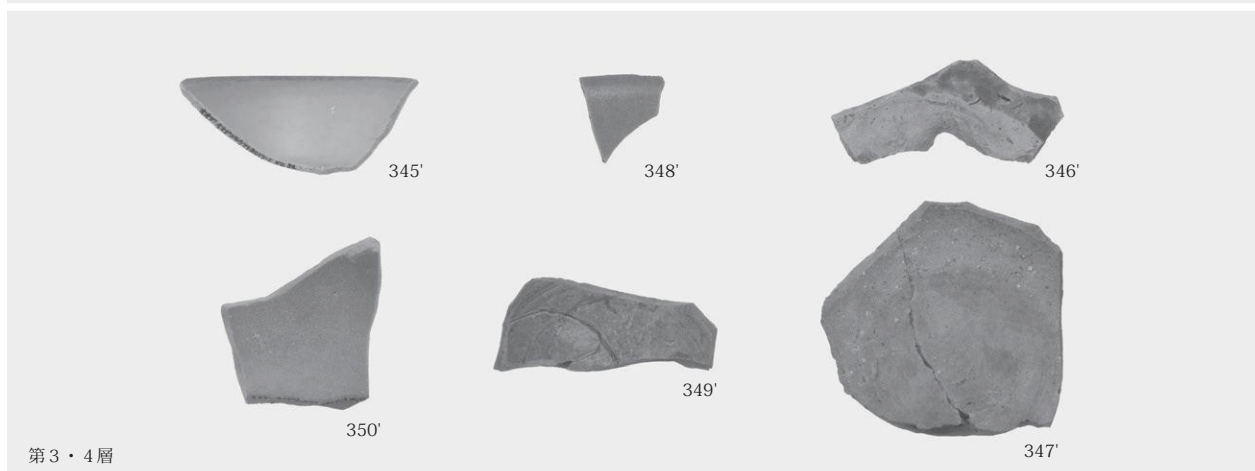
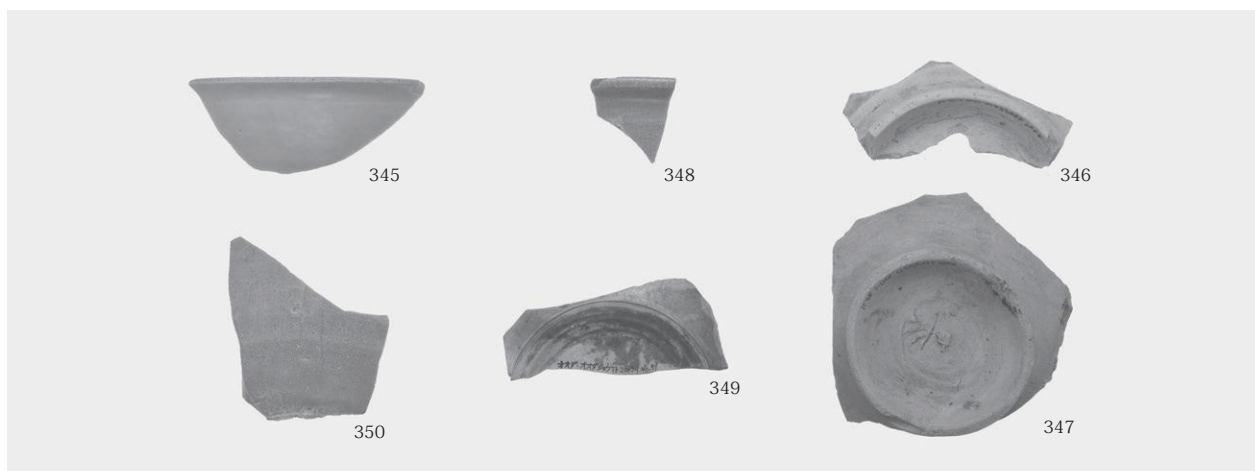


4. 下層確認トレンチ (南北)
西壁 断面 (南東から)

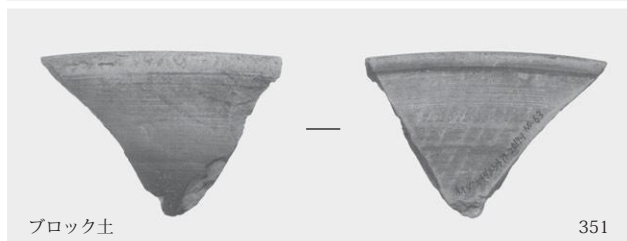


5. 下層確認トレンチ (東西)
南壁 断面 (北東から)



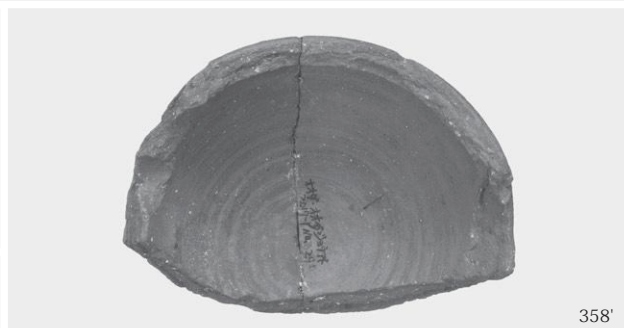


第3・4層



ブロック土

351



358'



ブロック土

357



ブロック土

353



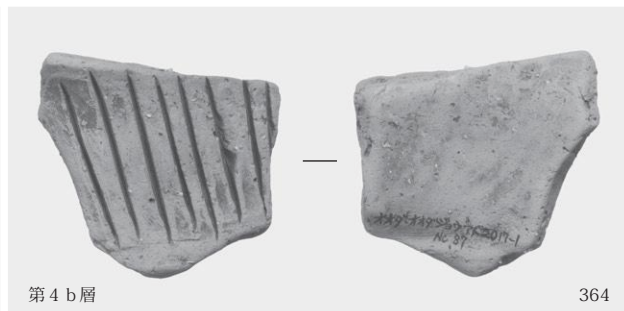
ブロック土

358



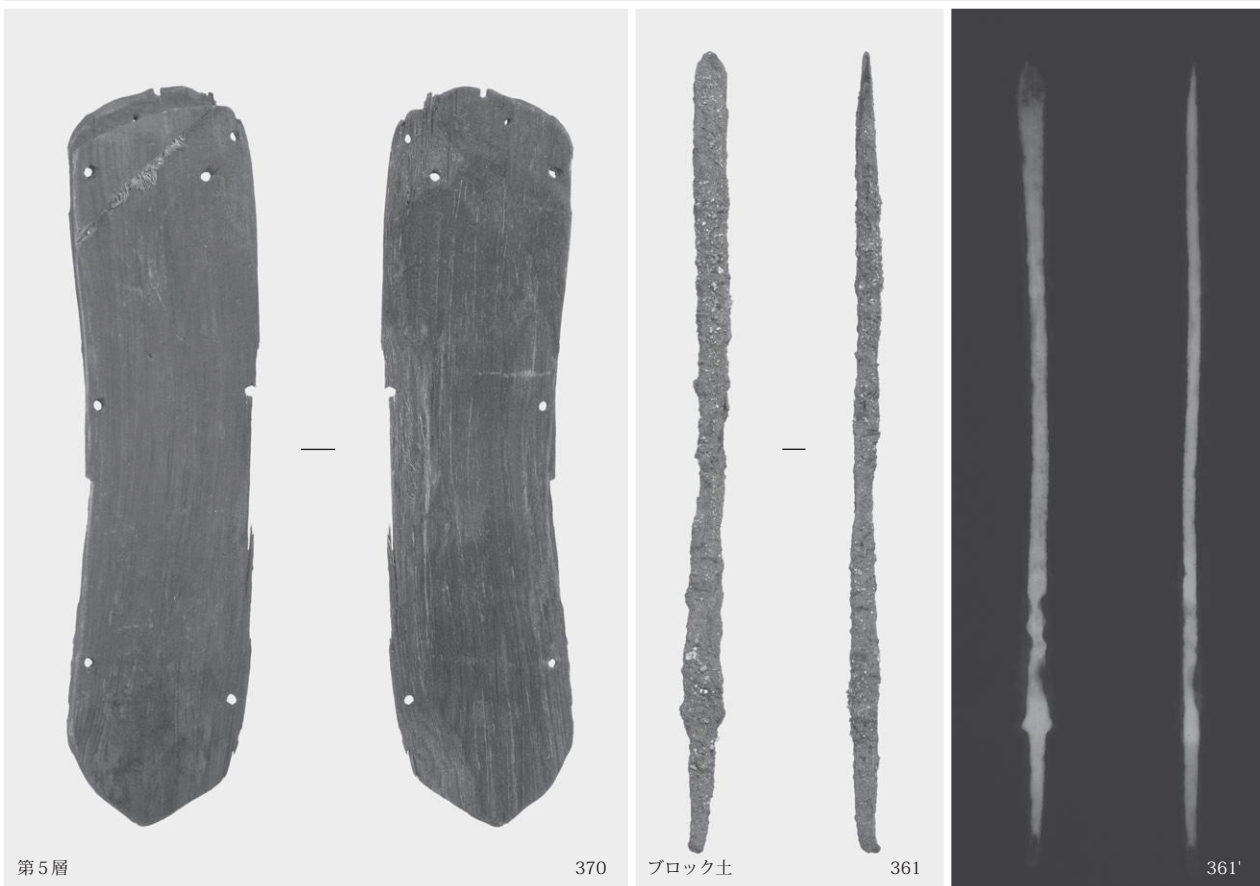
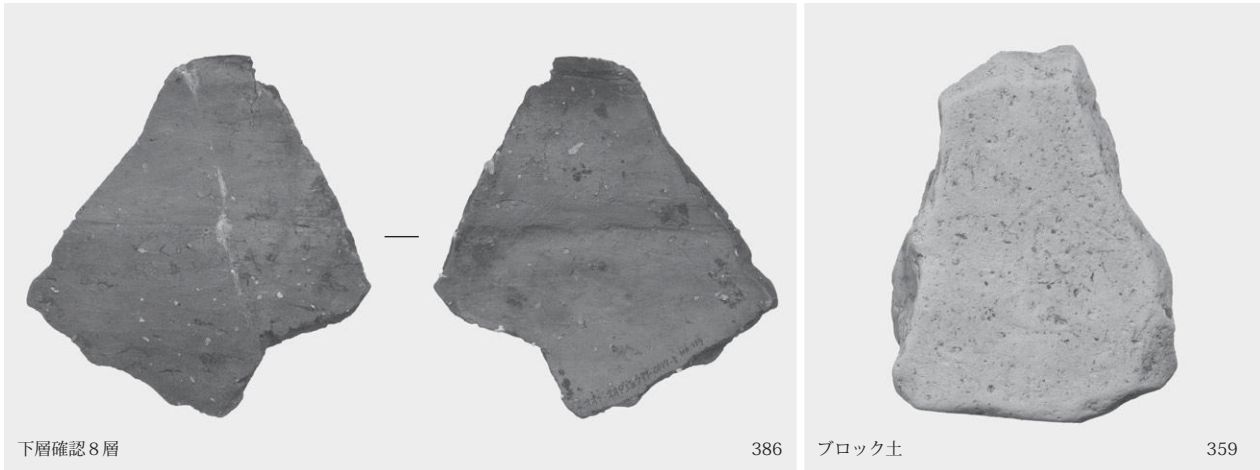
第4 b層

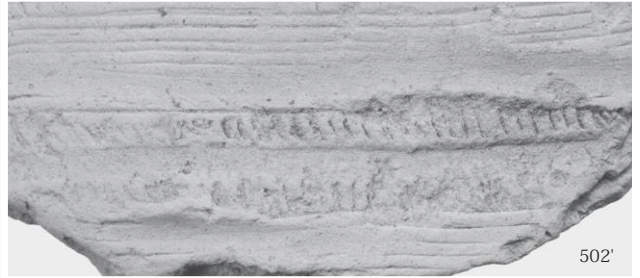
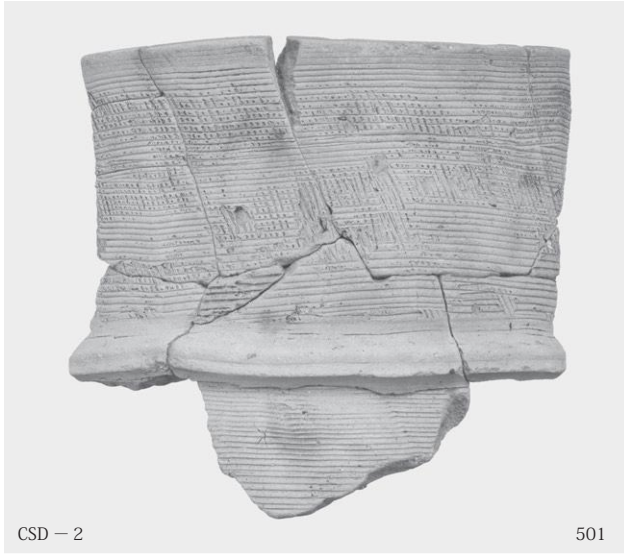
365

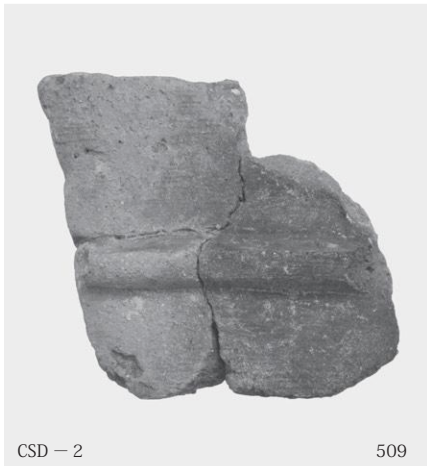


第4 b層

364







報 告 書 抄 録

ふりがな	おおだいせき・おおだはいじあと おおだいせき・おおだじょうあと						
書名	太田遺跡・太田廃寺跡 太田遺跡・太田城跡 1						
シリーズ名	茨木市文化財資料集						
シリーズ番号	第 73 集						
シリーズ名	公益財団法人 大阪府文化財センター 調査報告書						
シリーズ番号	第 302 集						
編著者名	永野 仁 (編)、坂田典彦						
編集機関	公益財団法人 大阪府文化財センター						
所在地	〒 590 - 0105 大阪府堺市南区竹城台 3 丁 21 番 4 号 TEL 072 - 299 - 8791						
発行機関	茨木市教育委員会						
所在地	〒 567 - 8505 大阪府茨木市駅前 3 丁目 8 番 13 号 TEL 072 - 620 - 1686						
発行年月日	2020 年 3 月 31 日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		緯度・経度	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡 番号				
おおだいせき 太田遺跡 おおだはいじあと 太田廃寺跡	おおさかふいぼらきし 大阪府茨木市 おおだとうしぼちようちない 太田東芝町地内	27211	—	北緯 34° 50' 20" 東経 135° 34' 42"	平成29年 6 月 19 日 ～ 平成30年 1 月 19 日	12,008 m ²	学校法人追手門学 院大学・追手門学 院中・高等学校新 校舎建設 他
おおだいせき 太田遺跡 おおだじょうあと 太田城跡	おおさかふいぼらきし 大阪府茨木市 しろのまえちようちない 城の前町地内		—	北緯 34° 50' 12" 東経 135° 34' 33"	平成30年 1 月 11 日 ～ 平成30年 3 月 23 日		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
太田遺跡 太田廃寺跡	集落	弥生時代 ～ 古代	竪穴建物、溝、土坑、柱穴		縄文土器、弥生土器、土 師器、須恵器、瓦器、白磁、 石製品（石鏃・磨製石斧・ 台石・砥石）	弥生時代末から古墳時代 前期にかけての集落域を 画する溝を確認	
	古墳	古墳時代	円墳・方墳		土師器、須恵器、埴輪（円 筒・朝顔形・形象）、石製 品（紡錘車）	新たに円墳、方墳各 1 基 を確認	
太田遺跡 太田城跡	生産	弥生時代 ～ 中世	疑似畦畔、溝、土坑、 たわみ		縄文土器、弥生土器、土 師器、須恵器、灰釉陶器、 緑釉陶器、白磁、青磁、 木製品（田下駄・紡織具 か）、鉄製品（鉄鏃・釘）	弥生時代後期後半の水田 跡を確認	
要 約	<p>太田遺跡・太田廃寺跡においては弥生時代後期から古代にかけての集落跡を確認した。このうち弥生時代末から古墳時代前期の集落においては逆 L 字形の長大な区画溝を設けていたことが判明した。また、古墳時代中期後半の円墳と方墳の周溝を検出した。これらは現代の開発に伴う攪乱を受け周溝のみの検出となったが、土器や埴輪などの遺物が出土している。</p> <p>太田遺跡・太田城跡においては弥生時代後期後半に帰属すると考えられる水田跡を確認した。また、明確な遺構は確認できなかったものの、自然科学分析の結果から古墳時代においても同様に生産域として利用されていた可能性が高まった。限られた範囲での検出ではあるが、調査地周辺においては同時期の水田跡は確認されておらず、貴重な成果となった。</p>						

茨木市文化財資料集 第73集

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第302集

太田遺跡・太田廃寺跡

太田遺跡・太田城跡 1

発行年月日 / 2020年3月31日

編集 / 公益財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台3丁目21番4号

発行 / 茨木市教育委員会
大阪府茨木市駅前三丁目8番13号

印刷・製本 / 株式会社 トウヨー
大阪府茨木市横江一丁目14番5号